

異界の魂

副隊長

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

紅の女神によって倒された四人の女神。そのまま敗ればゲームギョウ界が壊れてしまう。だが、自分たちではどうにもならなかった。だからこそ一つの可能性にすがった。異界の魂。それが女神たちに残された可能性だった。

救世と悲壮の物語

目次

1話	召喚	1
2話	出会い	13
3話	ラストイション	24
4話	お仕事	36
5話	二人の女神候補生	47
6話	候補生の戦い	60
7話	優劣	71
8話	支えてくれる人	83
9話	仲直り	102
10話	ギョウカイ墓場	115
11話	約束	133
12話	真実	143
13話	黒の妖精	153
14話	この世界に来て	164
15話	襲撃	173
16話	ラストイションの戦い	184
17話	黒の女神	195
18話	痛みの代償に	202
19話	新たな道	215
20話	新たな組み合わせ	225
21話	定められた結末	233
22話	友達	243
23話	予期せぬ出来事	252

24話	紅の女神	261
25話	それぞれの道	269
26話	やさしさの理由	279
27話	一息	288
28話	予兆	295
29話	黒の墜ちる時	304
30話	女神の解放	316
31話	犯罪組織	331
32話	もう一つの名	340
33話	ブレイク・ザ・ハード	348
34話	示された決意	358
35話	魔剣	367
36話	変えられた事	375
37話	過去の救世と悲劇の連鎖	386
38話	交わされる刃	394
39話	立ち塞がる理由	406
40話	違いられた道	415
41話	未来を変える力	424
42話	別れのきずあと	432
43話	戦う理由	441
44話	動き出す最後の時	452
45話	勇士の墜ちる時	464
46話	女神の守りたかったもの	478
47話	世界を救う為に	495
48話	救世の悲壮	504

最終話 異界の魂

519

幕間 重なり合う魂

紅き魂の守護者

535

紅き魂

1話 召喚

553

2話 呼び出された力

565

3話 運命の相手

574

4話 彼の消えた世界で

584

5話 新たな出会い

593

6話 戦いの始まり

602

7話 大事な事だから

612

8話 動き出した心

622

9話 その身は

632

10話 ルウイーの七賢人

641

11話 大きな変化

652

12話 願い

667

13話 本心

676

14話 護りたいもの

686

15話 穏やかな時間

694

16話 彼女の気持ち

705

17話 一緒

713

18話 本当の望み

724

19話 奇妙な調査班

739

挿話1

748

挿話2

762



# 救世と悲壮の物語

## 1話 召喚

最後に光を見たのは何時だっただろうか。両の瞳の上に巻かれた包帯にそつと触れ、そんな事を思う。自分達よりも遥かに高い場所から世界を淡く照らす光。時間にすれば短時間ではあるが、自分の世界が光を失って以来、その尊さを嫌と言うほど思い知った。だからこそ夢想する。つい先日まで瞳に映していた、光のある世界とは、どんなものであっただろうか。

「……。流石に緊張しますね」

「それは仕方ないさ、四条君。あんな事故にあったのなら、誰だって怖いさ」

主治医の先生が幾分か緊張を孕んだ声音でそう答えた。患者である僕を心配させないようにしてくれているのは、声色からも容易に想像できるが、そう告げた本人も気が気でないのが感じられる。それでも励まそうとしてくれている気持ち解り、素直に嬉しく感じる。先生は良い人なんだなあ。そんな場違いな事を思ってしまった。

「では、外します」

「お願いします」

病院のベッドに腰掛けたまま、先生の言葉に頷く。すぐさま顔に巻かれていた包帯が解かれていく。それ程時間のかかる作業では無い筈なのだが、嫌に長い時間がかかっているように感じる。静まり返った病室の中、自分の心臓が早鐘を打つ音だけが、はつきりと聞こえてくる。果たしてこの目は、光を映すのだろうか。

交通事故に遭っていた。その時に両目と両足、そして家族を失った。両親と自分、高校の卒業記念に家族で旅行に出かけた日の事だった。父が車を運転し、母が助手席に自分は後部座席に座り、とりとめの無い話をしながらの旅行であった。卒業記念と言う事もあり、皆、気付かないうちに羽目を外していたのかもしれない。或いは、普段通らない道だったからかもしれない。気付いたときには、誰かに助け出

されているところだった。

「どう、でしょうか？」

やがて、先生が全ての包帯を外し終え、静かに聞いてきた。一度深く深呼吸をし、気持ちを落ち着ける。大丈夫。そう心の中で呟き、ゆっくりと瞳を開けた。

「……」

ゆっくりと開いた視界。それが映したものは――

「……無い」

――何も無かった。

この日四条優一は、光を完全に失った。

「はああああ!!」

裂帛の気合いと共に、紫の閃光がその刃を煌めかせ、駆け抜ける。視線の先には、赤の女神。倒すべき、敵である赤に狙いを定め、紫の女神は肉薄する。マジック・ザ・ハード。それが倒すべき敵であった。「これならっ!」

紫の女神、パープルハートが切り込んだところに追従する形で、黒の女神も剣を手にし仕掛ける。黒の女神、ブラックハート。パープルハートの動きに合わせ、剣を手にした二人がマジック・ザ・ハードにその刃を奔らせる。二対一。単純故に、相手にし難い連携だった。

「無駄だ」

「つう、ああっ!」

「そんな……」

それでも、赤の女神には届かない。パープルハートの斬撃を半身を反らし、体捌きだけで往なし、すれ違い様に一撃入れた後、迫り来るブラックハートの一撃をも無造作に避け、その両手に持つ大鎌で無防備な体に向け、一撃を放つ。黒と紫の女神、決死の一撃もむなしく、膝をついた。

「(っ)ですっ!」



「貰ったー！」

二人の女神が作った隙。その僅かな可能性にかけ、緑の女神グリーンハートと白の女神ホワイトハートが、その槍と斧を以て襲い掛かる。二対の女神による強襲。黒と紫の次に、白と緑が牙を剥く。緑の軌跡が赤に迫り、白が振り下ろされる。が――、

「それだけ、か?」

落胆したような赤の女神の呟き。大鎌の一薙ぎを以て、二対の女神を弾き飛ばす。その様に、疲労の色は無く。ただ淡々と、四対の女神を見据えている。悠然と構え、地に堕ちた女神たちを見下す様は、圧倒的強者の余裕と、ある種の失望を感じさせる。四対一でありながらこの為体。彼我の実力差は明白であった。それ程までに、赤の女神の実力は圧倒的であったのである。

「まだよっー！」

ぎりつと歯を噛み、パープルハートが半ば絞り出すように吼えると、再び躍りかかる。紫の閃光。その軌跡に大鎌を滑り込ませることで、マジック・ザ・ハードは容易く受け止めていた。

「無駄だ、と言った」

「そんな……くあああ!!」

そして、受け止めたパープルハートに無感動に告げ、力任せに薙ぎ払った。風を突き破る音とともに、紫の女神は今一度地に堕ちる。ソレを一瞥すらしないまま、赤の女神は残った女神を打倒した。

「もう、やめて」

「……」

「こんな、このままじゃ、ゲームギョウ界が壊れちゃうよ」

最後に残った女神。否、女神候補生の少女が、赤の女神に言った。力も無く、ただ4人の女神が落ちる様を見ている事しかできなかった女神候補生。その少女――ネプギア――の言葉を聞きながらも、赤の女神は止まらない。

「終わりだ」

ネプギアが最後に見たのは、淡々と告げる赤の女神の瞳だった。

「そんな、ネプギアまで……」

地に伏した女神、パープルハートは絞り出すように言った。自身の妹が倒される。彼女はその光景を見ている事しかできなかった。女神の力の源であるシエアが足りなかった等、言い訳にもならない。自分が弱かったから、ネプギアを守れなかった。その思いだけが、パープルハートの胸に募る。何故、どうして。そんな解りきったことを自問してしまう。

「ネプ、テューヌ」

「ノワ、ール？」

地に伏せる紫の女神に、黒の女神が声をかける。気付けば彼女以外の三人の女神が、パープルハートの傍に集まってきていた。女神と呼ばれる存在の四人であるが、傷付き地に伏せる姿は悲しくなるほど弱しい。

「悔しいけど、今の私たちじゃ逆立ちしてもあいつには勝てないわ」  
「らしくないわね、ノワール。でも、確かにそうかも」

言葉通り悔しそうにブラックハートこと、ノワールは呟く。

「そうですね。四人がかりなら何とかかなると思っていきましたけど、甘すぎる見通しでしたわね」

「それを言うなら私だってそうだったわ」

その言葉に同意する様に、グリーンハートが続ける。

「まさか、あれほどとは思わなかった。彼我のシエアの差がこれ程までに大きいとは、思わなかったぜ」

「そう、ね」

息も絶え絶えに言うホワイトハートに、パープルハートこと、ネプテューヌは力なく同意する。認めたくは無いが、今の自分たちではどうしようもないと言う事が嫌と言うほど理解できた。ゆつくりと、絶望が女神たちを包み込む。今の自分たちでは、どうやっても勝てない。皆がそう理解した。

「今の私たちでは勝てない……。けど、倒さなきゃいけない。なら、どうすればいい？」

ネプテューヌの眩き。できないけど、やらなければいけない。ならば如何するのが最善なのか。ソレを四人の女神は考える。自分たちでは、どうやっても倒す事が出来ない。万全でも負けた今、負傷している現状ではどう足掻いても勝てないのは火を見るより明らかだった。相手は女神である。同じ女神が勝てないならば、何ならば勝てると言うのか。

『……あ』

四人の女神が同時に思い至った。自分たちでは倒せない。ならば、倒せる者にやってもらうしかない。その結論に至るのは難しい事では無かった。だが、何を以て倒すのか。そう考えた時、一つの可能性に四人は行き当った。女神が4人がかりで倒せなかった相手。それは、女神候補生であったとしても倒す事は難しい。だからと言って、この世界で女神に勝てる可能性がある存在と言えば、女神候補生しかなかった。

ならば、この世界の存在でなければどうか。四人の女神はその結論に辿り着いた。

「皆……」

「その顔は、何か思いついたようねネプテューヌ」

「そう言うノワールこそ、妙案が思いついたみたいね」

「と言うか、皆さん何か閃いた様な顔をしていますわね」

四人の女神は言葉を紡ぐ。その瞳は、先ほどまでの様に絶望にのみ込まれかけているような不安げな表情では無かった。

「ええ、今の私たちでは勝てないと言うのなら、勝てる相手と呼ぶしかないわ」

ネプテューヌは告げる。三人の女神も黙って頷いた。全員が同じ結論に辿り着いていたのだ。勝てる者がいないなら、呼べばいいのだ。単純な話であった。

「問題があるとしたら……」

「今のシェアで呼び出せるか、そもそも本当にできる術なのか、だな」  
「そうですね、ブラン。だけど、やるしかありませんの」

ネプテューヌの言葉に、ホワイトハートことブランが懸念である点

を示す。ソレに、グリーンハートこと、ボールが諭すようにつづけた。最早彼女たちにはこれ以外打つ手は無かったからだ。

「ボールの言うとおりね。悩んだところで、これしか手は無いの。やるわよ、皆」

「皆、手を」

そして、全員が腹を決め、その手を繋いだ。そして四人が持つ力を、一つに合わせる。女神たちに残された力が収束し、一つの大きな力となった。

「何をしている」

異変に気付いた赤の女神が迫るが、既に術式は完成していた。

『来て、異界の魂』

赤の女神が辿り着く前に、女神たちが全てを終えた。膨れ上がった力。それが弾け、一面をまばゆい光が奔った。膨大な力の奔流を感じ、思わずマジック・ザ・ハードはその場に踏みとどまる。僅かに目を背け、光が収束するのを待つ。そして、見た。

「そんな……」

「うそ、でしょ」

黒と紫の女神は呆然と、呟いた。確かに残る力のほとんどを消費していた。だが、其処に何も居なかった。

「どこまで、か」

「ええ、もう本当に何もできませんわ」

白と緑の女神もただ、肩を落とした。彼女たちのしようとしたことは、ただの徒労で終わったからだ。

「……異界の魂、か」

赤の女神は戦意を完全になくした女神達を見据え、呟いた。

異界の魂。とある世界に伝わる、禁じられた魔法がある。異世界より人間を召喚する魔法だ。世界を超える過程で膨大な力と知識を得ると言われている。彼らが得る力は、神をも凌ぐと伝わっていた。そして、その魔法で呼び出された人間の事を、『異界の魂』と言った。

何故、他の世界に伝わる魔法がゲームギョウ界に存在するのか。そ

もそも、本当にその魔法は正しく効果を發揮するのか。それすらも解らない魔法を女神たちは使おうとしていた。それは、結果として失敗し、女神たち四人の戦力を完全に削ぐ結果に至った。其処まで追い詰められていた。あとが無かったのだ。そう赤の女神は理解した。

「女神は終わったな」

マジック・ザ・ハードの眩きが辺りに響き渡る。彼女の脅威になる者は、最早この地には存在しなかった。

三年の月日が流れた。ようやく光の無い生活にも慣れ、不自由無くとは到底言えないが、それでも何とか暮らしていけるようになってはいた。目が見えず、足も動かない。そんな自分であつたが、祖父母と叔父の家族が自分の後を名乗り出てくれたおかげで、人並み程度の生活をする事が出来ていた。あくまで補助があつてだが、それでもある程度は生活する事ができるのだ。その点に関していえば、どれだけ感謝しても足りないと思う。けど、ただ生きているだけ。あえて言うならば、死んでいないだけの生活だった。大事な人を失い、光と自由も失った。それで何を楽しめると言うのか。そう、思ってしまう。

「生きているだけでも、幸せだと思わないと」

言い聞かせるように、呟く。自分は両親と一緒に死ねなかつた。死にそうになりながらも生き残つた。死にたいと思つた事はある。だが、実際に行動を起こす程の勇氣は無かつた。目が見えない。それでも舌を嚙んだりなんなりやりようはある。結局、怖くてできなかったと言う事だ。

「けど、僕は何を糧に生きればいいのか」

楽しめる事が無かつた。生きる糧が無い。だが、かといつて死ぬような度胸も無い。文字通り、ただ生きている。そんな半端もの。それが僕と言う人間なのだろう。そう考えると、酷く悲しかった。

「だめだな。一人だと、ネガティブな方に思考が進んでいく。もっと前向きにいかなきや」

頬を軽く両手でたたく。目と足は無くしたけど、手や五感のほとん

どは無事なのだ。それならきつと何かある。そう自分に言い聞かせる。

意識を研ぎ澄ませる。虫の歌声が聞こえてきた。鳥の囀りが聞こえ、風が穏やかに吹き渡る音を感じる。目が見えない分、色々な音が良く聞こえるようになった気がしていた。

「生きるって言うのは、難しいな」

響き渡る音色。その様々な音に耳を澄ませ、誰ともなしに呟いた。

——ここでやられちゃうの？

ネプギアは、追い詰められていた。三年前に四人の女神たちが赤の女神に敗北し、姉であるネプテューヌ共々、捕えられてしまっていた。それから三年の時をかけ、漸く友人であるコンパとアイエフの二人に助け出されるも、女神たちを監視していたジャツジ・ザ・ハードと言う、黒の巨人に襲われていた。ジャツジは赤の女神の仲間だった。三年前よりもさらにシエアが落ちている状態で、更にネプギア自身先ほど助け出されたばかりであり、とても戦える状態では無い。赤の女神と同じで、今のネプギアにはどう足掻いても、勝てる相手では無かった。

「つまらん、つまらんぞおお!! 本当にお前の力はこの程度なのか！」

「だめっ、このままじゃ、また負けちゃう。やだよ、そんなのは……やだ」

「……もう良い。弱い相手を黽つたところでつまらん。」

ネプギアの頭の中で、赤の女神に手も足も出ずに敗れ去った記憶が思い浮かぶ。手が震えた。足が震えた。だけど、逃げる訳には行かなかった。

「っ、ネプギア、コンパ、逃げなさい。こいつは私が何とか止めるから、その隙に逃げなさい！」

「だ、だめですう、アイちゃん。そんなことしたらアイちゃんが」

「聞き分けなさい。誰かが残らないと、逃げきれない。起きたばかり

のネプギアと、後衛のコンパには無理よ」

「ですけど」

この場で自分が逃げれば、また取り返しをつかない事になる。ネプギアはそんな予感をはつきりと感じていた。震える体を叱咤し、ジャツジ・ザ・ハードを見据える。その手には、コンパがネプギアを助けるために使ったシエアを凝縮させた結晶、シエアクリスタルが握られていた。

——これを使えば。

ジャツジ・ザ・ハードがその手に持つ巨大な斧を振りかぶった。

「うおおおおおおお!!」

「お願い、間に合つて。皆を守つて!!」

考えている暇は無い。咄嗟に、ネプギアはシエアクリスタルをジャツジ・ザ・ハードに向けて突き出した。

瞬間、強烈な閃光が辺りを包み込んだ。

「うおおおおお!! 何だこの光は、くそ、前が見えん。目が、目がああ!!」

「うそ、効いてる!?! やるじゃないネプギア、このまま引くわよ」

びしりと何かが碎ける音とともに、突如発生した強烈な光。ソレをもろに浴びたジャツジ・ザ・ハードは両目を抑えもだえ苦しんでいる。ソレを見たアイエフが、ネプギアを促す。この場で隙をついても、とても戦つて勝てる相手では無かった。

「良かった……」

「ギアちゃん!?!」

あとは逃げるだけ。その局面に来た時、ネプギアは意識を失つてしまった。目覚めたばかりと言う事に加え、ジャツジ・ザ・ハードを相手に立ち回り、今無理やりシエアクリスタルの力を使った事で、ネプギアの許容範囲を大きく超えてしまったからであった。

「ちよ、今気絶なんてしたら……」

『お二人とも、此処は引いてください。今の戦力では目の前の敵には勝てません。一度、体制を立て直しましょう』

驚くアイエフ。直後に手に持つ端末から声が聞こえてきた。声の

主はプラネテューヌの教祖、イストワールであった。

「解りました。コンパ、さつきも言ったけど、引くわよ。ネプギアを運ぶの手伝って！」

「は、はいですうー！」

逃げるしかない。だからこそ、動きは迅速だった。ジャツジ・ザ・ハードが回復しないうちに、距離を取るため、全速力でその場から離れていった。

「……っ、ここは何処だ？」

思わず目を開き見たのは、薄暗くどこかおぞましい場所であった。何やら巨大な端末らしきものや、コードらしきものが見えるのだが、用途が良く解らない。そもそも、このような規模のモノ、見た事が無かった。

「……っあ、なんで目が？ それに、足も動く……？」

そこまで見たところで、気付いた。何故、自分の目が光を映している。何故、脚が動く。訳が解らなかった。だが、自身の目は確かに当たりの風景を移し、両の足で地を踏みしめていた。それが、不可思議であった。

不意に、涙が零れた。理由は解らない。だが、何故か目が見え足が動く。それは自分にとって間違いなく奇跡と言って良い事であったからだ。その理不尽ともいえる奇跡、それに只々涙が流れる。

「っづあ!？」

喜びを噛み締めていたところで、言葉に形容しがたい程の痛みが頭に走る。思わず膝をついた。だが、確かに足が動く。その事実が苦しみながらも気分を高揚させていた。

「ぐあ、異界の魂、魔族、神、強制進化、最終戦争、超先史文明、天魔、魔法、ソード・オブ・カオス……」

知らない知識が頭の中を駆け巡る。言うならばそれは知識の奔流。知るはずの無い知識。在るはずの無い術式。解るはずの無い理論。一つの到達点。それが頭を、五感を通り抜ける。



「があ、ゲームギョウ界、剣の極地、女神、裏奥義、シエア、犯罪神、魔物、ゲームキャラ、バ……」

頭をよぎる知識の中に、何か異質なものが混じっているのを感じた。とは言え、よぎる知識全てが身に覚えが無いため、更に何が異質かと問われれば解らない。痛みを堪えつつ、ただ波が引くのを待つ。視界が説明しがたい色を帯びるが、それでも見えると言う事実には歓喜する。

「っあ、はあ、はあ、なん、なのかな、っあ、今のは」

暫く堪えたところで、幾分か痛みが引き始める。訳が分からなかった。だが、意味は解った。前触れなく、それこそパソコンに何かをインストールするかのごとく詰め込まれた知識。それが正しいものだと仮定するならば、だが。

額を抑えながら情報を整理していく。急に得た情報が多すぎる。だからこそ、この場では情報を選別する必要があった。

「けど、これは、なあ。幾らなんでも突拍子が無さすぎるよ」

結果、苦笑が浮かんだ。自分が得たのは、世界の知識であった。それも異世界のものである。神やら魔族やらが存在する。魔法の知識、世界の出来事、或いは見た事も無いような文字。それ全てが鮮明に理解できる。何よりも、自分の状況が自分の知識によって理解できた。「異界の魂、か。事実だとすれば凄い事になった。あはは、笑えないね」

ぼんやりと、呟いた。はつきり言うとは信じられるわけでは無かった。だが、あり得ない出来事が何度も起こってくると、あながち全てが間違っているともいえない。少なくとも、自分の目と足は治っている。有り得ない奇跡であったのだ。

「困ったなあ。ってなんだろう、これ」

どうしたものかと思ったところで、ふと足元に何か落ちている事に気付いた。棒状の物体。手に取る。

「っ!? ああ、またこのパターンか。少し慣れたかな」

触れた瞬間に、また知識が流れる。思わず瞳を閉じる。とは言え先ほどの様に膨大なものでは無かった。この剣に関する事であった。

どのように作られ、誰の手に渡り、なぜこの場にあるのか、ソレを感  
覚的に理解する。それは、きつと異常な事だ。だけど、それができる  
と言う事はつい先ほど、知っていた。だからこそ、驚く事は無かった。  
その代り更に困惑が増した。いよいよ、先ほど得た知識が信憑性を増  
した。少なくとも、一つは事実であった。

「君の名前は長釣丸って言うんだ。よろしく」

思わずそんな言葉をかけてしまった。長釣丸の歩んだ歴史を見た。  
その所為か、妙に愛着が出てしまったのだ。明らかにおかしいとは思  
うのだが、僕の許容量もそろそろ限界だったため、深くは気にしない  
事にする。だからこそ、それがそこに来ている事に気付かなかった。  
「お前は何だ？」

問われた。目を開き、声のした方に視線を向ける。其処には――  
「ロボット？」

黒を基調とした重厚感のある形状をしたロボットらしきものが此  
方を見ていた。手に持つのは巨大な斧。視線が数舜混じり合う。ひ  
んやりと嫌な汗が背筋を伝った。

「なぜ人間がいる。さてはお前もさっきの奴らの仲間だな。ならば  
たっぷりとあいてをしてもらおうかあああ!!」  
「っ!？」

上がる咆哮。全身が総毛だった。感じた事の無い、敵意。ソレをぶ  
つけられていた。強く、先ほど手にした剣を強く握った。黒の巨人と  
でもいべき者が、その手に持つ斧を振り上げ肉薄してきた。怖いと  
思った。だが、不思議と死ぬとは思わなかった。咆哮が響き渡る。そ  
れはさながら開戦の合図だった。

## 2話 出会い

「うおおおおお!!」

黒の巨人が、その体軀に相応しき巨大な斧を振りかぶりながら、肉薄する。凄まじい轟音を響かせ、一直線に向かつてくる。凶体に似合わず目を見張る速さでありながら、圧倒的なまでの質量の突撃。大型トラックなど比にならない程の圧力を一瞬で感じた。背筋にぞくりと悪感が奔る。感覚的に、突撃の射線から外れるように全力で地を蹴った。つい先ほどまで、足はどうやっても動かなかったはずなのに、も拘らず、何の苦も無く動いてくれた。その事に、僅かに胸が躍るのが解った。目の前のロボットがいなかったら、やったと歓喜の声を上げていたにちがいない。

「って、はやい!」

足が動いてくれたことによる喜びを上回る違和感。僕は全力で避けたつもりであった。そして実際にその思惑通りに体が動いたのであるのだが、その範囲が異常だった。一瞬、視界が持っていられなかったかと思った。

「ほう、我が一撃を敢えて視認した後に避けるか。面白い、面白くなってきた」

黒の巨人の声が、少しばかり遠く聞こえる。尤もかなりうるさい声なので些細な差ではあるのだが、距離にすると相当なものがあつた。大凡、人間の跳躍力とは思えない程度には飛んでいた。

「わつと。危ない危ない。危うく落とすとこだったよ」

自分の想定していた距離よりも遥かに飛んだ事により、着地にたたらを踏むが何とか踏ん張る。その衝撃で手にしていた長釣丸を取り落としそうになるが、慌てて持ち直した。これを無くしたら、それこそどうしようもない。

「うーん。異界の魂って言うのは、本当にあるのかもしれないなあ」

剣、もう少し詳しく言うならば長刀。長釣丸を鞘から抜き放つ。先ほど得た知識から、今の自分が異界の魂と言う存在なのは理解していた。更に剣と言う概念から、その剣にまつわる知識をも得た事で、あ

る程度の確信が付いた。と言うよりは、納得せざるを得なかったと言う方が正しいかも。

兎も角、自分の得た妙な知識は、全ては確認できていないにしても、現時点で実践できているものは全てが正しかった。だから、あれこれ考えるよりも、とりあえずは全てが正しいものだとして仮定する。あれこれ考えるのは、現状を切り抜けてから悩めばいい。少なくとも目の前にいる黒の巨人は、全力で逃げに徹しないと逃げきれないように思えた。

「異界の魂？　なんだ、それは。まあ、貴様が何だろうとどうでもいい。さあ、俺を楽しませろおお！」

両の手で抜身の長刀をしっかりと握る。自分には剣術とか剣道の経験は無い。が、できると言う確信があった。剣が、長釣丸が、剣という存在をこれまでに使って来た数多の使い手たちが、その力を貸してくれている。言うならば、剣が自分の体の一部になった感覚。或いは自分が剣の一部になった感覚。不思議な感覚であった。自分では無い何かがある。漠然とそんな事を思う。

「できれば、遠慮させてもらえないかな？」

ダメ元で聞いてみる。

「そんな事を許すと思っているのか」

大体予想通りの返答であった。此れまでの発言や、見た目の雰囲気、なによりもやる気満々といわんばかりの強烈な圧力。それは、男子学生の喧嘩などとは文字通り次元が違う。自分の言葉なんかを通じる筈が無かった。敵意と言うべきか殺意と言うべきか、最早存在としての格が違っている。

「腹を決めようか」

ぼそりと呟く。できると言う確信はあった。自身が得た異界の魂としての能力がそれを裏付けてくれる。失った視力と足の回復。それどころか、完全に把握したわけではないが、人外と言って差支えない程の身体能力を得ていた。更には自分の知るはずの無い技術すらもある。それがあるのが解ったし、実感もした。知識と体は何の問題も無い。今の自分の状態を顧みて、『できる』か『できない』かという

ならば、できるのだろう。だけど。

「くくく、漸く戦う気になったか」

「少しだけ、だけどね」

倒そうとは最初から思っていない。そもそも僕は斬り合いなどした事が無い。武器を持ったのだって、今日が初めてであった。まず経験が足りていない。知識はあるが、実際に用いるのは自分だ。だからこそ、どちらかが倒れるまで戦うと言う選択肢は、最初から存在しない。解り易く言うならば、死なないと言う確信はあるが、だからといって勝てると言う実感がある訳では無い。と言う事だ。

「ふはは、いいぞー！ では」

黒の巨人が嬉しそうに言い、再び斧を構える。じくりと、全体から嫌な感じが漂ってきた。こう言うのが殺気なのだろうか、などと一瞬だけ馬鹿な事を考えるが、即座に打ち消す。

「……」

両手に持つ長釣丸をしっかりと握り、ただ相手の一挙手一頭足に視線を集中させる。自分とは思えない程に間隔が研ぎ澄まされていく。やがて、黒の巨人の全身が僅かに揺らめくのが感じられた。来る。そう思い、両の足に力を込めた。

「ゆくぞおおお!!」

「つつあー」

黒の巨人の裂帛の気合い。それと同時に前に出る。剣が教えてくれた。自分の力があるのならば、どうするべきなのか、ソレを感覚的に知らせてくれているのはつきりと解った。相手の獲物は大きな斧だった。初動から最速に達するまでは、いくら巨大な黒の巨人とは言え、僅かに時間を要する。更には自分をただの人間と侮っている。其処に付け入るべき隙があった。

「……」

交錯。僅かに長刀と斧が触れ合う。剣と大斧がぶつかり僅かに火花が散る。

「ちいいい！ 小癩な真似をおおお!!」

だが、鏢迫り合いにはならず、そのまま刃を走らせ大斧を受け流し、

僅かにできた間隙を突き跳躍し一気に距離を取る。首だけ振り返り僅かに後方を見る。黒の巨人は全身全霊の力を以て振り下ろした所為か、大地に凄まじい衝撃をぶつけ、巨大な傷跡を地に刻み付けていた。それだけ確認すると、そのまま走り抜ける。人間の速度とは思えないほどの速さであった。文字通り、風を切っていた。動く事の無い筈の足が、あり得ない動きをしている。嬉しさと僅かな怖さを感じた。そのまま振り返らず、一気に駆け抜けた。

黒い巨人を何とか撒いた後、良く見れば、身体から淡い光が零れていた。知識の中にあつた、気と言うものだろうか。使い方は、感覚的に理解できた。此れもまた、異界の魂としての能力の様だ。凄まじいものだ。我が事ながら若干呆れてしまう。

「ここまでくれば、大丈夫かな」

いつの間にか、禍々しい雰囲気のを抜け、どこかの草原のような場所に出ていた。木々の緑が美しく、生い茂る緑の隙間から差す木漏れ日が、淡く辺りを照らす。目の前を広がる緑の原野が輝いて見える。

「綺麗だ、なあ」

思わずそう零した。その場に座り込む。異界の魂となつてから様々な事が立て続けに起こり、自身の得たものを噛みしめる余裕が無かったが、一段落ついたところで自身の事を考える余裕が出ていた。

「……。うん、これは泣いても仕方ないよね」

ぼんやりと呟く。世界は、綺麗だった。風景が綺麗と言うだけでは無い。温かい。光が差すと言うのは、此処まで良いモノだったんだと再確認すると、涙が零れ落ちる。悲しい事なんか無い。ただただ、嬉しかった。光を失い、自由を失っていた。そんな自分が、再び光を目にする事が出来た。それは、どんな言葉にも代えられない程、ただ嬉しかった。

涙をぬぐう手間も勿体ない程に、ただ光の差す景色を脳裏に刻み込む。それ程までに、目が見えると言う事は大事な事だった。

「つと、君にも力を借りたね。ありがとう」

ある程度視覚を楽しんだ後、手にしていた剣にそんな言葉をかける。刀が意思を持っていてるわけでは無い。だからその言葉に意味は無いだろう。だが、長釣丸が無かったら自分はどうなっていたかは解らない。それは、自然と出た言葉だった。

「ヌラー」

「ぬらっ？」

むき出しであった長釣丸の刀身を鞘に納め、一息ついたところでそんな間の抜けた声が聞こえた。音のした方向に視線を向ける。目を悪くして以来、音に関しては以前よりも敏感になっていた。不意に聞こえた音ではあったが、何処から聞こえたかはしつかりと解っていた。

「……なんともまあ、可愛らしい」

視界に入ったのは、プルプルとみずみずしい水色の肌をした、奇妙な生物であった。どこことなく、某RPGの敵キャラを思い出すシルエットをしているが、彼らとは解り易く違う場所があった。何とというか、犬の耳と尻尾がついており、顔も犬っぽい。思わず本音が零れた。「ヌラっ、ヌラー！」

何やら頬を染め、照れているのか少し恥ずかしそうな鳴き声を零す。人間の言葉が解るのだろうか。そんな事を思いながら、自分の得た知識に該当するものがないか、動きを見据えたまま思考する。特に思い浮かぶものはな——。

「っ、」

何度目かの頭痛。一瞬だけ、脳裏に妙な光景が浮かび、直ぐに消え去る。先ほどまで確かに無かった知識。それが今、確かに頭に浮かんでいた。

「む……。まだ完全じゃないってことなのかな。相手がスライヌだったから良かったけど、場合によってはシャレにならない」

苦笑と共に誰とも知れず零す。目の前にいるのはスライヌ。この世界に生息する、最も弱いと思われる、モンスター魔物であった。得た知識によると、ナチュラルに魔物とかがいる世界のように、確かに目の前の生

物は自分の知る生き物とはどこか違っているように思えた。とは言え、実際に見ても、魔物ってどういう基準で決めているのだろうか、もっと魔物らしいのもいるのだろうか、そもそも魔物とは何だろうか等と興味が尽きる事は無い。

「ヌラー、ヌラー、ヌラー!!」

じっと見つめているのが気に障ったのだろうか、スライヌは何処となく怒ったように鳴き声を上げる。見た感じでは怒っていると思えるのだが、如何せん見た目が見た目な為威圧感は無。寧ろ微笑ましいと言うか、可愛らしい。少しだけ笑みが零れた。

「んー、怒ったのならごめんね」

とりあえず、謝る。

「ヌラ、ヌラー」

それでも気は晴れないのか、ぶるぶるとその弾力性のありそうな体を震わせ、僕に向かい体当たりを仕掛けてきた。

「わっと、危ない」

「ヌラー!」

少し驚きながらも、半身を反らす事で避ける。異界の魂云々は関係なく、サッカーボールが飛んでくる程度の速さだったため、避ける事は難しくなかった。そのまま少し後ろの木にぶつかり、スライヌは悲鳴のような声をあげる。どうにも緊張感に欠ける相手ではある。

「ヌ、ヌラー!!」

「うーん。なんか弱い者いじめしてるみたいだなあ。困った」

一瞬目を回していたが直ぐに我に返ったのか、此方を見つけるとふたたび向かってくる。ソレにどうしたものかと考えつつ何度か避け続ける。この位だったら、何時までも避けられる気がした。とは言え相手は可愛いとはいえ一応魔物である。剣を抜いた方が良いのだろうかと悩む。事実はどうであれ、見た目が倒しづらいということだった。

「ヌヌヌ、ヌラ、ヌララ!!」

「むむ、怒ったかな?」

避け続ける僕に遂に我慢できなくなったのか、そんな声を上げる。



数舜の静寂。辺りから何やらがさがさと物音が響いてくる。なんとなく、何をしたのかが分かった。魔物が声を張りあげると言えば、きつとあれだろうなあ、つと目が見えなくなる前まではソレなりにゲーム好きだった所為か漠然と思いつた。そして――

『ヌララーヌラヌラ!!』

「うわ、予想通り。てか、多いね……。仕方ない、か」

大量のスライヌが現れた。数にしたら50程度はいるのではないだろうか。僅かに笑みが引き攣る。長釣丸を抜き放ち、峰を相手に向け構える。幾ら魔物とは言え、やはり斬る気にはなれなかった。どうしたものか、そう思ったところで別の声が聞こえた。

「まったく、なんであたしがスライヌの相手なんかしなきゃいけないのよ。スライヌぐらいなら他の人でも相手に出来る……。って、なんでこんなにいるのよ?! いくらなんでもいすぎよ!」

闖入者に意識を僅かに向ける。声色からして女の子の様だが、振り向く余裕は無い。女の子の言葉通り、大量にいるスライヌに襲われているからだ。一匹一匹のスライヌは先ほどと同じように一直線に向かって体当たりを仕掛けて来るだけなのだけれど、如何せん数がかなり多い。要領こそ先ほどと同じだが、今度は異界の魂の能力を惜しみなく使い避けながら迎撃に専念する。戦いは数だよ兄貴!、等とどこかの誰かがそんな事を言っていたのを思い出す。まさしくその通りだなと思いつながら、スライヌの向かってくる射線上に長釣丸を滑らせる。

「ヌララー!」

「出来れば来ないでくれると嬉しいんだけどな」

滑り込ました刃にスライヌ達は自ら突っ込んでくる。体当たりの途中で急には止まれないのだろう。一応刃は返し、峰で叩き落とすだけではあるがそれだけで充分だった。長釣丸をしっかりと握りしめ、体捌きのみでスライヌ達の突撃のをいなしつつ、確実に昏倒させていく。剣に刻まれた使い手たちの経験が、力を貸してくれているのが良

く解った。頭の中で会った事の無い彼らに短く感謝する。自分一人ならば、これほどうまく立ち回れはしないからだ。

「……誰か襲われてる？ 仕方ないわね、そのアンタ聞こえる？ 援護するから一旦距離を取りなさい！」

「解りました、お願いします」

聞こえてきた女の子の声に正面を見据えたまま、答える。直後に、聞きなれぬ音がしてスライヌ達が弾け飛んだ。答えてから殆ど間を置かない間に入った一撃。銃だろうか。スライヌに視線を向けたまま思う。

「今空けるわ。死にたくないなら下がりにさい！」

言葉の後、軽快な銃声が鳴り響く。前者は僕に、後者はスライヌに言ったのだろう。案外警告している中に僕も入れられているかもしれないが、怖いので真偽は確かめのようにする。連続して放たれた射撃。数匹のスライヌがまた弾け、消える。気付けば自分の昏倒させたスライヌもまた姿を消している。こう言うものなのだろうか。目の前の光景に若干驚きつつ、女の子の射撃によりわずかに怯んだスライヌ達に向け一度大きく長刀を振り抜き数体まとめて弾き飛ばし、距離を取った。

「やるじゃない。もしかしてアタシの援護いらなかった？」

「いや、助かったよ。ありがとう」

スライヌ達に視線を向けたまま長刀を構えていると、女の子が隣まで来てそう言った。少しだけ視線を向け、感謝を伝え直ぐにまた視線を戻す。長時間よそ見をしているほど、自分には余裕が無いからだ。僅かに見たところ、黒髪を左右で結った髪型の可愛い女の子だった。

「とりあえず話はあとで。今はアイツらを片付けるわよ」

「了解」

「よし、さつきみたいにアタシが援護するから、正面は頼んだ」

女の子の言葉に短く頷く。先ほどの射撃と言い、単純だが迷いのない判断力といい、きつと戦いなれているんだろうなと思いつながら、女の子の指示に従う。こと闘いに関して言えば、僕自身は素人である。

恐らく年下の女の子ではあるだろうが、その態度に励まされた。ようやく人に出会えたと言う事も、拍車をかけているのかもしれない。何にせよ、女の子の存在は心強かった。武器や知識を持ち、仮初の経験も得る事は出来たのだが、誰かが傍にいる。それが一番安心できると言う事なのだろう。

「来るわよ、狙い撃つ！」

少女を後方に置き、自分が僅かに前に出る。そのままスライヌに長釣丸を振り下ろす。峰で叩きつけ一体が昏倒したところに左右から二体のスライヌが飛びかかってくる。即座に振り下ろしていた長刀を、切り上げ一体を迎撃し、もう一体も袈裟切りで撃ち落とす。長釣丸が、自分の身体とは思えない程、淀みなく動きスライヌ達を迎え撃つ。剣が力を貸してくれていた。流れるように刃が躍り、スライヌ達が数を減らす。とは言え自分の持つ武器は剣である。一度に相手に出来る数は限りがある。

「ごめんね」

消えていくスライヌを一瞥し、短く呟く。既に刃を返すことを止めていた。昏倒させたところで、女の子の銃で撃たれば一緒である。ソレに昏倒させたとしても、生きていることには変わりがない。再び起き上がり、隙を突かれれば自分がどうなるか解らない。そう考えると、半端な加減などできなかつた。自分はそのままで上手くないからだ。だからこそ、威を誇るように刃を振るう。逃げてくれれば良い。そう思う。

「前に出るから、そうなるのよ！ 次」

長釣丸の刃の届かない相手に、女の子が銃撃を放つ。一体一体確実に数を減らしつつ、僕の方まで気を配り、時折援護射撃を放っている。それが心強くあり、またスライヌ達が不憫でもあつた。負けるとは思えない。寧ろほとんどを討てるだろう。そう考えると、少しばかり気の毒であつた。

「あと少し」

残り五体まで減らした。何匹かは逃げたものもいるけど、殆どを討ち果たしていた。それだけ女の子がやり手だつたと言う事だ。残つ

ているスライヌは気が強いのか、はたまた覚悟を決めたのか、逃げる事をせずに向かって来た。五体での特攻。流れるように刃を振るう。剣が教えてくれていた。刃が淡い光を帯びる。できる。その感覚のまま剣を振るった。

——劍魔連斬

剣が淡い光を帯びたまま、四つの軌跡を作り出す。切り上げと振り下ろしという単純な斬撃。其処に魔の力が加わり、通常の斬撃を遥かに超える結果を生み出す。四条の煌めきは、四体のスライヌを消し飛ばしていた。

「ごめんね」

短く呟く。

「ヌ、ヌラー!!」

最後に残ったスライヌ。声を上げ向かって来ていた。視界に定める。

「これで、終わりよー!」

ダーン、と乾いた銃声が鳴り響き、最後のスライヌが光となり消える。それで、終わりだった。

「お疲れさま。つて、アンタ一人でも大丈夫そうだったわね。余計なお世話だった?」

「いや、そんな事は無いよ。凄く、助かりました。ありがとう」

女の子がこちらに声をかけてくる。それに応えつつ、改めて少女を見る。黒を基調とした、ショートドレスのような服装。気の強そうな赤い瞳が可愛らしさと小悪魔的な印象を与える。可愛らしい女の子ではあるのだが、手に持つ大きな銃がアンバランスに思えた。

「そ、そう、ならよかったわ」

感謝されるのに慣れていないのか、はたまた性格的なものなのかお礼を言うと、少し頬を染めながらそう言った。見た感じの印象とあまり、素直じゃない子なのかな、などとそんな事を思う。

「そ、そうだ、アンタはギルドから仕事を受けて来た人?」

「いや、違うよ。んー、何と説明すべきかな。あえて言うなら……、迷子?。」

「迷子って、アンタ……。」

「あはは」

自分の事を聞かれるが、上手く説明できないので迷子だと答える。上手く説明できるならば、説明したいところではあるのだが、自分は異世界から来ましたなどと言う事を上手に説明できる自信は無かった。それに幸い、彼女の言葉にあったギルドのようなシステムもある為、都市部にさえ出れば何とかなるだろうと若干、と言うかかなり樂觀的に考えていた。この世界の知識は、ある程度の事ならば異界の魂としての能力なのか、得ていたからだ。考え込むと、この世界の文字なども思い浮かぶ。

「その年で迷子って言うのも……、そう言えばアンタ、名前は何て言うの?。」

女の子は若干呆れつつ、ふと思いついたように尋ねてきた。

「僕かい? 四条優一って言います。四条でも優一でも、他の呼び方でも好きに呼んでももらえればいいよ」

別に隠すような事でもないのです、素直に答える。女の子は僕を見定めるかのように暫く見つめると、うんつと頷いた。

「じゃあ、ユウイチって呼ぶわね」

「ん、お好きにどうぞ。君の名前は何て言うのかな?。」

見た感じ年下の女の子に名前を呼び捨てにされているが、特に気にならなかった。僕自身そう言う事はあまり気にしない性質であるし、女の子の雰囲気からもその呼び方が何となくしつくりと来たからだ。

「アタシ? アタシは——」

自分は名を教えたが、女の子の名前を聞いていなかった為、尋ねる。相手に名乗ったのだから、此方が聞いても問題は無いだろう。女の子はそこまで言っただけ一度言葉を切り、

「ユニって言うの。覚えておくと良いわよ」

少しだけ笑顔を浮かべ、そう名乗った。

### 3話 ラステーション

「へえ、それじゃユニ君は女神さまなわけなんだ。僕よりも小さいのに、凄いね」

「ちよ、ちっさい言うなー!」

「いやいや、ごめんね。貶したつもりは無いんだ。若いのにつて頑張ってるなあって意味だよ」

「むう……。紛らわしい言い方しないでよ。それなら良いけど」

僕の言葉に小さくむくれるユニ君。見た感じ年下なので、最初はユニちゃんと呼ぼうかと思ったのだけど、何とつかイメージに合わないのでもめた。さん付けや呼び捨ても候補には上がったが、さん付けだと違和感がさらに酷くなり、だからと言って初対面の相手呼び捨てに出来る程自分は厚顔でもなかった。そこで試しに君付けで呼んでみたところ、しつくりと来たと言う訳だ。ちなみに君付けで呼んだ時、ユニ君は何とも言えない表情をしていた。例えるなら、女の子にそれは無いだろうって言わんばかりの顔である。

ちなみに彼女の方は僕の事呼び捨てにしており、何処となく面映い気持ちにさせられる。年下とはいえ、ユニ君ほど可愛い女の子に名前を呼び捨てにされたら気恥ずかしいと言う訳だ。

「しかし、女神様か……」

ユニ君の言葉にしみじみと頷く。女神。正確に言うならば、守護女神。大まかな知識だが、それも自分の得た知識の中に存在していた。その情報の正しさをユニ君との会話でさり気なく確認していた。自分が『異界の魂』と言う存在であり、何者かに呼び出されたと説明できればいいのだが、そんな事を語ったところで、信じて貰えるとは思えなかった為、こう言う形になってしまったと言う訳である。別段悪事を働くために騙していると言う訳では無いのだが、なんとなく彼女を利用してあるようであり気分が良いモノでもない。

今自分の存在する世界である、ゲームギョウ界。自分のいた世界をチキユウと呼ぶのと同じく、この世界はゲームギョウ界と呼ばれているようだ。そしてその地には、大きく四つの国があり、その国を四人

の女神が統治している。で、女神と言うのは信仰シエアによつてその力が増減するようで、日々信仰を得るために切磋琢磨しているのだとか。女神の力が強まれば、その女神の統治する国が豊かになる様であり、時には信仰を得るために女神同士の争いに発展する事もあるようだ。大まかにだが、自分はそう理解していた。知識を得ると言つても、何処の国の女神がどの程度の力を持っているかなどと、事細かに解る訳では無い。それでも知っている事と知らない事では大きな差ではある。

「正確に言うなら、女神候補生だけだね。ウチの、ラストイションの女神はアタシのお姉ちゃんが務めてるんだ。アタシは、そんな凄いいお姉ちゃんにまずは近付く事が目標なの。……アタシの顔になんかついてる？」

ユニ君の話を、自分得た情報の裏を取りながら聞いていたのだが、気付けばユニ君の顔を眺めていたようだ。苦笑しながら言葉を紡ぐ。要するに物珍しいのだ。女神さまと言われても、イマイチピンと来ない。

「うーん。僕が田舎者だからかな、イマイチ女神さまって言われても実感が無いんだよ。それこそここ数年は、足の怪我で余裕が無かったからね」

「それがようやく治ったから、旅をする事にしたとか言つてたもんね。アンタも結構苦勞してるのね。……だからって、女神に関して関心がなさすぎなのはどうかと思うけど。まさか女神が不在な事を知らないとは思わなかったわ。どんな辺境に住んでたのよ」

ユニ君には、自分の事は田舎者と説明していた。彼女と話した事で自分の知識が正しいと言う裏付けは更に取れたが、それとはまた別の問題が発生していたからだ。ある程度の知識があるからと言って、常識がある訳では無い。例えるなら、教科書を読んだだけで実際の世の中の全てが解る訳では無いと言うことだろうか。端的に言つて、ゲームギョウ界の常識が解らなかつた。会話を重ねれば、そのうちぼろが出る事は避けられないだろう。ならば隠し通す事は諦め、それなりの理由をつける事にしたと言う訳だ。それが、田舎者と言う訳である。

「あはは、そんな余裕が無かったものでして」

「うーん。つでも考えてみるとそれって、まだまだシェアが足りないって事よね。もっと頑張らなきゃ」

実際のところ、追及されたら直ぐにぼろが出るとは思うのだが、近くの都市までの付き合いになるだろうからユニ君もあまり突っ込んだ事を聞いて来ないのが幸이었다。尤も、最悪ばれても問題は無いのだが。頭のおかしい奴だと思われただけだろう。

「女神さまじゃないから僕には応援する事しかできないけど、頑張つてね」

「ええ、言われるまでも無いわよ。お姉ちゃんがないから、私が頑張らなくちゃいけないんだから……」

僕の言葉に、ユニ君はどこか思いつめたように呟く。その綺麗な紅の瞳が、どこか遠くを見ているように感じた。

「……ふむ、ねえユニ君」

それが妙に気になった。心がざらりとざわつく。気付けば声をかけていた。

「何？」

「君はギルドの仕事をしに来た時に僕に会ったって言ったね」

「そうだけど、それがどうかした？」

「いや、普段は誰かと組んだりしているのかと思つてね」

考えがあつたわけでは無い。だから咄嗟にギルドの話を持ち出す。スライヌと一緒に戦った時、ユニ君はギルドから仕事を受けたのかと聞いてきた。勿論僕はギルドから依頼を受けたとかそう言う事では無かつたのだが、一息ついた後聞いてみると、ユニ君はギルドの仕事を受けてきたのだと教えてくれた。

今回の仕事は一人で来ていた為、普段はどうなのだろうかと思つたわけである。なんとなくではあるのだが、答えは聞かなくても解つた。

「アタシは……、いつも一人よ」

答えは、思っていた通りの言葉だった。何処となく寂しそうに聞こえるのは自分の気のせいだろうか。



「やっぱり」

「なによ、一人じゃ悪いの!?!」

思わず零した言葉に、過剰に反応する。少し話ただけだが、気難しいと言うかひねくれていると言うか、そんな女の子だと感じていたが当たり前だろうと確信する。

「いやいや、そうじゃないよ。ラストイションに行ったらギルドに行こうかと思ってたんだけどね、良かったら僕と組んでくれないかな?」

「え……? なんぞ、アタシと?」

僕の提案に少し虚を突かれたのか、驚いたように僕の顔を見て言った。そこまで意外な事なのだろうか。

「うーん。田舎者な所為か、僕はいろいろと疎いからね。いろいろ教えて貰えると心強いって思ってる。何よりユニ君が凄いのはこの目で見ただけからね」

「そ、そう。まあ、それなら仕方ないわね」

少し嬉しそうにしながら、ふふんと僅かに胸を張る。褒められ慣れてないのだろうか、少しばかり声が上がっているのが微笑ましい。そんな様子に僕の方も笑みが零れた。

「あ、でも、無理かもしれない……」

しかし、ユニ君は思い出したように零す。少しだけ声色が沈んだのは気のせいじゃないと思いたい。

「おや、そうなんだ。残念だな」

「ほら、アタシは女神候補生だからさ、簡単に誰かと組めないのよ。お姉ちゃんに何かあったらアタシが……」

「まあ、理由が理由だし、仕方ないかな。ふふ、残念。振られちゃったか」

「う、ごめんなさい」

女神不在の状態で、女神候補生にまで何かあったら問題と言う事だろう。仮にユニ君自身は僕と組んでも良いと思っただとしても、立場がそうできないと言う事であった。尤も、僕と組みたくないと言う可能性も大いに考えられるけど。

「なら、予定通り一人で探すかな」

「街の案内位はしてあげるわ」

「ああ、ありがとう。すごく助かるよ。迷子になる自信があるからね」  
「それぐらいは、ね」

とは言え、できないモノは仕方が無い。無理に言いよつたところで、良い方に転ぶわけでは無いだろう。そもそも殆ど気紛れのような提案であった。女神候補生と言う存在が、妙に気になったのだ。

「あ、見えてきたわね。……もう直ぐ着くし、先を急ぐわよ」

ユニ君の声に頷く。視線の先にはラストেশヨンの街並みが見え始めていた。見上げるばかりの高い建物。自分の本来住んでいた街並みと比べても、ソレ以上に発展しているのが容易に想像できる。全体的に、黒いと言うか、シャープな印象を受ける。ユニ君の話を聞く限り、産業が最も発展している国のようで、見上げんばかりの街並みを眺めると、その言葉にも素直に納得できた。ユニ君の姉、黒の女神が治める国ラストেশヨン。そこに向かい歩を進めた。

「お疲れ様です、ユニ様」

「貴方たちも、お疲れ様」

ラストেশヨンに着くなり、軍服を着た兵士たちにユニ君が挨拶される。ソレにユニ君は笑みを以て応じている。僕はというと、軽く会釈をして続く。見た感じで軍隊の人なのかなっと思う。

「あの人たちは？」

「防衛隊の人よ。その名の通り、モンスターや災害から街を守ってくれるのよ」

大体予想通り、彼らは防衛隊の人たちのようで、ユニ君の傍らを歩く僕に少しだけ不思議そうな目を向けていた。この子の傍に誰かがいるのがそんなに珍しいのだろうか。

「へえ。そんな人たちに挨拶してもらえるなんて、流石は女神様ってところかな」

「別に、大した事じゃないわ。お姉ちゃんだったらこの程度じゃすま

ないし」

「そんな事は無いと思うけどな」

しかし、こうしてみるとユニ君は本当に女神なんだなつと実感する。街ですれ違う人がユニ君を温かい目で見ていたり、あいさつをしていく人が何人も見て取れる。女神と言うのは本当に慕われているのだと言うのが良く解る。だからこそ、たまに傍らにいる僕に向く好奇の目が何とも居心地が悪い。

「女神って言うのも大変なんだね」

「いきなりどうしたのよ？」

「いや、なんとなくね」

「アンタって、変な奴ね」

思わず出た本音。此れだけ注目されていると、気疲れなどして大変だろうと思う。しかし彼女の様子を見てみると、大して苦しんでいる様子には見えなかった。まだ小さいのに大したものだと感心してしまう。

「偶に言われるよ」

ユニ君の言葉に軽く笑みを交えて返す。

「そうだと思うた」

するとユニ君も少しだけ面白そうに笑い、そう言った。

「此処がギルドよ」

「ああ、此処がそうなんだ。ありがとう、助かりました」

ラストイシヨンの主要な場所を教えて貰ったあと、ユニ君は最後に目的地であるギルドに連れて来てくれた。ようやく目的地に着いた事でほっとする反面、此処でこの少女ともお別れかと思うと少しだけ残念に思える。女神候補生である。今回のような偶然でもなければ、早々会う機会など無いだろう。

「こっちこそ、誰かと一緒に戦えたのは新鮮だったわ。ソレに仕事も思ったより早く片付いたしね」

「役に立てたのなら、何よりだよ」

「それじゃ、ここでお別れね。……あ、少し待ってて」

そう言うと、ユニ君は一人受付に向かうと職員と何やら話をはじめた。そして何かを受け取ると此方に向かい一直線に戻って来る。

「はい、これ受け取って」

「これは？」

そう言つて、一枚のカードを渡される。

「アンタの取り分よ。ギルドからの報酬のお金は全部これに入金されるから、持っているの良いわ」

「そうなんだ。と言うか、良いのかい？」

「当たり前じゃない。それはアンタの働きへの正当な報酬よ。寧ろ受け取ってもらわないとアタシが困る」

「そっか、なら遠慮なく貰うよ。……うん、君は良い人だね」

それはこれからの生活に必須ともいえるモノであつた。どうやらギルドからの報酬は一度このカードに入金されるようで、それから各自の財布なりに移し替えるようだ。幸いな事に、これ単体でもカードとして利用できる為、異世界人の自分としては素直に有りがたかつた。

「な、別にこの位普通よ、普通!」

「ふふ、そうだね」

「ああ、もう、笑うな! それ一応使えるけど、パスとか設定されてないから受付の人に聞いてやるときなさいよ! アタシはもう行くからね!」

性格だろうか、他人に親切にするのが恥ずかしいのか、顔を真っ赤に染めながら捲し立てる。素直じゃないが面倒見の良い、そしてちよつと照れ屋な良い娘だった。

「ああ、何から何までありがとうございました。——また会えると良いな」

「ふ、ふん。縁があればまた会えるわよ。それじゃあね!」

「ああ、またね」

逃げるように去って行くユニ君の背中が見えなくなるまで見送つた後、受付に向かった。

「ユニ様のお知合いですか？」

窓口に行き、担当の女性色々と説明を受けた後、そう聞かれた。

「少しばかり縁がありました。魔物の討伐に協力させてもらいました」

入り口近くで話していただけに嫌でも聞こえたのだろう。特に隠す事でもないので、答える。

「ユニ様と。不躰で申し訳ありませんが、一つギルドのお仕事をお願いしてもよろしいですか？」

「構いませんが、なぜ？」

「口止めされたのですが、先ほどユニ様が貴方の事を腕利きと仰られていましたので。早急に処理したい仕事があるんですよ」

「あの子が……。成程、解りました。僕に出来そうな事なら、受けさせてもらいます。話を聞かせて貰っても良いですか？」

女神候補生と言うのは余程信頼されているのだろう。ユニ君が口添えしてくれただけで、向こうから仕事を回してくれた。先立つものは必要であるため、早速話を聞く事にした。

「つまり、防衛隊の人たちと一緒に魔物の討伐をすればいいんですね」

依頼の内容は魔物の討伐であった。

「はい、そうなります。ここ最近、女神さまが不在の所為か魔物たちの動きが活発でして、防衛隊の人たちだけでは手が足りないようです。協会から直接来た依頼なのですが、こなせそうな方が出払っております……」

「解りました。受けさせてもらいますね」

詳細を聞き、依頼を受注する。女性が言うには魔物の動きが活性化しているようで、討伐速度が追い付いておらず、ギルドと軍が共同で処理にあたっているようだ。幸いと言うべきか、今回は防衛隊の人と一緒に仕事であった。ユニ君にいくらか貰ったとは言え、余裕が無

い。だからこそ、受ける事にしようと言っただい。

「では、防衛隊の方に連絡を入れますので、しばらくお待ちください」  
「解りました」

そして、防衛隊の人が来るまで時間を潰す事にする。ギルドには依頼が集まるだけでは無く、様々な情報も集まっている。魔物の分布状況や、武器等の情報、中には遺跡や洞窟の情報まである。ソレをざっくりと見て、何か興味を惹かれるモノが無いかを探していく。中には防衛隊の求人募集のポスターなども目に入る。

「コレは何だろう……？」

いくつかの資料に目を通した後、ふと一つの情報に目が留まった。魔剣、である。異界の魂の能力なのか、自分は剣を上手く扱う事が出来た。だから、妙に気になってしまった。手に取る。

「命を奉げる剣、か。魔剣とかいうだけあつて、物騒だなあ」

目を通したところ、他者の命を奉げる事で強くなる魔剣が存在すると言ひ伝えられている。と言う程度の情報だった。剣を使えるようになったとはいえ、そんな物は手にしたくないと正直に思う。尤も、言ひ伝えられているだけであり、実際にあるのかは解らないが。

「君が四条君かい？」

「ええ、そうですが、貴方は？」

書類に目を通していたところで、声をかけられた。少し驚く。気付けばそれなりの時間が経っていた。防衛隊の制服を着た青年が、此方を見ていた。

「私は防衛隊の者です。今回はご協力感謝します」

「いえ、微力ながら力になれるように努めます」

「では、案内するから付いて来てもらえるかい？」

「解りました、よろしくお願いします」

青年に促され、ギルドから出る。そして、外で待っていた防衛隊のメンバーと軽い自己紹介を終えた後、指定されている場所に向かった。

「敵は、アレですか？」

リビートリゾート。ラストイションを出て、西に歩を進めた海沿いのリゾート地。今回の依頼の目的がある場所であった。一体の魔物を見据える。視線の先には、イルカのような体躯を持つ魚が、宙に浮き宙を泳いでいた。ソレを見たまま、防衛隊の班長をしている青年に尋ねる。

「ああ、そうなるよ。シーハンターと呼ばれている危険種なんだ。本来ならばこの人数で倒すのは難しい相手になるかな」

「余程人が足りていないんですね」

班長の言葉に他のメンバーを見ながら言う。自分を含めると、四人が今回の作戦の総数であった。道中で聞いたのだが、通常シーハンターを相手にするには防衛隊だけで戦う場合は十人程度で仕掛けると聞いていた。今回の作戦は、数において半数にも満たなかった。

「お恥ずかしながら、ね。だから、ユニ様が太鼓判を押したと言うその腕、期待しているよ」

「期待に応えられるように善処させてもらいます」

担当の人がしゃべったのか、ユニ君と一緒に戦った事がある事を皆知っていた。その所為か妙に期待されてしまい、少しばかり居心地が悪く感じた。過剰な期待には慣れてなかったからだ。

「では、私たちがまず銃で仕掛ける。向かって来たら、散開して囲むと言う形で良いか？」

「大丈夫です。けど、少しだけ仕掛けるのを待ってまらえますか？」

大まかな作戦が決まったところで、班長は僕に訪ねてきた。元々決まっていたのか、他のメンバーは何も言わず成り行きを見守っている。作戦には特に意見が無いために承するが、少しばかりやりたいことがあったため、時間を貰う事にする。と言っても、直ぐに終わる事だ。

「構わないが、どうかしたのかい？」

「少し試したい事があります。すぐ終わります」

「解った」

「では、」

班長の許しが出たので、長釣丸を鞘から抜き放つ。右手を軽く前に出し、刃が体に水平になるように持っていき、その刃に左手を軽く添え目を閉じる。自分の中で眠っていた力。異界の魂として呼ばれたことで目覚めたソレを、ゆっくりと解き放つ。頭の中で知らない筈の術式が思い浮かび、ソレをゆっくりと起動していく。知らない筈の言葉。知らない筈の呪。それが今、頭の中に浮かびあがり、言葉としてその形を紡いでいく。気付けば、身体が青白い光に包まれているのが解つた。何度目かのできると言う感覚。ソレに抗う事無く身を任せ、ゆっくりと告げる。

—— エクス・コマンド

それは、本来蘇る筈の無い力。魔術、或いは魔法。異界より誘われた魂が、かつて人が持っていた力を呼び戻す。異界の魂が世界を超える過程で得る力。正確に言うならば思い出す力。人の持つ魔力を開放した。

「凄い……。力が溢れてくる」

「身体が、軽い！」

「いける、これなら、いけるぞー！」

瞳を開けると、淡い光を纏った防衛隊のメンバーたちが若干興奮気味に言っていた。

「これは、魔法かい？」

班長が尋ねてくる。魔法。それは、元々持っているが眠ったままになる筈の力だった。

「そうなります」

「剣が凄いとは聞いていたけど、魔法も使えるとは。四条君、防衛隊に入らないかい？」

「考えておきますよ。さて、行きませうか」

長釣丸を構え、シーハンターを見据えつつ促す。

「ああ、戦闘開始だー！」

班長がそう告げた後、銃声が鳴り響く。こちらに気付いたシーハンターが、一直線に向かってくる。



ソレを見て取り囲むように散開し、各々の持つ武器を構え襲い掛かった。

この日、防衛隊のシーハンター討伐最少人数が更新された。

## 4話 お仕事

「ねえ、ケイ。ちよつと良い?」

「改まって何だいユニ」

「組んでみたい人がいるんだけど、ダメかな?」

ラスティションの教会。女神候補生であるユニは、ラスティションの教祖である神宮寺ケイに尋ねた。

「へえ、君が誰かと組みたいと言うとは以外だね。相手は誰だい?」

「防衛隊の人か?」

「ギルドの人」

「ふむ。名前は?」

「四条優一って奴」

そんなユニの申し出に、ケイは僅かばかりに驚きつつ、促す。教祖であるケイから見ても、ユニと言う女神候補生の少女は優秀である。姉である女神、ノワールと比べてしまえば流石に見劣りしてしまう部分はあがあるが、それでも全体的に隙が無くどんなことでもそつなくこなす少女であった。それ故、他者の助力を得ずとも大抵の事を自分でできてしまう為、これまで誰かの力を借りたいなどと言う事はなかったのだが、どういう心境の変化があったのだろうか、と思う。そう思うようになった経緯までは解らないが、どちらかと言えば好ましい変化と思える。

「聞かない名前だね。なんでまた、急に?」

「この前行った討伐で少し、ね。そんな事より良いの? 駄目なの?」

「教祖としては、簡単に承認する訳には行かないね。良く知らない人物なら尚更だ」

「う、やっぱり」

とは言え、ケイもラスティションの教祖だ。女神不在の今、唯一の女神候補生を得体の知らない人物と組ませる事に簡単に頷く事は出来なかった。ラスティションの女神、ノワールに何かあった時、ユニがラスティションを背負って立たなければいけないからだ。

そんなケイの反応を予想していたのか、ユニは少し残念そうにする

も、あっさりと引き下がった。最初から無理だと思っていたのだろう。

「とは言え、ユニの言葉を無碍にする訳にもいかないか」

「え……？」

話は終わりだと去ろうとするユニに、ケイはそう言葉を続けた。話自体は、ケイとしても完全に駄目だと思っただけでは無かったからだ。予想外なケイの言葉に、ユニは一瞬呆けたような声を零す。

「ふふ、解らないなら調べればいいって事だよ。ユニから男の人の名前を聞くとは思わなかったからね。僕の知らないうちに成長しているんだね」

「ちよ、なんか変な勘違いしてない!？」

ケイはふんわりと笑い、そう付け足す。ユニがまた一つ成長するかもしれない。そう考えれば、少しぐらい時間を割いても構わないか。ラストイションの教祖はそんな事を考えつつも、表情には出さずただ笑みを深める。そんなケイに、ユニは少し頬を赤くしながら詰め寄っていく。ラストイションの教会には珍しく、騒がしくなっていた。

「おーい四条、見つかったぜ」

動かしていた手を止め、名前を呼ばれた声に振り返る。長い時間を地面相手に中腰で探し物をしていた為、立ち上がり際に一伸びすると少しばかり心地が良かった。一呼吸着いたのちに、僕の名前を呼んだ相手に視線を向ける。身の丈程ある大きな剣を腰に携えた男性が此方に向けて笑みを浮かべていた。

天宮リント。それが彼の名で、今回の討伐兼採取の依頼で手を組んだ相手であった。

既に僕がラストイションに住み始めて数週間が経ち、何度か組んだ相手である。彼は長くラストイションを拠点にしているようで、ギルドの仕事に関しても僕等よりも遥かに先輩であり、良い相談役になってくれる。ユニ君と別れてどうなる事かと思っただが、リントさんと知り合えたことで、何とか人並みに暮らす事が出来ていた。

「ああ、漸く見つかりましたか。思ったより時間がかかっちゃいましたね」

辺りの魔物を散らした後に探し物をしていたのだが、なかなか見つからず思いのほか時間がかかってしまっていた。討伐自体も中々骨の折れる仕事であるため、その後目的のものを探すというのは大変であった。流石に報酬がそれなりの額あるだけあって、少しばかり疲れていた。思わず、ふうつとため息が零れる

「だな。だがこれで依頼は完了だ。ささ、物も見つかった事だしとつとと帰って報告するか」

「ですね。確か、宝玉って言いましたね、ソレ」

リントさんの持つ素材を見詰め見詰め尋ねる。何でも市場には滅多に出回らない代物で、かなりの価値があるアイテムの様だ。玉と言うだけあって、丸い形をした石なのだが、どこか不思議な力を感じる。

今回の依頼はラステイションの協会からのモノであり、何に使うかまでは知らされていないのだが、モノがモノだけに、何か凄いモノを作ったりするのかと勘ぐってしまうのも仕方が無いだろう。

「ああ、まったくこんなものを何に使うんだらうな。まあ、俺としては悪事にさえ使わないなら、なんだって良いんだけどな」

「そうですね。でも、どうせなら人の役に立つ事に使ってくれれば嬉しいかな」

「まったくくだ。それなら、プラネテューヌまで来た甲斐があるってもんだな」

互いに笑みを零しつつ、言い合う。現在地は、バーチャフォレストと言う森の奥深くだった。普段生活の拠点としているラステイションから離れ、その西に位置した国であるプラネテューヌと言う国に來ていた。ラステイションは産業の中心であり、工業地帯と言う事もありあまり多くの緑が見れる事は無いが、プラネテューヌはラステイションと比べると、緑豊かな国と言う印象を受ける。無論、ラステイションに緑が無いと言う訳では無いのだが、広大な都市部の印象が強いせいかな、どうしても自然が少ないと感じてしまう。

都市と言う点ではプラネテューヌも負けてはいないのだが、国全体

的に見るとラステイションと比べると、自然豊かな国だと感じた。

「しかし、今回は汚染された奴が妙に多かつたな」

来た道に戻りながら、リントさんが思い出したかのように零す。汚染された奴と言うのは、簡単に言えば凶暴化した敵の事になる。言われてみれば、妙に多かつた気がしないでもない。目にする魔物数体に一体は汚染されていたように思える。……良く考えるとこれは相当多いのではないのだろうか？

ゲームギョウ界と言うのは、四人の女神が存在しており、その女神を信仰する事で女神の力が強まり国を治める女神の力によってより国が豊かになると言う仕組みのだが、現在は四人の女神の他にもう一つ信仰される組織があった。犯罪組織マジエコンヌと呼ばれる組織である。

マジエコンヌと言うのは、犯罪神と言う神を崇める組織であり、大雑把に言うとな女神に対して敵対している組織であった。そして、驚く事にその組織は、国を統治する女神たちよりも遥かに人々の支持を集めていた。

で、魔物と言うのは、女神以外が多く支持されていると凶暴化するようで、その影響が世界の各地で現れていると言うのが、実際にゲームギョウ界に住んで得た知識であった。

「犯罪組織の力が強くなっていくんでしょうね。女神候補生には頑張って貰いたいところですね」

「ああ。だけど、俺たちがこうやって地道にラステイションの名前を背負いながら仕事をこなす事でも、少しは力になる事が出来るんだぜ」

「成程。良い仕事をすれば、ラステイションのギルドの株が上がり、最終的には女神の名が売れると言う訳ですか。広告ってわけですね」

「そう言うことだ。直接は無理でも、俺たちも女神さまの力になれるんだ。悪い気はしないだろう？」

「ふふ、そうですね。自分たちでも役に立てると思うと、嬉しいですよ」

そう考えてみると、確かに自分も女神候補生の力になれている。そ

う考えると何処か誇らしく感じた。ぼんやりと、以前に知り合った女神候補生の女の子の顔を思い出す。ギルドで別れてからそれつきりだが、無理をしていないだろうか。そんな事を心配してしまう。優秀な子であるのだが、何処か放って置けない女の子だった。

「んじや、サツサと帰りますか」

「ええ、行きましょう」

あの子は今日も頑張っているのだろうか。そんな事を思いながら、帰路についた。

「やあ、四条君。少し良いかい?」

「おや、班長さん。お久しぶりです」

宝玉をギルドの届けて数日後、新しい仕事が無いかとギルドで情報を見ていたところで、声を掛けられた。相手は防衛隊の班長さんで、シーハンターと戦った時にお世話になった人であった。あの一件以来妙に目をつけられてしまったのか、三回ほど名指しで仕事をお願いされたことがあり、既に顔見知りと言っても差支えが無い程度には仲良くなれていた。こう考えてみると、最初に出会ったユニ君と言い、一緒に組む事が多いリントさんと言い、人との縁には恵まれているのかもしれない。

「実は、今回もお願いしたい仕事があるんだ」

「解りました、聞かせてもらいます」

「ああ、ありがとう。今回は、協会の教祖様直々の話でね。腕利きを探していたんだ」

「教祖様、ですか。なんか、凄いとところからの話ですね」

班長さんの言葉を聞き、少しばかり驚く。教祖と言うのは女神に直接仕え、その補佐をするのが仕事である。いわば秘書であり、ラストイションに居る人間としては最も力を持つ人物であった。現在女神が不在であるようなので、実質国のトップからの依頼と言える。

そんな人物からの依頼を、こう言っては失礼だが、防衛隊の班長が持つてくると言うのはどう考えてもおかしい事だと思う。思うのだ

が、班長さんとは何度か一緒に仕事をしている為、嘘を言うのは勿論、悪い人だとも思えなかった。その為話を聞いてみる事にする。

「ああ、まあ、何度かあげてる報告書に君の事を書いていたのが目に留まったんじゃないかな。実際、戦闘に関していうなら君は大したものだよ。人の上に立つ勉強さえしたら、部隊長になるくらいは簡単なんじゃないか？」

「流石に持ち上げすぎですよ。剣も魔法も、自分にできる事を頑張つてやってるだけですって」

「いやいや、そんなことは無いさ。実際に君の実力を見た後だと、謙遜としか思えないよ」

思わぬところで持ち上げられ、少しばかり返事に窮す。実際のところ、班長さんが言うように自分の用いる剣技は洗練されている。だが、それは僕自身の経験に裏打ちされた力では無かった。僕の使う剣技と言うのは、剣に宿った持ち主たちの記憶を自身の中で再生し、再現しているに過ぎない。言うならば、模倣である。僕の使う剣技と言うのは、そう言うものなのだ。

だからこそ、あまり人に誇つたりするものでは無いと思う。借りモノの力。借りモノの記憶。それが、自身を支える土台となっている。過去の使い手たちの遺業が無ければ、僕だけではきつと満足に戦えないだろう。自身の力だけで戦えるようになった時、はじめて胸を張れる。

だから、持ち上げられた事に困ってしまう。何というか、親に手伝ってもらった宿題を先生に絶賛される感覚。決まりが悪いと言いか、ずるをしているようで心中穏やかでは無い。

「それでも僕自身は、全然ですよ。もっと強くならないとっていつも思います」

「ふむ、向上心があるのは良い事だが、君はもう少し自信を持つと良いかもしれないね」

「何れは、胸を張れるような人間になりたいですよ」

班長さんに言ったように、今の僕はまだまだ弱い。こと剣に関していえば特別な力を得ているが、それだけなのだと思う。リントさんや

目の前の班長さんたちに比べれば、自分自身の経験と言う点で完全に劣っていた。

ならば、自分はこれから色々な経験をしていけば良いだけだろう。無いならば手にすれば良いだけなんだから。勿論、口で言うほど簡単な事では無いだろうけど、目標があるとと言うだけでも意識が変わってくる。何よりも、自分の知らない事を知るのは、単純に楽しかった。「っと、話が逸れてしまいましたね。本題に戻りましょうか？」

気付けば脱線してしまっていた為、軌道修正を図る。

「そうだった、すまないね。今回の仕事と言うのは、前回協会からの依頼を受けてくれたようだけど、ソレと同じく素材の収集と言う事になる」

「また、レア素材ですか？ 一人で他国まで行けとかいう話なら、遠慮したいですが」

いくら少しは慣れてきたとはいえ、流石に一人で他国に行く度胸は無かった。他国と言っても、チキユウで例えて言うならば他県に行くような感じだったが。リントさんと二人で行った時に要領はある程度分かったけど、流石にまだ無理だと思う。ラステイションの中でも結構わからないのに、他所とか行ける訳が無い。

「その点に関しては大丈夫だよ。目的のモノは、ラステイション国内にある」

「なら、場所に関しては大丈夫そうですね」

「ただ一つ問題があつてね」

「問題？」

「ああ、面倒な相手が落とす素材でね。並の隊員じゃ相手にならないんだ」

「成程」

班長さんの言葉にとりあえずは頷く。少しばかり気になる事があるけど、とりあえずは置いておく。

「つまり、僕にそいつを討伐して来いと言う事ですか？」

「ああ。ただ、独りでと言う訳では無いよ。こちらが指定する人と一緒に行って協力して仕事にあたってほしい」



「む、僕としては構いませんが。相手の人は了承してくれているんですか？」

僕の方は協力するのは全然かまわないのだけど、相手さんが嫌がったら目も当てられない。

「その点については、大丈夫だよ。君も知っている人が、パートナーだからね」

「知っている人？ ……ギルドの天宮さんですか？」

最初に出てきた名前がリントさんだった。ギルドの仕事で一番多く組んだ人で、尊敬できる先輩と言っても良い人だった。

「いやいや、違うよ。ギルド所属の人じゃないさ」

「ん？ なら誰だろう」

首をかしげる。ギルド関係では無い人と言うと、正直思い当たらない。正確に言う一人だけいるのだけど、無いだろうと選択肢から除外していた。

「言っただろ、ラステイションの協会からの、それも教祖様直々の依頼だって」

「……ああ、そういう事ですか。正直予想外な相手なモノでして、咄嗟に思いつきませんでしたよ」

班長さんがそこまで言ったところで、誰の事か思い当った。教会の教祖からの依頼。女神不在の中で態々僕なんかを選んだ理由は解らないが、教祖自ら動くほどの仕事。状況から考えるに、女神関連の仕事ではないかと思ひ浮かんだ。そう考えると、一緒に仕事をする人物の顔も思い当たる。

「ラステイションの女神候補生、ですか？」

「ご明察。ユニ様直々の指名でもあるから頑張ってくれよ」

少しばかり意外だったけど、またあの子に会えると思うと少しだけ嬉しく感じた。以前はお世話になりっぱなしだったから、次に会う時は何かしてあげられたらと思っていたところだった。思わぬところで縁とは繋がるものだ実感する。

「あの子からの頼みと言うのなら、断る理由がありませんね」

「なら、引き受けてくれるのかい？」

「ええ、お受けいたします」

断る理由はない。だから僕は、今回の依頼を受ける事にした。

「此処でしばらく待っていてもらえるかな？」

「解りました」

依頼を受けた後、防衛隊の詰所に案内され待合室へと通され、一人になる。備え付けの椅子に腰を下ろし、手にする長釣丸をぼんやりと見つめる。端的に言って、手持無沙汰だった。長刀を腕の中で転がしながら、外の風景を眺める。発展しているラステイシヨンの町並みは、摩天楼と言うに相応しい高層ビルの群れであり、その下を歩く人たちがたくさん見て取れる。自分の過ごしていたチキユウの都市と比べても近未来的で、見知らぬ機械等が見て取れる。

今頃班長さんはラステイシヨンの教祖に連絡をしているのかな、などと考えながら人の営みに視線を向ける。足早に通り過ぎていく人たちばかりだが、その人たちにもいろいろな人がいる。きつちりとしたスーツを着ている人、おしゃれな服を着崩し仲間たちとだべりながら歩く若者、仲睦まじげに歩く老夫婦に、皮の鎧を着こんだ騎士風の男性など、様々だった。

「生きるっていうのは、面白いなあ」

様々な人がいる。ソレを見ていてだけで面白い。一度は目を諦めたからか、余計にそう思う。

「アタシからしたら、アンタの発言がおもしろいわよ」

「……手厳しいね。それはそうと、お久しぶりだねユニ君」

思わず聞こえた女の子の声に、少しだけ驚きながら答える。気付けば、黒の妹であり女神候補生のユニ君が此方をじっと見ていた。思っていたよりも遙かにはやい。独り言を聞かれたのが少しだけ恥ずかしかったりするが、それ以上に純粹に嬉しかった。

「うん。あれからもう一月ぐらい？」

「そうだね。なんだかんだ言っつて、それなりに上手くやれてるかな。思い返すと、最初にユニ君に色々お世話になったのが大きいかな。凄

く感謝してます。ありがとう」

「ちよ、頭下げないでよ。べ、別にアンタの為にしたわけじゃないんだから！ 前も言ったけど、正当な対価よ、対価！」

感謝の言葉にユニ君は恥ずかしそうに目を反らしながら言う。相変わらず素直じゃないようで、そんな姿が微笑ましい。年相応で可愛らしいなど、温かい気持ちにさせられる。

「ふふ、そういえばそうだったね」

「だから、笑うなって！」

頬を上気させ捲し立てるユニ君。しかし、なんでこの子はこんなに照れ屋なんだろう。他人に優しいのは別に恥ずかしがることでは無いと思うのだけど、女の子特有の葛藤でもあるのだろうか。

「まあ、ユニ君にまた会えてよかったよ」

「……あ、アタシに会えてそんなに良かったの？」

少し不思議そうに聞くユニ君。

「うん。お礼もまともにできてないからね」

「べ、別に、お礼なんていらないわよ」

「まあ、その話はまた今度するよ。今日はお仕事の話を良いかな？」

ユニ君といろいろ話したいのはやまやまだけど、そうするといつまでも話が進みそうにないので軌道を修正する。別に話すのは移動中にでもすればいい。

「つと、そうだった。今回アンタに手伝ってもらいたいのは、血晶の入手よ」

「血晶？」

「ええ。セプトントリゾートにいる魔物が持っているものなの。これが資料よ」

「成程」

そう言い、詳細の書かれた資料を渡される。戦う魔物の種類、傾向、注意すべき特徴などが書いてある。テコンキャット。それが今回討伐する相手だった。それ以外にも付近に現れる可能性がある魔物や危険種の情報が書かれている。一通り目を通す。

「行けぬ？」

「大丈夫だけど、聞いていいかな？」

「何？」

資料から目を離し、ユニ君に尋ねる。どうにも、気になったことがあったから。

「正直、今回の依頼って僕必要ないんじゃないかな？」

率直に言った。ユニ君の実力は自分の目で見た以外にも、街の人たちや防衛隊の人、ギルドの人たちから聞いていた。彼女の實力から、余程の事が無い限り一人でも問題が無いように思えた。

「そう、ね。確かにアタシ一人でもできると思うわ。けど」

「けど？」

「そ、その。……だから。アタシは誰かと組む事なんてなかったから、良い機会かと思ったの」

恥ずかしそうに零すユニ君。声が小さすぎて一部聞き取れない言葉もあったけど、大体理解はできた。

「そっか。前言ったこと覚えていてくれたんだね」

そう思うと、嬉しくなる。無理だと思っていたから、尚更だった。

「ふ、ふん。嬉しそうな顔しちゃって。アタシと組めること、光栄に思いなさいよ」

「うん、ありがとう」

そんなユニ君の言葉に素直に礼を言う。ユニ君が素直じゃない事は解っていた。ならば、僕が彼女の分まで素直になれば釣り合いが取れると思う。

「うう、なんか調子が狂うな」

「ふふ、よろしくお願ひします」

笑みと共に告げる。

「……うん。よろしく」

そうするとユニ君は、困り半分恥ずかしさ半分と言った感じで頷いた。

## 5話 二人の女神候補生

——なんでアンタがここにいるの!? お姉ちゃんじゃなくて、アンタが、アンタ何かが何でここにいるのよ!?

——アタシだったら助けられたかもしれない。ついて行ったのがアンタなんかじゃなくて……、アタシだったら!

——うるさい! 話しかけないで。二度と、アタシに話しかけないでよ!

「そりゃ君が悪いよ。相手の子だって、見捨てたくて助けなかった訳じゃないんだろ? なら、間違いなく言い過ぎだと思おうよ」

「そう、だよね……」

「なら、次に会った時には何をすればいいか。解るよね?」

「それは……」

ユニ君の言葉を聞き、率直に意見を出す。ソレを聞いた目の前の女の子は、少しだけ落ち込んだように頷く。

ラストイションの教祖直々の依頼。ソレを受け、目的地に移動している最中にユニ君の話を聞いていた。それは、ごく最近の出来事だった。ユニ君と同じ女神候補生の女の子に出会った時の話である。

女神たちの不在。その事実は知っていたが、その事情により踏み込んだ話だった。ユニ君が言うには、三年前の話である。四人の女神たちは協力して犯罪組織と戦い、敗れた。そして、その所在を消した。その時に女神候補生でただ一人、女神と共に戦い姿を消した人物がいた。それが、ユニ君が出会ったと言う女神候補生だった。

後に協会が調べたところ、女神たちはギョウカイ墓場と言う特殊な場所に囚われていると言う事が判明し、丁度ひと月ほど前に救出作戦が行われ、女神候補生だけが助け出されたようであった。女神では無く、女神候補生。それでも助け出せたことには違いない。それ自体は喜ぶべき事だと思う。

だけど、ユニ君はそう思えなかった。ただ一人の姉では無く、自分と同じ候補生。他の女神だったならばまだ可能性はある。だけど、自

分と同じ候補生でしかない。女神が四人いても勝てなかった相手。ソレに女神抜きで挑まなければいけない。そんな想いが抑えきれなかったのだろう。ユニ君は女神候補生の子に酷い言葉を浴びせてしまったと、僕に告白してきた。

ユニ君の気持ちは話を聞き、想像する事が出来た。だからこそ、戒める。多分、それを彼女が望んでいるような気がしたから。自分でも解っていると思う。だけど、他人の口から聞く事で刻みつけようとしていると言うのが、なんとなくわかった。

「ユニ君だって、解ってるよね。態々僕にそんな話をしてしまうほど、気にしている訳だからさ」

「べ、別に気になんかしてないわよ。ネプギアに言いすぎちゃったなんて、これっぽっちも思っていないんだから」

「ユニ君は、素直じゃないのに解り易いよね。寧ろ、素直じゃないから解り易いのかな」

「うぐ……」

余り説教するのは柄では無い。何よりもユニ君自身がどうすれば良いのかは理解していると思う。だから、この話は掘り下げる必要は無い。少しばかり辛辣な言葉だったかもしれないけど、ユニ君の背中には推せたような気がした。

「……仲直りできるかな？」

「できるよ。自分の気持ちをしっかりと伝えたら、相手もきつと応えてくれるよ。ユニ君と同じ、女神候補生なんだからさ」

「うん」

この素直じゃない女の子が、友達と仲直りできますように。今は不在のラストেশヨンの女神に、心の中でそう願う。自分の妹の事だ、きつと何が何でも叶えてくれるだろう。そんな気がした。

何処からともなく磯の香りが届く。美しい海水浴場に建てられたリゾート地の更に奥。魔物の出現の増加により、一時的に封鎖された

区画。其処が今回の依頼の目的地であった。

「さて、ようやく見えてきたね」

「そうみたいね。あそこが、セプテンリゾートよ」

先ほどの会話以降、口数の減ったユニ君だったが、目的に近付くにつれ少しずつ調子を取り戻してきていた。まだ少し表情は硬いけど、少し時間が経ったおかげかある程度持ち直してきているように思える。とは言え、少し沈んだ表情をしているのは確かなので、僅かばかり心が痛む。案外自分もメンタルが弱いんだな、等と再確認でき思わず苦笑いが零れる。

「っと、テコンキヤットは何処かしら」

「見当たらないね。手分けして探してみる？」

とは言え、目的地に着いた以上何時までものんびりとしている訳には行かない。心地よいさざ波の音色をしばらく楽しみたいという欲求が無いでもないが、それはまた今度に取って置く事にする。

「そうした方が効率はいいけど、連絡手段が無いよね」

「言われてみればそうだね。空に合図を出すって言う事も出来ないでは無いけど、絶対相手にもばれるだろうしだめかなあ」

「へえ、アンタってそんな事もできるんだ。アタシなら照明弾撃つならなんなり方法があるけど、ちよつと意外かな」

「まあ、ね。ちよつと便利な力が使えるんだよ」

本来眠ったままになっている力が異界の魂としての特性で蘇っていた。魔法。お伽噺の世界の力を、自分は使えるようになっていた。自由自在と言うほど使える訳では無いのだけど、このひと月でそれなりに物になつてきていた。簡単に言えば、魔法剣士っていうヤツだろう。ものすごく今更なんだけど、自分の存在がかなりファンタジーに染まってきているなあど、しみじみと実感する。やろうと思えば風とか雷とか出せる。流石にもう慣れたのだけど、初めて出した時はかなり高揚した。初めてつかった魔法の身体強化などより、何と云うか、実感がしやすかったからだ。それだけ目に映ると言うのは、偉大だった。

「とは言え、今回はあんまり散る意味も無いか」

「そうね。別に一人でも大丈夫だけど、それじゃ組んだ意味もあんまりないからね」

「ぶっちゃけ僕いなくても何とでもなるだろうしね」

「むー、なんか棘を感じるんだけど」

「あはは」

「笑って、誤魔化すな！」

あははと笑う僕に、ユニ君は少し怒ったように応じた。勿論、本気で怒っているわけではない。言うならば、じゃれあいみたいなものだった。頬を僅かに膨らませ、少しばかり不機嫌ですと言う表情を浮かべているが、さつきみたい沈んでいるよりかは遥かに良い。そう思うと、また笑みが零れた。

「そう言えばさ、アンタってずっと武器持っているよね。片付けたりしないの?」

「ああ、あの粒子になって出たり消したりするやつ?」

「そう。全員が全員ってわけじゃないけど、大抵の人は普段消してるのに、アンタはずっと持つてるよね。と言うか、消してるとこ見た事ない」

結局二人纏まったまま、目的の敵を探している時に、ふと気付いたようにユニ君は言った。

「僕はずっと持ったままかな。と言うよりは、この武器は消せないんだよ。何と言うのかな、文字通りの規格が違う?」

「そうなの? まあ、全部が全部消せる訳でも無いけど、結構珍しいのね。店で買える物は大抵消せるから少し意外かも」

「……僕としては、消せる方がびっくりだよ。実際目で見ても、イマイチ実感がわかない」

ユニ君が言うように、この世界の武器等一部の物質は消したり出したりできる。はつきり言って理屈はまるで分らないのだけど、そういう技術何だろうと大雑把に理解していた。ちなみに僕の持つ武器である、長刀の長釣丸にはこの機能は無かったりする。だから、基本的に常時実体化したまま持ち歩いてた。初めて武器を出し入れする



ところを見た時には驚いたし羨ましいとも思ったけど、無いものは無いから仕方が無い。そもそも、僕が見た記憶から考えれば、長釣丸にはそんな機能がつくはずがないのだ。さっきも言ったけど、武器としての規格が違った。

「けど、不便じゃない?」

「特にそうは思わないかな。多少は気を使うけど、利点もあるよ。夕イムラグが少なかったり、持っているだけで結構鍛えられる」

「あ、そっか。ずっと持つてるわけだし、直ぐに使えるか……」

ユニ君は小さく頷く。些細な事でも吸収する辺り、勉強熱心なんだろうと感心する。優秀な女神である姉に追い付きたいと言っていたのは、本当なんだろうなと、その姿を見て思う。

「君は勉強熱心だね。凄いなあ」

「はあ? い、いきなりどうしたのよ。急に褒めたって何にも出ないわよ」

「いや、そういうのは期待してないよ。単純に、ユニ君は凄いなって思っただけ。というか、実際今も仕事を頑張ってるしさ普通に尊敬できるとよ」

「ちよ、ちよつとやめてよ。……もしかして何か企んでるんじゃないでしょうね!?!」

そう言い少し赤くなるユニ君。相変わらず褒められ慣れていないんだなっと思うと、この反応は可愛らしく思う。照れ隠しに怒ったように捲し立てる様が、何とも微笑ましい。

「ふふ、ごめんね。そんなに警戒しなくても何も企んでないから大丈夫だよ」

「どうだか。またにやにや笑ってるし」

「あらら、手厳しい。嫌われちゃったかな」

取り付く島の無いユニ君の様子に、そう口にする。

「え、いや、そんな事は無いけど……」

すると、少し焦ったように零す。勿論、本気でそう思ったわけでは無い。ユニ君らしい反応に、この子は素直じゃないからこそ、解り易い良い子なんだななどと思う。

「つと、アレかな？」

「え？ ……あ、ホントだ居た！」

ツンツン少女との会話を楽しみながら目的の魔物を探していると、漸く目と鼻の先に標的が現れる。と言ってもそれなりに距離はあるが、十分に視認できる距離であった。小動物が兜の様なものをかぶった魔物。鋭い爪で繰り出す攻撃が危険である。目的の魔物、テコンキヤットだった。

「仕掛けるかい？」

「流石にこの距離はまだ遠いと思う。逃がすかもしれないから、もう少し近付きましょう」

「ん、了解」

ユニ君と短く相談し方針を確認したと、腰に携えていた長釣丸を手にする。左手に鞘を持ち、何時でも抜き放てる状態のままユニ君と近付いていく。幾つかの障害物の陰に隠れ、ゆっくりと距離を詰める。

「まだ、気付かれて無いみたいね」

「そろそろかな。次で仕掛けようか」

「ええ、そうね」

相手の数は5体ほど。二人でも充分に相手に出来る数だ。ソレを確認した後、ユニ君と軽く呼吸を合わせる。

「じゃあ、3・2・1で行くわよ」

「ん、了解」

そう言い、ユニ君が小さな声でカウントする。一度小さく深呼吸をし、壁越しにテコンキヤットを見据える。ゆっくりと、長釣丸を抜き放つ。そして――

「あれ、ユニちゃん!？」

「やるわよ、ユウ——って、ネプギア!？」

仕掛ける。そう思い躍り出ようとした瞬間、背後から声が聞こえた。その声に、ユニ君は素っ頓狂な声をあげる。仕切り直しかな、っと思いつながら半ば動き出しかけた体を無理やり踏みとどまらせ、声の方に視線を向ける。其処には四人の女の子が立っていた。真ん中の

薄い董色の髪をした女の子がこちら、と言うかユニ君を指さし声を上げている。

「あー!! やっぱりユニちゃんだ! ユニちゃんだ、ユニちゃんだ、また会えた!!」

「う、あ、な、なんでアンタが此処にいるのよ!」

どうやら、知り合いの様だ。と言うか、ユニ君が零した名前には聞き覚えがあった。喧嘩別れしたと言う女神候補生の子の名前が、確かネプギアだった筈だ。自分の記憶が正しければ喧嘩別れしたと聞いたのだが、見たところ特に怒っている様子はなく、寧ろものすごく嬉しそうだ。本当に喧嘩をしたんだろうか?

「あ、私は防衛隊の人が此処の魔物が血晶を落とすって聞いてきたんだ」

「え、アンタも血晶を?」

「そうなんだ。だからユニちゃんも協力してくれると嬉しいな」

「いや、ちよつと待ちなさい。その前にアンタに言わなきゃいけないことが……」

そう言い、ユニ君が言葉を切る。流れからしてきつと謝るんだろう。話に入るタイミングも無かったため静観していたのだが、あの捻くれたところがあるユニ君の方から謝ろうとしている。酷い事を言った手前、とても緊張しているのか耳が真っ赤に染まっていた。見た感じ結構いっぱいと言った感じだった。それでも自分が口を出す訳にもいかないので、心の中で頑張れと声援を送る。

「嬉しいな。ユニちゃんが一緒なら、きつと楽勝だよ。一緒に頑張ろう!」

「だから、ちよつと待ちなさいって言ってるでしょ!? うう……」

「ん? なに、ユニちゃん」

ネプギアさんが聞き返した事で、僅かにタイミングを逃す。ユニ君は気恥ずかしさや葛藤で既にいっぱいいっぱいだったようで、それが限界に達するのがなんとなく解った。ああ、これはダメかも……。妙な確信と共にそんな事を思った。

「もういい!! ああ、アンタには血晶は渡さないんだから! 私が手

に入れるんだから！」

「えええ!? な、なんでそんな意地悪言うの? まだ私の事、怒ってるの?」

「うるさいうるさい! 渡さないの! そう決めたの! ネプギアだけには絶対にあげないんだから!」

「そんなの酷いよ……。だったら私だって、ユニちゃんにはあげないもん。私たちが手に入れるもん!」

そう言い、二人して癩癩を起こしたかのように言い合います。一応は敵から隠れていたのだが、二人の声に気付いたテコンキヤットは此方を警戒する様に見詰めている。そんな標的の様子に気が付かないまま、二人の言い争いはエスカレートしていく。

「……どうしてそうなった」

うわあ、と思わず零す。途中までは勇気を出して頑張って謝ろうとしていたのが良く解るのだけど、何処で間違えたのか喧嘩に発展していた。

「ちよ、アンタたち敵を前にして何してるのよ。時と場合を考えなさい!」

青いコートを着て茶髪をサイドテールに結った女の子が溜息と共に零す。なんとなく、この子とは気が合う気がする。

「まだ戦っちゃダメなの?」

「だ、ダメですよ日本一さん。ギアちゃんとみんなで頑張るですよ」

青い髪をしたライダースーツのような服を着た女の子を、桃色のふんわりとした髪の大らかそうな女の子が窘める。ネプギアさんの仲間なのだろう。態度の差はあれ、全員がネプギアさんを見ていた。

「えーと、はじめまして。貴女たちは、ラストেশヨンの女神候補生の知り合いですか?」

「そうだけど、貴方は?」

言い合いをする女神候補生二人をよそに、青いコートの女の子に挨拶をする。パツと見た感じだが、この子と話すのが一番話が早くて済むような気がしたからだ。警戒こそしているが、一応は此方の言葉を聞いてくれるようだった。

「僕は、今回あの子と組む事になった四条優一と言います。……何と  
いうか、すみません」

「成程。私はアイエフって言うわ。と言うか、こっちこそうちの連れ  
が迷惑かけてるみたいで、ごめんなさい」

「いや、元はと言えばユニ君が酷い事を言ったのが原因らしいからね。  
うちのパートナーがごめんなさい。はあ……」

「そうだとしても、あの子も女神候補生だと言うのに、妙に子供っぽい  
ところがあつて。うちのネプギアの方こそすみません。はあ……」

言い争う二人を見て思わず二人したため息が出る。ユニ君はユニ  
君なりに頑張ったことは良く解るんだけど、目の前で言い争う二人を  
見るに、擁護のしようが無かった。アイエフと名乗った女の子も僕と  
は違う意味で溜息を吐いている。ネプギアさんの事は良く知らない  
けど、向こうは向こうで苦労しているんだと思うと、妙に親近感がわ  
いた。波長が合うのだろうか？

「な、なによ。そっちがその気ならあたしにも考えがあるんだからね  
！」

「私だって、ユニちゃんには負けられないもん！」

「ふ、ふん。口でなら何だって言えるわよ。実力で示しなさい！」

「確かにユニちゃんは凄いけど……、私だって頑張ってるんだから簡  
単に負けないよ」

少し目を離れたところで、なんかもう駄目な方向に話が加速してい  
た。今回の依頼って何だったっけと思わなくもない。素直じゃない  
のも行き過ぎるとこんな弊害が出るのかとつい感心してしまう。

「止めた方が良いかな」

「やらせましょ。今止めたところで不完全燃焼になるだけだし、いつ  
その事気が済むまでやりたいようにやらせた方が二人の為になるわ」

アイエフさんの言う事にも一理ある。お互い思いの内を吐き出さ  
せることが必要なのかもしれない。

「あいちゃん、あいちゃん」

「なにこんぱ」

「あいちゃんばっかり話してないで、私たちにも挨拶させてほしいで

す」

「そーだよ、アタシにもヒーローらしく名乗らせてよ!」

「いや、別にヒーローらしく名乗らなくてもいいんじゃない」

そんな事を話していると、桃色の髪の女の子がアイエフさんのコートの袖をくいくいと引き、此方を見つつ言った。ライダースーツの子もそれに続く。出会ったばかりだけど、個性豊かな面子だnantとその様子を見てる。面白い子たちであった。

「私は、コンパって言います。プラネテューヌの女神候補生のギアちゃん、あ、プラネテューヌの女神候補生のネプギアちゃんと一緒に旅をしているです」

桃色の髪をした女の子、コンパさんが少し間延びした独特な口調で名乗る。浮かべるほんわかとした笑顔と雰囲気の所為か、優しい人なんだと容易に想像できる。

「アタシは、日本一。ゲームギョウ界の平和を守る、ヒーローよ!」

続いてびしっとポーズをとりながら名乗りを上げたのが、青髪の女の子こと、日本一さん。元気がよく少年みtainな雰囲気を持っているが、れつきとした女の子の様だ。ボーイツシュという言葉がよく似合う、そんな子だった。

「これはご丁寧にもどうも。僕は四条優一です。一応、あそこでヒートアップしている子と組ませてもらってます」

そんな感じにコンパさんと日本一さんにも挨拶を返す。

「君たちは、ネプギアさんを含めた四人で旅を?」

「ええ、そうね。四人の女神が捕えられているから、その救出の為にゲームキャラを集めているの。それと、並行して、他の女神候補生に力を貸してくれるように頼んでいるところね」

「ゲームキャラ、ね。そっちは知らないけど、候補生の方はと言うと……」

彼女たちが旅する理由を聞き、件の候補生たちに視線を戻す。ゲームキャラと言うものについては一切力になれないけど、候補生については少しだけ力になれるかもしれないからだ。女神を救う。妙にその言葉が心に残る。なんとなく、成さなければいけない気がした。

「良い加減に譲りなさいよネプギア！」

「駄目だよ、絶対に負けないもん！」

いまだに言い争っている。

「ユニ君はさ、癩癩起こしているけど本心では協力したいと思っっているんじゃないかな」

「でもでも、ぎあちゃんの事すごく怒っているですよ？」

「いやいや、あの年頃の女の子は色々難しいからね。本音と行動が伴わないんだよ。要するに、素直じゃない」

好きな人には素直になれない。そんな心境じゃないかなつと、続ける。

「ああ、なるほど。なんとなくあの子の事解ったかもしれないわ。けど、それだと一度こじれたら、性格的に難しいんじゃない？」

「かもしれないね。けど、本心は決まってるわけだから、何れは協力してくれるはずだよ。今回無理なら、また日を改めればいいさ」

「むう、本心では仲間になりたいと思っっているなら、協力してくれたらいいのに」

「まったくだね。けど、難しい年頃なんだろうなあ」

とは言え、それだけ思える相手がいるのは喜ぶべき事では無いだろうか。言い争いつつも、何処となく嬉しそうなユニ君を見ると、そう思わずにはいられない。

「まあ、あの子たちの事は当人同士で任せておくとして」

「ええ、テコンキヤットね」

一度鞘に戻していた長釣丸を再び抜き放ちつつ、視線を戻す。すっかり警戒して此方を睨め付けているテコンキヤットを見据える。女神候補生の二人が言い争っているうちに、間合いも大きくとられている。

「一旦離れるべきか、……なに？」

どうしたものかと考えたところで、妙な力を感じた。何だろう、そう思った瞬間、テコンキヤットに異変が起きた。

「ぐあ？　ぐああああ!!」

「な、なんです、なんです!？」

唐突な咆哮。雄叫びと言うよりは、断末魔に近い。コンパさんが驚き、悲鳴を上げた。反射的に長釣丸を構えつつ、左手に力を収束させ集った魔力を包むように握りしめ、言葉を紡ぐ。

——エクス・コマンド。

それは魔力を纏う事により、身体能力を全体的に活性化させる魔法。自分が初めて使った魔法だった。全身を淡い光が優しく包み込む。

「これって、魔法？」

「わっ、凄い。力が湧いてくるよ！」

近くにいたアイエフさんと日本一さんが少し驚きながら零す。

「来る、みたいだね」

「見たいね。コンパ、其処のおバカ二人を呼んで！」

「解ったです」

五体いたテコンキャット全てが、此方に敵意を向け威嚇してきていた。先ほどまで距離を少しずつつ取っていて逃げ腰だったのだが、その態度が嘘のように爪で襲い掛かろうと距離を詰めてきていた。

気付けば、先ほどの叫び声に触発されたのか、他の魔物も少しずつ集まってきている。

「今の反応。アンタ結構戦えるんでしょ、頼りにさせてもらおうよ」

「そっちこそ、女神様救出を掲げてるんだから相当できるよね。背中  
は任せるよ」

「はっ、言ったわね。上等。背中どころか、アンタの分の見せ場も任せ  
てもらおう」

「おお、なんかヒーローっぽい事言ってる！ アタシも混ぜて！」

コンパさんが少しは慣れたところで言い合うユニ君とネプギアさんを呼びに行っているうちに、アイエフさんと日本一さんと三人で魔物と対峙する。

「先制、仕掛ける。良いかな？」

先ほどと同じように左手に力を収束しつつ、二人に訪ねる。

「任せるわ」

「おっけい！」



二人が各々の武器を構え、そう答えたところで、魔を開放する。

——天魔・轟雷

紡がれた言葉を追い越すかのように凄まじい雷鳴と轟音が鳴り響く。魔によって呼び出された雷。それが魔物に牙を剥き、戦いが始まった。

## 6話 候補生の戦い

雷光が迸り、雷鳴が轟く。戦場となったりゾート地を貫く、幾重にも枝分かれした紫電の一撃。美しい海辺にある砂浜を吹き飛ばす程の迅雷。ソレの所為で舞い上がった砂煙に備えるように、目を細める。傍らを見れば、アイエフさんがいつの間にか両手にカタールを取り出している。特徴的なのは、その形状だろうか。普通剣と言うのは、鏢に垂直に柄があるモノなのだが、この武器は平行に握りがある。よって、拳を握るのと同じ感覚で持つ事が出来、そのまま腕を突き出すだけでも武器として成立する。

一応短剣に属する為、ある程度の事は読み取る事ができた。正式名称はジャマハダルというらしい。

「やるじゃない。なら、私と日本一が出るわ。前は任せなさい」

「よし、頑張るぞー。貫くは正義、砕くは悪、つてね！ トウー！」

砂塵が薄くなつたところで、手にしていた長釣丸にカタールの腹を軽くカチンとぶつけ、アイエフさんと日本一さんが走り出す。

「ちよつと、ユウイチ。どういう状況なのよ!？」

「アイエフさん、日本一さん大丈夫ですか!?! あうう、もう始まつちやつてるよ……」

コンパさんがユニ君たちを連れて戻ってくる。

「見ての通りだよ。君たちが遊んでいる間に、テコンキャットと交戦中だね。」

「ぐ、悪かったわよ」

「まあ、反省会は後にしようか。補助魔法いるかい?」

「必要ないわ。あんな敵ぐらい、アタシ一人でも充分よ」

先の二人に掛けた補助魔法、エクス・コマンドをユニ君たちにも掛けようと思ひ尋ねたのだが、思いの外釣れない事を言われた。そのままユニ君は敵を見据えたまま、戦いやすい位置取りをするため駆けて行く。

「うーん。まさか断られるとは」

取り付く島も無く敵に向かったユニ君の背中に思わず眩く。ネプ

ギアさんと言い争っていた事で思った以上に血が上っているのかもしれない。すこし、危なっかしい。

「えっと、四条さん、私はお願いしても良いです?」

「はい。元々そのつもりでしたからね」

コンパさんが大きな注射器を取り出しつつ、お願いしてくる。小首を傾げお願いしてくる様は可愛らしいのだが、その大きすぎる注射器の存在感はそれ以上のものがあつた。左手に魔力を集中しつつ、そんな事を思う。しかし、なぜに注射器?

「あ、あの、コンパさんが言うなら、その、私もお願いしても良いでしょうか?」

「問題ないよ。一人も二人も大差ないからね。あ、僕は四条優一です。ユニ君と組ませてもらつてるよ」

コンパさんの後が続くように、おずおずと言つたのはもう一人の女神候補生のネプギアさん。流石に初対面で頼み辛いのか、若干恐る恐ると言つた具合にお願いされる。ソレに小さく笑みを浮かべ、簡単挨拶と共に応える。

「ユニちゃんとパーティーを!?! あ、私ネプギアって言います。よろしくお願ひします。」

「ん、よろしくね」

すると、少し驚いた後、嬉しそうな笑顔と共にネプギアさんが勢いよく頭を下げた。

「そっかあ。ユニちゃんにも、私にとつてのアイエフさんやコンパさんみたいに助けてくれる人が居たんだ。良かった……」

「はいです。やつぱり一人ぼっちじゃ辛いです。けど、頼れる人がいれば頑張れるです」

「はい!・うう、そう考えると、ユニちゃんも仲間になってくれたら嬉しいのにな」

心底ほつとしたと言つた感じでネプギアさんが零した。コンパさんの言葉に、笑顔で頷く。その様子を見ているだけで、良い子なんだろうなつと言うのが解つた。言葉の端々から、ユニ君の事が好きなのが感じられる。ユニ君は喧嘩して悩んでいたのだが、目の前の女の子

を見てみると、その悩みも馬鹿馬鹿しく思える。ネプギアさんの表情は、友達を心配する女の子にしか見えないのだから。こんな子と喧嘩するとは、ユニ君の素直じゃない性格も相当だと妙な感心をしてしまった。

気を取り直して左手に魔力を集中させ、言葉を紡ぐ。先ほども使った身体強化魔法。言の葉を紡ぎ、内なる力を解き放つ。

「わわ、力が溢れてくるです」

「温かい力……。あれ？ でもこの力って、どこかで感じた様な……」

再びエクス・コマンドを発動させ、ネプギアさんとコンパさんの身体能力を向上させる。コンパさんは驚き目を丸くしているが、ネプギアさんはどこか不思議をそうしていた。彼女の言葉を聞く限り、何処かで会っているのかもしれないが、勿論自分にはそんな記憶は無い。ならばどういう事なのだろうか。

「それじゃ、行こうか」

とはいえ、悠長に考えている暇も無い。促す。

「はい、よろしくお願いしますです。私、看護師をしていましたので、もし怪我をしてしまった時は直ぐに言ってくださいです」

「あ、任せてください。私も女神候補生ですから、ユニちゃんにも負けないように頑張ります！」

二人の言葉を聞き、戦いに参戦する。前方では、アイエフさんと日本一さん、そしてユニ君が既に各々の武器を使い、何体かの敵を倒し始めていた。

「これで、倒します！ 音速剣、フォーミラーエッジ！」

ネプギアさんが近くにいたテコンキヤットに向け一気に踏み込み、刃を振るう。手に持つのは、何と言うべきか、ビームサーベル。機械的な鞘から噴き出る、桃色の刀身。ネプギアさんがその手にしているのは、男の子なら大抵は知っている、アレだった。ブオンと軽快な音を鳴らし、ネプギアさんがテコンキヤットを切り伏せる。

「ふう、次は……」

「ギアちゃん危ないです！」

「わわっ!？」

一体倒した事で生まれた隙を突き、巨大な魚の骨の様な魔物が向かって行く。魔物に突進され吹き飛ばされる、そのギリギリのタイミングで、コンパさんの注射器が魔法弾を連続して放った。

「助かりました。ありがとうございます、コンパさん！」

「おお、ナイス援護」

「大した事ないです。ギアちゃんが危なかったから、身体が咄嗟に動いたんです」

助けて貰ったお礼を言うネプギアさんに、コンパさんはにっこりと微笑んだ。二人の仲の良さが感じられる。ネプギアさんのパーティーは人間関係も良好の様だ。

「さあ、頑張るです。って、きやあ!？」

気を取り直して、次の敵に向かおうとしたところで、直ぐ近くにいた青い覆面が浮いているような魔物、シーボーイが迫ってきていた。コンパさんに向かい魔法弾が放たれる。

「こら、そう言うコンパだって、油断してちゃだめよ」

「あ、あいちゃん。ありがとうございます」

魔法がぶつかると直前に、驚き尻もちをついたコンパさんの前にアイエフさんがカタールを煌めかせながら滑り込み、魔法を撃ち落とす。両の手に持つ刃に魔法が断ち切られ、粒子となって掻き消える。続けざまに、目の前にいるシーボーイを切り伏せる。

「まったくだ、ねっ！ 敵が多いとフォローが大変だ」

今度はそのアイエフさんの背後から襲い掛かろうとしていた他のシーボーイに狙いを定め、刃を振るう。白刃が弧を描きシーボーイの体を一閃し仰け反らせる。

「これも、おまけだよ」

そのまま左手に集中していた魔力を雷撃に変換し、手を振り抜く形で魔法を解き放ち追撃し、倒す。

「ありがと、貸が一つできたわね。でも」

此方を一瞥したアイエフさんがやりと笑みを向け、カタールを小

さく握り直す。

「これで貸はチャラよ」

そのまま一気に振り抜き、飛びかかってきていたテコンキヤットを撃ち落す。

「だね。これで終わりかな」

「そうみたいね」

互いに小さな笑みを浮かべ、カタールと長刀の刃をこつんとぶつけ合う。言葉通り、周りの敵は一掃していた。

「これで、ラスト!」

そんな声と共に、銃声が響き渡った。ユニ君の放った銃撃、それが最後に残ったテコンキヤットを討ち貫き、戦いが終わった。

「あ、血晶ってこれかな?」

戦いが終わり、一度全員が集合したところで、日本一さんが言った。手にしているのはこぶし台の赤い石。見た感じ、赤い色がついている以外は普通の石だけど、これも宝玉と同じときの様子にある種の力を感じた。

「ええ、それが血晶よ」

「ふうん。それが血晶なんだ。妙な力を感じるし、確かに納得」

事前に資料を見ていただろうユニ君の言葉に血晶を眺めながら頷く。

「本当、ユニちゃん!? やった、これで依頼完了だよ。ユニちゃん達を手伝ってくれたおかげだよ!」

「良かったです。これでゲームキャラさんの居場所を教えて貰えますね」

「そうね。けど、またアイツに会いに行くとすると、気が重いわ」

「そうかな? アタシは別に平気だけど」

「……」

「ユニ君?」

ユニ君が血晶であることを確認すると、ネプギアさんは嬉しそうに

笑う。皆釣られて笑みを浮かべるが、ユニ君は黙ったまま俯いていた。良く見れば、肩が少し震えている。戦っている時にも感じたけど、やはり様子がおかしい。少し心配になり声をかける。ぎりつと、歯を食いしばる音が聞こえた。

「……アンタは、アタシを信じてくれる？」

小さく絞り出すような声音で、ユニ君が言った。声が震えている。

「ん、どう言う事？」

「それは、見てくれれば解るわよ」

聞き返すが、それ以上は何も答えてくれそうになかった。

「解ったよ。君を信じる」

聞きたい事はあるけど、今のこの子の様子じゃ聞けるとは思えなかった。だから、ユニ君の言葉にただ頷く。彼女にはお世話になった。それだけで、信じるには充分だ。

「……ありがと」

小さくお礼を言った。その声音は、どこか嬉しそうにも泣きそうにも思えた。

「ねえ、ネプギア」

「なに、ユニちゃん」

ユニ君の言葉にネプギアさんは、嬉しそうな笑みを向け尋ねる。血晶が見つかり、過程はどうあれユニ君と一緒に仕事ができたのが嬉しかったと言うのが良く解る。太陽のように眩しい笑顔をユニ君に向けるネプギアさんは素直な良い子なんだろうなと思わせる。

「アタシと、血晶をかけて戦って欲しいの」

ユニ君は静かに告げる。自分はユニ君の後ろにいる為どんな表情をしているか解らないが、強張っているのは想像できた。

思いの他、提案に驚く事は無かった。何か言い出すだろうと言う事は、ユニ君の言葉から解っていた。だから、ただ事の成り行きを見守る事に専念する。

「ユニちゃん、本気なの？」

「ええ。ラステイションの女神候補生として、ネプギア、アンタと全力で戦いたい」

ユニ君の言葉からその意志を感じ取ったのか、ネプギアさんが笑みを消し真剣な表情で問い返した。

「そっか、本気なんだね」

「ちよ、ちよっと何を言ってるのよアンタたち!？」

「そ、そうですよ。お友達同士で戦う必要なんかありません」

唯領いたネプギアさんに、アイエフさんとコンパさんが声を荒げる。彼女たちの言う通り、態々二人が戦う必要は無かった。戦闘が終わった直後に聞いたのだが、彼女たちもラステイションの協会に血晶を持っていけば良いようで、依頼の系列としては同じ筋だったからだ。ユニ君は元々ラステイションの女神候補生なので、自身の仕事をこなしているだけなため、ネプギアさん達と一緒に提出したところで元々報酬がある訳でも無いので変わらないのだ。だからこそ、ユニ君とネプギアさんが戦う意味はあまりない。どちらにしろ、ラステイションとしては仕事が完了する。

厳密に言えば僕の方の依頼は失敗になるかもしれないため、僕が報酬を貰えないと言う事態になる可能性はあるけど、元々ユニ君の頼みごとという気持ちでいたため、別に報酬が無くとも構わなかった。

「えー、別に戦っても良いと思うけどな。ライバル同士の戦いとか、燃えるじゃん!」

「日本一、話がややこしくなるからアンタは少し黙ってなさい」

目を輝かせて言う日本一さんに、アイエフさんは少し怒ったように言った。そのままこちらに視線を向ける。

「四条も黙って見てないで止めなさい。態々今更戦う意味が無いわよ」

「……アンタもそう思うの?」

アイエフさんの言葉のあと、ユニ君は此方に振り向いて言う。自分の答えは決まっていた。

「君には何か考えがあるんだろう。なら、僕はそれを信じるよ」

「……ありがとう」



そう告げると、ユニ君はひどく嬉しそうに笑い、ネプギアさんと向かい合う。

「ちよ、アンタ何油注いでるのよ」

「あはは、ごめんね。けど、僕が組んでるのはあの子だから、あの子の肩を持つのは許してほしいな」

「ああ、もう!? どいつもこいつも勝手ばかりして!」

「あ、あいちゃん、落ち着くです」

うがーつと怒り狂うアイエフさん。コンパさんが慌てて宥めにかかる。少し悪い事をしてしまった。

「ネプギア、どうなの?」

「良いよ。ユニちゃんが言うなら、戦うよ」

「そう、ありがと。けど、手加減なんかしたら許さないんだからね!」  
「ユニちゃん相手に手加減なんかできる訳ないよ。だから、全力で勝たせてもらうよ」

二人が言葉を交わし、場の空気が張りつめていく。魔力や気とは違う不思議な力、女神の力の源であるシエアの力が渦巻いているのが自分にも感じる事が出来る。単純に凄いと思った。

「言うじゃない。なら、アタシはそれ以上の強さでアンタに、ネプギアに勝つ」

「負けないよ。私はもう、負けない。だから……ユニちゃんが相手でも、勝って見せる」

二人の力が最高潮に達したとき、二人は高らかに宣言する。

「——アクセス!」

「——プロセッサユニット装着!」

瞬間、二人の姿が光に包まれる。シエアの力が辺りに吹き荒れ、その勢いに思わず目を背ける。やがて、光が収まり視界を戻したとき、それは現れていた。

「ネプギア、アタシの本気、見せてあげる」

一人は黒と銀の少女だった。言葉を聞く限り、彼女がユニ君の変身した姿なのだろう。

陽の光に照らされ、美しく輝く銀髪を両サイドでくるくると螺旋を

描くようにまとめられており、黒いボディースーツの様な露出度の高い服を身に纏っている。更に特徴的なのは、腰や肩、背中の辺りに羽を模したかのような機械の翼のようなモノが展開されている。あれが、プロセッサユニットと言うものだろうか。女神や女神候補生が女神化したときにのみ使える装備だと聞いていた。

更に両手には大きな銃。これまでユニ君が使っていたのは、ライフルのような銃であったのだが、今持っているのはそれと比べても大きすぎる。それこそSFに出てくるような、ロボットなどが持っているような物を人間台にしたようなモノであった。小さな少女には不釣り合いでありながら、異様なまでにしつくりくる。

それが、ラストেশヨンの、黒の女神候補生だった。

「私だつて手加減なんかできないよ。本気で行くよ」

黒の女神候補生と向かい合う形で現れたのは、白と桃色の少女。ユニ君と同じく、白色をしたボディースーツを身に纏い、淡く輝く桃色の髪を下ろした少女が立って居た。対面に居るのがユニ君なので、彼女がネプギアさんだった。彼女も腰や翼のような装備を展開し、その手には巨大な銃と剣が一体化したような武器を持っている。同じく、愛らしい少女が持つには不釣り合いなものであるはずなのに、ソレを持っているのが当たり前のように思えた。

「……アレが、女神か」

ソレを、自分は知っていた。異界の魂としての知識が知っていた。この世界に来て生活をする中、女神の話聞く事は何度もあった。だが、そういう次元の話では無い。言うならば、魂が何かと繋がっている感覚。そんな何とも言えない不可思議な感覚。それが、全身を駆け巡る。明確な理由は解らない。だけど、確かに女神を知っていた。

「はじめましょうか、ネプギア」

「うん。はじめようか、ユニちゃん」

二人の女神はその翼を展開し、空へと舞い上がる。互いの武器を構え、ゆっくりと睨み合う。僅かな静寂。風がふんわりと流れた。膠着。唯時だけが過ぎる。気付けば、他人たちもまた、言葉を呑み、二人に視線を集中させていた。

「異界の魂、か」

眩く。瞬間、二人の女神がぶつかり合う。互いの武器が衝突し、火花を散らした。

ソレを見ながらぼんやりと考える。自分はどのような存在なのか。異界の魂とは、なんなのか。知識は得ていた。だが、そう言う意味では無い。

黒と白の軌跡がぶつかり合い、離れたかと思えば銃声が鳴り響き、銃弾が駆け抜ける。空を駆ける軌跡が、ただ綺麗だった。

先ほど感じた奇妙な感覚。アレは何だったのだろうか。自分は女神と何か関係しているのだろうか。そんな考えが思い浮かぶ。

「この一撃で終わらせるー!」

「アタシは、絶対に負けられないの!」

気付けば二人の女神が、再び睨み合っていた。互いの持つ武器を構え、狙いを定めている。次で終わる。それだけの力を感じた。言葉を出す事も忘れ、ソレにただ魅入る。女神同士のぶつかり合い、それは激しく在り、美しくもあつた。

次で終わ리と思うと、ほっとする反面、どこか残念でもある。

「X・M・B」  
エクス マルチ プラスター  
「M・P・B・L」  
マルチ プル ビーム ランチャー

二人が宣言する。シエアの力が辺りに吹き荒れ、凄まじい圧力が巻き起こる。

両者が引き金を引く。瞬間、光が弾けた。二つの砲撃がぶつかり合い、力がぶつかり合い、辺りに衝撃波を巻き起こす。吹き荒れる突風。左手で顔を庇う。前を見ている事ができ無かった。やがて、風が収まり、視線を戻す。

「ユニちゃん!?!」

最初に聞こえてきたのは、慌てたような女の子の声。空から一人の女の子が落ちていくのが見える。それは、黒の女神候補生だった。淡い光に体がつつまれ、光が消えた時には見慣れた黒髪の少女に戻っていた。しかし、その体が動く事は無い。緩やかに海面に向かい落ち続ける。ネプギアさんが慌てて下降していく。どういう状況下理解し

たときにはすでに体が動いていた。

「駄目、間に合わない！」

ネプギアさんは魔力で足場を作り、ソレを蹴る事で加速するも追いつけない。泣きそうな声が聞こえる。海面とは言え意識が無い状態で落ちれば、命に関わる。左手に一気に魔力を収束させつつ、声を荒げた。

「ネプギアさん！」

「ひゃ、ひゃい!?!」

突如あげた大声に、ネプギアさんは妙な声を上げるが、気にしている余裕は無かった。言葉を紡ぐ。

——ファイン・コマンド

それは、急激な加速を生む魔法。エクス・コマンドが身体能力全般を向上させる魔法なら、今回用いたのは速度を急激に上昇させる魔法。ソレをネプギアさんに施す。落下地点は海面である。自分ではどう考えてもユニ君を受け止める事などできない。だから、ネプギアさんに力を託す。

「あ……。これなら！」

魔法がかかった瞬間、ネプギアさんはもう一度足場を生み出し、ソレを蹴り加速し手を伸ばす。

「ユニ、ちゃん！」

海面に衝突する。そのギリギリでユニ君を抱きかかえることに成功し、一気に軌道を修正した。

「よ、かった……」

思わずその場に座り込む。緊張からため息が零れた。数回深呼吸をして、呼吸を整えてから前を見る。ネプギアさんが大きく手を振りながらこちらに向かって来ていた。

## 7話 優劣

「コンパさん。ユニちゃんの手当てを！」

「はいです。あいちゃん和日本一さん、ユニちゃんを治療するので少し手伝ってもらっても良いですか？」

「仕方ないわね。私たちが担いでいくから、コンパはその間に準備」意識を失ったユニ君を抱えたネプギアさんが、此方に向かって速度を上げながら叫んだ。女神同士のぶつかり合いだった。見た目通り凄い力のぶつかり合いだった所為か、手合せにも関わらずユニ君の体は至る所に小さいが傷を作っていた。見知った、と言うほど長い間共にいた訳ではないが、それでも自分にとっては思い入れの強い人だった為、そんな子が傷だらけになっている本人の意思とは言え心が痛む。

「よいしょっと！ それで、何処に運べば良いの？」

ネプギアさんからユニ君を抱き受けた日本一さんが、ぐるりとコンパさんの方へ向き尋ねる。

「うあ……」

「ちよ、怪我人なんだからもう少し丁寧に扱いなさい！」

「わわ、痛かった!? ごめんね」

日本一さんの軽快な動きに体を揺すられたのか、ユニ君が小さく呻く。アイエフさんの叱責が飛び、日本一さんが慌てて聞くも返事は無かった。気絶しているのが当たり前なのだけど、意識が無いせいか余計に心配してしまう。

「とりあえず、ここに寝かしてくださいです」

「う、うん、解ったよ」

「なら、サツサと運びますか」

治療のし易いある程度広い場所に陣取り、治療に使う薬品などを靴から取り出しつつコンパさんが指示を出す。それを聞いた日本一さんとアイエフさんがユニ君を協力して担ぎ、コンパさんの下へ向かった。それを自分は遠目から見ているだけである。本来ならば何かをしてあげたいんだけど、ユニ君は全身傷だらけで、少しばかり服の上

からも怪我を負っていた。恐らく治療は服を脱がすだろうから、男の僕がその場にいる訳にもいかなかったため、手伝う事が出来なかった訳だ。

「ユニちゃん大丈夫かな……?」

直ぐ近くにいたネプギアさんが小さく零した。ユニ君を撃ち落した張本人であるのだから、言葉の端々から罪悪感と不安を感じ取れる。何か、言葉をかけてあげなきゃいけない気がした。

「大丈夫、だよ。あの子は僕なんかよりもずっと強い子だからね」

自分だつてそこまで長い付き合いでは無いけど、それは知っていた。ラストイションの女神候補生であり、自分にできる事を一生懸命頑張っている女の子だった。強い子だとすぐに解った。女神の姉に追い付こうと頑張っている姿を少しだけ知っていた。そんなユニ君を見ていると、一回負けたぐらいでへこたれる様な子だとは思えなかった。

「でも、危うく大怪我をするかも知れなかったんですよ？ ううん、もしかしたら死んでいたかも……。嫌われても仕方が無い事をしちやいました……」

「それでも、あの子が望んだことに君は応えてあげただけだよ。なら、それを恨むのは筋違いだから、ユニ君はそんな事で怒らないと思うな」

そんな僕の言葉では納得できないのだろう。ネプギアさんは少しだけ不安そうに言葉を続ける。第一印象は笑顔が印象的な子だと思っただけ、精神的にはそこまで強くないのかもしれない。その姿は、とても弱弱しく見える。

「でも、もっと私がうまくできれば」

「もし、を考えてたらキリが無いよ。ネプギアさんは、ユニ君と対等に戦って勝った。なら、負けたユニ君の為にも、そんな泣きそうな顔してたら駄目だよ。もっと胸を張らなきゃ、あの子はきつと怒るよ」

言葉を聞いていると、友達思いな子だと言うのが十分に理解できた。自分を責めている事が痛いほど良く解る。だからこそ言っただけなきゃいけない。ユニ君はそこまで弱い子じゃないって。

「けど……、ううん、そうですね。ユニちゃんに怒られちゃいますね」

それでも何か言葉を続けようとしたネプギアさんだが、小さく頭を振ると少しだけ吹っ切れた表情でそう零した。

「うん。アタシに勝ったのになんて顔してるのよ！ とか言つて怒るんじゃないかな」

「ふふ、何ですかそれ。全然似てないですよ」

「ですよ。けど、似ていたらそれはそれで嫌だなあ」

僕の言葉に、ネプギアさんは小さく笑った。まだ少しぎこちないけれど、それでも表情から暗さが抜けていた。おどけて言う僕に、ネプギアさんは今度こそ心からの笑みを浮かべてくれた。この子もまた強い子なんだろう。前を向き小さく笑う彼女を見るとそう思う。

「あ、そうだ四条さん」

「ん、なにかな?」

ネプギアさんが思い出したように言った。

「さつきはありますがとうございます。四条さんの魔法のおかげで何とかユニちゃんを受け止める事が出来ました」

「ああ、気にしないでいいよ。むしろ、僕はあれぐらいしかできなかつたから、あの子を抱きとめてくれたネプギアさんには感謝してもし足りないかな」

ネプギアさんが言ったのは、彼女がユニ君を抱き留める時に使った魔法についてのお礼だった。僕としてはそれ位しかできなかつただけなのに、彼女は一度僕の目を見た後頭を下げた。自分にできる事をただけでしかなく、僕一人だったならばどう考えてもユニ君を助ける事は出来なかつた為、お礼を言われるような事では無いと思うのだけど、そう言ったところでこの子はきつと納得しないだろうなと思いつき、素直にお礼を受ける。むしろ、僕の方こそありがとうと言うべきなのだが、それは心の中だけにしておいた。

「あ、少し手を怪我してるね」

「え!? あ、そうみたいです。全然気付かなかつた」

ネプギアさんが頭を下げた時、ふと彼女の手から血が流れている事

に気付いた。彼女に教えると、少し驚いたような表情をして、自分の右手の甲を眺めながら零した。流れ落ちる赤色が痛々しかった。

「でも、これぐらいなら少し治療すれば大丈夫ですよ。あ、でもいまはユニちゃんの治療しているところだし、向うに行ったら邪魔かな？」  
「なら、僕が治療するよ。右手を出してくれるかな」

「あ、はい」

ネプギアさんがコンパさんの下に行こうとして止まる。現在進行中でユニ君の治療をしている為、自分が言ったら邪魔になると遠慮してしまったようだ。実際のところ、彼女一人が言ったところで大した邪魔にはならないと思うのだけど、性格なのか遠慮してしまっている。困ったように言うネプギアさんを見ると、なんとなく助けてあげたくなってしまった。

「失礼。このまま少し待ってね」

一声かけネプギアさんの右手をとり両手で包み込むようにし、自分の右手を傷口にそっと翳し両目を閉じ集中し魔を込める。体の奥から、温かい力が動くのが解った。そのままゆっくりと力を右手に集中させ、言葉を紡ぐ。

——月光聖の祈り。

「わあ、温かい」

「これで終わり、かな。僕の性質なのか、回復はあんまり上手くできないけど、その位の傷なら大丈夫だと思うよ」

そう言い、小さく笑う。彼女に施したのは回復の魔法だった。自身の魔力を糧に、他者の回復能力を一時的に高める魔法。それを施していた。言葉通り、僕はこの手の魔法があまり得意では無かった。一応ラステイションに来て自身の使える魔法をいろいろ試してみたのだが、自分や誰かを治療するような魔法とは相性が良くないように思えた。何というか、しつくりと来ない。自分は知っているとは言え、詳しいと言う訳では無かった。だから、魔法もある程度は手探りで探っていく必要があるみたいだ。そうして得た結論が、不得意と言う事だった。とは言え、少しした傷ぐらいなら十分治す事が出来る。……良く考えると、小さな傷とは言え治せることが異常なはずなのに、そ



れが当たり前になってきていた。人間の適応力と言うのは凄いモノだと変なところで感心してしまった。

「そうみたいです。もうだいぶ塞がっちゃいました」

「そっか、良かった」

ネプギアさんが見せてくれた手を確認し、ほっと溜息が零れた。治療した後になんかと思った事だが、変な跡とか残ったらどうしようとか若干心配してしまった。そんな心配も不要だったようで、綺麗に塞がっている。

「あの、また助けて貰っちゃいましたね。ありがとうございます」

「それこそ気にしないでよ。元はと言えばユニ君が君を傷つけた訳だからね。あの子のパートナーとして、治療位はさせて欲しいな」

「それでも、ありがとうですよ」

「そっか。なら、その言葉は素直に受け取って置くよ」

苦笑しながら頷く。良い子なのだが、意外と頑固者な様だ。押し弱い子なのかと思えば、今みたいに若干強い場面もある。中々見ていて飽きない面白い子だった。

「う……。あ、れ？ アタシ、どうなったんだっけ？」

ユニの治療が殆ど終わり、コンパたちが一段落ついたところでそんな声が零れた。寝かされていたユニは、ゆっくりと目を開き、ぼんやりと呟いた。じんわりとした痛みが彼女の全身を包み込んでいた所為か、その動きはユニらしくなく緩慢である。

「あ、ユニちゃん。気が付いたですか？」

「え？」

傍らで心配そうな声が聞こえてきた為、思わず視線を動かす。ユニのすぐ傍にいたコンパが、心配そうな顔で覗き込んでいた。一度二度と瞬きをした後、ユニは理解した。

「そっか……。アタシは、負けたんだ」

小さく零す。その声は少しだけ震えていた。

「そうね。それは兎も角、どうしてあんなことをしたのか教えて貰えると嬉しいのだけど」

ユニが目覚めた事に気付いたアイエフが、彼女の傍にまで来ると尋ねた。戦う必要のない場面で何故戦いを仕掛けたのか。どういう意図があるのかを本人から聞きたかったからだ。

「あ、あいちゃん。まだユニちゃんは起きたばかりですよ！ そう言うのはもう少し余裕ができてからにしてください」

「そうだよアイエフ、怪我人には優しくしないと」  
「う、解ったわよ」

しかし、その言葉は彼女の仲間であるコンパと日本一に遮られた。目覚めたばかりの怪我人にそんな事を聞くのは常識が無いと、コンパに窘められる。本人も自覚があったのか、すんなりと引き下がった。ばつが悪そうにユニを見ると、アイエフは小さくごめんなさいと呟いた。

「……元はと言えば、アタシの我儘だから。ごめんなさい」

ユニはそれだけ呟くと、立ち上がった。声が震えている。負けた事で、色々な感情が彼女の中で渦巻いており、それだけ言うのがやっとであった。そのまま立ち上がる。

「まだ、動いちやだめです。もう少し体を休めた方が良いでしょう」

「ううん、大丈夫。アタシの体だから、自分の事は自分が一番解る」

「そんな訳——」

「行かせてあげようよ」

そのまま歩いて行こうとするユニをコンパが遮る。看護師である彼女からすれば、もう少し体力を回復してからでなければ動いて欲しくなかった。だから無理に動こうとするユニを止めようとしたのだが、それを日本一に遮られる。

「アタシもヒーローをやってるから解るんだ。辛くても、他人に優しくされたくない時もあるんだよ」

「そうね。今無理に引き止めても駄目そうだし、行かせてあげるべきじゃない？」

「あいちゃんまで」

「ごめんなさい。けど、行かせてほしい」

「ううう、解りました」

思わぬところからの援護と本人の意思に負け、コンパは遂に折れる。本人としては行かせたくないのだが、止める事を許さない雰囲気になってしまっていた。

「ありがとう」

ユニは小さく呟く。その言葉は、三人の耳に届いていた。

その場を離れる。まだネプギアと話をしていない。その為、ユニは彼女の下へ歩を進めた。

「でも、四条さんの力どこかで感じた気がするんだけどな……」

「ん、どういう事？」

右手の甲を眺めながら、ネプギアさんが奇妙な事を言います。それがやけに気になった。聞き返す。

「あ、はい。四条さんの魔法をこれまで三回かけて貰いましたけど、その時感じる力に覚えがあるんです。なんていえば良いんだろ……、もつと前に四条さんの力を感じた事があるような気がするんです。既視感ってやつなのかな？」

「既視感。それってもしかすると——」

ネプギアさんの言葉に一つの可能性に思い至る。それは、僕がこの世界に居る事についての手掛かりかも知れなかった。だからか、意識がそちらばかりに向いてしまった。その為気付かなかった。

「そっか。ユウイチ……、アンタもネプギアが良いんだ……」

「え？」

不意に背後から聞こえた漸く聞きなれた声。その声が震えていた。思わず振り返る。

「そう、だよ。ネプギアの方が強いし、アタシなんかより女神候補生に相応しいもんね」

「ユニ君……、何を言って」

「良いの。ネプギアと話してるときのアンタ、楽しそうだった。無理してアタシに付き合わなくていいよ」

「無理って、どうしてそうなるのか」

意味が解らなかつた。理由が解らなかつた。けど、ユニ君が無理しているのだけは解った。誰だつてわかるだろう。目の前で泣きそうな顔をされて解らない人間はそうは居ない。だから、言葉を紡ごうとした。

「良いつて言ってるの！ アンタと組むのもこれで終わり！ 今日はありがと。一緒に仕事してくれて……嬉しかった」

「ユニ君？」

が、捲し立てるようにユニ君は言った。一方的にパーティーの解散を告げられた。余りの事に、真意を問う為近付こうとする。

「仕事はアタシの我儘の所為で失敗したつて言つとくから、アンタは何も心配しなくていいから」

「聞きたいのはそう言う事じゃないよ。なんで急に解散するのか。その理由を——」

「アタシは一人でも大丈夫だから！ だから、ネプギアを助けてあげて！ だから」

ユニ君は僕の言葉を無視して自分の告げたい事を一方的に捲し立てる。其処まで言つたところで一度言葉を切つた。その後、泣きそうな笑顔で笑つてから言葉を紡いだ

「さよなら」

「……訳が分からないね」

軽く瞳を閉じ一連の事を頭の中で整理すると、そんな結論に至つ

た。意味が解らない。その一言に尽きる。ただ、自分があの子を傷付けたと言う事は、直感的に理解できた。あんな泣きそうな笑顔を見せられれば、嫌でも解る。其処まで鈍くは無い。

「ユニちゃん、すごく怒ってましたね。それ以上に、泣いてました」  
「そう、だね」

とは言え、その理由が思い浮かばない。僕がした事と言えば、ユニ君が気を失っている間にネプギアさんの治療をして少し話をしたぐらいだった。その程度でしかないため、彼女を傷付けるような事をした覚えが無かった。だからこそ、良く解らない。

「追わなくても良かったんですか？」

「今追ったところで、どうしようもないからね。あの子が何を怒っているのか。それが解ればいいんだけど、現状だと打つ手が無いからね」

おずおずと聞いてくるネプギアさんに応える。一方的に別れを告げたユニ君は、話す言葉は無いと言わんばかりに踵を返し、その場を立ち去った。追いかける事は出来た。が、それでは意味が無い。取り付く島の無い様子に、何を怒っているのかすら聞き出せなかったのだ。ならば彼女に今問うたところで、まともな答えが聞けるとは思わなかった。

「どうしたのよ、あの子」

「いや、僕にも解らない」

「あ、あはは……」

こちらに向かつて走ってきたアイエフさんに事の次第を聞かれるが、答える事が出来なかった。そもそも自分も置いてけぼりなのだ。僕の方が教えてほしい。ネプギアさんの乾いた笑いだけが、辺りに響く。

「アンタと合流して帰るのかと思ってたら、いきなり大声あげるし、かと思ったら走ってどこかに消えるし、何なのよあの子は」

「あー、うん、なんかごめんなさい」

うがーつと声を荒げるアイエフさんにそう言うのがやつとだった。正直に言えば状況が呑み込めず八方塞がりであった。どうしたもの

か。考え込む。

「とりあえず、私たちは血晶を私に行きましようか。依頼自体は終わってるわけだし」

「それはそうですけど……、このまま行っちゃっていいのかな」

怒りを吐き出した事で直ぐに落ち着いたのか、アイエフさんはネプギアさんに言った。本人もそれ自体には賛成の様だが、先ほどあった出来事の所為か、僕の事を気にかけているのが解った。優しい子である。もう何度目か解らないが、そう思った。

「血晶、か。今回の依頼はユニ君と共に血晶の回収。ユニ君が負けたから血晶は手元にならない。だから依頼は失敗と言う事になる。その為、パーティーを解散した。そして、依頼の達成自体はパーティーである必要はない。なら——」

アイエフさんの言葉から、一つの答えに行き着いた。これで正しいのかは解らない。もしかしたら正解では無いかもしれない。けど、僕の思っている通りに事が成れば、少なくとももう一度あの子と話をすることはできるかもしれない。なら、今考え付いた手を実行するのに迷いは無かった。

「あの、四条さん。とりあえず一緒にラステーションまで行きませんか？」

やる事が決まったところで、ネプギアさんがそう言ってくれた。彼女たちは目的の品物を手に入れたので、この場所にはもう用が無い。当然の流れだと思う。

「ごめんね。僕はもう少しやる事があるんだ」

「やる事、ですか？」

けど、僕といえはそういう訳には行かなかった。現状のまま帰ったとしても、ユニ君と話をするのは難しいだろう。ほぼ間違いなく会えない。だからこそ、依頼を失敗したまま帰る訳には行かなかった。僕個人で会いに行つたところで門前払いは見えているが、依頼を成功させ、その流れで教祖に事情を話せば少しぐらいは融通してもらえないかもしれないからだ。

「そ、あの子が負けたから血晶は君たちの物だからね。僕はもう一つ

血晶を探す。この辺りのテコンキヤットが持っているようだから、もう一つぐらい見つかるんじゃないかな」

「そうですか。あ、でも、それなら私たちと一緒に報告したら良いんじゃないですか?」

自分の考えを告げると、ネプギアさんは名案を思い付いたとばかりに言ってくれた。

「気持ちには有りがたいけど。多分駄目だよ。それをやったら、あの子の言った通り、僕がネプギアさんを助けるって言ってるようなモノになるからね」

その気持ちを嬉しく思うけど、その提案に乗る訳には行かなかった。ユニ君は去り際に言った。自分では無くネプギアを助けてあげて欲しいと。あの子のネプギアさんへの想いにはいろいろ複雑なものがあるのだろう。それが解るからこそ、僕がネプギアさんたちと一緒に協会へ報告に行ったら駄目だと言う事は想像できた。報告には僕一人で行かなければいけない。その為には、血晶がもう一つ必要だった。

「確かに、あのユニちゃんの様子だとそうかも」

「うん。だから、僕は血晶をもう一つ探すよ」

「そう。なら、私たちは先に行くわね」

自分の考えを告げると、納得してくれたのかそれ以上誘って来る事は無かった。アイエフさんが軽く手を上げて別れを告げてきた。

「ああ、気を付けてね。また、どこかで会えると良いね」

それに応じる。一度だけ共闘をしただけなのだが、良い人たちだった。また会えると良い。心の底からそう思った。だから笑顔でその背中を見送ろうと思う。

「……」

「ギアちゃん?」

「やっぱり駄目だよ」

アイエフさんを先頭に歩きはじめたのだが、ネプギアさんだけが一向に動く気配が見えなかった。じっとこちらを見詰めていた。女の子にじっと見つめられるのには慣れていないため、少し居心地が悪

い。何時までも動かない彼女を不審に思ったのか、コンパさんが戻ってきてネプギアさんに声をかけた。小さくネプギアさんは言う。

「ネプギア、どうしたのー?」

「何してるのよ」

先に進んでいた二人も此方に戻ってきた。

「……ネプギア、アンタもしかして」

「うん、やっぱりこんなところで帰るのは嫌だよ。四条さんとユニちゃんには仲直りしてほしいもん」

「はあ、まったく、何時もの癖か。仕方ないわね。どうせ言っても聞かないだろうし、付き合っただけあげるわよ」

「あれ? じゃあ、まだ戦うんだ。なら、頑張らないとね!」

「はいです! やっぱりこのまま帰るって言うのはいけないって思ってたです」

ネプギアさんの言葉に、アイエフさんはため息とともに言った。その言葉につられたのか、他の人たちも各々の武器を取り出していた。「いや、これは僕が自分の力でやらないといけない事だと思うんだけど」

気持ちは嬉しいのだが、彼女たちにとっては完全にやらなくていい仕事だった。何より、何より本末転倒な気がした。

「大丈夫ですよ。四条さんの力を借りるんじゃないで、四条さんに力を貸してあげるんですから、ユニちゃんの言葉とは違うよ!」

「そういうものかなあ」

「そうですよ」

とは言え、自分一人で見つかるという保証も無い。事が事なだけにできれば今日中には終わらせてしまいたい為、彼女たちの助力は素直に心強くあった。結局、押し切られる形でネプギアさんたちに協力してもらおう事になったのだった。



## 8話 支えてくれる人

「あー!! ようやく出たよー!!」

リゾート地を燦々と照らしていた綺麗な太陽も、少しばかり傾き始めてきたところで、日本一さんの元気の良い声が辺りに響き渡る。その澆刺とした声に、それなりに戦い続けていたことで溜まってきていた疲労も忘れ、小走りになって近付いていく。はっはと少し呼吸が乱れるけど、あまり気にならなかった。

「あつた、のかな」

「うん、確かこれだよ」

急いでできた僕に、満面な笑顔を向けて日本一さんは紅く光る血晶を渡してくれた。そのまま受け取る。触れている場所から、ほんのりと不思議な感覚が生まれた。なんて言えば良いのか、自分の使う魔法とはまた違う、力が湧くような感覚がしていた。どういう理屈かは解らないけど、何かを増幅させるような効果でもあるのだろうか。手にした時そんな事を思ったが、今はそれほど重要ではないため、頭を振り脱線しかけていた思考を修正する。今は血晶よりも、ユニ君を優先しなきゃいけない。

「直接触つたのは初めてだけど、不思議な感覚だなあ。何かの力があ  
るのかな」

「そう? 私は何も感じないわよ。コンパはどう?」

「私も感じないです」

日本一さんの声が聞こえたのだろう。アイエフさんとコンパさんも駆け寄ってきた。そうして、アイエフさんが代表して持っていたのか、先程手に入れた血晶を取り出しつつ言った。血晶をペタペタと触ってみているけど特に何も感じないようで、しきりに首をかしげている。やがて解らないと言わんばかりに肩を疎めると、コンパさんに血晶を手渡した。コンパさんも血晶を両手で撫でたり、軽く叩いたりして見るけど、アイエフさんと同じような感想だった。

「アタシも特に何にも無いよ」

「そっか。ありがとう」

血晶を二回とも最初に見つけた日本一さんを見ると、尋ねる前にそう応えてくれた。そのままうーんと一伸びする。ヒーローを名乗っているボーイツシユな女の子ではあるけど、流石に疲れたのだろう。今日あつたばかりの僕とユニ君の為にそこまで頑張ってくれたことに素直に感謝する。

「気にしないでよ。困ってる人を助けるのも、ヒーローの務めだからね！」

「そう言うヒーローにお礼を言うのも助けて貰った人の務めだよ」

気にしないで良いよ笑う日本一さんに、そう伝えた。助けて貰ったのならお礼はちゃんと言わなきゃいけない。ここ数年でいろんな事が立て続ききに起こり、身に染みて実感した事だった。軽く頭を下げると、日本一さんは頬を指で掻きながら面映そうに小さく笑った。

「あらあら、私やコンパ、ネプギアにはお礼は無いのかしら？ 私たちだって頑張ったのに良い雰囲気になっちゃって」

「もーあいちゃん、そう言う事は言っちゃだめです！」

すると、意地悪い笑みを浮かべたアイエフさんがそんな事を言った。それを苦笑しながら、コンパさんが窘めている。勿論、僕としては二人にもお礼を言うつもりだった。だから、にっこりと意識して笑みを浮かべる。

「うん、すつごく感謝してるよ。ありがとう、あいちゃんとコンパさん」

「どういたしましてです。困った時は助け合いですです」

コンパさんがほんわかした笑顔で言ってくれた。ネプギアさんの笑顔とも少し違う、周りを癒してくれそうな温かい笑顔だった。ユニ君の治療も率先して行ってくれたし、話す雰囲気も穏やかで、凄く良い子なんだろうと改めて思う。

「ちよ、行き成りなによ」

「なにが？」

少し慌てたように割って入って来たのが、アイエフさん。少し頬が紅くなっている。そうなるの良いなって思ってたのだから、目論見通りになった事で少し笑みが零れた。彼女が言いたいことが何か

は解るのだけど、あえて惚ける。先にからかおうとしたのはアイエフさんだから、少しぐらい反撃しても大丈夫だろう。

「名前よ名前。なんで行き成りあいちゃん？」

「んー、コンパさんが君の事をあいちゃんって呼んでたから、真似してみようかなって思ったただだよ。駄目だったかな？」

「ぐ、別に減るもんじゃないけど。呼ぶ前に了解を取りなさいよ」

面白半分ではあるが、もう半分は本気で言っていた。見た感じ皆年下とは言え女の子であるから、名前呼び捨てるのが案外気恥ずかしかつたりするからだ。愛称で呼べるなら、その方が楽だった。

ぐぬぬと歯ぎしりしながらアイエフさんは言った。

「なんでかな？」

あえて問い返す。理由は何となくわかっているけど、一応聞いておく。

「幾ら私でも、男の人に言われるのはちよつと照れくさいのよ……」

ぼつが悪そうに視線を外し、恥ずかしそうにボソツと吐き捨てる。

そのままピイツと横を向くと、不貞腐れたように腕を組んだ。思わず笑みが零れる。意外にも、あいちゃんと呼んでいい様だ。拒否されるかなつと思っていたけど、そうでもなかったみたいだ。それにしても「何その可愛い理由」

「う、うるさいわね！」

あまりに可愛らしい理由に思わず本音が口を吐いた。あいちゃんの顔が恥ずかしそうに熱を上げ、爆発する。小さな悪戯心から言った事だったが、思いの外効果があったことに少し驚く。

「わ、アイエフ真っ赤っか！」

「確かに今のアイエフさん普段なら絶対見られそうにないし、すごく可愛いかも」

「ネプギアまでっ。アンタたち、後で覚えときなさいよ！」

「まあまあ、あいちゃん。少し落ち着くですよ」

日本一さんの言葉に、漸く合流してきたネプギアさんが頷いた。一番遠くから走ってきたのだろう。少し息が上がっていた。小さくお札を言うと、いえいえと笑顔で答えてくれた。

「そうだ！ ネプギアにも血晶を渡して見たら？」

「そうだね。ネプギアさん、どうぞ」

「へ？ あ、はい」

怒りだしたあいちゃんをコンパさんが宥めている間に、ネプギアさんに血晶を渡す。今のところ、何かを感じたのは僕だけである。ユニ君には聞いていなかった為解らないが、ネプギアさんが何も感じないようであれば、僕の気のせいである可能性が高い。さて、結果はどうなるやら。後ろから聞こえるぎゃあぎゃああと喚く声を敢えて聞こうない事にして、ネプギアさんの答えを待つ。

「……。不思議な力を感じますね。なんて言えば良いのかな。シエアが増幅されているような気がします」

「ふむ。シエア、ね」

ネプギアさんの言葉を聞き、口元に手を当て考え込む。血晶がシエアを増幅させている気がすると言った。女神候補生のネプギアさんが言うのだから、恐らくそういう力があるのだろう。ならば自分が感じたのもその力の一端なのだろうか。それなら、何故自分がシエアの増幅を感じ取れるのだろうか。単にシエア以外の力も増幅させるのか、或いは……

「こら四条！ なんでネプギアの事はギアちゃんって呼ばないのよ!？」

「おかしいわよねコンパ？」

「むっ？」

考え込んでいたところで、そんな事を言われた。思わずあいちゃんの方を見る。目が本気だった。若干怖い。

「確かに、ギアちゃんも愛称で呼んでるです」

「そうよ。私の事をあいちゃんって言うなら、ネプギアの事もギアちゃんって呼ぶべきよー！」

「ええ、どういう事ですか!？」

コンパさんの同意を得て我が意を得たのか、そう畳みかけてくる。すると想定もしてなかったのか、ネプギアさんの表情が驚きに染まった。表情豊かなネプギアさんを眺めつつ、ふむっと考え込む。

「言われてみると確かに。なら、ギアちゃんって呼んで良いかな？」

特に問題がある訳でも無いし、ネプギアさんに尋ねる。さつきいきなり呼ぶなど怒られたばかりなので、了承を得るのを忘れないようにする。尤も、この子の場合は特に怒ったりしそうにないけど。

「え、あ、はい、大丈夫ですよ。……つて、ええ!?!」

一度領いた後、ネプギアさんはまた声を上げた。百面相の様どころ変わる表情に、面白い子だなあ、といった感想を抱く。事実、先ほどまで笑っていたかと思えば、驚き、そして今はあわあわと口を動かし焦っている。その姿を見ていると、小さい子供と言うか純粋な子を相手にしているようで、心が少し暖かくなってくる。こういうところが、きつとこの子の魅力なのだろう。

「という訳でよろしくね、ギアちゃん」

「あ、はい! ……なんか恥ずかしいですね」

一度呼んでみる。すると、言葉通り恥ずかしそうになながらも小さくはにかんでくれた。見た感じ嫌がられていないようで少し安心した。流石に愛称で呼んでみて嫌そうな顔をされたらいたたまれない。ふつと、小さく息が零れた。思いもしないところで一悶着あつたけど、何とかユニ君とも仲直りできる気がしていた。

「さてと、そろそろ行こうかな。あの子を泣かせたままじや、気が気じゃないしね。さつきと仲直りしないとね」

血晶が手に入ったので帰途につき、漸くラステーションの街並みが見えてきたところで、軽く頬を叩いたあと、助けて貰った皆に言った。「まったく、二人揃って手間を掛けさせてくれるんだから」

「うん、面目ないです。ごめんね、あいちゃん」

「別に良いわよ。乗り掛かった舟つてね。あと、温かい笑みを浮かべてこっちみんな」

ふんつとそっぽを向きつつも僕たちを見捨てないでくれるあいちゃん。

「なんで喧嘩しちゃったのかは知らないけど、きつと仲直りできるよ。」

友情はヒーローの定番だからね！」

「僕はヒーローになつた覚えは無いけど、友達は大事だから仲直りしたいな。……いや、しなきゃいけないんだよね」

「勿論。だから、頑張つてね！」

肩を軽く叩きながらエールを送つてくれる日本一さん。

「ユニちゃん、怪我してたです。それに、これまでの疲れもあると思うです。だから、ユニちゃんを支えてあげて欲しいです」

「そうだね。あの子はこれまで一人で頑張つてきたつて言つてた。なら、誰かが支えてあげなきゃ、何時かは倒れてしまうかも」

「はいです。だから、支えてあげてくださいです」

「ああ、解つたよ」

心底ユニ君の心配をしてくれているコンパさん。

「四条さん、ユニちゃんをお願いします」

「ああ、ちゃんと仲直りするよ」

「きつとですよ。ユニちゃん泣いてました。友達が、ユニちゃんが泣いてるなんて私嫌です。だから、ユニちゃんを笑顔にしてあげてください」

「泣かせたのは僕みたいだからね。きつとあの子とは仲直りするよ。だから、心配しないでほしいな」

「はい！……ちよつと羨ましいかな」

「ギアちゃんが泣いてても慰めに行くよ。尤も、君には良い仲間がいるからその心配はいらないかもしれないけどね」

「はい！」

そして、あの子と同じ女神候補生であるネプギアさん。

四人を一樣に見た後頭を下げる。ありがとう、と。最大限の感謝を込めて。それだけ、僕にとつてもあの子にとつても大きなことをしてもらつたと思つていた。

「解つたからさつさと行きなさい。あと、仲直りが出来たら報告に来るように！……ここまで首突っ込んだら気になるのよ」

「ああ、必ず」

なんだかんだ言いながら面倒見の良いあいちゃんの言葉に頷く。

その気遣いが有りがたかった。

「頑張つてね、ファイト！」

軽く手を上げた日本一さんに同じく自分も軽く手をあげ、ぶつける。パアンと乾いた音が鳴り響き、心地の良い衝撃が手に残った。その励ましが、有りがたかった。

「きつと、できるです！」

小さくぐつと拳を握りコンパさんが言う。その心配してくれる優しさが有りがたかった。

「ユニちゃんをお願いします」

太陽の様な笑顔で見送ってくれた。その暖かさが有りがたかった。

そして踵を返し、ラストেশヨンの教会に向かい歩き出す。ここからが、正念場だった。

血晶を手にし教会へ赴き、手続きをした後に通されたのは、大きな講堂のような場所だった。正面に何やら厳かなステージのような大きな場所があり、それを中心に大勢の人間が集まれる空間が広がっている。人々が女神を信仰することで、女神の力は増すと言う。この場所は所謂教義などにつかわれていたのだろうか。大勢の人たちが教えを受ける。そんな光景は馴染みが無いため、少しばかりイメージがわからない。

広い空間にただ一人待たされている所為か、そんな余計な事を考えしてしまう。焦ってしまうよりは良い事なのだろうけど、こんな時でもマイペースな自分に少しばかり呆れてしまう。

「やあ、あなたが四条優一さんかな？」

物思いに耽っていたところで名前を呼ばれた。穏やかでありながら、どこか鋭い響きを持つ声音。声のした方へゆっくりと振り向く。少しばかり待たされてしまったけど、相手は教祖様と言うだけあつて

多忙なのだろう。それは仕方が無い事だと思った。

「はい、初めまして。四条優一です。貴女が教祖様ですか？」

そこにいたのは、軍服のような女性用のスーツを着こなした女の子だった。人の良さそうな柔和な笑みを浮かべている。その様子は、声音から感じた第一印象と対照的であると言えたが、教祖になるような人物だ。きつと一筋縄でいくような人じゃないんだろうと予想する。「おっと、失礼、名乗りが遅れたね。僕は神宮寺ケイ。君の言う通り、ラストイシヨンの教祖をやらせてもらっているよ」

「神宮寺ケイ様、と」

かみしめる様に呟く。相手は教祖様である。あまり気安くしては失礼だろうと思ったのだが、

「ふふ、そこまで畏まらなくていいさ。君はあのユニが推すような人物なんだ、もう少し気軽にしてくれると嬉しいな。ユニとは気軽に話しているんだろう？」

「それはそうですね、良いのですか？」

「ああ、構わないよ。ユニと対等に話す君が僕に敬語を使うって言うのもおかしい話だからね」

言われてみると確かにケイさんの言うとおりである。女神候補生とは言え、ユニ君は女神である。教祖である彼女とユニ君の間には個人の関係とは別に、組織としてのややこしい関係があるのだろうと何となく理解する。

「解ったよケイさん。少しだけ、楽にさせてもらいます」

「ああ、そうしてくれるかな」

承諾した僕にケイさんはただ小さく笑みを浮かべる。その様子からなんとなく、食えない人だと言う言葉が思い浮かぶ。

「さて、あまり世間話ばかりしては話が進まないね。そろそろ本題に入ろうか。つと、その前に血晶を受け取っても良いかな」

「これです」

ケイさんの言葉に血晶を取り出し手渡す。表情には出さないが、少しだけ驚いていた。手続きをしてきた為、血晶を持つてきたと言うのは事前に連絡が届いているだろうけど、それ以外に用件がある事を言



いあてられるとは思わなかった。帰ってきたユニ君の様子がおかしかった等、何かしら推測できる理由はあつたのだろうけど、こうもアツサリ当てられると少しばかり狐に騙されたような不思議な感じになつてしまう。

「確かに血晶だね。しかし、ユニには入手を失敗したと聞いたけど、どう言う経緯で再び手に入れたんだい？」

血晶を手に取り、一通り眺めた後、懐から取り出せるような小さな機材を取り出し何かしら調べたかと思つたところで、ケイさんは尋ねてきた。文言だけ聞けば質問しているのだけど、口元に浮かべられた小さな笑みの所為か、態々言わなくても詳しく知つていのではないかと思つたしまう。

「はい。一度は手に入れたんだけど、一悶着あつてね。結局手放す事になつた訳です。そこから——」

そこまで言つたところで言葉を切る。ふむっと相槌を打つケイさんは何かを確かめる様な感じだった。その様子に、やはり食えない人だなつと思いつつも続きを語り始めた。

「ところでケイさん」

「何かな四条君」

「今話した事、ある程度知つてたんじゃないかな？」

ネプギアさんたちに手伝ってもらい血晶を手にした経緯を一通り語つたところで聞いてみる。話を聞く彼女の様子から、どうしてもそんな疑問が思い浮かんでいた。反応があまりにも平坦だった。あらかじめ知つている事を確認する様に小さく頷いているのもその予想に拍車をかける。

「ああ、知つていたよ」

「そうですか」

その所為か、予想通りの返答に満足してしまつた。

「おや。もう少し何か言うのかと思ったけど、それだけかい？」

そんな僕の様子が意外だったのか、ケイさんが初めて首を傾げた。「まあ、報告を聞き比べて情報の確認をするのも仕事でしょうしね。それに、ちよつと気になったただけですしね。態々しつこく掘り返すような事でもないです」

「成程、ね」

ケイさんは小さく頷くと、直ぐに表情を戻した。成程、これがこの人のスタイルなのかと、少しだけだが理解する事が出来た。

「つと、脱線しましたね。先ほど話した通り、仕事の途中でどうにもユニ君を怒らしたようでね。もう一度話がしたいと思っっているんだけど、ユニ君のいる場所に見当がつかないものでして」

「成程。つまり僕に力を借りたいから来たと言う訳かい」

「そうなります。教祖様ならあの子の居場所がある程度分かるかなって思っていますね」

自分が直接来た理由を話す。血晶を届けに来ただけならば、態々教祖に会うような事をしなくとも受付で手続きのみ行えばいいのだが、あえて教祖に会う方法をとったのは彼女の力を借りるためだと言えた。不安材料として、そもそも教祖に面会などできるのかと言う点があったのだけど、その心配も無用だったようだ。少しばかり意外な事だけど、教祖に面会すると言うのは思いの外簡単にできるようだった。流石に尋ねてその日に面会できたのは女神候補生であるユニ君の名前のおかげだろうけど、それを差し引いても数日待つ程度と案外簡単に面会できるようだった。

「ああ、解るよ。今ユニがいる場所なら、大体見当がつくよ」

ケイさんは小さな笑みを少しだけ深くすると、頷いた。その様子に良かったと安堵するが、ちよつとだけいやな予感を感じた。

「なら、その場所を教えて貰っても構いませんか？」

「構わないけど、その情報の価値はどれくらいになるだろうね」

「価値、ですか」

自身の勘が当たったのか、ケイさんは少し楽しそうにそんな言葉を言った。尋ね返す。

「そ、価値だよ。ビジネスの基本はギブ&テイク。つまりは等価交換だね。君にとつてその情報はどれ程の価値があり、その対価として何を差し出せるかな?」

「む……」

想定外な言葉に、少しばかり考え込む。対価として最初に思い浮かぶのはお金だけど、教会の教祖になるような人が、個人の持つ程度のお金で動くとは思えなかった。ならば何か。今日自分がして来た事。ラストイシヨンの教会からの依頼。それを鑑みれば、答えは簡単だった。

「何かしらの協力。労働力、と言ったところででしょうか?」

「ご明察。その情報を与える代わりにやってほしい事があるんだけど、構わないかな?」

「解りました」

にっこりと笑い言うケイさんを見てみると、本気で食えない人だと思ってしまった。とは言え、ここまで来て結局会えませんでした。話にならない。多少は思うところがあるけど、気にしないでおく。

「ふふ、ありがとう。では、教えるよ」

「良いんですか? 僕はまだ、何もしてないですよ」

了承した途端、ケイさんが教えてくれると言った。思わず言葉を遮る。ここに来て、いきなり話がおかしくなった。もう一度何かやらされるのだろうかと覚悟したのだが、そうじゃなかったからだ。

「ああ、君にやってほしい事は、場所を教えないとどうしようもない事だからね」

「……ああ、そう言う事か。ケイさん、良い性格してますね」

にこやかに語るケイさんの言葉を聞き、漸く彼女の意図が解った。見事にしてやられた為、少しの非難とそれ以上の感謝を込め文句を言う。

「ふふ、ありがとう。良く言われるよ」

「だろうね」

そんな僕の言葉もどこ吹く風か、にこやかに笑みを深めた。本当に食えない人だ。

「あなたは教会の裏にある大きな木は知っているかな？」

「……大きな木、ですか？」

「そ、教会をぐるりと回ると広い敷地があるんだけどそこに一本だけ大木があるんだ。ユニはそこに居ると思うよ。あそこはユニがノワールに、ああ、ユニの姉である女神に稽古をしてもらっていた場所なんだよ。そこで膝を抱えて座り込んでいたって見回りの者も言っていたから確かだろう。あの子は落ち込んだとき大抵そこにいるからね。確かだろう」

「成程、思い出の場所ですか」

ケイさんの言葉に小さく頷く。大体の場所は解った。その状況で自分に頼む事。一つしか思い浮かばなかった。

「ユニの事、頼むよ」

「はい」

小さく頷く。そのままケイさんにお礼を言い、教会を後にする。

漸くか。外に出て眩く。空を見上げた。陽が沈みはじめ、夜の帳が下りようとしていた。

「なんであんな事言ったんだろ」

教会の裏。少し歩いたところで青々とした緑の広がる広大な敷地があった。その開けた場所に、一本だけ大きな木が植えられていた。ぽつんと一本だけ残っている大木は、力強く在るが、同時に物寂しくもあった。歩を進める。ぼそぼそとした言葉が聞こえてきた。どこか泣きそうな声音。探している女の子だった。

「折角、一緒に組んでくれたのに、ちゃんとした話もしないで一方的に自分の意見を押し付けて……」

ぼつぼつ風に乗りと聞こえてくるのは、後悔を孕んだ言葉だった。その言葉を聞くと、不謹慎だけど少しだけ嬉しく思った。嫌われたわけでは無い。そう実感できたから。

「拳句の果てに、ネプギアに嫉妬なんかして馬鹿みたい。こんなじやお姉ちゃんみたいに、ううん、女神にだってなれないよね」

やがて、大木の前に辿り着く。声はその裏から聞こえている。この距離まで近づいたのにも拘らず気付いていないのだろうか。声は留まる事無く続いていた。

「アタシって、ほんと馬鹿だ……」

今にも泣きだしそうに、それだけ零した。一度深呼吸をし、歩を進める。座り込み膝を抱え、その上に頭を付けユニ君は小さくなっていた。出会った時から気の強い女の子だった。自分に自信があるんだろうと言うのが良く解った。話を聞けば、彼女は女神候補生であり、この国の人たちを導く存在である事も知った。強い子なんだと、その話を聞いて余計にそう思った。けど、その思いがそもそも間違っていたのだろう。ユニ君の独白を聞いていると、なんとなく理解できた。「まったくだね」

彼女の自虐的な言葉に同意すると、傍らに腰を下ろす。びくりと肩が震えるのが解ったけど、気にする程の事でもなかった。

「……なんでアンタが此処に？」

「そりゃ探したからね」

ユニ君の疑問にただ答える。色々な人に助けて貰い漸く彼女に会えた。長い一日だったと、小さく笑みを浮かべる。

「……何しに来たのよ」

「んー、聞きたい事があったからね。色々あるんだけど何で泣いているのか。まずはそれに応えて欲しいな」

顔を上げずただ聞いてくるユニ君に答え、そのあと尋ねた。どうしてもわからなかった。この子がなんで泣いていたのか。それがなんとなく解ったけど、ユニ君の口からききたかった。

「泣いてなんかないわよ」

「いいや、泣いてるよ。僕にだってわかった。ネプギアさんや他の皆も言ってたよ」

否定するユニ君の言葉を切って捨てる。

「っ、そんなことアンタには関係ないでしょ!？」

「まったくもってその通りだよ」

凶星を突かれた所為か、勢いよく面を上げ、ユニ君は捲し立てる。そのユニ君の言葉を肯定する。この子が泣いているのは僕には関係ない。それは動かす事の出来ない事実。それを否定する気は無い。

「けどね。自分のすぐ近くで泣いている人がいる。それも自分の友達。なら、どうにかしてあげたいと思うものだよ。少なくとも僕はそうだ」

それでも友達が泣いていた。それだけで充分だった。友達が泣いているのを見たくは無い。その思いだけで充分じゃないだろうか。

「……友達?」

「そうだよ。君がどう思っているかしら無いけど、僕は君の事を友達だと思っているよ。ネプギアさんだつてそう言つてた。アイエフさんやコンパさん、日本一さんだつてそう思つてくれるんじゃないかな。別に僕じゃなくても良い。誰かに思いを吐き出せないかな」

言い聞かせるように語る。この子が何かを抱えているのは解っていた。ならば一度吐き出せば良くなると思う。

「……無理だよ。そんな事できない。これはアタシが乗り越えるべき問題なの」

「それはどうして、かな?」

絞り出すように言つたユニ君の言葉を促す。

「アタシは弱い。ネプギアと戦つて分かつた。ううん。戦う前から解つてた。あの子は笑顔を絶やさない強い子だった。女神が、お姉ちゃんたちがいないこんな状況なのに、それでも仲間と笑つていられた。それがあの子の強さ」

「そうだね。あの子は強いよ。君なんかよりも、ずっと強い」

「……っ!? 解つてるわよ! そんなネプギアに比べたらアタシは弱かつた。それなのにネプギアには手を貸してくれる人たちがいた。それが羨ましかつた」

話せないと言いつつ、ユニ君が吐露した本音。それを聞き漏らさないよう耳を傾ける。

「それに比べたら、アタシには誰もいなかった。アタシの周りには、ネ

プギアみたいに助けしてくれる人がいなかったの。だけど、そんな時にアンタと初めて出会った時に行ってくれた言葉を思い出したの。一緒に組まないかっていうやつ」

ユニ君の言葉に小さく頷く。初めて会った時、まだ自分はこの世界について良く解っていないかった。だから少し縁のできたユニ君と組めないかと誘った事がある。その時の事だろう。自分にとってはかなり打算もあつた言葉なのだが、それがこの子にとって大きな言葉になっているとは思いもよらなかった。

「実際に一緒に組んでみて、全然違つた。良い事ばかりでも無いけど、それでも一人の時より安心できた。アタシにもネプギアみたいに仲間が出来たんだと思うと、凄く嬉しかった」

一緒に仕事ができ嬉しかった。そう言つた彼女の言葉の意味がようやく理解できた。

「けど、それも長くは続かなかつた。ネプギアが現れて、一緒に戦つてると、とられる気がしたの」

「僕がと言うよりは、君の仲間が、だね」

「……うん。そう思うと、嫌だつた。折角できた仲間がネプギアに取られる。このままじゃまた独りぼっちになると思うと、怖くて仕方が無かつた。だからそうさせないために——」

「ネプギアさんと戦つた。と」

「うん。勿論それだけじゃなくて、ネプギアと自分の差がどれだけあるのかも知りたかつたっていうのもあるけど、やっぱり大きかつたんだと思う」

結局、この子は強くなかなかつたんだろう。ユニという弱いけど頑張り屋な女の子を勝手に強いと思ひ込んでたのだろう。長い付き合いだった訳でも無い。自分は何を知つた気になつていたのだと、呆れてしまう。

「負けて目覚めた時、アンタとネプギアが楽しそうに話してた。その時思つたんだ。アタシよりネプギアの方が女神に相応しいから駄目なんだって。アンタも取られちゃうんだって。だから取られるぐらいならつて思つて……」

「自分から解散したって訳だね」

「……うん」

そう言い終えたところで、ユニ君は小さく溜息を洩らした。吐き出した事で少しだけ楽になれたのだろう。どこか落ち着いているように思えた。

「ねえ、ユニ君」

「何？」

「僕はさ、ここに来るまでいろんな人に助けて貰ったよ」

今なら話を聞いてもらえる。そう思ったから言葉を紡ぐ。この子に伝わりますように。そんな思いを込めて、語りだす。

「最初はさ、一人でもう一つの血晶を見つけて、ケイさんと交渉するつもりだったんだ」

「血晶をもう一つ？」

「そ、パートナーが負けて失ったのなら、その相方である僕がフォローするのが筋だからね」

「う、け、けど、ちゃんと解散したわよ」

「あんなので納得できない」

この子が負けたから僕が何とかする。それは別に特別な事では無かったと思う。一人で何でもできる訳じゃない。だから助け合うのは当たり前前の事だろう。

「で、最初は一人で探す気だったわけだけど、結局ネプギアさんたちに手伝って貰ったわけです。一人よりも二人、ってね」

「……アンタ今までの話から言わなくても良い事とか解らないの？」

しれっと言う僕に、ユニ君は白い眼をしてそう言った。まったくもってその通りだと思うのだけど、それが事実なのだから仕方が無い。

「解ってるよ。けど、僕にとってはそれは重要じゃないからね」

「どういう意味よ」

「君がどう思うかもある程度予想してたけど、そんな事より会って話をする方が大事だったから」

あの時は納得も理解もできなかった。だから、ユニ君と話をした



かったと言う訳だ。ユニ君の気持ちと僕の気持ちを天秤にかけて、自分の気持ちを取っただけのことだ。

「……アタシと話したかった？」

「そうだよ。あんな別れ方されたら、誰だってそう思う。極め付けに泣いてたしね」

「だ、だから泣いてなんかない！」

「何をいまさら」

泣いていたと言う指摘に文句を言ってくる。その様子になんか少しばかり元気が出て来たのが読み取れ、素直に嬉しく感じた。沈んでいるよりも、少しばかりうるさいくらいが良い。

「つと、話が脱線してきてるね。つまり、僕だって君に会うだけでネプギアさんやケイさんに手伝って貰って漸く会う事が出来たんだよ」

「それがどうしたのよ」

ユニ君が不思議そうに問い返す。

「つまり、一人じゃ何にもできなかった訳です」

「……そうなるわね」

「領かれると結構堪えるね。兎も角、誰だって足りない事があるのが当たり前なんだ。だからこそ、誰かに補って貰う事で強くなれる」

「そうね。きつとそうなんだと思う」

ユニ君は素直に頷いた。

「じゃあ、なんでネプギアさんは君より強いんだと思う？」

「それは……支えてくれる人がいるから？」

「うん。きつとそうなんだろう。ネプギアさんも一人だったとしたら、君と大差は無いんじゃないかな」

「けど、アタシは一人でネプギアには皆が居る。勝てる訳……ない」

そう言い、ユニ君は言葉を遮ろうとする。涙目で頭を振るこの子を見ると、弱い子なんだなって言うのが良く解る。

「ねえユニ君。足りないなら補えばいいって僕は言ったよね」

「言っただけど、私を支えてくれる人なんか……」

「いるよ」

否定しようとするユニ君を静かに諭す。

「ケイさんが支えてくれる。ラストイシヨンの人たちが支えてくれる。防衛隊の人たちが支えてくれる。ネプギアさんたちが支えてくれる。そして、」

一度ユニ君の瞳を見詰めた後、最後に告げた。

「僕だって支えるよ」

その瞳から、涙が一筋零れ落ちた。

「無理よ……」

「どうして？」

絞り出すように言ったユニ君の言葉にただ聞き返す。

「だって、皆ネプギアを支えるからアタシまでなんて」

「人が一人しか支えられないなんて。誰が決めた」

ユニ君の言葉を否定する。

「けど、それでもネプギアには勝てないよ」

「なら、皆で強くなれば良い。今勝てないとしても、いつか勝てばいい。違うかな？」

「それは……」

そう告げると、ユニ君は目を見開いた。頭の中で言葉を反芻していた。

「一緒に強くなってくれるの？」

不安そうに聞いてくるユニ君。何度もそう言っているのに疑い深いこの子に笑みを浮かべ、一言告げる。

「君の相手だからね」

「そっか」

するとユニ君は小さく頷くと、酷く嬉しそうに笑った。漸く見せてくれた笑顔。ネプギアさんにも負けない程、暖かいものだったと感じた。

「ごめんね。少し挫けてたみたい」

「ん、立ち上がったね」

「当然でしょ。アタシはラスティションの女神候補生なんだから！」

そう言っつて勢いよく立ち上がると、ユニ君はにっつと笑った。出会った時に見た小悪魔のような笑顔。それは、この少女に一番似合っている笑顔だった。

「見てなさいよ、ネプギア。今は勝てないかもしれないけど、絶対追い越すんだから！」

ユニ君の元気な言葉。沈みゆく夕暮れと共に、溶け込むように消えていった。

## 9話 仲直り

「なんか、アンタには恥ずかしいところばっかり見られてる気がする」  
「ギアちゃんに負けたり、癩癩起こしてどこかに消えて、最後には一人でうじうじ泣いてたりしてた事かい？」

日が暮れ辺りが暗くなり始めていた為、教会に戻る途中にユニ君がぼつりと言った。肩を並べて隣を歩く素直になれない女の子に、にやりと笑みを浮かべながら答えた。我ながら意地の悪い言い方だとは思うけど、今のユニ君の場合は少し怒らせるぐらいが丁度良い。

「ちよ、そこまで酷くは無いわよ！ 良い奴だと思ったのに、ケンカ売ってんの!？」

すると、案の定ユニ君はぎやあぎやあと突っかかって来る。うん、つと小さく頷く。やはり落ち込んでるより、これくらいうるさい方がこの子らしい。

「んー。それだけ気の置けない仲になりたたって事だよ。あと、ちよつと苦労させられた事への意趣返しもある」

「ぐ、それを言われると強く出れない……」

むーつと上目使いで睨み付けてくる。言葉の通り、少しだけしおらしくなる。そんなユニ君がおかしくて、ついつい笑みを零す。

「何で笑うのよ！ ……て言うか、ギアちゃんってネプギアの事？」

「ん？ ああ、あの子とも仲良くなったからね。ギアちゃんって呼ばせてもらってるよ」

「……ふーん」

笑う僕が気に障ったのか、文句を言おうとしたユニ君が不意にとまり、何か釈然としなさそうに言った。僕がネプギアさんの事をギアちゃんと呼んでいる事が気になったのか、じとつとした目で此方を見てきた。うん、と肯定すると、何故か白い目で見られた。

「アンタ、アタシを支えてくれるって言ったわよね」

「言ったね」

むむむ、つと眉間にしわを寄せつつユニ君が言った。

「その割に、アタシよりネプギアの扱いの方が良くない？」

「そうかな？ あんまり変わらないと思うけど」

「いや、絶対違うわよ！ ネプギアの方がちゃんと女の子扱いされるじゃない！」

「いや、二人とも女の子扱いしてるけど」

ユニ君の言い分に耳を傾けつつ、答える。二人の年齢は見た感じ同じな為、特に分けて扱っている事は無かった。勿論、突き詰めて言えば二人の扱いに差はあるけど、僕にとっては二人とも大きく年の離れた女の子と言う扱いな事には変わらない。具体的に言えば、妹とその友達みたいな感覚だろうか。

「じゃあなんでアタシは君付けなのに、ネプギアはちゃんなのよ」

「ああ、気に障ったのはそこなんだ。正直、印象でしかないよ」

正直言つて、呼び方に他意は無い。ユニ君については第一印象だし、ギアちゃんに至ってはコンパさんを真似てるだけだった。

「それに、ずるいじゃない。ネプギアだけ愛称なんて。……アタシだって友達なんですよ？」

俯き気味になりながらユニ君は零した。ああ、そう言う事かと納得する。何をそんなに突つかかって来るのかと思えば、要するに愛称が羨ましかったと言う訳だ。思いのほか子供っぽい理由にくすりと笑ってしまった。

「だから、なんで笑うのよ！」

「いや、ユニ君も子供っぽいところがあるんだと思ってね」

「何よ、悪いの!？」

顔を赤くしながら怒るユニ君を見ると、どこか嬉しくなってくる。色々な表情を見せてくれると言う事は、それなりに信用してくれていると言う事だと思う。仲直りできたんだなと、しみじみと思う。

「友達だからって愛称で呼ぶわけじゃないよ。それに、ユニ君を愛称で呼ぶとか名前に無理だし」

「う、まあ、確かにそうだけどき。こう、なんかずるいのよ」

プイツとそっぽを向きながらユニ君が零す。

「別に名前の呼び方で友達の良し悪しが決まる訳じゃないよ」

そんな子供っぽい事を言う彼女が、最初の印象と違いすぎる事がおかしくて、くくつと笑いながらその頭を撫でてみる。彼女の扱いを妹と例えたけど、完全に妹扱いしている気がしないでもない。

「ちよ、子ども扱いするな！ 頭撫でるんじゃないわよ！」

「あはは、僕からしたら充分子供だし、仕方ないよね」

がーつと怒り狂うユニ君をからからと笑いながら相手にする。完全にじゃれあいだった。ぎゃあぎゃあ怒りながらも相手をしてくれるユニ君を見ると、仲直りが出来て本当に良かったと思った。

「それじゃあ、開けるよ」

「う、もうちよつと待って」

ラストেশヨンの教会に入り、ケイさんに報告する為、ユニ君と共に彼女がいる部屋の前に立っていた。何故扉の前にいるのか。それはユニ君の問題であった。

「ふむ、なら一度深呼吸しようか」

「うん」

「吸ってー、吐いてー」

要するに、ケイさんや教会の人たちにもたくさん迷惑をかけたため、少しばかり入り辛いと言う事だった。思っていたよりもずっと弱い子だった。だから、そんなユニ君が少しでも落ち着けるように、少しおどけて促す。

「うん、落ち着いたわ。もう大丈夫。行こう、ユウ」

「ん、じゃあ開けるね」

幾分か落ち着いたユニ君を一瞥し、扉をノックする。どうぞ、という入室の許可が下りた。そのままユニ君を伴い、歩を進める。

ちなみにユウと言うのは、先ほどの愛称諸々の話から出た結論だった。僕がユニ君を愛称で呼びようがないため、逆転の発想でユニ君が僕を愛称で呼ぶと言う事になったわけだ。彼女にユウと呼ばれると、少しばかりの気恥ずかしさと、学生だった頃の懐かしさを感じた。学生時代、友達からはユウと呼ばれていたから。事故に遭って以来、学

生時代の友達の大半とは疎遠になってしまったが、今も元気でやっているだろうか。そう考えると、少しだけの悲しくも思う。現状ではどうやっても会えないから。

とは言え、別れがあれば出会いもある。今は新しい友達もできていた。傍らを歩く弱いけど頑張り屋の女の子がその代表だった。

「ふむ、その様子だと仲直りできたようだね」

部屋に入るなり、ケイさんが言った。にこやかな笑みを浮かべている。

「ええ、お陰様で仲直りできました。有難うございます」

ケイさんにもお世話になっていた。まずは礼を告げる。

「いや、此方こそ礼を言うよ。落ち込んでこの世の終わりのような顔をしていたユニが、今は穏やかな顔をしているからね。僕じやこうはいかない」

「……そんなにアタシ、酷い顔してた？」

散々色々言われたせいだろう。ケイさんの言葉を真に受けたユニ君は、若干引き攣りながら零していた。

「軽く心配になるぐらいには、ね」

「あんな表情の友達がいたら、放って置けないよ」

二人してしれっと答える。

「う、あ、うう……、わ、忘れなさい！」

自分でも自覚があるのか恥ずかしそうに赤くなりながらも、ユニ君は怒ったように言う。とは言え、真っ赤になっている為迫力に欠けていた。僕とケイさんに大袈裟な身振り手振りを交え文句を言う姿は微笑ましい。

「ふふ、ユニはすっかり元気になったようだね。泣いた鳥がなんとやら。貴方のおかげだ。ありがとう」

「大事な友達が泣いていた。なら、何とかするのが友達つてもものだよ」ケイさんが小さく笑いながら言った。これまで見たケイさんの笑みとはどこか雰囲気違った。打算抜きの優しい笑顔。それを見ると、なんだかんだ言ってケイさんもユニ君が大事なんだろうと言う事が良く解った。この人もユニ君とは違う意味で素直じゃないのかも

しれない。

「こら、まだ話は終わってないわよ！」

「ああ、解ってるさ」

怒ってますと言わんばかりの様子なユニ君に、ケイさんは余裕のある笑みを浮かべた。その様子に、もう大丈夫だと確信できた。なら、自分はそろそろ退散しようかと考えたところで、扉がノックされる音が響いた。視線を向ける。その直前、ケイさんがにやりと笑った気がした。どうぞつと入室を促す。その様子から、また何か企んでいるのだろうかと思当をつけた。

「失礼します。……あれ、ユニちゃん？」

可愛らしい声で一言告げた後、女の子が入ってきた。聞き覚えのある声。見覚えのある顔。最初に入ってきたのは

「え……？ げ、ネプギア！」

ユニ君が零した通り、ネプギアさんだった。

「げって、げっていわれた！」

ラストেশヨンの教会内。ギアちゃんのそんな声が響き渡った。その声を聞いたあいちゃんが、後ろからひょいっと首を出した。

「あら、仲直りできたんだ」

「ああ、お陰様でね。皆さんありがとうございました」

「良いわよ別に。あの時も言ったけど、乗り掛かった舟よ」

礼を言うと、あいちゃんは軽く手を上げにっとなつた。直ぐ傍にいるユニ君を見て、どんな感じで話が落ち着いたかが解つたのだろう。その仕草が女の子の筈なのに、少し格好良かった。

「おー、良かった良かった。これで一件落着だね！」

「ですです。やっぱりギクシヤクしているより、仲良しの方が良いです」

続いて顔を出したのは日本一さんとコンパさん。二人とも素直に



喜んでくれているので。こちらとしても素直に嬉しかった。

「あ、四条さん、ユニちゃんも仲直りできたんですね」

「うん。見ての通り、何とか元通りになれたよ」

「そっか……良かった」

最後にギアちゃん。最初にユニ君にゲツて言われたのが微妙に堪えたのか、若干泣きそうになっていたが此方を見るとほっとしたように微笑んでくれた。相変わらず優しい子のようで、此方としても悪い気はしない。

「……それで、ネプギアは何しに来たのよ」

「なんで君はそんなに喧嘩腰なのさ」

「う、うるさいわね。ユウは黙っててよ！」

ユニ君は元に戻ったけど、相変わらずギアちゃんが相手の時は素直になれない様子に苦笑する。ユニ君にとっては一難去つてまた一難と言ったところだろうか。

「あう、えっと、血晶を持って来たんだ」

「そうなんだ。ならさつさとケイに渡せば良いじゃない」

「うう、ユニちゃん……。やっぱり嫌われたんだ……」

何時ぞやと同じく一杯一杯のようで、ユニ君の言葉には棘が見受けられる。その歩み寄る余地のない言葉に、ギアちゃんが泣きそうになっていた。前回は口を出さないうでいたけど、今回もそうしようとは思わなかった。ユニ君が素直になれない女の子なのは良く解っている。ならば、誰かが補ってあげれば良い。それが僕のやるべき事だろう。

「ネプギアさん」

「……なんですか?」

「良いこと教えてあげようか?」

「えっと、教えてください」

そんな意図をもって語りだす。唐突にそんな事を言いだした僕に不思議そうに首を傾けつつも、此方をじっと見据えた。

「実はね、ユニ君は君と仲直りしたいと思ってるんだよ。血晶のクエストを受ける時もその相談されたし。けど素直になれないからこん

なにツンツンしてるんだよ。いじらしくて可愛らしいところがあるよね」

「ちよ、ユウ!? あ、アンタ、何ふぎけたこと抜かしてんのよ!」

「ええ、それ本当ですか!」

恐らくユニ君にとつてネプギアさんに一番ばれたくない話。それを今此処で暴露する。すると悲しみに染まっていたギアちゃんの目に明るい光が宿った。嬉しそうに聞き返してくる。そんなギアちゃんと対照的にユニ君は焦ったようにこちらに詰め寄ってくる。まあ、それも仕方ないかな。恥ずかしくて話せない本音を暴露されれば誰だってこうなるだろう。襟元を両手で掴んでガクガクと僕を揺らし怒り狂うユニ君をしり目に、勿論だよとネプギアさんに片手を上げ告げた。

「ちが、そ、そんな訳ないんだから!」

「ユニ、それだけ必死に否定するのは凶星だと自分で言っているのと同じだよ」

否定しようと言葉を荒げるユニ君に、ケイさんがにこやかに言った。この場に限り僕もケイさんもユニ君の敵であるため、四面楚歌と言った具合だった。

「ユニちゃん……」

「あ、あう。う、うう」

期待のこもった眼でユニ君を見詰めるギアちゃん。その視線に押され、ユニ君は言葉を失う。自分の想いがばれた事が余程恥ずかしいのか、顔が真っ赤に火照っている。……良かれと思ってやったことだけど、後の事を考えるとちよつと怖い。

「……えげつないわね」

「公開処刑みたいだね」

「ユニちゃん、頑張るです!」

冷や汗を流すあいちゃんと日本一さん。そんな二人とは対照的に、ユニ君にエールを送るコンパさん。

「まあ、無理やりな形にしちゃったけどさ、仲直りしたかったんでしょ?」

「……うん」

「なら、頑張れ」

進退窮まった感じのユニ君の背を少しだけ押した。

「……ネプギア」

「何、ユニちゃん」

何度か深呼吸した後、ユニ君が観念したのかネプギアさんに向き直った。

「あの時は悪かったわ。ごめんなさい」

「え？」

「二度と話しかけないでって言った時の話よ。言いすぎたわよ……」

ユニ君の言葉に、ネプギアさんの表情が驚きが変わった。そして

「ゆ、ユニちゃん……っ」

「ちよ、なんで泣くのよ」

「だって、だって……っ。ユニちゃんに嫌われたと思ってたから、嬉しくて……」

感極まったのか、ギアちゃんは泣き出してしまった。流石に予想外だったのだろう。ユニ君も慌てていた。泣いてしまうほど気にしていたにも拘らず、僕を手伝ってくれた優しさには頭が下がる思いだった。

「まさかユニのあんな表情が見られるとはね。貴方やネプギアさんのおかげかな」

「どういたしまして。あとは、あの二人に任せとけば大丈夫かな」

ケイさんが傍に着て言った。視線の先には泣いてるギアちゃんを何とかしよう頑張っているユニ君が映る。流石のユニ君も泣いている相手を邪険にできないのか、慌ててフォローしようとしている姿は微笑ましい。こちらもう大丈夫そうだと見当がついたところで、ケイさんに尋ねる事にした。

「所でケイさん。少し聞きたい事があります」

「ふむ、なんだい?」

「ネプギアさんが言ってたんですが、血晶はシエアの力を増幅させる効果がありますか?」

「ああ、あるよ」

僕の質問にケイさんは頷いた。もしかしたらまた何か対価を求められるのではないかと覚悟はしたが、杞憂に終わったようで安堵する。幾らなんでも何かを聞く度に対価を求められては心が廃れてしまう。

「なら、シエアの力以外にも増幅させるものは?」

シエアの力を増幅すると言う裏付けを取ったうえで、本題に入る事にした。ネプギアさんは血晶を持った時シエアの力が増幅されていると言った。僕も妙な感覚を感じたし、それ以外の人は何も感じないとも聞いていた。その事が気になっていたので。

「いや、血晶が増幅させるのはシエアの力だけのはずだよ。以前に取ってきてもらった宝玉も出力の差はあれ、似たようなモノさ」  
「成程」

ケイさんの言葉を噛みしめる。シエアの力を増幅する効果だけがあると言った。となれば、僕がその力を感じる事が出来た理由がある程度絞られるわけだ。何らかの要因、例えば異界の魂として召喚された際に得た力などにより、自身がシエアの力を感じる事が出来る。或いは自分しか感知できない他の力がある。若しくは血晶自体が知られていないだけで他の力を備えている。それ以外だとすれば、

——僕自身がシエアの力を持っている可能性もある。

「血晶がどうかしたのかい?」

「ええ、少し気になる事があって」

「そうか。良ければ話を聞かせて貰うよ。君にはユニの事で世話になつたからね」

「ありがとうございます。しかしこればかりは話しても良いモノか」

ケイさんの言葉に考え込む。異界の魂。今考えている事を話すには、自分の存在についても語る必要があるように思えた。ラストイシヨンの教会の教祖に協力を得られたとすれば何かが解るかもしれない。

ない。だけど、我が事ながら信じて貰えるとも思えなかった。自分は異世界人です。なんて言ったところで笑われるのがオチな気がする。少しばかり考え込む。

「話すだけ話してみるだけでも違うんじゃないかな？」

「そうですね。ではケイさん。『異界の魂』と言う言葉を知っていますか？」

悩んでいても何も解決しないだろう。だから少しだけ情報を出す事にした。ケイさんほどの人だ、仮に知らなかったとしても興味があればその情報を元に何か調べてくれるかもしれない。今、全てを話したところで信じて貰えるとは思えないけど、自分で調べた裏付けがあれば信じてくれるかもしれない。彼女の能力の高さを利用するようでは退けるけど、それ以外に妙案は思いつかなかった。

「いや、聞いた事のない言葉だね。それが関係しているのかな？」

「ええ。ですが知らないようでしたら話さないでおきます。正直、自分でもイマイチ信じられませんし」

「つまり、それだけ常識外れな事を考えていると言う訳だね」

「そんなところですよ」

ケイさんの言葉も仕方が無い。異界の魂の召喚と言うのは、本来この世界にある術ではない。別の世界で禁忌にあたる術なのだ。異界の魂としての知識が、それを僕に教えてくれていた。だけど僕は呼び出された。ならば何らかの要因により術自体は存在するのだろうか。そうでなければ僕がこの世界に存在する意味が解らない。

「何やら君にも複雑な事情があるようだね」

「はい。詳しく語れない事は心苦しいけど……」

「いや、構わないさ。君には君の事情があるのだろう。無理に僕が根掘り葉掘り聞くのもマナー違反だという訳さ。それにヒントは貰ったからね。なら、僕としては幾らでも調べようはある」

そう言って笑うケイさんに苦笑を浮かべる。こちらの思惑など筒抜けなんだろうと理解すると、しみじみと思った。本当に食えない人だ、と。

「で、アンタ達は何をこそこそ話しているのよ」

「こそこそとは人聞きが悪いね、あいちゃん」

「ふふ、確かに心外だよ」

ケイさんと話していると、あいちゃんことアイエフさんが話に入ってきて言った。ちなみにユニ君の方はと言うと、泣き止んだネプギアさんと日本一さんコンパさんを交え、ぎこちない様子ではあるけど談笑しているようだった。

「なんとなくアンタたち似てるわね。押ししても退いても揺らぎそうにない雰囲気とか」

「そうかな？ 正直ケイさんには勝てる気がしないよ」

あいちゃんの言葉に首を傾げる。正直、僕よりもケイさんの方が何倍も食えない人物だろう。

「褒め言葉として受け取って置くよ」

薄い笑みを浮かべてそう応えるケイさんを見ると、心底そう思う。「やっぱり似てるわよ。って、そうじゃなかった。結局何の悪だくみをしてたのよ」

「悪だくみって、悪事確定なんだ」

ぼそりと呟くも、あいちゃんは聞かなかったことにしてケイさんを促す。

「血晶について聞かれていたのさ。どう言う物なのか、ってね」

「ふーん、そうなんだ。そういえば向こうでも不思議な感じがするって言ってたわね」

そう、とあいちゃんは納得したように頷いた。そのまま青いコート  
の懐から紅い石を取り出しケイさんに渡した。自分も先程渡した石、  
血晶だった。

「それは兎も角、こっちも血晶を渡すわ。四条が先に渡したからって、  
受け取り拒否なんかしないでしょうね？」

「ふふ、大丈夫だよ。複数あるならそれだけ色々な使い道がある」

「なら、約束通り、ゲームキャラの事について教えて貰うわよ」

「ああ、そのつもりさ。だけど少しだけ待ってもらえるかな、向うも  
話の途中だろうし、僕としても四条君にもう少し話がある」

「そうね、なら、終わったら呼んで」

そこでいったん話を切り、ケイさんが此方に向き直った。さて何だろうかと姿勢を正す。

「四条君にラストイションの教祖として依頼をしても良いかな？」

「教祖様直々とはまた。聞くだけなら聞かせて貰いますよ」

今回の血晶の入手も教祖からの依頼ではあるのだが、本人に直接頼まれるのは初めてな為少しだけ驚く。

「ああ、有難う。君たちが血晶を手に入れてくれたことで、今進めている計画が近々本格的に行えそうなんだ。そのテストにユニと一緒に参加して貰えないかな？」

「ユニ君と、ですか？」

「ああ。君にはユニも懐いているようだし、適任かと思つてね」

「成程」

少しばかり考え込む。とはいえ、答えは直ぐに出た。僕自身がまだユニ君を放つて置けないし、ケイさんと繋がりを持つておくことも必要な事である。ならば、断る理由の方が見当たらない。

「解りました、受けさせてもらいます」

「そうか、ありがとう。詳しい事はまた後日に連絡するよ」

それで話は終わりだった。詳しい事を聞いたわけではいけれど、ユニ君と一緒にこなすような仕事である。簡単な事じゃないんだろうなど見当だけはついていた。

「えー、ユニちゃん一緒に来てくれないの？」

「ああ、もう、無理つて言ってるでしょ！ ユウ、ちよつと来てー！」

「おや、呼ばれたようだね。話したい事は全部言つたし、行つてくるよ  
良い」

ケイさんとの話が終わった後、丁度良いタイミングでユニ君に呼ばれた。少し怒っているような声音から、また何かやらかしたのかと振り返る。ユニ君が、困っているけどそれでどこか嬉しそうな複雑な顔をしていた。その表情を見るに、ギアちゃんとのわだかまりも何とかなったように思えた。

「ああ、そうさせてもらうよ」

薄く笑うケイさんに頷き、歩を進める。視線の先では、どことなく

嬉しそうなユニ君が困ったように笑っていた。



## 10話 ギョウカイ墓場

「よく来てくれたね四条君。早速だけど、仕事の話に入らせてもらおうよ」

「先日はどうも、ケイさん。聞かせて貰います」

ラストイシヨンの教会。ギルドを通して呼び出しを受けた僕が案内された部屋に入るなり、ケイさんは薄い笑みを浮かべたまま言った。挨拶もそこそこに話の先を促す。以前にラストイシヨンの教祖からの依頼をこなしてから、既に二週間ほどが過ぎていた。ケイさんは何やらある計画とやらを進めているらしく、依頼で提出した血晶により、その計画が大幅に進んだということらしかった。今日ここに来る前にも一度連絡があり、その計画で使う道具が無事完成したと言う事で、今回僕は呼ばれたと言う訳だった。

「君に頼みたい仕事は大きく三つ」

僕が話を促すと、ケイさんは右手を軽く上げ、人差し指を立てながら言葉を続けた。

「一つは、ユニに直接渡してある機械、『異界の門』の動作テスト」

「異界の門、ですか？」

聞きなれない言葉に問い返した。異界の門。異界の魂と言う存在の自分としても、どこか気になる名だった。

「ああ。異界へと繋がる転移の門を生み出す道具。それは血晶の力を応用し、シエアの力を増幅させ本来生身の人間が辿り着けない場所に行くための装置さ。だから省略して異界の門」

「生身の人間では辿り着けない場所、と言うのは？」

「ギョウカイ墓場。女神たちが、ユニの姉が捕えられている地だ」

「……ユニ君のお姉さんが」

ケイさんの言葉に少し驚くが、直ぐに納得もした。彼女はラストイシヨンの教祖であり、実質この国のナンバー2と言える。彼女の性格や能力から考えても、トップと言うよりはブレインなのだろうか。その為、本来居る筈のトップがいらないと言う現状を打開するために出した案が、今回のテストに使う異界の門なのだろう。ケイさんの言う事

が事実なら、女神の救出と言うのは普通の人間にはとてもできそうにはない。そもそも女神が生きているのかという疑問は、以前ユニ君に聞いたネプギアさんの話で解決していた。彼女は女神たちと共に捕えられ、ただ一人助け出された。詳しい事は解らないけど、確かに生きて助け出されたのだ。ならば、女神が生きている可能性は十分にあると言える。

「二つめ。そのテストを行うと一度ギョウカイ墓場に向かう事になる訳だ。そこで、ユニの護衛をして欲しい」

ケイさんが中指もたて、指を二本立てながら言った。

「……護衛と言う事は、ユニ君の方もテスト以外に仕事が？」

「少し違うよ。ギョウカイ墓場に行くにはそれ相応のシエアの力が必要なんだ。一度行けば帰ってくるためにもそれ相応の力と時間が必要となる。ユニの力が回復するまでの間、あの子を守ってやってほしいと言う訳さ。余裕があれば、情報収集も頼みたいかな」

「成程」

ケイさんの言葉に頷く。つまり、今後女神を救出するための下準備と言う事だろうか。最初に道を作り、ある程度の情報を収集する。その後、本格的に動き出すと言う事だろう。一度行ってしまえば、どの程度力を消耗するかもわかると言う事だ。

「そして三つめだけど、その前に四条君、これを持ってもらえないかな？」

「何ですか、これは？ 何か不思議な力を感じますし」

ケイさんに二つの物を渡される。それは、腕輪と石だった。腕輪は銀の装飾を施され、紅い石が印象的な小さな腕輪。そして、石はどこか温かい光を帯びた綺麗な水晶であった。どこか不思議な力を感じた。特に小さな水晶。強く在りながら、どこか優しい。そんな力だった。

「シエアクリスタルと、シエア増幅器」

「シエアクリスタル？」

しげしげと受け取った物を眺めながら聞く僕に、ケイさんは静かに答える。後者は名前からどんな効果か想像できるけど、前者はいまい

ち想像出来なかった。

「シエア増幅器はその名の通り、シエアを増幅させる機械さ。君とネプギアさんたちが持つて来てくれた二つの血晶の片割れで作った物だよ」

「異界の門とシエア増幅器。二つの血晶で作ったものですか」

「ああ、そう言う事だね。そして、最後のシエアクリスタル。これは、まだノワールが、ラストイシヨンの女神が健在だったところに作って置いたものさ。女神の力、シエアの力を凝縮させたもの。これがあれば女神の力を使える。異界の門に二つ。そして、シエア増幅器に一つ使われている。有事の際にと作っておいたものだけど、本当に役に立つ事になるとは思わなかったよ。そして三つめだけど」

そこまで言ったところで、ケイさんは三本目の指を立てた。そのまま目を閉じ軽く深呼吸した後、言った。

「可能ならば今渡した二つを用い、女神たちを奪還してほしい」

それは、予想の斜め上に行く難題だった。

「大体は解りましたけど、一つ聞いても良いかな」

「構わないよ」

ケイさんの話を聞いたところで、疑問に思った事を尋ねる事にした。

「三つめ。幾らなんでも急ぎ過ぎじゃないのかな？ テストと同時に奪還と言うのは、色々段階を飛ばしすぎな気がします」

色々と思った事はあった。だが、最初に浮かんだ疑問はそれだった。テストと言いながら、ケイさんが言っているのは実質、女神の奪還作戦と言えなくもない。

「君の言う事は尤もだよ。けど、あまり悠長に事を構えている時間が無いんだ。ユニたちが頑張ってくれていたけど、シエアは日に日に衰えてきている。余力があまりないんだ」

「……それほどないんですか？」

「ああ、残念ながらね。増幅器は兎も角、異界の門はシエアクリスタルの力以外にもユニの力も用いる事で、発動させるんだ。だから、まだシエアに余裕があるうちにノワールを、他の女神を救出したい」

ケイさんは淡々と言葉を続ける。いつも通り冷静な表情で告げられる言葉は、だからこそ純然たる事実なのだと思える。理解する事が出来た。

「だからこそ、無茶な作戦を実行すると」

「君には、そしてユニにもすまないとは思っているよ」

「……、解りました。できる限り、努力してみよう」

ケイさんが頭を下げたところで、折れる事にした。元々やる心算の仕事ではあった。予想以上の仕事であったため言いたい事が色々あったけど、それを全て承知の上で頭を下げるケイさんも見たら、言うべき言葉が無くなってしまったからだ。

「そうか、ありがとう」

だからだろうか、そう言っただけで頭を下げるケイさんはどこか小さく見えただけだった。

「来たわね、ユウ」

「果し合いでもする気なのかな?」

ラストイション教会の敷地内。青々と生い茂った大樹の緑が、風に撫でられ心地の良い音色を奏でている。広い場所が取れる為、何時ぞやの大樹の下でユニ君と合流するなり、彼女は言った。

「なんでそうなるのよ!?! 別にアンタとアタシが戦う理由が無いじゃない」

「いや、なんというか、両腕を組んで仁王立ちされながら言われるとそんな気がしたんだよ」

むっとしながら言ってくるユニ君に、苦笑しながら返す。それでもご立腹なのか、じとーっとした目で此方を睨み付けてきた。

「さて、冗談は置いておこうか」

「……アンタさつき本気で言ったんじゃないの?」

「ユニ君って意外と細かいこと気にするよね」

「うっさいわよ！」

数日振りに会ったユニ君は調子がいいのだろうか、いつも以上に元気に感じた。これから行う大仕事を前のカラ元気なのかもしれないが、それでもこの子の元気な姿を見ると何処か安心していた。大変な仕事だろうけど、友達と一緒になら頑張れると言う事だろう。

「異界の門、だったかな」

「ええ、これよ。アンタ無理に話を変えたわね」

ユニ君が左手に付けた黒い腕輪を見せてくれた。先ほど僕が受け取った銀色の腕輪と同じく、紅い石がはめ込まれ、その左右には二つの水晶が付けられている。血晶とシエアクリスタルだった。そう言えば宝玉は見当たらないので、腕輪の中とか目に見えない部分にでも使われているのかもしれない。案外溶かしていると言う可能性もあるかも。

「あはは」

「誤魔化すな！ はあ、もう良いわよ。終わったら追求するんだから！」

「それはやめてほしいなあ」

ユニ君の言葉に視線をずらし苦笑を浮かべる。帰ったら帰ったでござ立腹なこの子の相手をするとなると、少しばかり気が重いからだ。まあ、嫌な訳では無いけど。

「もう。じゃあユウ、準備は良い？」

「ああ、大丈夫だよ」

ユニ君は一度溜息を吐くと、それで気持ちを切り替えたのか僕の間を見てそう聞いた。これから異界の門のテストを始める。そう言っていた。手にした長釣丸を握り直し、頷く。

「よし、ならやるわよ。——アクセス！」

僕の返事に満足したのかユニ君は小さく笑うと、そう宣言した。その場に不思議な力が収束し、ユニ君を包み込む。シエアの力。それが、辺りに風を巻き起こし、大樹の緑をざめわめかせる。風が強い。左手で目を庇うように覆う。ユニ君のいる方から強い光が迸り、やが

て辺りに静寂が戻った。左手をおろし、視線をユニ君の方へ戻す。

「よし、こつちも準備完了よ」

そこには黒と銀色をした女神の姿になったユニ君が立っていた。「女神化、ね。この前見た時はゆっくり見ている間が無かったけど、なんと言うか訳が分からないよね」

以前彼女の変身を見た時は、ネプギアさんと戦っている時だった。陽の光に照らされて輝く銀色の髪が綺麗で、少しだけ見とれてしまった。候補生とは言え女神と言うだけあって、人間離れしている。まあ、根本的に人では無いのだけれど。

「まあ、人のユウからしたらそうかもしれないけど、あんまりそういう事言わないでよ。結構グサツと来るんだから！」

女神状態のユニ君が拗ねたように呟いた。それに肩を竦める。彼女を貶そうとしたわけでは無かったけど、そう聞こえたのだろう。素直に反省していた。

「ああ、それは失礼。ごめんね。別に君が変だって言ってるわけじゃないんだ」

「解ってるわよ。ユウは、アタシの味方なんですよ？」

すると、してやったりと言わんばかりの笑顔を浮かべ、ユニ君は言った。その表情を見ると、ああ、この子は女神だったとしてもやっぱりユニ君なんだなあ、と思い知ることができた。僕にとっては可愛らしい妹分。そんな女の子だった。面と向かって言ったら怒られるだろうか？ 子ども扱いするなって。

「そのつもりだよ。……くく、改めて言われるとちよつと恥ずかしいね」

「あら、照れてるんだ。珍しい」

「そういう日もあるって事だよ」

「いや、やっぱりいつも通りのアンタだわ」

そう言い小さく笑うと、ユニ君は呆れたようにため息をついた後、もう一度笑った。

「じゃあ、異界の門を使うから……ん」

そう言ってユニ君は右手を差し出してきた。

「えつと、なになかな？」

「ああ、もう！ 手を繋げって事よ！ それぐらい察してよ」

「ああ、そう言う事か。では失礼してッ」

少し恥ずかしそうに捲し立てるユニ君に納得してその手を握った。瞬間、何かが全身を駆け巡る。例えるなら静電気。彼女に触れた瞬間、バチつときた。

「どうかしたの?」

「……いや、なんでもないよ」

そんな僕の様子を怪訝に思ったのか、ユニ君は尋ねてきた。なんでもないよと首を振る。どうやら彼女の方は何も感じなかったようで、僕の事を不思議そうに見上げていた。その様子から僕だけ何かを感じたのだと、見当をつける。さて、どう言う事なのだろうか。今考えなくても解る事では無いか。

「じゃあ、気を取り直していくわよ」

「ああ、何時でもどうぞ」

そう言うとユニ君は少しだけ強く僕の手を握った。同時に、彼女の左手を中心に強い力が集まってくるのを感じ取った。何かが起こる、そう思った瞬間、強い光が辺りを包み込んだ。それは、ユニ君が女神になる時の光に似ていた。思わず目を閉じる。何か強い力につき動かされるような衝撃を感じた。その力に抗わず、身を委ねた。数舜の流動、やがてその動きが穏やかになり、止まった。目を開ける。

「はあ、何とか着いたみたいね」

「ここは……」

目に映ったのは、聳え立つ岩山に、砕かれたような電源プラグ。あちこちに壊れた機械のようなモノが転がり、どこか異様な雰囲気醸し出している。そこは、僕がゲームギョウ界に召喚された場所であった。

「どういう事なんだ?」

ユニ君にも聞こえないような小さな声で呟く。確かに僕はこの場所を知っていた。

「どうかしたの?」

「いや、何でもないよ。何かすごい雰囲気には驚いただけ」

心配そうに尋ねてくるユニ君に、先ほどと同じく何でもないと答える。幾つかわかったことがあったため、だからこそ情報を整理する時間が欲しかった。ユニ君に話すかどうかは、一度落ち着いてから決めたい。

「そっか、ならいいんだけど。ふう……」

そういい、ユニ君は変身を解いた。ケイさんは異界の門を使うにはユニ君の力も多く使うと言っていた。どれほどの消耗かは解らないけど、溜息を吐きその場に座り込んだこの子を見ていると、相当な消耗だとは理解する。幾らユニ君とは言え、確かにこれは護衛がいるだろう。

「隣、失礼するよ」

「あ、うん。ちよつとごめん」

傍らに長釣丸を抱くようにして座り込む。するとユニ君は小さく頷き、そのまま肩に頭を預けて来た。少しだけ驚き、隣を見る。ユニ君は目を閉じていた。その姿を見て言葉を出すのを止め、暫く黙る事にする。数舜にも数時間にも思える沈黙。やがて、小さな寝息が聞こえ始めた。

「ん……、あれ、アタシ」

どれぐらい時間が経っただろうか、傍らで眠る少女が目を覚ましたようだった。眠っているこの子を起こす訳にもいかない為、暫くぼんやりとギョウカイ墓場の異様な風景を見詰めつつ考え事をしていた。そのおかげか、自分の中でもある程度情報を纏める事が出来ていた。結論だけ言うならば、今はまだ話す時では無いと判断していた。

「おはよう。漸く起きたようだね」

「なんでユウが!? ……、あ、そう言えばアタシ、一気に力使ったんだっけ」

「みたいだね。まさかその場に座り込んで寝るとは思わなかったよ」  
暫くは寝ぼけていたようだが、少しずつ何があったのか思いだし、



ユニ君は恥ずかしそうに小さくなった。その様子がおかしくて、笑みを零す。

「悪かったわよ」

ばつが悪そうに言うユニ君に気にしていないと軽く首を振り答える。

「とりあえずは、第一段階が完了と言ったところかな」

「そうね。二人ぐらいなら、何とか転移できる。ただ、すっごい疲れるわね」

「寝ちやうぐらいにね」

「ぐ、謝ってるじゃない！」

むきになるユニ君をからからと笑った。

「さて、と。もう一度転移の方はできそうかな？」

その場から立ち上がり、軽く背を伸ばしながら言った。

「……まだ暫く無理そうね。シエアと言うよりは、アタシの体力が足りない」

「そっか。なら、暫くこの辺りを調べてみようか」

「そうね」

どうやら直ぐには回復しないようで、辺りを少し調べてみる事にした。座って居るユニ君に手を差し伸べる。

「あ、ありがとう」

「どういたしまして」

少し恥ずかしそうに手を取る姿を見ると、難しい年頃なんだろうなつと笑みが零れる。気が強いけど少し照れ屋なところがある。微笑ましかった。

「そう言えばユニ君のお姉さんって、女神なんだよね」

「そうだけど、どうしたの？」

ギョウカイ墓場をゆつくりと歩きながらユニ君に尋ねる。墓場全体には朽ちた物がいたる所に落ちており、どこか物寂しかった。その所為か禍々しい雰囲気か辺りに充満しており、それを見ているだけでもどこか気持ちが悪えてしまうような気がする。

「いや、ユニ君のお姉さんも女神と言う事は、やっぱり変身するのとかと

思ってたね」

「するわよ。お姉ちゃんは、アタシよりも凄いだから！」

「へえ、君が凄いつて言うなら相当凄いだろうなあ。やっぱり姉妹って言うだけあって、戦い方が似てるとかあるのかい？」

ユニ君のお姉さんには合った事が無いが、誇らしそうに言うこの子の顔を見ると、よつぽど凄いだろうと素直に思えた。

「戦い方は全然似てないかな。アタシは銃だけど、お姉ちゃんは剣を使うの。お姉ちゃんと一緒じゃ、勝てると思えないから……」

「君にそこまで言わせるとは余程すごいんだね。じゃあさ、ユニ君は変身すると外見が結構変わるけど、お姉さんも変わるのかな？」

最初は誇らしげだったが、少し沈んだようにユニ君は教えてくれた。その様子から、自分では姉に勝てないと思っっているのが読み取れる。この子にとってお姉さんと言うのは憧れであり自慢であり、最大の壁なのかもしれない。

「ええ、変わるわよ。やっぱり特徴的なのは髪の毛かな。普段はアタシと一緒に黒だけど、変身したときは銀髪になるの。プロセスサユニットを展開して空を駆る姿は、凄く格好良いんだから！」

「なるほど。姉妹らしく二人とも似たような感じになる訳だね」

話を聞く限り、変身前も後も二人は姉妹と言うだけあって似ているようだ。今回の仕事は可能ならば女神の救出も含まれている。ある程度の特徴を聞けば、僕一人でもギョウカイ墓場でなら見つけ出す事は可能だと思えた。普通の町ならばまず無理だろうが、この場所は普通の手段では人は来れないらしい。ならば、それほど多くの人がいる筈が無いからだ。

「……なんだ、アレは」

ゆつくりと警戒しながらギョウカイ墓場を進んでいくと、奇妙なものを見つけた。生物の手足のように伸びたつた。触手と言うべきだろうか。それが四人の女性を拘束する様に絡め取っていた。捕えられている女性達は全身に傷を負っているらしく、力なく項垂れ捕えられている。いたる所から見受けられる傷が痛々しかった。

「うそ……、お姉ちゃん？」

「え?」

隣を歩くユニ君が呆然と零した。捕えられた女神たち。目標であり、大好きな姉。目と鼻の先に存在している。それも仕方が無い事だったのかもしれない。だから、反応が遅れた。今のユニ君に冷静な判断ができる訳が無かった。辺りにシエアの力が集まり、まばゆい光が煌めいた。

「お姉ちゃん! 待ってて、今すぐ助けるから!!」  
「ちよつと待——」

制止する間も無く、ユニ君は手に持つ大型の銃を構えた。エクス・マルチ・ブラスタ  
X・M・B。それがユニ君が女神化したときに持つ武器の名だった。そのまま、女神の一人をとらえている触手に向け銃弾をまき散らす。その威力は女神が持つに相応しいもので、見た目通り凄まじい一言だ。そして、その力を解き放った時に響く音も又、見た目通りと言えた。辺りに凄まじい砂埃と轟音を響かせる。つまり

「な、な、何がおこったつちゆ!? 敵、敵ツちゆか!? ジャ、ジャツジ・ザ・ハード様、敵襲つちゆ!!」

僕たちの存在を辺りに示す事になってしまっていた。そして、女神が囚われていると言う事は、当然とらえているものも存在することを意味していた。自分の考え通りに、何処からともなく慌てたような声が響き渡った。数舜後、凄まじい二つの圧力が近付いて来るのが解った。ギョウカイ墓場全体が震えていると思うほどの強烈な圧力、ビリビリと感じた。反射的に魔力を収束させながら叫ぶ。

「ユニ君、敵に備えて!」

「でも、お姉ちゃんが!」

僕の言葉を聞いたユニ君が焦ったように返した。砂埃を風の魔法で無理やり晴らした先には、四人の女神をとらえる触手が依然として存在している。異界の門を起動したため、力が落ちていたのだろう。触手を断ち切る事はできないでいた。自身の失策と、どうしようもない状況に押し込まれそうな現状に焦っているのが解った。ならば、僕は彼女を支えるだけだ。

「女神さまは、僕が何とかする」

「でも……、あ、そうか。増幅器」

「ああ。だから少しだけ頼むよ」

腕に付けたシエア増幅器とシエアクリスタルを見せながら言った。そのまま装置を起動し、シエアクリスタルを手にした。瞬間、どくと全身を衝撃が駆け巡った。女神化したユニ君に触れた時感じた者を何倍にも増やしたような感覚。それが駆け巡った後、全身から力が溢れるのが解った。できる、初めて剣を使った時の感覚が蘇った。その感覚のまま、シエアクリスタルを長釣丸に浴え、力を解き放つ。

「——魂<sup>みたまくだき</sup>砕」

一瞬、長釣丸が発光した。まるで女神が変身する時のような淡い光を帯び、その刀身をこれまでとは異なる形に変貌させる。それは血のような赤黒き剣。これまでの長釣丸と違い、特徴的なのは蛇腹のような刀身。光が収まった時長刀から、蛇腹剣へとその姿を変えていた。

それは、異界の魂として自分が得た力だった。剣の記憶を読み取り再現する力。普段の僕はまだ剣から経験を再現する事しかできないが、シエアクリスタルと増幅器の力を借りる事で今の自分には出来ない次元の能力の行使を可能としていた。剣の記憶から、他の剣を読み取り自身の宿す魔力により一時的に再構築する力だった。本来用いる魔力を、シエアクリスタルの力で代用する事により、魂砕を具現化させることに成功していた。

その剣は、魔剣。かつて自分と同じく召喚された異界の魂。その男が使ったとされる剣であった。その力は、例え神であろうと魂すら打ち砕く。そんな魔剣であった。再現しているだけというにも拘らず、ぞわりとした悪感が全身を包み込んだ。それに歯を食いしばって耐え、強く握った。

「アンタ、その武器は」

「話は後だよ。まずは」

女神を捕えているモノを砕く。そう目で告げ、自身の魔力を開放する。魂砕に魔力を注ぎ込み、一気に踏み込んだ。

——ソウル・クラッシュ

シエアの力と魔力とが混じり合い、剣が凄まじい威力を帯びる。ユ

二君の持つX・M・Bですら決定打にならなかった触手をまるで泥を斬るかのよう抵抗なく引き裂いていた。ずるりとユニ君と同じ銀髪の女神を拘束していた触手が墜ち、そのまま女の子が地に落ちる。「つと」

「うあ……」

そのまま魔力を維持したまま、女の子を受け止める。抱き留めた瞬間にばちりとユニ君に触れた時と同じ感覚が全身を駆け巡った。苦しそうな呻き声をあげ変身が解除される。ユニ君と同じ黒髪の女性が苦しそうではあるが、何とか息をしていた。

——月光聖の祈り

右手に持つ魂砕に魔力を維持したまま、左手で抱くユニ君のお姉さんだと思われる女の子に癒しの魔法を施す。あまり得意ではないが、そんな事を言っている場合では無かった。気休めかもしれないが、それで女の子の表情が幾分か和らいだ気がした。

「お姉ちゃん!？」

「この子を頼むよ」

ユニ君が此方に走り寄って来る。すぐさまお姉さんをユニ君に託し、魔力を引き出し言葉を紡ぐ。

——エクス・コマンド

それは、身体能力を向上させる魔法。自身が初めてつけた魔法だった。

——ファイン・コマンド

それは、速度を向上させる魔法。ユニ君を助ける為、ネプギアさんに施した魔法だった。

——パワー・エクステンション

それは筋力を増強させる魔法。武器による攻撃や、農作業などを補助する魔法だった。

——ガード・エクステンション

それは身体に魔力の鎧を纏う魔法。傷つける悪意から身を守る為の魔法だった。

矢継ぎ早に四つの魔法を重ね掛けし、残る魔力を魂砕に注ぎ込み、

強大な圧力に備えた。魂砕を構えなおしたとき、遂に圧力の主が到達した。

「以前に続き、また侵入者か。女神どもの信奉者がまだ居るとはな」  
そう言い、目の前に現れたのは血のような紅の髪をした女性だった。この世の者とは思えないほど妖艶な女性なのだが、その右目には黒き眼帯が身に付けられ、手には大鎌を携えている。アンバランスな組み合わせの筈なのに、異様なまでにしつくりと来る。しかしそれ以上目を見張るのは、彼女の背後に展開されている物。女神だけが使う筈のプロッセッサユニットだった。彼女も女神なのだろうか。それは解らないが、目の前の女性がギョウカイ墓場全体を震撼させるような圧力を放っている事だけは解った。

「くくく、ふははははは！ 何やら五月蠅いと思えば、以前取り逃した人間だとはなあ！ くくく、嬉しいぜえ。以前は舐めた真似をしてくれたな。あの時の借りをしつかりかえさせてもらおうぞ!!」

そしてもう一つの声。以前に出会った黒の巨人。大斧を肩に担ぐように構え、その無機質なはずの目から強烈過ぎる殺意を放ち僕の手を見据えていた。ざわりと、その場全体が凄まじい圧力に満たされていくのが解った。言われなくても解る。目の前に存在する二人は、今最も出会ってはいけない敵であった。つーつと一筋、冷や汗が頬を伝った。

「僕としては、二度と会いたくは無かったんだけどね」

「そうは行くかよ、お前にはたつぷり俺様に付き合っつて貰わなきゃいけないんだからな！」

そう軽口を返す僕に、黒の巨人は心の底から嬉しそうに言った。

「……アンタ、アイツらの事知ってるの？」

「少しね。けど、話している余裕は無いかな」

ユニ君の質問に端的に答える。女性の方は初めて見る顔だったけど、黒の巨人の方とは少なからず因縁があった。

「……うあ、ユ、ニ？」

「お姉ちゃん!？」

その時ユニ君に抱かれていたお姉さんが、うつすらと瞳を開け言っ

た。その目は赤の女神を捕えたまま苦しそうに告げる。

「アイツと……、戦っちゃダメ……」

息も絶え絶え、何とかそれだけ告げ彼女はまた意識を失う。凄まじい圧力を感じ取り、黒の女神であるユニ君のお姉さんが警告してくれたのだろう。ならば、その思いを無駄にする訳には行かない。

「ユニ君、転移はできるかい？」

「二人分なら何とか……。三人は絶対無理。それに、二人分でも力を集中する為に少し時間が……」

「解った、何とかするよ」

ユニ君の言葉を聞き、覚悟を決める。全身に纏った魔法を体に馴染ませるため、軽く武器を振るった。普段の魔法を施していない状態では視認する事すらできない程の速さで、魂砕が振るわれる。補助魔法の重ね掛け。多すぎる魔法は体に大きな負担をかける。良薬でも飲み過ぎれば毒になるのと同じだった。過ぎたるは猶及ばざるが如し。そんな諺を思い出すが、それを無視して施していた。

「アンタどうするつもりなの……？」

「僕がここに残るよ。だから君はお姉さんを連れて逃げるんだ」

「でも、それじゃあアンタが……」

対峙する二人から視線を外さずにユニ君に言い聞かせる。

「それが僕の仕事さ。君を無事帰還させる。お姉さんを救出する。二つとも果たせる」

「そう言う事言ってるんじゃないわよ!? それじゃアンタが帰ってこない」

「けど、それしか無い」

声音からして、きつと泣きそうになっている事が解った。不謹慎だが、そんな彼女の様子が少しだけ嬉しかった。僕がユニ君の事を大事な友達だと思ってくれている様に、この子も僕の事を大事に思ってくれている事が解ったから。口元に小さな笑みが浮かぶのが解った。なら、僕は頑張れる。

「アタシも一緒に戦うから！ だから一緒に」

「お姉さんを守りながらかい？ そんな事無理だって、君が一番解つ

「ているだろう」

一緒に行こうと言うユニ君の言葉を切り捨てる。彼女の顔を見なくても震えているのは解っていた。目の前の相手はそれ程に強すぎるから。だからユニ君は泣きそうになっているんだ。今は絶対に勝てない相手と感じたから。

「だって、そうだったとしてもツ!? あ、アンタはアタシを支えてくれるって言ったもん!」

「大丈夫だよ」

それでも泣きながら言葉を続けてくれるユニ君を遮り、言った。

「僕は死なないからね」

「……本当?」

「ああ」

不安そうに聞き返してくるユニ君に短く答えた。息を呑む気配が伝わってくる。どうやら意思を固めてくれたようだった。

「手にかかる友達を置いては死ねないさ」

「……こんな時までアンタは。解った、絶対帰って来なさいよ。約束したからね!」

「ああ、約束だ」

そう言い、締めくくった。ユニ君はもう大丈夫だろう。ならば僕も全力で足掻く事が出来る。そんな思いを以て立ちはだかる二人を見据えた。

「話は終わったか?」

「ああ、待たせたね」

つまらなそうに言った赤の女神に小さく返す。その全身から赤色の魔力を滲ませながらも此方を淡々と見据えていた。意外と律儀なのだろうか。そんな場違いな事を思う。

「戦う前の茶番には付き合ってやったんだ、精々俺を楽しませろよお  
おお!」

「ああ、今回は全力で相手をするよ。心の赴くまま、ね」

黒き巨人の言葉を聞き、笑みを浮かべる。戦うのは未だ怖いけど、その位の虚勢を張る事が出来る程度にはなれる事が出来ていた。



「僕の名前は、四条優一。名前を聞いても良いかな」

傍らでシエアの力が集っていくのが解った。もう少しだけ時間を稼ぐために言葉を紡ぐ。

「マジック・ザ・ハード」

「ジャツジ・ザ・ハードだ！」

赤の女神は端的に、黒の巨人は乱暴にそう名乗った。傍らのシエアの力、安定したのが解った。

「絶対死んだら駄目なんだからね」

「ああ、」

転移をする瞬間、ユニ君がそう言った。その言葉に頷く。姿を消す、その瞬間が訪れようとしていた。だから、

「ごめんね」

最後にそう呟いた。

「ユ——」

ユニ君の姿が消える瞬間、動揺した気配が伝わりそのまま潰えた。

「待たせたね」

「成程、何かを狙っているのは解っていたが、そう言う事だったのか」

僕が魂砕を構えなおしながら言うと、マジックは小さく頷きながら呟いた。

「はっ、そんな事どうでも良いじゃねえか！　これから心躍る戦いが始まるんだから。なあ、異界の魂!!」

「そうだね。相手をさせて貰うよ」

頷く。今まででも凄まじい圧力だったが、それが更に強くなった。苦笑が浮かぶ。絶体絶命の状況で有りながら、それでも僕は死ぬと言う気がまるでしなかったから。何処かが壊れてしまったのだろうか。そんな事を考える余裕すらあった。

「異界の魂、だと……う？」

ジャツジの言葉に、マジックは怪訝そうな表情を浮かべた。冷徹な双眸に、僅かに困惑の色が宿った。だが、それを気にしている余裕は無かった。何故なら、

「さあ、何時ぞやの続きを始めようか、異界の魂!!」

ジャツジ・ザ・ハードが大斧を振りかざし、暴風のような威を以て向かって来ていたから。

「力を借りるよ」

魂砕に小さく呟きジャツジを見据えた。

「成程。女神を一人逃したが、ある意味ではこちらの方が収穫だったかもしれないな」

マジックの呟きが木霊する。戦いの火蓋が今、切られたのだった。

## 11話 約束

「いくぜえええ!!」

朽ちた廃墟に氣勢が上がる。人の立ち寄れない地、ギョウカイ墓場。その地で戦いは始まっていた。黒の巨人、ジャツジ・ザ・ハード。その手に持つ強大な斧を振り被り四条優一に肉薄する。その強すぎる気迫に、辺りに潜んでいた魔物たちは怯え、対峙する二人から距離を取っていた。

「まともにやれば勝てない。なら——」

放たれるは殺意を乗せた戦斧の剛撃。黒の巨人から放たれる一撃は、人の身でしかない四条優一にとってはその体格差だけで致命的な一撃と成り得る。落石を受け止められる人間など居ない。それ以上の質量を持つジャツジ・ザ・ハードの圧倒的膂力から放たれる一撃を受け止めるのは無謀と言うものであった。

「勝たなければ良い」

それ故異界の魂は、その手に持つ魔剣を戦斧に目掛け、切り上げる。異界の魂召喚の儀式により、世界を超える過程で得た力。人ならざる身体能力に加え、人の身に宿すには過ぎたる魔力により施された補助魔法。人間の容量を超える多重魔法にて限界を超えて強化された力、それを以て迎え撃つ。

「俺と力比べだど？ 人間風情が舐めた真似してんじゃねえぞおおお おおお!!」

勝敗が最初から分かり切ったぶつかり合い。確約された勝利。その、覆し様の無い結果が見えている戦いに挑んだ人間に向かい、ジャツジは罵倒交じりの気炎を上げる。両者の体格や膂力の差に加え、振り下ろす戦斧と切り上げる魔剣。両者の武器が描く軌跡すらも黒の巨人が有利と言えた。

だが、四条優一はただ小さく笑みを浮かべる。人間では視認する事が困難な速さで振るわれた蛇腹剣。その刀身からは、凄まじい魔力が吹き荒れていた。

「ああッ！」

渾身の力で振り抜く。衝突、爆砕。剣と斧の刃がぶつかり合った瞬間、両者の持つ武器の刀身より、凄まじい衝突音が鳴り響き、同時に魔力による爆発が巻き起こる。辺りを衝撃波が巻き起こり、突風が駆け抜ける。その威力は、さながら戦車砲の直撃であった。異界の魂と黒の巨人を中心に、爆撃後のような砂塵が巻き起こっていた。

「……魔力による目くらましか。さて、あの人間はジャツジを相手にどう戦うのか」

呟いたのは、ただ一人蚊帳の外に存在する赤の女神、マジック・ザ・ハードだった。両者のぶつかり合いをその冷徹な瞳に、僅かな好奇心を覗かせ見詰めている。

「くくく、ふははははは!! 所詮は小細工か! だが良いぞ、楽しくなってきた。もつと俺を愉しませろおおお!!」

魔力による爆発で起きた砂煙の中から黒の巨人が姿を現し、心底嬉しそうに叫びをあげる。黒の巨人にとって、戦い壊すと言うのは、最早存在理由と言って良い程の事柄と言えた。強敵と戦い、激戦の果てに相手を破壊する。それがジャツジ・ザ・ハードにとって、唯一の事であった。

そして人の身でありながらジャツジに立ち向かい、それだけに飽き足らず二度も彼の攻撃を凌いだ異界の魂は、ジャツジにとって格好の獲物と言える相手であった。その壊すべき標的を殺すため、黒の巨人は振り下ろした戦斧をもう一度振り上げ敵を探す。

「ジャツジ、上だ」

「何い?」

見敵必殺。そんな覇気を込めて振り上げられた戦斧。それを見据えたマジックが、声を上げた。黒の巨人に振り下ろされた戦斧。其処に張り付くかのように、赤黒い蛇腹剣の刀身を巻き付かせ、異界の魂はジャツジの振るう斧の側面に存在していた。

「貫うよ」

そんな掛け声とともに、蛇腹剣に収束された魔力を変動させ、伸ばされていた蛇腹剣の形状を、元の直刀型の形状に変形させる。魔力を用いる事で変幻自在に変化する刀身が、本来の姿に戻っていた。同時

に戦斧の側面から跳躍し、空中で魔剣を振りかぶる。異界の魂の魔力が赤黒い刀身から溢れだし、強大な力の奔流を巻き起こしていた。そして襲い掛かる。

——ソウル・クラツシユ。

魂すら砕く剣、魂<sup>みたくだき</sup>砕。この剣で殺されたモノは神であろうと、魂すら残さないと言われていた魔剣だった。その魔剣に魔力を纏わせ放つ神をも殺す一撃。それが黒の巨人の頭部へと放たれる。再び駆け抜ける衝撃波。そのぶつかり合いで起った惨状を、マジックは淡々と見つめていた。

「はっ、やるじゃねえか異界の魂」

再び起こった砂塵から抜け出し、先ほどと同じような調子でジャツジ・ザ・ハードは続ける。手に持つ大斧。その刀身が半ばから砕け散り、更に左腕までもが吹き飛んでいた。その惨状が、先程放たれた一撃の威力を物語っている。にも拘らず、ジャツジの声音から聞き取れるのは、変わらず喜色だった。腕を壊されておきながら、そんな事は些事と言わんばかりに現状を愉しんでいた。

「……それはどうも。危うく殺されるところだったよ」

砂塵の中から優一も姿を現しそう零す。そう呟いた異界の魂の左腕には大斧の刀身が突き刺さり、血が滴り落ちている。それが、身に纏う服を右手に持つ刀身と同じように、赤黒く染めていた。

「とりあえず、痛ッ!？」

歯を食いしばり、一気に刀身を引き抜く。苦痛に声を零すと同時に鮮血が零れ落ちる。

——月光聖の祈り

瞬間的に魔力を変換し、即座に癒しの魔法を施す。それでもあまりの痛みに、優一の表情は歪んでいた。思わず魂砕を取り落としそうになるのを何とか堪えていた。

「……、畳みかけるよ」

「はっ、面白れえ！ やって見せろ、人間ッ!!」

再び蛇腹剣の魔力を変換し、形状を変化させる。蛇腹剣には、魔力により伸縮自在なワイヤーが用いられていた。それを操作する事に

より、変幻自在な間合いを構築する事が出来ると言う訳である。黒の巨人とは間合いが離れていたが、形状を変化させ振り抜く事で、遠距離攻撃を仕掛ける。その心算で、四条優一は魔剣を振りかぶり踏み込んだところで、

「私を忘れているのか？」

「そんな訳は無いさ」

迫り来る大鎌の一閃を、無理やり体を振じり横に錐もみ回転をする事で何とか往なした。その場に膝をつくも、無理やり飛び退り、マジックを見据える。その手には依然として、魔剣が唸りをあげている。マジックはその姿を見ると、小さく笑みを浮かべた。

「やられたら、やり返すだけだよ」

「良いだろう、やってみろ」

魔力を維持したまま、即座に踏み込む。蛇腹剣による切り上げ。線による攻撃。それを上体を僅かに反らす事で往なしたマジックは、再び大鎌に力を込める。紅の女神と異界の魂の視線が交錯する。首元を狙い放たれた斬撃。それを、強化された反応速度を以て迎撃する。刃が間に合わないとしても、剣には石突がある。大鎌の刀身に柄をすべり込ませ、打払った。大きく開いた赤の女神への道。躊躇することなく、一気に駆け抜ける。大鎌の刃を打払った反動で弾かれた剣。その柄を両手で強く握り、無理やり勢いを殺すと蛇腹剣を振り抜いた。「貴女を倒す」

「面白い。この力、予想以上だ」

変形した蛇腹剣がマジックに襲い掛かる。魂碎きの魔剣。それが赤の女神に到達する直前に、壁が阻んでいた。赤色をした魔力の障壁。それが、魔剣の行く手を遮っていた。一撃を受け止めつつ、マジックは小さく零す。

「ふざけるなよ、マジック!! 俺様の邪魔をするなあああ!!」

「ッ!? 味方諸共!」

其処に割り込んできたのは黒の巨人。異界の魂が僅かに目を反らした隙に、既に左腕を再生させ大斧による一撃を振り下ろした。

「あの程度なら、当たりは сенぞ?」

「それは、凄いねッ！」

直撃する刹那、なんとか離脱した優一を追いすがるように飛来するマジック。空中で体を捻り、振り抜かれた大鎌に刃をぶつけ迎撃する。刹那の攻防。両者の斬撃がぶつかり合い続ける音が鳴り響いた。「ぐ……ッ」

十を超える斬撃音。切り伏せられる事こそ凌ぎきったが、そのまま異界の魂は地に叩きつけられる。痛みをこらえる優一の視界に、マジックの姿が映る。手を翳し、赤色の魔力を収束させていた。追撃。容易に想像できる。異界の魂もまた、負傷により震える手を掲げ、言葉を紡ぐ。

「さて、どう凌ぐ？」

試すように放たれた魔力による弾丸。無数に放たれたそれに向け、宣言する。

——ムスペルヘイム

それは、雷と炎を纏った竜巻だった。赤の魔力を、雷と炎を宿した竜巻が立ち塞がる。魔力と魔力がぶつかり合い、互いに食い荒らそうかのように絡み合い、消滅した。

「マジックの野郎と二人掛かりつてのが気に入らんが、死にやがれえええ!!」

「ああッ!」

何とか立ち上がったところで、強襲した戦斧による横風。魔剣を戦斧に水平になるように滑り込ませ、全力で後方に飛び退る。直撃。黒の巨人の臂力により放たれた一撃が、異界の魂を吹き飛ばしていた。そのまま岩山に衝突し、口から大きく血を零した。例え魔法による補助があったとしても、既に許容量を超えていた。それでも魔剣を杖に、四条優一は何とか立ち上がった。

「これは不味いなあ」

「ぽりと噴き出した血を拭う事もできず、他人事のように眩く。魂砕

を杖に何とか立ち上がったけれど、見た感じ全身がぼろぼろで、到底戦うなんてことができるとは思えなかった。

——月光聖の祈り

震える膝に叱咤を入れ、何とか言葉を紡ぐ。癒しの魔法。気休めかもしれないが、それで多少はマシになったような気がした。それでも、痛みは途切れることなく続いていて、倒れ込んでしまいたい衝動に駆られる。だけど、そうする訳には行かなかった。

「けど、負けられないんだ」

約束したから。大事な友達に、自分は死なないと約束していたから。だから、負ける訳にはいかなかった。戦ってみて勝てないだろうと言う思いは強くなった。どちらか一人ならばまだやりようはあるかもしれないけれど、相手は二人だった。剣から読み取った使い手たちの経験に継らなければ、既に自分は死んでいたかもしれない。

「ここまでされてなお、立ち上がるか」

「貴女たちは強い。けど、僕にも負けない理由があるからね」

少しだけ驚いたように零したマジックに言い返す。立ち上がれはしたけど、膝は震え、視界も定かでは無かった。唇を強く噛みしめる。口の中に広がる鋭い痛みで崩れ落ちそうになる体を無理やり支えた。

「……どうやら本物の様だな」

「なにが、かな？」

そんな僕を見詰め呟いたマジック・ザ・ハードに聞き返す。自分の事を何か知っているのだろうか？ 絶体絶命でありながら、そんな淡い期待を抱いてしまう。

「異界の魂。女神たちが最後の力で呼び出そうとした存在。確かに貴様は人の身には過ぎたる力を有している。女神すら撃破った私とジャッジを同時に相手にし、今も尚生き延びている。女神にすらできない事を、ただの人間ができる訳が無い」

「……女神が呼び出す？」

「尤も、あの時は失敗に終わったはずだがな。どうして今頃になって現れたのか」

淡々と告げるマジックの言葉を反芻する。女神が呼び出そうとし



た。とは言え目の前に立つ女神が言うには、試みただけであり失敗したと言う事であった。ならば何故自分が存在しているのか。疑問が更に深くなつた。

「……そう言う話を聞かされたら、余計に死ねない」

とは言え、大きな手掛かりになる事は確かであつた。僕を呼び出したのが女神たちかは解らないけれど、それでも呼び出そうとしたと言う事は、呼び出す方法を知っていたと言う事だつた。つまり、女神たちは異界の魂について何かしら知っていると言う事だろう。ならば、先ほど助けたユニ君のお姉さんに聞けば何か解るかもしれない。少なくとも彼女たちは異界の魂を必要としていた、と言う訳である。異世界の人間に助けを頼るほど追いつめられていたと言う事だつた。そして奇しくも僕は選ばれた。なら、彼女たちを何とか助けてあげたいと思うのは不思議な事ではないだろう。一人ではどうしようもならない事でも、誰かに協力してもらえれば乗り越える事はできるのだから。

「確かに貴様は強い。少なくとも女神が相手であつたのなら、既に決着はついているだろう。だからこそ聞きたい。人の身でそれ程の力を持ちながら、なぜ戦う？」

「……約束したからね。友達を支えるつて。一緒に強くなるつて。それを果たすためにも、負けられないんだよ。此処で殺されたら、約束が守れないからね」

マジツクの問いに答えた。崩れ落ちたい。眠つてしまいたい。全てを忘れ投げ出してしまいたいと思うけど、そうする訳には行かない、ただどとつても頑張り屋な女の子。そんな子をまた泣かしてしまふのだけは嫌だつた。だから、交わした約束は守らなければいけないんだ。

「約束？ ああ、先ほどの女神候補生とそんなものをしていたな。貴様はそんなものの為に命を賭けると言うのか？」

「そうだよ。友達との大事な約束。それは守らなきゃいけない」

「解せんな。約束など所詮は口頭による取り決めに過ぎない。何の制

約も拘束力も無い」

「僕が守りたいと思うから、守るんだよ」

尋ねてくるマジックに、本心を答える。できる出来ないかは今は考えない。それは重要では無かったから。

「理屈では無いと言う事か。その割に貴様は——」

「いい加減にしろ貴様らああああ!! 俺様の事を忘れて、二人だけで話を進めてんじゃねえぞおおお!!」

マジックの言葉を掻き消すように、ジャツジが叫んだ。その巨大な戦斧の一撃を以て吹き飛ばされた際、ジャツジとは相当な距離を離されたのだが、ようやく追いついて来たようだった。相も変わらず臨戦態勢と言った感じで、その姿は怒り狂った闘牛を彷彿させる。

強く魂砕を握った。万全の状態でも対峙する二人を相手取る事が出来なかった。押し切られ、決して軽くは無いダメージを受けた今ではまともに戦う事もできそうにない。もつと強く。もつと正確に。そんな想いを込め、魂砕の記憶を読み取っていく。自分の力は剣から読み取り再現する力だ。だが、その力も完璧に使いこなせているわけでは無い。シエアクリスタルの補助が無いと魂砕の再現ができなかったように、剣から使い手たちの経験を読み取る力もまた、完全に再現しているわけでは無かった。だから、足りない部分をより強く、より正確に模倣していく。今この場で力を成長させる。それしか生き残る術は思いつかなかった。

ぞわりとした悪感。魂砕を手にした時に感じたソレともまた違う感覚。それが全身を駆け巡った。

「……、待てジャツジ」

「何だ、なぜ止める!?!」

そんな僕の様子を知ってか知らずか、今にも攻撃してきそうな黒の巨人を、赤の女神が止めた。獲物を壊そうと歩を進めたところで思わぬ邪魔が入ったため、ジャツジはマジックに殺意のこもった瞳を向けた。

「この男を殺す時では無い」

感情の窺い知れない冷徹な瞳を僕に向け、赤の女神はそう言った。

「時では無い、だと?」

「そうだ。四人の女神が呼び出し縋ろうとした人間。異界の魂。この男を殺すのに相応しい場合は、ここでは無い」

マジックはそんな事を言い放った。あまりの事に目を見開く。自分に対する処遇についての事なのだが、思わず聞き返したくなる。何だそれは、と。とてもでは無いけど、理由になつていとは思えなかった。

「……けるなよ」

そんなマジックの言葉を聞いたジャツジは、小さく零した。瞬間、ジャツジの放っていた暴威が急激に膨れ上がった。ギョウカイ墓場全体を震わせるかと思うほどの暴力の気配が充満していた。

「ふざけるなよ、マジック!! 俺様の戦いを邪魔するだけに飽き足らず、指図もしようと言うのかあああああ!!」

それは憤怒だった。元々協調性などなさそうなジャツジ・ザ・ハードである。ついに限界を迎えたと言う事なのだろう。

「それが犯罪神様の為ならばな」

ジャツジの叫びにマジックは淡々と答える。吹き荒れる暴力の気配を無感動に見据えている。

「四天王の中でもめてめえが一番気に入らねえと思っていた。もう我慢できねえ、ぶっ潰してやる!!」

「貴様では無理だな、墓守」

怒り狂うジャツジ・ザ・ハードにマジックはつまらなさそうに告げる。

「そう言うスカしたところが気に入らねええええ!!」

遂に黒の巨人は赤の女神に戦斧を振り下ろした。先ほどまで協力していたかと思えば、今目の前で争い始めていた。味方同士では無いのだろうか? そんな疑問が思い浮かぶ。二人の様子を見る限り、どうもそうは思えなかった。

「逃げるなら今だぞ?」

戦斧から放たれる剛撃を避けながらマジックが僕の目を見て言った。大鎌を振りかぶりジャツジに肉薄し、その一撃を以て戦斧を吹き

飛ばす。そのまま赤の魔力を全身から靡かせ、ジャツジに追撃を施そうとしていた。その後ろ姿から、見逃してやると言われた気がした。思うところはいろいろあるけど、今は逃げるしかなかった。魂砕に纏わせていた魔力を解き、離脱するためにすべての力を注ぎ込む。

「精々束の間の生を愉しむと良い」

赤の女神と黒の巨人がぶつかり合う地から一気に距離を取るため跳躍する。その瞬間、

「この世界に来てしまった事を後悔する時まで、な」

そんな言葉を聞いた気がした。

## 12話 真実

「まったく、確かな情報なんでしょうね」

ラステイションにて秘密裏に行われていた計画。異界の門を使用しての女神奪還作戦が行われて数日が経ったある日、アイエフは仲間と一旦別れ、ただ一人サイドカーの付いた大型バイクを駆り、プラネテューヌへと続く街道を駆け抜けていた。

「女神が助け出されたなんて話、ガセネタだったらシャレにならないわよ」

理由は簡単だった。アイエフはネプギアと共に旅をしているが、プラネテューヌの諜報部員でもある。其処に彼女が今し方呟いた情報もたらされたことにより、招集がかかったからだ。招集を行ったのは、プラネテューヌの教祖であるイストワールであった。アイエフの上司であると同時に、プラネテューヌの実質的なトップからの招集である。それだけでも今回の情報の信憑性の高さが窺えると言うものだろう。

だからこそアイエフは仲間たちと一旦別れ、単身プラネテューヌに帰還していた訳である。

「けど、事実だったとしたら今よりももっと希望が出てくるわね……。情報通りノワール様が助け出されたと言うのなら、ネプ子達を救出する為の大きな助けになってくれる筈」

そして彼女の仲間であるネプギアたちと言えば、ラステイションからルウイーに向かつて進んでいたのだが、プラネテューヌの諜報部によりもたらされた情報を聞き、引き返す事にしたと言う訳であった。情報が事実であるならば、残る女神救出の大きな助けになるからだ。その為、アイエフは一度プラネテューヌに戻る必要があるが、そのほかのメンバーは自由に動く事が出来たため、先行してラステイションに向かったと言う訳であった。少しでも早く、女神の力を借りたかったわけである。

「上手くやりなさいよ、ネプギア。そうすれば皆を」

彼女の友達であり、一度は目の前にまで辿り着くも助け出す事が出

来なかった女神。そんな女神を今度こそ助け出すための大きな希望が見えてきた。普段は一步引きクールなアイエフなのだが、この時ばかりは気が急いでいたのだろう。アクセルが強く握られ、トップスピードで駆け抜ける。

「ネプ子をきつと救い出せる——って、あれは!?!」

雪国であるルウィーとプラネテューヌの境界。辺りに薄らと積もっていた白が消え始めていたところで、アイエフは何ともなしに景色を眺めた。特に理由があったわけでは無い。ちらりと視線を動かしたときに、たまたま目に入ったと言うだけであった。思わずブレーキを引き絞り、急制動を駆ける。慣性により全身にかかる圧力に耐え、アイエフはバイクから降りると慌てて駆け寄っていく。彼女の視線の先には、ぼろぼろになった男がふらふらと弱弱しく歩いていた。手に持つ一振りの長刀と後姿に見覚えがあったのだ。

「ちよつとアンタ、いったいどうしたのよ!?!」

アイエフは男を追い抜くと、正面に立ちその顔を見る。その人物は、彼女の思った通りの男だった。

「あ……、あいちゃん?」

「なんでそんな怪我してるのよ、四条!」

それは、ラストেশヨンの女神候補生とパーティーを組んでいた人間。自信を失った女神候補生を再び立ち上がらせた人物。ユニのパートナーである、四条優一だった。

「助かった……のかな」

「ちよ、ちよつと!?!」

四条優一はその焦点の合わない瞳でアイエフを捉えると、心底ほつとしたのか力のない笑みを浮かべた。長刀を杖の様にして歩いていたのだが、安心したのだろう。長刀をその場に取り落とし、ゆっくりと崩れ落ちてしまった。

「何なのよ一体! とりあえず、ちゃんとした傷の手当てが出来るところまで運ばないと」

その場で倒れてしまった優一を、アイエフは慌ててバイクのサイドカーに乗せると、直ぐさま応急処置を施しバイクに跨った。見るから

に酷い怪我をしている。彼女の出来る範囲の治療では、焼け石に水と言った具合だった。すぐさま見切りをつける。既に彼女に何とかできる範疇では無かったのだ。アイエフは自分にできることとできない事を即座に把握し、最善の行動をとったと言う訳であった。

「ああもう、なんでこうも厄介ごとが次から次へと!!」

一気にアクセルを引き込み、加速する。サイドカーの付いた大型のバイクが街道を駆け抜ける。風を切る大きな音と共に、アイエフの悲痛な叫びが街道に響き渡ったのだった。

「お姉ちゃん……」

ラストেশヨンの教会の一室。助け出された黒の女神の部屋でユニは姉の手を握り小さく呟いた。ベッドの上で寝かされているユニの姉であるノワールは、苦しそうに表情を歪めながら寝返りを打つ。時折零す弱い吐息が、黒の女神の消耗を否応なくユニに伝えてくる。女神と称されるだけあり、人間と比べ整いすぎた顔に、珠のような汗を浮かべ苦しげに眠っていた。そんな姉の額を、濡らしたタオルでそつと汗を拭きとったあと、両手を包み込むようにして握る。女神の手を握る女神候補生の瞳には、今にも零れ落ちそうなほどに涙が溜まっていた。

「ッ、絶対に泣かないんだから」

自分に言い聞かせるようにユニは呟く。今は泣いている場合じゃなかった。ユニとノワールを逃がすため、一人ギョウカイ墓場に残った四条優一。アイツは絶対に死んでなんかいない。自分を置いて勝手にいなくなったりはしない。約束したんだ、と、そう何度も何度も言い聞かせる。

そう思わないと、ユニは泣き崩れてしまいそうだったからだ。

ギョウカイ墓場で遭遇した二人の敵。近くに来るだけで、ビリビリとした強すぎる力をユニは感じた。勝てない。女神候補生であるユニが、対峙しただけでそう思ってしまうような相手であった。そんな

相手に、ユニのパートナーはただ一人で立ち塞がった。

姉であるノワールの救出の際、ユニは重大な失策を犯してしまった。直後に強大な力の持ち主が迫って来た時、どうすればいいのか解らなくなってしまう。目の前に姉が居ながら、助け出す事も満足にできない。泣きそうになるのをこらえるだけで精一杯だった。その時に、優一はシェア増幅器を起動させ、瞬く間に黒の女神を救い出し、自身にいくつもの魔法を施した。思えば、あの時点でどう動くかの覚悟を決めていたのだろう。姉を抱き、パートナーを置き去りにして帰還した後、漸くユニはその事に思い至った。

「……約束、したんだから」

帰還したユニは、即座に異界の門を開きギョウカイ墓場に戻ろうとした。転移による消耗なんか関係なかった。自分を支えてくれると言い、ただ一人死地に残った優一を助け出さなければ。その一念しかなかった。だが、ユニのそんな想いは現実にする事が出来なかった。

再度起動させようとした異界の門。何の反応も示さなかった。異界の門に使われていたシェアクリスタルは二つ。一度の転移で使うクリスタルが一つ。二度の転移で、その力をすべて使い果たしていたからだ。なんで？ どうして？ そう喚きそうになるのを、苦しそうな姉の吐息が聞こえた事で何とか抑え込む事が出来た。ユウは死なないと約束した。なら、アタシもやるべき事をやらなきや。無理やりそう言い聞かせ、ユニはケイの下にノワールを連れて帰ってきた。

「絶対、大丈夫なんだから」

それから数日が経っていた。未だ優一から何らかの連絡も無い。それがどう言う事か、ユニは気付いていながら認められなかった。認めるなんてできる訳が無かった。

「だから、強くならなきや」

フラリとユニは立ち上がる。自分が弱かったから、一人逃がされた。三年前と同じで、自分が弱かったからアイツにも置いて行かれたんだと、そう思ってしまったから。

「——ユ、ニ？」

「お姉ちゃん!？」



強くならなきゃ。そう眩き、部屋を出ようとしたところで、黒の女神が苦しそうに零した。ユニは目を見開き振り返る。何時目覚めるかもわからない姉が、確かに自分の名前を呼んだから。

「お姉、ちゃん……」

「なんて顔、してるのよ」

ベッドに飛びつくように駆け寄り、姉の顔を覗き見る。苦しそうに、けどどこか嬉しそうにノワールはユニを見詰めていた。泣いちゃだめだ。そう思っていながらも、ユニは今にも泣きだしそうな顔のまま、姉に向かって手を伸ばした。

「だって、だって」

「もう……、シャキツとしなさい。あなたは私の妹なんだからね」

伸ばされた妹の手を、姉は弱弱しくだが確かに掴んでいた。ユニの手に、確かにノワールの熱が伝わる。お姉ちゃんは生きているんだ。そう実感する。ユニが我慢できたのはそこまでだった。

「ごめ……、ごめ、んなさい……。ごめんなさい」

「もう……、謝らないですよ。寧ろ謝るのは私の方よ」

その緋色の瞳から止めどなく涙を零す妹に、ノワールは困ったように言った。

「だって、生きてた。生きててくれた。お姉ちゃんまで目を覚まさないかったらって思うと……」

「ユニ……。大丈夫よ。もう、大丈夫だから」

泣きながらも何とか言葉にしようとする妹の言葉を聞き、ノワールはそっとユニの頭を撫でる。要領を得ない言葉だけれど、妹が頑張つて助け出してくれたのだと言う事は、痛いほど伝わっていた。それが、ノワールには嬉しく在り、誇らしくもあった。

「だから、助けてくれてありがとう。今まで頑張ってくれてありがとう。強くなったわね、ユニ」

「あ——」

だから、ノワールはユニに最大限の感謝を以てお礼を言った。目を見開くユニ。姉に認められた。三年前は置き去りにされたけど、今は認めて貰えた。それが、どうしようもなく嬉しかった。だから、ユニ

はもう一度泣いてしまった。尊敬すべき目標であり、最大の壁ともいえる姉に、漸く自分の事を認めて貰えた。それが嬉しくて、姉に縋りもう一度泣いた。

「もう、暫く見ないうちに泣き虫になっちゃったの?」

そんなユニをノワールは困ったように、だけど妹の成長を誇らしげに見詰め撫で続けていた。

「——本当にそう言う結果なんですか? 解りました。いえ、どういう理屈かは解ってはいないのですが、理解はしました。これは貴方と私だけの秘密でお願いします」

何か、話し声が聞こえていた。ずきりと痛む頭に思わず顔を顰める。心地の良い暖かさに全身がつつまれていた。ベッドに寝かされている。ある意味慣れ親しんだ感覚に、なんとなく自分がどういう場所に居るのが解ってしまった。内心で苦笑する。久々だったのだけど、こう言うのは異世界もあまり差が無いようだった。

「此処は?」

大凡の想像はつくのだけど、結局そんな事を言いながら目を開け体を起こす。全身にだるさが残っており、頭も少しボーっとしている。二、三度手を握ってみる。じんわりとした痛みが残っているけど、何とか動けるところまで回復しているような気がした。とはいえ、岩山に叩きつけられたりして特に酷かった背中とかは、未だに鋭い痛みがある。良く死ななかつたと我が事ながら感心する。どう考えても死にそうな状況だったのに、何故か自分は生きていた。それどころか、頭では死ぬと思っても、何と云うか、本能ではまるで死ぬと言う気がしなかった。それが何か引つかかる。ユニ君ですら怯えていた。それ程の相手に、何故自分はそんな心の余裕があったのだろうか。

「あ、目が覚めましたか?」

穏やかな声音が耳をくすぐる。声の主に視線を向ける。小さな本が白いキャビネットの上に置かれており、その上に小さな女の子が腰

かけていた。病室と思われる部屋の中にちよこんと座る小さな女の子が言ったのだと思う。この世界に来て色々見て耐性はついたつもりだったけど、今回ばかりは少し驚いてしまった。

「貴女は？」

「私は史書イストワール。プラネテューヌの教祖をしております。よろしく願いますね、四条優一さん」

不躰な質問に、イストワールさんは嫌な顔一つせずにご返答してくれました。にっこりと朗らかな笑顔を浮かべ僕の名を言い当てる。何故？

つと一瞬思うけど、最後に記憶が途切れる前に見たのがあいちちゃんだったことを思い出し、あの子が教えたのだらうと見当をつける。イストワールさんはプラネテューヌの教祖だと名乗っていたし、ネプギアさんは確かプラネテューヌの女神候補生だった。なら、何かしら関わりがあるのだろう。

「よろしく願います、イストワールさん。それと此処は病室でしようか？」

「はい。アイエフさんが怪我をしていた貴方を発見し、ここまで運んでくれたんですよ」

「そうでしたか。あいちちゃんには感謝をしないと」

「ふふ、そうですね。今、アイエフさんに少し頼みごとをしていて席を外しているんですけど、お呼びしましょうか？」

「ええ、願います」

少し話してみた感じだけど、イストワールさんはケイさんほどつつましくい人物では無い様だ。教祖と言う事で、クセがあるのかと少しばかり警戒してはいたのだけれど、その必要も無かったようだ。

『あ、アイエフさんですか？ 四条さんが目覚めました。一度病室に戻ってきてもらえますか？』

そう言いイストワールさんは目を閉じると、一瞬何かを探すように頭を動かすといきなり話し出した。思わず凝視する。内容的にはあいちちゃんと話しているようだ。

「あの……あまり見つめないでください。ちよつと照れてしまします」

「あ、ごめんなさい」

やがて会話を終えたのか、僕の視線に気づいたイストワールさんは少し照れたようににはかむ。思わず謝ってしまったけど、正直見詰めてしまうのも仕方ないと思う。

「いえ、構いませんよ。いきなり話し出したら誰でも驚いてしまますよね」

苦笑しながら続けるイストワールさん。

「兎も角、アイエフさんは一区切り付いたらすぐに此方に来てくれるそうです」

「そうですか。仕事なら悪い事しちやったかな」

よくよく考えてみたら、お礼を言うならむしろ僕から行くのが筋だろう。気が利かない自分に少しばかり反省する。

「アイエフさんが来るまでまだ時間がありますね。少しお話をさせて貰っても構いませんか？」

不意にイストワールさんが笑みを消し、真剣な表情で僕を見据えると言った。先程までの穏やかな視線から一変、真面目な雰囲気か辺りを包み込む。軽く目を閉じ、姿勢を正した。

「大丈夫です。僕に何か？」

ギョウカイ墓場で聞いたマジックの言葉を思い出す。異界の魂を女神たちが呼び出そうとした。ラストイシヨンの教祖であるケイさんは異界の魂について知らなかったようだが、イストワールさんは何か知っているのかもしれない。その手の話だろうかと当たりを付ける。

「はい。話すべきか迷いましたが、やはり本人は知っておくべきでしょう。貴方は――」

そこまで言い、少しだけイストワールさんが言い辛そうに間をあけた。やっぱり、この人は異界の魂についてある程度知っているのだろう。

「異界の魂、ですか？」

「……え？　なぜあなたがその言葉を？」

イストワールさんの様子から僕自身の事についての話なのと言

う事は解った。その為異界の魂の事だろうと思い、言い淀んだイストワールさんの言葉をあえて僕が続けてみる。イストワールさんの目が驚きに染まった。その様子に、嗚呼やっぱりと思う。

「僕がその、異界の魂ですからね」

「つ、そう言う事ですか。だから貴方は……」

予想通り、イストワールさんは異界の魂について知っているようだった。異世界より呼び出された存在。その事についての話をされるのだと思っていた。だけど、

「……すみません」

「イストワールさん？」

違っていた。僕の言葉を聞いたイストワールさんはその小さな瞳に雫を滲ませる。え？つと思つた。その時には、

「……ごめんなさい！」

泣かれてしまっていた。ぼろぼろぼろと大きな水滴が彼女の小さな足に向かい、幾筋も零れ落ちる。状況に頭が追い付かなかった。泣き出した小さな女の子に唯困惑してしまっていた。

「私は……私たちは貴方に……」

「少し落ち着いてください」

このままではいけないと思い、一度イストワールの言葉を遮った。そのまま、すーはーと、ゆっくりと深呼吸させる。それで幾分か落ち着いて様子であった。ゆっくりと言葉を促す。そして、聞いた事を後悔した。

「すみません。取り乱してしまいました」

「構いません。それで、僕に何を言おうとしたんですか？」

「……はい。私もすべてが解ったわけではありません。けど、異界の魂召喚の儀式。その名を知っている者は居るかもしれませんが、その方法を知るのは今では女神だけです。だから女神によつて貴方は呼び出された。それによつてあなたは——」

そう言い告げられたのは、僕にとって想像もしていなかった真実であった。



### 13話 黒の妖精

「なにかの間違いの可能性はありませんか？」

イストワールさんの言葉をかみ砕き口に出た言葉がそれだった。正直に言ってしまうおう。目の前に座り、悲しそうな表情を浮かべている小さな女の子の言う言葉が、どうしても信じられなかった。彼女の言葉が本当だとしたならば、僕はどう足掻いたとしてもこの世界から元の世界に戻る訳には行かないからだ。

この世界に来て、元の世界に還ると言う事を考えた事は何度もある。大事な人たちを失ったとは言え、僕の居るべき世界はこのゲームギョウ界では無い。心配してくれる人たちだっている。異世界に呼び出されたとはいえ、そう簡単に諦められる事では無かった。

とは言え、その方法については異界の魂として得た知識を以てしても見当もつかなかった為、余り優先していなかった。急ぐ必要も無いと思っていた。手掛かりが無かったから、どうしようもなかったとも言えるかな。

だが、今回妖精のような小さな女の子からもたらされた情報が正しいとしたのならば、話は変わってくる。今まではどうしようもないからあまり深く悩む事は無かった。不安はあったけど、希望もあったからだ。だけど、今日知ったことが正しいとしたのならば、僕はチキウウに戻れないと言うことになる。どんな奇跡が起きたとしても、戻る事はできない。仮に、チキウウへの帰還方法があったとしても、それを行うこと自体が出来ないから。

「恐らく有り得ません。魔法と科学。双方の視点で検査をさせていたできませんでしたけど、間違いなく貴方は……」

できれば間違いであって欲しい。そんな僕の切実な想いを、イストワールさんは苦しそうに否定する。出会ったばかりの女の子にこんな表情をさせるなんてダメだと思いつつも、彼女を気遣うほどの余裕は無かった。

「そう、ですか」

口を吐きそうになった様々な思いを飲み込む。目の前に佇む小さ

な女の子や、囚われの女神さまに何かを言ったところで、どうしようもない問題だったから。罵ったところで意味なんかない。泣いたところで意味なんかないんだから。強がりと言うよりは、どこか諦めにも似た気分でそんな事を思う。

「ごめんなさい……」

何とか言葉を返した僕に、イストワールさんはまた悲しそうに涙を浮かべながら謝罪をしてきた。その様子から、真剣に僕の事を考えてくれているのが感じられた。今この場に居ない女神さまだって、本当にどうしようもないから『異界の魂』召喚の儀式を行ったのだと思う。ギョウカイ墓場で囚われている姿を実際に見たからこそ、それが解つた。

「謝らないでください。僕は気にしていませんから」

「そんなわけがありません！」

「ええ、少し強がっちゃいましたね。本当は気にしています」

「なら」

「だけど、今この世界に僕は存在しています。なら、それで良いんです」

結局、彼女たちに何かを言うなんて事、僕には出来なかった。元の世界に居た頃は、光と自由を失っていたから。過ぎ去る日々を過ごす心の糧も無く、ただ死んでいないだけの生活だった。それを、彼女たちは変えてくれたから。

『異界の魂』召喚の術式。それを知っていたのはこの世界の歴史を書き記す役目を持っていたイストワールさんだけだったらしい。先程聞いた彼女の話によれば、女神たちが破れる戦いに赴く少し前、万が一の事態に備え女神たちにその術を託していたようだ。そのおかげで僕はこの世界に呼び出される事になった。

『異界の魂』は召喚される際に世界を超える過程で様々な恩恵を得る。自分のもつ剣を読み取り再現する能力だったり、人間離れた身体能力。あるいは眠って居る筈の魔力の開化や知るはずの無い知識。そして、失った筈の光と自由を再び手にしていた。目が見え歩けた時、不意に涙がこぼれたのを思い出す。今思えばあれは、嬉しかった



からなんだ。

それだけの物を与えられもした。ユ二君をはじめとする新しい人たちとの出会いもあった。そう思うと、帰れないと言うのも仕方が無い事なのかもしれないと思う事が出来た。

「貴方はとても強いんですね」

「強くはありませんよ。少し、器用なだけです。取り繕うのが得意なだけです」

イストワールさんの言葉に苦笑いを浮かべながら否定する。僕は強くない。いろいろな理由を付けなければ、納得できなかったから。ただ、少し折り合いをつける事が出来ると言うだけだった。

「そんな事はありません。強いですよ、心が。だからこそ、女神を救う役目選ばれたんです」

「買いかぶり過ぎですよ。兎も角、この話はこれで終わりです。僕はそれほど気にしていません」

話を無理やり終わらせる。そうしないと何時まで経ってもこの話題が終わらないから。今日であったばかりだが、彼女が優しい事は十分に解った。だから、強引に話を切る。解りましたと領き、どこか儂げな笑みを浮かべたイストワールさんがとても印象的だった。

「失礼します。……目が覚めたみたいね」

それからイストワールさんと取り止めの無い話をしていると、病室がノックされる。入室を促すとすぐさま入ってきたあいちゃんが見ると、少しだけほつとしたのか僅かに表情をほころばせ言った。「お陰様で、ね。以前と言い、本当にお世話になりっぱなしだね。ありがとう」

「別に気にしなくてもいいわよ。知らない仲じゃないんだから」  
まだ幾分か体に痛みがある為、その場で頭を下げる。びりつとした痛みが走る。思わず顔を顰めてしまう。だけど、そのおかげか確かに僕は生きてるように思えた。そんな事を考えてしまう自分が、どこか可笑しかった。

「そう言えばお二人はお知り合いでしたね。確かラスティションで出会ったと聞きましたが」

「ええ、ラスティションの女神候補生といろいろあった時に出会ったんですよ」

「成程、向うの女神候補生と交流があつたわけですね。何とも因果な事です」

あいちゃんの言葉に、イストワールさんは小さく頷く。あいちゃんが来るまでに、『異界の魂』諸々については他言無用と言う事になっていた。彼女はネプギアさんと共に女神たちを救出すると言う大事な目的があるし、それを差し引いても僕についての話は気軽に話せる内容では無かつたからだ。僕自身、あまり詳しく語りたいたも思えなかつた。『異界の魂』の特性だけならば幾らでも説明できるけど、それ以上の込み入った話は語るべきでは無い。

「そういうえば四条。アンタは何であんな怪我してたのよ。見つけた時、目を疑つたんだから」

「ああ、うん。それについては何処から話すべきか」

あいちゃんの言葉に、どうしたものかと考える。傷を負つた経緯を話すには、当然ギョウカイ墓場での一件を話さなければいけないだろう。あれから数日の時間が経っているけど、何処まで話していいのかわからなかつた。ケイさんが言うにはラスティションが秘密裏に行つていた計画らしいし、終わつたとは言え、実動部隊に居た僕が語つて良いものか。

「その前に一つ聞いても良いかな。ごく最近、ラスティションで何か大きなニュースは無かつた？」

結局、あいちゃんには悪いけど、質問に質問で返す。恐らく女神の救出は成功しているだろう。ユニ君のお姉さんしか助け出さなかつたけど、それでも女神不在の今の状況から考えれば、間違いなく大きな話題になっていると思う。つまり、その話が出たならば、ラスティションの計画は既に公開されており、僕が話したところで大きな問題がある訳では無いだろう。勿論、ある程度はあいまいに話す事は忘れないようにしないと。

「ありましたよ」

僕の質問に、イストワールさんがあっさりと答えてくれた。

「どんな内容か聞いても良いかな？」

「端的に言うと、ラスティシヨンの女神が救出されたって話よ。完全に裏が取れた訳じゃないけど、かなり信憑性は高いわね。十中八九、事実よ」

「そっか」

あいちちゃんが大体予想していた通りの言葉を紡いでくれた。なら、僕が話したところで其処まで問題になる事も無いだろう。少なくとも隣国にまで話が聞こえてきている。それはケイさんが意図的に流しているように思えた。

「結論だけ言うよ。僕も女神様救出に参加したんだ」

「……だと思ったわよ」

端的に言うと、あいちちゃんは少し頭を押さえつつそう零す。まあ、話の流れから大凡の予想がついていたのだろう。

「つまり、ノワール様の救出が成功したって言うのは事実なのね？」

「おそらくは」

「少し歯切れが悪い返事ですね。何かあったんですか？」

イストワールさんが小首を傾げながら聞いて来た。それはそうだろう。今の言い方だと、自分にも解りませんと言っているようなものだから。

「そんなところですよ。ユニ君と彼女のお姉さん、ノワールさんを助け出す時に一悶着ありましたね」

対峙した二人の敵を思い出す。ユニ君やギアちゃん、女神様と同じプロセツサユニットをその身に纏い、大鎌を振りかざし迫ってきた紅。この世の物とは思えない程妖艶であり、冷徹な瞳をしていた紅の女神。マジック・ザ・ハード。強大な戦斧を操り、地を割くほどの膂力を以て襲い掛かる黒い巨人。戦いと言う行為を純粋に楽しむ黒き暴威。ジャツジ・ザ・ハード。二人とも、今考えても掛け値なしの強敵だった。マジックが見逃してくれなかったのなら、今此処に僕はいないと思う。しかし、こうも早く彼女の言葉の意味を実感する事

になるとは思わなかったけど。

「一悶着って。……あ、アイツが居た!」

ギョウカイ墓場であったこと一部を話したところで、あいちゃんが声を上げる。その瞳に映っていたのは、大きな後悔と、ほんのわずかな恐怖の色。

「アイツ?」

「アタシたちも女神たちを助けるために一度ギョウカイ墓場に行った事があるのよ。その時に女神を目前にしながらネプギアしか助けられなかった原因。やつとの思いで助け出したネプギアの攻撃すら全然効かなかった規格外の敵よ!」

尋ねる僕に、あいちゃんは捲し立てる様に言い放つ。その悔しそうな顔を見ると、女神を助け出せなかったことを後悔しているのが痛いほど良く解った。手をぎゅつと強く握り、少しだけ震えている姿は見ていて痛々しい。

「それって、黒い巨人だったりする?」

半ば確信しながら尋ねる。ジャツジに初めて会った時、僕がゲームギョウ界に呼び出された直後に黒き巨人とは出会っていた。その時にジャツジはお前もさっきの奴らの仲間だな、っと叫んでいたのを覚えていたからだ。きつと、それがあいちゃんたちの事だったのだろう。

「ッ!」

「ああ、当たりみたいだね」

僕の言葉にあいちゃんの方がびくりと震えた。その様子に自分の予想が当たっていたことを理解する。

「もしかして四条さんも出会ったんですか?」

「ええ。僕とユニ君が遭遇したのは黒き巨人でした。名をジャツジザハードと言うようです」

「ジャツジ・ザ・ハード」

あいちゃんがその名を刻みつけるように呟く。彼女にとっては、女神を目前にして道を阻んだ相手になる。言わば、宿敵なんだろう。呟き顔を上げた時、あいちゃんは力強い眼差しをしていた。

「そして、もう一人出会った相手がいます」

「もう一人ですか？」

「はい」

一呼吸間をあける。思えばこの世界に来て解らない事だらけだったけど、ギョウカイ墓場で出会った相手も相当なものだったと思う。

「女神さまと同じプロセスユニットを纏った敵。紅の女神、マジック・ザ・ハード」

それが、ギョウカイ墓場で出会った敵の名前であった。

「綺麗だなあ」

プラネテューヌに聳え立つ、一際大きな塔。プラネタワールの屋上から見る事が出来る、地にある星空。この国に生きる人々の営みの光を眺めながらぼんやりと呟いた。中天に輝く月をはじめとした星空とは少しばかり趣が違うけど、そこから見える光は確かに温かいものを感じる光だった。人々の作り出す星空とでも言えば良いのか。とにかく、その景色はとてもきれいで尊いものなんだと思う。そんな光をもう一度見れるのが、素直に嬉しかった。

イストワールさんとあいちゃんを交えての話が一区切りついた後、イストワールさんに無理を言って一人になれる場所を希望していた。できれば景色の良いところをとお願いしたら、まさかこんな大きな塔の頂上に案内されるとは思わなかったけど。因みに、僕の今いる場所は、女神さまが街を見下ろすのに良く来る場所なのだからか。

「異界の魂、か」

他人事のように呟いた。実際にその力を実感した今でも、イストワールさんの話はどうにも信じる事が出来なかった。信じたくなくともいえる。だけど、事実なんだろうなって心の奥底では理解できてしまうところもあった。根拠なんかない。感覚的などころで心当た

りがあった。

「ここから飛び降りたら、どうなるんだろう?」

光を見下ろしながら、そんな事を考えてしまう。勿論、実際に飛び降りる気なんかない。そんな事をしたところで意味なんかないから。何より、飛び降りる勇氣も無い。ただ何となく口を出た、大した意味の無い言葉だった。

「そりやお前、普通の人間なら死ぬだろ。地上から何メートルあんだ、此処?」

それに何処からともなく答える声があった。傍らから聞こえてきた声に、ゆっくりと視線を向ける。突然聞こえてきた声んだけど、なんでか殆ど驚く事は無かった。

「だろうね。普通の人間なら、どう考えても即死だよ。けど、異界の魂なら?」

「いやいや、異界の魂でもこっから落ちれば死ぬ事は死ぬだろ。まあ、お前の場合はどうなるか解んねーけどな! 一回いつてみつか? とりあえず、めちやくちやいてーんじゃねーの?」

そう無責任に言い、声の主はさも可笑しそうに笑い声を上げる。ああ、こう言う人物なのかと小さく溜息が零れた。

「で、きみは誰なのかな?」

「ん? ああ、そう言えば名乗ってなかったな! 俺はクロワールって言っただ。ま、別に覚えてくれなくても良いぜ」

「クロワール、ね。僕は――」

それは、イストワールさんと同じく一冊の黒い本に腰かけた小さな少女だった。腰かけると言うよりは、胡坐をかいているが。にやにやと愉快的な笑みを浮かべ、黒き少女は僕を見据えていた。見た目の第一印象は兎も角、もつと本質的なところでクロワールと名乗った女の子はイストワールさんに似ている気がする。名前の通り、イストワールさんを黒くしたような感じだろうか。誠実なイストワールに対して、愉快的なクロワール。うん。なんかピッタリな気はする。

「ああ、知ってるから別に名乗らなくても良いよ。四条優一だろ。異界の魂で、女神たちに呼び出された哀れなチキュウ人」

「なんで其処まで知っているのかな？」

クロワールの言葉に素直に驚く。僕が異界の魂であり、女神に呼び出されたと言う事を知っているのはまだわからないでもない。だけど、僕が呼び出された場所のことまで知っているのははつきり言って異常だろう。カマをかけるとかそんな次元の話じゃない。それは、この世界でも僕しか知らないはずの事だから。この世界での異界の魂召喚の儀式は、異世界から人を呼び出す術の筈だから。

「あっはっは。驚いてるな！ まあ、当たり前か。普通知ってるはずの無い事を言われりや、誰だっつてそんな反応になるわな。ああ、良いもんが見れた！」

「趣味が悪いね」

「そんなに怒んなよ。良いこと教えてやるからさ！」

「……良い事？」

何処となく人を小馬鹿にした態度にどうしたものかと考えたところで、クロワールが僕にグイッと近付いてきてそんな事を言い始める。まあ、話を聞くだけならそれ程問題も無いだろうと思いつつ。

「お前がもしこの世界に居たいと言うのなら、犯罪組織マジエコンヌは潰さないこつた」

「どういう事かな？」

クロワールの言う犯罪組織とは、簡単に言えば女神の敵対者である。女神さまの信仰を奪い、四つの国の力を低下させている原因だった。

「なに、簡単な話だぜ。お前が今この世界に居られるのは、異界の魂としての制約のおかげだからな。それが無くなったら、本来異物である四条優一は、ゲームギョウ界から削除される運命にある。今のお前は女神の願いで呼び出されたって言うこの世界での存在理由があるけど、それが無くなったらさっさと消されるってわけだ」

「理屈は何となくわかったけど、それが何で犯罪組織の存続に関わってくる？」

「そりや、女神の願いって言うのは、女神の脅威となるものの排除だからだよ。で、あんときの状況から女神の脅威って言うのが紅い女神マ

ジック・ザ・ハード。つまりは犯罪組織つーわけだ。だから、犯罪組織を潰せば自動的にお前は強制送還されるって訳だ」

「成程ね」

クロワールの言葉に頷く。仮に彼女の言う事が事実だったとするのならば、それは僕にとって切実な問題と言える。元の世界に還る事が出来ない以上、僕にあるのはこの世界に留まると言う選択肢だけだから。

「一つ聞いていいかな？」

「おう、良いぜ。何でも聞いてみるよ」

あれこれと考える前に、一つだけ確認したい事があった。質問をする僕に、クロワールはどんとこいと胸を叩き、頷いた。

「なんで君がそんな事を知っている？」

なぜ彼女そんな事を知っているのか。それが知りたかった。その理由が解れば、今後を考える為の大きな材料と成り得る。

「なんだ、そんなことか。そりゃ、この世界に異界の魂召喚の儀式を持ってきたのは俺だからな」

「はっ」

本当に何でもない調子で言うクロワールの言葉に、思わず目を見開く。

「何年も昔にイストワールの目を盗んでこつそり仕込みを終わらすのは中々苦勞したけど、いい感じに話が進んできた。あの時はこんなに面白そうな状況になるとは思わなかったけどな」

「……つまり、僕が此処に居るのは君の所為って事かな？」

何とかそんな結論に至る。

「ああ、そーだぜ」

心底愉快だと言わんばかりの笑みをクロワールは浮かべた。

「ああ、そつか」

「あつはつは。ちよ、何すんだ！いきなり頭を掴むなって！」

そんな彼女を掴む。流石の僕も、今回ばかりは少し怒っても良いと思っただ。

「痛い、痛い、痛い!! ちよ、マジで痛いって!! 頭をぐりぐりすー



るーなー!!」

「他に言う事は無いかな?」

「悪かった、お前には悪い事をしたって思ってるよ!!」

異界の魂として強化された速度を以てクロワールを掴むと、そのまま頭に拳をぐりぐりと押し付ける。すると、悲鳴を上げながらクロワールは謝罪の言葉を口にした。はあ、つとため息が零れる。こう言っただけ、悪戯っ子にお仕置きした所為か、幾分かは落ち着く事が出来たようだ。ひとしきりぐりぐりしたところで、クロワールを開放する。

「なんかもう、良いよ。それで許してあげる」

「いってーッ。お前、もう少し手加減してものをしろよ!」

「それ位で許してあげるんだから、感謝してほしいぐらいなんだけどなあ」

半泣きになりながら睨み付けてくるクロワールにもう一度溜息が零れた。

「くっそー、酷い目に遭った」

「僕はもつとひどい目に遭ってるよ」

皮肉が出るのも仕方が無い。

「とにかく、教えたからな!!」

「ああ」

「そのうちまた様子を見るから覚悟しとけよ!」

そう、びしっと僕を指さし告げると、クロワールは夜空に向かい消えていく。

「というか、また来るんだ」

その姿を見送り呟いた言葉。夜に溶け込み消えていった。

## 14話 この世界に来て

「それで、アンタはどうするつもりなのよ？」

プラネテューヌの教会。クロワールとの接触を果たした次の日の朝、すっかり傷も塞がりどうしようかとかんがえていたところで、朝のあいさつもそこそこに、あいちゃんとイストワールさんに聞かれていた。

「とりあえず、身体の具合も上々なようだし、一度ラステイションに戻ってみようかと思うよ」

既に女神救出から少しばかりの時間が経っている。いい加減何かしらの連絡を入れないといけないだろう。昨日は色々な事を立て続けに聞かされたため、そこまで気が回っていなかったけど、漸くそんな事を考える余裕も出てきていた。

「では、此方からケイさんに連絡を入れておきましょうか？」

「お願いします——」

僕とあいちゃんの話に耳を傾けていたイストワールさんがそう言ってくれた。ふむ、っと考え込む。僕はギョウカイ墓場から、異界の門無しで帰還してきていた。普通的手段では、生きている人間は行く事が出来ない場所。其処から単身帰還してきている。馬鹿正直に話せば、その異常性にケイさんが気付かない筈がない。ならば、当然どうやって帰って来たのかと言う事を追及されるだろう。それには僕の事を話す必要が出てくる。今の僕がどういう存在なのか。できればあまり人に話したい事では無かった。だからこそ、事情を知るイストワールさんに耳打ちする。

「ただ、異界の魂の話を少しでも織り交せて話して貰えませんか？」

「——ッ、ああ、そう言う事ですか。解りました。しっかりと伝えておきますね」

「ありがとうございます」

昨日クロワールに出会った後、イストワールさんにだけは改めてギョウカイ墓場での事を話していた。その時当然どのようにしてギョウカイ墓場に辿り着き、帰還したのかも語っていた。侵入する際

は、異界の門を用いていた。そして逃げ帰る時には、その身一つでギョウカイ墓場から抜け出し出している。ケイさんにギョウカイ墓場の話を聞いていた時から疑問に思っていた事はあつたけど、プラネテューヌの小さな教祖様と話をしたことにより、何故自分がそんな事をできたのがようやく理解できた。ある意味では、できて当然のことをしたと言う事だった。

因みに、マジックやジャッジと戦った際、再現させた魂砕は、魔力によって構築された姿を長釣丸の物に戻している。あの時はシェアクリスタルの力を用いたからこそ使う事が出来た武器だったけど、一度成功させていたせいか、魔力を変換するコツを感覚で覚えたのか、再現率こそあの時には遥かに劣るけど、魂砕をもう一度顕現させることはできるようになっていた。

「ちよつと、二人で何を話しているんですか？」

唐突にイストワールさんに耳打ちしたものだから、あいちゃんがそんな感じで尋ねてくる。僕だけが相手ならば、もっと強気に聞いて来ただろうけど、耳打ちしたのはあいちゃんの直接の上司であるイストワールさん。そのせいで、微妙に変な言葉遣いになっているのが少しおかしかった。

「ん、ちよつと内緒話をね」

「あのね、そこはもう少し隠すなりなんなりしなさいよ。気になるじゃない」

「ごめんね。けど、言いたくないんだ」

「すみません、アイエフさん。四条さんが話したくないと言うのなら、私の口からは教えてあげられません」

隠し事はあまりしたくないけど、正直に話す事も出来ない。だから、こんな中途半端な事を言ってしまった。この場でもう一人事情を知るイストワールさんも困ったような苦笑いを浮かべながら、あいちゃんに申し訳なさそうに告げる。

「はあ、もう言いわよ。そんなにストレートに教えたくないって言われたら、諦めるしかないじゃない」

溜息を吐きながらあいちゃんはそう零すと、降参と言わんばかりに

両手を軽く上げた。追及はしない。気になるけど追及はしない。そう言ってくれているのが解った。少しだけ、ほっとする。態々場の空気が重くなる話はしたくない。

「とにかく話を戻すわよ。一度ラステイションに戻るって言うのなら、当面の目的は一緒なわけね」

「ん、あいちゃんもラステイションに用事が？」

「ええ、ルウィーに向かっていている途中にノワール様救出の報を受けたからね。私はプラネテューヌに戻ってきたけど、ネプギアやコンパはそのままラステイションに戻ったのよ。女神であるノワール様が協力してくれるのなら、それ以上に心強いものは無いしね」

「そうだね。女神さまが加わってくれるのなら、他の女神救出も遣り易くなるだろうね」

「そう言う事よ。で、それに合流しようって訳」

其処まで聞いて納得する。ラステイションでユニ君を仲間には出来なかったけど、そのお姉さんは引き受けてくれるかもしれないので、挑戦しようと言う訳なのだろう。当たり前と言えば当たり前なのかもしれないけど、あの子たちも頑張っているんだなって思うと、すごいなあって感心してしまう。

「そうなんだ。なら、目的地は一緒だし、一緒に行く？」

「……別に良いんだけど、こつちが言おうと思ってた事を先に言われるとなんか腹立つわね」

そんな不穏な事を零すあいちゃんに苦笑する。とはいえ、あいちゃんの方も一緒に行くのは問題ないのか、本気で怒っているわけでは無いけど。

「傷の具合はどうですか？」

「問題ありませんよ。もう、消えましたから」

イストワールさんが聞いてくる。考えてみれば昨日治療を受けたばかりである。その心配も仕方が無い。だから、事実だけを答える。体の方は、治療魔法を何度かかけた所為もあり、万全と言えた。

「そうですか……」

そう頷きつつも、傍らに居る本に腰かけた女の子は、複雑そうな表

情を浮かべていた。そんな彼女の顔を見無かった事にする。もう終わった話であるし、これ以上蒸し返すべきでは無いんだから。

「四条はすぐにでも出られる?」

「ああ、問題ないよ」

「そ、なら私の準備が終わったらすぐにでも出れるわね。昼までには終わらせるから、それまで時間を潰してくれるかしら?」

「ん、解ったよ。なら、少しその辺りをぶらついてから教会集合って事で」

そう言い話を終える。女神救出からそのままプラネテューヌの教会に来ていた。荷物と言っても長釣丸くぐらいいかないので、準備のしようも無いからね。少しプラネテューヌの街を見てみようかな。そう思い、二人と一旦別れる事にした。

プラネテューヌの街中を当ても無く歩く。ラストেশヨンの街中と比べ近代的な建物が多く、僕のいた世界の建物と比べても、遥かに技術が進んでいるのが解る。宝玉を取りにリントさんとプラネテューヌには着た事があったけど、どちらかと言えば辺境だったため、これ程までに凄い街並みだとは思っていなかった。何と言えぱいのだろうか、SFに出てきそうな街並みと言うのが一番しっくりくる。僕の馴染みのある町と比べて、遥かに近未来的だった。目的などが特にある訳でも無いので、気が向いた店などには行ってみようかと思っていたのだけれども、見る物全てが珍しいため適当に歩いているだけでも中々に楽しかった。

「ふーん。それで、一旦ラストেশヨンに戻るってか? つまんねーの。いっその事、犯罪組織に入って女神達とガチバトルとかすれば良いじゃん。でっかい奴は兎も角、紅の女神の方はお前に興味がありそうだったしな。それに、助け出した女神と敵対するとか、すっげー燃えるじゃん!」

そんな時に再び出会ったのが、そんな事をのたまう小さな女の子だった。黒の妖精。クロワール。イストワールさんにどこか似てい

る存在だった。両手を後頭部で組み、けらけらと笑いながら僕の肩に腰かけている。ちなみに、彼女が腰かけていた黒い本は、今僕が持たされている。

「女神と敵対する理由が無いし、犯罪組織に入る理由も無いよ」

そんなクロワールの無責任な言葉に溜息を吐きながら答える。

なぜこの子と一緒に居るのかと言えば、暫くは暇だから来たらしい。そう聞いた時は、余りに予想外だったため、お笑い芸人よろしくこけそうになった。この子が本当のところ何を目的にしているのかは解らないし、教えてもくれないけど、碌な事では無いんじゃないだろうか。出会ったばかりだけど、容易に想像はできる。

ともかくこの子は僕を観察するのが今の目的なようで、僕もこのはた迷惑な人物を放って置く訳にもいかなないので一緒に居ると言う事だった。

「いやいや、あるだろ。異界の魂の召喚とか。異世界の呼び出されたことだけでも相当な恨みになるはずだぜ。そんなもって、お前にある結末は利用されるだけ利用されたあとは消されるだけ。お役御免、さようならーってな！ 女神の脅威を排除するってのは、要するに女神を助け出して犯罪組織も潰すって事だな。つまり殆ど世界を救う必要がある。そこまでして払わされた代償はなんとやら。うわあ、考えただけでもひでーな。同情するぜ。俺ならそんな世界ぶっ壊してやりたいて思うね！」

クロワールは言葉とは裏腹に嬉々として言葉を紡ぐ。その様は僕がどう動くのかを見て楽しんでるとしか思えず、正直煩わしい。だけど、一人になってしまおうと、目の前に居る黒い妖精の言う様な事を考えてしまいそうになるのも確かな為、こんな人物ではあるけども、一人でいるよりは幾分かましだと思える。

「その元凶が何をいまさら」

「あっはっは。それについては悪かったって言ってるだろー」

「……もう少しお仕置きが欲しいのかい？」

「アレはマジでいてーから、絶対にすんなよ!？」

ぺしぺしと僕の頬を軽く叩きながらクロワールは続ける。何と言

えばいいのだろうか、邪気しかないけど、その所為で純粹に見えると言うか、本当に楽しみにしているだけな様で、どこか憎み切れなかった。愉快犯極まり。迷惑でしか無い筈なんだけど、この子を嫌いになり切れずにいた。

「でもさー、実際のところどーすんだよ。女神やこの世界を救ったところで、お前には何一ついい事は無いぜ？ 寧ろ奪われるだけじゃないか。その辺は真剣に考えた方がいーんじゃないの？」

「いろいろ与えて貰った事もあるよ。目が見えるようになった。足が動くようになった。新しい出会いがあった。魔法なんてものも使えるようになったし、誰かに必要とされることもあった」

クロワールの言葉に言い返す。確かに今のままでは、僕にはお世辞にもいい結末は待っていない。だけど、それはクロワールの言う事が全て事実であり、イストワールさんの言う事に間違いが無かった場合の話だ。イストワールさんは兎も角、この子の言う事はいまいち信用ならないし、

「何より、答えは他にもあるかもしれないよ。今見えている道だけが、全てじゃない」

希望が無い訳でも無い。元の世界に戻る。その点で言えば、確かに道は潰えていた。その一点に関していえば、絶対にどうしようもない。だって、既に終わっている事だから。もう結果が提示されているのなら、覆す事はできない。けど、元の世界に還ると言う事を諦めれば、まだ道はある。例えば、さっきクロワールが言った犯罪組織に入るって言うのも、何にも拘らないのなら選択肢になり得る。だけど、僕の感情だけで、世界を壊すなんて言う気は無い。それに幾ら異界の魂と言っても、そんな事が出来るとは思えないしね。力では無く、僕の心が強くないから。

「何とも優等生な考えで。けどなー、ユウイチ。それはお前が本気で追い詰められてねーからだよ。今のはな、まだ他人の事を考える余裕があるから言える言葉だぜ？」

「そう、なのかな？」

「あつたりまえじゃん。だれだって、てめーの命が一番って思うだろ。」

だから、最後には余裕がなくなるんだ。だからこそ、ホントに追い詰め詰められたときは、自分のことしか考えられねーんだよ。どうしようもない状況になった時、どーするのかは今のうちに考えておいた方がいいーぜ」

確かにクロワールの言う事も解る。少なくとも今の僕は本気で追い詰められている訳でも無い。だけど、後がなくなった時はどうなるか解らない。今から考えをまとめておくのも悪いと言う訳では無かった。

「それでも、世界を壊すとかは考えないと思うなあ」

とは言え、そこまで過激な事をできると思わないけど。

「んだよ、つまんねーの！ 異界の魂なら、女神も国も壊滅とか悲惨な結末を見せてくれると思ったのになー」

「……君って結構言う事がえげつないよね」

つまんねーと僕の耳を引っ張るクロワールにもう一度溜息が零れる。

「だって、神が治める世界を人が壊すとか早々みれねー展開だし、気になるじゃん。それにやるなら派手な方がおもしろーに決まってるしな！ 夢はでつかくってな」

「それは何か違うんじゃないかな」

結局、この子は自分が面白ければそれでいいと言ったタイプなんだろう。何と言うか、こんな漫画があったらおもしろくね？ って聞かれているような感じである。

「そんなことねーよ」

「いや、あるよ」

むむむ、っと唸るクロワール。どうでも良いけど、片手で耳を引っ張るのはやめてほしい。

「兎も角、いまん所はユウイチは派手に事を起こす気はねーのか」

「ないよ。てか、君の言い方だと、僕が世界を壊すとかそういう凄い方向に行くのが確定しているみたいだけど、なんでさ」

「だって、そっちの方が面白そうだしな」

「そうですか」



僕の質問に、クロワールはにやりとした笑みを浮かべる。ある程度予想していた答えに溜息がまたこぼれそうになる。

「それに、そうしないとお前がこの世界にいらねーしな」  
「……」

何気ないクロワールの言葉に、出かかっていた言葉を思わず飲み込む。この愉快犯にそんな事を言われるとは思っていなかったから。

「折角見つけた異界の魂とか言う存在が、何の事件も起こさないうで消えるとか勿体ねーじゃん！」

「ああ、やっぱりそう言う感じなんだ」

一瞬でもクロワールの言葉に感動しかけた自分が馬鹿だった。何だろうこの、そこはかとなく裏切られたような感覚。それがまた、何故か痛快だった。少しだけ吹き出す。

「何いきなりふきだしてんだよ。変な奴だなー」

「いや、ね。なんだかんだ言って、この世界に来たのは君の所為なんだなって思うと、この状況がどうもおかしくてね」

普通なら、僕はこの子を恨んでいても不思議では無い。むしろ、それが当たり前なんだと思う。だけど、どういう因果か、一緒に街を散策しながら話している。クロワールの事を完全に嫌いになれないでいる。それが、酷く滑稽な事に思えた。だけど、それはクロワールが居たからこそ、ゲームギョウ界に来られたからなんだろうと思う。彼女が異界の魂召喚の儀式を、この世界に持ってこなかったら僕は今此処に存在していない。だから、黒い妖精を嫌いになり切れないんだろう。結局、なんだかんだ言って感謝もしていると言う訳なんだと思う。

「この世界に来たことは後悔してないよ。むしろ、良かったと思ってる」

「あ？ いきなりどーしたんだよ？」

自然と口に出た言葉に、クロワールが怪訝そうに僕を見るのが解った。

「だから、ありがとって言うっておきたくてね」

この世界に来なければ、僕は変わら無かったかもしれない。だか

ら、変わるきつかけをくれたクロワールには、一度だけお礼を言うのも良い気がした。色々と酷い目に遭っているけど、確かにこの世界に来て救われたと言う面もあるのだから。

「なんかわかんねーけど、どーいたしまして」

そう言いクロワールは耳を一度引つ張ると漸く肩から飛び降りる。そのまま僕の持っていた黒い本に腰かける。肩に乗っていた軽い重さが消え、少し態勢が楽になる。

「そろそろ時間なんじゃねーの？」

「ん、そろそろだね」

クロワールの言葉を聞き、頷く。気付けば、もうそろそろ戻らないといけない時間帯になってきていた。

「なら、行こうかな」

「ああ、じゃーな。またそのうち見に来るわ」

そう言い別れる。昨日も似たような事を言っていた。案外、またすぐに会う事になるんじゃないだろうかと思いつながら教会へ向かって歩を進めた。

## 15話 襲撃

「失礼します！ ノワールさんが救出されたって言うのは本当ですか!?」

ラストイションの教会。足を踏み入れるや、ネプギアは少しばかり焦ったような声音で言った。黒の女神救出。ラストイションの街に入ってその情報の信憑性の高さを実感すればするほど、ネプギアは気が急いでしまっていた。彼女の姉であるネプテューヌと同じ女神であるノワールならば、他の女神救出の大きな助けになると考えたと考えたからだ。

「ふふ、教会に来るなりそれか。気持ちには解るけど、少し落ち着こうか」

「あ、ケイさん！」

「久しぶりだねネプギアさん」

「あう、ごめんなさい」

そんなネプギアに、ラストイションの教祖である神宮寺ケイは、何時もの朗らかな笑みを浮かべながら窘めるように言った。そんなケイの言葉に、根が真面目でありかつ素直なネプギアは慌てて謝罪を告げる。彼女がいる場所は他国の教会である。候補生とは言え、女神に名を連ねる自分が醜態を晒してしまった事に、恥ずかしそうに困ったような笑みを浮かべた。そして小さな声で落ち着かなきゃと自分に言い聞かせる。

「構わないよ。それだけ気が急いても仕方が無い事が起こったからね」

「——ツと言う事は!?!」

「ああ、貴方が期待している通りの事が起こったよ。ラストイションの女神が、ノワールが、ユニを中心としたラストイションの人々の力によって助け出された」

「っ、本当だったんですね」

ケイの言葉を聞いたネプギアは、自分の手を胸の前で組み、心の底から嬉しそうに嬾やかな笑みを浮かべた。彼女は救出された時、他の

女神を目の前にしながら誰一人助けられなかったことに負い目を感じていた。そんなネプギアからすれば、ただ一人でも女神が救出されたことが何よりも嬉しかったのだろう。子供のように無邪気に笑みを浮かべていた。

「本当に良かったです。ノワールさんなら、きっと助けになってくれるです」

「そうだね。女神さまが味方になってくれるなら、百人力だよ！」

ネプギアより僅かに遅れて入ってきたコンパと日本一も、ケイの言葉を聞き嬉しそうに口元を緩める。

「……喜んでくれているところに水を差してしまって申し訳ないんだけど、ノワールは協力できない」

そんな三人にケイは端的に告げる。黒の女神は協力できないと。

「そんな！ どうしてですか!?!」

当然、女神救出を目標としているネプギアたちはその言葉に食い下がる。敵に女神が四人束になっても勝てなかった相手がいる事をネプギアは知っていた。三年前、紅の女神マジック・ザ・ハードに四人の女神が成す術も無く敗れ去ったから。その力をネプギアは目の当たりにしていた。

それでも、自分やユニをはじめとする女神候補生や、アイエフやコンパ等の旅の仲間、彼女が協力を取り付けているゲームキャラ達の力を合わせれば、必ず救出できると信じていた。それに当代の女神の一人が加われば、更に助け出せる可能性があがるからだ。

「そうです。今はみんなで協力しなければいけない時だと思うです！」

「うん。一人一人の力は小さいかも知れないけど、力を合わせれば強大な敵にも打ち勝てるよ！」

ネプギアの言葉をコンパと日本一が後押しする。そんな三人の様子に、ケイは苦笑を浮かべていた。

「ああ、すまない。言い方が悪かったね。ノワールは今協力ができない。救出したとはいえ、シエアの力が届かない場所に長らく監禁されていたようだね。今のノワールには休息が必要なんだよ」

言葉足らずで済まないと言謝り、ケイは言葉が続けた。ギョウカイ墓場に三年も囚われていた。その消耗は一日二日で治るものでは無かった。比較的高いシェアが維持されていたラステイシヨンの女神とは言え、回復までにはそれなりに時間がかかると言う訳であった。

ネプギアが救出された時はシェアクリスタルを用いた事により、あの程度の体力も回復されていたが、今回ノワールを救出したときには助けだすのが精一杯であり、とても体力の回復にシェアクリスタルを使う余裕が無かった。それが、大きく影響していた。

「そうだったんですか。すみません、事情も知らずに無理を言ってしまうって」

ケイの言葉を聞いたネプギアは、素直に引き下がる。幾ら女神とは言え、直ぐに動ける筈が無かった。自分も身に染みてその事は解っていたから。それに、ケイの言葉から協力しないと云っているわけではない事も理解できていた。

「いや、構わないよ。それでノワールの代わりと言っては何だけど、連れて行ってもらいたい人物がいるんだ」

「連れて言っただけですか？ 大丈夫ですけど、誰と一緒に来てくれるんですか？」

思いもよらぬ言葉に、ネプギアは小首を傾げる。女神こそ仲間に来なかったけど、新たな仲間が加わる事に依存は無かった。敵の強さは強大であるため、仲間は何人いても困らないからだ。

「――アタシよ」

「え？」

ネプギアの質問に答える様に扉が開き、答えた人物がいた。姉譲りの黒髪をツーサイドアップにまとめ、黒のショートドレスに身を包んだ女の子。その強い意思が秘められた緋色の瞳には、しっかりとネプギアの顔が映されていた。

「ユニちゃん!？」

それは、ラステイシヨンの女神候補生、ユニであった。

「ふう、漸く着いたわね」

「送ってくれて、ありがとう」

ラストイシヨンの教会の前にサイドカー付のバイクを停車する。其処から降り、此処まで送ってくれたあいちゃんにお礼を伝えた。途中までは魔法を掛け、バイクと並走してみたのだけでも、怪我人を走らせるのは気が気じゃないとサイドカーに乗せられていたからだ。

最初にバイクと並走すると告げた時、あいちゃんは本気にしていなかったようで、やれるならやってみなさいと言われた為に魔法を二つほど施して駆けてみた。そうしたら、見事に並走する事が出来てしまい、心底驚くあいちゃんの顔が見れたのは中々良いものが見れたと思う。凄まじきは、異界の魂としての身体能力と、その魔力だろうか。「いいわよ別に。私は怪我人をこき使うほど鬼じゃないからね」

そう言うときクールな笑みを浮かべ、軽く手を上げる。相変わらず女の子にしておくには勿体ない程の格好良さだと、これまた女の子に持つには何か間違っている感想を抱く。

「相変わらず男前だね」

「それは、褒めてんのか喧嘩売ってんのかどっちなのかしら？」

「勿論褒めてるよ」

「ならいいわよ」

若干引き攣った笑みを浮かべたあいちゃんに素直に言う。助けて貰ってばかりいる。感謝こそすれ、ケンカを売る理由が僕には無い。とは言え、我ながら言葉はもつと選ぶべきだと思う。言ってからなんだけど、女の子に男前は無いなあ。

「さて、無駄話をしていても仕方が無いし、サツサと入りましょうか」「だね」

スタスタと先に行くあいちゃんの後ろをついて歩く。ラストイシヨンの教会にはいる時、どこか懐かしい気配を感じた。

「ネプギアは来てる？」

教会に入り、教祖であるケイさんがいる部屋に通されるなり、あいちゃんが言った。単刀直入と言う言葉が体現したような態度が清々しいのだけれど、色々と言うべき言葉が足りていない気がする。

「君たち一行は、何方も似たような入り方をするんだね」

「どうだって良いじゃないそんな事は。それでネプギアはここに居るの？ 居ないの？」

そんなあいちゃんに、部屋の主であるケイさんは苦笑交じりに答える。そんな彼女の反応に、あいちゃんはふんつとそっぽを向くと、質問を促す。ここまでくる道中で聞いたのだが、あいちゃんはケイさんの事が嫌いな様で、どうしても刺々しい反応になるのだとか。僕自身、ラストেশヨンの教祖が癖の強い人物と言う事を身をもって知っているけど、この反応は本気で嫌いなんだなと変なところで感心してしまう。

「いや、あいちゃん。もう少し穏やかに行こうよ。そんな喧嘩腰じゃ、話してくれるものも話してくれなくなるよ」

「解ってるわよ」

あまりに態度がアレな為、少しばかり横槍を入れる。するとあいちゃんは、少しむつとしながらだけど、矛を収めてくれた。

「四条君か。プラネテューヌの教祖から連絡があった時はまさかとは思ったけど、本当に生きていたようだね。良かったよ。状況が状況だったからね。ノワールとユニを救ってくれた君は、今ではラストেশヨンの恩人と言える。そんな君だけが死んだなんて思いたくは無かった」

ケイさんの言葉に、心が揺さぶられる。生きていて良かった。救ってくれてありがとう。あのケイさんの口から、そんなにストレートな感謝の言葉が聞けるとは思っていなかったから。だからこそ、困ってしまう。自分は彼女が言うだけのことはできなかったから。

「僕は、そこまで大したことはしてないよ。ただ、食い止めただけ。それ位しかできる事が無かったんですよ」

「ユニから聞いているよ。君が立ち塞がった敵は、尋常な相手じゃないか。あのユニが、恐怖で竦んでしまうほどの相手だった。そのうちの一人は、ノワールですら戦うなど言ったほどの相手じゃないか。そんな敵から二人を守ってくれた。それは、誰でもできる事じゃないよ」

確かにそうなのかもしれない。マジックとジャツジを相手にするなど、僕のように異界の魂でもない限り、普通の人間に出来る事とは思えない。だけど、僕が出来たのは女神を逃がす事だけだった。女神の脅威を排除する為の力を持ちながら、僕にはそれしか出来なかった。だからか、素直に胸を張れなかった。

「僕の事は今は良いでしょうか？　ネプギアさんはここに居るんですか？」

そんな葛藤が、ケイさんには何時か見透かされてしまいそうだったから、話を強引に戻す。僕の事は後でも話せるので、まずはあいちちゃん達の話に戻し、その間に気持ちを落ち着けたかった。

「つと、そうだったね。ネプギアさんたちは、今は此処にはいないよ。少しばかり厄介な事になってね」

「厄介な事？」

「あいちちゃんが聞き返す。」

「ああ。彼女たちが来て、ノワールの事について話していたんだけど、その時に、ちよつとしたことがあってね。今、その鎮圧に向かって貰ってる」

「ご迷惑、ですか？」

「犯罪組織がラストেশヨンの都市であるラグーンシティと、異界の門とシェア増幅器の研究をしていた教会直轄の機関であるアヴニールに同時襲撃をかけてきてね。ユニにアヴニールを任せ、ネプギアさん達にはラグーンシティ救援をお願いしているんだよ」

どこまでも冷静に話すケイさん。正直少しは焦ってもおかしくない内容なのだけれども、まったく表情を変えずに言う様は、流石としか言いようがない。

「アンタはもう少し慌てなさいよ!?　って言うかそう言う事はサツサ



と言いなさい！ それに、アヴニールってどこかで聞いた気がする……」

「以前にノワール達が解体した企業の事だね。女神がまだ健在だったところに、色々あってね。今は教会に所属する者達によって構成されているよ」

「そうだ！ ノワールやアンタによって摘発されてた事件だったか」

ケイさんの言葉を聞き、あいちゃんが合点がいったと言った感じで頷く。それは、ここ最近召喚された僕では知る由も無い話だった。

「とりあえず、僕はそのアヴニールに向かおうかな」

二人の話に耳を傾けていると、そんな結論に達した。僕が支えると言った子が、一人でまた頑張っている。なら、それを支えてあげるのが友達つてもものだと思う。

「その申し出は、ラスティションとしてはありがたいけど、構わないのかい？ 君は大きな怪我を負っていたと聞いているけど」

「もう、ほとんど消えましたよ」

「確かに魔法でほとんど消えてるみたいだけど、重傷を負っていた事には変わりがないのよ」

あいちゃんとケイさんに体を心配されるけど、それは無用な心配と言うものだった。既に僕の体にあつた怪我は、無くなつてしまつていたから。まだ痛みを感じる事はあるけれど、殆ど無くなつたと言つて良いぐらいにまで回復していた。なら、頑張り屋の妹分を助けに行かない理由の方が無い。

「問題は無いよ。それに、僕はあの子の相方だからね。ユニ君が頑張っているのなら、助けに行かないと」

「四条、アンタ……」

「まあ、過保護なだけかもしれないけどね」

感心したように零したあいちゃんに、苦笑しながら言う。ユニ君は決して強い子じゃない。だから、支えてあげなきゃと思つてしまうのだ。

「それなら、ラスティションの教祖としてお願いするよ。アヴニールの研究所まで行つて、ユニに協力して欲しい」

「承りました」

そう言い、小さく笑う。ケイさんがすんなりと僕を信じてくれるのが嬉しかった。だから、声に出さずにありがとうと告げる。ただ、形にしておきたかったから。

「なら、私はネプギアたちと合流するために、ラグーンシティに向かうわ」

「解った。そっちは任せるよ」

頷き合う。僕には僕の、あいちゃんにはあいちゃんの向かうべき場所が出来ていた。

「そっちこそ、頑張りなさいよ」

そう言い、別々の行くべき場所に向かい踏み出すのだった。

「四条君か。彼はどうしてここまで頑張ってくれるんだろう」

アイエフとユウイチが去った教会の一室で、ケイは誰ともなしに呟いた。四条優一。ラストイションの女神候補生であるユニが見出した男だった。プラネテューヌの教祖であるイストワールから、彼が異界の魂であると言う事を聞かされていた。異世界から呼び出され、人には過ぎたる力を持たされた人間。召喚される側に拒否権は無く、否も応も無く呼び出される。見知らぬ世界に身一つで放り出された存在なのだと言う。

つい先日まで、ゲームギョウ界は女神不在と言う未曾有の危機に晒されていた。それを変える大きな力となってくれていた。それがケイには信じられなかった。彼女には、ユウイチがゲームギョウ界を嫌う理由があっても、好きになる理由があるとは思えなかったからだ。そしてそう思うのも仕方が無い事なのである。ケイが知っている情報の全てが四条優一の事実では無かったから。彼が得たものと失ったもの。ソレを知らなかったから。

「おや、ガナツシユからか？」

異界の魂へ思考を移していたところで、ケイの持つ通信機が着信を告げた。画面に表示されていた名は、ガナツシユと言う人物からで

あった。今現在のアヴニールの主任をしている男であり、かつて、ラストイションの敵だった男。そしてノワールに倒され、贖罪をすると誓った人物であった。

《ケイ様！》

《どうしたんだい、ガナツシユ》

《増援に來た防衛隊の物は全滅、ユニ様が唯一人で敵に当たっており  
ます。ですが、ブレイブ・ザ・ハードと名乗る敵の主力はあまりに強  
大過ぎます。ユニ様の手にすら負えず、このままでは壊滅するのは時  
間の問題です。至急増援をお願いいたします》

《なんだって!?!》

予想だにしていなかった言葉に、普段の彼女らしからぬ声を上げる。確かにアヴニールは襲撃されていた。それでも女神候補生が鎮  
庄に向かっている。女神救出に沸くラストイションで戦うならば、負  
ける道理は無かった。にも拘らず、連絡によればアヴニールは壊滅間  
近であり、ユニの敗北も時間の問題であると言えた。あり得ない出来  
事が起ろうとしていた。

《解った。今、ラストイションの出せる最大戦力が向かっている。何  
とか持ちこたえて欲しい》

《まさかノワール様が?》

《いや、違う。ノワールはまだ出られるほど回復していない。女神救  
出の際、ノワールとユニを救ってくれた人物。彼が生きていた。四条  
優一君に向かつて貰っている》

《そうですか、あの時の功労者が生きていたのですか。解りました。  
何とか持ちこたえて見せましょう》

そう最後に言い、通信は切られた。

「……ケイ、何かあったの?」

予想外の状況に、流石のケイも溜息を零す。少しばかり気が動転し  
ていたのだろう、弱弱しく近寄ってきていた気配に声を掛けられるま  
で気づかなかった。

「ノワール!?!」

「貴女がそんなに驚いた顔をするのは珍しいわね。私に気付かない

程、気が動転していたようね。そこまで状況は良くないのかしら？」  
驚くケイに、ノワールは悪戯が成功した子供の様に綻ぶも、直ぐさま表情を引き締める。ケイが周りを見る余裕を失うほどに動揺していた。それがどう言う意味か、ノワールには良く理解できていたから。

「……そうだね。本音を言うと、かなり良くない。アヴニールの研究所が襲撃され、ユニの手に負えない敵が現れたみたいなんだ。敵の名は、ブレイブ・ザ・ハードと言うらしい」

ノワールは助け出されたばかりであり、消耗しきっている。仮に話したとしても余計な心配をかけるだけだと解っていないながらも、結局ケイは語る事にした。真面目であり国の事を誰よりも愛している女神である。此処で一時的に隠したとしても、他の人間から情報を聞き出すのは目に見えていたからだ。ならば、ケイが自分自身で話してしまった方が、あとあとの動きを直接聞ける分、いくらかマシであると言う訳だ。

「あの子が危ないの!？」

「ああ。だから今出せる最大の戦力に助けに向かって貰っているんだ」

驚くノワールにケイは静かに付け加える。普段の様に落ち着いた声音に、妹の危機に驚きを露わにしたノワールも幾分か冷静さを取り戻す。

「それにブレイブ・ザ・ハード。アイツの名前に似ているわね」

「アイツ?」

「私たち女神を捕えたやつの事よ」

それは、女神たちが四人がかりでも勝てなかった相手。そんな相手と、名前が似ていた。そんな偶然の一致がノワールの直感にけたたましい程の警鐘を鳴らしていた。

「……ケイ」

覚悟を決めたようにノワールはケイを見る。

「はあ……、どうせ止めても聞かないんだろう?」

そんなノワールを見ると、長い付き合いであるケイは、彼女が何を

言っても止まらないと言う事が容易に解ってしまった。

「あの子を守る為なら」

「なら、止めないよ。その代り、絶対に帰って来る事。三年前みたいに女神不在なんて、もう沢山だからね」

小さく頷く黒の女神に、ケイは降参したと言わんばかりに両手を上げた。どうせ止まらないのならば、やりたいようにできるよう、背を押すだけであった。

「ありがとう、行ってくるわ」

「ああ、気を付けて行って来ると良い。必ず帰ってくるんだよ」

「ええ、きつとユニと二人で帰ってくるわ」

ケイの言葉にノワールは穏やかな笑みを浮かべると、妹を助ける為、愛剣を手に取り駆けだすのだった。

## 16話 ラステイションの戦い

街道を走っていた。この世界に来て動くようになった足を動かしながら。異界の魂として召喚されたことにより向上した身体能力に加え、自身に身体能力を向上させる魔法と、速度を上昇させる魔法を重ね掛けする事で、人間の限界を超えた速度で移動する事ができた。

ラステイションの教会から出て、アヴニールの研究施設へと向かっていた。犯罪組織マジエコヌヌによる同時襲撃。この世界を統治する女神たちを滅ぼそうとする者たちの仕業だった。

クロワールが言うには、彼らは僕がこの世界に呼ばれる事になった要因であるらしい。犯罪組織を壊滅させること。それが異世界人である僕がこのゲームギョウ界に存在できる理由であり、最終目標と言う事になる。

クロワールが言うには、ソレを成すまでは女神さまたちに直接招かれた僕は、ゲームギョウ界にとって正規の手続きを経て存在する者と言う事になり、ソレを成した時点で女神の願いは完了し、僕はゲームギョウ界にとって不正に存在すると言う事になるらしい。ゲームで例えるなら、メインキャラからバグキャラになると言っていた。極端な例えだけど、何となく言いたい事は理解できた。要するに、目的が達成したら、僕は邪魔になるのだろう。だから、ゲームギョウ界が、本来在るべき者を在るべき場所へと返すのだとか。必要だから借り、不要になったから返す。単純な道理だとは僕も思う。けど、そうなる訳には行かない理由が僕には出来てしまった。

「けど、今はそんな事を考えてる場合じゃないか」

それは難しい問題だから、今みたいに余裕が無い時に考えるべき事では無かった。左手に持つ長釣丸の重みを確かめるように握り直し、目的地へ続く道に意識を戻す。

「うう……痛いつちゅ」

そのまましばらく走り続け、少しばかり息が上がり休憩しようかと考えたところで、そんな声が聞こえた。それは、苦しそうな小さな呻

き声だったけど、確かに聞こえた。異界の魂云々を抜きにしても、聴覚は優れていたし、ましてや今は身体能力が魔法によつて向上している。聞き間違えとは思えなかった。

「——ちゃんには振られて、仕事でも女神候補生にボコボコにされたつちゅ……。オイラ、もう駄目かもしれないつちゅ……」

声の主を見つけた。それは、何と言うか大きな黒いネズミだった。黒いネズミが街道の脇にある木にもたれ掛かり、息を荒げている。その手と足には人間用の手袋や靴が付けられていて、人のように座り込む姿は普通のネズミとは思えなかった。言葉も人の物を話すようで、モンスターとは思うのだけど、放つて置けなかった。トンツと一足飛びで距離を詰め、近寄る。

「怪我、してるみたいだね」

「誰つちゅか!？」

すぐさまネズミ君の傍らに片膝を立て座り、様子を見る。ネズミ君は警戒したようで声を荒げるけど、怪我の為か、抵抗は殆ど無かった。素人目で見ただけだけど、大きな外傷は見当たらない。その代り小さな傷と打ち身の痕が無数にある。顔の辺りが紫色に腫れ上がっており、痛々しい。

「単なる通りすがりだよ」

「答えになつてないツちゅよ!」

左手に魔力を込め、言葉を紡ぐ。

——月光聖の祈り

それは癒しの魔法。傷付いた体を優しく治す、癒しの力だった。初めて使った時からあまり得意な魔法では無かったのだけれど、最近を使う機会が多くあったし、少しはマシになっていくかもしれない。軽傷とは言え、ネズミ君の傷がみるみる良くなつていくのを見ると、そんな事を思った。

「イダダ! イタイトツちゅ! いきなり触るなつちゅよ! お、男に触られる趣味はないつちゅ! 触れ合うなら女の子の方が……。アレ? 痛みが和らいでるつちゅ」

突然触れられた事で声を荒げたネズミ君だけど、傷が治り始めた事

に驚いたのか目を丸めている。その様子がおかしくて少しだけ吹き出してしまうけど、あまり時間がある訳でも無いと思い出し、表情を引き締める。

「これで大丈夫だね。なら、僕は行くよ」

「ちよ、ちよと待つちちゆよ！ お兄さん、何者だちちゆか」

人助け——ネズミ相手でも人助けでいいのだろうか？——をした後、直ぐに道を急ごうとしたところで、ネズミ君に呼び止められた。

「さつきも言ったけど、ただの通りすぎりだよ」

「通りすぎりなのに、オイラなんかを助けてくれたちちゆか？」

「世の中、助け合いだからね」

聞いて来るネズミ君にそう答える。目の前に傷付いた者が居て自分に助ける術があるなら、助けるのに特別な理由なんかいらないう。思う。

「じゃあね、ネズミ君」

「待つちちゆ！ オイラの名前はワレチューって言うちちゆ！ お兄さんの名前を教えて欲しいちちゆ！」

「僕の名前かい？」

再び走り出そうとしたところで、呼び止められた。急いでいるとは言え、名前を名乗る時間ぐらいはあった。

「四条優一だよ」

それだけ告げ、ネズミ君と別れるのだった。

「最早勝敗は決した。大人しく降伏するならば良し。だが、実力の差を知ってなお抗うと言うのなら、容赦はしないぞ」

アヴニールの研究所。倒壊した建物から吹き上がる砂塵の中から、そんな言葉が聞こえてくる。重々しいながらも、どこか晴れやかな響きを持つその声音は、武道の達人のようにある種の切れを宿している。声の主の姿が露わになる。重厚なフォルムを持つ、機械の巨人であつた。黒く禍々しいジャツジ・ザ・ハードを悪と称するならば、白



く輝く勇者のような外見は、正義と称するのが相応しい。言うならば、機械仕掛けの英雄だった。名をブレイブ・ザ・ハード。それが、アヴニールを襲撃した敵だった。

「っ、まだよー。まだ、アタシは負けてない!!」

そんな声に対抗する様に叫び声が放たれる。強い意思を秘めているが、どこか幼い声音。アヴニールを守る為に来たラステイションの女神候補生、ユニである。

ユニは既に女神化を施した状態であり、黒のボディースーツに銀髪を揺らした女神としての彼女の姿であるブラックスターに変身していたのだが、それでも尚立ちほだかる敵に手も足も出せずにいた。ボディースーツや女神と言うに相応しいきめの細かい艶やかな肌に、幾筋もの赤い線が入っており、手にする自慢のX・M・Bも手にするのがやつとなのか、銃身も地に向けており落とさないように何とか持っていると言う有様であった。そんな為体でありながら、ユニは負けを認める事が出来なかった。対峙する敵に向かい、声を上げる。まだ倒れる訳には行かない。自分は何一つとして成せていない！そんな言葉に宿った意思が感じられる。

「アタシは負けられないの。アイツはたった一人で敵と、ううん、一人でアタシとお姉ちゃんを支えながら戦い抜いた。ユウは二人も守りながら戦ってくれたのに、アタシは自分一人も守れないなんて、そんな事は有っちゃいけないのよ。アタシが、アイツのパートナーを名乗る為にも、こんなところで負けられないの!!」

それは、ユニが姉であるノワールを救出したときに抱いた想いだった。彼女のパートナーである四条優一は、ユニを支え、一緒に強くなると言ってくれた。実際にその言葉通り、ギョウカイ墓場で女神を救う為、ただ一人その場に残り、ユニとノワールを支えてくれた。優一の言葉に嘘が無い事が解り、ユニは純粋に嬉しかった。

だが、そんな四条優一に比べ、ユニは自分が何一つ返せていない事に気付いてしまった。彼女を支え、一緒に強くなると言った。実際に言葉通り、ユウイチが支えてくれているとユニは思う。それで強くなった気がしていた。けど、違ったのだ。短い間であったが、ユニは

幾つも与えられていた。絆であつたり、言葉であつたり、命を賭けた事すらも。だけど、彼女が貰ったものを顧みた時、同時に自分が与えたものはどんなものがあるかを考えてみた。そして、思いつかなかつた。優一に聞けばきつと答えてくれるだろうとはユニも思う。けど、そう言う事では無かつた。ユニが優一に貰ったものと同等のものを、ユニが優一に与えられているのかと考えると、何一つ与えられていないと思つてしまつたのである。

一緒に強くなつた氣でいた。だけど、そうでは無かつた。ただ自分は支えられていただけだつたのだ。そう氣付いた時、ユニはこれまでとは違う意味で強くなりたと思つた。弱いままではいたくないと思つてしまつたのである。

「貴様にも譲れない想いがあるのだろう。だが、それは俺とて同じだ。故に屈せぬと言うのなら、打ち砕くのみ」

「アタシは、負けれないの!」

ブレイブが剣に炎の力を宿し構える。金色の獅子を胸に宿し、炎を宿した剣を手にする姿はまさに英雄と言うに相応しい。強大な体軀から放たれる圧力はまさに圧巻の一言であり、次に放たれる一撃が最後と言う氣迫が誰の目にも感じられる。

対してユニの構えるのはX・M・B。残る力を全てを注ぎ込み、震える手で構える。既に満身創痍であるが負けられない。そんな決死の想いがユニの瞳に映つていた。

両者が構えを取り、数時間、或いは数瞬の時が流れた。静寂に包まれた空間を、何者かの足音が小さく響き渡つた。

「ブレイブソード!!」

「X・M・B!!」

互いの声が響き渡り、力と力が衝突する。一瞬の拮抗。力の奔流のぶつかり合いに、突風が巻き起こり、ブレイブによって崩壊していたアヴニールの研究所に更なる傷跡を刻む。だが、

「あ——」

拮抗したのは刹那にも満たない時間でしかなかつた。ユニの放つたX・M・Bは、ブレイブの放つた剣技であるブレイブソードの前に、

その力を使い果たし消滅した。X・M・Bは僅かにブレイブソードの威力を減衰させた。だが、それだけだった。

最初から勝負の見えた戦いだった。彼我の実力差は覆し難いところまで達しており、その上これまでのぶつかり合いから既にユニは限界だったからだ。そもそもX・M・Bが放てたのも不思議なぐらいであり、ユニの敗北も当然の帰結と言えた。

「ごめんなさい」

剣が迫った時、ユニが呟いたのはそんな言葉であった。そして、  
「くう、あああああ!!」

直撃した。ブレイブソードがユニの体に寸分の狂いなく吸い込まれる。その強大な剣を交わす事も出来ずに己が身に受けたユニは、耐えきる事などできる筈も無く、蹴らたゴムボールの如き速さで吹き飛ばされる。そして、壁を幾つも打ち抜き漸く停止した。

「負け、られないの……」

全身に幾つもの傷を作り、それでもユニは立ち上がる。その目は、未だ意思が宿っていた。だが、それだけであった。幾ら女神とは言え、既に身体が限界を迎えていたからだ。その瞳はブレイブの姿を正確に捉えておらず、立っているのも不思議なほどであった。それでもユニが立ち上がったのは、負けられない。そんな想いからだった。

「その想い、敵ながら見事だ。だが、先ほども言ったが、俺にも譲れない思いがある。貧しき子供たちの為ならば、俺は修羅にでも喜んで成ろう。さらばだ、ラストেশヨンの女神候補生」

だが、それもここで終わる。既にユニは戦える体では無かった。そしてブレイブは、殆ど消耗らしき消耗をしていない。木たるべき結末が来ようとしていた。

「ユニ様は此処です!」

ブレイブが剣をユニに向けようとしたとき、そんな声が背後から響き渡る。同時に、ユニのものでもブレイブのものでもない魔力の奔流が辺りを包み込んだ。言葉が紡がれる。それと同時に、ブレイブはユニに向かって振ろうとした剣を無理やり止め、背後へと振り抜いた。

——天魔・轟雷

殆ど同時に詠唱が終え、紫電がブレイブに向かい放たれる。炎を纏った剣に、無数の雷迅が牙を剥く。音速すら超える光速の閃光が辺りを鮮烈に包み込む。

「この子は、やらせないよ」

「ぐ、何者だ!!」

強烈な光が辺りを照らす中、そんな声が木霊する。突如飛来した霹靂にも対応したブレイブが声を上げた。離れていた時間はほんの僅かだったが、懐かしい声音。ソレを聞いて安心してしまったのか、ユニが意識を保っていられたのはそこまでだった。その場に崩れ落ちる。

「四条優一。この子のパートナーだよ」

そんなユニを抱き留めたのは、紫電を放った人間。異界の魂、四条優一であった。

「良く……頑張ったね」

傷だらけのユニ君を見ると、そんな言葉が口を吐く。今は意識を失ってしまったているけど、本人が聞けば上から発言に怒られてしまいそうだけど、今回ばかりは許してほしい。ぼろぼろになりながらも姉の代わりに国を守ろうと頑張っている姿は、純粹に凄いと思ったから。

——月光聖の祈り

言葉を紡ぎ、癒しの魔法を施す。それにより、辛そうな表情が僅かに安らいだ気がする。そのままユニ君を抱いたまま後方に飛び退る。それでもユニ君と対峙していた敵は此方を見据えるだけで、何かをしてくる雰囲気では無かった。どう言う事なんだろう。そう思うも、ユニ君を抱えたままではどうしようもないため、床に静かに横たえる。出来れば此処まで案内してくれたガナツシユさんに預けたかったのだけど、僕が敵に仕掛けた時に直ぐに避難してもらっていた為、できなかった。

「そうか、お前がマジックの言っていた人間か」

「マジックが……？」

「俺の名は、ブレイブ・ザ・ハード。犯罪組織マジエコンの幹部であり、貧しき子供たちの為に剣を握っている」

ユニ君から離れブレイブに向きなおると、長釣丸を静かに構える。何時攻撃されても良い様に警戒していたのだけれど、ブレイブは戦う気が無いと言わんばかりにそんな事を言った。

「子供たちの為？」

「ああ。俺は裕福な子供たちだけでなく、貧しき子供たちが娯楽を楽しめる世界を作りたい。だが、今の女神たちの統治ではそれが叶う事は無い。故に俺は犯罪組織の一員として、女神と戦っている」

確かに戦うのにはそれぞれ理由があるのだとは思う。だけど、目の前の機械仕掛けの勇者と言わんばかりの風貌の相手は、犯罪組織と聞いて思い描いていたイメージとは違う理由で戦っているようだ。

「子供たちの娯楽の為？」

「そうだ。例えばゲーム。ゲーム機さえあれば誰にでもできる娯楽ではあるが、貧しき子はソレを遊ぶ事すらもできない。明日を生きる事すら困難であり、ゲームを買うなどできる訳が無いからだ。そんな余力があるならば、生きる事に使うだろう。それ故、余裕の無い貧しき子供は満足に遊ぶ事すらできないのだ。ソレを女神たちは、改善しようとしな。弱き者は娯楽を楽しむ権利など無いと言う事なのだ。そんな事はおかしいと思わないか？俺はそんな現状を変える為、女神を倒す事を目的としているのだ」

ブレイブの言葉を聞き、考え込む。ブレイブの言う事は、要するに貧富の格差の話なのだと思う。この世界も貧富の格差は当然あり、裕福な家と貧しい家がある。極端な話ではあるけど、その差があるのがおかしいとブレイブは言っているのだろう。気持ちは解らないでもない。難しい問題だと思う。

「それを僕に言っ、どうしようって言うのかな？」

思うところは色々ある。だけど、そんな事は表情に出さずに聴く事にした。イマイチ、ブレイブが何をしたいのか解らなかつたから、

それしか出来なかったともいえる。

「そうだな。少しばかり回りくどい言い方だったな。異界の魂よ、単刀直入に言おう。俺と共に来い。マジックから聞いている。お前は女神と並びたてる存在では無い。だが、我らとならば並び立てるはずだ」

「それは……」

ブレイブの言葉に思わず目を見開く。ブレイブがマジックと同じ犯罪組織の所屬と言う事で、僕の事はある程度知っているのだろうかとは思っていたけれど、思っていたよりも正確に見抜かれていた為、驚いてしまった。たしかに、僕の願いと女神さまの願いは矛盾する事になり、並び立つ事はできない。女神さまの願いは女神の脅威の排除、つまり犯罪組織の壊滅であり、元の世界に還る訳には行かない為、僕の願いはこの世界に居る事だからだ。

「女神たちは自分たちの都合の為、お前と言う人間を犠牲にした。この世界を救うと言う名目で、異世界人であるお前を利用しようと言うのだ。それは許せる事では無いだろう？　ならば、目的こそ違うかもしれないが、俺たちは共に戦えるはずだ！」

「……」

ブレイブの言葉に返す事が出来ないでいた。確かに僕はこの世界に呼び出された。拒否権も無く、身一つでただ放り出されたのだ。この世界に来たことで、大切なものを色々と失っているのは事実なのだ。そして、ソレを一切恨んでいないかと聞かれれば、応とは言えない。僕だって元々はただの人間なのだ。今は普通の人間では無いのかもしれないけど、心は人間の時とそれほど差が無かった。だから、恨みは無いとは言えない。

「……ブレイブ・ザ・ハード。貴方の言う事は確かに事実だけど、それはできない」

だけど、それだけじゃなかった。与えられた物もたくさんあったからこそ、簡単に頷く事などできなかった。長釣丸を強く握りしめる。

「そうか。ならばここで雌雄を決する事になるとしても、か？」

「覚悟はできてるよ」

ブレイブは僕の返答を聞くと、ただそれだけを返した。頷く。ブレイブの魔力が痛いほど強く感じられた。だけど、それでも死ぬと言う思いを持つ事は無かった。それでも戦いを覚悟する。

「ふ、まあ良いさ。今日は此処までで充分だ」

「……………え？」

不意にブレイブの気配が弱くなる。先ほどまでの臨戦態勢が嘘だったみたいにな、静かになった。その落差に、思わず長釣丸を取り落としそうになる。

「少なくともお前は我らと直接敵対するほど敵意を持った相手ではない事が解った。ならば今はそれで十分だ。ラストেশヨンの候補生を討てなかったのは残念だが、態々強敵を増やす必要もあるまい。此処は退こう」

そう言い、ブレイブは僕に背を向け去って行った。

「見逃された、のか」

深い溜息と共に零した。戦いになると思った時、凄まじい程の圧力を感じた。もし戦っていたならば、どうなっていたか解らない。それだけ凄い相手だった。

「つと、ユニ君の治療をしないとイケない」

ユニ君には咄嗟に癒しの魔法を施していたが、ブレイブを警戒していたこともあり、あまり魔力が集中できず、効果もいつも以上に低いものだった。それ故もう一度施しておこうと思った。左手に持つ長釣丸を抜き放ち右手に持ったまま、ユニ君の傍らに立つ。そのまま長釣丸に左手をそつと添え、魔力を集中し言葉を紡ぐ。そして魔法を使おうとしたところで、何か走ってくる足音が聞こえた。ガナツシユさんが防衛隊の増援を連れて来てくれたのかな？そんな事を思っ少し視線を移した。だが、其処に居たのは予想だにしない人物だった。

「ッ、ユニ!？」

「え……………、女神?」

それは、以前助けだしたユニ君のお姉さんだった。ユニ君と同じかそれ以上に艶やかな黒髪を左右に結び、理知的な印象を持つ緋色の瞳

には、倒れ伏すユニ君を捉えたためか、僅かに驚きの色が浮かんだ。姉妹だけあつて、ユニ君によく似ていた。正直に言くと、一瞬凄く綺麗だと思つたけど、そんな事を考える暇が無い事に即座に気が付いた。力なく倒れ伏すユニ君。全身に切り傷を負っており、僕はその傍らに立ち、魔法を唱えようと長釣丸に手を添えた状態であつた。客観的に見てそれは――

「貴方、私の妹に何しようとしているのよ!!」

「っ!? ちょっと待っ」

「問答無用! 私の妹に手を出した事、後悔させてあげるわ!!」

――止めを刺そうとしている様にしか見えない。

妹思いだからか、一瞬で頭に血が上つたんだろう。怒鳴るようにさう叫ぶと、剣を抜き放ち、僕に向かい躍り掛かってくる。咄嗟に体捌きで剣閃を往なすが無理やりかわした為、態勢が大きく崩れてしまった。

「隙ありよ、一気に畳みかける。アクセス!」

ユニ君のお姉さんであるノワールさんの体が光に包まれる。そして、ギョウカイ墓場で助け出した時に見た女神の姿になると、僕の間合いの内に一気に踏み込み、ユニ君やギアちゃんと同じく女神特有の武器であろう大きな剣を振り抜いたのだった。



## 17話 黒の女神

「っ!」

黒の女神によって放たれた斬撃。女神救出に沸くラスティシヨンのシエアによって作られた女神の持つ剣は、その刀身から尋常では無い力を巻き起こしながら僕を切り伏せようとその刃を煌めかせる。先程虚を突かれたため、態勢が大きく崩れてしまっていた。何とか回避をしようと両足に力を込め飛び退るけど、避けきれずに左腕を切り裂かれる。

「ぐ……」

歯を食いしばり、痛みを堪えながら後退する。左腕を深く斬られてしまっていた。切られた瞬間に鋭い熱が奔ったが、今はじゆくじゆくとした深い痛みが断続的に続いている。しかしそれよりも問題なのは、左腕が上がらない事だ。何とか態勢を立て直しはしたけれど、切裂かれた左腕が殆ど動かさなくなっていた。筋でも切ったのだろうか。だから腕が下がり、まったくと言って良い程動かす事が出来ない。どう考えてもまずい状態だと思う。右手に魔力を収束し、言葉を紡ぐ。

「月光——」

「反撃なんかさせてあげないんだから!」

癒しの魔法を使おうとしたところで、此方の魔力を感知でもしたのだろうか、直ぐ様僕の間合いに入り込み、ノワールさんはその剣を振りかざす。瞬間、収束させた魔力を霧散させ、長釣丸を女神の剣にぶつけ合わせる。火花が散り、視界が明滅する。腕を切り裂かれた痛みを歯を食いしばって堪えていたけれど、長くは持ちそうになかった。だからだと流れ続ける血の暖かさを感じれば感じる程、背筋の奥から言い様の無い冷たさが近付いてくるような気がした。

「……くう」

流れる様な剣の舞を、右手だけで捌き続ける。長釣丸の記憶から読み取った使い手たちの経験に助けられ、何とか凌ぐ事はできているのだけれど、徐々に意気が上がってくる。右手を動かす度に、左腕が熱

い熱を放ち、警鐘を慣らす。まずい。そう思うのだけれども、痛みで上手く言葉を出す事が出来ず、右手を動かし防戦に徹する事しかできない。そんな状況に嫌な汗が流れ始めた。唇を小さく噛みしめ、途切れそうな意識を痛みで繋ぎ止める。

「このまま押し切らせてもらおうわ。フレイムエッジ！」

「……!?!」

黒の女神が放つ斬撃を何とか受け止め続けていたが、僕が攻撃に移れない事を一連の攻防から悟ったのか、ノワールさんは一瞬だけ力を込めるように間をあげ、一気に踏み込んでくる。完全に間を外されていた。僅かに作られた差に、本来長釣丸が受け止めるべき剣を素通りしてしまう。女神の持つ大剣が迫る。ああ、ユニ君のお姉さんは、あの子が自慢する様に凄い人なんだなつと、場違いな事を考えてしまう。そのまま、来る痛みにも歯を食いしばる。そして、

「っ、ああああああ!!」

炎を纏った黒の女神の一撃が、僕の胸を袈裟に引き裂いた。反射的に飛びのいたが、文字通り焼かれる痛みには叫び声をあげてしまう。それでも尚、倒れる事はできない。そんな執念にも似た思いで、もういちど距離を取る。着地に失敗し、崩れかけの床を転がるようにして何とか間合いを外した。すぐさま立ち上がるが、膝が笑ってしまっている。

「逃がさないわよ。レイシーズダンス！」

しかし、その程度で黒の女神から逃げる事は叶わない。僕が必死の思いで開けた間合いを、一呼吸もしないうちに詰めたノワールさんが、その綺麗な黒髪を靡かせながら肉薄する。剣が来る。そう思い長釣丸を予測地点に滑り込ませるが、思いもよらぬところからの攻撃が強襲する。

「かはっ！」

女神の力によって強化された身体能力による蹴り上げ。予想だにしていなかった場所からの強襲に、もろに蹴り上げられた僕に、さらなる蹴撃が襲い掛かり、流れるような連打を貰ってしまう。かろうじて最後に放たれた斬撃だけは受け止める事が出来ただけで、脳が強

く揺さぶられていた。受け身も取れずに地に落ちた僕は、それでも無理やり体を動かし、ノワールさんからなんとか距離を取ろうとする。

この人と戦うなんて選択肢、僕には最初から存在していなかった。ユニ君の大切な人であり、ケイさんや防衛隊の人たちをはじめとするラストেশヨンの人たちが信仰する程の人だった。そして僕はこの人を助けるためにこの世界に呼ばれた。だから、剣を向けるなんて事したくは無い。

「流石にユニを倒したただけはあるわね。すべての攻撃をぎりぎりのところで往なされてる。だけど、これで終わりよ」

「……っ、うあ。人の話を、少しは聞いて……」

「妹を殺そうとした人間の言う事なんか、聞く訳ないでしょ!!」

耐え難き痛みに耐え何とか絞り出した言葉も、ノワールさんの叫びに一蹴される。妹思いなのは良いのだけれど、ことこの場面においては、それは最悪な事だった。完全に激昂しているノワールさんには、僕の言葉は届く事は無かった。なら、どうすればいい？ 僕はどうすれば、この状況を斬り抜けられる。

「いい加減に、倒れなさい!」

剣が振り抜かれる。それを避けようと体を動かそうとするけど、僕の思いとは裏腹に、身体は満足に動いてくれなかった。だから間合いを離す事は諦め、視る事に意識を集中させる。来る。ノワールさんの呼吸を肌で感じ取り、小さな体捌きだけで振り抜かれる刃に対抗する。

「トリコロルオーダー!」

鋭い踏み込みからの三連撃。その呼吸を全身で感じ取り、ノワールさんの放つ斬撃の間を完全に読み切る。

——霞三段

それは、僕とは別の世界に呼び出された異界の魂の記憶。一度は世界を憎みながら、その世界で生きて行く事を肯定した剣士の記憶。長釣丸の本来の持ち主であり、不完全な異界の魂と呼ばれながら、完全な異界の魂として覚醒した人間が使う技であった。相手の剣閃を完全に読み切り、自分の間合いを保持したまま放つ後の先を取る動き。

長釣丸を通し、同じ異界の魂である僕を助けてくれるかのように、力を貸してくれたのが解った。

「う、そ……」

ノワールさんが呆然と呟く。完全に止めを刺すつもりで放たれた斬撃。その全てが空を切ったから。そして、彼女が晒した隙は、戦いに於いては致命的な間隙であると言えた。ソレに気付いたノワールさんは、ただ強く瞳を閉じる。僕の体がノワールさんを斬る為に動いていたから。襲い来る痛みに耐えるかのように、強く体を強張らせた。そんなノワールさんを見て、反射的に動いていた体を無理やり止める。僕はこの人を斬りたい訳では無いからだ。何とかノワールさんに到達する前に刃を止め、三度距離を取る。だらりと下がった左腕から、感覚がなくなり始めていた。言い知れぬ倦怠感が押し寄せるが、無視する。ここにきてようやく距離を取る事が出来た。今度こそ腕を治すために、魔力を集中させた。

「……………え？」

——月光聖の祈り

それで幾分か左腕の痛みが和らぐ。だけど、未だにノワールさんと交戦状態に入っている。満足のいく程の治療が出来た訳ではなかった。未だに腕は動かない。止血だけできたと言うのが一番近いと思う。

ノワールさんは僕の行動に一瞬呆けた様な声を出す。直ぐ様剣を構えなおした。少しだけ、その表情に困惑が宿っているのが解った。先ほどのタイミング、斬ろうと思えば斬れたのに、僕がそれをしなかったからだと思う。僕がユニ君を襲い、殺そうとしたとでも誤解している様なので、その様子も仕方が無いと思う。

「どう言うつもりよ？ 私なんて何時でも倒せるって言う余裕？」

少しばかりイラついた調子でノワールさんは吐き捨てる。

「僕は貴方と戦うつもりはないよ」

「なら、なんでユニをあんな目に合わせたのよ！ あの子に何の恨みがあつてあんな酷い怪我を負わせたの!？」

悲痛な叫び。妹を僕に斬られたのだと思込んでいるのだから仕

方が無いけど、此方からすればいい迷惑だった。僕にユニ君を斬る心算なんて、最初からないのだから。

「それは誤解だよ」

「何が誤解よ。この場に居るのはユニを除けばあなたと私だけ。しかもあなたは私の目の前でユニを殺そうとしたのよ!! そんな状況証拠も揃っているのに、何が誤解だっけ言うのよ!」

「それが誤解なんだよ。僕はラスティションの女神候補生を殺そうなんてしていないよ。あの子を斬ったのは、違う相手だ」

「じゃあ、誰がユニを殺そうとしたって言うのよ」

「犯罪組織マジエコンヌの幹部、ブレイブ・ザ・ハード」

ノワールさんに、ユニ君を討ち果たした相手を教える。そうすれば何とか剣を下ろして貰えると思ったから。

「ブレイブ・ザ・ハード……。確か、ケイが言っていた名前だ」

ブレイブの名を出したら、ノワールさんは少し考え込むように名前を反芻する。

「確かに犯罪組織の幹部ならユニを倒せるかもしれない……。じゃあ、そのブレイブっていうやつがユニを倒したって言うのなら、貴方は何でこんなところにいるのよ?」

「僕は、あの子を助けに来たんだよ」

ノワールさんの質問に答える。僕が此処に居る理由。ユニ君が戦っていると聞いたからだだった。

「なら、ユニを助けるために貴方はここに来たと?」

「そう言う事だよ」

頷く。それが事実だったから。

「確かに貴方の力があれば可能かもしれないけど……。それは本当なの?」

「どういう事かな?」

「貴方の力は、人の身には強すぎる。本当は貴方が犯罪組織の幹部、ブレイブ・ザ・ハードで、私が隙を見せるのを待っているんじゃないの?」

それでもノワールさんの疑いは晴れないようで、そんな事を言っ

た。確かに彼女から見たら、僕の力は異常と言えるだろう。唯の人間が、女神と戦えるほどの力を有している。その疑いも仕方が無い。

「それは違うよ」

「なら、その力はどうやって得たものなのよ？　女神と対等に戦える人間なんて、聞いた事ないわよ」

「それは……」

ノワールさんの言葉に口ごもる。理由を話す事をできない事は無い。むしろ、彼女は僕を呼び出した張本人の一人だった。話しても問題は無い相手だと言える。だけど、僕個人の感情から話したくは無かった。ノワールさんとは今戦ったぐらいしか接点が無いけど、凄く妹思いの優しい人なんだと言う事が解ったから。自分だって本来動ける身体じゃないのに、ユニ君を助けにここまで来た。そして、誤解ではあるのだけれど、ユニ君に牙を剥いた相手を倒し、妹を助けようとしている。確かに彼女は、妹思いの優しい姉だった。

そんな優しい女の子に、異界の魂について話したらどうなるだろうか。想像するのに難しい事は無かった。イストワールさんのように泣いてくれるかもしれない。そこまででは無かったとしても、自分を責める事は簡単に解ってしまった。そしてそれは、僕の望む事では無かった。

「言えないよ。それは、言えないんだ」

結局、ノワールさんに話す事は出来なかった。話さないとこの状況が好転しないと解ってはいたけれど、それでも話す事が出来なかった。

「そう、言えないって言う事はやましい事があるのね。なら、やっぱり貴方は私の敵よ。今此処で、倒すわ」

そう宣言し、ノワールさんは僕に向かい剣を構えた。考える。今この状況を打開するには、どんな手を打てばいいのか。一つだけ、思い浮かぶことがあった。

「それでも僕は貴方の敵じゃない。絶対に違うよ」

それだけノワールさんに告げた。言葉で言ってもきつと伝わらない。だから、これが最後に言う言葉だった。強く長釣丸を握り構え

る。正直に言えば怖かった。相変わらず死の恐怖と言うものは感じないのだけれども、斬られる痛みは先ほどから嫌と言うほど味わっていた。その痛みをまた受けると思うと、少しだけ怖い。

「今度こそ、倒すー！」

ノワールさんが剣に魔力を纏い、一気にこちらに向かい飛来する。女神の剣が炎を纏っていた。紅の輝きを纏う黒き剣が、綺麗な弧を描き迫ってくる。ノワールさんの顔をただ見据え右手を動かす。

「ガンブレイズ！」

それは炎を纏う黒き剣での切り上げだった。霞三段を放った要領で、ただその斬撃の描く曲線を捉えている。そして、僕に当たるその刹那、右手に持つ長釣丸を

「な——!?!」

地に突き刺していた。そのまま無防備な僕へと刃が吸い込まれ、紅が弾けた。

「か、はっ」

あまりの衝撃に踏み止まる事も出来ず、その場から凄まじい勢いで吹き飛ばされる。斬られる瞬間に見たノワールさんの驚きに染まった顔をもう少し見ていたかったけど、そんな事が出来る訳も無い。炎を纏った女神の剣で斬られていた。その衝撃に内臓がやられたのか、喉から熱いものが咽び上がり一気に吐き出した。鮮血が宙を舞っているのを、ぼんやりと眺める事が出来た。そしてそのまま地面にぶつかり、勢いに身を任せる。

「——!?!」

ノワールさんが何かを叫んでいるのが、酷く遠くで聞こえた。貴方の敵ではないと宣言し、無抵抗を貫く。眼前の女の子と戦えない以上、僕が選んだのはそう言う方法だった。ちゃんと成功すると良いな。そう最後に思い、途切れそうになっていた意識を手放すのだった。

## 18話 痛みへの代償に

「……これで一つ段階が進んだか」

アヴニールの研究所のはるか上空、プロセツサユニットを展開させていた紅の女神、マジック・ザ・ハードは、黒の女神に異界の魂が切り伏せられた事を確認して呟いた。

「万が一に備えて様子を見に来たが……、いらぬ心配だったようだな」  
そう零す視線の先では、ノワールが呆然と四条優一を見詰めている。

女神の救出に沸くとは言え、未だラステイションは予断を許さない状態であり、女神であるノワールも弱り切っていた。その為、他を顧みる余裕が無かった。そんな状態で妹が倒される。黒の女神が冷静さを欠くには充分だった。そして、じりじりと追い詰められたノワールは、怒りに身を任せ四条優一を斬り伏せてしまったと言う訳であった。

もう少し黒の女神が冷静であったのなら結果は変わっていたかも知れないが、それを言うのは酷と言うものであった。女神であるノワールは自分や妹だけでは無く、ラステイションの全ての人間を背負っている。脅威を感じれば何とか排除をしようとするのは仕方が無い事だった。ましてや、今の彼女には余力が無く、一つの失策で取り返しのつかない状況に転落するのが解っていたから、自分の守るべき物を確実に守れる手を打ったと言う訳であった。それが、敵の可能性が高いが、敵では無いかも知れない人間の排除であったと言う訳である。誰だって、獅子身中の虫は持ちたくないものだ。後の無いノワールにとって、その行動を選ぶのは当然の結果と言えた。

「思惑通り、女神が異界の魂を切り伏せたか。ならばこれで、ブレイブに情報を与え、思うように動かさせた甲斐があると云うものだ」

マジックは、ブレイブに四条優一の事を話せば必ずや仲間を引き入れようとする事が解っていた。犯罪組織に籍を置きながら、子供の為に剣を手にするような者である。この世界に無理やり呼び出され、理不尽を押し付けられた四条優一を救ってやりたいと思うのも当然の



結論と言える。結果、ブレイブが自分で考え持ちかけた話であるからこそ、四条優一の心に犯罪組織と言うモノを刷り込む事に成功していた。まだ大きなものでは無いだろう。だが、確実にブレイブの言葉が心に刻まれている事はマジックには解った。そんな直後に、女神の攻撃である。完全に女神の誤解であるのだが、女神が自分で考え起こした行動であった。それは、先ほどのブレイブの行動と同じく、異界の魂の心に大きな楔を打つ事になっていた。

「異界の魂。あの男が敵になるならば、女神などよりも遥かに厄介だ」「そーだな、単純に考えても、ユーイチは女神四人分のシエアを用いて呼び出されているもんなあ。つまり、アイツは、女神四人分のシエアの力を秘めながら、それとは別に異界の魂の世界を制する力をも有しているってこった。そんなのが敵として立ち塞がるって言うなら、そりゃ厄介まりないってもんだ」

マジックの眩きに、陽気な声が相槌を打つ。黒き本に腰かける黒き妖精。異界の魂に接触した事もある、クロワールだった。突如割り込んできた声にもマジックは少しの感情を動かす事も無く、ただ一瞥だけ加える。

「だが、その力を犯罪神様の為に使えると言うのならそうなるように動いただけだ。女神が自分たちを守るために呼んだ存在に討たれる。それもまた一興と言うものだ」

「おーおー、やる事がえげつねーな」  
けらけらと笑いながらクロワールがマジックを見詰めた。

「ふん。女神達があつた男にした仕打ちに比べれば、可愛いものだろう」  
そんなクロワールをマジックは詰まらなそうに見つめると、そう吐き捨てる。

「まったくだぜ。例え知らなかったとしても、ありやひでーよな！拒否権も無く呼び出した挙句、全部終わったら死ねって言うてるのと同じだもんない。……いや、ちつと違うか。アイツはもうこの世界では死なねーわけだし。ともかく、流星の俺も悪い事したって反省しちまったよ。あつはつは」

「……貴様が言えた義理でない事だけは確かだな。異界の魂を引き入

れるのならば、お前も消しておくべきか？」

感情の窺えない瞳でクロワールを見詰めたまま、そんな事を呟く。数多の血を吸った紅の大鎌が、鈍い光を放つ。

「おいおい、そりゃねーよ！　こうしてお前らにアイツの情報をリークしてやってんだから、勘弁してくれ」

「役に立つうちは生かしておいてやる」

「おーこわ。なら精々、死なねーよーに気を付けるわ」

「ふん」

そんな言葉を最後に、マジックは紅を纏い、クロワールは影に溶け込むように消えていく。そしてその場に残ったのは、

「お、姉ちゃん？　アタシ、なんで……？」

「ユニ!?　良かった……」

心底安心したように妹を抱き起す黒の女神と女神候補生。そして、  
「あ、そっか、アタシ敵に負けて……。そうだ、お姉ちゃん、ユウは？」

ユウは何処に居るの？」

「……ユウ？」

「うん。アタシのパートナーで、お姉ちゃんを助けだす時もアタシを支えてくれて、アタシたちを守ってくれた人。今回も助けに来てくれ、て……。ユウ!？」

「ちよ、ユニ!？」

抵抗らしい抵抗をせず、守るべき者に斬り伏せられた異界の魂だった。

「なんで、どうして？　ねえ、なんで!？」

「嘘、それじゃ私は……」

意識を失った四条優一からゆっくりと広がる紅。ユニはそんな優一に縋り付き、声を荒げる。目を覚ましたら自分を助けに来てくれたパートナーが倒れ伏し、自分は姉が守ってくれていた。ユニには現状が理解できなかった。なんで、どうして。そんな感情ばかりが頭に浮かんでくる。そしてノワールは、そんな妹の言葉を聞き、ただ呆然と自分の犯してしまった惨状を見詰めていた。

「此処は……。そっか、何とかなつたんだ……」

重たい頭を軽く振るい、薄らと目を開く。体全体を倦怠感が支配しており、胸と左腕を中心に、刺すような痛みと激しい熱を感じた。思わず顔を顰める。呻き声を上げそうになるのを何とか堪えた。痛みと怠さが続いているのを漫然と感じる。そうして思い出す。僕はユニ君のお姉さんに斬られたんだ。

左腕を動かそうとする。動かせるという気がしなく、相変わらずだらんと弛緩している。斬られたらいけないところを斬られたのかな？ 痛みだけが増した腕を見て、そんな考えが思い浮かぶ。

——月光聖の祈り

ゆっくりと自身の魔力を集中し、言葉を開放する。じんわりとした温かさが左腕を包み込み、ゆっくりと感覚が戻り始めてくる。そのまま暫く心地の良い暖かさに身を委ねる。そうして魔法の効果が切れたところで、少し腕を動かして見る。ピリピリとした痺れのような感覚が残っているが、動かす事が出来た。何度も手を動かしてみる。問題なく動いた。

「うん。大丈夫みたいだ」

一先ず腕から視線をはずすと、そんな安堵の溜息が零れる。治ると言うのはやる前から解っていたけど、実際に動かせるのを見ると、本当に治るんだと言う事に感心してしまった。

周りを見る。薄暗い部屋の中に寝かさされていた。窓から零れる光は少なく、月明かりの光から、今が夜だと言う事が理解できた。

「しかし、酷い目に遭ったなあ」

つい先ほど自分の身に起きた出来事を思い返す。思い出すのは、黒き女神の持つ大きな剣だった。ユニ君と同じ銀髪を靡かせ、黒を基調としたプロセッサユニットを展開し肉薄する女神。振り抜かれる炎を纏った剣。じくり、と背筋を嫌な汗が流れる。良く見ると手が震えている。死の恐怖と言うよりは、斬られる痛みへの恐怖が鮮烈に蘇る。目を閉じ、深く息を吐く。昂る神経を鎮める為、何度も繰り返す。

そうしないと怖かったから。

「ん……、あ……」

幾分か気持ちが悪く落ち着いたところで、そんな声と、もぞもぞと動く気配を感じた。えっと思ひ、ベッドの脇を覗き見る。部屋の灯は消えているけど、非常灯などの淡い光がある為、何となく輪郭がぼんやりと浮かび上がった。

「貴方は……」

「んあ……、あ……。お、起きたのね!? 良かった……」

僕を斬り倒した、黒の女神であった。

「……」

「……」

照明が灯され、部屋の中に光が満ちる。視線だけで明るくなった部屋を一瞥する。長釣丸は別の部屋に置かれているのか、はたまた回収されていないのか、僕の寝かされていた部屋には影も形も見えない。無いものは仕方が無いため、直ぐに探すのを止め、ノワールさんを見据える。

正直に言おう。情けない事に、僕は目の前に座る女の子の事が怖かった。不意を突かれたとはいえ、一方的に攻撃された。彼女の方にこういう事情があったのかはなんとなく想像がつくけど、それでも僕は怖かった。切裂かれた腕は直したけど、最後の切り上げで受けた胴体の傷は、鋭い熱を発しながら存在を主張している。理性では、妹を守ろうとした優しい女性だと解っているのだけれど、身体に受けた傷の所為か、ノワールさんを落ち着いて見る事が出来なかった。

「……何の用ですか?」

二人してだんまりとしていたが、いい加減に沈黙に耐えきれなくなり、ノワールさんに尋ねる。一対一で顔を突き合わせているこの状況が、正直苦痛だった。せめてユニ君かケイさんでもいてくれればまだ違いかもしれないけど、今は僕たちしかいなかった。心が落ち着かない。

「これは、私が斬った傷……」

僕の左腕を、ノワールさんはそつと両手で包み込むように触れた。

「!?」

「ご、ごめんなさい！ 痛かったよね……」

瞬間、ばちりと全身にあの感覚が駆け巡る。ユニ君に触れた時に感じた感覚。思わず、びくりと震えてしまう。そんな僕の様子を、痛みが走ったと勘違いしたのか、ノワールさんは直ぐに手を離れた。そのまま血に赤く濡れている包帯を、泣きそうな瞳で見つめている。

「もう痛くは無いですよ。今さつき、自分で直しましたから」

一目で後悔していると言うのが解った。目に大粒の涙を溜め、じつと傷口を見詰められているのだから、嫌でも解るだろう。それでも僕は、彼女に優しい言葉をかけてあげる事は出来なかった。そんな余裕が無かったから。漫然と感じる忌避感を表に出さないようにするの  
で精一杯だったからだ。そのため、事実だけを告げる。

「嘘……、直したってどうやって?」

「魔法。今ではこの通り動かせるよ」

驚くノワールさんに左腕を動かして見せる。先程と同じように、何度か手を握ったり振ってみたりする。

「良かった。本当に良かった……。もう動かないかもしれないって、ウチのお医者さんが言ってる……」

すると、僕の手を先程と同じようにゆっくり取ると、ノワールさんは絞り出すように言った。瞳に溜まっていた大粒の雫が一条零れ落ち、彼女の綺麗な肌を伝う。本気で心配してくれていた事は解った。

「用はそれだけですか? なら——」

その気持ちは嬉しく思うけど、僕はこの人と一緒に居たくは無かった。別にノワールさんが嫌いなわけでは無い。嫌いと言うよりは、怖いのだ。ユニ君から聞いていた話や、今少し話した限りでも悪い人では無いと解るけど、理性とは別の理由から一緒に居たくなかった。少なくとも、気持ちが落ち着かない今は一緒に居たくない。今の僕なら、この人を傷つけられる自信があったから。だから一緒に居たくは無  
い。ユニ君の姉に酷い事をしてしまうのは、僕としても避けたい。

「ううん。まだ用はあるわ。貴方の看病をさせて欲しいの」  
「はい？」

だから今は帰ってくれと言おうとしたところで、ノワールさんが思いもよらぬ事を言った。いや、ある意味でその言葉は順当な言葉と言えるのだけれど、そう思いたくなかった。

「貴方が怪我をしたのは全部私の所為よ。もつと私がちやんと考えて行動すれば、恩人であるはずの貴方を、あろう事か攻撃する事なんてなかったはずなのに……。この怪我は、全部私が貴方に刻んでしまった罪なの。だから、せめてそれが綺麗に消えるまで、貴方の傍に居たいの。ううん。女神として、居なくちゃいけないの」

ノワールさんが静かに、だけど決意のこもった瞳で僕を見据えながら言った。

「貴女の罪、ですか」

「そうよ。私たちを、ラストイションを助けてくれた貴方に、私はあろう事か恩を仇で返してしまったわ。その罪滅ぼしをさせて欲しいの……」

「罪滅ぼし、ね」

軽く目を閉じ、彼女の言葉を反芻する。

「お願い。貴方の看病をさせて下さい」

ノワールさんの言葉に嘘があるとは思えなかった。本心から後悔しているからこそ、僕に頼んでいるのだろう。それは痛いほど良く解る。彼女の瞳には涙が浮かんでいたから。今は目を閉じているから見えないけど、彼女の瞳から涙が零れ落ちるのを確かに見ていた。その言葉に嘘は無い。それは解った。だからこそ、言葉を抑えられなかった。

「それが、本当に罪滅ぼしになるとでも思っているんですか？」  
「……え？」

斬られた事については、ある意味仕方ないと思う事は出来た。戦っている時の様子から、本気で僕がユニ君を殺そうとしていると思っていたのが予想できたから。妹を守る為ならば、どんな相手でも許さない。その思い自体は、僕の感情を抜きに考えたのならば、尊いものだ

と思う。あの時ノワールさんの中では、僕は確かに妹の命を狙う敵であった。そう考えれば、ノワールさんに斬られたことについては、まだ納得する事が出来た。

「斬られた痛みが、その程度の事で忘れられるとでも思っているんですか？」

「そんな事は……」

「それにね、ノワールさん。僕はさっき自分で腕を治したって言ったよね。その気になれば、他の傷も治せるよ」

「そう、なの？」

「だけど、納得出来ただけでしかないんだ。斬られた痛みを無かった事には出来ない。そして、彼女の提案は、僕にとっては意味が無い事だった。今のノワールさんの提案を受け入れれば、彼女を何の咎めも無しに許す事になってしまう。今の僕には、そこまで出来る程、心に余裕は無かった。

「うん。だから、貴女の提案には意味が無いんだよ。僕にとってソレは、何の意味も持たないよ」

「……」

ノワールさんが黙り込んでしまった。自分の言った言葉を思い返し、少しだけ自己嫌悪に陥る。

少なくとも彼女は僕に謝りたくてこんな事を言ったのだろう。それで、怪我をした僕の事を考えて提案した事なのだと思う。そんな女の子の気持ちを、僕は正面から否定した。幾ら彼女に良い感情を持ってないとは言え、自分の狭量さが情けない。返す言葉が見つからない様子で僕を見つめるだけの女の子を見ると、心底そう思ってしまう。だけど、言ってしまった言葉を取り消す事などできはしなかった。

「それでも私は——」

「ユウ!？」

そんな僕にノワールさんが言葉を返そうとしたところで、バンっと勢いよく扉が開かれる。そのまま部屋に勢いよく入ってきたのは、見知った顔だった。ノワールさんと同じく黒の髪を左右に結び、黒のシヨートドレスを身に纏った女の子。僕が支えると約束した女の子

であった。

「ユニ君？」

予想のしていなかった展開に、まじまじとユニ君の姿を見詰める。腕や足に包帯が巻かれている姿が痛々しいが、それ以上に彼女の瞳に光るものに目が行ってしまふ。涙だった。自分はまたこの子を泣かせてしまったようだ。そんな事実にも、少しだけ胸が痛む。

「そうだよ。良かった、ちゃんと目を覚ましてくれて、本当に良かった……」

そのまま勢いのまま僕の直ぐ傍らまでやってくる。そのまま僕の手を両手で包み込むようにとると、泣きそうに震えた声で良かったと零した。その動きは、姉妹の所為かノワールさんがしたものと同じであった。

「ごめんね。また、心配かけちゃったみたいだね」

そんなユニ君にかける気の利いた言葉が見つからない為、ただ謝る。それしか僕には出来なかったから。

「本当よ……。なんでアンタは、無茶ばかりするのよ。アンタはアタシを支えてくれるって言ったじゃない!? あの言葉は嘘だったの？」

「嘘じゃないよ。だからあの時も、今回も来たんだよ」

「なら、ちゃんと支えてよ……」

「うん、ごめんね」

怒ったかと思えば、直ぐに涙を浮かべたユニ君に困ってしまう。震える姿を見ると、僕の方まで悲しくなってくるからだ。結局気の利いた言葉も無く、彼女の言葉に謝りながら頭を撫でることぐらいしかできなかつた。

「……ユニ、泣いて」

そんなユニ君を見て、ノワールさんが驚いている。僕だつてここまですり泣かれるとは思っていなかつた為、出会つたばかりのノワールさんの驚きも仕方が無い。

「ねえ、ユウ。アンタは誰にやられたの。なんで、あんな大けがをして



いたの?」

「……ッ」

ユニ君が僕に縋り付くと、そんな事を聞いてきた。同時にノワールさんが息を呑む。どういう事が解らなかった。僕を斬ったのは目の前に居るノワールさんである。それをユニ君が知らなかった。ノワールさんを見詰める。気まずそうに目を反らした。

「目が覚めたら、敵はいなくなってお姉ちゃんが居て、それでユウが大怪我してて。訳解んなくなつて、ケイに連絡したらまずは治療が最優先だつて言うから、お姉ちゃんに後を任せてアンタを連れて帰つてきたけど、したらアタシも怪我しているからつてさつきまで治療を受けてて……」

「そっか」

ユニ君の様子から、その時に相当焦つていたのが良く解つた。ノワールさんに話を聞く余裕も無く帰つて来たようだった。まあ、怪我人がいたのだから仕方が無い。

もう一度ノワールさんを見る。表情が固い。妹に本当の事を言うタイミングが無かつたのだろう。表情から読み取れた。

「それで、どうしてあんな怪我をしたのよ?」

そしてユニ君がもう一度尋ねてきた。それで、ノワールさんの表情が更に苦しそうに歪んだ。自分の所為で妹に心労を与えてしまった事を後悔しているのだと思う。少しだけ、その姿が不憫に思えてしまった。どうも僕はこの人を嫌いになり切れないようだ。自分を斬つた人だけど、ユニ君のお姉さんでもあつた。そんな人を悲しませるのは、本意では無い。何より、今本当の事を言ったら、ユニ君が一番困つてしまうだろうから。

「君を助けに来た後にそのまま戦つてね。それで何とか追い返せただと、怪我しちやっただよ」

結局、助け船を出してしまった。とは言え、言葉自体は事実なのだけれど。

あの時僕は、ユニ君を助けに来てブレイブと話した後、ノワールさんと戦つた。ただ誰と戦つたかを言っていないだけ。

「やっぱりそうなんだ。あの時の敵。ブレイブ・ザ・ハード。アンタもアイツに……」

ユニ君が意識を失う直前の状況から、そんな結論に至った。ノワールさんが驚いたように僕を見る。それをただ見返す。別に本当の事を言っても良いのだけれど、そうしたらユニ君とノワールさんの喧嘩になってしまふ気がした。仲の良い姉妹が争うのが見たかったわけでは無い。だから少しだけ、ずるい言い方をしたと言う訳だった。話のダシにしたブレイブには少しだけ悪いと思うけど、どちらにしる敵なのだし、あまり気にしないようにする。ただ、ブレイブの事も本気で嫌う事はできなかつた。

「アンタは怪我をしていたけど、アタシを守ってくれた。それに比べてアタシは何にもできなかつた。やっぱり、アタシは強くならなきゃいけない……」

「ユニ君？」

「ごめん、ユウ。少しだけ考えをまとめたいの。部屋に戻るわ」

「そっか」

何やらユニ君が思いつめたように零す。だけど、この間のような追い詰められたと言う雰囲気では無かつた。そのため彼女の思うようにやらせてあげるのが良い様に思え、部屋に戻ると言うユニ君を見送る事にする。

「あ、ユウ」

「ん？」

「あの時も今日も、助けてくれてありがとう。凄く、嬉しかった」

扉に手を掛け、部屋を後にしようとしたユニ君が振り向くと、少しだけはにかんでいった。

「どういたしまして」

そんな僕の言葉を聞かずに、ユニ君は部屋を退出していった。意地っ張りなあの子の事だ、素直にお礼を言ったのが大方恥ずかしくなったのだろう。だけど、ちゃんと素直にお礼が言えたようだ。あの子もまた成長しているんだろう。そう思うと自然と笑みが浮かんだ。「どうして、庇ってくれたの？」

「僕はあの子が好きだからね」

ユニ君が去った部屋で、ノワールさんがぽつりと訪ねてきた。素直に答える。ユニ君と会えたことで、先ほどまでよりも心に余裕が出来ていた。棘を出す事なく、ノワールさんの言葉に応えられた。

「す、好き!?!」

「うん。本当のお姉さんの貴女が居るのにこんな事を言うのもおかしいけど、あの子は手のかかる妹みたいに思っているからね。そんな子を悲しませる事はしたくなかっただけだよ」

ユニ君に、僕がノワールさんに斬られたと言えば、あの子が悲しむだろうことは予想できた。姉の事が大好きな女の子だけど、僕の事もそれなりに大切にしてくれている様なので、誤解が原因だとは言え、彼女によって怪我をしたと言う事が知られば、あの子が苦しむのが容易に解った。ノワールさんの為と言うよりは、ユニ君の為に庇ったと言う訳だった。

「ああ、そう言う事ね。びっくりした……。兎も角、そうだとしても助かったわ。私が貴方を斬ったなんて、貴方が大怪我していた時に見たユニの様子から言えなかったから……」

「なら、貸しておくよ。大きな貸と、小さな貸。僕を斬ったことと、さっき助け船を出した事。それで許してあげる」

「……ッ、あ、ありがとう」

先ほどまで渦巻いていたいやな思いが、ユニ君と会ったおかげで無くなったせいかすんなりとそう言葉にする事が出来た。女神に貸しを作った。そう考えると凄い事なんだと思う。

僕の言葉にノワールさんはほっとしたのか、少しだけ表情の硬さが和らぐ。

「でも、貸しって何をすれば?」

「大きい方は何か思いついたら返して貰うよ」

「解ったわ。じゃあ、小さい方は?」

「そうだね……。なら、貴女の事を呼び捨てで呼んでも良いかな?」

貴女を女神と敬う事をせず、対等に話したい」

大きい方の貸で何をしてもらうかは直ぐに思いつかないけど、小さ

い方はふと思いついた。正直言うと些細な事であつた。僕はこの人に敬意を持ってそうにないから、持たない事にする。それを許してほしいと言う事だつた。

「……それだけで良いの？」

「構わないよ。僕は貴女を女神だからと言って、特別扱いしたくないだけだからね。と言うか、できない」

「解つたわ。なら、私もあの子にならつて、ユウって呼ばしてもらおうよ」

「好きにすると良いよ」

互いに呼び捨てにする事で決着が着く。目の前に居るノワールに出会い、色々と酷い目にも合つたけど、何とか一段落が付いたのだつた。

## 19話 新たな道

「ユウ、聞いて欲しい事があるの」

「何かな、ユニ君」

辺りを覆っていた暗闇も消え去り、陽の光が昇り教会の中が活気に満ち溢れはじめたように感じたところで、ユニ君が医務室まで訪ねて来た。考えたい事があるって言い、一度別れていた。きつと、彼女の中で何かしらの結論が出たんだと思う。

「最後まで、ちゃんと聞いてよね」

「ん、解ったよ」

だから聞いてみようと思ひ促したのだけど、ユニ君は念を押すように僕に付け加える。真剣な瞳で僕を見詰めていた。その様子に、一度背筋を伸ばし、ベッドに座り直した。

「あのね、ユウはアタシと組んでくれてたけど……解散してほしいの」  
「おや、何でまた」

ユニ君の言葉は予想外だったけど、それほど驚く事は無かった。なんとなく、別れ際に見せた様子から、何かを悩んでいるのは解っていたから。前回言われた時は、ユニ君が自暴自棄になっていたように感じたけど、今はそんな様子も見えない。この子が良く考えて出した結論なら、僕はその考えを真っ向から否定しようとは思わなかった。

「ユウはアタシを支えてくれるって言ったよね」

「ああ、言ったね。それがどうかしたのかい？」

「うん。ユウは言葉通り支えてくれた。アタシを助けてくれたし、お姉ちゃんだって助けてくれた。その後犯罪組織の奴に負けそうになっていた時も来てくれた。出会ってそこまで長くないのに、何回もアタシを助けてくれてるよね」

ユニ君は思ひ出すように言った。血晶を探していた時、ギョウカイ墓場に行った時、アヴニールが襲撃された時などの事を言っているのだろう。

「そんな事は無いよ。僕だって、ユニ君には助けて貰ったよ」

確かに僕はユニ君を助けていた。けどそれは、当然のことだった。

仲間が、友達が困っているのなら助けてあげたいと思うのは、それ程特別な事では無いと思う。

「アンタがそう言うのなら、そうなのかもしれない。けど、アタシが納得できないの。ユウにしてもらった事に比べると、アタシはユウに何にもしてあげられていない。今のアタシは、支えて貰ってるだけなの。それが、アタシは嫌なの！ 支えて貰うだけのアタシじゃなくて、支えてあげられるアタシになりたいの！」

「だけど、ユニ君はそう思えないようだった。だから、対等じゃないと思ってるんだらう。」

僕がこの世界に来て、最初に出会った友好的な相手はユニ君だった。それから、この世界で生きて行く為の術を幾つか貰っていた。ギルドでの仕事だったり、防衛隊の人たちとの伝手が作れたのだって、ユニ君のおかげであった。今の僕が居るのは、言ってしまうえばユニ君のおかげだった。だからこそ、感謝している。

「だけど、僕がそんな風に思っている事をユニ君は知らない。異界の魂と言う、特殊な事情の為、詳しく話す事も出来なかった。だから、ユニ君は一方的に与えられていると思ってるのだらう。」

「その為には、今はユウと一緒に居たらだめなの。アンタと一緒にいたら甘えちゃうから。ユウはきつとあたしを支えてくれるから。だけどそれじゃあ、アタシがユウを何時まで経っても支えてあげられないの」

「そんな事は無い、とは言えなかった。僕はこの子が困っていたらきつと助けてしまう。仲間であり、友達だから。もしかしたらそれで、ユニ君の成長の妨げになるのかもしれない。一生懸命に紡ぐ言葉に耳を傾けていると、そう思えてきた。」

「だから僕と離れたい、と？」

「うん。アタシは強くならなきゃいけないの。その為には、アタシを支えてくれるアンタと一緒にダメなの。ギョウカイ墓場に行った時に何もできなかった。アヴニールの研究所が襲撃された時も。両方ともユウに助けて貰っただけ。ユウと一緒にじゃ、これからもそんな事ばかりになるかもしれない。そんなのは嫌。護ってもらうだけで、

何もできないのは嫌なの！ だから、アタシは強くなりたい」

強くなりたい。そんな意志を秘めた瞳を見ると、ユニ君の言葉は一時の感情だけではない事がひしひしと伝わってくる。僕に、この子の考えを改めさせることができるとは思わなかった。そして、改めさせたいとも。

「そっか、なら仕方が無いね。振られちゃったか」

だから、ユニ君が自分の考えを貫けるように背中を押す。後腐れの無い様に進める様に少しおどけて言った。

「べ、別に振ってないわよ!? 何言ってるのよ！ 大体まだ付き合ってますらないのに本気で何言ってるのよ……」

意地っ張り特有の反応なのか、ユニ君は僕の言葉にむきになって言い返す。先ほどまでの真面目な雰囲気から一変、ユニ君は顔を赤くさせながらむくれる。そんな可愛らしい反応をする妹分の様子に、頬が緩んでしまうのも仕方が無い。

「あはは、冗談だよ」

「変な冗談を言わないでよ」

むーっと半眼で睨んでくる。その様子に少しからい過ぎたかたちよつと反省。そして、この子と一緒に居るのもこれで終わりだと思うと、少しだけ寂しく思ってしまった。とはいえ、それも仕方が無い事なのだけど。

「話をついた様だね」

ユニ君と別れる事が決まり、それまで束の間の談笑を楽しんでいたところで、ケイさんがやってきた。

「昨日から千客万来です」

「本当なら僕も昨日の内に挨拶を済ませておきたかったのだけれども、あの時は、ユニもノワールも使い物になりそうになくてね。結局今の今まで訪う事が出来無かったんだよ。すまなかったね」

「ちよ、ケイ！ なに適当な事言ってるのよ!!」

「くく、別に気にしていませんよ。怪我も治せましたからね」

そう言い、腕を振るう。既に痺れも取れ、以前と同じように動かす事が出来ていた。起きた時に受け取った長釣丸を握ってみる。問題なく持つ事が出来た。

「そう言う訳には行かないさ。我が国の恩人に大怪我をさせてしまったのだから」

「……それについてはもう良いですよ。ノワールとも話はしましたので」

夜にあつた事を思い出す。僕が怪我を負った原因であるノワールとは、既に決着が着いていた。彼女がどうしてそう言う行動に出たのかは理解できていたし、思うところあるのだけれど、ユニ君のおかげで何とか許す事はできていた。あの子に大きな貸を作った。そう言う事で話は完結していた。

「へえ……、ノワールの事を呼び捨てにしているんだね。ユニですら敬称を付けて呼んでいるのに、どういう心境の変化かな？」

そんな僕の言葉から、目聡くノワールを呼び捨てにしている事について尋ねてくる。

「それは……、アタシも気になるわね。なんでユウがお姉ちゃんの事を呼び捨てにしているのよ？」

ケイさんに同調する様にユニ君がこちらをじとーつとした目で見据えながら聞いてくる。腰に手を当て、若干前屈みになりながら僕を見る瞳は完全に据わっていた。不機嫌ですって言わんばかりの様子に、思わず苦笑が浮かんでしまった。呼び方一つで思わないでもないけれど、ギアちゃんの時もそうだったかと思ひ出す。

「僕はノワールに大きな貸を作っているからね。だから、あの子とは対等に話をさせて貰う事にしたんだよ」

「成程。たしかに、女神救出は誰にでもできる事じゃない。アレはノワールにとつて、大きな貸だと言えるね」

「あの事に関しては、アタシも感謝しているけど……。むー、ちよつとずるい」

すんなり納得するケイさんと、少しばかり唸るユニ君。

「それはそうとユニ」



「なによ？」

「新しいお仲間が呼んでいるよ」

ユニ君が若干不満そうな顔で此方を見ていた時に、ケイさんがそんな事を言いだす。新しい仲間。そんな言葉を聞くと、少しだけ寂しさが湧き上がる。ユニ君の話聞いて納得はしているのだけれども、感情は理性とは別物なのだろう。別に会えなくなるわけでは無いのだけれども、そう思ってしまう。

「新しい仲間って言うのは？」

とはいえ、そんな事ばかり思っても仕方が無い。軽く頭を振って、思考を切り替えると、ユニ君の仲間になると言うのがどんな人たちなのかを尋ねてみる。元パートナーになるとはいえ、一度はユニ君と組んだのだ。言わば僕の後任になる人物がどんな人なのかは気になる所だった。

「あ、それはね……」

僕の質問に、ユニ君は何処となく嬉しそうに、自分の仲間となる人物の名前を言おうとしたところで、医務室の扉がノックされた。入室を促す。本当に今日は来客が多い。そんな事を思うけど、ちよつと頬が緩むのは仕方が無い。なんだかんだ言っただけ、心配されるのは嬉しいものだから。

「失礼します。四条さん、怪我の具合は——って、ユニちゃんにケイさんも居たんだけ」

「おや、ギアちゃん。そう言えば来ていって言ったね」

訪問者はギアちゃんだった。お見舞いの品だろうか、果物をバスケットに入れ持って来てくれていた。そう言えばお見舞いの品を持って来てくれた人はこれが初めてだった。ギアちゃんの心遣いに、少しだけ心が暖かくなる。

「はい。それで、ケイさんから四条さんが怪我をしたと聞いたんですよ」

「成程ね。態々ごめんね。けど、この通りもう大丈夫だから心配ないよ」

ギアちゃんからバスケットを受け取り、身体が大丈夫な事をアピー

ルする。そんな僕を見て、ギアちゃんは良かったと言って胸を撫でおろした。

「もしかしてユニ君の仲間って言うのは」

「ええ、ネプギアたちの事よ。ラストイシヨンにはお姉ちゃんが居るから、アタシがネプギアと一緒に行くこうって訳よ」

ユニ君は、はにかみながら言った。一時期はギアちゃんに思うところあったようだけれど、今はもうそんな蟠りも無くなっているようだ。ギアちゃんたちが一緒ならば、僕が心配する必要も無い。彼女たちとは短い時間だったけど、一緒に居た。信頼できる人たちだと思う。僕がユニ君を心配する理由が無くなってしまった。

「成程ね。ギアちゃん」

「何ですか、四条さん？」

「ユニ君の事、頼むよ。意地っ張りで全然素直じゃないけど、大事な友達だからね」

「あ、はい！」

だから、ギアちゃんにユニ君の事をお願いする。

「どーせアタシは素直じゃありませんよーだ。行こう、ネプギア！」

「あはは……、それじゃ失礼しますね」

そう言い、二人の女神候補生は部屋から出ていく。それを笑顔で見送る事が出来た。ユニ君はユニ君なりに頑張っているんだと言う事が解ると、自然に口元が緩む。一人だった女の子が友達と一緒に前に進んでいるのが、素直に嬉しかったから。

「君はこれからどうするのか決めているのかい？」

「いえ、これと言って何も。まさかこんなに早くあの子と離れる事になるとは思ってませんでしたからね。どうするのか決めかねてるかな」

ユニ君たちが退出したところで、ケイさんがこれからどうするのかを尋ねてきた。正直に言って、何にも考えていなかった。まだ暫くはユニ君を支えてあげようと思っていたのだけれども、あの子はあの子なりの考えがある為、その必要も無くなってしまった。だから、今後どうするかはユニ君に合わせる心算だったため、自分の時間とも

言うモノが出来たのはいいけど、何もする事が思い浮かばなかった。「つまり、今のところはノープランだと言う事だね？」

「そうなるかなあ。とりあえずはギルドで仕事を受けながら、自分のできる事を探してみようかな」

特別急いでやる事も無い。なら、僕が異界の魂としてどの程度の事ができるのかを調べるのも悪くは無いと思う。他国を訪問すると言う選択肢も捨てがたいけど、それは後回しにしても問題は無いと思う。

「なら、ラスティションの教祖から依頼を出しても構わないかい？」

「依頼、ですか。……聞くだけ聞かせてもらいます」

ラスティションから。そう言われると、少しだけ身構えてしまう。一応は許したとはいえ、ノワールとは色々あったから。

「ふふ、ありがとう。ノワールのしでかした事を考えると、話を聞いてもらえない事も覚悟はしていたけど、その心配は杞憂だったようだね」

「知っていたんですか」

「ああ。本人から聞いたからね。流石に戦闘中は通信を切っていたから、あんな事になっていいるとは思わなかったよ。……ノワールが君を斬ったのも僕のミスだと言える。重ね重ね申し訳ない」

「もう、良いですよ」

どうやらケイさんも大体の話をノワールから聞いたようで、頭を下げる。ユニ君たちがいる時には出来なかった為、二人つきりになった今下げていると言う事だった。あの事に関しては、既に決着が着いている。僕から言いたい事は何もなかった。

「ありがとう。こんな言い方をするのはアレかもしれないけど、女神たちに呼び出されたのが君で良かった」

「……どうして？」

思ってもみなかった言葉に、問い返していた。

「君に教えて貰った異界の魂と言う言葉。それを僕なりに調べて得た情報元に、君がプラネテューヌで見つかったと言う情報をイストワールがもたらした時に聞き出したのさ。」

「そう言う事か……」

ケイさんには以前少しだけ僕についての情報を流していた。あの時点でも自分の口から説明するには荒唐無稽な話だったため、少しの情報でも元に彼女自ら調べて貰えればと思っただけ、思わずところで反響が来ていた。

「それに、君が運ばれて来た時にメデイカルチップ諸々をさせて貰ったんだ」

「っ!? と言う事はもしかして……」

「ああ。君の身体の回復力の異常性については理解しているつもりだよ。魔法を使ったと言う事を差し引いても、はつきり言って君の復帰速度は異常だったからね。けど、その理由が解った」

「……。できればその事は他言無用でお願いします。僕が、一番解っている事だから」

イストワールさん以外にも、僕の秘密を知る人が増えてしまった。出来れば隠しておきたい事だったのだけれども、知られてしまったのは仕方が無い。幸いケイさんはラストেশヨンの教祖である。この情報を公にするとはいえない。特に女神たちには。

「ん、そうだね。あまり公にする類の話ではなかったね。大丈夫、ユニやノワールにも黙っているよ」

「そっか。ありがとう」

ケイさんの言葉を聞き、ひとまず安堵の溜息が零れた。

「話が逸れてしまったね。君に頼みたい依頼と言うのはそう難しい事では無いよ」

「ギョウカイ墓場の時みたいのはもう勘弁してほしいからね」

「アレに比べたら、今回お願いしたいのは可愛いものだよ」

逸れていた話が軌道修正される。女神救出をしたときのような無茶ぶりではないようなので、少しだけ安心する。とはいえ、相手はあのケイさんだ。一癖二癖ある話なのでは無いだろうか。

「それで、何をすれば？」

「簡単な話だよ。ラストেশヨンの女神が救出されたけど、未だ本調子には遥かに及ばない。だから早急にシエアを回復させたい。手っ

取り早くシエアを獲得するには、ノワールが自らクエストをこなすのが一番だ。だけど、今のノワールに一人で仕事をさせるのは少々心配でね」

「もしかして……」

ケイさんの話を聞いて行く内に、何をしろと言われているのかの見当がついてきた。確かに女神救出の時のような無茶ぶりと比べれば可愛いものかもしれないけれど、あの時とは違う方向に難易度が高かった。

「ふふ、君の考えている通りだと思うよ。ノワールがシエアを獲得する手助けをして欲しい」

「……それは僕じゃないとダメなんですか？」

できるのならば断わりたいところである。確かにノワールの事を許したけど、だからと言って気軽に会いたいとも思わなかった。そんな思いを込め、ケイさんに聞いてみる。

「君だから頼みたいんだ。女神と女神を救出した張本人が一緒だと言うのなら、堂々と活躍を国民にアピールできるし、本調子じゃないノワールの補佐にも回れる」

「だからと言って、僕と一緒にいる必要はないのでは？」

しかし、そんな僕の思いをケイさんは一蹴する。

「ところが君でなきゃいけない理由があるんだよ。これまでノワールは一人で仕事をこなしてきたからね。このタイミングで防衛隊の者たちに手伝って貰うようでは、本調子では無いと自ら暴露している様なものなんだよ。けど、その点君なら、女神を助け出したと言う事を強調したら、傍に居る事に違和感が無くなる。女神を護る騎士<sup>ナイト</sup>ってね」

「騎士って。完全に柄じゃないですよ」

思わず零す。ケイさんの言う事も解らないでは無いけど、気が進まない。

「その割に、ユニには齒の浮く事を言ったようだね。支えるだのなんだの。なら、ノワールの事も支えてくれると助かるよ。彼女は完璧に見えるだけであって、完璧では無いからね。ユニだけでなく、あの子

も支えて欲しいんだよ」

「……はあ、解りました。やらせてもらいますよ」

結局、ケイさんに押し切られる形で引き受けてしまった。ノワールの傍に居る。それは僕にとっても難しい事だと思えた。

## 20話 新たな組み合わせ

「失礼するよ」

ケイさんがノックの後に一声かけ、扉を開ける。特に躊躇なく慣れた手つきでその部屋の扉を開ける様子に、返事を待たないのは何時もの事なんだろうと思いつつ後に続く。静謐な空気の中、キーボードをカタカタと打つ音だけが響き渡っている。ラステーションの教会、女神の執務室。大きな仕事机に腰かけたノワールが、忙しなく机に向かっていた。

「ああ、ケイ。良いところに来てくれたわね。女神の裁可が必要な案件は処理してそっちにまとめておいたわ。確認しておいてもらえるかしら？」

「流石に仕事が早いね。一先ず、終わらせなければいけない仕事が完了したと言う事かな」

背後の扉が開いた事によりケイさんが来たのが解ったのか、ノワールは振り返る事もせず、机に向かったままケイさんに話しかける。そんなノワールに気を悪くした様子も無く、ケイさんは応じる。ノワールは僕とユニ君が助けだすまで、長い間囚われていたはずのただ、二人の様子からはそんな事実は無かったかのように感じる。流石にユニ君が凄いと云うだけあって、その仕事ぶりに思わず感心してしまった。

「ええ、今確認しているもので最後だから、女神宛てに来ているクエストで直ぐに終わらせておきたいモノがあるのだけれど、出ても大丈夫かしら？」

「ああ、構わないよ。こっちで確認はしておくから、何かあったら連絡するよ」

「そう、ならお願いね。つと、これで最後」

そうこうしているうちに最後の資料の確認が終わったのか、彼女は腰かける椅子に一度深くもたれかかると、トンつと軽快に立ち上がった。

「それじゃお願いね、ケイ。私はこれからミッドガルドに行つて詳し

いは、な、し……ッ！」

「やあ、こんにちは」

そして此方を向き直ったところで硬直した。そんな彼女の様子に思わず苦笑が浮かぶ。僕自身、ノワールに会う事に抵抗があるのだけれど、ノワールの方もそんな感じなのか、目を見開き口をパクパクさせながら絶句している。

「どうしたんだい、ノワール。お化けを見た子供のような反応をして」  
ケイさんが小さく喉を鳴らして笑いながら言った。どうやら、事前に僕がノワールと一緒に仕事をすると言う事を話していなかったのだらう。喰えない人物であるのはノワールから見ても同じな様だ。にこやかに笑みを浮かべるケイさんに、ノワールは困惑しながら詰め寄る。

「ちよ、ちよ、待ちなさい！　なんで彼が此処に居るのよ!？」

「それは僕が依頼をしたからだよ。ラステイションの教祖として、万全ではない女神の補佐をして欲しいってね」

勢いよく捲し立てるノワールに、ケイさんは涼しい顔をして答えている。どうやら二人の力関係は、ケイさんに分があるようだ。

「そんなの聞いてないわよ!」

「言ったとしても、ノワールが素直に聞くとは思えなかったからね。だから、事後承諾してもらおう事にしたんだよ」

「当たり前よ!　私は誰かの力を借りなくたって一人で……」

「それは本気で言っているのかい?」

一人でできると言うノワールの言葉に、ケイさんは静かに聞き返した。そんなケイさんの様子に、ノワールは思わず押し黙る。ケイさんの言う通り、ラステイションの女神は本調子では無い。それはノワールが一番解っている事だらう。

「ッ、だからって、ユウに頼まなくても……」

「彼だから頼んだんだよ。君の隣に立っても違和感のない人物であり、信頼もできる。それに君だって打ち解けたいって思っているんだらう?　何せ命の恩人だからね」

「……それはそうだけど。私にだって、心の準備が必要なのよ。唯で



さえあんな事しちやった後なのに、助けてなんて言える訳ないじゃない……」

やはり僕に遠慮があるのだろう。逆の立場だったら僕も気軽にモノを頼めないだろう。一応許したのだけれど、ノワールはまだ負い目を感じているようだ。チラチラと僕の様子を窺いながらも、ケイさんに不貞腐れたように言う彼女を見ると、良く解った。こう言っではアレかもしれないけど、その様子は好ましく思えた。

「あまり気にしなくても良い、って言っても無理だろうね。僕だって何も思わないわけじゃないし」

「そう、よね……」

「けど、あの時僕は君を許したよ。だから、難しいかもしれないけど、もう少しだけ歩み寄る努力をして欲しいかな。僕はその子の帰る場所を、ラストেশションを守りたいからね。それには、ノワールの協力が必要だから」

「ユニの……。解ったわ。貴方に協力をお願いするわ。……その、よろしくお願いします」

おずおずとノワールが手を差し出してくる。僕自身思うところはあるけど、こうも露骨に反応を窺われると、苦笑が浮かぶ。何と云うか、何時までも拘っている自分が馬鹿らしくなってくる。

「ああ、よろしく」

だから、差し出された手を握り返しそう伝えた。

手にした長釣丸を読み取り、使い手たちの記憶を引き出していく。早く、そして正確に。この剣の持ち主が戦った数多の剣士たちの技を用いる事が出来る。そんな不可思議な感覚に身を委ね、ゆっくりと刀を振るい、宙に銀色の軌跡を描く。

異界の魂として強化された肉体の力を徐々に入れて行く事で、弧を描く銀閃の速度が増していく。自分の得た力は、どれ程のモノなのか。そして今僕に出来るのはどの程度までなのか。それを知る為に体を動かしていた。魔力を用いず、自身の身体能力に経験を重ね合わ

せ振るう。それでも、軌跡を視るのが困難なほどの速さだった。

「これが、異界の魂か……」

眩き、刃を止める。何度も実感していた事だけど、身体能力だけでも常人離れしていた。どうして自分はこんな力を得たのか。理由は解ったのだけど、そんな事を考えてしまう。

「——魂みたまくだき砕」

声に出し、自分の能力を更に引き出す。剣を読み取り再現する能力の第二段階。剣の記憶から別の剣を読み取り、それを自身の魔力で再構築し、顕現させていた。記憶から記憶を読み取り続け、こと剣に關する事ならばどこまでも読み取る事が出来る。それが僕の能力の第二段階だった。

さらに魂砕から深く記憶を読み取り、魂砕に蓄積された長釣丸の本来の使い手の記憶を辿っていく。魂砕の持ち主と、長釣丸の持ち主は、両者ともに僕と同じく異界の魂であった。その所為か、他の使い手たちに比べより鮮明に読み取る事が出来た。

「——S・O……」

「遅くなつてごめんなさい！ 待たせたわね」

異界の魂の中で最強の剣技を持つ人物の剣を再現しようとしたところで、そんな声が掛けられた。声の主は、ラストイシヨンの女神であるノワール。彼女の準備が終わるまで時間が余ったため、いろいろ試していたと言う訳である。剣を再構築する為に練り上げ、集中させた魔力を霧散させる。魔力によって再構築されていた剣の刃が砕ける様に零れ落ち、その姿を元の長釣丸の形に戻した。気付かないうちにかなり集中していたのか、小さな溜息が零れた。

「あ、邪魔しちゃった？」

そんな僕の様子に勘違いしたのか、ノワールは少し遠慮がちに聞いてくる。

「いや、そんな事は無いよ。思いのほか集中してたから、ちよつと疲れただけだよ」

「そう、なら良かった」

ほつとした様子で胸を撫で下ろす。相変わらず随分と気を遣わせ

ているようで、少しだけ不憫に思えた。

「もう、準備はいいのかな？」

「ええ、完璧よ。貴方から見てどうかしら？」

僕の質問にノワールは自信ありげに頷くと、感想を聞いてくる。支度を終えたノワールの姿をゆつくりと見据えた。服装は何時もの黒と白を基調にコーデインイトされたドレスのような服で、何故か赤い縁の眼鏡を掛けている。ちなみに髪型は特に変わっているわけでは無く、何時ものように二つに結っている。所謂ツインテールって言う髪型だった。早い話が、ノワールは普段の格好に加え赤い眼鏡をしているだけだった。

「眼鏡しただけだね。オシャレかな？」

ノワールが眼鏡をしているところを初めて見たため、そんな事を尋ねてみた。目が悪いのかとも思ったけど、仕事中には眼鏡を付けていなかったのも、多分違うと思う。なら、伊達眼鏡だろうか。と言うか、そもそも女神様って言うのは視力が落ちたりするのだろうか。

「違うわよ。変装よ、変装」

そんな僕の質問に、ノワールは呆れたように答える。

「……え？」

しかし、その反応は予想外だったために驚く。だって、何時もの服装で眼鏡を掛けただけで変装をしたなんて言われるとは思わなかったから。先程とは違い、まじまじとノワールを見詰めた。正直言ってどう見ても変装しているように思えない。どこからどう見ても、ノワールでしかないのだから。

「な、なによ」

そんな僕の反応が予想外だったのだろう。ノワールは急に自信なさげになると、僕の方をじっと見つめてきた。

「いや、それで変装したつもりなんだ」

「そ、そうだけど、何かおかしいかしら？」

「おかしいって言うよりは、おかしいところが無いから変装できてない」

僕だって変装の経験なんかないけど、流石に断言できた。これは無

いだろう。

眼鏡をかけただけで変装と言うのなら、僕だつてすぐにでも変装できるし。仮に僕が眼鏡をかけて、ユニ君相手に変装したなんて言ったらなんて言われるだろうか。……何馬鹿な事言つてんのよ。とか言われそう。

「ちよ、ちよつと待つて！ どこからどう見ても完璧な変装でしょ？」  
「……あれ、本気で言つてるの？ どつからどう見ても、ノワールだよ。ラストイションの女神にしか見えない」

もしかしなくても、本気で言つていられるだろう。彼女の反応を見てそう思った。ユニ君の自慢のお姉さんであり、凄い人だとは思うけど、意外と残念なところもあるのかもしれない。そう言えばケイさんも、ノワールは完璧に見えるだけで完璧じゃないと言つていた。それはこう言う事なのだろうか。正直、残念加減がちよつと面白い。

「嘘よ、この完璧な変装がばれる訳……」  
「いや、ばれるよきつと。それならもう、変装なんてしない方が良くないかな」

そもそも女神宛ての依頼を受けに行くわけなのだから、変装なんてする必要も無いと思う。まあ、今のラストイションは女神救出で湧いているから、変装でもしないと動き辛いのかも知れないけど。

「そんな事ないわよ」  
「ふむ。少し失礼」

若干、意地になり始めているノワールに一声かけてを伸ばす。言うよりも、見せる方が早いだろう。

「ひゃう!?!」  
「変な声出さないで欲しいなあ」

両目を閉じ可愛らしい声を上げるノワールに、苦笑が浮かぶ。眼鏡を取る為に手を伸ばしただけなのだけど、何か悪い事をしている様な気がしてくる。

「あ、貴方がいきなり手を伸ばすからでしょ!?!」  
「あはは、ごめんなさい」

頬を赤く染めながら怒るノワールに謝る。流石に僕も配慮が足り

なかったと思う。どうにもユニ君から引き続き、ノワールの事も知らず知らず子ども扱いしているのかもしれない。女の子に手を伸ばすのはやり過ぎたと、素直に反省する。

「まあ、見て貰うと解り易いと思うけど、これで変装できていると思うかな?」

そのまま赤い縁の眼鏡を掛ける。思った通り度は入っていないように、特に問題なくみる事が出来た。

「変装も何も、ユウが眼鏡をかけただけじゃない」

「……つまりはそう言う事だよ」

半眼で睨みながら言うノワールに乾いた笑いが零れる。

「……あ」

「さて、また変装してくるかい?」

自分の発言の意味に気付いたのか、先ほどとは違う理由に赤面するノワールに尋ねる。どうにもユニ君の憧れの人と言う印象が強く、凄いい人だと思っていたのだけど、意外と抜けているところがあるようだ。確かにケイさんが一人にするのを心配するのも頷ける。

「あうあう……」

恥ずかしそうに赤面しながら口をパクパクさせ僕を見詰めてくる。あれだけ自信満々だったのに、終わってみれば自分で自分の変装を否定している訳だから、ノワールの気持ちも解らないでは無い。

「完璧よ。貴方から見てどうかしら? だったっけ?」

「うぐツ」

「完璧な変装がばれる訳ない?」

「う、あ、うう……」

ノワールの言葉を思い出しながら告げる。意外な事に打たれ弱いのか、ちよつと面白い反応を示してくれる。第一印象では知的であり凛々しかった緋色の瞳だが、今は水気を帯びてきている。一言一言で、ぐさぐさつとダメージを受けていくのが何か面白かった。本当にこの人はユニ君の言う、憧れのお姉さんなのだろうか。

「じゃあ、ノワールの変装も完璧な様だし行こうか?」

「ぐ、あう……、わ、私だって偶には間違えるわよー!!」

涙目で叫ぶノワール。遂に耐え切れなくなったのか、一気に爆発した。ケイさんがノワールの事も支えて欲しいと言っていたのを思い出す。ユニ君の中では憧れの人だけど、それはノワールが精一杯気を張って見せている姿なのかもしれない。恥ずかしさに耐えかねて怒るノワールを見ると、そんな事を思った。

## 21話 定められた結末

「しかし、これは一体どう言う事なんだろうね……」

ラストイシヨンの教会、教祖の執務室にて、神宮寺ケイは資料を片手に独り言ちる。その手に持つのは、異界の魂である四条優一の検査結果であった。その理知的な瞳に僅かな疑問の色を宿らせながらも、淡々と資料を読み進めて行く。

「医療器具によるスキャンでは、何も無い。だけど、触診や目視による診察では完全に体が機能している……」

ケイはラストイシヨンの診療器具で調べた結果と、医師による触診や目視での観察、処置などの報告書を興味深げに見据える。

「しかし魔法による検査によれば、その場には何も無い。生物が存在しないのではなく、物体が無い。在るのは不可思議なシェアの塊と膨大な魔力だけ。にも関わらず、四条君は僕たちの目の前に存在していた。機械や魔法による検査では其処に無いにも拘らず、実態を持ち存在している。その結果が意味する事は何かしらの理由、例えば彼が異世界人である事による弊害。もしくは……」

軽く瞳を閉じ、考えを纏めながら自分に言い聞かせるように結論を纏めていく。

「異界の魂召喚の儀式によって彼の肉体だけが失われた。或いは、既に死亡していながら、誓約により存在している」

それが、ラストイシヨンの教祖である神宮寺ケイが、そして彼女に情報を与えたプラネテューヌの教祖イストワールの至った結論であった。

異界の魂は世界を超える過程で力を得る。そして、四条優一本人が言うには、この世界の儀式では無かった。本来はゲームギョウ界では無い別の世界に、四条優一の住んでいた世界であるチキユウ界より人間を呼び出す儀式であった。つまり、ゲームギョウ界に呼び出す術では無い。そのため、一度本来辿り着く世界に行った後、更に世界を越えたと言う事だった。つまり、その体が受ける負担は、想像を絶するモノになる筈である。世界を超える負担を立て続けに二回受けた。そ

して、ケイがイストワールにより知らされた異界の魂が召喚された場所が最悪であった。

その地の名はギョウカイ墓場。生身の人間が存在できない場所。故に世界を超える事が出来たのは、四条優一の肉体以外と言う事になる。普通の手段で人間が入る事が出来ない場所である。幾ら召喚の儀式とは言え、都合よく異界の門と同じような効果まで持っているとは考えられない。つまり、異界の魂と言う名前通り、魂だけが世界を越えた言う事になる。それは、肉体だけが世界を隔て切り離されたと言う途方もない話であった。そして、世界を越える過程で受ける膨大な負荷を与えられた肉体だけが、他の世界に放置されていると言う事にもなる。ケイには優一が召喚されてからどれだけの日数が経っているのかまでは解らないが、ユニと優一が出会ってからは既に一月以上が経過していた。それだけの時間が経って、身体だけが他の世界に放置されている。事実であるのならば、その肉体が今も健在である可能性は極めて低かった。

「こんな馬鹿げた話、あの子たちに出来る訳が無いか……。教祖と言うのも損な役回りだ」

そう呟くケイの表情は、どんな色もしていなかった。ただ淡々と、事実だけをかみ砕いている。

「出来る事なら、この考えが間違えでありますように」

事実であるならば、ラストেশヨンの擁する女神と女神候補生にどう話せばいいのか。そもそも話せるのか。ユニは四条優一に心を開き始めていた。そして、ノワールは先にしでかしてしまつた事を含め、負い目を感じている。そんな二人にどう話せばいいのか。その時の事を考えると、間違いであつてほしいと切実に願つた。

「しっかし意外だなー。まさかあそこまでされて、女神と一緒に居るなんてなー。ユーイチって、Mなのか？」

「クロワールか。急に出て来たかと思つたら、これまた随分な物言い



だね」

ラステイションの大きな都市の一つミッドガルド。女神や教祖のいる程では無いが、この都市もまた、工業都市と言うのに相応しく、重厚な街並みが広がっている。

この都市についてとところで、ノワールとは一旦二手に分かれていた。今回の依頼と言うのは、魔物の討伐であった。ノワールは今回の仕事の依頼人に直接話を聞き行っており、僕の方は事前に知らされていた、魔物の巣のある場所についての情報をギルドに貰いに行くため二手に分かれたと言う訳であった

そして僕が一人になったのを見計らったかのように表れたのが、僕に合わせて並走するように浮かぶ黒の妖精、クロワールだった。突然現れた事については、この世界に来て本当に色々な事が起っている為、さほど驚く事は無かった。人間の慣れと言うのは本当に凄い物である。

「そりや言ーたくもなるだろ！　いくらお前がこれ以上死なねーつつても、痛みはあるんだろ。それって、ある意味では死ぬよりつれーことじゃん」

「まあ、確かにね。僕が本当に人間を辞めない限り、痛みは感じるだろうし、死ぬより辛いのもかもしれないね」

クロワールの言葉に同意する。確かにクロワールの言う通りだった。正直、今でも実感が無いのだけでも、彼女が言う通り僕は死ぬ事が無い体となっていた。そもそも、死に絶える肉体自体がこの世界に存在しないらしい。ならば何故僕が存在しているのか。それは異世界の魂召喚による誓約だった。女神の脅威を排除するまでは、僕はこの世界に存在しなくてはならない。そしてその目的を達成するには実体がいる。そのため、異世界の魂の誓約により、この世界に居る間は魂だけで仮初の体を得ていた。それ故、実体を持ちながら魂だけの存在と言う訳であった。

そして、クロワールが言うには、今の僕が傷付けられるのは魂が直接傷付けられているのと同じらしい。怪我をしたら痛みを伴う。そんな魂に刻まれた生物の理屈が、魂だけとなっても適応されると言う

事だった。だから、斬られれば痛いのだ。

「けど、それは僕が人間だった証拠だからね。失くすことは避けたいかな」

「ふーん。人間だった証拠ねー。いつそ痛みも感じねー化け物になっちまえば、楽なんじゃねーの？」

「痛みが解らない化け物か。それって、どういう状態なんだろうね」  
「さーな。そこまでは解んねーよ」

無責任な事を勧めてくるクロワールの言葉に呆れながらも、考えてみる。絶大な力を持ち、痛みを一切感じずどんな手段を用いても死ぬ事も無い本当の化け物。そんなモノがいたとしたならば、どう対処するのだろうか。

「君はどうにも僕に破壊願望を持ってほしい様だね」

「そっちの方が面白そーだしな！俺としては、面白い結末を見せてくれるなら何でもいーんだよなあ。ハッピーエンドだろうが、バッドエンドだろうがな」

「相変わらず性格悪いね、君は」

面白ければ何でも良いと言う、出会った時からブレないスタンスに、呆れを通り越して感心してしまった。快樂主義と言うか、自分が楽しめれば良いと言う、何とも身勝手な言い分が逆に清々しいぐらいだった。こんなことを思うのは、多分クロワールだからだろう。純粹にそんな好き勝手な事を言っているから、どこか憎む事が出来ない相手だと言えた。

「ははっ、ひっでーな」

「君にだけは言われたくないね」

「そりゃそーだわな」

僕の皮肉にもどこか楽しそうに笑うだけで、堪える素振りも見せない。

「おや、何とも珍しい形なりをしたお人じゃ」

そんなクロワールと話している時だった。奇妙な老人に出会ったのは。

「なんだ、このじーさん。お前の知り合いか？」

「いや、知らない人だよ。と言うか、あの声の掛け方で知り合いは無いんじゃないかな？」

気付けば目の前に居た初老の男性。薄汚れた外套を身に纏い、どこか怪しげな光を宿らせている瞳から、物語に出てくる魔法使いを連想させる人物だった。

「おおっと、すみませぬの。そちらの男性が珍しかったもので、ついつい声を掛けてしまった」

「へー。このじーさん、お前の事が解るみてーだな。ただもんじやねーよ」

老人の言葉に面白いものを見つけたと、クロワールが目を輝かせる。

「ここに在りながら、無い存在。異世界から呼び出された貴方が辿り着く結末は、この世界を変えない限り最初から決まっている」

「……」

老人の言葉に耳を傾ける事にする。何故つと言う疑問はあるが、答えて貰えると思えなかった。

「だが、この世界を変えらうと言うのなら、道は開けるかもしれない。既に定まった結末を打ち砕いて、な」

「この世界を変える？」

問い返していた。道が開ける。その言葉が、どうにも気になってしまったから。

「……興味があるなら、力を求めなされ。実体無き力を奉げる事で強くなる剣。それを得た時、貴方の得た能力を持ちいれば道が開けるかもしれない」

「その剣と言うのは？」

「魔剣ゲハバーン。とある者達を倒すためだけに作られた剣。貴方が本気で欲するのなら、何れ巡りあう機会が訪れるだろう。そのときに選択する事になる」

「魔剣、ですか」

老人の言葉に、以前ラスティシヨンのギルドで見た情報を思い出す。命を奉げる事で強くなる魔剣。たしか、そんな情報だった。

命を奉げる魔剣。果たしてそんな事が僕にできるのか。イストワールさんが言うには僕の肉体は、仮初のモノであり、クロワールが言うには違う世界に置き去りにされた僕の肉体は既に死に絶えている。そして異界の魂としての誓約がなくなった時、魂だけが元の世界に戻される。そして帰還する世界には肉体が無く、ゲームギョウ界の様に、誓約による仮初の肉体も存在しない。つまり、魂だけの状態で放り出される。早い話が、きつと死ぬ。それがすでに確定した結末であつた。

はつきり言つて、自分が既に死んでいると言ふ実感がイマイチ無いのだけど、黒の妖精が言うにはそうらしい。色んなものに触れられ、感じる事が出来る。見る事も出来れば、話す事だつて可能だつた。それなのに自分が死んでいるなんて言われても、実感なんかある訳が無い。

だけど、いくつか思い当たる点はある。例えば、どれだけ酷い状況であろうと死なないと言ふ感覚。戦う事への恐怖や、痛みへの恐怖は感じるのに、それでも死ぬと感じた事は一度足りとも無かつた。思い返してみても、理性では死ぬんじゃないだろうかと思う事は多々あるのに、死の恐怖と言ふものだけは感じた事が無い。それはきつと異常な事だつたと思う。だけど、既に死んでいると言ふのなら、それもまた納得できる。既に死んでいるのなら、もう一度死ぬ事なんてありえないのだから。

更に、ギョウカイ墓場から自力で帰還していた。生きた人間が行けない場所だつた。逆を言えば、生きた人間が出れない場所でもある。そんな地であるにも拘らず、自分は何の制約も無く出る事が出来た。それは、僕が生きた人間では無いからだろうか？

そして、マジックやノワールに負わされた傷。ネプギアさんや何時ぞやのネズミ君を治療した時と比べて、違和感を感じた。何と言えはいいのか、他者を癒す時は暖かな力だつただけで、自身を癒すのはどこか淡々としていた。熱は感じたのだけど、暖かいものでは無い。

それどころか、熱い筈なのに、どこか冷たいと言っても良い奇妙な感覚。癒すと言うよりは、作り直す。治癒では無く、補修。そんな言葉がしつくりくる。

思い返せば心当たりはいくつかあった。そう考えると、既に死んでいる人間がどうやって命を奉げるのだろうか。そんな物を使えるとは思えない。

「必要ありませんよ」

「今は、な」

「そんなものを僕が欲する時が来るとでも？」

「人は弱い。だから本当に追い詰められた時にこそ、救いを求めるものなんじゃ。それは異邦人として変わらんよ」

老人はくつくつと喉を鳴らしながら、僕に言い聞かせるように語り続ける。

「そーだぜゆーいち。特にお前の場合は、恨む理由だってある訳だしな」

「だから、それを君が言うのかい？」

「ししし、悪い悪い」

「……もう、良いよ。どうせ言っても無駄だろうし」

溜息が零れた。僕がこの世界に呼ばれる原因となったクロワールにだけは言われたくない。

「まあ、覚えていても損はありませんね。年寄りの戯言だと思って聞き流しておいてください」

「……心に留めておきますよ」

老人の言う事は僕に必要なとは思わなかったけど、いやに気になってしまった。魔剣と選択。そんなものはいらないと思うのだけれども、その言葉は心の奥に刻み込まれていた。

「人を待たせているので、行きますね」

老人に背を向ける。魔剣。何か嫌な予感がした。その感覚を信じ、話を打ち切っていた。

「ああ、呼び止めてしまつて悪かった。お若い方、悔いの残らない選択が出来るように祈つておきます」

背後からそんな言葉が聞こえた。老人の声。嫌にはつきりと耳に残っていた。

「魔剣、ねえ。どーすんだよ、探すのか？」

「探しません」

ギルドで資料を貰った帰り道、今日は意外としつこく傍に居るクロワールが尋ねてきた。

「えー！ 明らかにあの爺さん怪しかったじゃん。ぜってー面白いものが見つかるって」

「いや、そんな理由で物騒なものを勧めないでほしいな。……、君には言うだけ無駄か」

「いい加減、俺のことを解ってきたじゃねーか」

クロワールに常識を求めるのは無理かと思いなおしたところで、件の黒い妖精は相変わらずの様子でにやにやと口元を緩めていた。

「まあ、実際のところ、選択肢に入れてもいいんじゃないやねーの？ このままじゃ、どう足掻いてもお前に良い事なんかねーぞ」

「そう、なんだよね」

確かにこのままノワール達を助け、女神を救い出し犯罪組織を倒したところで、僕の抱える問題は解決する事は無い。むしろ、出来る限り先延ばしにしなければいけない事柄だった。女神の願いを達成した時点で、僕の存在意義が無くなるからだ。そしてそれは、そのまま僕の終わりを示していた。

「そうなんだよね、じゃねーぞ。なんでお前はそれでも笑えるんだよ。死ぬのが怖くねーのか？ いや、消えるのが、だな」

「んー。難しい質問をするね」

にやにやした笑いを不意に消し、クロワールは真面目な顔をして聞いてくる。その質問に答えるのは、それほど難しい事では無かった。ただ、上手く伝えられるかは解らない。

「元の世界での僕はさ、交通事故にあって色々大切なものを無くしたんだよ」

とはいえ、聞かれたからには答える事にする。好き好んで広める様な話じゃないけど、絶対に黙っておきたい話でもない。相手にもよるけど、クロワールならば特に問題は無かった。

「両目だったり、足だったり。大事な人たちも無くした。そんな中で、僕だけが生き残っちゃったんだよ」

「それがどうしたんだよ」

「何と言うのかな、当時の僕は死んでないだけで、生きる希望って言うのが見いだせなかった。親戚のおじさんたちが親身になって世話をしてくれたけど、それでも糧となるものが無かったんだよ。きつと、一度死んだ気になってたんだと思う」

ただ一人生き残った。運が良かった。だから体は生きていた。けど、その時に心は一回死んだんだと思う。

「そんな日々に慣れ始めた頃に、この世界に呼び出された。そして再び世界を見て、動く事が出来たんだ。純粹に嬉しかった」

「嬉しかった？」

「ああ、見れる景色が綺麗に感じた。自分の意思で動く事が出来た時、言い知れない嬉しさが込み上げてきた。あの時にきつと、死んでいた心が蘇ったんだと思う」

始めてこの世界に来た時、知らず知らずに涙が零れ落ちた。滴り落ちる雫を止める事が出来なかった。それは、どうしようもなく嬉しかったから。そしてその時に、心が蘇り身体が死んだ。

「だからって、お前は笑えるのか？」

「そうだよ。一度死んだから、もう一度死んだとしてもそこまで驚く事は無かったんだと思うな」

「……なんだよ、それ。意味解んねーよ、お前」

クロワールが吐き捨てるように言った。苦笑が浮かぶ。僕だって、上手く伝えられるとは思ってなかったから。だけど、そう思っているのだから仕方が無い。

「僕も解らないよ」

だから、クロワールの言葉にすんなり頷いていた。

「……くく、ははは。なんだよそれ。やっぱりお前は意味が解んねー

よ。わかんねーけど、見てて飽きねーのは確かだ！」

「何か凄く釈然としない笑い方をされている気がする」

「あっはっは！ 細かい事は気にすんじゃねーよ！ お前は見てて飽きないやつだと思っただけだかんな」

上機嫌になったクロワールに困惑する。そんなに自分は面白い事を言っただろうか。寧ろ、意味不明な事を言った感じしかしない。

「意味不明な見えていて面白い化け物。それがお前だよ！」

「……誰が意味不明な化け物だって？」

何時ものような笑みを浮かべるクロワールの言葉に呆れる。言う事欠いて化け物とは。全力で否定できないのが悲しいところだった。

「あっはっは。じゃーそろそろ行くわ。黒の女神を待たせるとわりーからな！」

「……まったく、君は何しに来たのか」

「ふふん、そいつは内緒だ！ じゃーな」

そんな調子でクロワールは去って行った。相変わらず何しに来ているのかはイマイチ解らないけど、取り合えず来ると疲れると言う事だけは解った。

「つと、そろそろ僕もいかないと」

クロワールに遭ったせいで思いの外時間が経っていた。妙な事を色々と言われたけど、一先ずやるべき事に専念する。魔剣に選択、そして定められた結末。考えるのはもう少し落ち着いてからにしよう。そう思い、ノワールと合流する為に歩を進めた。



## 22話 友達

「さてと……、ノワールはもう来ているかな」

ミッドガルド中央公園。この街の中心地にある大きな噴水が目印の公園が見えてきた。

この街に来て早々に二手に分かれていた為、お互いのやるべき事が終わった際に待ち合わせる場所を予め決めていた。その場所が、目の前に広がる大きな公園だったと言う訳だ。

「ラステイションの女神さまは……、つと、アレが噴水か」

ギルドと公園の立地的に裏門を潜り待ち合わせの場所に進む。公園の中でも一際大きな噴水は、水の流れて弧を描き辺りに涼やかな音色を響かせている。この公園で最も解りやすい場所。それが目と鼻の先にある大きな噴水だと言う訳であった。待ち合わせの場所を見つけたため、少しだけ足早に進んでいく。直ぐにノワールの後ろ姿が見えてきた。艶やかな黒髪にドレスの様な煌びやかな服。例え後姿だったとしても、ラステイションの女神を見間違える事は無かった。何と云えば良いのか、その場に居るだけでも華みtainなものを感じるから。

「待たせたね、ノワール——」

「き、奇遇ね。私も今来たところよ！」

すぐ近くまで行って声を掛けたのでは、これまでの経緯からノワールが驚くだろう事は簡単に解っていたから、少し離れたところから声を掛けようとしたところで口を噤んだ。僕の声に被さる様にノワールがいきなり言葉を発したから。え？つと思いいその場に立ち止り、彼女の言葉を待つ事にする。

「ううん、なんか違うわね。奇遇も何も、仕事の待ち合わせをしているんだから合うのは当たり前じゃない。大体なんでもってるのよ私は」

僕が直ぐ近くに居る事に気付いていないのだろう。ノワールは小さく頭を振ると、自分の言った言葉にダメ出しを始める。その様子が面白かったので、その場に立ち止ったままノワールの独り言を聞く事

にした。

「遅いじゃない！ どれだけ私を待たせるのよ!! ……絶対駄目よ。どの口がそんな事言えるのよ。あんな事をしでかしたばかりなのに、今回の事を引き受けてくれたあの人になんて事を言おうとしているのよ私は！ 大体どれぐらいかかるか解らないから、具体的な時間を指定してないわよ。それなのにそんなに上から言ったら、完全に嫌な女じゃない」

確かに、今回のような場合の待ち合わせに来たところでそんな事を言われたら、僕だつて少しばかり思うところはあろう。自分の言葉に頭を抱えるノワールの様子が面白くて、少しだけ吹き出す。

「待ったかしら？ ごめんなさい、こっちはさつき終わったところよ。……先に来てるのに何を言っているのよ私は！ おかしな子だと思われるじゃない」

実は結構テンパっているのだろうか。明らかに待ち合わせの場面に先についている人間の台詞では無い事を、ノワールは言いだす。

「……うう、こんな時どう挨拶すればいいのか解んない。誰かと待ち合わせた事なんかないし、いや確かに彼とは待ち合わせた事はあるけど、アレはただ支度していっただけだし、今回みたいにならずと離れていた訳じゃないし。ああもう、こんな時どうすればいいのよ! ……待ち合わせなんかしなきゃ良かった」

暫くノワールの独り言に耳を傾けていたのだが、声色がどんどんと情けなくなってくる。後姿だからどんな表情をしているんか解らないけど、心なしか肩が下がり項垂れているように見える。意外とメンタルが弱いのか、その後ろ姿は若干泣きそうに見える。と言うか、独り言の最後の辺りの内容が聞いてて不憫に思えて仕方が無い。流石にこのまま聞いているのは居た堪れなくなってきた為、助け舟を出す事にした。と言うか、ノワールには友達とかいなかったのだろうか。「待たせたねノワール」

「は、はい!？」

少し離れたところからノワールに声を掛ける。直後にびくりと反応した。そのまま慌てて振り返る。何と言えはいいのだろうか、すつ

ごく緊張しているのが解った。

「うーん、ごめんね。なんかいろいろと気を遣わさせたようで」

「ちょ!? ま、待ちなさい。もしかして聞いてたの?」

心底驚いた様子で、軽く詰め寄ってくる。それも仕方が無い。僕だつて、待ち合わせでどう声を掛けるか解らなくて悩んでいる様子を見られたりしたら、かなり恥ずかしいと思うし。実際に見られたノワールがこんな感じになるのも頷ける。

「うん、聞いてたよ」

「ど、どこから?」

「き、奇遇ね。辺りから」

「ほ、ほとんど全部じゃない!?」

愕然とした様子でノワールは悲鳴を上げる。今し方一通り見た出来事を自分がやったとして、ソレを知り合いに見られるのはもの凄く恥ずかしい。穴があつたら入りたいと思うし。

「あうあう……。見られた。あんな姿をユニの友達に見られた……」

「まあ、あんまり気にする事は無いよ」

その場に蹲つてしまいそうなほどに落ち込んだ様子のノワールを励ます。

「気にするわよ!」

「なんでかな?」

「だ、だってあんな姿を見られたのよ! 女神の私にただの待ち合わせで悩んでるなんておかしいじゃない」

「そんなにおかしい事かなあ」

捲し立てるノワールの言葉に考え込む。少なくともノワールは待ち合わせの経験が無いと言っていた。独り言だからきつと嘘は無いと思う。つまり、初めてと言う事だろう。なら、どう声を掛ければいいのか解らないのも仕方が無いと思う。

「おかしいのよ! 女神が待ち合わせ位に悩んでたら、格好悪いじゃない!」

「格好悪いって。……そう言うモノかな?」

「そう言うモノなの!」

がーつと捲し立てるノワールに相槌を打つ。彼女が言うのならそうなのだろう。

「うう、最悪。ユニの友達にあんな情けない姿を……」

「まあ、見られたのが僕で良かった」

「貴方だから恥ずかしいし、困るのよ!? ユニに情けない姿は見せたくないの」

何と言うか、らしい言葉に納得する。ノワールは基本的に妹思いの姉だ。ユニ君の言葉と彼女の様子から、良い姉であろうとしているのは良く解った。そんな彼女が、ユニ君に情けない姿を見せたくないと言うのは当然だと言える。

「別に告げ口とかしないよ。ノワールだって女神さまだけど女の子なんだし、一つや二つ苦手な事だってあるだろうしね。そんな事をあげつらつて馬鹿にしたりはしないよ」

人には出来る事とできない事があると思う。勿論僕にだってある。だから他人の苦手な事を笑ったり広めて回ったりしようなんて思わない。そんな事をする時間があるのなら、弱点を克服するのを手伝ったりすることに使うほうが遥かに建設的だ。特に時間が限られているのなら尚更だ。

「……本当?」

「そんな事で嘘は言わないよ」

聞き返してくるノワールに苦笑が浮かぶ。最初は大人びた人だと思っただけど、話しているとどんどん印象が変わってくる。しっかり者と言う印象だったのだけど、色々弱い面が見えてきたり、無理をしているのも見えてきていた。斬られたことに関しては思うところがあっても、少しずつだがノワールと接しているうちに、気にならなくなってきた。思えてきた。

「だって、変じゃない。こんな事で悩むなんて」

「別に変じゃないと思うけどな。ノワールは女神さまなわけだし、友達と言える人が居なかったのなら、悩むのも仕方が無いよ」

ユニ君もそうだったけど、姉妹揃って他人と交わるのが苦手なのだろう。良く似た二人を見ているとそう思えてきた。

「と、友達ぐらいいるわよ!」

友達がいないと言うところにムキになって反応してくる。

「そうなんだ。居ないようなら僕がノワールの友達第一号に立候補してみようと思ったんだけど、それなら無理にならなくても良いかな」

どうやら僕の心配は無用なものだったようだ。ユニ君も相当不器用だったから、ノワールもそうでは無いのかと思っただけど、本人が言うにはそんな事は無いらしい。正直に言えば、ユニ君以上に不器用だと思っただけど、本人が大丈夫と言うのなら、僕から無理に言う必要も無いだろう。僕がノワールを本当の意味で許せるようになるためにも、友達の経験が無いなら友達になると言うのがいいかと思っただけど、余計なお世話だったようだ。すんなりと諦める。

「——え?」

「ん?」

「わ、私の友達になってくれるの?」

呆けたようにノワールがこちらを見て言った。その様子から、先ほどの言葉が強がりだったのだろうと言う事が良く解った。思った通り、ユニ君以上に不器用なのだろう。

「そのつもりだよ」

「あの……本気?」

確かめるように上目遣いで此方の様子を探りながら、ノワールが尋ねてくる。その様子に苦笑が浮かんだ。姉妹揃って意外と疑り深い。こう言うところは本当にユニ君に似ている。

「だから、こんな事でも嘘は言わないって。年下の友達のお姉さんと友達になったって、別に不思議な話では無いと思うよ。……まあ、ノワールが嫌なら話は別だけどね」

「——そんな事ないわよ!!」

ノワールは強く言い切った。その音量に思わず目を見開いた。

「……あ」

ノワールの方も予想外だったのか、直ぐに両手で口を押えていた。そして恥ずかしそうに此方を涙目で睨み付ける。

「なら、今日から友達だね」

「私とユウが……友達？」

ぽつりとノワールが零す。先ほどまで睨み付けてきていた瞳には、期待と不安の色が窺える。

「ああ、そうだよノワール。改めてよろしくね」

「ツ、え、ええ。よろしくね、ユウ」

そう言い、少しだけ恥ずかしそうに笑う。その笑顔は、女神と言うだけあってとても綺麗なものだった

「ふんふんふんふん」

ノワールとの情報交換を終え、準備も整った事だし目的地に向かって歩を進めていた。今回女神に來た依頼来と言うのは、ミッドガルドとそのほかの街を結ぶ主要な国道の一つに、接触禁止種と言われる強力なモンスターが現れ防衛隊では歯が立たないと言う事で対処して欲しいと言うモノであった。

「ふんふんふん」

国道に現れたモンスターと言うのが、エレメントドラゴンと言うモンスターだった。名前から解る通り、童話やゲームとかでよく出てくるあのドラゴンである。接触禁止種に指定されているモンスターの中でも特に危険なのがドラゴン種なようで、一応は最も弱いドラゴンではあるのだけれど、その強さは普通の人間の手に負えるものではなく、そのため女神に討伐の依頼が来ていると言う訳だった。

「ふんふんふんふんふん」

「さつきから、君は何でそんなに楽しそうなのかな？」

ドラゴンが出ると言う地点の近くまで來たと言うのに、どこか浮かれ気味と言うか、妙に楽しそうに前を歩くノワールに声を掛ける。トントントンとテンポよく進んでいくのは良いのだけれど、何と言うか危なっかしい。

「べ、別にそんな事ないわよ。初めて友達ができて嬉しいなんて思っ  
てないんだから」

「ああ、うん。解りました」

ノワールは此方を見ると、嬉しそうにはにかみながらそんな言葉を零す。

僕としても、そこまで喜んでもらえたのは嬉しいのだけれど、此処まで効果があるとは思わなかったから、少しばかり唾然としてしまふ。ノワールにとって友達と言うのはそこまで意味のある事なのか。「ふふん。これで、ネプテューヌにボツチなんて言わせないんだから！」

「……ボツチとか言われてたんだ」

「ええ、女神の中にもすぐく失礼な奴が居てね。ネプテューヌの奴が事ある毎にボツチボツチって！でも此れからは胸を張って言い返せるわ。私にだってちゃんと友達がいるんだからって！」

余程気にしていたのか、これからは言い返せると心底嬉しそうにノワールは語る。その言葉を聞き、僕が友達にならなくとも、ノワールにはちゃんと友達がいたんじゃないかと安心してしまった。……とはいえ、絶対認めないと思うけど。

「ネプテューヌ？」

「ああ、そう言えば知らなかったわよね。プラネテューヌの女神の事よ」

「へえ、プラネテューヌの。妹さんとは随分違った感じの人の様だね」  
プラネテューヌの女神と言う事は、ギアちゃんのお姉さんと言う事になる。ギアちゃんは太陽の様な温かい笑顔が印象的な、やさしい女の子だったけど、お姉さんの方はどうなのだろうか。

「まったくよ。妹はあんなに良い娘なのに、どうしてネプテューヌはあんなにちゃらんぽらんなのかしら。何時も遊んでばかりいたし、少しはネプギアを見習わないと、イストワールが可哀そうよ！」

「……、なんだかんだ言っただけが良いんだね」

ネプテューヌさんの事を思い出しながら語るノワールは、表面上は怒っているのだけど、どこか嬉しそうに言葉を続けている。少なくとも、本気で嫌っている相手では無い様だ。

「な、なんでそうなるのよ！」

「だって、話す時嬉しそうだし」

「のわっ!? そんな事ないわよ!」

頬を薄らと染めながら捲し立てるノワールを小さく笑う。慌てて否定するところがいかにも怪しい。

「なんだかんだ言ってノワールにもちゃんど友達がいたみたいだね」「ち、違うわよ。ネプテューヌとは女神同士でライバルでしかないんだから!! 友達とかそう言うのじゃないわよ……」

「あはは、そう言う事にしておこうか」

慌てて否定するノワールを見ると、思った通り不器用な子なのだと苦笑が浮かんだ。ユニ君も素直じゃなかったけど、ノワールはそれ以上だと思える。

「だから違うって! はあ、もう良いわよ。それにしても友達か……。ふふ、そうだ!」

「ん、どうかしたのかな?」

否定するのに疲れたのか、ノワールは諦めるたように溜息を吐くと、不意に何かを思いついたように顔をあげた。

「この依頼が終わったら、一緒にお茶しないかしら? ほら、友達になつた記念にもなるし」

名案と言わんばかりに目を輝かせながら誘ってくる。

「お茶、ねえ……」

「あ……、もしかして駄目だった?」

少しばかり考え込む僕を見て、途端に悲しそうになるノワール。「そう言う訳じゃないよ。ただ依頼が依頼だからさ、終わった後にそんな元気があるかと心配になっただけだよ」

ノワールとお茶をすること自体は嫌では無かった。

「ああ、そう言う事ね。確かに貴方は人間だから辛いかもしれないわね……。けど、大丈夫よ」

「と言つて……」

「ふふん。今の私は絶好調なんだから。何が来ても大丈夫。サクッと片付けてあげるわ」

自身満々に言い切るノワール。本当に調子が良さそうではある。けど、だからこそ危なっかしいとも思えた。



「そっか。なら、女神さまの力をあてにさせて貰うよ」

「ええ、任せなさい。それで、この仕事が終わったら一緒に喫茶にするんだから、覚えておいてよ」

「ん、わかったよ」

とは言え、漠然と不安に思うだけで根拠とかは無い。何か起きた時は僕がフォローしたら良い。そう思い、ノワールと一緒に目的地に向かった。

## 23話 予期せぬ出来事

「アレが今回の標的、エレメントドラゴンよ」

国道を進んで行き、討伐の依頼を受けた標的であるエレメントドラゴンを視界に入れた時、ノワールが言った。

彼女の言葉を聞くまでも無く、依頼の相手だと言う事は直ぐに解った。単純に大きかったから。現在地はミッドガルドの街中から遠く外れ、山道の中に大きく作られた国道沿いに居るのだが、巨大なドラゴンが居座っている。それなりに距離はあるのだけど、それでもはつきりと解るぐらいには大きい。高さだけでも10mぐらいはあるのかもしれない。両足を地につけその場に佇んでいるため全長は解らないけど、その背にある大きな翼を広げたらどれだけの大きさになるのだろうか。確かにこんなのが相手では、防衛隊どころか人間には荷が重いと思う。僕だって、異界の魂としての力が無ければ、戦えと言われても途方に暮れてしまう。

「解っていた事だけど、大きいね」

「そうね。ドラゴンだもの。……やっぱり怖い？」

エレメントドラゴンを見て感じた素直な感想に、ノワールが気遣うように言った。女の子に心配されると言うのは少しばかり情けない気もするけど、彼女は女神さまだ。力こそあるけど、僕を普通の人間だと思ってる為、純粹に心配してくれているのが声音からも感じられる。その優しさは素直に有りがたく思う。

「アレと戦うのが怖くないっていう人間は珍しいんじゃないかな。僕だって、少しぐらいは怖いよ」

戦うのが怖くないわけでは無い。既に自分が死んでいるとは言え、この世界に居る間は仮初の肉体がある。限りなく人間に近いけど、決して人間では有り得ない身体。痛みや熱を感じる事が出来るけど、何があっても死ぬ事は無いと言う規格外の器であった。そんなものを持つている事が良い事なのか悪い事なのか。戦うと言う点から見たら良い事なのかもしれないけど、素直に喜ぶことはできそうにない。それは、何度だって痛みを感じると言う事なのだ。だから、死ぬと言

う恐怖は一切ないけど、痛みを受ける恐怖ならば僕にもある。それは、異常な事なのだろう。

「そうよね。でも、大丈夫。貴方は私が守るから。初めて出来た友達に良いところを見せておかなきゃいけないから」

そんな僕を見て、ノワールは励ますように言った。きつと、僕がどう怖いのかは解っていないだろうけど、それでもその気遣いは嬉しく思う。アヴニールで対峙した時にその強さも身をもって実感しているし、ノワールの存在は心強い。

「僕なら大丈夫だよ。ノワールが強いのは良く知っているけど、女の子に一方的に守られるって言うのは少しばかり情けないからね。君が僕を守ってくれるのなら、僕だって君の事を守ってみせるよ」

とは言え、僕だってただ守られる心算は無かった。

この身には異界の魂召喚の儀式によって得た力が宿っている。人間離れた身体能力と剣を読み取り再現する能力。それを得ていた。召喚により世界を超える過程で引き揚げられた身体能力に、数多の剣士たちから力を借りる事で、僕の剣技は成立する。自分には無理でも、先人たちの力を借りる事で、常人以上に、ソレこそ化け物と思えるまでに戦う事が出来る。

そして、眠っていた魔力の覚醒だった。剣技や身体能力と同じく、召喚がきつかけで眠っていた魔力が解放されていた。その効果は身を以て体感している。尋常では成らざる効果を発揮していた。

僕が得た全ての力を使えば、ノワールを守る事だつてできない事は無い。ならば、男としては女の子に守られるだけなんて言う事はしたくは無い。例えばそれが女神様であったとしても。

「あう……。だ、大丈夫よ。私は女神なんだから。モンスターの対処には慣れてるから、気にしないで良いわ」

恥ずかしそうに目を反らしながらノワールは呟いた。ケイさんが言うには、ノワールは殆ど一人だけで仕事をしていた為、こう言う事を言われ慣れていないのかもしれない。

「女神さまだけど、女の子でもあるよね。それに僕は以前言ったよね、ノワールの事を特別扱いしないし出来ないって。僕にとって君は、友

達の女の子でしかないからね。だから、女神だって言う事もノワールを守らない理由にはならないよ」

確かにノワールは女神である。人などより遥かに強いだろう。けれど、僕はそんな彼女を、この世界の女神たちの脅威を排除するために呼ばれた存在だった。なら、そんな僕が女神とは言え、女の子にただ守られていると言うのは少しばかり恥ずかしい。なにより、友達だけ危険な目に合わせると言う事はしたくなかった。

「……友達の子でしかない？」

そんな僕の言葉にノワールは驚いたように目を見開いた。きつと、肩を並べて戦える人なんて同じ女神ぐらいしかいなかったのだろう。「そうだよ。だから、少しぐらい格好つけさせてほしいな。流石にノワールに守られるだけって言うのは、格好がつかないよ」

「……うん」

苦笑しながら告げる僕に、ノワールは素直に頷く。先程もあつたけど、ノワールは友達と言う言葉を聞き、少しばかり考え込んでいた。やはり彼女にとって、友達と言うのは僕が思っている以上に重要な言葉なのだろう。急に素直になったノワールを見ると、何となくわかってきた。

「なら、協力させてもらおうよ」

「うん。友達だから、よろしくお願いね。私が貴方を守るから、その……背中を頼むわよ」

それでも流石に守ってとは恥ずかしくて言えなかったのか、恥ずかしそうに頬を染め、でもどこか嬉しそうに、ノワールははにかみながら言った。

「承りました、女神さま」

「もう、女神と思わないんじゃないかなかったの？」

自分で言っておいてなんだけど、少しばかり恥ずかしくなっておどけた様にそう言うと、ノワールは小さく吹き出しながらそんな文句を言う。勿論本気で言っているわけでは無い。

「ん、そうだよ。それじゃ、やろうかノワール」

「ええ、行きましよう。——アクセス！」

ある程度落ち着いたところで、敵を見据えた。傍らに立つノワールから暖かな力を感じた。ユニ君が変身する時と同じく、宣言をする。と、ノワールが光に包まれる。

「女神ブラックハート、見参よ!」

そして、ノワールの女神としての姿、女神ブラックハートが降臨する。

「さあ行くわよ、ユウ!」

「ちよつと待って」

「のわ、な、なによ?」

そのままシエアによつて構築された剣を構え、一気に距離を詰めようとしたノワールを制止する。プロセツサユニットを展開し一気にトップスピードに移ろうとしていたのか、少しばかり前につんのめる形になるけど、ノワールは何とか踏み止まった。少しばかり悪い事をしてしまった。

「ああ、ごめんね。その前に失礼」

「ちよ、ユウ! ま、待ちなさい! いくら友達だつて、いきなりそんな事……っ!」

長釣丸を右手に持ち、左手をノワールに翳して魔力を込める。至近距離で手を伸ばした所為か、何やら変な勘違いをしているけど、ややこしくなりそうなので無視して自分のやりたい事を施す。短く言の葉を紡ぎ、収束させた魔力を解き放つ。

—— エクス・コマンド

それは身体能力を底上げする魔法。先程も言ったけど、幾ら女神とは言え女の子であることには変わりがない。魔法を掛ける事で少しでも戦いを楽にできるなら、施さない理由は無い。誰だって友達が傷付くより、傷付かない方が良いにきまっている。

「そう言う事はもつとお互い仲良くなつてから……」

「……君は何の話をしているのかな?」

顔を真っ赤にして恥ずかしそうに首をふる女神さまを見て、思わず言ってしまった。

「へ?」

呆れたように言うと、ノワールは呆けた様な顔を見せてくれた。苦笑が浮かぶ。それにしても面白い子だ。

「とりあえず補助魔法掛けたよ。効いてるかな？」

「え、あ、うん。って、凄い！ 体がいつも以上に軽いわよ。これなら何でもできそう。それに、何か暖かい感じがする……」

手にする黒き剣を何度か振ると、ノワールは興奮したように零す。

「さて、今度こそ行こうか」

—— エクス・コマンド

—— ファイン・コマンド

—— パワー・エクステンション

—— ガード・エクステンション

そんなノワールを見ながら、自身には立て続けに魔法を施す。四つの補助魔法の重ね掛け。本来ならばこのような使い方をしては体に負担が掛かる為、ノワールには一つしか施さなかった。だけど僕の場合はその心配をする必要は無くなっている。仮初の体であるため、身体にかかる負担と言うモノを気にしなくても良かったから。だから、自分には四種類もの魔法を躊躇なく施す事が出来たと言う事だ。

「ええ。私たちの力、見せつけてやりましょう！」

今度こそノワールの傍らに立つ。そして二人で敵を見据え、一気に距離を詰めた。

「一気に仕掛けるわ！」

並走していたノワールがそう宣言すると、更に速度を上げ前に出た。そのまま高度を少し上にあげ、一気にエレメントドラゴンの頭部へと迫る。

「なら、先制は任せて貰うよ」

ノワールが飛び上がったことで、エレメントドラゴンへの道が一気に開ける。長釣丸を右手でしっかりと構え、左手に魔力を集中させ言葉紡ぐ。左手にバチバチと紫電が迸り、魔力が強くうねりを上げたところで一気に解き放つ。

——天魔・轟雷

前方を駆るノワールの下を紫電が迸り、幾重にも枝分かれした雷迅がエレメントドラゴンに襲い掛かる。直撃。エレメントドラゴンは咆哮とも取れる大きな叫び声あげ、此方に向き直った。その間合いの内、既にノワールは到達していた。即座に両手で長釣丸を握り、刀身に魔力を込め風の力を纏う。

「やるじゃない。なら、私も続くわよ！ サンダーエッジ!!」

気付けば僕の放った雷撃を剣に纏わせていたノワールが、黒の剣に紫電を纏わせエレメントドラゴンの頭を一閃する。天魔・轟雷を利用した魔法剣。あの一瞬で雷を纏い魔法剣を形成した事に思わず感嘆を零す。これまで色々と残念な姿を見て来たけど、やはりノワールはユニ君の目標だけあって、尋常では無い。流星は女神と言ったところだった。

「なら、追撃をさせて貰うよ」

ノワールがエレメントドラゴンを切り裂くも、倒すには至っていない。怒り狂ったような咆哮を上げると、その手でノワールを引き裂こうと大きく振り上げた。竜族の爪牙をまともに受ければ女神と言えども無事に済むとは思えない。

両手に持つ長釣丸をぐるりと振りかぶり、風の魔力を纏った刀身を一気に振り抜く。

——ソニック・グレイブ

魔力と剣技により風の刃を形成させ、襲い掛かる。黒の女神を引き裂こうと振り上げられた大きな腕を深く斬り裂いていた。予期せぬところからの攻撃に、悲鳴を上げ大きく仰け反る。

「一気に決めるわよ！ ガンブレイズ！」

炎を纏った黒の剣が唸りをあげる。その速すぎる斬撃にエレメントドラゴンが反応できないまま、頭部を切り上げられる。そのままノワールは勢いを殺す事無く飛び上がり、

「からの、ボルケーノダイブ！」

十分な距離を駆けると一気に反転し、紅を纏った剣を振り下ろす。

一撃必殺。その気迫が込められた振り下ろしをもらに受けたエレメントドラゴンはその場に膝をつき、倒れ伏した。

「ま、こんなものね。ふふ、言ったでしょ。何が来ても大丈夫だって」「そうだね。確かにノワールは凄く強かったよ。これなら本当に僕なんかいなくても大丈夫だったんじゃないかな」

倒れたエレメントドラゴンを背に、ふふんと胸を張るノワールを見てしみじみと思う。ケイさんは本調子では無いと言っていたけど、それでもノワールは十分に強かった。それこそ、態々僕が護衛をしなればいけないような事は無いと思う。

「え……。そ、そんな事ないわよ。貴方の援護があったから、ここまで簡単に勝てたのよ。言わば、二人で勝ったのよ」

慌てたようにフォローを入れるノワール。別に謙遜する必要も無いところで妙に慌てる彼女が可笑しくて、思わず吹き出してしまった。

「くく、君は謙虚なんだね」

「ちよ、何が可笑しいのよ！」

不意に笑い出した僕に、ノワールは少しだけ怒ったようしながらこちらに向かってくる。

「いやいや、——ノワール！」

そんなノワールにどう答えようかと思いい瞬だけ視線を外したところで、それが目に入った。視界の隅に映った紅。気付く事が出来たのは殆ど偶然だった。声を荒げる。

「——え？」

そこには、倒れていたエレメントドラゴンが再び立ち上がっていた。その口元には、今にも吐き出されんばかりの大きな炎をが揺らめいている。

「っ、」

ソード・オブ・カオス  
——S・O・C

それは、僕と同じ異界の魂の中でも最強と言われた剣士の剣。本来の長釣丸の持ち主の持つ武器の再現。それを瞬間的に構築し、ノワールとエレメントドラゴンの間に一気に踏み込む。そうしないと、どう



考えてもノワールを助けられなかったから。

そのまま踏み込み、吐き出される炎の息を、全力で斬り裂いていた。SOC。僕とは違う世界に召喚された異界の魂が持つ事になった剣。世界を滅ぼす力を持つ天魔の王。その力を制御しようと考えた賢者たちの作った剣であった。その剣を用いれば天魔の王の力を自由自在に操る事が可能であり、世界を滅ぼす事すらできたと言う。その剣を再現していた。再構築している為本来の力には遥かに及ばないが、一体のドラゴンの攻撃を凌ぐ程度ならば何の問題も無くできる代物であった。

「あ……」

ノワールの呆けたような声が耳に届く。僕たちを焼き尽くそうとしていた炎が、二つに割れ、エレメントドラゴンすらも引き裂いていたから。

「だけど、そんなノワールに構っている暇は無かった。」

「ノワール、逃げて」

「きゃ!? なにを——」

傍らに居るノワールを、強化された身体能力を以て背後に投げ飛ばす。驚いたようなノワールの声が聞こえるけど、気にしている余裕は無かった。だって、

「ふ、やはり貴様が邪魔をするか四条優一」

「マジック・ザ・ハード」

その場に現れたのは、紅の女神だったから。大鎌を構え此方を無感動に見据える姿は、さながら死神を彷彿させる。

「な!?! アンタは……っ」

背後でノワールが息を呑む気配が伝わってきた。以前言っていたマジックの言葉が本当ならば、ノワール達が四人がかりでも倒せなかった相手だった。

「四条優一以外にも、死にぞこないが一人いるようだな」

「何ですって!?!」

「本当の事だろう。成す術も無くやられ、自分では何もできなく、其処に居る人間に助け出された女神」

マジックはノワールを一瞥すると鼻で笑う。

「言わせておけば、今度こそ倒す」

「貴様では無理だ。それに今日は貴様の相手をしに来たのではないのでな。こいつ等と遊んでいろ」

歯牙にもかけない様子のマジックに、ノワールは挑もうとするが、背中に何かの制御ユニットの付いた機械に阻まれる。

「はっ、笑わせないで。こんな雑魚に私を止められるわけ——っ」

黒き剣を構え、ノワールが敵を切り伏せようとしたところで異変が起こった。ノワールの纏うシエアが霧散し、変身が解除されたのだ。

「なんで……」

「これで邪魔者は無力化できたな。本題に入らせてもらおうぞ四条優一」

強制的に変身が解除されたノワールを無視し、マジックが僕に向かい近付いてくる。ノワールを助けに行こうにも、マジックがそれをさせてくれるとは思えない。ただ強くSOCを握り締め、機を窺う。だが、それが失敗だった。

「いや、異界の魂と言うべきか」

「……っ」

「——え？」

マジックの告げた言葉。それは、僕がノワールに、女神に最も知られたくなかった事であった。

## 24話 紅の女神

「嘘、異界の魂……、ですって?」

マジックの言葉を聞いたノワールが、信じられないものを見るような目で僕の事を見詰めていた。その様子から、本当にノワールが異界の魂を召喚する儀式を行ったのだと言う事が解ってしまった。それ自体はイストワールさんやクロワール、ケイさんの言葉などからも解ってはいたのだけれども、実際に彼女の様子を見て知るのとは、重みが違う。

「……それで貴女は僕に何の用なのかな?」

それでも、ノワールに何かを言おうとは思わなかった。この世界に呼ばれた事に関しては、確かに思うところはある。だけど、何も悪い事ばかりでもない。既に自分の中では決着が着いている事だった。だから、そのままマジックを見据えたまま、手に持つSOCを構えその刀身に自分の魔力を浸透させていく。相手はあのマジック・ザ・ハードだ。少しの油断もできるはずがない。

「その力。やはりただの人間の持つモノでは無いな。対峙するだけで異質な力を感じる。女神とも人間とも異なる力」

「確かにそうなのかもしれないね。だけど、貴女はそんな事を言いに来たわけじゃない」

そう言い僕を見るマジックの眼には好奇心の様な色が宿っていた。どう言う心算なのかは解らないけど、まさかそれだけ言いに来たと言う訳は無いと思う。ならば、何が目的なのだろう。

「そうだな。以前にも見たが、その力をもう一度確かめに来た、とても言うっておこうか。四条優一、抗って見せろ」

「どうせロクな事では無いと思っただけど、予想以上だよ」

言うや否や、紅の女神はその手に持つ大きな鎌を振りかぶり肉薄する。以前戦う事になった時も凄まじい速さだったけれど、その時以上に思える。命を刈り取ろうと軌跡を描く紅を見据える。

「っ、ユウ！ そいつと戦っちゃダメ！ 私が行くまで持ちこたえて

……、くう!?! この、邪魔よっ!!」

背後からノワールの切羽詰まった声が聞こえてくる。自分も無理やり変身を解除され、機械の兵に囲まれていると言うのにも拘らず、僕の事を心配してくれている。何とか囲みを突破し、僕の下へ来ようとしていた。

「貫うぞ」

「ユウ!? ダメエ!!」

二人の女神の声が聞こえた。一つは冷酷な響き。僕を殺すために刃を振り抜いていた。

もう一つは、悲痛な叫び。女神が四人がかりでも勝てなかった相手に命を狙われている。紅の女神の力を身を持つているノワールには、この後どういう展開が起こるのか、最悪の予想がついていたのだろう。ただ、ノワールの叫び声だけが響き渡る。だが、

「それはこっちの台詞だよ」

紅の女神の刃は空を切る。迫り来る刃を見据えていた。首を刈り取る為に振り抜かれた軌跡。ソレを、両の手に持つ再現した大剣、SOCの柄で救い上げる形で往なしていた。そのまま紅の軌跡をやり過ごし、同時に振り上げた手を振りろす。

——霞三段

「——え?」

「っ!? ほう、加減をしたと言う訳では無かったのだがな。まさかこうも容易くないなされるとはな……」

刃をやり過ごした直後に出来た間隙を突き、SOCを振るつたにも拘らずマジックは涼しい顔をして此方の攻撃を受け止めていた。何と言う事は無い。僕が剣の柄を使い往なしたように、マジックも大鎌の長い柄を用い、僕の攻撃を凌いだと言う事だった。一連の攻防の最中、ノワールの声だけが響き渡る。

「この間の時とは違うよ。貴方が相手でも、そう簡単に負ける気は無  
い!」

膠着している場を動かすため、SOCを力任せに振り抜く。力に抗う事無く後退するマジックをそのまま追いますが、刀身に纏わせてい

た魔力を開放する。

——フレア・ブレイク

それは、炎を魔力を宿した斬撃。この剣の持ち主が得意とする魔法剣の一つであった。異界の魂として召喚された際に覚醒した魔力を惜しむ事無く解放し、瞬間的に斬撃を爆発させる。

後方に飛び退っていたマジックは一瞬だけ驚いたように目を見開くが、炎を纏った斬撃を大鎌で受け止めた。

「……っ」

瞬間、刃と刃がぶつかり合った場所を起点に、魔力による衝撃が巻き起こる。斬撃からの、爆撃。僕の剣を真正面から受け止めたマジックに向かい、炸裂していた。直撃したマジックは、衝撃に耐える事が出来なかつたのか吹き飛んで行く。

「嘘……、あの赤いのに手傷を負わせた？」

機械兵士と戦いながらも、此方を気にしているノワールが驚いたような声を上げる。

「少し、効いたぞ」

とは言え、一撃を入れたが、それ程距離が取れた訳では無かった。瞬時にプロセツサユニットを展開し、空中で衝撃を殺したマジックが肉薄する。再び迫り来る大鎌に、振り抜いていた刃を滑り込ませ、受け止める。

「アレで、少しなんだね。まったくどういう強さをしているのか」

相変わらず規格外の強さに、皮肉交じりに零す。以前戦った時も相当強かったが、今はそれ以上に感じる。なにより、未だ底が見えなかつた。そんな相手と一人でしのぎを削っていた。愚痴の一つも零したくなる。

「誇ると良い。私に手傷を負わせたのは、お前が初めてだ」

頬に、その特徴的な紅と同じ、紅い線を一筋引いたマジックが、ほんの少しだけ面白そうに告げる。ほんの僅かに覗いていた好奇心が、更に強くなった。そんな気がする。ぞくり、つといやな感覚が背筋を走る。

「幾ら敵とは言え、女性にけがをさせた事を誇るのはいかがかと思うけ

どね」

そんな感覚を拭い去る為に、さらなる皮肉を返す。

「……なに？」

一瞬、マジックが考え込む。至近距離で睨み合う。

「……そうか、確かに私は女だ。そうか、くく、ふはははは!!」

そして何かの結論に至ったのか、マジックは心底愉快だと言わんばかりに笑みを零す。

「何が可笑しいのかな？」

そんなマジックの様子が理解できず、気付けば聞いていた。

「ふ、少しばかり面白い事を思い付いただけだ。やれ、お前たち」

そう言うや、マジックは更なる機械兵を呼び出し、ノワールの下へと送り込む。

「な、まだ出るの!?!」

変身を解除させられ、数のに物を言わせ徐々に追い詰められていたノワールが悲鳴を上げる。ただでさえ、エレメントドラゴンとの戦いで消耗していた。戦い自体は圧勝に終わったが、それでも消費した魔力やシエアは馬鹿にならなかったと思う。ただでさえ本調子でないノワールは、予想外の連戦に思った以上に消耗しているようであった。

「このっ、数が多すぎる。いい加減にしなさい!」

「ノワール、魔法剣!」

——天魔・轟雷

そんなノワールの様子を見たら、助けないわけにはいかない。瞬時に魔力を収束し、魔の雷を解き放つ。紫電が網のように広がり、ノワールを追い詰めていた機械兵達に襲い掛かった。その身に紫電を受けた機械兵たちは、黒煙を上げ、機能を停止する。

「これなら……サンダーエッジ! 助かった……、って危ない!」

「お前ならば、仲間を助けようとするだろうな」

マジックと至近距離で戦っていた。そんな状態でノワールの援護をすれば、当然隙が出来る。マジックがその間隙を突くのも当然だった。

「解っているよ」

「だけど、それぐらいは僕でも予想が出来る。だから、三度振り抜かれた刃が降り抜かれる場所を予測し迎撃した。」

「え?」

「だけど、僕が予想した衝撃が来る事は無かった。軽すぎる手応えが両手に残っただけであった。僕が振り抜いた刃は、マジックが大鎌から手を離れた事により、軽すぎる手応えに止まる事もできずに、弧を描いていた。そして間を外したマジックが僕の懐に入り込む。」

「ユウ!」

「ノワールの悲鳴。不味い。マジックほどの敵に晒してしまった、致命的な隙にそう思う。だけど、思うだけでどうしようもできない。マジックの腕が僕の顔に伸びる。ソレをただ見つめていた。」

「貫うぞ、 四条優一」

「至近距離でマジックは妖艶に嗤い、告げる。命のやり取りをしていると言うのに、それは余りに不釣り合いな表情に思えた。動く事も出ずに、呆然と見つめていた。」

「——え、なあ!」

「そのまま、マジックの両手が僕の首にかかり、しな垂れかかってくる。あまりに予想外な行動に、完全に虚を突かれていた。そのままの状態で、マジックのプロセッサユニットが全力で稼働する。抗う事も出来ず、その場に押し倒されていた。」

「ぐっ」

「もろに背中から地に倒れたため、衝撃でSOCを取りこぼす。纏っていた魔力が霧散し、長釣丸の姿に戻ったのが感じ取れた。」

「ふふ、捕えたぞ四条優一」

「なにを言ってる……」

「僕の首をがっちり両腕で抱く様に拘束し、マジックは先ほどと同じ、妖艶な笑みを浮かべ告げる。何とか抜け出そうともがくが、完全に捕えられ、抜け出す事が出来そうになかった。そして、

「では、貫おうか」

「——んんっ!」

視界一面に、マジックの端正な顔が広がった。唇に暖かいものが押し付けられる。一瞬、何をされているのかが理解できなかった。マジックの行っている行為が理解できず、呆然と見つめる。

「な、な、な、なあ!？」

ノワールの驚きが遠く感じた。僕の体に覆いかぶさるように、心地の良い重みもたれ掛かり、女性特有の柔らかさが全身を包み込む。

「ななな、何してるのよ!？」

「ん、んんっ!？」

二度目のノワールの叫びに我に返った。口の中に暖かいものが入り込んできている。キス、されていた。僕の体をがちりと掴み押し倒したままの体制で、マジックは貪る様に舌を絡ませてくる。何とか抜け出そうと抵抗するも、プロセッサユニットを使い抑え込まれている所為もあり、びくともしない。

「これが口付け、か。成程、悪くは無い」

一度マジックは口を離し、何かに納得したように呟く。

「いきなり、何を……」

訳が分からなかった。何故僕はマジックに組み伏せられているのか。思考が追いつかない。

「存外気に入った。もう少しさせて貰うぞ」

「答えになつて……」

それ以上言う事が出来ない。再び押し付けられた唇から舌が入り込んで、悩まし気に絡みついて来る。そのままマジックは気の向くままに、唇を重ねて来た。それに抵抗できず、なされるままにされる。

「あああああ!？」

どれぐらいそうされていただろうか、一瞬にも数時間にも感じるが、突如上がったノワールの叫び声に意識が現実に戻される。

「はあはあ……マジック・ザ・ハード!？」

漸くすべての機械兵を倒したのだろうか、ノワールがマジックに向かい襲い掛かろうと距離を詰めているところだった。

「ん……、この位で良いか」

そんなノワールを横目で見ながら、マジックは零した。不意に全身



を包んでいた重みが無くなり、拘束が解除される。気付けば、覆いかぶさっていたマジックが、ノワールを迎撃する為に立ち上がった。

「貴女はここで死になさい！」

「貴様では無理だな」

そして、何事も無かったかのようにノワールの刃を受け止める。刃と刃がぶつかり合う音が鳴り響き、魔力と魔力がぶつかり合う。その様を呆然と見つめていた。やがて、

「きやあ!？」

「ノワール!？」

しのぎあいにも負けたノワールが吹き飛ばされてくる。全身に傷を作りながらこちらに向かって飛んできたノワールを咄嗟に受け止めていた。

「う、あ、ユウ……。ごめんね。友達なのに、守れなかった……」

目を開いたノワールが、途切れ途切れに言う。何も言い返す事ができず、ただノワールの手を握る事しかできなかつた。やがて限界を迎えたのか、ノワールは意識を手放した。

「……マジック。貴女は何の心算なのかな？」

「ふ、ただ欲しくなっただけだ。異界の魂が、四条優一がな」

長釣丸を手にし、もう一度SOCを構築する。先程よりも、強く正確に。そうで無ければ、目の前に居る赤の女神は倒せそうになかったから。

「欲しくなった？」

「私を傷付けたただ一人の人間。そんなお前が欲しくなった」

「そう」

再構築していたSOCを再び解き放った。異界の魂が持つ大剣。その蒼き刀身に夥しい魔力を迸らせ、その力を示していた。先程のものよりも遥かに高い再現率。今手にしているSOCは確かに強くなっていた。

「気持ち嬉しいけど、君はノワールを傷付けた。なら、僕の敵だよ」「ふ、そうだな」

SOCを構え告げる。先程よりも強い力を示していたが、その程度ではマジックの表情が変わる事は無い。淡々と此方を見詰めていた。

「今日はこの辺りでいいだろう」

構えなおし、踏み込もうとしたところでマジックは言った。黙って耳を傾ける。確かに先程よりは強くなっていたが、それでもマジックに勝てると言う確信は無かったから。

「四条優一。今よりも強くなれ。そうすれば……」

そう呟き、マジックは消えていった。マジックが何の心算であんな事をしたのか。マジックが消えた後も、そんな事を考えていた。

## 25話 それぞれの道

四条優一とノワールが依頼を受けマジックと交戦を行って居た頃、大陸の東にあるラスティションから北西に進んだ雪国の地で、別の戦いが行われていた。黒の女神とは別行動をとっていた女神候補生一行である。その集団のリーダーであるネプギアは、女神化し天空を縦横無尽に駆け巡りながら、その手に持つ強大な砲身を倒すべき敵に向け、狙いを定める。

「これならどうです！ M・P・B・L！」

ネプギアの宣言と共に、その白き銃剣の引き金を引き絞る。銃身が唸りをあげ、対峙する敵を破壊する為の弾丸が襲い掛かる。その光景を見据える敵、キラーマシンは両の手に戦斧を構え微動だにしない。

直撃。凄まじい爆音が鳴り響き、MPBLの着弾点を基点に、砂煙が舞った。

「直撃したはず、これなら——」

爆撃の衝撃に目を細めながらネプギアは呟く。敵は鉄の鎧を身に纏う機械の兵器だった。これまでに彼女の味方が様々な攻撃を行ってきたが、どれも有効なダメージを与えるには至っていなかった。普通の手段での攻撃では効果が無いと言うのならば、女神化すれば活路が見えるかもしれない。そう考えたネプギアは、キラーマシンに向かい、自分の出来る最も強い攻撃を試みたと言う訳だった。

そしてその結果が、MPBLが直撃する凄まじい爆音とその衝撃波だったと言う訳である。

「ネプギア、避けなさい！」

「え？」

辺りに舞う砂煙が収まるのを待たず、アイエフの叫び声がネプギアの耳に届いた。殆ど同時に、何か回るような奇妙な音が近付いてくる。ネプギアはアイエフの言葉の意味が解らず、素っ頓狂な声を零す。瞬間、凄まじく嫌な予感が背筋を走り抜けた。

「きゃー！」

「ボサツとしてんじやないわよー！」

「あうう、ごめんねユニちゃん」

ネプギアが本能的に危険を察知するも、キラーマシンの攻撃は既に彼女の目と鼻の先に来ていた。投擲された戦斧、その巨大な質量が回る音を辺りに響かせ、ネプギアに向かい一直線に進んでいたのである。あわやネプギアに直撃する。その一瞬前に、黒の女神候補生が彼女を無理やり押し出す形で回避に成功していた。四条優一から離れ、ネプギアたちと共に旅をする事に決めたユニであった。

「そんなの良いから！ 仲間だから助けるのは当然よ。そんな事よ、早くアイツを如何にかしないと」

間一髪のところでは助け出されたネプギアはユニに礼を告げる。そんなネプギアにユニは不機嫌そうに返すと、自身のプロセツサユニツトを展開し、キラーマシンに向け銃身を構える。その反応は以前からのユニと変わらない筈なのだが、どこか違っていた。

そんなユニをネプギアは嬉しそうに見詰めた。

ユニにとって、仲間と決めたネプギアを助ける事は特別な事ではなくなっていた。それは、以前自分がそうしてもらったから。四条優一と組んで仕事をしていた時に、助け合う事の重要性を学んでいたからこそ、ユニの態度からはどこか棘が抜けていたと言う訳であった。だから今のユニからは、ネプギアが以前に感じた刺々しさが抜けており、その変化がネプギアにとって嬉しくて仕方が無かった。

「……ってアンタ、何笑ってるのよ」

「えへへ、だって、ユニちゃんが助けてくれたんだもん。あのユニちゃんと肩を並べていられると思うと、嬉しくて仕方ないんだ」

自分を見詰める視線に気づいたユニは、視線だけをキラーマシンに定めたまま聞いていた。ネプギアの浮かべる笑みが、何処か四条優一の浮かべるものと同種のように思えたから。

「ちよ、アイツみたいなこと言わないでよ!?!」

「アイツ？ ……あ、四条さんの事?」

「そうよ！ まったく、アタシの周りに居る奴はどうしてこうお節介なのか」

屈託なく笑うネプギアに毒気を抜かれたユニはそう吐き捨てる。

別に彼女はネプギアの事を嫌っているわけでは無い。その素直になれない性格ゆえ、純粋な厚意を前にすると、自分の感情をうまく表現できず、素直になれないと言うだけの事であった。

「でも、厄介な敵ね。ネプギアのMPBLでも通用しないのなら、アタシのXMBも通用しない可能性もある」

「そうだね。前みたいに四条さんがいて補助魔法を掛けてくれたらいいけるかもしれないけど、今のままじゃ通用しないかも」

敵を見据えたまま考えるユニの言葉にネプギアも同意する。攻撃力と言う点では、二人にそれほど大きな差は無かった。以前ぶつかり合った時、お互いの力がある程度把握していたからだ。だからこそ二人には解った。普通の手段で戦ったとしても、キラーマシンには通用しない。

「居ない人間の事を考えても仕方が無いわよ。それより今は、現状でコイツをどうするかよ」

「そう、だよ。幸いMPBLも全く効いていないわけじゃないし。ジリ貧だけど、二人なら押し切れるかもしれないよ」

結局二人して打開策が浮かばず、効果は薄い物理攻撃で押し切る事にする。後方に居るアイエフの魔法を用いれば有効なダメージを与えられるかもしれないが、その為にはキラーマシンの間合いに入る必要があった。二人のような女神候補生ならばいざ知らず、人間のアイエフがキラーマシンの攻撃を受けたらひとたまりもない。そんな命の危険を冒す方法など、二人の女神候補生はとうとうとは思わなかった。

「そうだけど、もう少しスマートに勝ちたいわね。こんな時、お姉ちゃんやユウならどう戦うんだろ。……つと、駄目よユニ。こんな後ろ向きじゃ、何時まで経っても成長できない！」

とはいえ、自分たちの取った案が良案でない事は、実行しなくとも解る。こんな時、自分の尊敬する姉や、自分を支えてくれた友達ならばどうするだろうか。そんな事を考えたところで、ユニは軽く首を振る。また、頼ろうとしていた。それではダメだ、ユニは自分にそう言い聞かせる。それでは、何時まで経っても強くなれないから。

「ユウなら……そっか、それにお姉ちゃんなら」

「どうしたのユニちゃん？」

不意に、ユニが声を上げた。ネプギアがユニを見詰めた。何かを考え込んでいたユニの表情は消え、ネプギアの知る、自身の満ちた表情をしていた。

「良い事思いついたの。少しだけ持ちこたえて」

「……え、あ、うん！」

不思議そうに頷くネプギアにキラーマシンを任せ、XMBにシエアの力を収束する。

「なんだか解らないけど、ユニちゃんが言うなら止めて見せなきゃ！

ミラージュダンス!!」

ユニには何か考えがあるのだろう。そう思ったネプギアは、ユニが何かをできるように時間を稼ぐために白き銃剣を振るう。大きな効果は期待できないが、まったく効果が無い訳ではなかった。間を置かず斬り続ける事で、脅威と認識したキラーマシンはネプギアに狙いを定める。

「相手が機械なら、物理攻撃より魔法が効くかもしれない。けど、アタシはそこまで強い魔法は使えない。だったら——」

ユニの頭によぎったのは三つの姿だった。一つは彼女の姉が用いる魔法剣。剣と魔法の融合だった。そして、もう一つは紫電。四条優一の操る雷の魔法。そして最後に、剣を読み取り構築する能力。その三つからヒントを得ていた。

「二つ合わせればいい。一つで足りないなら、二つで強くなれば良いの。アイツが言ってくれたみたいに……!」

女神の持つ武器は、シエアで構成されていた。それはXMBの弾丸も例外では無い。シエアとは人間たちの信仰の力であり、決まった形を持つモノでは無かった。そんなものをユニを含める女神達は武器として構築し、用いていた。ならば、ある程度の融通は利くはずである。

「——できた!。これが新しい力、エレメンタルバレット!」

そう考えたユニは、シエアで構築された弾丸を、四条優一が剣を再

構築する様に、作り直す事に成功していた。それは雷の力を秘めた弾丸。ユニが見た雷魔法、紫電の力を宿した弾丸であった。

「ネプギア、離れて！」

「うん、ユニちゃん！」

キラーマシンと戦っていたネプギアが、ユニの言葉に即座に離脱する。直後に、ズドンと重厚な音が数発鳴り響いた。キラーマシンに直撃した弾丸が秘められた魔法の力を解き放つ。

「ギギ、ギツ!？」

エレメンタルバレット。魔法の力を秘めた弾丸であった。それに直撃した瞬間、キラーマシンの全身を紫電が駆け抜ける。そしてキラーマシンから、断末魔の様な声が上がり地に墜ちると、全身から煙を上げ沈黙した。

「……良かった」

自身の作り出した新たな力が強敵を打倒する事が出来た事に、ユニは安堵する。元来ユニは精神的に強くない。だから、失敗したらどうしようと言うプレッシャーに吞まれかけていたのである。その為成功したことに安堵したと言う訳であった。

「やったよ、ユニちゃん!？」

「わぶっ、ちよ、ネプギア、いきなり何すんのよ!？」

そんなユニにネプギアは抱き着いてくる。いきなりの事に焦るユニ。

「だって、あんなに強かった敵が簡単に倒せたんだよ！ 凄いよ！」

「と、当然だわ。アタシなら……ううん、アタシたち二人なら、当然の結果なんだから」

ネプギア的笑顔を見ると、ユニは自然とそう言う事が出来ていた。仲間と一緒に言うのはやっぱり心強いし、暖かい。ユニは喜ぶネプギアを宥めながら、そんな事を思っていた。

「異界の魂、か」

——月光聖の祈り

抱きかかえたノワールの治療を施しながら、マジックの言葉を思い起こす。強くなれ。そう言い残し、マジックは消えた。倒そうと思えばぼくたちを倒す事も出来たのに、それだけ言うとは帰って行った。見逃されたと言う事だった。

それについて不思議に思うけど、それ以上に困った事になっていった。ノワールに僕が異界の魂であることを知られてしまった。できれば知られたくは無事だったのだけど、知られてしまった以上は隠す事が出来るとは思えなかった。どうしたものだろうか。幾分か安らいだ表情のノワールを背負い、そんな事を考える。

「女神に犯罪組織、そして魔剣か。まったく、次から次へと考える事が多くて嫌になるよ」

ノワールの暖かさを背に感じながら、溜息を吐く。女神にブレイブの勧誘、命を奉げる事で強くなる魔剣。この短期間で様々な事を詰め込まれていた。どれも真剣に考えなくてはいけないと思う。

「何を選ぶのが正解なのかな……」

異界の魂として、女神の脅威を排除したとすれば、僕は間違いなく死ぬ。だからと言って、犯罪組織に入ればユニ君やノワールを初めとする女神たちと戦う事になる。それは、できる事ならしたくない事だった。友達に刃を向けると言う事は、僕はしたくは無いから。それに、この世界を壊したい訳でも無い。なんだかんだ言っていて、一度死んでいた僕の心を癒してくれたのはこの世界だから。だから、女神たちを本気で恨むと言う事もできそうになかった。

ならば、老人の言っていた魔剣と言う選択肢もある。命を奉げる事で強くなる魔剣。ソレを僕が用いれば、未来を変える事すらも可能かもしれないと老人は言っていた。本当の事ならば、是が非でも選ぶところなのだろうけども、どこか、嫌な予感がした。何がどうとは言えないけれど、それは選んではいけない気がする。敢えて言うならば、第六感的なモノの警告。なにより、命を奉げる剣だった。そもそも今の僕に命と言うモノはあるのだろうか。それだって定かでは無い。

いったいどの道を選ぶのが正解なのか。老人が言ったように、悔い



が残らない未来はどうすれば手に入れる事が出来るのか。既に一つの答えが見えている間を考え続ける。

「ん、あ……」

どうすればいいのか。そんな事を考えていると、背中の方から随分と可愛らしい声が聞こえた。どうやら背負っていた女神さまが目覚めたようである。背中から心地の良い重みを感じつつ頭を振る。考えても正解の出ない間をしていた。気持ちの切り替えが必要だった。

「……は……」

「起きたようだね、ノワール」

「……え？ ユウ？」

「そうだよ」

僕の言葉にぼんやりと零すノワールに安堵の笑みが浮かぶ。ノワールは本調子が無いのにも拘らず、僕を助けるためにマジックに挑みかかっていた。四人で戦っても勝てなかった相手なのにも拘らず。それなのにただ一人で立ち向かってくれていた。それが嬉しくない筈が無い。そんなノワールが無事だったことに安心していた。

「私、どうなって……」

「マジックに負けたよ。それで、見逃されたんだ」

「あ……、そっか、あの時マジックに立ち向かってそれで……っ!？」

少しずつ思い出すようにノワールが言葉を紡いでいると、不意に痛みが走ったのか、小さな悲鳴を上げる。

「大丈夫？」

「わ、私は大丈夫。……打ち身が酷いだけみたいだから」

「そっか」

その場でノワールを下ろそうとしたところで、止められる。魔法では癒しきれなかった処があったのかと思っただけど、どうやらそうでは無い様だ。ノワールには悪いけど、少し安心した。友達の怪我が大したモノじゃなかったから。

「ごめんね。あんなに大見得切ったのに、貴方の事守れなかった……」

そのまま歩いてみると、ノワールを背負っていた為、首元に回されていた彼女の手に少しだけ力が籠められる。肩越しだけど、ノワール

が震えているのが解った。

「気にしていないよ。そんな事よりノワールが無事でよかった」

それでも僕にとって、友達が生きていてくれた事に比べれば些細な事だった。

「私が気にするのよ！ どうしてあなたはそんなに優しいのよ……。私達をもっと恨んでくれていいのに、恨まないといけない筈なのに！」

ギョツと僕の首元に回した腕に力を籠め、ノワールが嗚咽を上げ始める。行き成りの事に、その場に立ち止まってしまった。

「っ、貴方を斬った時だってそう。貴方は私の妹を助けてくれただけなのにっ、私はそんなあなたに襲い掛かった。……、恨まれても文句を言えない事をしたのに、貴方は許してくれた！」

回された弱弱しい腕の感触だけが、ノワールの後悔の深さを伝えている。泣きじゃくるノワールに、何も言っておきながら、反対に守ってもらった。ユウ

「今回だって守ると言っておきながら、反対に守ってもらった。ユウがピンチになったのに、私は最後の最後にやっと助け出す事しかできなかった。」

マジックにとらえられたときの事を思い出す。ノワールは必死に僕を助けてくれた。その気持ちだけで充分だった。

「なにより、私は貴方をこの世界に呼び出した張本人なのに……、関係の無い世界に無理やり呼び出して戦わせてしまったのに……、なんでそんなに優しくしてくれるのよ！ なんて、自分の事を蔑にしてそんなに優しくできるのよ……」

ノワールはしゃくりを上げる。異界の魂の事を知られてしまっていた。彼女が僕を呼び出した張本人である。確かに恨む気持ちが無い訳では無い。だけど、

「好きだからだよ」

「——え？」

僕はこの世界が好きだったから。異界の魂召喚で失ったものは大きい。元の世界での絆だったり、財産、何より未来を失っていた。だけど、この世界に来たおかげで僕は生き返る事が出来た。体は死んだ

けど、心は生き返る事が出来た。それは、女神が僕をこの世界に呼び出したおかげだからだった。この世界に来て、色々なモノも与えられた。気付けば、僕はこの世界が好きになっていた。だから、本気で恨む事は出来なかった。

「まだまだ僕が知っている事なんか少ないけど、僕はこの世界が好きになっちゃったから。だから、この世界に来たことを全てを否定はしないよ。確かに嫌な事はあったけど、それ以上に良い事もあった」

他にも、ノワールには言う事はしないけど、見える事の無い目が見えた。動くはずの無い足が動いた。死んでいた心がもう一度生きる事を肯定した。それは、異界の魂として召喚されたから。

「……良い事？」

「そうだよ。ユニ君をはじめとするラスティションの人たちに出会えた。ネプギアさんたち女神助ける事を目的とする人たちにも出会った。僕の世界とは異なる世界で生きている人たちに出会えた。なにより」

そこまで言い、一度言葉をきった。流石の僕も、正面切つて言うのは少しばかり気恥ずかしかったから。だけど、泣いている友達が泣き止むためなら、我慢できない恥ずかしさでもない。

「ノワールとも友達になれたからね」

「わ、わたしも……？」

ノワールの驚いたような声が聞こえた。ソレを意図的に無視して話を続ける。だって、気恥ずかしいから。

「色々なモノも与えられたから、悪い事じゃなかったと思えるからね。だから、僕はこの世界が好きなんだよ。そう思えるから、僕はこの世界の事を、友達であるノワールの事も大事にできるんだと思う」

一息に言っていた。偽りない僕の本心。ソレをノワールには伝えていた。

「やっぱり、優しいわよ……」

僕の言葉を最後まで聞いたノワールは、ぽつりと呟いた。

「そうかな」

「そうよ。私の友達は、馬鹿みたいに優しいのよ……」

もう一度、首元に回された手に力が籠められる。先程と同じ動作だけど、声音が驚くほど違っていた。先程までは泣きじやくっていたが、今はどこか嬉しそうな響きが宿っていた。

「今は私の顔を見ちやダメだからね」

「この態勢じゃ見れない」

「それでも、よ。……ありがとう、ユウ。私たちの選んだのが、そして私の友達になってくれたのが貴方で本当に良かった」

「どういたしまして」

短く返事をし、ノワールを背負ったまま歩を進める。お互い言葉は無かったけど、気まずいものでは無かった。ノワールには異界の魂であることを知られてしまったけど、だからこそ本当の友達に近付けた。そんな気がした。

## 26話 やさしさの理由

「ごめんね、待たせちゃったわね」

「それ程待つてないから気にしなくていいよ。それよりどうだった？」

「ええ、依頼は完了よ。被害は出ちゃって直ぐに使えるようにはならないけど、復旧を最優先で進める予定よ」

女神の依頼を完遂した事で、ギルドと依頼人に報告に向かっていたノワールが此方に駆け寄ってくる。マジックとの戦いがあり、成功したと言う気は全くしないのだけれども、依頼内容としてはエレメントドラゴンの撃破だった為、完了していると言う事で訳だ。

今回の依頼をこなした事により、国道にあつた脅威を取り除く事は出来ただけけれども、状況が直ぐに好転すると言う訳では無かった。エレメントドラゴンとのぶつかり合いや、マジックとの交戦の余波により、国道には大きな被害が出てしまい、暫くはまともに機能しそうになかった。そう言う意味では失敗したかなって思ったのだけれども、元々エレメントドラゴンの出現により封鎖されてしまっていたらしく、直ぐには使えないとは言え、本来無くなっていた道が使える兆しが見えただけでも大きな事と言う訳だった。

「それじゃ、後は帰るだけかな？」

「ええ、そうね。あ……っ！」

僕の言葉に、一度は頷いたノワールが何かを思い出したように声を上げる。

「ん、何かあつたっけ？」

「あの、その……。ううん、何でもないわ」

どこことなく歯切れが悪いノワールを見て、不意に思い出す。そう言えば、この依頼が終わったらノワールとお茶をすと言う約束をしていた。その事を言っているのかもしれない。とは言え、あんな事があつた後だ。僕はもとより、ノワールだってかなり疲れている。正直に言うとうと、サツサと帰って休みたいと言うのが本音だった。

「なら、一旦帰ろうか。今回ばっかりは色々と疲れたよ」

「……そうね。ホント、色々あったものね。一緒に来てくれて、ありがとう。私一人でマジックに遭遇していたら、きつと勝てなかった」  
ノワールは少し沈んだ面持ちでそう呟く。マジックに負けた事が余程堪えたのか、言葉に覇気が感じられない。落ち込んでいると言うのがヒシヒシと伝わってくる。

「ノワールは、ラストイションまでどうやって帰るつもり？」

「え……？　そうね、後は帰ってケイに報告するだけだから、女神化して飛んでいくのが早いかしら」

少しばかり話を変える。ノワールは少し考え込むと、そう答えてくれた。ノワールの表情を見詰める。落ち込んでいると言うのもあるけど、疲れているのが僕の眼にも見て取れた。傷の治療を施したとはいえ、本調子でないのにマジックと正面から戦っていた。それもエレメントドラゴンと戦った直後に。万全であったとしても、辛い戦いだったと思う。それに加えノワールは本調子でなかった。その消耗は、本人が自覚しているよりも大きいんじゃないだろうか。

「ストップ。流石にそれはダメだよ」

「え、なんでかしら？」

「それはそうだよ。それじゃ、僕と一緒に来た意味が無いしね」

直ぐに帰ろうと言うノワールを一度止める。確かに彼女が変身して全力で飛べば、何よりも早く目的地にはつけるだろう。けど、正直今はそこまでする必要はない。教祖であるケイさんへの報告も、簡易なモノなら既に終わっている筈だろう。

「それはそうだけど……、まだ他にもしなきゃいけない仕事があるから……」

「それは無理をしてまでしなきゃいけない程の事かな？」

「無理はしてないわよ！　そこまで急ぐ必要がある訳じゃないけど」

渋るノワールに少しばかり溜息が零れる。頑張るのは良い事だけど、正直頑張り過ぎだった。体の怪我こそ治っているけど、精神的な負担までは取ってあげられない。少しばかり目の前の女の子は頑張りすぎて、疲れ切っている様に見える。

「なら、一緒に帰るぐらいはしてくれても良いんじゃないかな。友達

だしね」

「う、た、確かに友達だけど……、あうう。め、女神として困っている人の為にもっと頑張らなきゃ」

友達って言う言葉に反応してノワールは揺れるけど、自分の事より女神としての仕事を優先しようとする。正直言うところ、そこまで頑張ろうとするノワールは凄いなと思う。自分が疲れていても、自分を信じてくれる人の為に働こうとしている気持ちは尊い。だけど、物事には限度がある。それで倒れてしまつては意味が無い。

「なら、僕も助けてほしいな。というか、僕が疲れてゆっくり帰りたい」

「……もう、仕方ないわね」

「うん、無理言つてごめんね」

「良いわよ、別に」

結局、ノワールにはこう言うのが一番効果があった。自分の為じゃなく、他人の為。そう言う形なら頷いてくれた。

「とりあえず、電車に乗ろうか」

「ええ、そうね」

そう言う事で、無理をするノワールを何とか休ませるために、電車に乗る事にする。

「あ、一段落ついたら、何時かお茶でもしようか」

最後にそう付け加える。流石に暫くはゆっくりしたい。だからすぐには無理だけど、日を改めて行くのなら問題は無かった。

「……え、ええ。……覚えていてくれたのね」

「友達との約束だからね」

「そ、そう。友達だから。うん、ありがとう。何時か、必ず行きましよう」

小さくノワールがはにかむ。今回はいけなかったけど、改めてノワールと約束するのだった。

「ん——」

肩にもたれ掛かる重みに、少しばかり笑みが零れる。予想通り、頑張り屋のお姉さんは疲れ切っていたようであった。

電車の席に二人で腰を下ろし、ラステイションまでの道を進んでいた。ガタンゴトンと一定のリズムで鳴り響く電車の進む音に耳を傾けつつ、そんな事を考える。電車に乗った直後はノワールと他愛の無い話をしていただけでも、思っていた通りかなり疲れがたまっていたのか、次第に口数が少なくなり、今では僕の方にもたれ掛かり、あどけない顔で眠っていた。その寝顔を覗き見る。眠っている女の子の表情を見るのはあんまり褒められた事では無いのだろうけども、少しぐらいは許してほしい。穏やかな表情で眠る姿は、ただの女の子にしか見えない。

「こうしてみると姉妹だけあって、本当によく似てる」

以前にギョウカイ墓場でユニ君の寝顔も見ていた。流石に二人は姉妹だけあって、眠っている時の表情も良く似ている。中々素直になれない不器用さや、頑張り屋などころなど、似ているところは多くあった。

「女神と言っても、女の子だよ」

ラステイションの女神と女神候補生。二人の事を思い浮かべる。二人とも女神と言うだけあって、人以上に強いけど、だからこそ脆いところもあるように思えた。強いからこそ、脆くもある。二人ともそんな儂さみたいなものを感じた。誰かが支えてあげなきゃいけない。漠然とだけど、そう思える。

「ゆっくり、進んで行くと良いよ。君たちにはその時間が沢山あるんだからさ……」

幸せそうに眠るノワールにそつと告げる。今すぐには無理でも、ゆっくり変わっていけば良い。本当の友達と言える人たちを、支えてくれる人を増やしていけば良いのだ。この子はもつと強くなれる。そうすれば、僕がこんな心配をする必要もなくなり、悩む事も無い。それは、難しい事では無かった。彼女にはその時間がある。だからこそ、今は無理だったとしても、一步一步進んで行けばいい。信じられる人も探せばいい。未来をゆっくり進めていけば良いだけなのだから。



う。

それが、少しだけ羨ましく思えてしまった。だけど、その気持ちを  
見なかった事する。だって、意味が無いから。そんな複雑な思いを抱  
えながら、ただ電車が進む音色に耳を傾けていた。

「いやー、おもしろーモンを見せて貰ったよ！」

ラストイシヨンの教会。ノワールがケイさんに詳しい話をしてい  
る間、教会の客間に通されていた時の事だった。流石に今回ばかりは  
僕も疲れが溜っていた為、備え付きのソファにもたれ掛かり、うとう  
とと心地の良いまどろみの中を彷徨っていたところで、何時もながら  
に唐突な来訪者の声に意識が覚醒する。何時の間に現れたのだろう  
か、気付けばクロワールが直ぐ傍らに本を浮かし腰かけている。

「また、出会い頭に訳の分からない事を言うね」

「お？ ユーイチもどんどん言うようになってきたじゃねーか！ あ  
はは、そっちの方が俺は好きだよ！ 仲が良いみてーだしな」

「君の場合は本気で言っているのか冗談なのか判断に困る」

相変わらず、何の目的に出来ているのかは解らないけど、どうせこ  
の子の相手をするに疲れるんだろうなっと思うと、気が滅入ってく  
る。機嫌が良さそうに、にんまりとクロワールは笑うと、僕を見詰め  
ている。

「まさか、あそこでマジックの奴があんな行動に出るとは俺も予想が  
付かなかったからな!! あのおつかねー女がまさかユーイチの事を  
欲しいなんて言うとはなあ。一体どう言う事したらああなんだよ」  
「僕が聞きたいよ。正直あれは、どう言う思惑があつてあんな事をし  
たのか……」

マジックと戦っていた時に、唐突にされた事を思い出す。

「まーまー、難しく考えなくてもいいんじゃないの？ 熱い告白を受  
けたとでもおもつときゃいーよ。しかし、あの時の黒の女神の顔つた  
ら、最高だったわ」

「あんまり思い出したくない」

「えー、良いじゃん！ あんな訳の分かんねーシーン、早々ねーぞ？」  
「あんなのが頻繁にあったら身が持たないって」

思い出しながら腹を抱えるクロワールに、ムツとしながら答える。  
確かに訳の分からない状況ではあったけど、笑い転げる様な場面では無かったと思う。

「くくく、いや、わりーわりー。しかし、あの子の女神との会話がまた傑作だったしな」

「ノワールとの会話が？」

「ああ、そーだよ。とんだ茶番を見せて貰ったね」

散々笑った後の所為か、少しばかり落ち着いた様子でクロワールは続ける。

「だって、黒の女神は言ったんだぜ。言う事欠いて、シジョーユーイチが優しいだって！ あはは、おかし過ぎて腹が痛い。言う事欠いて、優しいはねーよ！ ユーイチが優しい？ 全然解ってねーよ」

クロワールは再び腹を抱えて笑い出す。それは、ノワールが僕を見て言った言葉の事だった。僕の事を見て、優しいと言ったあの言葉。ソレを聞いたクロワールは、茶番だと一蹴する。

「どういう事かな？」

「ああ、ソレを俺の口から言わすのか？」

と言う返してみると、クロワールは目尻に涙を滲ましたままそう聞き返してくる。目で促す。

「まあいいよ。黒の女神はな、お前が優しいと本気で思い込んでやがる。ユーイチが異界の魂であると言う事を知りながら、本当に大切な事は何も知らないで、ただの優しさだけでお前が女神に優しくしてやっているとやってやがんだからな。既に四糸優一の未来は無い。お前の事を語る上で、この最大の情報を知らされていない。にも拘らず、上辺だけの優しさに触れて喜んでいやがる。言うならば、道化だなドーキ。ピエロみてーなもんだよ。それで友達って言うんだ、笑わしてくれよ」

クロワールはケラケラと笑いながら僕に語り掛ける。その言葉は

悪意に満ちているように聞こえるけど、実際のところそう言う事は無い。全てが事実であり、本当の事だから。悪意に見せかけた、忠告。何故だろうか、クロワールの言葉に善意など感じ無い筈なのに、そんな事を思ってしまった。

「それでも友達だよ。仲が良いからと言って、何でもかんでも話すのが友達じゃないさ。言うべき事と言わざるべき事。その二つを取捨選択する必要もある」

「だから、たとえ相手が知らなくても構わねーってか？」

クロワールが僕の言葉に試すように聞き返してくる。それは、難しい質問では無かった。

「そうだよ」

即答する。話すべき事と、話すべきでは無い事。いくら友達とは言え、その線引きはあるのだから。

「くく、あはははは!! お前ならそー言うって思ってたよ。だからお前はおもしろーんだよ。正常に見えて、適度に壊れてやがんだ」

「……どういう意味かな？」

クロワールの言葉がいやに耳に残った。

「これまで見ていて気付いたんだよ、ユーイチ。お前はな、誰に対しても優しいんだ」

「それが何かおかしい事なのかな？」

「おかしいに決まってるんだろ。何で自分が殺されかかった奴を簡単に許せんだよ。自分を殺した世界を許せるんだよ。確かにお前が前に言った言葉もその理由かも知んねーけどな、それ以上にお前は諦めてんだよ、だから優しいんだ」

「諦める？ 何をかな」

乱暴でありながら、クロワールの言葉は何故か胸を衝く。

「自分をだよ」

「……」

「お前は自分の事を考えてねーから、他人に優しいんだよ。いや、ちげーな。自分が無いものだから、他人に渡すしかねーんだよ。だから

優しい。けどな、全てわかっている俺からいわせりや、それは優しきじゃねーよ。ただの自棄だ」

クロワールの紡ぐ言葉に、反論すべき言葉が見当たらない。言い返すべき言葉が、口を出てこなかった。だって、既に死んでいるから。四条優一は、既に終わっているから。今この場において、僕は確かに存在しているけど、確実に終わる事が確定しているから。だから、クロワールに言い返す事が出来なかった。

「だから言わせてもらうぜ、ユーイチ。お前はここのままで良いのか?」  
「……」

構わない、と即答する事は出来なかった。確かに、クロワールの言う事は全て当たっていたから。

「まあ、別に今すぐ答えを出す必要はねーけどよ、本気でどうするか考えておいた方がいーぜ」

「クロワール」

「なんだよ」

「どう言う心算?」

「何がだよ?」

質問に答える事は出来なかったけど、そう聞いていた。だってクロワールの言う事を総合すると、そうとしか思えなかったから。

「君は、僕の事を心配してくれているのかな?」

「——っちつげよ! なんでそーなんだよ!」

口が悪く、容赦なく言葉を浴びせて来たけど、最後の最後までどうするか問いかけてきた。それは、どこか見ないようにしてきた現状を、僕に正しく認識させるためだと思えなかった。

「そうなのかな?」

「たっりめーだろ! 俺は面白ければいいんだっつってんだろーが!

まったく、どういう結末に辿り着こうが、俺は最後の最後まで見るわけなんだから、少しでもおもしろー展開になるように動いてんだよ。詰まんねー話は見たくねーだけだ。それだけだかな!」

「あーうん」

クロワールの言葉に苦笑が浮かぶ。その物言いがどこかで見たよ

うな感じだったから。

「クソ、なんか変な誤解をされて胸糞悪い！ もう帰る！」

「そっか」

「んじやーな、またくるから、覚えとけよ！」

「やっぱり来るんだ。また、ね……」

そう言いクロワールは消えていった。さて、本当にどうすべきなのか。その小さな後姿が消えていった場所を見詰めながら考える。どう考えても、最終的には心配されているとしか思えなかった。口の悪い小さな友達に、これ以上心配させてしまうような事はできそうにない。真剣に考えなければいけない。そう思った。

## 27話 一息

異界の魂。僕がこの世界に呼び出された事によって、そう呼ばれていた。召喚の過程により、力と知識を得る。それによって、人ならざるモノと言えるほどの存在になるのが、異界の魂召喚の儀式だった。だけど、僕の場合は少し事象が違っている。その儀式と言うのが、僕の呼び出された世界に本来無いものだったから。その術が、世界の行く末を見る黒の妖精クロワールによって、もたらされていた。どうやったのかは解らないけど、クロワールによってこの世界に本来ある筈の無い術式がもたらされ、その術を見つけた史書であるイストワールさんによって女神に伝えられる。そしてその術を用いて呼び出されたのが、僕と言う訳であった。

異界の魂召喚の儀式。本来この世界には無く、別の世界に僕のいたチキユウから人を呼び出す術だった。そしてその術を用いた事で、四条優一は、一度本来辿り着くはずの世界に呼び出された後、ゲームギョウ界に呼び出されることになった。

そして、呼び出された場所が最悪だった。二つ目の世界を超える際、呼び出された地は本来生きた人間が立ち寄れる場所では無かった。ゲームギョウ界で死した者達が辿り着く地、ギョウカイ墓場。死者が辿り着く、隔離された墓場。その地に僕は呼び出されていた。

ギョウカイ墓場には、特別な方法で道を作る事さえできれば生きた人間でも立ち寄る事はできるが、異界の魂召喚の儀式にそのような術は無い。だけど、女神によって行われた儀式は成功してしまった。ならば、その法則にのっとり、呼び出さなくてはならない。生きた人間が呼び出せない場所なら、生きていなければ良い。身体が世界を越えられないのなら、身体は無くとも良い。肉体を別の世界に置き去りにし、魂だけを呼び出し本来の体を放棄させ、仮初の体をシェアによって構築し与える。それが、ゲームギョウ界の選んだ方法だったと言う訳だ。

つまり、僕が、四条優一が女神の手でこの世界に呼び出された時点で結末が決まってしまったと言う事だった。

「難しい顔をしているね。何か悩み事かな？」

「そんなところですね。この世界に来て、色々な事がありました。女神たちの事、犯罪組織の事、何より僕自身の事。思い返せば、今日みたいにゆっくりと考える余裕が無かった、かな」

対面に座るケイさんの言葉に頷く。ノワールに泣かれ、イストワールさんも泣かせてしまい、クロワールに何度も言われて来た事。それは僕自身の問題であり、既に一つの結論が出ていると言っても良い問題だった。

異界の魂召喚によって、四条優一は既に死んでいる。それは、動かす様の無い事実。どう足掻いても否定できない現実だった。

「思い返せば君にはユニの事と言いついノワールの事と言いつ、本当にお世話になったね」

「そんな事はないよ。僕だって、あの二人には良くしてもらってるからね。ノワールとは出会いこそ壊滅的だったけど、今では友達になれたしね」

「ふふ、そうだね。ユニ以上に不器用なあのノワールを手懐けるとはどうやったのか」

「あの子は女神だからさ、他人に頼る方法が解らなかつただけだよ。距離を測りかねている女の子に歩み寄つただけかな」

ケイさんに話しても、と言うよりは誰に話しても何とかなる類の悩みでは無かつた。既に結果が出ていて、覆す事はできないから。未来の問題では無く、過去の既に終わってしまった問題だった。どう考えでも変える事の出来ない結論。それを考え続けていた。打開策などある訳は無い。考えれば考える程、残酷な事実を突きつけられ、気が滅入ってくる。そんな僕の様子を敏感に察したのか、ケイさんは直ぐに話題を変えた。

「それが、あの子の友達になるといつた訳だね。まさか、ノワールが自らお菓子作りをするなんて言い出すとは、流石の僕も予想が出来なかつたよ。しかし、この歓迎っぷりは少し違うかな」

「だよ。正直言つて、僕もそう思うよ。これは何と言うか……」

僕とケイさんが座っているのは、ノワールに宛がわれた部屋の一つ

だった。裝飾されたテーブルに、ラスティションの街並みが一望できるバルコニー、優雅なひと時を過ごすために作られた洒落た空間だった。何と言うか、凄く女の子らしい感じで、若干居心地が悪い気がするのには僕が男だからだと思ふ。

「ふんふんふんふんふん、ふふ。ふんふん——」

そして隣の部屋で鼻歌交じりにお菓子を作る女神さまに、ケイさんと二人苦笑が浮かんだ。だって、どう考えてもこれは、友達が来たから軽くお茶をしようと言う感じでは無かった。気合が入り過ぎていく。これじゃまるで、

「ふふ、あのノワールが恋人でも連れて来たみたいだね」

「ケイさん。例え思ってもそう言う事は言わない。ノワールの事だから、やり過ぎてるだけだろうからね」

涼し気な笑みを浮かべ、さらりと言うケイさん。僕もそう思っていたけど、いざ言葉にされると何となく気恥ずかしい。とは言えあのノワールである。本人の口振りから、女神であり友達と言える相手が殆どいかなかったようだ。その為、加減が解ってないだけなのだろう。「意外と本気だったりしてね」

ケイさんはにっこりと意地の悪い笑みを浮かべた。

「茶化さないで欲しいなあ」

それに苦笑しながら返す。相手はあのノワールだ。ラスティションの女神であり、ユニ君の自慢の姉。自分に厳しく在り、他人に頼るのが下手で不器用だけど、誰よりも優しいお姉さんだった。僕は、そんなノワールの友達でしかないし、それ以上を望むつもりも無い。

「茶化しているわけでは無いんだけどね。ノワールが不器用つて言うのもあるけど、あの子は女神だからね。そう簡単に誰かを好きになる訳には行かないんだよ。ユニ以外はあの子を絶対に置いていく事になるからね。だからこそ、殻に籠っていた。だけど、君はノワールの隣に立つ事が出来た」

「ああ、なるほど」

ケイさんの言葉に納得する。確かに女神ならば人と同じ時間を生きる訳でも無いのだろう。笑みを浮かべながら語るケイさんの瞳は、



どこか憂いている様に見える。

「そんな君なら……」

「尚の事、駄目ですよ。僕には先がありませんからね」

ケイさんの言葉を遮り、言った。

「それに、僕はきつかけを与えただけです。あの子なら、直ぐに友達を増やせますよ。そうすれば、何れ女神と言えども、好きな人の一人や二人現れるよ。ノワールは女神だけど、女神である以前に女の子なんだから」

「そうだね、ノワールも女の子だ。なら、好きな相手の一人や二人現れるだろう。……やはり君は苦しんでいるようだね。ノワールやユニの前では笑っているけど、今回話せて良く解ったよ」

最後にケイさんがそう言い、思わず目を見開いた。つまり今回の話は、ノワールの事と思わせておきながら、僕の本心を引き出す事だったから。

「相変わらず人が悪い」

「ふふ、良く言われるよ」

僕の皮肉もどこ吹く風で受け流していた。本当に食えない人だ。

「四条君」

「なにかな？」

「あの子たちには言えないだろうけど、愚痴ぐらいならいつでも聞くよ。ボクにだって、それぐらいはできる」

「……ありがとうございます」

真摯な言葉に、上手く答える事が出来なかった。けど、相談できる相手がいる。それだけでも、何処か気が楽になったような気がした。

「待たせたわね、ユウ。ついでにケイも」

「やれやれ、僕は四条君のついでか」

それからケイさんと他愛の話をしていると、フリフリの可愛らしいエプロンに身を包んだノワールが人数分のお菓子と飲み物を持って

此方に来た。にっこりと柔らかな笑みを浮かべたノワールに、苦笑しながらケイさんは言った。

「だって、ケイはラスティシヨンの教祖で、いわば身内じゃない。ユウと違って、態々おもてなしする必要も無いわよ」

「まったくだね。なら、邪魔しないうちにボクはお暇させて貰おうかな。ノワール。お客様に失礼の無いようにね」

ケイさんはノワールに軽口を言いながら、器を受け取ると退出していく。ノワールの準備が終わるまで僕の相手をするのが彼女の役目だったようだ。

「誰に言ってるのよ！ そんな事する訳無いでしょ！ まったく、ユウは大事なお友達なんだから、ちゃんともてなすわよ」

何時もの薄い笑みを浮かべ去って行ったケイさんを見送ったノワールがこちらに向き直る。そのまま僕の分と彼女の分の器を置いた。

「貴方は珈琲で良かったわね？」

「うん。ありがとう。甘いものには珈琲かな」

受け取った珈琲を一口含む。心地の良い苦みと珈琲特有の風味が口の中に広がる。酸味がありながら、後を引く程には無く飲みやすかった。

「ユウは珈琲好きなのかしら？」

「そんなところだよ。昔、父さんが飲んでいたので、格好良いとか思ってた真似したのが始まりだったかな」

「ふふ、何それ。意外と可愛いところがあるじゃない」

「結構恥ずかしかったりするんだよね。子供の頃の背伸びした思い出だよ」

ノワールに、少しだけ自分の幼い頃の話を語っていた。

「テイラミス、かな。月並みだけど、凄く美味しい。何と言うか意外だな。普通に美味しい」

ノワールの作っていたお菓子を一口含み、思わずそう零していた。それだけ美味しかったから。

「それは、暗に私が料理できそうにないって言っているのかしら？」

「そんな事は無いよ。寧ろノワールなら料理とか上手そうだけど、女神は国のトップでもあるんでしょ。流石にそこまでは手が回らないと思ってるんだ」

むっとして僕を見るノワールに苦笑する。確かに彼女の言う通り以外だったけど、僕の考えている理由とは違っていたから。

「なら良いけど。これでも女神だからね。何時結婚しても恥ずかしくない様に、花嫁修業だって人並み以上に頑張ってるんだからー」

「そうなんだ。女神さまだからこそ、そう言うのも頑張ってる訳だね」  
思わず感心する。女神の仕事はあまり知らないけど、かなり忙しいのだろう。その合間にこれだけの料理を作れる程になるのは並大抵の事では無いだろうから。

「あー！でも、別に今すぐ結婚したいとか、好きな人がいるって訳じゃないからね。これから先、そう言う事があるかもしれないから練習してただけなんだから！」

慌ててそう付け加えるノワールが少し面白い。そんな可愛らしい女の子を眺めながら、もう一口テイラミスに口を付け、珈琲を一口含む。テイラミスの甘さと珈琲の苦さが互いの長所を引き立たせる。ノワールの料理の腕は、大したものだった。

「そっか。まあ、何にしろ、ノワールを嫁に貰う人は幸せだろうね」  
「お、およ、およ、お嫁さん?! だ、だからまだ、そんな相手は居ないって言ってるでしょ！」

何気ない一言に、ノワールはリンゴの様に頬を赤く染める。一目で動揺しているのが解って、微笑ましい。こう言う話に興味はあるけど、慣れていないのだろう。友達だつていないと言っていたから、好きな人がいなかったとしても別におかしくは無い。

「将来の話だよ。今は居なくても、この先どうなるか解らないよね」  
「そ、それはそうだけど……、お嫁さん……」

そう言うのと、どこか夢見心地と言った感じでノワールは相槌を打つ。多分、自分の花嫁姿を想像しているのだろう。部屋の装飾や、可愛らしいエプロンなどから、ノワールの趣味が思っていた以上に女の子だったことから、簡単に思い至った。恋に恋する女の子。そんな感

じの表情を浮かべている。

「ふふ、お嫁さん、お嫁さんか……」

何と言えば良いのだろうか、僕の何気ない一言から、ノワールの女の子スイッチが入っちゃったのか、ふふんと口元を緩めている。ちよつと声を掛け辛い。

「けど……、私にそんな相手が見つかるかな？」

少しずつ出されたお菓子を口にしてしていると、漸く戻ってきたのかノワールがそう尋ねてくる。どこか不安そうに此方を見詰めていた。女神さまとは言え、恋愛方面には自信が無いものなのかもしれない。ノワールとこれまで話していると、そう思い至るのは難しい事では無かった。

「見つかるよ。直ぐには見つからないかもしれないけど、ノワールが歩み寄る努力をすれば、何れ良い人に出会えるんじゃないかな」

「……そう、そうよね。今はまだ好きじゃなかったとしても、これから先どうなるかは解らないものね」

ノワールは小さくはにかむ。先程までは自信が持てていないようだったけど、その表情を見ると、少しは背中が押せたのだろう。

「ゆっくりやっていくと良いよ。僕以外にも友達を増やして、いろんな人と交われれば良いよ。そうすればきつと……」

「ユウ……っ」

「いや、何でもないよ」

僕も安心できるから。思わず言いかけた言葉を飲み込む。ノワールが不思議そうに聞き返してくるけど、笑ってごまかしていた。

不器用だけど優しい友達に、様々な出会いがありますように。僕はそれほど長く一緒に居られないからこそ、そう願うのだった。

## 28話 予兆

「ああ、もう!? コイツ等は一体何体いるのよ!!」

降りしきる粉雪を掻き分けながら空を駆るユニはイラついた様子で悪態を吐いた。彼女の視界の先には、数多の機械兵士が点在していた。ユニたちが数日前に倒したはずのキラーマシン。それと全く同じ姿形をした物が、ユニを撃ち落そうと執拗に攻勢を掛けているところだった。

ルウイー後に封印されていた機械兵士。彼女たちが倒したキラーマシンは、その一兵士でしかなかった。機械である。作られたのは、ユニたちが生まれるよりも遙か昔の話なのだが、機械兵士であるため、量産が可能だったようである。ユニとネプギアを中心とする女神候補生一行を取り囲むようにキラーマシン達は次々と姿を現し、その軍勢を大きくしていく。

「ダメ、数が多すぎるよ!? このままじゃルウイーの街までキラーマシンが辿り着いちゃう……」

「泣き言言ってるんじゃないわよ、ネプギア! アタシ達がやらなきゃ、」

そんな絶望的な状況に焦るネプギアを、ユニは叱咤する。泣き言を言ったところで、状況は好転しないと何処か冷静な部分が告げていたから。

「解ってるけど、このままじゃ他の皆が……」

ネプギアは懸命に手にするMPBLをキラーマシンに放つ。それでいくらかキラーマシンを損傷させる事はできているが、数を減らすまでには至っていない。

「エレメンタルバレット!」

ネプギアの攻撃で硬直したキラーマシンに向かい、ユニは魔力を纏わせた弾丸を放ち、キラーマシンに紫電を浴びせる。それで何とか一帯を葬る事が出来るが、そうしているうちにさらにキラーマシンが姿を現す。

「良いぞキラーマシン共やつちまえ! 女神候補生のクソチビと自信

過剰な勘違い女を此処で終わらせちまえ！」

次々と現れるキラーマシンの陰で声援と罵倒の入り混じった声がかかる。灰色のパーカーを着た、如何にも悪そうな井出立ちの少女、犯罪組織の構成員リンダ。通称、

「この、何にもしてない下っ端が調子に乗ってんじやないわよ！」

「うう、またクソチビって言われた。そんなに私ってチビなのかな」

下っ端に向かい、ユニは言い返す。戦ってるのはキラーマシンであり、下っ端は幹部の指示を受けキラーマシンの封印を解いたに過ぎなかった。それだけで、充分すぎる結果が出ていた。

「うるっせー!! 悪党はな、勝てればいいんだよ、勝てれば！」

ユニの言葉に下っ端は開きなおったように哄笑する。彼女自身は何もしていないが、確かに言葉通り戦いは犯罪組織マジエコンヌが優勢で展開されていた。

「この……、いい加減にその減らず口を閉じ——」

「ユニちゃん!？」

下っ端に向かいXMBの引き金を引こうとしたところで、ネプギアの声が上がった。ユニはキラーマシンの動きには逐一注意していたつもりではあったのだが、下っ端に気を取られた隙に、キラーマシンが死角から近付いてきていた。その手に持つ戦斧で斬り裂かれる。完全に虚を突かれ、ユニは回避行動をとる事が出来なかった。斬られる。ユニの背筋に、恐怖による悪寒が奔った。怖い、思わず目を閉じ声を上げた。

「お姉ちゃん、ケイ、……ごめんね」

「駄目えええ!!」

どこか諦めたユニの耳に、ネプギアの悲痛な叫び声が聞こえた。その声に驚くが、同時に嬉しく思った。自分が斬られることに、ネプギアが、ユニの友達が悲鳴を上げてくれたから。斬られる直前と言う危機的状況でありながら、何処かユニは面映い感覚に包まれていた。そっか、アタシにも新しい友達が出来てたんだ。そんな事実をユニが噛みしめ来る痛みにも目を閉じた直後、冷たい風をユニは感じ取った。「アイスコフィン！」

「アイスコフィン！」

二つの重なった音色が辺りに木霊する。ユニは恐る恐る目を開く。ユニを斬り裂こうとしていたキラーマシンは、その体を凍てつかせ、地に墜ちていくところであった。

「なにが……」

状況に理解が追い付かず、ユニはそんな言葉を零す。解っている事は一つだけであった。誰かに助けられたと言う事だった。

「ロムちゃん、ラムちゃん!!」

「アンタ達、なんで……」

ネプギアの驚きの声に、ユニも誰に助けられたのかを理解する。女神候補生である、ロムとラム。ルウイーの女神、ホワイトハートの妹であり、ユニとネプギアと同じく女神候補生である双子だった。

「ルウイーが狙われてるのにアンタ達だけに戦わせる訳には行かないもんね！ だから、サイキョーな私とロムちゃんが助けに来てあげたのよー！」

「ネプギアちゃん、助けに来た。皆で頑張る」

「ロムちゃん、ラムちゃん……、ありがとう」

紆余曲折あり、ネプギア一行は双子の姉妹と刃を重ねた事もあったのだが、ルウイーの危機に女神候補生四人が一堂に会する事となった。

「お礼は言わないわよ……」

「ふふん、別にいらないもんねー。サイキョーな私たちが何度だって助けてあげるから、毎回言ったら大変だもん！」

「サイキョーだもん。だから気にしなくていいよ……」

こう言う時にどう反応していいか解らないユニはぶつきらぼうに返すが、ラムは挑戦的な笑みを浮かべ、ロムは小さくはにかむ。そのまま、キラーマシンを視界にとらえると、二人してシエアを使い、魔法を解き放つ。キラーマシンは物理攻撃には強いが、魔法には耐性が無かった。二人の苦戦が嘘の様に、キラーマシンの数が減っていく。

「クソ、なんだよこいつ等!? キラーマシン、サッサとやっちなまえー！」

突如現れた増援に、下っ端は焦ったようにキラーマシンに指示を飛

ばす。だが、ルウイーの女神候補生を倒すより、キラーマシンの数が減る事が早い。たった二人の増援で戦況は、逆転していた。

「言ってくれるじゃないの……」

「ユニちゃん、大丈夫？」

「誰に言ってるのよ。ネプギア、アタシ達のコンビネーションである二人より多く倒すわよ」

「うん！」

そんな二人の活躍を見たユニは、自分を叱咤する様に呟く。心配そうなネプギアの言葉に、ユニは何時ものような強気な笑みで応える。その様子を見て、ネプギアは自分の心配が杞憂であった事を悟った。ユニはもう弱くは無かったから。

アタシは強くならなきゃいけないんだ。そんな一念が、ユニを精神的にも強くしていたのだった。頑なだったユニが、自分にも心を許してくれている事に、ネプギアは戦闘中にもかかわらず、心が弾むのを感じた。

「行くわよ、ネプギア。あの子たちばかりにいい恰好はさせてられないんだから！」

「解ったよ、ユニちゃん！ ロムちゃんとラムちゃんに負けてられないもんね！」

追い詰められていた女神候補生に活力が戻る。四人の女神候補生による共同戦線。それが張られることになる。

「ふーんだ！ 私とロムちゃんが一番強いんだから！」

「……頑張る」

「あはは、二人とも心強いな、ね、ユニちゃん！」

「まったくね、だけど……一番強いのはアタシ達よ！ こんな戦い、直ぐに終わらせる！」

四人の女神候補生が一丸になる。完全に力を合わせる事が無かった女神候補生たちが、この時初めて一致団結していた。幾らキラーマシンが強いとはいえ、所詮は機械の兵士。今の彼女たちを遮る程の敵にはなり得なかった。勝てる。四人は確信した。その直後、

「残念だが、此処までだ」



冷徹な声が戦場全体に響き渡った。相對する者全てを圧倒する力を孕んだ言葉だった。

「マジック様!? な、なんで」

「ご苦労だったな、リンダ。下がっていると良い」

紅の女神が舞い降りる。その姿を見たリンダは驚きのあまり声を荒げるが、そんな彼女を見た紅の女神、マジックザハードは、小さな笑みを浮かべた。妖艶な微笑。それは、リンダの知るマジックの笑みとは、どこか違っていているように思えた。

「さて、幾つか知った顔が居るな」

四人の女神候補生を見据え、マジックは面白そうにつぶやいた。

「貴女は……」

「アンタはあの時の……」

ネプギアとユニは忌々し気に零す。ネプギアは女神が敗北した時に、ユニは四条優一とギョウカイ墓場に行った時に、マジックと相對していた。尤も、二人とも何一つとして出来なかったが。

「何、アンタ達、アイツの事知ってるの?」

「知り合い?」

双子の姉妹が小首を傾げる。

「ええ、最悪の敵ね」

「うん。正直、四人がかりでも勝てるか解らないぐらい」

零すように二人は呟いた。他のことを考えるほど余裕が無かったから。それ程までに、マジック・ザ・ハードと実力に開きがあったのだ。

「さて」

紅の女神が、四人を一瞥すると思い出すように呟いた。そして、

「精々、抗って見せろ」

絶望が加速する。

「早速で悪いけど、してもらいたい事があるんだ。構わないかな？」

ノワールに招かれてから数日後、今度は教祖であるケイさんからの招集を受けラステイションの教会を訪ねるなり、その声を掛けられた。ラステイションでは何度も仕事をしており、教祖であるケイさんと女神であるノワールにも僕が異界の魂である事を知られていた為、半ば押し付けられる形で携帯を持たされることになっていた。それに、早速連絡が来たと言う事だった。

「聞かせて貰います」

「話が早くて助かるよ。実はね——」

どこことなくケイさんの様子が焦っているように感じられる。何時もなら一つ二つ世間話があるのだが、今回は何もなかった。

「ケイ、ユウが着たの!?!」

ケイさんが本題に入ろうとしたところで、慌てたような大きな声と共に女の子が一人は入ってくる。黒の女神でありユニ君の自慢の姉。そして、僕の友達の中の一人、ノワールだった。

「ああ、そうだよ。今から本題に入ろうとしていたところだよ」

思いの寄らぬ闖入者に少し頭が冷えたのだろうか。ケイさんは何時もの笑みを浮かべると、言葉を切り、ため息交じりに応える。調子が戻ってきたと言うところだった。

「ユウ、お願いがあるの! 助けて、ほしい……」

そんなケイさんとは対照的に、全然落ち着きが無いのが、ノワールの方だった。僕の姿を見つけるなり、抱き着かんばかりの勢いで傍らまで来ると、両手を掴み懇願してきた。僕はノワールより頭一つ分程背が高い為、ノワールは泣きそうな顔で見上げる形になっている。正直距離が近すぎるのだけど、ノワールの方はそれどころじゃないのか、今にも抱き着かんばかりの必死さだった。

「少し落ち着いて、ノワール」

「だ、だって、これが落ち着いていられるわけ……」

完全に動揺していた。少しばかり落ち着いてもらわなければ、話になりそうになかった。

「少し、落ち着け」

「あう……」

ノワールの肩を両手で強めに掴み、少しばかり距離を取る。そのままノワールに視線を合わせしつかりと両目を見詰め、できる限り腹に力を籠め告げた。パニックになっっている時は、どうにかして意識を集中してあげると治りやすい。今回は視線を合わせて強めの言葉をかける事で僕の方に意識を持ってきたと言う事だった。

「何があつたのかは解らないけど、友達が助けを求めてるなら出来る限り何とかするから」

「……ありがとう。少し取り乱しちゃったわね。見苦しい姿を見せてごめんなさい」

ようやく落ち着いてくれたのか、ノワールは頬を薄らと染めながら恥ずかしそうに呟いた。少し話したとはいえ、目と鼻の先にいる。かなり近い。僕だって気恥ずかしいが、目の前に居るのはノワールだ。僕以上に恥ずかしがっているのではないだろうか。

「あ……」

兎も角、落ち着いた様子のノワールと距離を取る。それで、ようやく話しやすくなった。

「落ち着いた様だね。すまなかつたね四条君。うちのノワールが抱き着いてしまつて」

「ちよ、ケイ!? だ、抱き着いてないわよ! ちよっと近かつただけなんだから!」

ケイさんが茶化すように言うと、ノワールが慌てたように捲し立てる。それで、幾分か普段の雰囲気に戻っていた。

「それで、何があつたのかな?」

ノワールにもゆとりが生まれた所でケイさんに尋ねた。ノワールに聞いても良いのだけど、最初の取り乱し様からケイさんの方が適任だろう。

「事実だけを端的に話すよ。ルウイーに封印されていた古の機械兵。その封印を解いた犯罪組織マジエコヌによって、全ての女神候補生が捕えられた」

「……、成程。確かにそれは一大事だね」

ケイさんの口にした事実は、予想をはるかに上回る出来事であった。ノワールを除く三人の女神を救出する為に、二人の女神候補生が旅をしているのは知っていた。その二人と、それ以外の女神候補生まで捕えられた。つまり、現在無事な女神はノワールだけと言う事だった。

「そして、少し前、最後の女神が居るラスティションに、犯罪組織から連絡があった」

「犯罪組織から、ね」

ケイさんの言葉を促す。全員が捕まったと言うのが本当ならば、残りにはノワールだけと言う事だった。ユニ君の安否が気になるけど、ひとまずそれは考えない様に意識する。

「交渉がしたい。そう言う事だった」

「交渉、ですか。この状況で何を交渉する意味があるんですか？」

ケイさんの言葉に疑問が口を吐く。ユニ君を人質に、ノワールに投降しろとでもいうのだろうか。それ位しか思いつかなかつた。だけど、そんな交渉を持ちかけるとは思えない。

「ああ、交渉がしたいと言った。ラスティションでは無く、君と」

「僕、ですか？」

意外、と言うよりは意味が解らない話であった。何故女神候補生を捕えて、僕と交渉したいのか。

「犯罪組織が何を考えているのかは解らないけど、ユニたちを捕えた写真を送ってきたの。ユウと私、二人だけでルウィーにある国際展示場に来ていて」

「ならユニ君は……」

「ええ、捕まってしまったようね……」

ノワールは今にも泣きそうな顔で下唇を噛んでいる。最愛の妹を奪われた。妹に助け出された女神が、今度は逆に妹を奪われると言う形になっていた。

「ユウ、貴方にこんな事を頼める義理じゃないのは解っているけど……」

「ストップ」

「え？」

ノワールの言葉を遮る。不思議をそんな顔をするノワールには悪いけど、一つだけ聞き捨てならない言葉が聞こえた。

「ノワール。僕と君は友達だし、ユニ君と僕も友達だよ。だから、義理が無いって事は無いよ」

「あ……」

「なにより、友達を助けるのに理由はいらないよ」

自分に近い人を手助けるのに理由なんか必要はないだろう。少なくとも僕はそう思う。だから、ユニ君たちを手助けに行くのに、ノワールの手助けをするのに特別な理由など必要なかった。僕がそうしたいから、するだけだから。

「ありがとう」

ノワールの瞳から一筋涙が零れ落ちた。

「ケイさん。大体の事情は分かりました。何とかしてみます」

「そうか、ありがとう。君にはいつも迷惑を掛けるね」

ケイさんの言葉に気にしないでと答える。犯罪組織がどう言う心算なのかは解らないけど、やるしかなかった。幹部であるブレイブには一度勧誘されていた。マジックにも、欲しいと言われている。絶対に何かあるのだろう。その何かまでは解らないが、相手の言いなりに成らざる得ない状況だった。せめて油断だけはしないでいこう。そう思い、長釣丸を強く握りしめた。

## 29話 黒の墜ちる時

「納得いかねえ！」

ルウィー東部に位置する国際展示場。その地に聳え立つように存在する黒の巨人、ジャツジ・ザ・ハードは怒りを隠す事無く叫びをあげた。犯罪組織マジエコンヌの幹部であるジャツジも、今回の異界の魂との交渉の場に呼び出されたと言う事だった。彼の傍らには、ギョウカイ墓場で女神が囚われていた触手の様な拘束具を施された女神候補生達が力なく項垂れている。さらにその奥には、三人の女神の姿も見受けられる。今回の交渉の為、全ての女神が集められたと言う事であった。それは、今回の会合が犯罪組織にとってそれだけの価値があると言う事であった。

「少しは落ち着かぬか、ジャツジ！ 吾輩とて思うところはあがあるが、今回は黙認しておるのだ」

そんなジャツジをたしなめるように恐竜をデフォルメしたような巨軀を持つ者が言った。ジャツジやマジックと同じく、犯罪組織の幹部であるトリック・ザ・ハードであった。

「マジックの奴があのような事を言いださなければ、吾輩とて捕えた幼女を思う存分堪能しているところを、断腸の思いで抑えているのだ。貴様も少しは自重せんか！」

今すぐ捕えた女神候補生の双子をぺろぺろしたいのだ！と拳を天に掲げ、魂の叫びをトリックは上げる。変態ここに極まれり。実力はあるのだが、如何せん、トリックはどうしようもない変態だった。国際展示場に、犯罪組織のロリコンたちを背負って立つトリックの言葉が木霊する。

「貴様の戯言と一緒にするな！ 気に入らねえ、気に入らんぞ!!」

「戯言では無い！ 世の至宝を愛でると言う崇高なる行いなのだ！」

二人の叫びが響き渡る。犯罪組織の中でも特別問題児である二人は、このままぶつかりかねない勢いだった。

「ふ、二人とも落ち着いてくださいでちゅー！」

「そ、そうですよ。もう決まったことです。奴らが来るまでは大人し

くしておきましょうよ」

その場に呼ばれていた犯罪組織の構成員であるリンダとワレチューの二人は慌てて仲裁に入るも、二人が何かを言ったところで止まるような連中では無かった。さらにヒートアップする言い争いに、二人はどうする事も出来ずに困り果ててしまう。片や戦闘狂のジャツジ。片や全ての幼女を愛する紳士、トリックであった。トリックの肩書は兎も角、二人が犯罪組織の幹部である事には変わりがない。両者がぶつかり合えば、それ相応の被害が出るのは想像に難くは無かった。

「お前たち、いい加減に」

「いや、止めるだけ無駄だろう。どちらにせよ、ジャツジは言う事を聞かんさ」

見かねたブレイブが止めに入ろうとしたところで、マジックが静止する。この地には、犯罪組織の幹部が勢ぞろいしていた。

「ジャツジ。行きたいと言うのなら、好きにしてくるが良い」

「おい、何を言っている」

マジックの言葉に、ブレイブは驚きの声を上げる。交渉する為に異界の魂を呼び寄せていた。その場に来る前に、ジャツジを解き放てばどうなるのかは、子供にだって理解できる。何故マジックはジャツジを野放しにするのか、ブレイブには直ぐに理解が出来なかった。

「——必要な事だ。異界の魂を手に入れる為には、な」

そんなブレイブにマジックは小さく告げる。ブレイブ自身、四条優一を犯罪組織に引き入れる事は賛成である。女神によって、未来を、命を奪われた人間だった。ブレイブにとって、四条優一は子供たちと同じく守るべき人間だったと言う事だったからだ。その為には、四条優一が近くに居なければどうしようもない。女神を見逃してまで異界の魂と敵対する事を避けたブレイブは、マジックに必要な事だと言われると、それ以上意を挟む事が出来なかった。

「本当か？ 俺様の好きにして良いと言うのか？」

「そう言っている」

流石のジャッジもマジックの言葉を不審に思いつつも、問い返す。それに、マジックは端的に答えていた。ジャッジの好きにして良い。それは戦いの後、異界の魂と女神を殺しても構わないと言う事に他ならなかった。

「しかしマジックよ。それでは、」

「構わん。これは必要な事だ」

念を押すトリックに、マジックは無感動に答えていた。その瞳は、ジャッジが何かをしようと自分の思惑は変わる事が無い。そんな自信の色が窺える。

「ふはははは！ ならば好きにさせて貰おうか！ 貴様の思惑は知らんが、異界の魂と女神、二人の屍を引き摺って戻ってくるぜえええ!!」  
喜色を浮かべたジャッジは、直ぐ様国際展示場を後にし女神と異界の魂の下へ向かう。それを、三人の幹部はただ黙って見送っていた。

「良かったんですか、マジック様」

「そ、そうっちゅ。幾ら女神がいるって言ったって、ジャッジ様が相手じゃ敵いつこないっちゅ」

リンダとワレチューがマジックに尋ねた。二人ともジャッジの強さを良く知っている。今回の交渉が台無しになるのではないかと、危惧していた。

「ふ、異界の魂と言うのは、此処で死ぬようなたまでは無い。死ぬ者がいるとすればそれは……」

二人の言葉を聞いたマジックは、ぼそりと呟く。

「丁度、空気が一つ欲しいと思っていた」

マジックはジャッジの向かった方向を小さな笑みを浮かべて見詰めているのだった。

「もうすぐ、着くわね」

ルウイーの国際展示場へ続く道、其処をノワールと二人で移動していた。ルウイーは雪国であり、ラストイションよりも幾分か気温が低く、吐く息が白い。既に変身を済ませたノワールが、ぽつりと呟いた。



此処に来るまであまり口数が多くなく、ユニ君たちの事を心配しているのが痛いほど良く解った。

「そうだね。ノワール、国際展示場につく前に、今回の目的を確認しておくよ」

「ええ、そうしましょう」

漸く口を開いたノワールに提案していた。確認すると言うのもあるが、今のノワールは僕と戦った時と同じく相当追い詰められている。何とかしなければいけなかった。だけど、方法が見つからない。だからせめて、言葉を交わしておきたかった。この強いけど弱い女の子の力に少しでもなりたい。そう思ったから。

「犯罪組織との交渉がどういう話になるか解らないけど、女神候補生を取引材料に使ってくると思う。だから、女神候補生の確保。それは何よりも優先しなきゃいけない」

「ええ。ユニやネプギアが捕えられていたら、思うように動けないからね。あの子達は、なんとしても取り戻すの」

「うん。あの子たちの確保と安全。それが第一だね」

交渉の内容は、実際にあってみなければわからない。その為、何を守るべきなのかを予め決めていた。とは言え、考えるような事でもない。ユニ君たち。それは何としても取り返さなきゃいけない。

「見つけたぞおおお!!」

ノワールと話し始めて間もないところだったのだが、不意にそんな叫びが聞こえた。聞き忘れる筈が無い声だった。二度戦った相手。一度は負けた相手の声だった。

——エクス・コマンド

「ノワール!」

「解ってる!!」

反射的に言葉を紡いでいた。自身と、傍らに居たノワールに補助魔法を施すと、飛来する黒の巨人の一撃を躲していた。奇襲による轟撃。僕たちが居た大地を、軽々と吹き飛ばす一撃だった。

「くはははは! 良く来たなあ、女神に異界の魂。会いたかったぜえ」  
戦斧の一撃により舞い上がった砂塵が収まった時、ジャツジはゆっ

くりと斧を構えなおすと、喜色を隠し切れなかった面持ちで言った。長釣丸を強く握る。淡い光を帯び、女神がシエアを用いて変身するかのように、その姿を変化させる。

——S・O・C

異界の魂の持つ魔剣。瞬時に構築していた。刀身から、力の奔流が感じられる。再現率が上がっているのがはつきりと感じられた。

「その剣、凄まじい力を感じるぞ、良いぞ、面白い、面白くなってきた！ お前たち、俺を愉しませろおおお!!」

ジャツジが咆哮を上げる。それだけで、周囲に戦慄が奔っていた。「ジャツジ・ザ・ハード。何の心算かな。僕たちは交渉に来たはずだよ」

「アイツが犯罪組織の幹部の一人」

行き成りの闖入者に、疑問を投げかける。ジャツジが襲ってくること自体は不思議な事では無いが、今の状況で向かってくるのが不思議だった。そんな僕の言葉に、ジャツジを初めて見たノワールが刻み付ける様に呟く。

「そんな事、俺が知るかよ。そんな事より、戦おうじゃねえか！」

「成程、実に君らしい答えだね」

何とも清々しい答えに、皮肉が出るのも仕方が無い。以前にマジックと仲たがいを始めたジャツジの性格からして、犯罪組織の意向なんて関係ないのだろう。

「ふざけたやつね」

「ノワール。アレを倒さないと、どうにもならないと思う」

「そうね。手強い相手だろうけど……、私と貴方ならやれる！」

そう言い、ノワールが女神の剣を僕の方に突き出してくる。合図みたいなものだった。手にしたSOCを軽くぶつける。戦場に、乾いた音が鳴り響く。ぞわりとした感覚が全身を駆け巡った。ジャツジが、戦闘態勢に入っていた。

「行くぞおおお!!」

「もう、負けないよ」

「そうよ。私たち二人で、勝たせてもらうんだから!!」

咆哮。凄まじい勢いで、ジャツジが向かってくる。それを迎え撃つため、ノワールと共に前に出た。

——天魔・轟雷

その巨軀から信じられない位の速さで接近するジャツジの上を行く速さで雷迅がその牙を以て襲い掛かる。異界の魂の持つ膨大な魔力により放たれた紫電、雷鳴を轟かせる。

「しゃらくせえ!!」

その雷撃をもともせず、ジャツジは魔力を纏わせた戦斧を振り払い抜く。魔力と魔力がぶつかり合い、力と力が鎬を削る。

「まったく、どんな体をしているのか……。 فقط」

思わずそんな言葉が口を吐く。斧による一撃。それを以て、ジャツジは紫電の雷撃を吹き飛ばしていた。あまりの事に、呆れたように溜息を零す。

「ごこよ、サンダーフェンサー!!」

「ぐおお!!」

紫電を黒の大剣に纏わせたノワールの一撃が、ジャツジに突き刺さった。黒の装甲を穿ち、雷撃がその身を痛めつける。

「まだよ、サンダーエツジ!」

苦し気な叫びをあげるジャツジを見据えたまま、ノワールはその巨体を駆けあがる様に駆け抜け、ジャツジの頭部に向け雷刃を振り抜く。魔法剣。僕の魔力とノワールの剣技を持って、ジャツジに痛手を与える事に成功していた。

「ぐぐ、調子に乗るなよ女神がああ!!」

頭部を攻撃された事で一瞬怯んだジャツジであったが、直ぐさま激昂し、両手で持って居た戦斧から片手を離し、ノワールに向かい殴りかかった。

「ッ、くうああ!」

——ファイン・コマンド

手ごたえを感じていたところに予期せぬところからの一撃を貰い、

ノワールが吹き飛ばされる。即座に自身に補助魔法を重ね、吹き飛ばされているノワールに追いつき、何かにぶつかる前に抱きしめるように受け止める。

「あ、ありがとう」

「ん、無事なら良かった」

——パワーエクステンション

——ガードエクステンション

ノワールを受け止めたまま、即座に自身にだけ更なる魔法を重ねる。補助魔法の重ね掛けは本来体に相当な負荷を与えるものだけど、仮初の体しか持たない僕には関係の無い事だった。何の憂いも無く、施す。これで、四つの魔法を重ねていた。ジャツジとも互角に戦えるだろう。だけど、それでもまだ足りなかった。それでは、マジックには届かなかったから。右手に持つSOCを強く握り、更なる情報を読み取っていく。ジャツジを、そしてマジックを倒すにはどうすればいいのか。それは、僕の持つ剣を読み取り再現する能力にあった。

——マキシマム・チャージ

それは、人間の限界を超える魔法。ただでさえ、異界の魂としての身体能力と、魔法による補助で人間の限界以上の動きをしていた。その上から更なる魔の術を自分に施す。体の奥底から高揚感が湧き上がった。人を完全に超えた力。それを手にしてしまっているのが解った。右手に持つSOCに魔力を浸透させ、構えた。手にする魔剣から魔力ともう一つの力。この世界に居る筈の無い天魔の王の力を感じ取った。それを、SOCの中だけに押し留める。純粋な力の奔流が魔剣から溢れだしていた。

「ノワール、一気に畳みかける。何とか隙を作ってほしい」

「解ったわ！ 私が必ず道を作るから、貴方は気にせずやりなさい！」

黒の女神であるノワールが、僕の言葉に何の疑問も持たず頷いてくれた。この子とは、出会った時から色々な事があったけど、その全てがあったから、信頼してくれているのが良く解った。僕が友達を大事に思うのと同じように、ノワールも大事にしてくれている。そう、漠然とだが解った。少しだけ嬉しくなる。女神さまが信じてくれるの

が、何故か嬉しかった。

「一気に終わらせる！ インパルスブレイド!!」

「ふざけた事言ってるじゃねえぞおお!!」

シエアの力を存分に用いた一撃。ジャツジに牙を剥く。それを、ジャツジは戦斧の一撃で迎え撃つ。シエアが極限まで収束されるのを感じた。ノワールの持つ大剣が、虹色の光を放っていた。

「くう……」

「押し切らせてもらおうぜえええ!!」

刃同士がぶつかり合い、次第にノワールが押され始める。本当ならば今すぐにでも助けに行きたかった。だけど、ノワールは必ず道を作ると言ってくれた。なら、僕がその言葉を信じないでどうする。そう言い聞かせ、SOCから吹き荒れる力の奔流を極限まで凝縮していく。SOCの持ち主の最高の技。それを再現していた。ただただ、力を抑え込み、機が来るのを待ち続けた。そして

「終わりだ女神、死にやがれええ!!」

ジャツジがノワールを押し切り、その刃で切り伏せる。その瞬間、「私は、こんなところで負ける訳には行かないの……。死ぬのは、貴方の方よ!」

ノワールの持つ剣から放たれる虹色の光が強くなる。凄まじい程のシエアの光だった。信仰と言う目に見えない筈の力が、僕の目にもはつきりと解るぐらいに綺麗な輝きを放っていた。

「トルネードソード!!」

ジャツジの一撃を、手首の動きで手本の様に鮮やかな動きで往なし、その虹色の剣を振り抜いた。

「な、にいいい!?!」

戦斧を持つ右腕が半ばから切り飛ばされ、ジャツジは驚愕に声を上げる。刃を振り抜いた事で、力を使い切ったのか、虹色の剣は少しづつ力を失い、元の大剣に戻っていた。その場でノワールが膝をつく。変身こそ解除されないが、相当な力を消耗したと言う事だった。それでも、確かにノワールは隙を作ってくれていた。

「やるじゃねえか、女神! だが、これで終わりだああ!!」

「そうね。けど」

ジャツジが健在な左腕をかかげた。ジャツジの巨体から放たれる殴打。それだけでも、充分な破壊力を持つているだろう。その一撃をノワールは見詰めていた。ジャツジの言葉に小さく頷く。

「私が一人だった時なら、ね」

人間の限界を超えた速度で踏み込み、ノワールの前に出る。正面ではジャツジが拳を振り上げ、此方を驚いたように見つめていた。

「ありがとう、後は任せて貰うよ」

「遅いわよ。けど、信じてた。」

ノワールと一瞬の交錯。短い言葉を交わしていた。女神さまが信じてくれていた。なら、その信頼には応えなきゃいけない。SOCを強く握った。

「終わりだよ、ジャツジ」

——ジェネシック G ・ドライブ

「な、に……」

ジャツジの呆然とした声だけが木霊する。ただ一撃。それを持つて切り伏せていた。

それは、破滅と再生を司る一撃。SOCに封じ込められた天魔の王の力を用いる事で、放つ事が出来る人知を超えた極致にある斬撃であった。

「馬鹿な、この俺が……、女神に、人間如きに敗れるだと……っ!? 馬鹿な、馬鹿な、認めん、認めんぞおおお!!」

ジャツジの胴体を分った一条の軌跡。そこからSOCの力があぶれ出す。力の奔流。ジャツジの傷を中心に広がり、ジャツジ・ザ・ハードの体を粉々に吹き飛ばした。

「馬、鹿な……」

それが、ジャツジ・ザ・ハードがゲームギョウ界で残した最後の言葉だった。

「勝った……のね」

「ああ、勝ったよ」

へたり込むノワールの傍らに腰を下ろすと、ノワールが呆然と呟いた。女神が自分しか残っていない状態で、敵の幹部を一人倒した。それが信じられなかったのだろう。僕だって半信半疑だった。

「勝った、私たち二人で犯罪組織の幹部に勝ったのよ!! やったわ!!」  
「ちよ、ノワール!」

感極まったと言う風に抱き着いてきたノワールに思わず声を荒げる。今のノワールは女神化しており、水着のような服装である。ただでさえ、魅力的な女の子なのに、そんな恰好で抱き着かれたら流石に意識してしまう。

「え、あ、あう……」

「あの、離して貰えるかな……?」

抱き着いていたノワールが自分のしている事に気が付いたのか、一瞬で真っ赤になる。そのまま、至近距離で見つめあってしまう。ノワールがそんな状態になったためか、幾分か落ち着きを取り戻せたので、未だに抱き着いているノワールを諭すように告げた。

「う、うん」

「えっと……」

「もうすこしだけ、駄目?」

頷きつつも離れないノワールに困っていると、予想だにしていなかった事を言われた。あまりの事に、言葉が直ぐに出てこなかった。

「ありがとう、ユウ。これで、私たちの願いが少し叶った。最初の一步かもしれないけど、進めた」

「ノワール……」

心底嬉しそうな笑みを浮かべると、ノワールは離れた。心からのお礼の言葉を聞き、力になれて良かったと、素直にそう思えた。

「……っ」

ノワールが居た暖かさをぼんやりと感じていると、不意に奇妙な感覚が全身を奔った。痛みや寒気では無い、どちらかと言えば予感のような感覚。この世界に来て例えどれだけ死にそうな状況であっても、

死の恐怖など感じた事が無かった僕が、明確なソレを感じた。手を見詰めた。どこか輪郭がぼんやりとしているように思えた。この世から消えてしまいそうな漠然とした恐怖が奔る。一瞬、意識を手放しそうになるのを歯を食いしばり何とか堪えた。倒れる訳には行かなかった。

「ユウ、どうかした？」

だって、直ぐ近くには女神さまが居たから。今一人で耐えている女の子に余計な心配を掛ける訳には行かなかったから。

「いや、大丈夫だよ。ノワールに抱き着かれて恥ずかしかっただけだよ」

「な、ななな!？」

なにより、言える訳が無かった。女神によって呼び出された僕は、元の世界に戻れば死ぬ事になる。その時期が少しずつ近づいて来ている。そんな事、僕を呼び出してしまった女の子に言えるわけがない。

クロワールには散々このままで良いのかと問われ続けてきた。今日、犯罪組織の幹部が一人倒れた事で、女神の脅威の排除が明確に進んでいた。その矢先に、異変が起きた。見間違いかも知れないけど、確かに体が消えかけた。恐怖も感じた。直ぐに治ったが、それがどう言う事なのか、解ってしまった。女神の願いを達成すれば、確実に死ぬ。それを肌で感じてしまった。正直言って、怖かった。

だけど、それでも言う事はできない。だって言ってしまうば……

「あ、あれは勝てたことが嬉しくて少し気が動転してたのよ!! 別にあなたの事なんか、あなたの事なんかなんとも思ってた……」

この子に深い傷を与える事になるのが解ってしまったから。だから、僕は何も言わない事にする。助けてほしい。手を差し伸べて欲しい。そう心の奥では思ってしまったけど、我慢できない事では無かった。だから見なかった事にする。だって、既に四条優一は死んでいるのだから。

「結局、僕は変われそうに無いかな。ごめんね、クロワール」

助けを求めれば、きっとノワールは何とかしようとしてくれるだろ



う。そして、どうしようもない事も悟る。彼女は女神だ。この世界に住む人全体を守る立場だった。そして、ゲームギョウ界を救ってしまえばぼくは死ぬ。どうしようもない状況だった。その全てを知ったら、ノワールは心に大きな傷を負うだろう。彼女と一緒に居てそれが嫌と言うほどわかった。僕の事を友達として大事に思ってくれていたのが解るから。もしかしたら、その所為で壊れてしまうかもしれない。自分の所為でそうしてしまうのだけは避けたかった。

「だ、だから、さっきの事は何でもないんだからね!!」

「解ってるよ」

だから、僕は諦める事にした。それは、元々でていた結論だった。そして、クロワールに最初から諦めてると言われた通り、この日僕は自分の身の振り方を決めた

### 30話 女神の解放

「来たか、異界の魂、そして最後の女神」

ルウィー国際展示場。ジャツジを何とか撃退し漸くたどり着くなり、待ち構えていたマジックが声を掛けてくる。

「こんなところまで呼び出して何の心算よ。それに、交渉って言いながら、黒いのをけしかけた理由は何よ」

此処に来るまでは、ジャツジとまともにやりあつたせいでふらついていた為、ノワールに肩を貸しなんとか辿り着いたのだが、そんな様子はおくびにも出さない。僕より一步前に出て好戦的に言い切った。だけど、肩が少しだけ震えていた。マジックはノワールにとって二度負けた相手でもあり、今のノワールには戦う余力すらない。虚勢を張っているのが簡単に解ってしまった。その後ろ姿は悲しくなるほど弱弱しい。だけど、ラストেশヨンの為、ゲームギョウ界に住む人々の為、そして愛する妹の為に逃げない彼女は、だからこそ強い。そう思えた。ただ一人になっても、諦めない女の子を何とか支えてあげたい。そう心から思ってしまう。

「ジャツジが動いたのは奴の独断だ。我らの知る所では無い。それに貴様らとてアレを殺したのだろう?」

「だからお互いさまって言いたい訳? 勝手な事を……っ!」

マジックの言葉の意味を正確に読み取り、ノワールは悪態をつく。犯罪組織の方が仕掛けてきたのは確かだけど、僕たちは依然として人質を取られている。事実はどうであれ、強く出る事は出来ない。僕たちの態度次第で、ユニ君たちの首は簡単に飛ぶのだ。それが解っているから、ノワールは悪態をつきつつも、それ以上何かを言うと言う事はしないのだろう。

「話が進まないよ。それで、貴方は何のために僕を呼んだのかな?」

「ふふ、そうつれない事を言うな四条優一」

ノワールに任せていては話が進みそうにないため、本題に入りつつ、マジックの後方を見詰めた。以前言葉を交わしたブレイブと、もう一人強い力を感じる物がいた。犬とも竜ともつかない、良く解らな

い巨大なモンスターのような形をしている。大きく飛び出した舌が特徴的だった。奇妙な外見をしているけど、その巨体から感じられる力はあのジャツジにも匹敵するように思える。あれも幹部の一人だろうか。

「久しいな、四条優一。以前の話覚えてるか？」

「貴様が異界の魂か……。幼女では無いと解っていたが、男を仲間に引き入れる為に幼女たちを使う事になるとは……。っ！　ぐぬぬ、吾輩、非常に遺憾である!!」

僕の姿を捉えた二人が、それぞれ反応を示した。前者は兎も角、後者は非常に個性的な反応であることを除いても、無視する事が出来なかった。

「僕を仲間？」

思わず問い返す。マジツクの笑みが深くなるのが解った。隣で息を呑む気配が伝わってくる。

「な、何馬鹿な事言っているのよ!?　ユウが私の大事な友達がアンタ達なんかの下に行くわけないでしょ!!」

ノワールが声を荒げた。怒りの所為か、耳まで赤くなっているのが解る。こんな時に不謹慎だけど、大事な友達と言ってくれる彼女の気持ちは素直に嬉しかった。

「ノワール、落ち着いて。話が進まない」

「で、でも……」

「大丈夫、此処は任せて、ね」

「……うん」

とはいえ、こんな状態のノワールに何時までも任せておくわけにはいかない。今のこの子には余裕と言うモノが全くない。女神は自分しかおらず、唯一本当の意味で支える事が出来る妹のユニ君すらも捕えられていた。今のノワールの気持ちを理解できる者は居ない。だから、たった一人で頑張っているのだ。そんな彼女の負担を少しでも減らす事が、僕のやるべき事なのだ。そんな思いを込めて言うと、ノワールは僕の傍らまで下がった。任せてくれる。そう言う意思表示なのだろう。

「それで、僕を仲間について言うのはどう言う心算かな？」

「言葉通りの意味だ。以前私は言ったな四条優一。お前が欲しいと。犯罪組織マジエコンヌに來い。それが我等が望みだ」

僕の問いに、マジックは妖艶な笑みを浮かべたまま言葉を紡ぐ。普段は恐ろしい程に感情が読めない瞳をしているが、今は何かしらの色が宿っている気がした。

「……一応聞いておくよ。僕が其方につく事で、どう言った対価が貰えるのかな？」

マジックの言葉を噛みしめながら、更に問う。もしユニ君たちが捕まっていなかったのなら、犯罪組織の望みだけを聞けば考える余地も無い事なのだが、現実には捕えられていた。他の女神たちも捕えられている。それを考慮すれば、聞く必要があった。聞かざるを得なかった。気付けばノワールが僕の服の袖をつかんでいる。

「そうだな……、以前捕えた女神候補生とその仲間の解放」

ケイさんに聞いた情報通り、ユニ君やギアちゃんが捕えられたと言うのは事実の様だった。言葉を紡ぎ、マジックが軽く手を動かすと、何時ぞやギョウカイ墓場でみた触手の様な拘束具で絡め取られているユニ君たちが姿を現す。ユニ君とギアちゃん。そして姿が非常に似た二人の知らない女神候補生だった。ケイさんがルウイーの女神候補生は双子だと言っていた事を思い出す。全部で四人、捕えられていた。最後の国リオンボックスには女神候補生は居ない為、それがこの世界に居る女神候補生全員だった。

そして、その傍らには見知った女の子三人と知らない一人の女の子が捕えられている。あいちゃんたちだった。四人目は知らないのだが、新しい仲間なのかもしれない。全員が両手両足を縛られ、意識も失っているのか、ぐったりと倒れている。幸い、肩が上下しているのが解った。皆、生きてはいるようだ。安堵する。袖が強く握られていた。

「ユニ……っ！」

ノワールが泣きそうな声をあげたが、それだけだった。本当は今すぐにも助けだしたい筈なのに、僕に任せてくれていた。信頼してく

れているのが、解った。

「何人、と言うのを聞いてないね。まさか、一人だけ解放して終わりなんて言う事は無いよね？」

「ふふ、当たり前だろう。そんなつまらない事を言う気は無い。すべての女神を解放してやる」

僕の言葉にマジックは笑みを深める。だけど、そんな事には構わず問い返す。だって、

「全ての女神だって？」

「え……」

ノワールが呆けた声を上げる。女神候補生では無く、女神。マジックはそう言ったからだ。言い間違えだろう。そう思ったのだが、

「ああ、そうだ。すべての女神、だ」

そんな僕たちが滑稽なのか、さも愉快だとばかりに笑うと、マジックは更に手を振るった。そして、更なる触手が現れる。

「……ネプテューヌ！ ブランにボールもー」

思わず目を見開いた。ノワールも驚きの声を上げている様に、確かにギョウカイ墓場で見た他の女神たちだったから。

「7人の女神。そしてその仲間達。四条優一が我らの下に来ると言うのなら、全員を解放してやろう」

「……」

あまりの事に言葉を失っていた。だって、すべての女神を、だ。それは、今ある犯罪組織の優位のほとんどを破棄すると言うに他ならない。はつきりいって、破格だった。

「本当……なのかな？」

「ああ。何なら、先に何人か解放してやっても良いぞ」

マジックは淡々と答える。何故か、事実なのだと思感した。マジックは一人でも僕たちに勝てる。さらにこの場には他の幹部もおり、人質も取られていた。此処でノワールを討てばすべて終わりであり、そんな状況で嘘を吐く意味も無い。

提示された条件は破格であり、ゲームギョウ界にとって、女神にとって、そして僕の友達にとって破格だった。僕はどうなるのか解ら

ない。だけど、他の女神が解放され、妹のユニ君も帰ってくる。ノワールが一人で肩肘を張る必要も無くなり、ユニ君やケイさんをはじめとするラスティションの人たちも彼女を支えてくれるだろう。姉妹が力を合わせ、女神同士も協力するのならば、きつと犯罪組織に勝つ事もできる。現に、僕とノワールの二人で、ジャッジを討つ事には成功していた。それは、ノワールが強くなったと言う事だった。今すぐには勝てないかもしれない。けれど、何時かは勝つ事が出来るだろう。そう、直感した。なら、迷う理由は無い。

「本当なら……」

「ふ……、気に入らないようだな」

一も二もなく承諾しようとしたところで、マジックが遮った。その視線は気付けば僕では無く、傍らに居るノワールを見ていた。そこで初めてノワールの顔を覗き見る。何かをこらえている表情で僕を見ていた。良く見れば、その女神特有の綺麗な空色の瞳に涙が浮かんでいる。

「今、なんて言おうとしたの?」

「……破格の条件だよ。考える余地が無い」

ノワールに睨み付けられる。取り繕う言葉は出す事が出来たのだが、ノワールに見詰められると、何故か口に出す事が出来なかった。素直に答えていた。

「やっぱり……。けど、嫌よ」

「っ、どうしてかな。あれだけの条件だよ。そしておそらくマジックは本気だ」

面白そうに見つめているマジックを見つつ、ノワールに告げる。

「だってそれじゃ……。それじゃあ、また貴方に辛い思いをさせる事になる。そんなのは嫌なの!! もう、私は大事な友達を犠牲にしたくないの……」

「……」

返す言葉が無いとはこの事だろう。ノワールはただ僕の事を心配してくれているのだ。犯罪組織に言ったらどうなるか解らない。それを危惧しているのだろう。

「なら、賭けをしないか黒の女神よ」

「賭け？」

不意にマジックが声を掛けた。ノワールがマジックをしつかりと見据え、問い返す。その姿に弱弱しかった姿の面影は見えず、どこか輝いているように思えた。

「何、簡単な賭けだ。私と貴様が戦い、一太刀でも私に触れる事が出来たのならば、四条優一の事は無しで女神全てを開放してやろう」

「本気で言っているの？」

「ふ、無論だ。貴様では私に触れる事すらできんよ」

マジックは淡々と答えていた。どうやったとしても自分が負ける事は無い。言葉は無くとも、静かに佇む存在感が何より雄弁に語っていた。

「何も言っておる、マジック!?!」

「本当に出来ると言うのだな？」

「ふ、心配する事は無いトリック、ブレイブ。貴様たちは黙って見ていると良い」

慌てて異を挟むトリックと、念を押すブレイブにマジックは気負いも無く答えていた。それ程自身があると言う事なのだろう。

「乗るわ」

「本気、かな？」

「うん。さつきユウは私に信じてって言ったわよね？」

「言ったね」

頷く。確かにそう言っていた。

「なら、今度は私を信じてくれる？」

「……解った。君を、信じるよ」

この言い方はずるい。そう思ったが、頷く事しかできなかった。彼女は僕のために戦おうとしている。その行動に、嬉しいと思ってしまうから。本当なら止めなければいけない筈なのに、背を押す事しかできなかった。

「話をついた様だな」

「ええ。マジック、一つ貴女に聞いても良いかしら？」

「何だ？」

互いの武器を構え、ぶつかり合いが始まる。その直前にノワールが口を開いた。

「貴方はユウの事を欲しいって言ったわね。アレは、どういう意味？」  
「……ラステイシヨンの女神は愚かな事を聞くのだな」

「なあ!? 誰が愚かなのよ!？」

マジックの失望したような返答に、ノワールは思わず声を荒げていた。

「女が男を欲する。答えなど一つしかないだろう?」

「それって……。その姿貴女だって女神のはずよ! それなのに、そんな事……」

「女神だからどうした。私が欲しいと思った。それ故手に入れる。それだけではないか?」

「っ、だからって」

「もう良い。貴様はこれ以上語るな。語るだけ、無様なだけだ。自分の気持ちすら決められないで、何が女神だ」

「なんですって!？」

そう言い、マジックは言葉を閉じる。一度、マジックがこちらを見詰めた。感情の色が、見られなかった。だけど、何かしらの感情が動いている。そんな気がした。

「私からも一つだけ教えてやろう」

「……何よ」

マジックの言葉に無然とした様子でノワールは答える。何か、嫌な予感がした。

「今日は、本気だ」

マジックが静かに告げていた。瞬間、ぞくりとした恐怖感が広がる。死の恐怖だった。ただ、それは僕が死ぬと言う恐怖では無い。友達が、ノワールが殺されると言う直感だった。

——マキシمامチャーシ。

手にする長釣丸を、これ以上ない速さでSOCに再構築する。

「…………え?」



呆けた様なノワールの声。次の瞬間、マジックの刃がノワールの体を引き裂いていた。

「く、あ、きやあああああ!？」

異界の魂である僕ですら、視認するのが困難な速さで放たれる凶刃の連鎖。途切れる事の無い、大鎌の刃による斬撃の壁に、ノワールは一瞬で呑み込まれていた。凄まじい速さでノワールの体に裂傷が刻まれていき、鮮血が舞い散る。そして、

「アポカリプス・ノヴァ」

数多の斬撃で切り刻んだノワールを、大鎌の柄で吹き飛ばす。既にノワールの声からは悲鳴も上がらず、意識が奪われているのが解った。それでもマジックが止まる事は無い。そのまま大鎌に凄まじい速度で魔力を収束させ、一閃する。同時に、ノワールの周囲に圧縮された魔力が広がり、爆発した。凄まじい爆砕音が鳴り響き。既に勝敗が決しているのにも拘らず、ノワールを吹き飛ばしていた。

「終わりだ、死ね」

「――ジエネシック G ドライブ」

マジックがノワールに向かい止めの一閃を放つその刹那、声が響き渡った。同時に、マジックだけを射抜くような強烈な圧迫感が周囲に満ちる。異界の魂。四条優一が瞬間的に再構築したSOCを構え、ノワールに止めを刺そうとしたマジックに向け、その牙を剥こうとしていた。魔剣に宿る、天魔の王の力。それを全力で用いる事に何の疑問も無い。四条優一の眼を見れば、マジックにはその事が容易に想像する事が出来た。

「少し、熱くなりすぎたな」

あと数舜遅ければ、異界の魂が動く。そのギリギリのタイミングでマジックは刃を止めた。その瞬間に、マジックを襲った圧力は跡形もなく消え、四条優一の持つ魔剣は元の姿に戻っていた。マジックが止まったことで、意識を失っているノワールの方に目が向いたと言う事だった。

「ノワール！」

黒の女神が地に墜ちる直前、何とか受け止めた優一は焦ったように声を荒げた。それ程までに、マジックの攻撃は苛烈を極めたからだ。即座に回復魔法を施す。

——月光聖の祈り

それで、幾分かマシになってはいたが、直ぐにノワールの意識が戻る事は無かった。

「マジック。取引の事だけど本当に女神を全員解放するのかな？」

「ああ」

「それを君が守ると言う証拠は？」

「先に全員解放しよう。それで構わんだろう？」

ノワールに治療を施し、マジックに向き直った。思わずマジックを切りそうになったけど、その気持ちを抑え込む。マジックの本気の強さを目の当たりにしていて。恐らく今の僕では敵わない。そして、僕がこの先ノワールと二人で挑んだとしても。そう思えるほどのものだった。ならば、僕はどうするべきなのか。この一瞬の攻防で、答えが出ていた。ノワールとユニ君、そしてすべての女神を開放する。それが、マジックに勝つ絶対条件だった。そして、それはマジックがいる限り正攻法ではできそうにない。だから、僕の中で、結論は出てしまった。

「良いのかな？　僕が嘘を吐くかもしれないよ」

「貴様はそんな事はせんよ。貴様にとって、黒の女神とその妹は掛け替えのない存在なのだろう」

「……否定はしない」

「ふ、そうか。だが、それ以上にな、貴様にはそのような事が出来ない。女神が大事だからこそ、女神と共に居れず、我等と共に来るしかないのだからな」

「あの子たちが大事だからこそ、共にいけない？」

「ただ、一つだけ気になる事があった。犯罪組織が全ての女神を開

放してしまえば、僕が犯罪組織に居る理由は無くなる。その事実をマジックが認識していない筈が無い。それにも拘らず、マジックがなぜそのような事を言い出したのか。それを聞いたかった。

「そうだ。女神の目的は我らを倒し、ゲームギョウ界を平和にすることなのだろう。本当にそんな事が出来るのか？ 真実を知ったとしても」

「っ!」

マジックはさも愉快そうに言葉を紡ぐ。そこまで聞いて、彼女が言おうとしている事が理解できてしまった。最初から分かっていた。だからこそ気を付けていたが、ある意味で盲点だった事。

「黒の女神とその妹。あの二人は、この世界を救えば女神によって呼び出された四条優一は死を迎える。その事実を知って尚、我等に勝てるのか？ 世界を救えるのか？」

「それは……」

素直に頷く事が出来なかった。今の状態でさえ、ノワールは女神全員の解放に頷いてくれなかった。ゲームギョウ界を救えば僕が死ぬ事を告げたら、どうなるのか。あの子は、女神としての責任を果たせるのか。できると自信を持って言う事は出来なかった。

「そして他の女神達。自分たちの都合で呼び出された何の関係も無い人間、それを理不尽に犠牲にする事が出来るのか？ その事実を、我らが奴らに知らせて確かめるのも面白いと思わないか？」

「……」

「だが、四条優一が敵になれば女神たちも戦えるだろう」

「敵に？」

「そうだ。ゲームギョウ界を、女神を破壊する。そんな組織に属しているのならば、女神とて戦わざる得ないろう。やらねばやられるのだから。そうなれば、女神たちにも世界を救う可能性が見えてくる。尤も、我らは負けてやらんがな」

「確かに、ね。……ははは、そこまで考えてたのかい。まったく、呆れるよ」

思えば、マジックとブレイブには女神以上に僕の情報を知られてい

た。言ってみれば、最初から最大のカードを握られていたのだ。そして、僕が領かなければ、ばらすと言う事だった。ノワールを焚き付けて意識を奪ったのも、このための布石だったのだろう。僕が彼女たちに知られたくない事を知っているから。封殺されていた。

気付けば、逃げる事が出来ない様に全身を絡め取られていた。最初からこうなる様に仕向けられていたようだ。周到過ぎて、感心してしまった。

「お願いしても良いかな？」

「ふふ、構わんぞ。仲間になるのだ、少しぐらいは聞いてやろう」

「あの子たちがきちんと解放されるところを見たい。そして、その報告だけでいいからさせて欲しい」

最早、どうする事も出来なかった。ならせめて、最後に女神たちが解放されるまでは、彼女たちの味方でいたかったのだ。それが、僕の最後の我儘だった。

「女神たちの拘束具は、シエアの力を用いれば斬れる。斬ってみると良い」

「シエアの力を？　だけど、今の僕はシエアクリスタルを持っていない」

「いいや、できる。お前にはその力が宿っている。あの時女神に呼び出されたお前には、女神四人分のシエアも宿っているのだからな」

「あつたとしても、使い方が解らない」

マジックの言葉には心当たりがあつた。確かに僕にはシエアの力があるのかもしれない。だけど、僕自身には使う術が無かつた。

「いや、知って居る筈だ。貴様の持つ能力。それによって、使える」

「能力？　剣を読み取り、再現する能力」

「それがお前の能力か。ならば、使ってみせろ。シエアの力を使うのに御あつらえ向きのお前を知って居る筈だ。剣を使う黒の女神と共にいたのだからな」

「……っ!？」

マジックの言葉に意表を突かれた。女神の剣。それを読み取ろうと思つた事など無かつた。だが、何度もノワールの剣を見ていた。こ

の身で味わった事もある。できる。そう直感した。

——プロセツサユニット展開

長釣丸を手にしノワールの剣をイメージし呟いた。女神が変身するような、否、女神が変身する時と同じ輝きに包まれ、その姿を変えらる。やがて、光が収まり、ソレを見た。

「やはり、できたか……」

マジックの口から感嘆が零れ落ちた。この手にしていたのは、黒き剣だった。女神の持つソレと、まったく同等の代物。実際には再現率の問題もあり劣化している筈だが、この身で経験したものだ。限りなく、本物に近い完成度と言えた。

「あれ？」

剣にばかり気を取られていたが、周りを見て驚く。気付けば、ノワールの様に羽など、他のプロセツサも展開されていたから。僕の能力は剣を再現するものだった。どう言う事だろう。

「女神の武器自体がプロセツサユニットなのだ。お前には充分すぎる程のシェアの力がある。その為、剣を再現した時点で他のものまで一緒に再現されたと言う訳だろう」

マジックの言葉に頷くしかなかった。理屈よりも先に、やるべき事がある。女神の解放。ソレを成すのが、僕の目的だから。

「今、助けるよ」

呟き剣に力を込める。シェアの使い方は、剣が、ノワールが教えてくれたような気がした。思い出すのは、ジャツジを斬り裂いた虹色の剣。純粋な輝きだった。呟く。さようなら、と。

——トルネード・ソード

ノワールが見せてくれた虹色の剣。ソレを以て、女神たちを拘束する触手を残す事なく斬り裂いていた。

——月光聖の祈り

全員に魔法による治療を施す。皆消耗が激しいが、幾分かマシになっているように思えた。ソレを確認し、携帯を取り出す。ケイさんとノワールに持たされたものだった。

《ケイさん、四条優一です。すべて、終わりました》

《そうか。それで首尾は?》

連絡に出たケイさんは、直ぐに結果を聞いて来た。余程気になっていたのだろう、急かされているように感じた。

《救出できました。全ての女神を、救出完了しました》

《……え?》

電話越しに、ケイさんの呆けた声が聞こえた。珍しいものが聞けたと思ひ、小さな笑いが零れる。

《全ての女神候補生と、その仲間。そして捕えられていた女神。その全てが救出完了しました》

《ほ、本当かい!?!》

あのケイさんが慌てている。最後に良いものが聞けたなあつとしみじみに思えた。

《それで、ラストインションとルウィーの部隊の人はどれぐらいでこれですか? 近くに来ているのでしょうか?》

《君には何もかも御見通しのようだね。数分で辿り着ける場所に展開しているよ》

尋ねていた。犯罪組織との取引だった。国が介入していない筈が無い。

《解りました。直ぐ、来てください。それで終わりです》

最後にそう告げる。これで僕のやるべき事は終わっていた。後は、女神たちの国が何とかしてくれるだろう。ふう、つとため息が零れた。

《四条君?》

僕の様子を不審に思ったのか、ケイさんが言った。それに応えないまま、空を見上げた。女神が解放されるに相応しい、綺麗な空であった。

「もう良いか?」

「あと少しだけ待って。すぐ終わるから」  
「解った」

確認するマジックに、頷く。やるべき事は終わっていた。あとは、僕が個人的にやりたい事だった。

《ケイさん、今までありがとうございました》

《……本当にどうしたんだい？ それに誰かいるのかい？》

《言いたくなっただけですよ。貴女やラステイションの人々、そしてノワールとユニ君。皆に会えて良かった》

《四条く——》

そこまで告げると、ケイさんが何か言おうとしたところで、電話を切る。そのまま電源を落とした。携帯を手にしたまま、ラステイションの女神の下へ向かう。意識を失った姉妹を隣り合うように寝かせていた。二人の間に膝をつく。眠っている姿は、本当によく似ている。そうしみじみと実感した。

「ごめんね。それと、ありがとう」

右手でノワール、左手でユニ君。二人の頬に一度だけ触れる、小さく呟いた。それが、友達との別れの挨拶だった。

「もう良いか？」

「待たせたね。今行くよ。——っ!？」

マジックの声に振り返り、応じる。これから先は、犯罪組織に居る事になる。その為、マジックに連れられて行くところだった。立ち上がろうとしたところで、不意に引っ張られた。思わず、振り返る。二人とも未だに意識を戻した様子は無い。だけど、

「行っちゃダメ……」

「これ以上、置いてかないですよ……」

確かにそんな声が聞こえた気がした。そして、姉妹に服の袖を握られていた。無意識に掴んだのかもしれない。二人の様子を見てそう思ったけど、言葉が出る事は無かった。

「どうかしたのか？」

「いや、なんでもない。直ぐに行くよ」

止まった僕に三度目の声を掛けて来たマジックに伝える。そして弱弱しく掴む二人の手をゆっくりと振り解き、立ち上がった。変わりに二人の手が僕が貰った携帯を掴むように握らせる。

「さようなら」

最後にそう告げ、その場を後にした。

この日を境に、  
四条優一は女神の前から姿を消した。



### 31話 犯罪組織

刃が煌めいた。全てを刈り取る絶望を体現したような黒から延びる紅。月光の淡い光でその刀身が怪しくも美しい弧を描く。背筋がぞくりとする程の一撃の冴え、途切れる事の無い斬撃の連鎖。休む暇すら与える気の無いそれを前に、手にした剣だけを頼りに迎え撃つ。手にするのは蒼き大剣。S・O・C。ソード・オブ・カオス。ゲームギョウ界では無い別の世界で、神器と言われるほどの力を持つ魔剣だった。蒼と紅の軌跡が音を越えた速さでぶつかり合い、何も無い場所に火花だけが現れては消える。既に刃が辿る軌跡など、見る事は敵わなかった。対峙する相手、マジックの瞳と呼吸、身体の細かい位置から刃の奔る位置を割り出し、撃ち落としていく。風を切る音一つをとっても、戦いに於いて大きな情報を与えてくれるのが、犯罪組織に来た事によって解るようになっていた。自身の能力を用い、五感全てを使い切る事で例え視る事が出来ない程の斬撃であろうとも、この身に触れる事は無かった。「そうだ、それで良い。お前の力は、異界の魂の力はこの程度では無いだろう」

紅の軌跡を途切れる事無く紡ぎ続けるマジックが、その無感動だった瞳に確かな好奇の色を宿らせる。抑える事すら憚らない喜色を滲ませたその声音は、何よりも雄弁に語っている。見せて見ろ、と。世界を制すると言われている、異界の魂としての力を解放しろと言っていた。

「君が相手だと言うのなら、ある意味で都合はいいね。例え斬ったとしても、それはそれで良い。あの子たちの為になる」

両の手で魔剣を強く握りしめる。女神たちと共にいた時よりも遙かに再現率が上がっていた。犯罪組織に来て数日。ただマジックと戦い続けていた。強くなれ。それが、マジックが僕に出した、ただ一つの条件だった。

たった数日、だが、休む間もなくマジックと刃を交わし続けていた。文字通り、戦い続けていた。自分でも驚くほど、動いている。この鍛錬とも殺し合いとも取れないぶつかり合いを始めて、一度たりとも刃

を下ろしていない。自分が異界の魂と言う事を差し置いても、異常な事であった。だが、その理由は解っている。四条優一は既に死んでいる。その事実があったからだ。そして、僕は自分の事を諦めると決めてしまっていた。それは、自身が人間であると言う事を、やめると言う事だった。身体は既くない。ゲームギョウ界における僕の体は、シェアで構成された仮初の器だった。これまでは僕が人であることに固執していたから、人間特有の限界があった。だけど、今その枷は解き放たれていた。どれだけ戦い続けたとしても、自分が意識しない限り、疲労と言うものさえも感じる事が無かった。

「それは無理だろう。貴様は強い。だが、まだ私には届かない。それでは、私は討てんよ」

「まったくだよ。本当に君はどういう次元の強さなのか。僕だって少しずつ人を辞めて言っている筈なのに、まるで届く気がしない。女神四人でも勝てなかったって言うのも納得だよ」

刃を交わし、言葉を交わす。一太刀でもこの身に受けければ、それで終わるだろう。そう思える程の紅の応酬にも、心が動かされる事は無い。どう転んでも死ぬ事は無い。ソレを確信してしまっただけ。手にする魔剣が、更なる力を溢れだす。ただ只管に、自分の力を引き出す事にだけ尽力する。強く、ただ強く。それだけをイメージする。

「ふふ、女神など物の数では無い。敵として相対するのなら、お前の方が遥かに厄介だ。ただの人の身でありながら、これほどまでに私に喰らいついて来る。その力、そして想い。実に興味深いぞ」

「それはどうも。僕だって不思議だよ。だけど、ただ守りたかった。それが自分には出来る。なら、やるだけなんだ。それでどうなるうとも、ね」

「だからこそ、貴様は厄介だ。四条優一、お前は本当に自分がどうなるうと一顧だにしない。既に変える事の出来ない結末が定まっているからこそ、どのような行動でも躊躇なくとれる。それが、気に入らない」

互いの力がぶつかり合い、力と力が混じり合い一つの奔流となり、爆ぜる。視界を奪うかのように衝撃波が駆け抜けるが、そのまま刃に

力を込める。マジックもそれに応える様に押し返してきていた。大剣と大鎌の鏝迫り合い、至近距離で視線を交わす。

「気に入らない？」

疑問だった。あのマジックが、露骨な感情を露わにした。それに興味が悪かれた。

「私に立ち向かえるほどの力を持ちながら、全てを諦めていた貴様が。四条優一と言う犠牲者を出しながら、その事実にも気付かずに守られている女神たちが。そして、我等の問題に異世界をも巻き込んだこのゲームギョウ界もだ」

あのマジックから出た言葉とは思えず、驚きで気を取られてしまった。その間にも、繰り出される紅が留まる事は有り得ない。紅が迫る。鮮血の様な紅をただ見据えた。

「好き勝手言ってくれるね」

「……ほう」

有り得ない動きをしていた。見えるはずの無い刃を、気付けばはつきりと視認していた。遮れるはずの無い一撃を、無造作に打払った。高揚も無い。予感も無い。ただ当然の如く、打払う事が出来た。

「僕が何も思っていないとでも？ 奪われた事をただ許せたただけとでも？ 未来が無いと言われて、それでもただ笑って許容できたとでも？」

それは、僕の本音だったのかもしれない。

「出来る出来ないでは無い。現にお前は、していたではないか」

「そうするしかなかった。既に終わったことだった。真実を知った時、僕は女神の事を好きになった後だった。助けて欲しかった。だけど、それは女神にはどう足掻いても無理な事だった。だから、諦めるしかなかった……」

何もわからぬままこの世界に呼びだされ、この先手にする事が出来ないと思えたものを与えられ、変わりに手に入れる筈だったものを全て奪われた。何も思わなかった筈が無い。恨まなかった筈が無い。だけど、それをぶつけるべき相手を、好きになってしまった。だから、言わなかった。言えなかった。確かに苦しかったけど、それ以

上に自分の所為で苦しむ友達を見たくなかったから。そこまで考えたところで気付いた。結局、僕はあの子たちを苦しめているだけなのではないか。

「それがお前の本音か。四条優一の、叫びなのか？」

「……そうだよ。ただの人間でしかなかった僕の、想いだ」

不意に、マジックが力を緩めた。そのままマジックの体に倒れ込んでしまう。手にする魔剣に、何かを切るような手ごたえを感じた。何か言うよりも早く、抱きしめられる。

「やはり、お前は弱いのだな」

「最初から強いなんて言った覚えは無いよ」

至近距離で目が合った。相変わらず、無感動な瞳だった。だけど、何故か優しいと思ってしまった。

「私ならば助けてやれる。お前を、生かしてやれる」

「……」

ただ抱かれていた。手にしたSOCからマジックの血が滴り落ちる。それを気にも留めず、マジックは言葉を紡ぐ。

「強くなれ、四条優一。異界の魂としての力、それを解き放て。そうすればお前は」

「女神を壊し運命を変えられる、つとでも？」

抱きしめられたまま、マジックの瞳を強く見返す。甘い誘惑。マジックの言葉に領けば、確かに僕の未来を掴めるかもしれない。だけど、

「変わりにあの子たちから奪ってまで、未来を生きようとは思わないよ。元々僕は死に損ないだからね」

「……そうか、それは残念だ」

それは大事な友達を犠牲にと言う事だった。既に僕の未来は無い。それを覆すために、好きな人から奪うなんて事、できる訳が無い。そんなのには、意味が無かった。だから、マジックの言葉に乗る事だけはできる筈が無い。

「だが、気が変わったら何時でも言うの良い。私ならば、貴様を救ってやれる。それは事実なのだから」

マジックは僕から離れた。いつの間にか、刃を交えると言う空気では無くなっていた。

「そんな事は、有り得ないよ」

「ふふ、そうかな。どちらにせよ強くなれ。それがお前の未来を紡ぐ事になるのだから……」

意味深な事を呟くと、マジックは姿を消した。僕を引き入れた事と言い、いまいち目的が読めなかった。どういう思惑があつて、こんな事をするのか。考えても答えは出る事は無かった。

「ようやく解放されたか。マジックも無茶をする」

そう言つて声を掛けてきたのは、ブレイブであった。犯罪組織の拠点と言うべき場所の一つ。ラストイションとルウイーの境界に連なる山間部にある、犯罪組織の拠点に僕はいた。この場所に来るなり、マジックと戦い続けていた為、話す暇も無かつたと言う事だった。

「たしか、ブレイブだったね」

「覚えていたか。俺の名はブレイブ・ザ・ハード。犯罪組織マジエコンの幹部。これからはお前の同僚となる。改めてよろしく頼む」

「同僚？ 上司では無く？」

久しぶりに見たブレイブに、懐かしさのような奇妙な感覚を覚えていると、すこしばかり聞き逃す事が出来ない事を言われた。

「ああ。二人掛かりとは言えジャツジを討つたお前が、つい先ほどまでマジックを相手に戦い抜いた。それで、お前の力は証明されている。構成員では役不足であり、四天王には空きがある。ならば、其処に居れるのが順当だろう」

「成程、ね。マジックは其処まで僕を逃がしたくないわけだ」

ブレイブに言葉に苦笑する。マジックの思惑がある程度分かった。本心で無いとはいえ、僕は犯罪組織に所属する事になった。それも構成員の様な小さなポストでは無く、幹部と言う良くも悪くも目立つ位置に立たせ、逃げられなくするためだろう。今はまだ犯罪組織として活動をしている訳では無いけど、一度でも表立って行動をすれば、逃

げられなくなると言う事だった。

「マジックには様々な思惑がある。その中には逃さないと言うのも入っているだろう。それとは別に、俺としてもお前には組織に居て欲しいと思う」

「そう言えば君は、僕を最初に勧誘してきたね」

「ああ、そうだ。女神によって未来を奪われた。だが、俺たちが女神を討てばお前に未来を与えてやれる。俺は、お前を助けたい」

ブレイブの言葉に意表を突かれた。マジックの言葉とは違い、それは純粹に僕を助けたいと思っているのが解ったから。以前ブレイブは、女神では助けられない子供たちの為に剣を取ったと言っていた。ブレイブにとっては、僕も同じなのかもしれない。

「お前は本来ゲームギョウ界には何の関係も無い。それが、女神の都合により呼び出され、利用され、殺されている。お前自身が許そうとも、俺が女神を許す事が出来ん。だから、与えてやりたい。お前にもう一度未来を、な」

「……ありがとう」

「ふ、気にするな。今はまだ信じられないだろうが、俺はお前の事を仲間だと思っている。そして仲間がどうしようもない程に傷付けられていた。ならば、救うのにどれほどの理由がある」

そうするしかなかったから、犯罪組織に所属する事になった。だけど、ブレイブの様な者もいるのかと思うと、少しだけ救われた気がする。少なくとも、あの子たちと一緒に居る時にはどれだけ辛くても弱音を吐く事は出来なかった。イストワールさんやケイさんも事実を知っていたけど、それでも相談できる訳が無かった。だけど、ブレイブは僕の真実を知って尚、諦めずに手を差し伸べようとしてくれた。それが、少しだけ嬉しくて、救われた気がする。

「正直言うと、犯罪組織に良い思いは無い。けど、君の事は好きになれそうだよ」

「そうか。今はその言葉が聞けただけで充分だ」

本心から出た言葉にブレイブは小さく頷く。マジックは信用できないが、ブレイブは信じてても良いような気がした。

「あ！ 其処に居るのはブレイブ・ザ・ハード様!!」

「ホントだっちゅ！ それにもう一人は……あれっちゅ？」

ブレイブと話していると、そんな声が聞こえた。振り向く。二人、  
と言うか一人と一匹がこちらを見ていた。

「リンダとワレチューか。丁度良い、紹介しよう。ジャツジの代わりに新しい幹部となる人間だ」

「新しい幹部……!? とする事はコイツ……、じゃなかったこの人が女神と共にいたって言う異界の魂ですか？」

「そうなる」

二人のうちの一人、灰色のパーカーを着た緑髪の女の子、リンダが僕を指さして言う。所々おかしな言葉遣いであり、敬語で喋ろうとはしているのだけど、無理をしているのが良く解った。

「ああ!? お兄さんっちゅ！」

不意にもう一人と言うか一匹が声を上げた。その声に以前聞き覚えがあった。と言うか、喋るネズミである。幾ら異世界とは言え、そんな相手はそうそういないと思う。直ぐに誰か解った

「ああ、何時ぞやのネズミ君か。確かワレチューだったかな？」

「そ、そうでちゅっ！ その節は、ありがとうございましたっちゅ！」  
「いやいや、気にしなくていいよ」

大袈裟に頭を下げるネズミ君に苦笑する。そう言えば、一度怪我しているところを助けていた。

「それにしても、意外だな。君が犯罪組織の一員だったとはね。世界って言うのは意外と狭い」

「そうっちゅね。あの時のお兄さんが、噂の異界の魂とは思わなかったっちゅ。縁って言うのは、何処から出るか解らないものっちゅ」

知った顔を見つけた所為か、幾分か落ち着いて話す事が出来た。

「何だよネズミ。知り合いだったのか？」

「前に助けてもらったっちゅ。颯爽と現れて、ろくなお礼を言う間もなく去って行かれたっちゅ。そうだ、アニキって呼んでも良いっちゅか!?!」

「まあ、良いけど」

リンダに聞かれていたワレチューが、僕の方に向き直るとそんな提案をしてくる。どうしたものかと思っただけ、慕ってくれているようだし別に良いかと承諾する。とは言え、アニキって言うのは少しばかり気恥ずかしいが。

「やったつちゅ！　これからよろしくお願いするつちゅ。四条のアニキ！」

「ああ、うん。よろしく」

何故か奇妙な人間関係が出来てしまった。ネズミ君はネズミだから、人間関係って言って良いのかは解らないけれど。

「成程、知り合いだったか。ならば丁度良いな。慕っているようだしワレチューを付けようか。ワレチューにはルウイーでの仕事を任せである。二人でやってみてくれ」

「解ったよ」

ブレイブの言葉に頷く。正直、気乗りはしなかった。ルウイーの女神は直接知らないけど、自分呼び出した女神の一人だった。つまり、ノワールとユニ君の味方だ。解っていた事だけど、思うところがあつた。

「あ、アタイも一緒に構いませんか？　ジャツジ・ザ・ハード様の後釜の人がどれだけできるのか、興味がありますし、ネズミだけじゃ心配ですから」

「構わんぞ。あとは任せる」

リンダの提案にブレイブは頷く。三人で行動する事になる様だつた。

「下つ端に心配されるようじゃ、オイラもまだまだつちゅね」

「おい待て、誰が下つ端だ誰が！　テメーも立場は一緒じゃねえか」

「オイラは下つ端程失敗してないつちゅ」

「んだとこら！　お前だつて女神候補生にボコられてたじゃねえか」

ブレイブと別れ三人になったところで、ワレチューとリンダが言い合いを始めた。苦笑しながら見ていると、思わぬ単語を聞いた。女神候補生。犯罪組織なのだから聞くのは当たり前なのだけど、早速聞くとは思わなかった。



「君たちは女神候補生と戦った事があるのかい？」

「あるつちゆ。まあ、下つ端の言う通り、下つ端がぼこぼこにされただけつちゆけど」

「うおい！ テメーもボコられてんだろーが。ぜってー次こそは負けねえー！」

「あはは、そっか」

どうやら二人とも面識があるようだ。しかも、地味に因縁がありそうである。本当に世の中は狭い。二人の言葉を聞いていると、そう思えた。女神と袂を分かっていた。だから何れ相對する時はあるだろうと覚悟はしていた。だけど、ソレは直ぐにでも起こりそうな気がした。

### 32話 もう一つの名

「5 p b. ?」

「そう、リーンボックスの歌い姫がルウイーにコンサートの為滞在しています。女神が捕えられていた時はその所の為で中々シエアが奪えなかった。既に女神が復活したから5 p b. を狙う意味はあんまりないんだが……ですが、まずは切り取りやすいところから崩していくって訳です。あとその後続けて別件もあります。それについては終わってから説明しますね」

リンダからルウイーに行く目的を聞いていた。リーンボックスの歌姫5 p b.。女神不在の間、女神候補生もいなかったリーンボックスがなんとか国としての体を成せていたのは、教祖と彼女の存在が大きかったらしい。先日の取引の結果女神が解放された為、今の彼女は以前ほどに重要と言う訳では無いのだが、直接女神を相手にするより遥かに楽であるため、手始めに狙われたと言う事だった。

さらにルウイーに居ると言うのも都合の良い要素だった。リーンボックスの歌姫が、ルウイーで犯罪組織に捕まったとなれば、ルウイーのシエアも同時に下降させることができる。そう言う狙いがあるようだ。

「了解した。だけど、歌姫5 p b. ね。僕は聞いた事が無いな。そんなに凄いのかな？」

「ああ、じゃない、はい。女神が不在の間、リーンボックスの人間が心の支えにしていた程ですから」

リンダの言葉に成程、つと頷く。女神が不在と言うゲームギョウ界の人間にとっては一大事の時に、国を支えていた。それだけの物を持っていてと言う事なのだろう。素直に凄いと感心する。

「それはそうとリンダ。別に僕に敬語を使わなくてもいいよ。話し辛そうだ」

「え！ だけど、良いんですか？」

「構わないよ。一応は幹部と言う事らしいけど、僕も君とそう変わらないからね。ただの人では無いけど、だからと言って偉い訳でも無

い。いや、幹部だから偉いのかもかもしれないけど、僕は気にしない」

明らかに話辛そうなりンダに楽にするよう伝える。僕としても敬われるような事をしたわけでは無いから、居心地が悪い。

「ですけど。……いや、良いか。アタイたちだけの時はそうさせてもらうわ」

「ん、それで良いよ」

少しばかり渋ったようだけど、リンダ自身やり辛かったのだろう。直ぐに了承してくれていた。

「話を戻そうか。とりあえずはその5pb.のコンサートを妨害するのかな」

正直言えば、あまり気乗りはしない。女神の協力者である。つまり、あの二人にとつても協力者と言えた。その邪魔をする。そう考えると少しだけ気が重い。だけど、必要な事だった。僕が女神と明確に敵対した。そう思わせる為には必要な段階だった。

「ああ。多分ルウイーの女神と女神候補生も出て来ると思う。復帰して早々ご苦労なこった」

「だからこそ、ねらい目だって事だね。出鼻を挫くと言う訳か」

「そう言う事だな」

詳しい事は現地に行つてから詰めるようだ。今解っている事は、5pb.のコンサートの邪魔をすると言う事だった。

「此处です、ちゅー！」

「あんないご苦労だったな、ワレチュー」

話もそこそここのところで、別の準備をしていたネズミ君が戻つて来て言った。その背後にマジックが佇んでおり、僕の事を静かに見つめている。

「マジック様!？」

「今度は何の用かな?」

驚くリンダを横目に、マジックに尋ねる。出立しようと思えばできるけど、まさか見送る為に来たわけでは無いだろう。

「二つほど言っておきたい事があつてな」

「何かな、マジック」

「貴様の犯罪組織における名だ。流石に四条優一では不都合がある。だから用意した」

「ソレは確かにね」

マジックの言葉に頷く。確かに不都合はあった。僕としてはとうよりも、ラスティシヨンにだが。

「ブレイク・ザ・ハード。それがお前の犯罪組織における名だ。覚えておけ」

「ブレイク、ね。確かハードって言うのは、守護女神の事でもあるんだったね。実に嫌な名を与えてくれる」

「ふふ、だがだからこそ都合が良い、だろう?」

「まったくだよ。相も変わらず、怖い位に僕の思考を読む」

異界の魂として召喚された知識の中にあつた。国を守護する女神。ノワール達の事は別名守護女神ハドとも言う様だった。つまり、マジックは暗にこう言っているのだ。女神を壊すと言う意思を示せ、と。そして、ソレは必要な事でもあつた。見透かされている。マジックはある意味でケイさん以上にやり辛い相手だった。

「ふふ、好きな相手の事だからな。お前の事ならば大抵は解る」

「性質の悪い冗談だね。僕の思考を読みきり、封殺した人が何を言うのか」

「随分と嫌われたものだな」

皮肉の一つも出る。マジックには色々な意味で負け続けていたから。

「それでもう一つと言うのは?」

「ああ、お前の能力の事だ」

「と言うと、剣を読み取り再現する能力、かな」

「そうだ。お前の能力、その行きつく先。それについてだ」

マジックが態々言いに来た。それだけでも聞く意味はあるだろう。黙って促す。

「今のお前は剣を読み取り、その記憶を再現しているな」

「ああ、だから僕は他の剣と使い手たちの技も使える」

「だがそれはあくまで再現であり、本物を超える事はできない。そう

言う事だな?」

「そうなるね。あくまで僕の力は借り物だよ」

剣の記憶を読み取り、様々な記憶を再現していた。マジックとの戦いでその再現率は飛躍的に上昇したが、それでも本物を超える事はできない。並ぶ事すらもまだできていないだろう。それが今の僕の能力だと言える。

「だが、お前はその力を使い、この世界で再び剣を作り出す。作る事が出来るのだな」

「何が言いたい?」

マジックは確認する様に頷く。読み取った記憶を元にこの世界で再び限りなく同じものを作り上げていた。それが僕の力の基礎であり一端だったから。

「つまりお前は、自身の力を用い、自身の意思で剣を作る事が出来るのだ。ならば、最適化する事もできるだろう」

「……それは」

マジックの言葉に意表を突かれた。それは、僕の能力における、次の段階とすべきものだったから。今の僕の能力は、剣を読み取り再構築する事だった。つまり、例えるなら凶面をもとに作り治すと言う訳である。そしてマジックが言ったのは、より自分にあつたように再構築した武器を鍛え直せと言う事であつた。読み取った武器に更なる力を加えアレンジしろと言う事だった。本物を超える事はできない。それならば、別の物を生み出せば良い。マジックの言う事はそう言う事だった。

「お前の能力は現段階で言えば、殆ど完成系と言つたものになっている。それを越えろ。そうすればさらに強くなる」

「最適化、する」

マジックの言葉に頷いた。長釣丸を引き抜く。しゅらんと、鞘から刀身を抜き放つ際に、心地の良い音が鳴り響いた。

「何をする気……ですか?」

「アニキの能力つちゆ?」

マジックの登場で黙り込んだ二人が零す。それに、まあ見てよと

宥める。もう一度マジックを見た。小さく頷く。何故かできると確信した。それはもう何度目かの、確信だった。

——プロセツサユニット展開

両の眼を閉じ、ゆつくりと呟いた。力の奔流が、シエアの力が全身を包み込むのが解った。新たな力を解き放つ。そう確信したときに、最初に頭を過つたのはユニ君であり、ノワールであった。二人の女神としての姿が、この世界に来て一番頭には焼き付いていた。二人とも似た者同士な姉妹であり、不器用で弱くて、でもだからこそ強い女の子だった。そんな二人が一番印象に残っていた。

やがてその力がゆつくりと沈静化してくのが解った。内から感じる暖かな力だけが、僕たちの目論見が成功した事をはっきりと告げていた。ゆつくりと刮目する。

「そうだ、それで良い」

マジックが小さな笑みを浮かべて見詰めていた。マジックらしかぬ優しい気な笑み。一瞬だけ、目を奪われる。それだけ意外だったから。

「そ、その姿は女神と同じ!?!」

「す、すごいっちゅー！ 確かにこれなら、ジャツジ・ザ・ハード様の変わりになれそうだっちゅー」

驚きに口が塞がらないと言った二人を宥めようと一歩進もうとしたときに気付いた。刀身が、紅かった。一端自分の全身を見詰める。最初に目についたのは、黒と紅の大剣だった。ノワールやユニ君のよくな闇に溶けいる様な漆黒を基調とした大剣なのだが、刀身だけがマジックの様に紅い。感じる力も、国際展示場で再現した時と比べて、違うモノだった。

そして、黒の刀身に映った自分の姿にも驚いた。まず、ノワールやユニ君の様に髪が白髪になっている。そして一筋だけ紅がはしっていた。白髪に一筋の紅のメッシュが入っている。黒の女神姉妹と紅の女神の特徴が混じっているように思えた。

肩や背中、足に展開されているプロセツサユニットを見詰める。ノワールのもと同じく黒と灰色を基調としたモノなのだが、やはりど

こか違っている。剣と同じく、紅が混じっているのだ。そして、やはり感じる力も少しだけ違う。ノワールとユニ君のプロセツサユニツトが、シエアだけで構成されている物ならば、僕の展開した新たな力は、この世界のシエアと異世界の魔力の複合と言ったところだろうか。より僕に合うように調整されていた。

そして何より違ったのは、

「これは、黒あの女神姉妹子たちよりも黒いね」

服装であった。以前再現したときは、服までは変わらなかった。だが今回は違う。服までも変化していた。言うならば外套だろうか。首から下を覆い隠すような、漆黒の外套が展開されていた。やはりこの外套にも、僅かにだが紅の装飾が入っていた。ノワールとユニ君が僕のプロセツサユニツトの原点であるため、黒色なのはまだ解るのだが、この少しだけある紅はどういう事なのか。少しだけ、心当たりはあった。

「それがお前の力の新たな段階だ。この世界に構築したものを自分に適応させ自分のものとする。極致に至る前の、最終段階」

「女神の力を再現し、最適化して自分のモノにした。如何にも敵役のする事だ」

剣の使い手たちの記憶を再現する。記憶の中から武器を読み取り、顕現させる。その手にした力を適応させ、自身之物に作り替える。それが、今の僕の能力で出来る事であった。そして、剣を読み取り再現する能力にはそれ以上がある様には思えなかった。だが、マジックはまだ極致に至る最終段階だと言った。それはまだ上があると言う事である。もし先があるのだとしたらそれは

「まだ剣の極地には至れまい。今は新たな境地に達した事を噛みしめる。そして、更なる段階、極致へと昇華させると良い。お前にはそれだけの力がある」

気付けばマジックが傍らにまで来ていた。ただ僕の瞳を見詰めている。その金色の瞳は、最初の頃は感情を宿す事など無いように思えたけど、ほんの僅かにだけだがその色を窺い知れるようになっていた。確かにマジックはこの結果に満足しているように思えた。

「二応お礼は言っておくよ、ありがとう」

マジックは敵である。そして、何を考えているかは見当もつかないが、気付けばほんの少しではあるけど、解るようになっていた。僕が犯罪組織に所属する原因を作った相手だから礼を言うべきか迷ったけど、結局伝える事にした。過程はどうであれ、新たな力を得ていた。それはマジックのおかげでもあるから。そして、僕を助けてくれた二人の女神さまのおかげでも。

「ふ、なに構わんさ。愛する男が新たな力を手に入れた。それも私と似た力。正確に言えば似て非なるものだが、同じようなものだ。女としてこれ程嬉しい事はあるまい」

「君は意外に冗談を好むみたいだね」

平然と言い放つマジックに呆れてしまった。どう考えてもマジックの言葉は本心に思えない。こう言う時に限って、一切感情の色が窺えない為その想いに拍車がかかる。

「ブレイク様」

「……、ああ、僕の事だったか。何かな」

不意にリンダに名前を呼ばれた。先程マジックに与えられた名前だった。女神の力を自分用に最適化した姿でその名を呼ばれると、本当に自分が犯罪組織の幹部になってしまったのだと、否が応にも自覚してしまった。女神の力を自分のモノとしていた。これから先、女神と敵対する事になる。この姿である時はブレイクと名乗ろう。そう決めた。そうする事で自分の意思を確認できるから。

ただあの子たちと一緒に居たかっただけなのだが、何と言う皮肉だろうか。そう思わずにはいられない。

頭を振り、気持ちを切り替え自分を見る。黒と紅。女神でも無ければ、ましてや人間ですら無くなった僕はどういう存在なのか。黒を基調とした外套と、同じく黒を基調としたプロセツサユニットを見るとそんな事を考えずにはいられない。やはり、異界の魂と呼ぶのが妥当だろうか。そう、納得する。

「おそらく次の戦いでは、白の女神が出てきます。悔しいけど……女神候補生にすら負け続けたアタイたちでは勝て無いと思います。力



を貸してください！」

そう言いリンダが頭を下げた。マジックが傍に居た。だから先程と違い敬語で話していた。少し話した印象だが、気の強い女の子だと感じた。そんな子が素直に力を貸してほしいと頭を下げた。立場の事もあるだろうけど、少しは認められたと言う事だと思う。

「その為に僕は此処に居て、新たな境地に至った。女神の相手は任せてほしい。僕が止める」

告げていた。女神と戦う。それは、これまで僕がしてきた女神を護ると言う事と、対極に位置する事であった。

「ありがとうございます！」

「オイラだって、四条のアニキと、ブレイク様と一緒に頑張るっちゅ！」

覇気を以て領いた二人を見ると、陰鬱とした気分が少しだけ薄れたような気がする。少なくとも、僕にはまだ仲間がいる。

「期待している」

そんな僕たちを見てマジックが小さく領いた。その眩きは、どこか嬉しそうな響きを持っているように感じた。あのマジックが？一瞬そう思うが、あり得ない事だった。思い違いだろう。自分にそう言い聞かせた。

### 33話 ブレイク・ザ・ハード

「此処は……」

ラスティシヨンの教会、女神の私室。その部屋の中で寝かされていたユニはゆつくりと上体を起こした。犯罪組織から解放されたが、心身ともに疲労が募っていた。それが癒えるまで、それなりの時間が必要だった。それが漸く癒えたと言う訳だった。

「おはようユニ。漸く起きたようだね」

ユニが目覚めるとすぐに声が掛けられた。ユニの良く知る声音。教祖のケイであった。病み上がりの所為か少し重い頭を振ると、ユニはケイを見据えた。あのケイが心なしかやつれている。一目で解ってしまった。

「アタシは……」

「犯罪組織に捕まっていたところを解放されたんだよ。かれこれ一週間近くは眠っていた」

「そんなに眠ってたの……。ごめんさい、迷惑をかけちゃった」

ケイのやつれた姿にユニは罪悪感が募る。自分の意思でネプギア達と共に旅に出、犯罪組織の幹部マジック・ザ・ハードに敗れ捕えられた。もつと強くなるために旅に出た筈なのに、結局教祖であるケイや、姉であるノワールの足手纏いにしかなっていない。それが悔しくて、ユニは小さく歯を食いしばった。

「そうだね……。病み上がりで悪いのだけど、ノワールに会って欲しい」

「うん、解ってる。お姉ちゃんにもすつごく迷惑をかけちゃったはずだし」

ケイの言葉にユニは頷いていた。自分たちが捕えられたから、姉に大きな迷惑を掛けている。自分がこうして生きていられるのは、お姉ちゃんが頑張ってくれたからだろう。それに感謝と謝罪をしなければいけない。ユニはまだ完全にははつきりとしないう頭で其処まで考えていた。

「いや、そうじゃないよ。ノワールを、助けてほしい？」

「お姉ちゃんを助ける?」

しかしケイは小さく首を振る。姉を助けて欲しい。ケイが言った言葉の意味がユニには良く解らなかった。

「ああ、ノワールは部屋に居るよ。見れば解る」

「う、うん」

それ以上をユニに語る事はせず、ケイはただ促す。そんな様子に困惑しながらもユニは立ち上がった。全身に疲労感が募っているが、それだけだった。マジックに負わされた傷などは、綺麗に無くなっていた。それが、少しだけ不思議だったが、それ以上に姉の事が気になった為、深くは気にせずノワールのいる部屋に歩を進めた。

「お姉ちゃん、入っても良い?」

ユニはノワールの部屋にまで辿り着いたところで遠慮がちに扉をたたく。ケイは居ると言っていたが、部屋からは何の反応も無い。

「お姉ちゃん? 入るよ」

何度かノックを繰り返すが、結局反応は無かった。その事を不思議に思い、ユニは扉に手を掛けた。あつけない程簡単に扉は開かれる。そして、カーテンが閉め切られ、光の閉ざされた部屋を見た。

「…………お姉ちゃん?」

予想外の光景にユニは呆然と呟く。ケイの言う通り、部屋の中に確かに姉は居た。だが、その状態が異常だった。光の遮断された部屋の中。女の子らしい可愛らしい装飾の施されたベッドの上で、ノワールらしき影が膝を抱え、項垂れていた。そして、小さく何かを呟いている。ユニのいる入口からは何を言っているかは聞き取れなかった。これが本当に自分の知るお姉ちゃんなのか。ユニには目の前に広がる光景が信じられなかった。

「お姉ちゃん」

「…………ツ!?! あ…………、ユニ…………?」

ノワールの傍らまで近づきもう一度ユニがノワールを呼ぶと、ノワールの肩がびくりと震えた。そして間をあげず、ユニに視線を移した。ユニの見たノワールの顔には、止めどなく涙が零れている。強かった、ユニの憧れだったノワールが、失意の中で泣き崩れていた。

「よ、良かった。本当に良かった……。貴女が無事で、本当に良かった。ユニまで居なくなられたらって思うと……」

「ど、どうしたの、お姉ちゃん」

ユニをみとめたノワールが、弱弱しくユニを抱きしめる。その間も嗚咽が止まる事は無く、泣きながらユニを抱きしめている。そんなノワールに、ユニは困惑していた。一体、何があったんだろう。考えるも、ユニには解らなかった。ただ、何か忘れている気がした

「貴女を、貴女たちを助ける代わりに……ううん、私の所為で……。私があんなの事したから……ッ！」

「何があったの？」

泣き崩れるノワールを宥めながらユニは尋ねた。あの姉が此処までなるほどの事態が起こったと言う事だった。何が起きても良い様に覚悟を決める。

「ユウが、私の友達が……。消えたの。あの日を境に、居なくなったの……」

「……え？」

言われた意味が解らなかった。お姉ちゃんは何を言っているんだろう。ぼんやりと、そんな事を思ってしまう。だけど、心の奥底では理解していた。姉と一緒に居ると聞いていた、ユニの友達がいなかったから。

「マジックが取引を持ち掛けてきたの。ユウの身柄と貴女たち全員を交換しないかって。有り得ない条件だった。だけど、それでも大事な友達にこれ以上辛い思いをさせたくなかった。だから、マジックと戦って……」

「そ、それでどうなったの？」

「負けた。何もできずに、何をされたのかを理解する事すらできなかったの。目覚めたとき、全部終わった後だった。女神候補生だけでなく、ネプテューヌたち女神も解放されていたの……」

そこまで言い、ノワールはまた泣き崩れる。私の所為だ、またユウを犠牲にした。そう呟きながら、涙を零す。

「お姉ちゃん落ち着いて」

「ユニ……?」

ユニ自身、状況が解らず混乱していたが、ただ泣き崩れる姉を見ていて心が冷静になっていた。自分がすっかりしななければいけない。そう、言い聞かせる。自分でも驚くほど落ち着いた声音に、ノワールも嗚咽を止めていた。

「捕まっている間に何があったのかは解らないけど、お姉ちゃんだけの所為じゃないよ。きっと捕まった私たちの所為。私が捕まったから、こんな状況になっているの……」

「違うわよ……、私がおもつとうまくやれていれば」

「違わない! お姉ちゃんは私たちを助けようとしてくれただけだよ。だから私たちの所為なの」

言葉を重ねる程、ユニは自分自身が冷静になるのを感じた。自分たちが捕まったりしななければ、姉が泣き崩れる事も、四条優一が姿を消す事も無かったから。だから、自分たちはやらなければいけないんだ。そう、決意を固める。

「居なくなつたのなら、探さなきゃいけないよ。犯罪組織に捕まったのなら、助けなきゃいけないの」

「ユウを、助ける?」

「うん。だからお姉ちゃん。力を貸して。悔しいけど、私だけじゃ無理だから。けど、皆と頑張ればきつとまた会えるから……」

ユニは拙い言葉でノワールに想いを伝える。今の姉は、あの時の自分に似ていたから。たった一人の友達を取られそうになって途方に暮れていた時のユニに似ていたのだ。だから、一人じゃないと伝えたい。自分がいると、一人では無理でも支えてくれる人がいると言う事に気付いて欲しかったから。ユニには、気付かせてくれる人がいた。四条優一が、友達が教えてくれた。だから立ち上がった。今度は自分が教えてあげる側になる番だった。

「ユニ……」

「だからお姉ちゃん。立って。手を取って」

かつて自分がしてもらったように、ユニはノワールに手を差し伸べる。

「……ええ、泣いてるだけじゃ駄目なものね」

「お姉ちゃん！」

涙を拭って黒の女神は立ち上がる。泣き腫らし、目は赤く充血していた。だけど、口元にはユニの大好きな自信の満ちた笑みが浮かんでいた。

「いた！ ちよ、ちよつとユニ、痛いわよ！」

「ご、ごめんねお姉ちゃん」

「けど、ありがとう。貴女のおかげで目が覚めたわ。私なんかよりも、ずっと成長したのね」

ノワールが立ち直った嬉しさのあまりユニは抱き着いていた。その痛みに若干顔を顰めながらも、ノワールは笑みを浮かべ告げた。それは、強くなるうと背伸びをしていた女の子をねぎらう言葉だった。姉に認められた。それが嬉しくてユニはもう一度強く抱き着くのだった。

「これは凄いな。国を支えた歌姫って言うのも頷ける」

ルウィー国際展示場。その中央に築かれた煌びやかなステージを遠巻きから見詰め、感嘆を零していた。リーンボックスの歌姫 5 p b。既に彼女のライブが始まったところであった。ステージの中央から聞こえる涼やかでありながら、聴く者を勇気づける歌声は、確かに一国を支えたと言われても納得できるほどに魅力の溢れたものだった。

「このまま聴いていたいけど、そう言う訳にもいかないか」

心地の良い歌声に身を任せていたかったけど、それはできない相談であった。犯罪組織による襲撃。それが行われるからだ。襲撃の実動部隊は僕の役目では無い。ワレチューとリンダの役目であった。それが起きる時まで、僕は静かに歌姫のステージを鑑賞するだけで良かった。僕の出番は、彼女たちの後にあるのだから。

「何だあれは!？」

ステージも順調に進み、幾つかの歌が終えたところで、そんな声が

響き渡った。ライブ会場に備え付けられた席の上方に位置する観客の声だった。漸く始まった。連鎖する様に広がる混乱の声に、少しだけ気が重くなる。これで、退く事はでき無くなったから。

「ド、ドラゴンだ!? エレメントドラゴンがいるぞ!!」

「アイスフェンリルもいるぞ!!」

危険種の名前が上がる。魔物を喚けての作戦だった。犯罪組織特有の力を用い、魔物を意のままに操る事が出来る為、そう言う作戦が取られると言う事だった。とは言え、生半可な魔物では直ぐに討伐されてしまう為、危険種を含めたそれなりの大軍が送られていた。そして、その混乱に乗じて5pb.を攫う。今回の作戦はそう言う内容だった。

「きやあああ!?!」

ステージの中央で何とか混乱を鎮めようとしていた青髪の歌姫は悲鳴を零す。ステージの上には、何時の間に侵入していたのか、リンダが数匹の魔物と乗り込み5pb.を捕えていた。さらに周りでは次々と魔物が現れ始めている。アイスガルーダや、アイスゴレムなど、ルウイー特有の魔物が何体も呼び出されていた。そろそろ行かないかと思ひ、混乱に騒めく観客席から立ち上がると、ワレチューを見た。小さな体と混乱を生かし、次々とディスクのようなモノから魔物を放っていた。アレが犯罪組織が使う技術なのだろうか、少し興味をひかれたけど、それはまた後にする。

「サツサとずらかるぜ!!」

リンダの声が聞こえた。ワレチューに伝えると言う意味もあるけど、この場に居る筈の女神と僕にも伝える意味があった。

——エクス・コマンド。

いまだ混乱の真っ只中である観客席で小さく言葉を紡ぐ。体に淡い光が宿る。それで充分だった。出口に殺到する他の客を尻目に、観客席の最上階まで一気に飛び上がった。ワレチューと合流したリンダが5pb.を連れて逃げていると、三つの影が立ち塞がった。

「出やがったな、女神共!!」

リンダの声が聞こえた。そのまま手に持つ鉄パイプを三人の真ん

中に立つ女性に突きつける。

「へへーん、下っ端が相手なら、楽勝だね！」

「……楽勝（ぶい）」

真ん中の女性を挟むように二人の女の子が言った。良く似た姿をしている。双子だろうか。水色のコートを着た女の子と、桃色のコートを着た女の子だった。面識こそないが、ルウイーの女神候補生の双子と言うのは聞かずとも解った。ならば真ん中に立つのがルウイーの女神だろう。つまり、白の女神だった。

「ロム、ラム。油断はしないで。例え下っ端が相手だとは言え、負ける訳には行かないの。5 p b. を助け出して、その後で、誘拐なんてふざけた事をしようとしたお灸をすえねえとな!!」

ルウイーの女神が豹変する。5 p b. を誘拐のくだりで、何の前触れも無くブチ切れた。そのまま女神にシエアが集まり、白き輝きに包まれる。ついで左右に侍っていた双子もシエアを収束させる。

「女神ホワイトハート降臨だぜ!!」

白の女神がその名の通り白き衣装に身を包み、白き斧を携え降臨する。ノワールとは対照的に、純白のプロセツサユニットを纏い、空を駆る姿は白き流星の様である。その紅の双眸で、リンダとワレチューを見据えていた。

「やったー、お姉ちゃんと一緒！」

「頑張る！」

その両脇に、水色の女神と桃色の女神が舞い降りる。姉である白の女神譲りの白きプロセツサユニットを身に纏う姿は、幼いながらも中々堂に入っているように思えた。

「今日こそぶっ潰させて貰うぜー！」

「そうだったちゅー！ 今日のおいらたちは一味違うちゅからね!!」

ワレチューとリンダも負けてはいない。女神が相手な為、基礎の能力ではどう足掻いても敵わないが、犯罪組織の手にするシエアは、四国を凌ぎ最も高い。その力が、犯罪組織に認められた者にも宿っていると云う事であった。

「覚悟を、決めようか」



ワレチューとリンダが奮戦する姿を見つめながら呟く。言葉通り、本物の女神が降臨していた。その力はおそらくノワールと同等。ならば、女神候補生に勝てなかったワレチューたちの敵う相手では無いと思う。ましてや、その女神候補生までも相手にしている。結果は火を見るより明らかだった。勝てるはずの無い戦い。だけど、リンダもワレチューも退く事も無く迎え撃つ。それはきつと、信じてくれていたからだ。僕が来ると言う事を。

「今日此処で、決別する」

——プロセツサユニット展開。

静かに宣言していた。誰一人として聞いていない。だけど、確かに言葉としていた。覚悟は定まった。ならば、後はやるだけだった。手にする大剣、見詰めた。黒を基調にした紅の刀身を持つ大剣。それは、今の僕の姿を体現していた。

「強ええー！」

「あう、うぐ、げふんっちゅ！ つ、強すぎるっちゅ。けど、まだ負けた訳じゃないっちゅ!!」

「そうだ、そう簡単に負けらんねえんだ!!」

二人の仲間が吼えていた。彼らが何故そこまでやるのかは解らない。意外とやるが、いい加減鬱陶しくなってきたぜ。大技で終わらせてやる」

何とか食らいつく二人に、いい加減痺れを切らしたのか、白の女神は宣言した。その手にする白の戦斧に、シエアの力が収束するのが解った。強すぎる力。ワレチューとリンダでは受け止めきれるとは思えない程だった。

「お姉ちゃんの必殺技だー！」

「必殺技（わくわく）」

桃色の女神と水色の女神が声を上げた。白の女神がそれで終わらせようとしているのが解った。

「女神すらも叩っ斬る超ド級の戦斧の一撃、喰らいやがれえええ、ハードブレイク!!」

「ッ!？」

「もうダメっちゅ!!」

リンダとワレチューが迫り来る一撃に目を閉じた。だけど、

「やらせる訳には行かない」

「っ、んな!？」

一撃が二人を粉碎する直前、人を遙かに超える速度で二人の前に立ちふさがった。黒と赤の大剣。女神すら斬り裂く一撃を、受け止めていた。力が拮抗する。ぎしり、っと両腕に凄まじい負荷が掛かった。流れるような連打のノワールとは対照的に、白の女神は一撃の破壊力が凄まじかった。だけど、同じ類の力を得ていた。受け止められない道理は無い。

「ハードブレイク、ね。凄まじい技だ。そして、面白い偶然だ」

「ぐう……!」

純粋な力のぶつかり合いでは分が悪い。即座に白の女神を蹴り飛ばし距離を取る。完全に意表をついていた。白の女神は弾丸の如き速さで後方へ吹き飛ぶも、直ぐに立て直した。だけど、それで充分だった。

「待たせたね」

二人の声を掛けつつ、睨み付けてくる白の女神を見据えた。この子が白の女神。僕を呼び出した女神の内の一人だった。

「ブレイク様!」

「来てくれるって信じてたっちゅ!」

ワレチューとリンダの声に軽く手を上げ応える。

「お姉ちゃん!？」

「……大丈夫? (あせあせ)」

「ああ、問題ねえよ。悪い、心配かけたな」

白の女神に、双子の姉妹が心配そうに寄り添う。そんな妹に、ホワイトハートはにっこりと笑うと僕に向き直った。

「それよりテメエ何もんだ!？」

「僕かい? 僕は——」

白の女神の言葉に、様々な思いが過る。だけど、それは今考える事

では無かった。

「ブレイク・ザ・ハード。女神を壊す者だ」

だから、言い放った。それでももう、引き返す事が出来なくなっていた。

「僕の仲間が世話になったようだね。借りは返させて貰う」

——月光聖の癒し

——エクス・コマンド

「これは……、力が溢れてくる!?!」

「ブレイク様の魔法つちゆか?」

「ああ、そうだ。頼りにさせてもらおうよ」

対峙したまま言葉を紡ぐ。癒しの魔法と補助の魔法だった。これで二人はまだ戦える。三対三の状態だった。

「っ、来るぞロム、ラム!!」

即座に状況を理解した白の女神が声を上げた。姉の慌てたような声に、二人の女神候補生も即座に戦闘態勢をとった。だが、遅い。

「行こうか白の女神、第二ラウンドの……始まりだ」

三人の戦闘態勢が整う直前、空を駆り刃を煌めかせる。それが、本当の戦いの合図だった。

### 34話 示された決意

5pb.が見た感じ、戦いは一方的に展開されていた。犯罪組織の構成員二人を圧倒していた女神とその妹達。接近戦の姉と遠距離戦の妹達。単純だが姉妹特有の呼吸により、互いのやる事が手に取るようにわかっていった。その為、彼女たちの連携を崩すのは容易では無かった。無い筈だった。

——天魔・轟雷

ブレイク・ザ・ハード。突如現れた犯罪組織の増援により、戦況は一変していた。三人の女神の虚を突き、肉薄していた。空駆り、短く言葉を紡ぐ。大剣を手にしていない左手に、紫電が宿っていた。振り抜く。凄まじい雷迅が駆け抜ける。

「させない！」

「止める！」

双子の姉妹が雷迅を迎撃する為に、杖を掲げた。双子から放たれる氷の魔法、雷迅に向かい放たれる。気にせずブレイクは低空を疾走し、雷に追いついていた。紫電に刃を重ねる。それは、女神の力を得たからこそできる芸当だった。

——サンダーエツジ

紫電に氷塊がぶつかる瞬間、女神候補生の放った魔法に向け紅と黒の軌跡が煌めいた。一瞬の拮抗を生じさせる暇すらなく、氷塊は消滅する。遮るべき紫電が白の女神に襲い掛かった。

「お姉ちゃん!？」

「避けて!!」

「ちいっ！」

白の女神は舌打ちと共に即座に防御態勢に入った。信頼する妹達が紫電を防ぐと踏んでいたのだが、彼女の予想を裏切り、ブレイクの放った雷が牙を剥く。それでも女神は伊達じゃない。瞬間的に手にする戦斧にシエアを込め、魔法による雷撃を弾く態勢に入った。

「貫うよ」

——ファイイン・コマンド

ブレイクが、四条優一が言葉を紡ぎ更なる魔法を重ねた。瞬間的に加速する。女神に一直線に進む雷迅から弧を描くように離れ、女神の側面に回っていた。

——ムスペルヘイム

「ぐうう!？」

魔法を受け止める為武器を翳し、視界の悪くなっていたホワイトハートからは、ブレイクの用いた急加速が瞬間移動したように感じられた。そして、突如発生した炎を纏った竜巻が強襲する。殆ど同時に雷迅が白の女神を貫いた。

「お姉ちゃん!」

「だ、駄目!」

——ソニックグレイブ

二人の姉妹から悲鳴が上がるが、それに目もくれる事無く風の斬撃を飛ばしていた。そのまま魔法に抛り加速された速度を以て風刃に追いつき、吹き飛ばした白の女神に向かい風刃と斬撃を重ね合わせる。

「かはっ——」

直撃。二つの斬撃の交錯。神業ともいえるそれをもろに受けた白の女神は苦悶の声を零し地に墜ちる。

「よそ見してんじゃねーぞ!」

「おいら達だっているっちゅよ!!」

ブレイクの流れる様な攻めを受ける姉に気を取られている隙を付き、ブレイクの仲間が女神候補生に襲い掛かった。先程まで圧倒していた敵である。その為、この状況にありながらも二人はどこか油断していた。あわてて杖で受け止める。

「え……?」

「な、なんで?」

事が出来なかった。ブレイクによって強化されていた二人の構成員。その力量は二人で戦っていた時に比べ、大きく上乘せされていたからだ。二人の攻撃は、女神候補生のガードをすり抜け、深く突き刺さった。ブレイクに吹き飛ばされた白の女神と同様に、二人の女神候

補生も吹き飛ばされる。

それは、身体能力を向上させる魔法だった。かつて四条優一が女神とその仲間たちに掛けていたもの。ソレを今は犯罪組織の仲間に使っていた。それだけで、リンダとワレチュウの強さは女神候補生を相手取れる程に底上げされる結果となった。四条優一の魔法は、展開されたプロセツサユニットに増幅されている為、かつて使った時よりも効果が上がっているのだが、それを差し引いても単純に効果的な魔法だった。異界の魂の能力は世界を制する力を持つと言う。その魔力で構成された魔法もまた、並大抵のものでは無い。皮肉にも、女神を護るために呼び出された人間の魔法は、女神に大きな脅威となり立ちはだかつていた。

「……つうー、やってくれるぜ。大丈夫か、ロム、ラム！」

撃ち落とされた白の女神が肩を抑え再び浮かび上がった。たった一人の増援。それにここまで崩されるとは彼女は思ってもいなかったから。本調子でないと言うのもあるが、単純に油断してしまったと言うのが大きかった。構成員は相手にならなかった。ならば一人増えたところでどうと言う事は無い、そう思ったと言う訳だった。

「アイタタタ。もう痛いわね！」

「何とか大丈夫（こくこく）」

姉の声に、二人の女神候補生も何とか立ち上がる。予想外の展開に決して軽くは無いダメージを受けてしまったが、それでも戦闘不能と言った体では無い。

「女神さま……、良かった」

そんな三人の様子を見て、5 p b. は胸を撫で下ろした。自分の所為で女神が傷付いている。その事実には、彼女は胸を痛めていた。彼女を捕えている者は居ないが、拘束されていた。だから、ただ見ているしかできない。せめて自由に動ければと思うが、直ぐにその考えを否定する。5 p b. にはとてもじゃないが、自分の力でブレイク・ザ・ハードを出し抜けると思えなかったからだ。自分の無力さにその瞳に涙を浮かべるも、彼女にはただ見ている事しかできなかった。

「女神の能力って言うのは、この程度なのかな？」

ブレイクが刃を止め呟いた。その瞳からは感情の色が殆ど読み取れないが、声音から幾許かの失望が感じられた。

「ちつ、言いたい放題言いやがって。そこまで言うなら見せてやるよ！」

そんな何気ない言葉に白の女神は激昂する。冷静になれば挑発しているだけだと容易に気付けるはずなのだが、今のホワイトハートにはそれが解らなかった。唯でさえ白の女神は変身した事で攻撃的になる。更には解放された直後で未だ本調子でも無い。そんな状況で、少しずつ追い詰められていた。冷静さを欠くには充分だった。

「なら、見せてよ」

「言われなくても見せてやるよ！ その動き見切った、喰らいやがれえ!!」

白の女神が疾走する。その手にする戦斧にはシエアの力が収束していた。刹那にも満たない間に、ブレイクの間合いの内に踏み込んでいた。それをブレイクはただ見据えていた。

「お姉ちゃん!?!」

「駄目ええええ!!」

ぞくり、つと二人の妹達の背筋に悪感が奔った。このままでは大事な姉がやられる。漠然とした恐怖に襲われる。二人は無我夢中で叫んでいた。

「だから、よそ見してんじゃねーよ!」

「その分業ができるから歓迎っちゆけどね!」

そんな二人に再びリンドとワレチューは牙を剥く。女神候補生は割って入る事が出来なかった。そして、静かな声が紡がれる。

「その言葉、そっくりそのまま返させてもらおうよ」

「……!?!」

——霞三段

斬り裂く直前、ホワイトハートは目を見開いた。確実に入る。ドンピシヤなタイミングだった。それを、外されていた。ブレイクは刃を用いる事無く、ただの体捌きを以てブランの放つ一撃を往なしていた。後の先を取る呼吸と体捌き。ソレによつて致命的な隙が晒され

る。紅の軌跡が、流れた。

「ぐ、うあ、ぐあ……っ!?!」

放たれたのは、三段の斬撃。一撃目で戦斧を打払い、二撃目で大きく振り上げられた両腕を打ち体勢を崩し、無防備に晒された胴体に向け、大剣の腹で殴り飛ばした。さき程蹴り飛ばした時よりも遥かに加速し、白の女神が吹き飛ぶ。そしてライブの為に持ちよられていた機材に衝突し、そのまま勢いに巻き込み機材ごと吹き飛んでいく。

「白の女神は終わったよ」

吹き飛ばされ、漸く止まったところでブレイクが呟いた。白の女神はピクリとも動かなかった。思わず、二人の女神候補生が動きを止めた。

「お姉ちゃん!?!」

「お姉ちゃん!?!」

そして。悲痛な叫びを響かせる。彼女たちの自慢の姉が、最愛の姉が今また敗れた。漸く再開できたばかりだと言うのに、再び起こった悪夢に幼い二人は瞳に涙を浮かべながらも、姉の下に駆けつけようとする。だが、

——天魔・轟雷

「ああああ!?!」

「くううう!?!」

それを許すブレイクでは無い。容赦なく、雷迅を以て二人の女神候補生を撃ち落した。何とか姉の傍に向かおうとした姉妹、皮肉にも姉の直ぐ傍に墜落する。

「これで、すべて終わりかな」

シエアの光に包まれ、元の姿に戻り倒れ伏す三人の女神を見据え、ブレイクは呟いた。その声音はどこか憂いに溢れている。

「勝った……、女神に勝った……?」

「そうだっちゅ! ついに女神に勝ったんだっちゅ!」

リンダが呆然と呟き、ワレチューが雄叫びを上げた。二人からは女神に負け続けたとブレイクは聞いていた。彼らの喜びようは、それが真実であることを何よりも雄弁に告げていた。そんな二人の姿をみ



とめたブレイクは、少しだけ笑みを浮かべた。胸中は複雑な思いが吹き荒れているが、純粹に喜ぶ二人を見ると少しだけ気持ちが楽になったからだった。

「もう下っ端なんて呼ばせねーぞ！」

「勝ったつちゅー！ アニキの、ブレイク様のおかげつちゅー！」

喜びをかみしめるリンダと礼を言うワレチューにブレイクは片手を上げ応えた。

「女神さま!?!」

そんな中、女の子の悲痛な叫びが上がる。捕えていた歌姫5pb.だ。自分の所為で女神が戦う事になり、敗れた。それは普通に考えて、折角黒の女神によつて解放された女神が、再び犯罪組織に捕えられると言う事でもあったから。

「さて、君の処遇だけどね……」

「っ!?!」

5pb.の傍らまで行きそう告げると、歌姫は可愛そうになるほど青ざめる。誘拐しようとして攫っていた。しかも僕達は犯罪組織所属である。きつとひどい事をされると思ったのだろう。泣きそうになっているのも仕方が無い。今にも泣きだしそうに歪む顔を見ると良心が痛んだ。

「へっへっへ。ブレイク様、やっぱりお楽しみですかい?」

「お、お楽しみ!?! そ、そんな……。や、嫌だよ!!」

リンダが僕の傍まで来て下世話な笑みを浮かべながら言った。お楽しみ。その言葉でいろいろ想像が働いたのだろう。5pb.はポロポロと涙を浮かべ、拘束されている身体を強張らせながら拒絶の言葉を零す。苦笑が浮かんだ。確かにやろうと思えばできるけど、そんな事をするために犯罪組織に留まる決意をしたわけでは無かった。最初からそんなつもりは無い。

「そんな事はしないよ」

「……え？」

苦笑を浮かべながら言う僕に、5 p b. は不思議そうな声を零す。それは僕が酷い事をしないと云った事に対する疑問なのだろうか。そうだとはい思うけど、そこまで悪く見られていると少しばかり気にしてしまう。

「な、ならオイラが」

ネズミ君が手をワキワキさせながら5 p b. に近付く。再びその董色の瞳に涙が浮かぶ。

「あうちつちゅ！」

「あまり冗談を言って怖がらせるものじゃない」

「ご、ごめんなさいつちゅ……」

ネズミ君の頭を軽く叩きながら言うと、面白い声を上げた。くすりつと小さな笑みが浮かぶ。リンダがワレチューを指さし笑っていた。

「え……、え……？」

一人5 p b. だけが意味が解らないと言った様子で目を白黒させている。その様子も仕方が無い事だった。

「さて、君の処遇だが」

「……」

気を取り直して言うと、5 p b. が僕を少しだけ怯えた様に見詰めた。それをただ見返しながら言う。

「特に何も無いよ。帰って良い」

「え？」

呆けたような声を上げた。それはそうだろう。誘拐犯が唐突に帰って良いと言ったのだ。誰だってそうなる。その表情は歌姫と言うよりは普通の女の子のものだった。良いものが見られたのかもしれない。

「な、なんで？」

「そうですよブレイク様」

訳が分からないと言った様子で聞く5 p b. に、リンダも怪訝そうにしなから同意する。

「5 p b. を攫う事で、ルウイーとリーンボックスのシェアを下げる。それが今回の目的だったね」

「そうですよ。だから、白の女神たちを倒したからこそ、こいつも攫つちまえばより下げられるんですよ」

「それは、違うよ。白の女神たちを完膚なきまでに叩き潰した。だからこそ、見逃す事に意味がある。内外ともに、女神の能力は大した事が無いと示せるんだ。犯罪組織にとって、女神たちは見逃してやる余裕があるってね」

「……成程、何時でも勝てるって事を示すって訳ですか？」

僕の言葉に、リンダは言いたい事が解つたのだろう、そう尋ねてきた。頷く。一応は幹部である。彼女をどうするかという選択権は僕にあつた。はつきり言つて屁理屈だが、シェアは確かに大きく減るだろう。それでも、女神たちを捕えて5 p b. も拘束する事に比べれば遥かにマシだった。リンダも一応は納得してくれたようだった。なにより、ブレイクと言う名が女神達の間で広まるだろう。倒さなければいけない強敵として。それは、何よりも優先して広めねばならない事だった。そうじゃないと、僕が犯罪組織に來た意味が無い。

「さて、リーンボックスの歌姫」

「な、なに……」

「君は解放してあげるよ。だから、女神を介抱すると良い」

そう言い拘束を解除し、5 p b. を自由にすると後は用がないと言わんばかりに背を向ける。5 p b. に顔が見えないのを確認してプロセツサユニットを解除する。長釣丸を、彼女にしっかり見える様に肩に担いだ。

「ブレイク様、待ってくださいいよ！」

リンダが慌ててついて来る。ワレチューはただ黙って僕を見詰めている。

「ブレイク様、もしかしてワザと……」

「ネズミ君、何も言わないでほしい」

「解りましたっちゅー」

そう言うと、素直に頷いてくれた。思うところはあるけど、僕的事

を信じてくれると言う事だった。小さく笑った。それが信頼に対する嬉しさに出たのか、それとも退く事の出来ない状況への諦念から出たのか、今の僕には判断できなかつた。

### 35話 魔剣

白の女神たちを破った後、そのままルウイーの街に向かっていた。女神と雌雄を決したばかりなのだが、見られたのは女神の力を模倣した姿だった。通常時の僕の姿とはかけ離れている為、余程の事が無い限りばれる事は無いだろう。因みにリンダとワレチューは軽く変装していた。リンダは兎も角、ネズミ君は変装する意味があるのか。

「……考えたものだな。逃がす事で、示すと言う訳か」

やがてルウイーの首都がぼんやりと見えてきたところで、紅が舞い降りる。鮮血の様に紅い髪、猛禽類を彷彿させる無慈悲な金色の瞳。背後に展開された、僕の用いるソレと同じ色をした黒と紅のプロセツサユニット。その病的なまでに白い手に紅の大鎌を携え、マジック・ザ・ハードが姿を現していた。

「マジック様!？」

「何故ここにつちゆ!？」

二人の仲間が驚きで声を上げる。僕にとっては因縁の相手でも、彼らにとっては崇拜すべき相手である。その反応も仕方が無い。

「少し、な。お前たち二人は此処までで良い。トリックの奴がプラネテューヌで作戦を遂行中だ。そちらに向かえ。四条優一、ブレイク・ザ・ハードには私と……」

「俺が付く」

マジックの言葉に応えるよう、ブレイブがゆつくりと姿を現す。巨大な勇者の様な体躯を、魔法でも使ったのか、或いは光学迷彩でも用いたのか、唐突に姿を現した。これに少しばかりに驚く。

「ブレイブ様も!？」

再びリンダから驚きの声上がる。目の前に居るのは僕を含めて、犯罪組織の幹部三人だった。その三人が一か所に集い、行動する。それは、どれほどの意味を持つ事なのか。構成員とは言え、僕よりも長い期間犯罪組織に居る彼女には理解できたのだろう。

「マジック様、オイラもアニキに、ブレイク様に付いて行ったら駄目ですかつちゆ?！」

「駄目だな」

不意にそう言ったネズミ君の言葉に、マジックは考える素振りすら見せずに答える。しゅんつとネズミ君が項垂れる。

「駄目だと言うよりは、無理と言うべきだろう。すまないなワレチュー。これから向かう場所は、並の者では命を落としかねない」

取り付く島もないマジックに変わり、ブレイブがそう告げる。

「解りましたっちゅ」

「ネズミ君」

「なんつちゅか?」

「ありがとう」

項垂れて引き下がったネズミ君に礼を言う。先程の事もあり、僕の事を考えてくれているのだろう。その気持ちは素直に有りがたかった。

「……礼なんて言わないでほしいっちゅよ。オイラはアニキの為に何にもできてないっちゅから」

「気持ちだけで充分だよ。必ずしも何かをする必要は無いしね」

慕ってくれるだけで、有りがたかった。途中で折れてしまいそうな時、それが支えの一つになるだろうから。

「行くぞ。二人とも、トリックの方は任せる」

「は、はい」

そう言い、マジックが踵を返し先導する。二人のいる場所では何をするのか言う気が無い。そう言う事だとおもう。マジックに従い、そのまま付いて行く。

「二人とも、また会おうね」

そう言っていた。犯罪組織として戦うと言う、出来る事ならしたくない戦いだっただけど、二人とは仲間として戦っていた。その時から、たしかに二人とも僕にとっては守るべき仲間だと言えた。だから、意識することなく言葉にしていた。

「また、お願いします」

「アニキ、無事に帰ってくるのを待ってるっちゅよ!」

ブレイブとマジックがいる手前、リンダは軽く会釈をし、ワレ

チューは大きく手を振ってくれた。その姿を見ると、仲間と認めてくれたのだと思う事が出来た。女神と決別して、色々考える事があった。だけど、この出会いだけは悪いものじゃなかったように思えた。

「おうおう、四天王のうち三人が揃ってるなんて、いったい何をするつもりだよ」

ブレイブと二人、黙ってマジックについて歩いていると、聴きなれた声が聞こえてきた。この世界の紡ぐ歴史の傍観者にして、僕がこの世界に在る原因を作った張本人。黒の妖精こと、クロワールだった。

「言葉通り又来たようだね、天邪鬼」

「誰があまのじゃくだよ、誰が！　って、そんな事はどーでもいいんだよ。犯罪組織の幹部が揃って何しよーってんだ。教えろよ！」

腰かけていた本から降り、僕の首辺りに飛び乗るとクロワールがケラケラと笑いながら尋ねてくる。

「この者は？」

「歴史の紡ぎ手。いや、ただの快樂主義者だな」

クロワールに気付いたブレイブが口を開く。それに、マジックは不機嫌そうにクロワールを一瞥し、答える。マジックの言葉も気になるけど、二人は知り合いなのだろうか。

「肩っ苦しい事は嫌いなんぞでな」

「だからって、僕で楽するのはやめてほしいな」

「えー、いいじゃんよー」

そのまま髪の毛を掴み、子供を肩車するような感じになる。とは言え、クロワールはかなり小さいため重くは無いのだけど、地味に痛い。

「まあ、コイツのカンケー者だよ」

「確かにそうだね。と言うか、元凶だ」

一切悪びれないクロワールに苦笑が浮かぶ。この子に謝罪など求める気は無いが、だからと言って此処まで奔放だと呆れるしかない。

「ふむ、ではその関係者が何をしに来た？」

「ブレイブ。コレには問うだけ無駄だ。明確な理由など、ありはしない」

マジックが言うと、クロワールは解ってんじやねーかと、快活に笑った。その二人の姿を見て、ブレイブも無駄だと悟ったのか、それ以上何かを言う事は無かった。

「で、何する気なんだよ」

「魔剣ゲハバーン。それを取りに向かう」

マジックの口から出た言葉に、思わず目を見開く。魔剣ゲハバーン。確かに聞いた事がある名だった。確か、命を奉げる魔剣だった。

「取に向かうって……、何処にあるのか知っているのかな？」

「ああ、それは——」

魔剣。それは、僕が用いれば未来を切り開けるかもしれないと言われたモノだった。言葉通りに受け取れば、現状を変え得る手札になる。だけど、嫌な予感がした。この世界に居る限り、死す事すらできない僕が明確に感じ取った、不吉な感覚。それが楔の様に刻まれていた。

「儂が教えましょうぞ。ギャザリング城。その深奥に、魔剣は存在する」

「貴方は……」

「おお、何時ぞやのじーさんじゃねーか」

マジックの言葉を遮り言ったのは以前クロワールと出会った、不思議な老人だった。相変わらず、薄汚れた外套に身を包み、此方を見据えていた。何時現れたのか。それが解らなかつた。傍に居るブレイブも、剣を持ち直した。ただ一人、マジックだけが泰然と構え見据えていた。

「ルウィーとプラネテューヌの教会。其処にひっそりと佇む古城。その中に、あなた方の求める物は在る」

「それが魔剣だど？」

「然り。とは言え、手にするのは容易ではありませんまい。試練が在る。大いなる試練が」

老人は言葉を紡ぐ。魔剣を得ると言うのならば、挑まねばならない



と。異界の魂である僕に加え、犯罪組織の幹部マジックとブレイブ。その二人が傍に居ながら尚、試練が訪れると。

「おお、面白そーな展開になってきたじゃねーか！」

「面白そうって……、ああ、クロワールにはそれが一番大事な事か」

「あつたりまえじゃねーか」

茶化すクロワールに講義しようとしたところで気付いた。やるだけ無駄である。クロワールはこういう人物なのだ。僕が何を言ったところで、変わる事は無いだろう。なにより、こう言うはた迷惑なところも、ある意味クロワールの魅力なのだ。それが解るようになってきた。彼女とも、腐れ縁と言う程度には仲良くなっていると云う事だろうか。

「悩むだけ無駄だね。なら、進むだけだよ」

「それが宜しい。決断を下すまでは、まだ暫くの猶予があるようだ。ならば、落ち着いて考えるが宜しい。それが、貴方の、この世界に呼ばれた魂の道を切り開く」

僕の言葉に、老人は笑みを浮かべ頷いた。何故か、その笑みが気になった。どこかで見た気がしたから。だけど、何処で見たのか。思い出す事が出来なかった。

「もう、行かれると良い。貴方の行く末に、幸あらんことを」

老人に促され、歩を進める。いやな予感はまだに続いている。だけど、ある意味必要なものだった。持っていて損する事は無い。ならば、手に入れるのも一つの選択と言えた。そう思い無理やり納得させ、目的地に向かった。

「貴様は、なんだ？」

優一達が進んだ後、一人その場に佇み続けていた老人の下に、不意にマジックが現れる。プロセッサユニットを展開し、真紅の刃を持つ大鎌を突きつけ、マジックは詰問していた。

「何、とは？」

「言葉通りの意味だ。お前からは人ならぬ気配を感じる。いや、人間どころか生き物ですらない。この気配に最も近いものは……」

「あなた方の傍に居る、異界の魂ですか？」

「ああ」

マジックの言葉の先を読み、老人が静かに尋ねる。言葉通り、マジックが感じた老人の気配は、四条優一の物に尤も近いと言えた。其処に在りながら、存在していない。そんな、死者や魂だけの存在特有の気配だった。そんな、理のはずれた気配をマジックは明確に感じ取っていた。目の前の老人は何者なのか。そう考えるのにそれ程時はかからなかった。

「なに、ただの老体です。本当に守りたいものを守れなかった、哀れな人間の成れの果て……」

「何……？」

「力を求め、その術を作った。どんなものを犠牲にしても、力を得る必要があった。だから、そんな物を作るしかなかった」

「そうか、貴様は……」

「少々語り過ぎましたな。力に魅せられ、本当に大切なものを見失った愚かな者がいた。ただ、それだけなのですよ」

老人は言葉を紡ぐ。それは、ある種の告白だった。償う事の出来ない罪の記憶。力に魅せられ道を違えた哀れの人間の懺悔だった。

「アレは、女神を殺す剣。それが再び目覚めた。目覚めてしまった。それは、蘇ろうとしている犯罪神を討ち果たすため。そして、目覚めたからにはどうあろうと、犯罪神を討つでしょう。たとえどんな犠牲を出したとしても」

「そのような事、私がさせると思っているのか？」

老人の言葉に、マジックは淡々と返した。すでに、マジックには老人の正体がおか、その見当がついていた。

「出来る出来ないでは無い。そうなるのですよ。アレは、そう言うモノなのですから」

無感動でありながら、揺るぎない自信を示すマジックに、老人は諭すように言葉を紡ぐ。マジックは強い。恐ろしいまでに強く、残酷

だった。それが解つていながら、それでも尚、老人が言葉を撤回する事は無い。すでに、何度も見た結末であつたから。

「あの剣が蘇つた。儂がいる時点で、それは変える事の無い現実なのです。やがて剣は女神の命を礎に、犯罪神を再び地の底に叩き落とす。それが、この世界が辿る結末なのだ」

「ならば、なぜ貴様自ら託そうとする。アレは本来女神の誰かが用いるものはず」

「可能性を見た。それは、お前たちにとつても悪い事だけの話では無い」

淡々と尋ねるマジックに、老人は事実だけを語っていく。魔剣ゲハバーン。それが表舞台に出た時、過程はどうであれ、辿る結末は一緒だった。それを老人は何度となく見ていたから。

「そうか、貴様は……」

「もう、疲れたのだよ。女神を殺すのも、犯罪神を切り伏せるのも」

だから縋つたと、老人は、魔剣ゲハバーンはマジックに告げていた。「今生の女神が担い手だったとしたならば、これまでと同じ結末に辿り着く。だが、異界の魂ならば。こと剣と言う概念に対して絶対的な力を持つ、あの能力の持ち主ならば……」

「もう良い。語るな」

そこまで老人が言つたところで、不意にマジックの表情に変化が生じた。それは明確な怒り。機械の様に冷酷なマジック・ザ・ハードの感情の乱れであつた。真紅の大鎌を老人に突き付け、無感動だった瞳に確かな怒りの色を孕ませ、言葉を紡ぐ。

「お前が何者なのかなど関係は無い。何故縋る。何故、助けを求める。貴様たちは何故、あの男を選ぶのだ。異界の魂に、四条優一と言う弱者に手を差し伸べる事を強いる。アレは決して強者では無い。無条件に他者を救えるほど、強い存在でない。女神と言ひ、貴様らと言ひ、自身より遥かに弱き者に何故縋る。願ひの裏に生み出される嘆きに何故気付かない」

淡々とマジックは老人を問い詰める。マジックの胸中にある感情の一つは、確かな怒りであつた。犯罪神の手足となり動く事こそマ

ジツクの存在意義な筈なのだが、それとは別の次元で突き動かされていた。それは、激しい怒りだった。強大な力を持ちながら、自らの足で立つ事を諦めた者達への、明確な敵意だった。

「犯罪神の手駒もまた、時の移ろいと共に変わっていると言う事か」  
そんなマジックを見た老人は、小さな笑みを浮かべる。自分を責めているようであり、優しげでもある。そんな不可思議な笑みであった。

「儂が言える事は一つ。異界の魂が本当の力に目覚めたとき、新たな道を切り開くだろう。それが我等にとって良い事なのか、貴様らにとって良い事なのか。それは、その時にならないと解らないがな」

そう言う時老人の姿は薄れていき、消滅する。もう話す事は無い。そう言う事だった。

「……消えたか」

その場にただ一人残されたマジックはぼつりとつぶやいた。その声音には先ほどの様な怒りの色は無く、常の通り、淡々としている。

「……やはり気に入らん。女神も、この世界も」

マジックの呟いた言葉。誰に聞かれる事も無く、辺りに溶け込むように消えていった。

### 36話 変えられた事

プラネテューヌとルウィーの境界にある湖の中央にある島に、ひっそりと聳え立つ古城があった。城が出来た当時は豪華にして絢爛な輝きを持つ建物であったのだろうけれども、時の移ろいと共に朽ち果てていったのか、今では過去の栄華の残り香を感じさせる分、物寂しく感じる。ギャザリング城。それが僕たちの目的の物が隠された場所の名であり、目と鼻の先に見える建物だった。

「いよいよだな」

「そうだね。道を切り開く為、必要なものだよ」

ブレイブの言葉に頷く。命を奉げる魔剣。それを用いる事で、老人は道が開けるかもしれないと言っていた。その話を頭から信じる訳では無いけども、とても魅力的な話であることは確かだった。事実であれば、現状を打破する切り札になり得るからだ。

だけど、同時にこうも考えてしまう。そんなに都合の良いモノが存在するのか、と。魔剣の話聞いた時から、ずっと第六感とでも言えれば良いのだろうか、直感みたいなものが危険を告げていた。何がどう、と言うのは解らない。だけど、忌避感が付きまとう。それが、どうしても気になってしまう。

「まあ、取れるもんなら取ればいいじゃねーか」

「そうだね。手に入れるだけなら、何も起こらないだろうし」

それでもクロワールの言葉に同意する。クロワールに言われている。マジックやブレイブにも言われてきた。このままで良いのか、と。問われたところで、どうこう出来る問題では無かった。だから、諦めていた。だけど、生きる事から何処か逃避していた僕がこの世界に来て、女神であるあの子たちやイストワールさん、クロワール、犯罪組織を含む色々な人たちの出会いを経て、もう一度生きたいと思っってしまった。他者の未来を奪ってまでそうしようとは思わない。だけど、それ以外に方法があると言うのなら、足搔いてみる価値は十分にある筈だから。だから、魔剣を探す事を肯定した。例えそれが命を奉げると言う魔剣であったとしても、手にするだけならば何かが変わ

ると言う事は無いのだから。

「ふふ、そうか、そうか！」

「……どうかしたのかな？」

不意に、クロワールが笑っている事に気付いた。何時もの様に人を喰った笑みの筈なのだけど、何処となく違っている様に思えた。

「何でもねーよ」

「まあ、クロワールだしね。どうせロクでもない事を考えてるんだろう」

「おいおい、そりや流石に偏見つてもんだぜユーイチ。俺だつて普通に笑う事もあるつて」

「これまでの君を見てると、とてもそうは見えないよ」

そう言つたところでふと気付いた。これまでクロワールとの間には色々な事があつた。恨む事があつた。問われた事があつた。そして、道を示された事も。確かに表向きは彼女に苦労させられてきた。だけど、クロワールに本当の意味で悪意を向けられた事は無かつた。確かに信用ならない事はある。だけど、本当に大事なところで何かされたと言う事は無かつた。寧ろそう言う局面では、助けられていた気がする。もしかしたらこの子は……、

「まったく、ひっでー言われようだぜ！ まあ、それでも少しは安心した。お前が足掻くつてんなら、つまんねー話を最後まで見せられる心配も無くなるつてもんだしな。俺としてもそつちの方が良いよ」

「ふーん。僕が魔剣を探すのが、君の暇つぶしにもつながるつて訳か」「そーいう事だよ。だから精々足掻いてくれよ。無様に泥臭く最後の最後まで諦めず、足掻いてくれりゃー良いよ。この世界に呼び出された哀れな人間が、生きる事を諦めきれず最後の瞬間まで足掻き続ける。それは俺にとって最高の見せもんだからな！」

クロワールの言葉に苦笑が浮かぶ。その言葉に善意も悪意も無い。本心からそう思っているのだろう。無邪気に言い放つ姿にそう思つてしまった。

「それにな、諦めずに足掻けば、報われる事があるかもしんねーし。どう考えても、結末は変えられねーけど、だけど諦めなけりやどこかで

どんでん返しができるかもしれないよ。そう考えるだけでも、一瞬たりとも目が離せねー面白い展開だ」

「何が起こるか解らないから楽しい、か。君らしい言葉だね。だから、足掻けと」

「そーだよ。足掻いて足掻いて、最後まで足掻きぬいて精々俺を愉しませてくれよ」

相変わらず言葉が悪い。最初にそんな感想を抱いた自分に、苦笑が浮かんだ。それ程、クロワールの言葉は相変わらずだったから。一見すると、道化を見て楽しむ観客の言葉だ。しかも、クロワールは僕がそうなった元凶である。本来恨んでいべき相手だ。だから、今の言葉を聞き怒ったとしても不思議では無い。と言うよりは、クロワールは僕を怒らそうとしているように思える。

だから、そんな思惑には乗らず、冷静に彼女の言葉をかみ砕く。天邪鬼。腐れ縁ともいえるこの黒の妖精を語る上で、それは重要な言葉だった。要するに素直じゃない。その上、意地が悪い。だからこそ、裏の意味を考えなければいけない。

「口が過ぎるぞ、黒き妖精」

「良いよ、ブレイブ。何時もの事だから」

「しかし、クロワールの言葉は余りにお前に対する配慮が足りん」

そんな言葉を聞き、今にも剣を振りかねないブレイブを窺める。クロワールの言葉を聞き、表面だけ見ればこんな反応を示すのも仕方が無い。それだけの悪意を感じさせる言葉だから。だけど、それなりに付き合いがある僕から見れば違っていた。

「大丈夫だよ、ブレイブ。確かにクロワールは本心で言っているけど、落ち着いて聞けば裏の意味がある」

「裏の意味、だど？」

笑みを浮かべ説く僕にブレイブは疑問に思ったのか、聞き返してくる。

「ちよつと待てユーイチ。なに適当な事を言おーとしてんだ！」

「別に適当な事じゃないよ」

「ぜってー嘘だ！ お前がそう言う笑みを浮かべている時は、碌な事

を言わねー!!」

ぎやあぎやあと喚くクロワールをひよいつと捕まえ、邪魔の出来ない状態にしてから続ける。そんな僕たちの姿を見て、ブレイブが微妙な空気を醸し出している。

「要するにこの子は天邪鬼なんだよ。だから口が悪い」

「口が悪いのは解る」

「おい、誰があまのじゃくだ!! あと、ゆーしゃロボ、お前もさり気無く同意してんじゃねー!」

ぶんぶんと両手を振り回し逃れようとするけど、素直に離す事はない。今まで散々面倒な思いをさせられて来たこともある。少しばかり仕返ししても、罰は当たらないだろう。

「確かにクロワールの言葉は悪いよ。だけど、冷静になって噛み砕いて行けば、ただ心配してくれてるんだよ」

「何だと? とてもそうは思えないが……」

「それが天邪鬼たる所以だね」

「くっそー、はーなーしーやーがーれー!!」

じたばたともがいているクロワールを無視する。

「クロワールは確かに言ったよ。生きるために最後まで足掻けって。それに、最後まで見てるとも。その方が面白いつて言うのは確かにあると思う。だけど、クロワールの言い方を借りれば、面白くないのが最期まで見ている必要は無い。それでも、見てるつて言ったんだよ。それは、最後まで僕に付き合ってくれるつて事なんだよ。その上で、諦めるなつて言ってくれた」

「あの言葉に、そのような意味が……!?!」

クロワールにとって、本当に面白いか否かが重要ならば、面白くない時点で僕から目を話せばいい。それでも最後まで見ていると言っていた。例え、面白くなくとも。それは、クロワールなりに、僕の事を気にしていると言う事であった。出会ったころならばわからなかっただろう。だけど、彼女とも腐れ縁が続いていた。だから、クロワールの事を少しづつ解るようになってきていた。それをブレイブに告げると、衝撃を受けたようにクロワールを見詰めていた。



「ねーから!! ぜんぜんそんな意味は存在しねーからな!!」

言いたい事も言えたので喚くクロワールを介抱すると、凄まじい形相で睨まれる。ふーふーと鼻息荒く此方を見詰める様は、闘牛を連想させる。とは言え、突っ込んできても全く怖くは無いけど。

「そうか、お前たちにはしか解らん絆があつたと言う事か」

ブレイブがしみじみと頷く。本心から感心しているようだった。

「おい、ユーイチ! お前の深読みが過ぎるから、変な誤解を生んでいくじゃねーか!! 俺は面白ければいいって言ってんだろーが」

「そうだね」

「そーだね、じゃねーよ!!」

怒り狂うクロワールを見ていると、小さく笑ってしまう。神出鬼没なクロワールである。本当に嫌ならば、一も二もなく消えてしまうだろう。だけど、怒り狂いながらも、どこかに消えると言う事はしていなかった。それは、言葉通り本当に僕の事を見ていると言う事なのだろう。つまり、それが答えだった。

「お前たちは随分と気の置けない仲なのだな。しかし、嬉しいぞ四条優一」

「どういう事かな?」

「形はどうであれ、お前は生きる意志を示した。それは決して強いものではないかもしれない。だが、それでも、この世界に来て与えられた不条理を良しとしていたお前が、少しでも運命に抗おうと決めてくれた。仲間として、これ程嬉しい事は無い」

「仲間、か」

ブレイブの真摯な言葉を嬉しく思う反面、あの子たちの事を思い出してしまふ。仲間。ノワールとユニ君。ラストイションの女神姉妹。確かに、僕はあるの子たちの仲間だった。そして、今も僕はあの子たちを仲間だと思っている。守りたい、大切な友達だった。

諦めていた僕に、手を差し伸べてくれた。まだ死にたくないと思ってしまった。そう思える程のモノを貰っていた。その事を言葉にした事は無かったけど、態々言わなくても大事な友達である事には変わりが無かった。

そして、その子たちに別れを告げる事もせず、決別した。それが最善だったから。マジックに成す術も無く敗北を喫し、倒れたノワール。強くなるために旅に出、捕えられたユニ君。そして、捕えられ力なく項垂れる女神とその妹達。それを助けるためなら、迷う事は無かった。例え一緒に居る事が出来ないとしても、その所為で恨まれることになったとしても、それでも守る事はできるのだから。それなら、僕にとつてはできない選択では無かった。

「大丈夫か？」

「……問題ないよ。少し感傷的になっただけ」

「そうか」

尋ねてきたブレイブだったが、それ以上は聞かずに引き下がってくれた。

「待たせたな」

「ああ、待ったよ。だけど、気持ちを整理するには良い時間だったよ」

姿を消していたマジックが現れる。何をしていたのかは解らないが、マジックが来たと言う事は、漸く出発すると言う事だった。

「さっさといこーぜ！」

「ああ。魔剣ゲハバーン。必ず手に入れる」

クロワールとブレイブが進み始める。

「少し、変わったか？」

「かもね」

疑問を宿したマジックの眩きに、小さく答え歩を進めた。

「ブレイブソード！」

ギヤザリング城。朽ち果てた古城の中には、定番と言うべきか、多くの魔物がすみ着いていたようで、その姿を現し襲い掛かってきている。ブレイブの気迫に満ちた轟撃が振り下ろされる。迫り来る魔物を、慈悲も無く吹き飛ばす。

「このようところで時間を浪費する気は無い。消えろ」

それでも敵の数は多く、ブレイブの一撃を何とか避けた魔物に、マジックは紅の魔力を凝縮し解き放つ。死を宣言する魔弾。矢継ぎ早に放たれるソレを受け、異常なまでの速さで敵は数を減らす。

「おーおー。流石は犯罪組織の幹部ってか。凄まじいじゃねーか」  
「全くだね」

「どーすんだよ。お前の出番とか、無いんじゃないかね？」  
「無くとも一向に構わないけどね」

二人の幹部の戦いぶりに、クロワールは楽し気に僕に言う。クロワールが感心するほどあつて、二人ともこれまで見た誰よりも強い力だった。手にする長釣丸、抜き放つ。左手に鞘を持ち、右手で刀を持つ。そして、自分の持つ力を解き放つ。マジックによって、新たな段階に押し上げられていた。だからと言う訳ではないが、これまでとは少し違う使い方を試す。

——魂砕

——S・O・C

それは二振りの魔剣。これまで僕が使ってきた、異界の魂の持つ剣だった。一度に二振りの剣を再構築する。それが出来るようになっていた。両の手に二振りの魔剣がある事を実感すると、言葉を紡ぐ。

——マキシマム・チャージ

人の限界を超える魔法。それを、解き放つ。全身から活力が溢れだし、感覚が研ぎ澄まされる。そうでありながら、心はどこか澄み渡っていた。

「まだ、足りない……か」

だけど、これはまだ僕が目指すべき極地では無い。これは、その上に行くための通過点だった。ブレイブとマジックの猛攻を掻い潜った魔物が迫る。無造作に切り払った。そして両の魔剣を更に読み取っていく。遠くで魔物たちの断末魔が聞こえる。マジックとブレイブ、その二人にほとんどの敵が討たれたのだった。

「流石に煩わしくなってきたな」

「まったくだね。一体どこから出て来るのか」

魔物たちとの遭遇戦に加え、何度となく背後からも攻撃されていた。強さ自体は大したものでは無いのだけれど、回数がかさむとブレイブの言う通り煩わしく思えてくる。

「……お前たちは先に行くといい」

此方を一瞥だけしてそのまま進むマジックを見て、ブレイブが残ると言いだした。背後から来る敵を一手に引き受けてくれると言う事だった。

「おいおい、良いのかよ。それって死亡フラグだぜ？」

「問題ないさ。悪の組織の幹部に立つフラグじゃないよ」

茶化すクロワールにそんな感じで返していた。クロワールの言い回しが少しうつつたのかも知れない。苦笑が零れる。

「そりゃそーだな」

「うん。だからブレイブ、此処は任せるよ」

「ああ、任せておけ。ここから先は、一歩も通さん」

背後をブレイブに任せ、歩を進める。かつかつと、歩を進める音だけが鳴り響く。

「お、なんだかそれっぽいところに辿り着いたじゃねーか」

歩を進め辿り着いた先には、大きな扉があった。謁見の間へと続く扉。ちょうどそんな感じの大きな入口だった。

「少し待て」

「何、かな？」

不意にマジックが静止の言葉を零した。

「一応言っておく。この先では、女神を模倣した能力は使うな」

「……どう言う事かな？」

「魔剣ゲハバーン。それは命を奉げる剣。厳密に言えば、女神の命を奉げる剣だ」

「何だって……？」

マジックの言葉に驚く。驚いたはずなのだが、何処か納得もしてしまった。名前を聞いた時から嫌な予感がしていた。だけど、彼女の言葉を聞き、合点がいった。それは、僕が女神の脅威を排除する為に呼

び出された存在だったからだ。女神を護るべき僕と、女神を殺す事で力を得る魔剣。魔剣の事が本当ならば、僕とは相いれる筈が無い。だから、女神の制約が警鐘を鳴らしていたと言う訳だった。

「だけど、なぜ僕が使うのを控える必要がある？」

「女神と言うのは、突き詰めればシエアの塊だ。それ故、お前の持つ女神四人分のシエア。それを用いた女神の能力の模倣とは、相性が悪い」

「成程」

つまりは、奉げる力と用いる力とでは相容れないと言う事だった。「では行つてくると良い。此処から先は、四条優一の、ブレイク・ザ・ハードの見せ場だ」

最後にそう言うのと、マジックは踵を返す。扉越しに大きな力を感じていた。それをマジックも感じ取ったのだろう。あとはお前に任せると良い、姿を消した。

「おいおい、此処まで来てお前ひとりでボス戦かよ！ まー、それはそれで面白そうだけどな」

「戦うのは一人だけど、二人だね」

「おっと、そーだったな。観戦していてやるよ、精々頑張れ」

クロワールの軽口に苦笑いを浮かべ、扉を開く。瞬間、凄まじい圧力が全身を包み込んだ。

「これはこれは……」

「……、やっべーんじゃねーの？」

其処は広大な部屋だった。薄暗い大広間。その奥から魔剣らしき力を感じた。だけど、それとは別に一つ問題があった。巨大な竜が、此方を見据えていた。目が合う。ぞわりと、衝撃が全身を駆け抜ける。恐怖の類では無い。ただ、目の前の竜の放つ力に戦慄していた。以前ノワールと討ち果たしたエレメントドラゴンなどは、文字通り格が違っている。

「アレってなんていう名前か知ってる？」

「あーっとたしか、八億禍津日神」

「また、随分と凄い名前だね。まるで勝てる気がしない」

思わず口から出た馬鹿な質問にクロワールは律儀に答えてくれる。

「で、勝てんのか？」

「勝つよ。此処で負けるようなら、未来なんか変えられない」

「そーかよ、なら頑張れよ。それで、俺に面白い見世物を見せてくれ」  
クロワールの問いに、淀みなく答える。これは最初の試練だった。なら、こんなところで躓く訳には行かない。ぶつきらぼうだが背を押してくれた友達に心の中で感謝と謝罪をし、二振りの魔剣を握り締める。今の僕ができる、限界まで力を使っていた。顕現した二振りの魔剣、その姿を一つの剣に変化させる。それは、一振りの剣だった。何の力も感じない、ただ一振りの剣。それを作り出していた。

「これが、今の僕に出来る全力」

「全力って、そのどこが強いんだよ。お前、そのまま挑むってんなら、間違いなく殺されるぞ!!」

僕の構築した剣を見たクロワールがイラついたように言う。確かにクロワールが言う事は正しかった。これは、何の力も持たない剣。量産された一振りの剣でしかなかった。だけど、この剣を再構築したのには意味があった。

「クロワール、離れててよ。下手したら君も巻き込む」

「どーいう事だよ?」

「見てたら解るよ。これから戦うのは僕であって、僕では無いから……」

「意味解んねーけど、解ったよ」

しづしづながらも従ってくれたクロワールに礼を言う。なんだかんだ言って、この子も信じてはくれていたのだろう。そう思うと、素直に嬉しかった。手にする剣。ゆっくりと構え、読み取った経験を再現し、記憶をこの世に呼び起こす。それは、今の僕に出来る最大の使い方。経験によって力を借りるのではなく、この身体を一時的に明け渡し、この世に再び呼び起す能力だった。それを解き放った。どこか意識が遠くなる。だけど、途切れる事は無い。自分を客観的に見ているような不思議な感覚が全身を包んでいた。

「……貴様の最期の輝き、見せて見ろ」

自分では無い自分が言葉を発していた。それは、人を極めし闘神の記憶。自らの体を依代に、一振りの剣をしるべとし、再びこの世に呼び戻していた。身体がゆっくりと動き始める。八億禍津日神が咆哮を上げた。それが、戦いの合図だった。そして、

全身に凄惨なほどの破壊を受けた八億禍津日神の巨軀が崩れ落ちる。この日、四条優一は女神を殺す魔剣を手にしたのだった。

### 37話 過去の救世と悲劇の連鎖

それは、古ぼけた一振りの剣だった。朽ち果てていた。強い力を感じるのだが、それ以上に何処か哀愁を感じさせる剣。そんな印象を抱く。命を、女神の命を奉げる魔剣だとマジックが言っていた。だけど、目の前の古びた剣からは禍々しい力を感じる事は無かった。どちらかと言えば、怨念と言うよりも、嘆きの様なモノを感じ取れるのは、先入観からなのだろうか。

「おい、ユーイチ。さっきのアレは何だよ」

「アレは、僕の能力の行き着く先だよ。剣を読み取り再現する能力の、最終段階。過去の使い手を再現する、いや、少し違うか。過去の使い手を再びこの世に呼び起こす技だね。魂を呼ぶ力。技と言うよりも、僕が召喚された儀式に近いんじゃないかな」

目の前にあるゲハバーンを眺めていると、クロワールが聞いて来た。それは、八億禍津日神を退けるのに用いた力の事だった。先程まで身体を委ねていた魂の力を思い起こす。ただただ戦慄するだけだった。はつきり言おう。アレは今まで僕が見た中で最高の使い手だった。その力を十全に扱えるのならば、女神はおるかジャツジやブレイブ、マジックすらその力を阻む事は敵わない。そう確信出来る程の力だった。

人の行き着く先。その極致に到達してしまった者の力。それを、この身を通して感じていた。人を極めし闘いの神。異界の魂召喚の儀式で、本来呼び出されるはずの世界の大陸の自然を四分の一消し飛ばした魔力。ただ一人で、国を転覆させるだけの武力。三人の異界の魂を同時に相手にして尚、圧倒し得る人知を超えた力だった。

「ふーん。しっかしすっげーな。今の能力なら、マジックの奴も倒せるんじゃないねーの」

「倒せると思うよ」

クロワールの言葉に頷きながら答える。確かにマジックを倒す事も可能だと思う。だけど、それをする訳には行かなかった。確かにマジックやブレイブ、トリックなどを倒せば犯罪組織を壊滅させること



は可能だろう。だけど、それをやれば僕の命も潰える事になるから。死んでも良いと思っていた。一度は死んでいたから、だから死に損なった僕が今度こそ死ぬ。それだけだと思っていたから。だけど、変わってしまった。この世界に来て、ユニ君とノワールに出会った。ラストেশヨンの女神姉妹以外にも、ケイさんを初め、ギアちゃんやあいちちゃん、コンパさんにイストワールさん、防衛隊の人たちに、ギルドの人たち、そして犯罪組織のマジックやブレイブ、リンダにワレチュー。様々な人と出会い多種多様の生き方を見て、思ってしまった。まだ死にたくない、と。

誰かの未来を奪ってまで生きようとは思わないけど、まだ手があるかもしれない。その力は女神の命を奪う魔剣だと言われた。それでも、未来を変える事が出来るかもしれない可能性だった。なら、その可能性が潰えた時に、全てを終わらす事にしても遅いと言う事は無い。ずっと以前から覚悟はしていた事だ。怖くは無い、嫌では無いとは言わない。だけど、出来ない事では無かった。ずっと、考えていた事でもあったから。

「だけどそれは——」

クロワールの言葉に応えながら、魔剣を握った。瞬間、異界の魂として召喚され、様々な知識を得た時と同じ感覚が全身を過った。直後に痛みが奔り、記憶の断片が映像として過ぎ去っていく。それは、この魔剣ゲハバーンが作られてから今に至るまでの記憶だった。思わず膝を落とし、地面に手をつき崩れそうになった身体を無理やり支える。それ程の負荷だった。身体が辛いのではない、心が辛かった。

「こ、れは……」

「お、おい、ダイジョーブかよ!?!」

「ぐ……、問題は無いよ、少ししたら治る」

慌てて声を掛けてくるクロワールを宥めるように言う。身体に辛いところは何もなかった。だけど、ゲハバーンの記憶を直接流し込まれ、その記憶の辿る道を見てしまった。胸が張り裂けそうになる。強く目を閉じた。そうで無ければ、泣き出してしまいそうだったから。ただ一人傍らに居る小さな友達に、これ以上心配させたくは無かつ

た。

それは、凄惨な記憶。古よりゲームギョウ界に存在する犯罪神と、犯罪神からこの世界に生きるものを守る為に命を賭けて戦った女神や人間の記憶だった。犯罪組織マジエコンヌが崇拜する神、犯罪神マジエコンヌ。それは、世界を壊し尽くす事を目的とする、破壊神ともいえる存在だった。魔剣ゲハバーンが作られるきっかけとなった存在。それは、犯罪神が現れた当時、その時代の女神たちが束になって尚、抗う事が出来ない程の力を誇っていた。女神よりも強い神。それが、ゲームギョウ界を滅ぼすために現れた。その事実は女神を崇拜する国民を恐怖のどん底に叩き落とすには充分な衝撃と言つてよかつた。女神ですら敵わない相手に、人間如きが叶う訳がないからだ。

それでも女神は何度となく犯罪神に挑み、その度に敗れた。そんな姿を見る国民の絶望は加速し、信仰心が薄れ、女神の力が急速に激減していく。それでも犯罪神に挑むしか道は無く、そして敗北し信仰心が薄れる。それは絶望の連鎖だった。

それでも女神を信仰する者はいた。女神に縋る者達がいた。だから、女神たちは諦める事が出来なかつた。諦める訳には行かなかつた。そんな女神たちを信仰する者の中に、一人の鍛冶師がいた。彼は女神が純粹に好きだった。国を治め、自分たちを守つてくれたから。そんな自分たちを護つてくれていた女神たちが、今まさに犯罪神に負けようとしている。嫌だった、認めたくなかつた。だから、鍛冶師は自分の命を奉げて一振りの剣を作つた。具体的にどういふ剣を作ろうと言うイメージがあつたわけでは無い。ただ、何よりも強く、何物にも負けない剣。そんな犯罪神すらも倒し得る剣。それだけを一心不乱に思い続け、やがて魔剣と言ふべき剣を完成させた。それは、確かに犯罪神すらも倒し得る力だった。だが、力には代償が付きまとう。それは、女神の命を奉げる事で強くなる魔剣だった。ただ犯罪神を倒し得るほどの力を願つた結果が、シエアを喰らう事でその力を増す呪いと言ふべき魔剣が完成してしまった。

鍛冶師は、ただ自分たちを護つてくれた女神を助きたい一心でその

命を賭けて鎚を振るった。そして、その願いは現実に実現しうる力となった。ただ、その方向性だけが間違ってしまった。鍛冶師の思いとは裏腹に、犯罪神を倒すための魔剣は、女神を殺すための剣でもあるという残酷な現実だった。

そして、鍛冶師は自分の命を奉げて作った魔剣を女神たちに届けると、その場に崩れ去る様に息を引き取った。魂を奉げ作り上げた魔剣だった。既に鍛冶師には犯罪神を倒せると言う可能性しか、見えていなかった。それがどういいう魔剣なのかを理解出来る程、余力が無かったのだ。だから、ゲハバーンを女神に捧げると同時に自分の仕事は終わったと思ひ、限界を迎えたと言う事だった。

魔剣を受け取った女神たちは、即座にゲハバーンがどういう剣なのかを感じ取った。女神を殺す事でその力を増す剣。それを感じ取ったのだ。だけど、鍛冶師が命を賭けてまで作った剣だった。鍛冶師が今まさに死のうとしている。それが皆わかってしまったので、ただ笑顔で受け取る事を選んだ。そしてそれは、確かに犯罪神を打ち破るに足る力だった。だから、女神たちは一人を残し、自らの命を犠牲にし魔剣ゲハバーンを用い犯罪神を打ち破った。

しかし、犯罪神を倒す事はできても、滅ぼす事まではできなかった。犯罪神の本体と言うべきものには実体が無かったから。そして、ゲハバーンの戦いの歴史、悲劇の連鎖は此処から始まった。犯罪神は不死身と言ってよかった。何度仮初の肉体を打倒しようと、長い歳月をかけ、犯罪神は蘇る。ゲームギョウ界を壊すために、何度となく蘇る。その度にゲハバーンもその力を目覚めさせ、女神の命を喰らい、犯罪神を切り続けていた。

唯一つの純粋な思いが、数多の悲劇を生んでいた。

自分の国が好きな女神がいた。国民を守る為に、自身を構成するシエア全てを奉げ、ゲハバーンの礎となり消滅した。

生き物の営みが好きな女神がいた。皆がずっと笑って生きていく様に自らの命を奉げた。

他者と交わるのが苦手な女神がいた。それでも誰かを守りたいと思ひ、恐怖に涙を流しながらも命を奉げた。

人々の祈りを見るのが好きな女神がいた。絶望の中にある希望を潰えさせない為、命を奉げた。

太陽のような笑顔を浮かべる女神がいた。最後の時まで誰かのために微笑み、命を奉げた。

裏切られた女神がいた。自分を裏切った者達を憎み、他の者たちも憎んだが、それでも憎み切れず命を奉げた。

仕事熱心な女神がいた。皆を守る為だからと悲しそうに笑い、命を奉げた。

やる気の無い女神がいた。自分しかできないからと諦め、命を奉げた。

似た者同士の姉妹の女神がいた。一人では無理でも二人ならば大丈夫と笑い、命を奉げた。

女神と犯罪神、そしてゲハバーン。その全てが揃う時、必ず悲劇は起こった。女神が命を奉げ、力を増した魔剣によって、犯罪神は一時的に姿を消す。そして、長い時間をかけ蘇る。その繰り返しだった。ゲハバーンが振るわれる状況は毎回違っている。だけど、命を奉げる事によって魔剣の力を増し、その力を以て犯罪神が討たれると言う流れが変わる事は無かった。それは凄惨にして、悲壮な連鎖だった。これまで命を奉げた女神の中、誰一人として死にたかつた者達は居ない。涙を流す者達がいた。運命だと言い、悲しそうに受け入れる者達がいた。自分一人が犠牲になるだけでみんなが救われるならと、笑う者がいた。死にたくないと言きながらも、それ以上に守りたい者の為泣きながらも許容する者達がいた。

その全ての女神たちは切り伏せられ、命を奉げ、魔剣の力を増す事で世界を救った。犯罪神が蘇るたびに、涙を流す女神たちが居た。それを、魔剣ゲハバーンは僕に厳然たる事実として見せ続ける。そして、この世界が今後も歩み続けるであろう未来を、確かに僕に見せていた。

「これは、駄目だ——」

唇を強く噛みしめる。そうしなければ嗚咽が零れそうだった。読み取ったのは、歴代の女神たちと犯罪神の戦いが辿った結末だった。

涙を流し、死の恐怖におびえながらも、最後は世界を守る為に命を奉げる事を肯定した、肯定せざる得なかった女神たちの救世と悲壮だった。その全てを見た。見てしまった。数多の女神たちが命を賭して護った世界。其処に今僕は存在している。その事実を、言葉では無く読み取り実感してしまった。選択肢が一つ潰えた。女神たちの願いと覚悟を突きつけられていた。壊せる、訳が無かった。何より魔剣ゲハバーンが存在している。それは、絶対に女神が斬られると言う事だった。呪われた運命とも言える誓約を、読み取る事で理解してしまった。絶対にそうなる。何度となく神を切り伏せた魔剣ゲハバーンは、最早そう言う概念となつているのである。

「お、おい、何がダメなんだよ」

「この剣は、駄目なんだよ。この剣じゃ、何も救えない」

解つてしまった。この剣がある限り、救いなど無い。この剣が在る時点で遠くない未来に犯罪神が蘇り、女神が斬られることになる。この剣が目覚めるのは、犯罪神が蘇るのが確定した時だから。そして今の女神では絶対に犯罪神には勝てない。マジックにすら勝てないのに、犯罪神に勝てる道理は無かった。記憶から読み取った犯罪神の力は、マジエコンヌ四天王四人を同時に相手にして尚、届かないから。「つたりまえだろーが！ その剣だけあつても何にも変わんねーよ。その剣をお前が持つから変わるって言ってるんだろー！」

「あ……」

クロワールの言葉に意表を突かれていた。あまりに凄惨な記憶を突きつけられていた。そして、ソレはこの先同じ事が起ると言う未来予知でもあつた。つまり、ノワールが、ユニ君が、ギアちゃんたちが命を奉げる事になると言う、未来を提示されたのと同じだった。だから、あまりに衝撃的過ぎて、そこまで考えが及ばなかった。この剣だけでは未来は変わらない。それをクロワールはもう一度僕に示してくれていた。

「ありがとうクロワール。少し取り乱してしまったよ」

「ふん、べっつに礼を言われる事じゃねーよ。俺は面白いものを見たいからお前の傍に居るだけだからな」

「それでも、だよ」

また、クロワールに助けられていた。思えば、僕が本当に辛いときはクロワールに助けられた気がする。それが有りがたく、嬉しくもあった。そして、申し訳なくも……。

「クロワール、決めたよ。僕は女神と戦う。全力を以て、あの子たちと戦うよ」

だけど、そんなクロワールが居てくれたから決められた。僕がこの世界に呼び出されるきっかけを作った、大事な小さな友達のお蔭で、道を見失わずに済んだから。だから、今クロワールにだけ本心を語る。

「どーいう風の吹き回しだよ?」

「言葉通りの意味だよ。あの子たちと、本腰を入れて事を構える」

「だから、どう言った風の吹き回しなんだつってんだよ!」

クロワールが声を荒げる。本気で怒っている。だけど、それは僕の事を心配してくれているからだ。それが、解るだけクロワールとも近くなっていた。

「今のままじゃ、女神たちは犯罪神に勝てない。だから、変えなきゃいけないんだ」

「ああ、マジック一人にすら勝てねーのに、犯罪神に勝てるわけねーよ」

「だから、戦うんだよ。戦えば戦うだけ、教える事が出来る。強くしてあげられる」

「お前、まさか……」

クロワールの目が鋭く細められる。怒っているのだが解り、困ってしまう。だって、完全に僕が悪いから。

「うん、ごめんね」

「っ!? お前、抗うんじゃねーのかよ!? 生きるために最後までかっこ悪く足掻くんじゃねーのかよ!」

クロワールが叫んでいた。

「足掻くよ。だから、これはその保険」

「保険?」

「ああ、あの子たちと戦って、僕の方も完成させる。あの子たちを鍛えるのは、できなかつた時の妥協点だよ」

襟首をつかみかねない剣幕だけど、嬉しく思った。それだけ、真剣になつてくれていると言ふ事だから。そんなクロワールを宥めながら自分の考えを述べる。あくまで、彼女たちを強くするのは保険だった。だけど、十中八九、思惑通りにはならないと思つていた。だって、僕には魔剣の記憶を辿り見せつけられた、この世界を守りたいと言ふ決意を壊す事なんかできそうになかつたから。

「……本当だろーな」

「うん。僕が嘘を吐くと思うかな？」

「ああ、吐きまくるね。お前は嘘つきじゃねーか」

「あはは、これは手厳しい」

クロワールにジトツとした目で睨まれる。確かに、思い返してみると結構嘘もついている。特にユニ君なんて、泣かせることもあつた。思わぬところで自分を思い知らされ、乾いた笑いが零れた。

「まあ良いよ。それはそれで面白そうだしな」

「ん、ありがとう」

それでも深くは追及してこないクロワールに礼を告げる。ふん、つとそっぽを向いた。

「けどな、ユーイチ。さつさと諦める事だけはすんなよな。見ててつまんねーから。だから、最後の最後まで足掻け。約束しろ」

「ああ、解つたよ。約束する」

それでもぶつきらぼうに僕を気に掛けてくれる友達に、約束するのだった。

### 38話 交わされる刃

「終わったよ」

ギャザリング城城門前、ブレイブとマジックがその場で僕が帰ってくるのを待っていた。ブレイブは外装に少し損傷があるようだが、その程度では何の問題も無いようだ。マジックに至っては、戦いの痕すら見えない。相変わらず、その実力はすさまじいの一言だ。

「手にしたのか、魔剣を」

「ああ、手に入れたよ。これが、それだ」

「ほう……、確かにすさまじい力を感じるが……、戦いに耐えられるのかそれは？」

ブレイブにゲハバーンを見せる。何も無い場所から、剣を呼び出していた。古の魔剣とは言え、ゲームギョウ界の武器であった。長釣丸と違い、ゲハバーンは女神たちが持つ武器と同じく、出し入れが自由にできた。

「その点に関しては問題ないよ」

ブレイブの疑問に答える。長き時間戦いに暮れた魔剣だった。その消耗は普通の剣では耐えきれないものがある。だが、信仰を喰らう事で強くなる魔剣だった。最早、その存在がシエアの塊と言つても良い。ならば、やりようはあった。両の手で魔剣を握り、その記憶を読み取っていく。女神たちの記憶が流れ、魔剣ゲハバーン本来の姿を見る。それを元に、魔剣を再構築していく。魔剣ゲハバーン。悲劇の連鎖が始まる最初の姿に、作り直していた。否、元に戻していた。

「……ほう、そこまで出来るようになったのか」

「お陰様だね。過去の物を再現する事なら、完全にできる」

「つまり、この剣がゲハバーン本来の姿」

鮮やかな、紫色の刀身だった。劣化していた魔剣が本来の姿に戻り、よりその力も肌を感じた。マジックが僕を見て、感心したように零した。過去の剣を再現する。八億禍津日神を降した時、自分の持つ能力を、完全なモノにする事が出来ていた。正確にはまだその上があるのだけど、剣を読み取り再現する能力としては、完成したと言つて



よかった。剣を通して、ありとあらゆる過去の使い手たちの全てを用いる事が出来る。人を極めし闘神の記憶を再現した時、その境地に至っていた。

ブレイブが再構築した魔剣を見詰め、感嘆の言葉を上げる。確かに、魔剣と呼ぶにふさわしい力を秘めている。

「犯罪組織のブレイク・ザ・ハードとしてならば、貴様は完成したわけか」

「……そうなるね。異界の魂として、十全に力を振るえる」

薄い笑みを浮かべ、マジックは僕を見る。確かに、女神を倒し世界を壊すと言うのが目的ならば、僕はこの時点で完成したと言える。事實上、僕の能力は剣を持つもの全てを相手にするのと同じだから。ブレイク・ザ・ハードと戦うと言う事は、存在する全ての剣士の経験を相手にすると言う事だった。それは、こと近接戦に置いて、今の僕ならば例えマジックが相手でも互角以上に戦えると言う事だった。

「強く、なったのだな。弱き人間が、私と肩を並べるまでに育った、か」  
「そうだね、人は弱いよ。だからこそ、強くなろうと手を伸ばすんだ。僕ですら此処まで届く事が出来た。なら、女神たちがこれ無い訳が無い」

「ふふ、お前が言うならばそうなのだろうな。だが、私は負けはしない。私が負けると言う事は、お前にとっても希望が潰えると言う事に他ならない」

マジックの言葉に小さく頷く、マジックが破れる。それは、恐らく犯罪組織が潰える時だろう。その時が来るのならば、確かに僕に希望は無くなると言えた。

「そのような時、来させはしない。子供たちの為、そして我が友の未来の為、俺が遮って見せよう」

「ブレイブ……」

ブレイブが、自慢の剣を掲げ力強く宣言する。思わず、涙が零れそうになる。迷いも無く、僕の事を友と言ってくれた。それが、ただ嬉しかった。

「だいたいな、ユーイチ。女神たちがまともにやって、今の犯罪組織に

勝てるわけがねーよ」

「そうだね、クロワール」

「ああ、だから誰かさんが何か狙わない限り女神に勝機は無いつてもんだ」

クロワールには僕の目的を告げていた。恐らくマジックもブレイブもそれは解っているだろう。と言うよりも僕が犯罪組織に入った経緯から、それが解らない筈が無い。その上でなお、女神に勝つと宣言している。それが犯罪組織としての目的だからだろうが、他の理由もあるように感じられるのは気のせいでないのかもしれない。

「四条優一、お前はまた、女神の肩を持つのか？」

「持つよ。それが、僕の選んだ道だから」

ブレイブが諭すように言った。小さく首を振るう。気持ちは嬉しけれど、それだけは譲れない事だった。ユニ君やノワール、ギアちゃんと友達と言うのも大きな理由だけど、もう一つ理由が出来ていた。魔剣ゲハバーンを得た時、見てしまった。女神たちの悲壮な決意を。誰一人として死にたくは無かった。それでも、大好きな世界を守る為、命を賭けて散って逝った。そんな女神たちの記憶を、見せられ続けた。想いを、託されてしまった。僕に、その想いを踏み躪れるだけの気概は無かった。

「そうか。変わらなかった、か……」

「……ごめん」

「いや、謝らなくても良い。友がそう決めたと言うのなら、俺がとやかく言う事では無い。だが、これだけは覚えていてくれ」

ブレイブが幾許か気落ちしたようにするが、直ぐに気持ちを切り替え僕を見る。

「例えお前がどのような覚悟をしようとも、俺は友としてお前を救う気である。例え、お前にどう思われようとな。お前の身に課せられた不条理を、無くしてやりたいのだ」

「ああ、ありがとう。僕も、君に出会えてよかった」

ブレイブの言葉が胸を衝いた。僕の思いを聞いてそれでも手を差し伸べてくれる。友と、言ってくれた。そんなブレイブに、何処か気

を許してしまう自分がいた。奇妙な友情が確かに芽生えていた。ブレイブもまた犯罪組織の幹部であり、女神たちの敵だ。僕にとっては倒すべき相手である。だけど、それとは違う次元で、友と呼んでも良い相手になっていた。

「魔剣が手に入ったなら、此処にはもう用はねーよな。さっさと帰ろうぜ」

「そう言っつて、僕に本を持たせるのはやめてくれないかな」

「はは、いーじゃんか。お前に運んでもらう方が早いんだし」

クロワールがそう締めくくる。魔剣を手に入れていた。そして、自分が取る道も決まっている、なら、やるべき事は解っていた。女神と戦う。それが、僕の決めた事だった。

「馬鹿な、この吾輩がこんなところで敗れるだと……、まだ、幼女を少ししかペロペロしていないのに……、此処で終わりだと言うのか……、幼女、最後に一目見たかった……、だが、我が生涯に悔いは無し！ ようじよ……幼女、バンザーイ!!」

プラネテューヌ協会、その建物を占拠し、プラネテューヌに被害を与えていた犯罪組織の幹部、トリック・ザ・ハードは断末魔を上げた。その巨体には幾重にも斬撃を受け、全身に夥しい攻撃を受けていた。幼女を愛する至高の紳士、トリック・ザ・ハード。その命が終わりを迎えようとしていた。それにしても酷い辞世の句である。

「はあはあ、色んな意味で途轍もない強敵だったわね……」

「ネプテューヌさん、ネプギアさん!!」

「いーすんさん、大丈夫ですか!?!」

トリックによって捕えられていたプラネテューヌの教祖イストワールを救い出し、ネプギアと、その姉であるネプテューヌは喜びを表す。小さな体を縛られていたイストワールの体をネプギアは即座に開放し、心配そうに尋ねていた。

「……っ!? き、聞かないでください……、あんな、あんな事をされる

なんて……」

「ど、どうしたのかしらーすんは」

「わ、解んないけど、聞いたら駄目な気がするよ」

瞬間、イストワールの表情がどんよりと曇りきる。ネプテューヌとネプギアは、そんなイストワールの変わり様に心配そうに表情を曇らせるも、あまりの落差にそれ以上聞く事が出来ない。良く見れば、倒れたトリツクは、色々と満足したような表情を浮かべている。

「ネプギアこっちは終わったわよ」

「此方も、あらかた倒し終えましたわ。犯罪組織の下つ端には逃げられてしまいました……」

「それで、イストワールは助けられたのかしら？」

二人の女神に合流する様に、三人の女神が舞い降りる。ルウイーの5pb・強襲により、白の女神三姉妹は怪我をしていた為、それを除いた女神たちがプラネテューヌに救援に来ていた。新たに表れた幹部、ブレイク・ザ・ハード。ソレによって、犯罪組織の幹部の強さを女神たちは再認識したため、万全を期したと言う事だった。そして、その甲斐もあって、幹部の一人を倒す事が出来たと言う訳であった。「皆さん、お陰様でこうして助け出されました。ありがとうございます」

ノワールの質問に、イストワールはぺこりと頭を下げる。が、何処となくその目が虚ろな光を放っているのは気のせいでは無い。三人の女神はそれ以上聞いてはいけないとそれと無く察し、それ以上何かを聞く事は無かった。

「……けど、今回も手掛かりは無し、ね」

「どうかしたの、ノワール」

「少し、ね……」

落胆に肩を落とすノワールに、ネプテューヌは不思議そうに尋ねた。ノワールは困ったように小さく笑うと、何でもないと答える。

「ノワールさん……。ユニちゃん、やっぱり四条さんが居なくなっただけなの？」

ネプギアはそんなノワールの様子を見て、傍らに立つ友達に声を掛

けた。ノワールと四条優一の関係は詳しくは知らないが、ユニがネプギアと旅に出るとその代わりに傍に居た。それが関係しているのは容易に解ったから。

「うん……、ユウが居なくなっただけから、ずっとあんな感じ。だけど、アレでも立ち直ったほうなのよ。私が目覚めた時なんて、見ていられなかったんだから」

ユニはネプギアに困ったように言った。

「そうなんだ。……、でも、ユニちゃんは大丈夫なの？ ユニちゃんも、四条さんに凄くお世話になっていたはずだよ」

「アタシは、大丈夫よ。そりゃ、アイツが居なくなっただけで聞いた時は悲しかったけど……」

「なら、どうしてユニちゃんは平気なの？」

「別に平気って訳じゃないわよ。けどね、ユウはアタシと約束してくれたんだから。支えてくれるって。アイツはそう言う事で嘘はつかないって知ってるから。だからアタシは平気なの、ちよつとだけ寂しけど、と、友達のアンタもいるしね」

ネプギアの問いに、ユニは少し考え込みながら答える。それは、ユニとユウイチがした約束だった。

「……、ユニちゃんは四条さんの事を信じてるんだね」

「そ、そんな事ないわよ……、ううん、そうね、アタシはユウの事を信じてるんだ。だから、頑張れるの」

嬉しそうに笑うネプギアに、ユニは慌てて訂正しようとして、やめた。ユウは何時もアタシを信じてくれた。なら、アタシが信じてあげないでどうするの。そう思える程、ユニは成長していたから。

「だから、アタシはユウが居なくても大丈夫。きつと、諦めなかったらまた会えるから」

それまでもっと強くならないと。そう言っただけでネプギアに向けユニは笑いかけた。

「ふふ、健気なものだな。女神ともあろう者が、ただの人間一人に心を乱されるとはな」

不意にそれは現れた。真紅の女神、マジック・ザ・ハード。絶望の

体現者だった。

「貴女は……!?!」

不意に現れたマジックに、ノワールとプラネテューヌの女神が驚きの声を上げる。五人の女神の中心に舞い降りたマジックは、ただ泰然と女神を見渡す。真紅の大鎌を携え、小さく嗤っている。五人に囲まれていながら、女神たちを圧倒していた。

「久しいな、女神たち。束の間の平穏を堪能する事は出来たか？」

「お陰様で、三年ぶりに自分の国を堪能できましたよ」

女神の一人、緑の女神が優雅に答えた。

「まったく、一人倒したと思つたら、厄介な奴が出て来たものね」

「そうね、ネプテューヌ。だけど、私にとっては都合が良いわ」

ネプテューヌと呼ばれた紫の女神の言葉に、ノワールがそう言う。あの子がノワールの言っていた友達か、と少し興味深く見てしまった。プラネテューヌの女神であり、ギアちゃんの姉でもあると言う事だった。二人ならんでマジックを見据える姿は確かに戦友と言うに相応しい。

「あれが、あの子の友達か……。それにギアちゃんとユニ君もいる」

眩く、マジックの強襲に教会の上に立つ僕にはまるで気付いた様子が無い。既にプロセッサユニットを展開していた。黒と紅の神の衣を身に纏い、黒と紅の大剣を手にしている。ブレイク・ザ・ハード。それが、犯罪組織の幹部としての名だった。

「トリックを倒したようだな。その仇、取らせて貰うぞ」

「アンタはブレイブ!?!」

「この人が……。ユニちゃんを倒したつて言う。大丈夫だよユニちゃん! ここには私やお姉ちゃんもいるから!!」

マジックを取り囲んでいた女神たちの背後を取る様に、ブレイブが現れる。ユニ君が驚いた声を上げる。ギアちゃんが、ユニ君を気遣うように声を掛ける。それで、少しだけ震えていたユニ君から、緊張がほぐれていた。

「ブレイク様、アタイたちは本当に戦わなくてもいいんですか？」  
「そうつちゅよ、オイラたちもまだ戦えます」

傍で見ているリンダとワレチューが聞いて来た。トリックと共に戦ったせいかな、いたる所に怪我をしている。それが痛々しい。

——月光聖の祈り

「構わないよ。此処はまだ、命を賭ける場所じゃない」  
「しかし」

癒しの魔法を掛け、窘める。リンダがなおも食い下がろうとする。  
「君たちにはこれから先、助けてほしい事がある。だから、今は退いて欲しい」

「ブレイク様」

「アニキ……」

だから、お願いしていた。僕の味方足り得る人は、それほど多くない。だから、こんなところで二人を失いたくは無かった。

「解りましたつちゅ」

「アタイも」

「そうか、ありがとう」

頷いてくれた二人に安心する。

「だけど、後で教えてくださいよ」

「ん？」

「ブレイク様が戦う理由つちゅよ。ブレイブ様が言ってたつちゅ、アニキだけはおいら達とは違う理由で戦ってるって」

「ブレイブが……。解った、この戦いが終わったら、少し話すよ」

「約束ツちゅ！」

ネズミ君とリンダの二人と、そんな約束を交わす。やられた。マジックとは違いブレイブには警戒していなかった為、まさかこんなところから話す事になるとは思わなかった。

「それじゃ、行ってくるよ」

二人にそう告げる。黒と紅の神の力を纏い、舞い降りた。

「初めまして、女神達」

ブレイブとマジックに女神たちが気を取られているところに舞い降りた。目の前に居るのは紫の女神姉妹だった。ブレイブが黒の女神姉妹と対峙し、マジックは緑の女神と睨み合っている。闘いの相手が、明確に別れていた。ちらりと、黒の姉妹を見る。こちらを気にしているようではあるが、それは僕の正体がばれたと言う訳では無い様だ。新たに表れた敵、ブレイク・ザ・ハード。それに警戒していると云った感じだった。

「貴方は……？」

「僕はブレイク・ザ・ハード。女神を壊すものだよ」

プラネテユーンの女神、パールハートの言葉に淡々と答えていた。この場に居る五人の女神に聞こえるように言った。それは、引き返す事が出来ない始まりだった。

「ブレイク。貴方が、ブランやロムちゃんラムちゃん、5pb. を襲ったって言う」

「そうだよ、僕がそのブレイクだ」

黒と紅の大剣をパールハートに突きつけながら答える。同時に、異界の魂としての魔力を解き放った。その場にいる全員に、圧力を加えていた。

「これは、犯罪組織の幹部に力……。成る程、さっきの奴と比べても遜色が無いわ……。厄介な奴が現れたものね」

「どうするの、お姉ちゃん」

「どうするも何も、戦うしかないわよネプギア。こっちが連戦だからって、相手は待ってくれないわ」

「そう、そうだよね、解ったよお姉ちゃん。私も、全力で行きますー！」  
「そう言い、紫の女神姉妹が刃を構えた。小さな笑みが浮かんだ、これで良いんだ。小さく自分に言い聞かせた。」

「私たちの相手は、ブレイブ・ザ・ハードね」

「うん。お姉ちゃん、悔しいけどコイツは凄く強い。アタシに力を貸して」

「当たり前よ、それで、二人で倒してユウの居場所を聞かなきゃいけな



いんだから！」

遠くから聞こえる二人の言葉に、少しだけ罪悪感が募る。直ぐ傍に居る、そう言いたいけど、まだ言う訳には行かなかった。

「準備は整ったようだな、では、行くぞ!!」

ブレイブの気迫の籠った声が響き渡る。黒の女神姉妹と、ブレイブ、僕の友達同士が刃を重ねようとしている。そうなる様に導いたのは僕だった。三人に心の中で謝罪する。それでも、止まる事は出来なかった。

「そろそろ、わたくしたちも始めましょうか。以前の様には行きませんわよ」

「精々抗って見せろ」

緑の女神に、マジックは淡々と言い放つ。マジックは自分が負ける事などあり得ないと言う自信が見て取れた。実際にマジックは強い。だけど、女神達もまた強くなる可能性を秘めていた。

「では、行こうか」

左手に魔力を収束させ、言葉を紡ぐ。そのまま紫電を左手に帯電させ、空を駆け紫の女神に肉薄した。

「そう簡単に、やらせはしない！」

紫の女神も一直線に向かってくる。それに向け、左手を無造作に振り払った。

——天魔・轟雷

紫電が紫の女神に向かい、雷迅を以て襲い掛かる。

「くうー！」

「え……？」

それでも流石に女神と言うべきか、両手に持つシエアで構築された刀を翻し、パープルハートは雷迅を斬り裂いていた。ギアちゃんが呆然とした声を上げる。顧みず、紫の女神に斬りかかる。

「く、はやい……」

完全に弾ききれなかったのだろう、雷による痺れに耐えながらも、パープルハートは斬撃を受け止め続けている。が、

「君が遅いんだよ」

「しまっ!？」

それ程打ち合う気は無かった、痺れて力の入らない両手から、刀身で女神の持つ武器を巻き上げる形で上空へ弾き飛ばした。

「っ!?! ダメ、お姉ちゃんはやらせません!」

呆然と僕を見詰めていたギアちゃんが我に返り、姉との間に割って入る。この子もまた、僕の友達の一人だった。目が合う、困惑の色を宿していた。それはそうだろう。先にはなった紫電、それはこの世界にはない魔法だから。それでも、僕の前に立ちふさがるのは、彼女に確信が無く、姉思いであるからだろう。

「音速剣、フォーミュラーエツジ!!」

高速を超える、音速の連撃。無数の斬撃が、僕を、犯罪組織のブレイクを阻むため立ち塞がる。斬撃の壁とも言えるそれは、以前見た時よりも早く正確になっていた。この子もまた、ユニ君と一緒に成長しているのが感じられ、嬉しく思う。だけど、

——フォーミュラーエツジ

「——っ!?!」

今は戦うべき相手だった。だから、一切の手加減も無く、彼女の刃をそれ以上の完成度を以て叩き落とす。刃と刃が音速でぶつかり合い、凄まじい衝撃と斬撃音を響かせる。ギアちゃんがもう一度驚きに目を見開いていた。小さく呟く。

「まだ、終わらないよ」

「ま——」

——エクス・コマンド。

それは身体能力を底上げする魔法。かつてギアちゃん達にも施した、強化の呪法だった。それを自分に施し、恩恵を得る。そのまま、ギアちゃんの持つ銃剣を打払った。瞬間的に背後に回り、その背に向かつて蹴りを放ち、追撃の為刃に魔力を込める。

「早々好きにやらせはしないわ!」

「それは、そうだろうね」

風の刃を放とうとしたところで、立て直したパープルハートが踏み込んできていた。即座に反転し、その斬撃を受け止める。火花が散

り、ぎりつと刃同士が鈍い音を立てる。

「まって、待ってくださいー！」

そんな中、ギアちゃんの言葉だけが届いた。パープルハートが僕を見据えながらも、困惑の色を宿した。

「ネプギア？」

「なんで、なんで貴方がその魔法を使えるんですか……。なんで、貴方が私の剣技を使えるんですか……」

そんな姉の言葉に応える事をせず、ギアちゃんは僕に尋ねる。

「何故かって？」

「そうです、その魔法はあの人が……。それに剣技だって」

ギアちゃんの問いに、小さく笑う。確信を持っていないようだけど、一つの答えに行き当たったのだろう。ユニ君とノワールを一瞥した。ブレイブが相手で、こちらの会話を気にする程の余裕は無く、空を駆けまわりながら戦っている。

「そうだね……。僕に勝てたら教えてあげるよ」

「本当ですか？」

「ああ、本当だよ。君に出来るなら、ね」

「絶対聞き出します。ユニちゃんとノワールさんの為にも」

ギアちゃんの目から困惑の色が消えた。それは、本気で相対すると言う事だった。

「ネプギア、どうしたのよ？」

「まだ、確証は無いけどもしかしたらあの人は……。お姉ちゃん、今は言えないけど、力を貸して」

「ええ、解ったわ。良く解らないけど、可愛い妹に頼られたら頑張らなきゃいけないわね」

ギアちゃんとパープルハートが言葉を交わすと、もう一度僕に向き直った。それが、第二ラウンドの始まりだった。

### 39話 立ち塞がる理由

「おーおー、始まったか」

女神と犯罪組織の抗争が始まった直後、プラネタワールの最上階に居たクロワールは面白い余興が始まったと言わんばかりに笑みを浮かべた。視界の先には五人の女神と、三人の犯罪組織の幹部が鎬を削り始めていた。ただ一人、四条優一の選んだ道を正確に知っているのがクロワールだった。

「しっかしつえーなアイツ。女神から離れた途端、段階を飛ばして強くなつてやがる」

ケラケラと笑いながらクロワールは戦いの行方を見詰めていた。視線の先にあるのは、勿論、紫の女神姉妹と四条優一の戦いだつた。そして、クロワールの言葉通り、優一は二人の女神を圧倒していた。二人の武器は剣である。ネプギアの物は銃剣なのだが、今は接近戦を挑んでいた。姉妹故に呼吸の合った連携。ソレを以て、優一に立ち向かう。

「女神もやるようだけど、あれじゃー絶対勝てねーな。剣で挑む限り、誰もアイツには勝てねーよ」

それでもクロワールが見るに、二人の力は異界の魂には届かない。二人は剣で挑んでいた。それでは、こと剣と言う概念に置いて絶対の力を持つ四条優一に勝つ事はできない。共に居たクロワールだから、それは良く解っていた。

「しっかし難儀な奴だ。さっさと壊す事に決めたら、死なねーで済むのによ」

クロワールは戦いを眺めながら零す。その眩きは、どこか寂しそうな響きを宿していた。それは、クロワールが異界の魂の結末を知っているからに他ならない。四条優一をこの世界に導いたのは、クロワールと言って良い。彼女にとって、歴史を面白くする要素として異界の魂召喚の儀式をこの世界に持ち込んだのだが、予想を超える事態を招いてしまった事に、僅かながら彼女なりに責任を感じていたのである。だから、本来傍観者に徹するクロワールは、四条優一の前に姿を

現したと言う事だった。

「けどまあ、好きにすればいいよ。お前がどんな結末を迎えようと、俺が覚えておいてやるから。女神たちに非難されようと、世界の敵になろうと、なんでお前がそんな行動をとったのかは、俺が見届けてやる。だから、やりたいようにやれよな」

女神と刃を交える弱き人間を見詰め、黒の妖精は静かに呟くのだった。

「これならー」

女神が気迫を刃に乗せ、迫る。信仰の力を刃から滲ませ、犯罪組織の幹部である僕を斬り裂く為、刃を滑らせる。その太刀筋に迷いは無く、早く鋭い。一瞬でも油断をすれば即座に斬り伏せられたとしても可笑しくは無い一閃。眼前に迫っていた。その一撃には思いが込められていて、この世界を守りたい。そんな想いと共に消滅していった歴代の女神の姿が重なる。

「まだまだよ、その程度の速さじゃ届きはしない」

だけど、そんな想いの籠った一撃でさえ、犯罪神はおろかマジックにすら届きはしない。今の僕ですら、十分に目で追える速さでしかないから。迫り来る紫の太刀による一撃が辿り着く前に、その手元を足で蹴り上げ、刃を遮る。剣を止めるのに刃を用いる必要は無い。相手の呼吸さえ解れば、如何とでも防ぐ手段はあると、数多の使い手たちが教えてくれる。

「確かにそうね、けど、ネプギア！」

「解ってるよ、お姉ちゃん！」

パープルハートの叫び声に、ギアちゃんが僕の間合いの内に肉薄し、刃を振り抜こうとしていた。風を切る音が聞こえていた。それは、僕が背後からの強襲に感付くには充分な情報だと言えた。そのまま片手で持っていた黒と紅の大剣を無造作に翻す。

「二閃、リンドバーグっう!？」

ギアちゃんが斬撃を放つ刹那、翻した刃が待ち受けていたかのように出現し、機先を制する。加速していた体を無理やり止め、ギアちゃんは急制動を掛けなんとかその場に踏み止まった。そして、ソレは致命的な隙だと言える。

「遅いよ」

「あ……」

ギアちゃんに肉薄する。急制動により無理に体を止めた為、体が硬直していた。手にする銃剣の柄に狙いを定めた。そのまま刃を寝かせ、銃剣を握る両手に向け振り下ろした。

「あう……っ」

がんとした手応えが両手に響き、ギアちゃんが痛みにも顔を顰めた。両手に構えていた銃剣が乾いた音を鳴り響かせ、地に向かい落下していく。そのまま空いた片手をギアちゃんの頭に伸ばし、頭に触れ小さく呟く。

「君の能力はその程度か？ このままだと、犯罪神は愚か、マジックにすら勝てない」

「っ、そんな事ありません……ああああ!？」

小さく小声でつぶやく。言い返そうとしたところで、左手に魔力を収束させ、紫電を直接ぶつけた。魔法と言うほど大したものではない。魔力を電撃に変換しただけのものだった。それでも至近距離で受けたギアちゃんが防ぐことはできず、二度大きく体を硬直させると、地に向かって落ち始める。

「ネプギア!？」

「妹を気にしている余裕はあるのかな？」

落ちていく妹にパープルハートは悲鳴に近い叫びをあげる。それにギアちゃんが僅かに反応を示した。それを空気の流れから感じ取る。ギアちゃんが何とか態勢を立て直すのが解ったが、その時には既にパープルハートを間合いの内に入れていた。

「そうそう、何度もやられると思わないでほしいわね」

「へえ、存外やる」

隙だらけのパープルハートを斬り捨てる気で刃を振るった、それを

ギリギリのところまで彼女は往なしていた。思わず感嘆が零れる。つまり、油断を誘ったと言う事だった。これが紫の女神か、つと賞賛を送る。確かに躲かれていた。

「接近戦なら、私に分がある様ね」

小さな笑みを浮かべたパープルハートが僕に告げる。その刃が弧を描き襲い掛かる。完全な隙を晒していた。斬られればそれは致命傷になり得る一撃で。

「それは、思い違いと言うモノだよ」

「ヴァリアブルエッジ!!」

だからこそ、それを往なされた隙もまた致命的と成り得る。迫る紫の太刀を見据えていた。

——霞三段

「な……」

「マジックはこれより早い。今のまま戦えば、勝つのなんて夢のまた夢だ」

眼前に迫る刃を、体捌きだけで往なしていた。僕を倒そうと放たれた紫の軌跡を見据え、流れに逆らう事なく受け流す。パープルハートの攻撃をかわすと同時に、その背後を取っていた。無造作に首を掴む。瞬間的に魔力を収束させ、それを雷に変換。ギアちゃんに与えたものと同じ刺激を彼女にも流し込む。

「きやああああ!?!」

女神の口から悲鳴が上がる。それを聞き胸が痛んだけど、そこでやめる事はせず地に落とす。ぐったりと項垂れ、地に向かい降下していく。左手に魔力を収束した。言葉を紡ぐ。紫電が迸る。

「やらせません!!」

雷迅を放とうとしたところで、銃剣に玉が込められた音が聞こえ、瞬時に離脱する。直後、僕のいた場所に向かい、MPBLによって放たれた銃撃が降り注ぐ。

「そうだよ、紫の女神候補生。君の力は剣技だけじゃない。あるモノ全てを使って、漸く届く」

「貴方は何を言って……」

ギアちゃんにそれだけ伝える。ギアちゃんの強みは剣の技術では無い。銃剣による、遠近問わない攻撃距離こそがその強みと言える。困惑しながらも銃弾を放つ彼女から距離を取り、低空を駆け抜ける。「やってくれる。確かに近接戦では貴方の方が上手だったみたいだけど、これならどう?」

そう言い、立て直したパープルハートが再び弧を描き肉薄する。

「32式エクスペリド!!」

やがて間合いの内に入ると言うタイミングで、シエアを解き放つ。上空から強大な剣が舞い降り、僕に向かいその威を振るう。

「ちっ」

小さく舌打ちを吐きながら、振り下ろされた刃から弧を描き距離を取る。眼前にパープルハートが迫っていた。

「だけど、君の剣で僕は止められないよ」

「そうね、悔しいけど剣なら勝てないわ。ネプギア!!」

刃がぶつかり合う。互いの武器が火花を散らせた。パープルハートが妹の名前を叫んだ。直後に、自身の武器から手を放し一気に離脱する。そして目の前に居たのは、

「これで落します! M P B L !」

ギアちゃんであった。既に照準を定めており、迷いなく引き金を引き絞る。

——マキシマム・チャージ

「そうだ、君たちの強みは個の強さじゃない。単体での強さは、犯罪組織に分がある。だから、自分の出来る事を工夫する事が何より大事なんだ」

「……まさか、今のを凌ぐなんてね」

避けるのが不可能なタイミングだった。瞬間的に判断すると、限界を超える魔法を解き放ち、銃撃を斬り裂いていた。ギアちゃんの用いる銃撃はシエアによる銃撃である。ならば、刃さえ間に合えば、同じくシエアを用いた僕の剣に斬れない道理は無かった。銃撃を斬り裂いた僕に、パープルハートは呆れた様な声を漏らした。

「そんな……」



誰よりも勝利を確信していたギアちゃんが、呆然と見詰めていた。再び低空を駆け、彼女に肉薄する。

「私を無視していけると思っているの?」

「行けるさ、武器は剣だけじゃない」

妹から僕を遮ろうと再び前に出た女神に、答える。そのまま地に刃を突き刺し、地面を削りながら肉薄する。そして、刃を交える刹那、大剣を振り抜く。

「っ、そんな目眩ましで」

「だけど有効な手だよ」

石礫をぶつけ、刃の軌跡が揺らいだ所を通り抜け、そのまま置き去りにする。

「逃げなさい、ネプギア!」

「あ……」

ギアちゃんを再び間合いの内側に入れていた。呆然と此方を見上げている。パープルハートの悲痛な叫びが響き渡る。無視して、ギアちゃんの首元を掴み、引き寄せる。

「君の力は本当にこの程度なのか?」

「う、ああ」

苦しそうな悲鳴を零すが、手を緩める事はしない。今の僕に手も足も出ないと言う事は、マジックにも敵わないと言う事だから。そうなれば、彼女たちにある運命は魔剣の贄と言う事になる。

「女神の想いは、この世界を守りたいと言う願いは、僕にすら勝てない程度のものなのか?」

「う、ああ……」

「答えてよ、女神。君たちの思いは、その程度の物なのか?」

ギアちゃんの表情が苦痛にゆがむ、だけど、これだけは聞いておかなければいけない事だった。魔剣に女神の覚悟を見せられていた。今の女神であるこの子にも、それだけの覚悟があるのか。それを知っておきたかった。

「ネプギア!」

パープルハートの叫びが届いた。引き離れたとはいえ、距離があつ

たわけでは無い。間を置かずに妹を助けに来るだろう。

「私は……、護ります。好きなんです、この世界が……、この国の人々が……」

「そうか。ギアちゃんもまた、女神なんだね。だけど、それじゃ駄目だよ。それでは、変えられない」

「え……？ ああああ!?!」

息も絶え絶えに、ギアちゃんは応えていた。彼女もまた、魔剣に命を奉げる覚悟がある女神なのだろうと解ってしまった。そしておそらく、他の女神も。でも、それではダメなんだ。……知りたい事も知れた。教えたい事も教える事が出来ていた。その為、ギアちゃんに雷を流し意識を奪った後、背後から迫るパープルハートに妹を投げつける。

「っ?! ネプギア」

パープルハートは慌てて妹を受け止める。それを捨て置く事にした。だって、

「アンタ、ネプギアに何してるのよ!?!」

「ネプテューヌ、援護するわよ!」

黒の女神姉妹が増援として向かって来ていたから。更に、別の方向からももう一つの力が接近する。

「此方も終わりましたよ。マジックには逃げられてしまいましたか……」

満身創痍と言った風体の緑の女神が舞い降りる。緑の女神も駆けつけてはきたが、とても戦える状態では無かった。となれば、戦うべき相手は三人と言う事になる。パープルハートと、二人の友達だった。

「ブレイブとマジックは撤退したようだね」

周りの様子を見て、状況を判断していた。ギャザリング城の戦いから直接ここまでできていた。ブレイブは問題ないと言っていたが、負傷した状態で女神の相手は分が悪かったようだ。ソレに気付いたマジックが、ブレイブを撤退させたと言ったところだろうか。

「そうね。討ち漏らしたのは痛かったけど、これで貴方はたった一人

よ。それでも私たちと戦うのかしら?」

「愚問だね」

ノワールの言葉を肯定する。ブレイブには悪いけど、この状況は有りがたかった。マジックを警戒することなく思う存分動ける状況は、これから先あるかは解らないからだ。

「ベール、ネプギアを頼むわ」

「ええ、解りましたわ。私が守りますので、あなた方は思う存分戦ってください」

立っている女神の中で最も消耗の激しい、緑の女神にパープルハートは妹を託すと、僕に向かい刃を構えた。

「待たせたわね。ネプギアを痛めつけてくれた借り、返させてもらわよ」

「出来るのならば、やってみると良いよ。妹と同じく、倒してあげるよ」

静かに闘志を燃やすパープルハートを煽るように言い放つ。

「ノワール、ユニちゃん、力を貸して」

パープルハートが、黒の姉妹にそう言う。遂に来たか、どこか他人事のようにそう思う。それは、覚悟していた事であり、できる事ならば実現して欲しくなかった事だった。

「ええ、解ってるわよ。ブレイク・ザ・ハード。貴方は此処で倒す!!」  
「ネプギアをあんな目に合わせた事、絶対に後悔させてあげるんだから!!」

ノワールとユニ君、二人の姉妹が互いの武器を構え、僕を見据えた。その目に宿るのは敵意。仲間を傷付けた者への、隠す事の出来ない明確な敵意だった。ずきり、つと胸が痛む。二人は僕に希望をくれた人だった。もう一度生きたいと思わせてくれた。どこか死んでいた心を救い上げてくれた恩人だった。だから守りたいと思い、守ると決めていた。その二人に、自分で選んだとは言え、そんな目で見られる事に心が悲鳴を上げていた。だけど、もうずっと前から決めていた事でもある。だから、耐えられない痛みでは無かった。ならば、まだ戦える。傷付いたとしても、まだ戦えるんだ。

「来い、女神達。そして教えてあげるよ。犯罪組織に挑むには、犯罪神に勝つにはどれだけ強くないといけないかを」

言い放つ。守りたいと思う人たちとの望まぬ戦い。それが今、始まった。

## 40話 違えられた道

「……君たちの思い、見せて貰うよ」

最初に動いたのは女神達では無く、ブレイクであった。地面すれすれの低空を駆り、三人の女神に最短距離で迫る。その速さは神速と言うに相応しく、音の壁を突破し衝撃波をまき散らしながら距離を詰める。皮肉にも、犯罪組織に所属しマジックと戦い続けることで四条優一の、異界の魂の能力は極限まで研ぎ澄まされていた。その力は最早女神と比べても劣るものでは無い。それに女神を模倣した力が加わったことで、凄まじいまでの能力を発揮していた。

「ノワール、ユニちゃん、敵の剣の腕は異常よ！ 二人以上で対処するようにして」

「解ったわ。行くわよ、ネプテユヌー！ ユニ、援護は任せるわ」

二人の女神が小さく頷くと、そのままブレイクを迎え撃つ。シエアで構築された太刀と大剣。各々の獲物を手に、犯罪組織の幹部を討つため、疾走する。

黒と紅で構築された大剣と、紫の太刀と黒の大剣が激しくぶつかり合う。交錯の刹那、数十の斬撃がブレイクの左右から放たれていた。二人の女神が、ブレイクを挟撃する形で斬撃の雨を降らせる。

「まだだよ、まだ、これじゃあ足りない。この程度じゃ、マジックにすら届かない」

二種の斬撃の交わる点にその身を置きながら、片手で大剣を操りつつ、ブレイクは二人の女神に宣言する。この程度の強さではマジックにすら届かないと。

「コイツ……！」

「まったく、さつきから解っていた事だけど、規格外の化け物ね」

そんなブレイクの言葉を聞いた二人の女神は各々で反応を示す。ノワールはその凄まじいまでの剣の冴えに驚嘆を示し、パープルハートは先ほどから一向に衰える事を知らない剣の腕に呆れとも尊敬とも取れる言葉を零す。相手は片手で大剣を操っているにも拘らず、二人掛かりで一太刀すら浴びせる事は叶わない。絶技とも言えるそれ

を、二人は目の当たりにしていた。

「少し鬱陶しいね。散つてくれるかな?」

忙しなく振るわれる二人の女神の斬撃をブレイクは煩わしそうに見ると、両手で強く大剣を握り直し、一閃した。

「っ!」

「ノワール!」

ただの一閃、それだけで黒の女神の一撃を弾き飛ばし、体勢を崩していた。腕力が強いと言うのもそうだが、ブレイクはそれ以上に機を見る力が異常だった。斬撃の放たれるタイミング、それを予知とすら思える正確さで見切り、放たれる斬撃の力をも利用して女神の攻撃を無効化していた。そして今まさに、攻撃の機を読まれたノワールが、大きな隙を晒してしまっていた。その隙をブレイクが逃すはずがない。その速すぎる速度でノワールの間合いに入ると、至近距離まで近づき小さく言葉を告げる。

「悪い癖だよ。熱くなると、手元が疎かになる。予想外の手に対処が遅れる」

「な、何を……!」

伸ばせば手が届く、それ程まで距離を詰め、四条優一は黒の女神に言葉を掛ける。思わずノワールは目を見開いてしまう。たった一つの失策で、殺されても不思議では無い程追い詰められたから。だから、相対する敵の言っている事を、正確に理解できなかった。ただ目の前に来てまで言われた言葉に、困惑していた。

「お姉ちゃんは、やらせない!!」

「ぐ、きやああ!!」

姉の窮地を救う為、銃声が響き渡った。ノワールの目と鼻の先に居たブレイクが、共に射角に居た彼女を蹴り飛ばすと、彼のいた場所に、銃弾が豪雨のように降り注ぐ。シエアにより構成された弾丸。それがブレイクを倒すため、立て続けに放たれていた。同時に、蚊帳の外に置かれていたパープルハートも肉薄する。

「これ以上は、やらせない」

「そうだ、止まっちゃだめだ。冷静に対処されれば、確固撃破される。

絶えず動き、工夫し、繋ぐ事。それが大事なんだ。一人で勝てないのなら、一人で挑まなければ良い」

降り注ぐ黒の銃弾と、その合間から放たれる紫の斬撃。二つの連携に、ブレイクは行く手を少しづつ制限されながらも、悠然と迎え撃つ。放たれる銃撃は、被弾するモノだけを完全に見極めると、脅威となるものだけを大剣で射角を僅かにずらすことで阻む。銃撃の合間を縫い、時折煌めく凶刃は、その太刀筋を全て見極め体捌きのみで往なし続ける。

「つう……、やってくれるわね」

「ノワール、このまま押し切るわよ！」

「言われなくても……！」

一時的に離脱させられていたノワールも連携に加わり、連撃は加速する。ブレイクを挟むように展開された斬撃の壁に加え、ブレイクの死角を穿つかのように放たれる銃弾。一つずつ羽を手折るかにように、じわじわとブレイクを追い詰めていく。だが、それでもブレイクの表情に焦りは見られない。それどころか、刃を重ねる度に完成度を上げていく連携に、心から嬉しそうに嗤う。

「……コイツ、笑ってる!?!」

「お姉ちゃん、挑発に乗っちゃだめだよ！」

「解ってるわよ。もう、油断なんかしないんだから」

「私たち三人を相手に大層な余裕ね」

そんなブレイクを見て、三人は気を引き締める。追い詰めている、追い詰めていると言うはずなのに、何故かそんな気がしない。ただの一撃すらその身に受けていないブレイクを見ると、女神達には相対する敵の底がいまだに読めずにいた。

「いや、単純に嬉しいんだよ。君たちが、女神が強くなるのがね。今のままじゃ、どう足掻いても犯罪組織には勝てはしないだろう。だからこそ、この局面に来て更なる力を得る女神を見るのが面白い。君たちは、何処まで強くなれるのかな？」

自身を封殺しようと放たれる連撃の冴えに、口角を歪めながらブレイクは言い放つ。犯罪組織に在りながら、女神が強くなるのが嬉しい

と、面白いと言っていた。

「馬鹿にして……!?!」

黒の女神が、更に速度を上げる。黒の大剣と、黒と紅の大剣。似て非なる武器が、互いの存在をぶつけ合い、火花を散らす。薄い笑みを浮かべ迎え撃つブレイクと、仲間を傷付けた相手に敵意を剥きだしに迫るノワール。凄まじいまでの激突音が響き渡る。

「畳みかけるわよ、ネプテューヌ!」

「全く、人使いが荒いわね」

力任せにノワールがブレイクを吹き飛ばし、態勢を崩すと、其処にユニが途切れる事無く銃撃を放ち続け、僅かなを作り出す。その間に、二人の女神は合流し、共にシエアを高めた。狙うのは犯罪組織の幹部の撃破。二人の武器にシエアが収束され、高められた力が唸りをあげる。

「これで止まりなさい!」

息も吐けぬほどの銃弾の雨。それを放ちながら、更にユニは自身の持つXMBにシエアを収束させ、大技を放つ。一人の女神から放たれた弾幕から逃れる事が出来ず、ブレイクはまともにXMBの砲撃を受けると、凄まじい爆発が起こり砂塵が舞う。

「トルネードソード!」

「ヴィクトリースラッシュ!」

二人はユニの砲撃により舞った砂塵の中に、依然としてブレイクの力が存在しているのを感じ取ると、小さく頷き合い、止めを討つために疾走する。刹那にも満たない時間で間合いに入るとその力を解放していた。虹色の剣と、闘気を宿した紫の太刀。ソレを以て、ブレイクに迫る。

「これなら!?!」

「どう!?!」

シエアにより構築された刃に、更なるシエアを上乗せした必殺の一撃。それを二人は連携の中に組み込み、流れる様に鮮やかにブレイクに叩きこむ事に成功していた。二人の手には、確かに手応えがあった。ここにきて、漸くブレイクに攻撃らしい攻撃をぶつける事に成功



したと言う事だった。それは、一人では勝てない相手でも、仲間と共に戦えば打ち破れると言う事の証明に他ならなかった。

「少しばかり、効いたよ」

やがて砂塵が薄れ、その中から対峙していた敵が姿を現す。展開されている黒と紅のプロセツサユニットははまだ健在だが、身に纏う黒を基調とし紅で装飾が施されている外套には、二人の女神の斬撃が交錯した後がその爪跡を残していた。ユニの砲撃とあいまり、ともに直撃したのだろう。ブレイクは額から血を流し、その身に纏う外套を赤黒く染めていた。

「今のでも倒れないなんて……」

この場に居るただ一人の女神候補生であるユニが、少し怯んだように零す。女神が三人がかりで挑んで尚、倒しきれないでいた。得体のしれない強さを持つ敵に、言い知れない不気味さを抱くのは仕方が無い。

「大丈夫よユニ。確かにアイツは強いけど、攻撃は確実に効いてる。なら、必ず倒せるはずよ」

「ノワールの言う通りよ、ユニちゃん。それにブレイク・ザ・ハードの言う通り、マジックはこれ以上に強いわ。女神が四人でも勝てなかった相手。再戦する前の相手としては、丁度良いの。だから、ここでブレイクを倒して勢いを付けましょう」

「お姉ちゃん、ネプテューヌさん。そうだよ、何よりコイツはネプギアを酷い目に合わせた相手。倒さなきゃいけない」

依然として健在なブレイクを前に、三人の女神は更なる闘志を高める。闘いの決着が着こうとしていた。

女神たちの連携。それは僕の予想していたものよりも、ずっと凄まじいものだと言えた。三人ですら、僕の展開するプロセツサユニット

に傷をつける事が出来ていた。僕の展開するプロセスサユニットは、僕の持つ女神四人分のシエアで構築されている。そのシエアと言うのはある意味で、僕自身とも言える。この世界に来て魂だけの存在となり、身体がシエアで再構築されていた。肉体のない僕を、シエアが構成していたと言う訳である。つまり、僕の魂とシエアは限りなく近い場所にあつたと言えるわけで、それはつまり

「……痛いなあ」

シエアで構築されているプロセスサユニットが壊されると言う事は、魂の一部が破壊されることに限りなく近いと言う訳であつた。砕かれたプロセスサユニットを眺めながら、小さく零す。僕が明確に人間で在る事を諦めた時から痛みと言うモノを感じなくなっていた。死人が痛みを感じる事など無い。そう言う訳であつた。だから、肉体的な痛みは感じない。だけど、今破壊されたのは僕の魂に直結しているシエアで構築されている物であつた。それを壊されると言う事は、魂だけの存在である僕が少しずつ切り崩されていくと言う事だつた。

とは言え、既に自分は死人である。魂を砕かれることによつて痛みを感じる事はある。だけど、その痛みで死ぬと言う事は無い。既に死んでいる者をもう一度殺すと言う事はできないからだ。つまり、痛みだけを感じる事になると言う訳だ。

尤も、痛みと言つても激痛が走る訳では無い。明確なモノなど無く、漠然と痛いなあつと感じる程度の痛みだつた。少なくとも、今負つた傷は、その程度の物だつた。

「一応聞かせてもらうわ。辞める気は無いのかしら？」

「無い、ね。もつと見せてくれないかな、女神の力を、想いを。君たちがどれ程この世界を思い、僕たちを倒そうとしているのか。それを、示してよ。僕はそれが知りたい」

「そう……。なら、教えてあげるわ！ 私たちの思いを……」

投降しないかと言うノワールの言葉に、少しだけ涙が出そうになつた。今の僕は敵でしかないし、そもそも僕と言う事に気付いてもいない。それでも、友達に手を差し伸べられたのは嬉しかった。だけど、僕がその手を取る事は無い。取る訳には行かないから。だから、目的

を果たす事にする。ギアちゃんには示して貰っていた。だけど、ノワール達からはまだ見せて貰っていなかった。彼女たちの持つ想いもまた、古の女神たちと同じなのか、それが知りたかった。

「来い、女神」

告げる。再びプロセッサユニットを用い浮き上がる。一度小さく深呼吸を吐き、静かに見据えた。心は落ち着いている。体も動く。なら、まだ僕は動けるんだ。女神の想いが本物かを知る為、刃を握った。「行くわよ、ユニ、ネプテューヌ！」

「任せて、お姉ちゃん！」

「合わせるわよ、ノワール！」

三人の女神がシエアを収束した。先程よりも遥かに大きな力が集い、女神を中心に力の奔流を巻き起こす。それは、雄々しくも気高く、そして優しい力だった。その力をただ見つめていた。キラキラと輝く、綺麗な光だった。これが信仰の力か、これが人々の祈りの力か。これが、僕の護りたい人たちの力なのか。目の前で輝く暖かな力を目の当たりにし、確信した。これは、無くしたらいけないものなんだ。

「N・G・P！」

最初に、黒の女神候補生がその手に持つ祈りの力を解き放った。暖かでありながら、凄まじい力の奔流が迫り来る。それを、剣を構え、ただ見つめていた。

「インフィニット——」

「ネプテューヌ——」

同時に、二人の姉が女神候補生の、ユニ君の放った一撃に、弧を描くように追いつき僕に向かい肉薄する。二人の持つ祈りの塊から、柔らかく暖かい力を感じ取れた。それは人の祈りであって、彼女たちの護るべき者の力。

「……」

直撃する。放たれた力の奔流を、ただ受け止めていた。最初に綺麗だと想い、そして暖かいと思った。やがて、二人の姉が迫る。そして、

「スラッシュ!!」

「ブレイク!!」

二人の女神の気迫がこもった声が響き渡り、僕の手にする大剣にぶつかり合っていた。気付けば、二人の斬撃を大剣で迎撃する様に反応していた。だけど、それを僕が受け止める事は出来なくて。

「これで!!」

「終わりよ!!」

黒と紅の大剣から、大きな罅が入るのが解った。それをどこかぼんやりと見つめていた。そのまま二人の女神が力を振り絞り、黒と紅の大剣が砕け散った。

「あ……」

そこでぼんやりとしていた意識がはつきりと覚醒する。綺麗な光を見ていた。温かい想いを感じていた。それは歴代の女神が抱いて散った想いと何ら変わりが無くて、だからこそ護りたいと思うモノで。そんな何よりも尊い光に魅せられていた。だけど、夢の終わりは必ず訪れる。この想いの行き着く先を、僕は知っていた。

生きたいと願いながらも、その身を犠牲にした者たちが居た。護りたい者の為、諦める者たちが居た。世界を守る為、自分を犠牲にするしかなかった数多の女神たちが居た。この子たちを、自分の友達を、そんな目に遭わせたくは無かった。泣かせたく、なかったんだ!

「そうだ。此処はまだ終わりじゃないんだ……」

どこか微睡んでいた思考が覚醒する。手にした大剣、半ばから圧し折れていた。激しい痛みが胸を衝いた。先程壊された傷とは違い、完全に折られていた。その消耗は先の比では無いのだろう。だけど、寝起きの僕にとって、それは必要な痛みだった。即座に自分の状況を理解する。剣どころか、全てのプロセッサユニットが半壊し、最早ともに機能するとは思えなかった。女神たちの攻撃をまともに受け、ゆっくりと落ちていく途中だった。プロセッサユニットの再構築を試みる。だけど、シエアを上手く収束できなかった。なくなったわけでは無い。ただ動かすには時間がかかる。漠然とそう感じた。ならば、この姿でいる意味は無かった。両の眼を閉じ、一度だけ深呼吸をすると、構築していたプロセッサユニットを解放した。

光が辺りを包み込む。それは、女神が変身する時に放つ輝きに限り

なく近い光だった。やがて、辺りを包む光が終息する。魔力を用いて、空中で器用に態勢を立て直した。そして、

「え……」

「な、んで……」

二人の友達の呆然とする声が響き渡った。

「ど、どうしたの、ノワール、ユニちゃん……?」

パープルハートの困惑したような声が届いた。同時に、僕が放った光と同質の輝きが辺りを二度包む。黒の女神姉妹が、変身を解除するのが解った。視線を移す。

「なんで、何で貴方が……?」

「本当に、ユウ、何だよね……?」

女神では無く、ただの弱い女の子が直ぐ傍らまで来て、縋るように見つめていた。おずおずと手が伸ばされる。

「……久しぶりだね、二人とも」

その手を掴む事をせず、手にした長釣丸を突付け答える。

「ま、待って……」

ノワールの表情が、今にも泣きだしそうに歪んだ。胸が痛む、けど話す事は無かった。

「犯罪組織のブレイクは……、ユウなの?」

「そうだよ」

ユニ君も泣きそうに表情を歪めていたが、それでも下唇を噛み、僕に視線を定めると聞いて来た。だから、事実だけを答えていた。これで、全ての準備が整ったと言つてよかった。

「僕は、君たちの敵だ」

「待って、お願いだから、待ってよ……」

踵を返す。膝をつく音と、声が聞こえた。

「さようなら」

——天魔・轟雷

最後にそう告げ、紫電を解き放つと、その着弾の衝撃に紛れこの場を後にした。

## 41話 未来を変える力

女神たちとの戦いから離脱した後、ワレチューとリンダと合流し、そのまま先導されて犯罪組織の拠点の一つに身を隠す事にした。女神たちの力を知り、その想いを、文字通り身を以て体験した。それは、包み込むように優しく、何よりもキラキラと綺麗に輝いていて、敵として戦っている最中に思わず見惚れてしまう程の、尊いモノだった。護るべきモノだと理解し、護りたいとも思った。だからこそ、一緒に居る訳には行かなくて、涙を流す友達に刃を突付けてまで、決別する意思を示していた。

「やっぱり、辛いなあ……」

現在地は、プラネテューヌとラスティシヨンの境界の山間部にある、隠れ家の一つだった。周りには僕その他、ネズミ君とリンダがいるだけで、他の人間の姿は見えない。それ程巨大な建物では無く、山奥にひっそりと佇む秘密基地と言った趣がある。女神と戦い、魂の一部を砕かれてから、漸く一心地付ける場所に来ることが出来ていた。ふうつと、深いため息が零れる。額に触れる。女神の攻撃を受け、流れていた血は既に止まっていた。それは、当然の事だった。寧ろ、血が出た事の方が今では異常と言える。既に、人間を辞めていた。それどころか、生物ですらないと思う。自信が死人であると言う事を自覚し、人間である事の拘りを捨てた時、僕と言う存在は生物の枠からも外れてしまっていたようだ。

マジックやクロワールが言うように、僕の体はシエアで構築されている。シエアと言うのは信仰心が力になったものである。速い話が、決まった形の無い力だった。その力が僕の魂に宿り、僕の意味に沿う形で、実体を形成していると言う訳だ。真実を知らなかった頃は、異世界に来ようとも、流石に自分が普通の人間じゃないかもしれないなどと疑った事はない。だから、斬られれば血は出るし、痛みも感じた。だけど、今は全ての事実を理解してしまっている。あの子たちと決別する事を決めたとき、人である事への拘りは捨ててしまっていた。異世界の魂として強い力を与えられたとはいえ、肝心の僕はただの人間で

しかなかったから。物語の英雄や主人公たちの様に、どんな困難にも打ち勝てるほど強くは無いから。だから、人間と言う枠を超える事を選んだ。そうしないと、最後まで護れないと思ったんだ。

そしてその結果、この世界に来て出来た最も大切なものを、手放す事になった。後悔なんかある訳無い。だけど、辛くない訳が無かった。自分で決めた事だけど、好きな人達と別れ、寂しくない筈が無い。引き返す事が出来ない状況を進めば進むほど、少しずつ少しずつ、心が削れていくような気がする。

「アニキ、そろそろ教えて欲しいいつちゅ」

「ん、何かな？」

「決まってるんだろ、アンタが戦う理由だよ」

少しばかりネガティブになっていたところで、ネズミ君が口を開いた。僕の目を確りと見て、質問をしようとしていた。誤魔化すつもりは無かったのだけど、一瞬何を言っているのか理解できなくて出た言葉に、リンダが補足するように言った。この場には僕たち三人しかいなかった。以前言ったように、リンダの口からは敬語が抜けていた。だけど、何処か敬いのような感情が感じられる。先の戦いで、それだけみとめられたと言う事だと思うと、それはそれで心地よかった。

「おいら達には言いたくないツちゅか？」

少しばかり黙り込んだ僕に、ネズミ君が慮るように言った。話す事について、別に問題は無かった。ただ改めて聞かれると、何処から話すべきかが咄嗟に出てこない為、考え込んでしまったと言う訳だ。

「そうだね、何処から話したものか……。やっぱり、アレからかな」

短く整理を付ける。僕が戦う理由を語るには、僕が異世界人であることから話す必要があった。話す事をできる限り簡潔にまとめる。

「僕はね、この世界の、ゲームギョウ界の人間じゃないんだ」

「ちゅ!？」

「はあ!？」

それでも語る必要のある事は多かった。異界の魂召喚の儀式、女神の願いとその代償、この世界に存在する事に関する制約、手に入れたものと失ったもの、この世界に来て起きた数々の出来事や出会い、そ

して――

「じゃ、じゃあ、アンタは女神に呼び出された時点で、既に死ぬ事が決まったって言うのか!？」

「そうだよ。だから、僕はこの世界から消える訳には行かないんだ。元の世界に戻った時、その時こそ僕は死ぬ事になるからね」

「そ、そんなのあんまりだっちゅ……」

四条優一が既に死んでいると言う、どう足掻いても変える事が出来ない、既に確定してしまった現実だった。

確定していない未来を変える事はできる。一人一人が未来を変える為、全力を尽くす。そうすれば、新しい道は開けるかもしれない。だけど、僕の事に関してはどう足掻いても無理なんだ。もう終わっている。四条優一は、既に死んでいるから。肉体が死に、本来あるべき場所に魂がもどされる。それは、そのまま死ぬ事を意味している。だからこそ、僕は自分の世界に戻る訳には行かなかった。

「だから、僕はこの世界で生きる為に犯罪組織に所属しているんだよ。犯罪神を信仰している訳でも女神が嫌いな訳でも無い。ただ生きたい。まだ生きていたいと思っってしまった。だから今、僕は此処にいる」

それも、理由の一つだった。少なくとも犯罪組織が存在する間は僕はこの世界に居る理由がある。だけど、それは犯罪神が蘇っても良いと言う事では無い。今犯罪神が蘇れば、確実に女神は死ぬから。それだけは避けたかった。だから、敵として彼女たちを強くすることを求めている。

女神の脅威を排除するために呼ばれていた。だから、最初は犯罪組織を壊滅させればその目標は達成されると思っていた。だけど、そうでは無い。魔剣ゲハバーンを読み取って見た過去から、犯罪神が蘇るのは既に確定していた。だから女神は犯罪神と雌雄を決する事になる。そして、今のままではどうやっても勝てない。マジックにすら勝てないのに、犯罪神に勝てる訳が無いから。

そしてそうなった時、一つの魔剣が表に現れる事になる。女神の命を喰らい力を増す魔剣、ゲハバーン。ゲームギョウ界を守る為なら、



女神たちは命を奉げる。それは、何度となく繰り返された歴史が、再び起こると言う事だった。身を持って、彼女たちの想いの強さは知っていた。絶対に、世界を守るだろう。それを、認める訳には行かなかった。友達の命を犠牲に世界を救う。それしか方法が無いとしても、そんな事を許容できる訳が無い。だから、僕は女神が勝てるようにするため、女神と戦った。

だけど、もう一つ傍に居られない理由はあった。仮に女神が勝てたとしても。だけど、女神たちが僕の事を知った場合どうなる。犯罪神を倒し、女神の脅威を排除した時点で四条優一は元の世界に送還され、死を迎える。それを知られた時、本当に女神は戦えるのか。或いは、全てが終わった後で知った時、あの子たちは耐えられるのか。己惚れでは無く、無理だと思った。少なくとも、きつとノワールは耐えられないだろう。友達になっただけで、あれだけ喜んでくれていた。嬉しそうにはに candide くれた。此方が心配になるぐらい簡単に信頼してくれた。そんな女の子が、自分の手で友達を殺したとなれば、どうなってしまうのか。多分、壊れる。そんな事、想像したくは無かった。

ならば、どうすればいいのか。一つだけ方法があった。女神と敵対し、討たれる。それが、現状だった。

「それが、僕の戦う理由だよ」

とは言え、それは最悪の事態を想定した場合の話である。もう一つ可能性はあった。それが、僕的能力と言う訳だ。剣を読み取り、再現する能力。それを最大限に扱えるようになったとき、道は開けるかもしれないと老人が、魔剣ゲハバーン自身が言っていた。老人の正体は、ゲハバーンを読み取った時、悲しくなるほど理解をする事が出来ていた。数多の歴史の中で、女神を殺し力を得た魔剣だった。皮肉にもそれを作り上げた者が、魔剣ゲハバーンの意思と言えた。魂を奉げて作った剣だった。剣自身が、人と言っても過言では無かったのだ。そして、理想と現実の乖離に、とうとう耐え切れなくなり、魔剣の人格が僕に縋ったと言う事だった。僕自身が強くなり、完成させる。その為にも、女神と袂を分かったといえる。

「僕は死んでいるのかもしれない。だけどね、それでも生きていたいんだよ。生きていたいと思えた。だから、諦めたくないんだ」

「それがアంతタの戦う理由って事か」

「駄目かな？」

「いいや、解り易くて良いぜ。死にたくないから戦う。下手に高尚な理由より、よっぽど良いってもんだ」

リンダの言葉に苦笑する。確かに解り易い。

「アニキ、オイラに協力できることなら何でも言っただけ欲しいっちな」  
「アニキは、アニキにまだ死んで欲しくないっちな」

「……ありがとう」

ネズミ君とリンダの言葉が胸を衝いた。既に死んでいる事実を変えたい事はないけれど、手を伸ばしても良いんだと、素直にそう思った。

「魔剣、か」

ゲハバーンを抜き放ち、その刀身を見詰めていた。数多の女神の命を奪って来た、呪われた剣。同時に、純粹なまでの想いが生んだ悲劇の剣でもある。その歴史を、少しずつ少しずつ読み取っていく。剣を読み取る事で、この剣を理解しようとしていた。見える歴史は、戦いと救世と悲壮。女神の決意と、それを糧にする魔剣の悲しい連鎖。読み取るたびに心が騒めく。だけど、それでも止める事はしない。そうする事で、示されてきた想いをより一層理解する事ができたから。

「辛い、な」

溜息と共にゲハバーンから手を放す。悲壮なまでの想いは、確かに胸を衝く。だけど、それ以上に悲しみが読み取れてしまうんだ。それは護りたいと思いつつながら、その逆の事しかできない魔剣の想いであり、今の僕の心境と酷使していた。奇妙な既視感。それを、魔剣であるゲハバーンに抱いていた。

「護りたいと思いつつながら、そうする事が出来ない。命を奪い、その想いに応える事が出来ない。それは、どれ程までに辛いのか……」

言葉に出し、考える。例えるなら、僕がユニ君とノワール達を殺して世界だけを救わなければいけないようになった。そんな感じだろうか。できる訳が無いとは思う。だけど、そうしなければいけない。そんな状況に陥った時、果たして正気でいられるのか。答えは、否だろう。「……、如何すべきなのかな」

この魔剣の悲しみの連鎖を終わらせるだけならば、恐らく僕の能力を用いれば不可能では無い。だけど、本当にそれで良いのか。魔剣を無くせば、確実に犯罪神に勝てる術がこの先ずっと失われる。そうすると、これまで世界を守る為に命を奉げた女神たちの想いを踏み躪る事になる。だけど、それをしなければ近いうち、また命が失われる。だけど、ゲハバーンに宿る決意を否定する事は出来なくて。

「今を護りたい、だけど、過去の想いを踏み躪りたくも無い。全部を救う手立ては、無いのかな」

現状では八方塞がりだった。最悪の事態になるとき、如何するべきなのかは決められる。だけど、今はまだ猶予があった。だけど、納得のいく術が思い浮かばなくて。

「何を悩まれる。女神を殺す魔剣など、この世界には不要だったので。魔剣が失われる事で世界が終わってしまうと言うのなら、世界が続く事の方が歪と言う事なんじゃ」

不意に、目の前に老人が現れていた。魔剣ゲハバーンの意思、人格とも言える者だった。

「それでも、貴方たちは護りたいものを護る為に願った。だからこそ、今この世界は続いている」

「それが間違いだった。そう言っているのだ」

「間違いだと言うのなら、本来この世界に居な筈の僕に継る事も、間違いと言えるよ」

「確かにな。だが、もう疲れた……。女神の嘆きを糧に、犯罪神を討つのが……。本当に護りたかった者を手に掛け、世界を救うのが……」

それは、魔剣の嘆き。このような事をしたかったわけではないと言う、悲劇を生む原点となった想いの、慟哭だった。

「……解ったよ」

「何？」

その姿を見て、また一つ決めてしまった。それはきつと何より困難で、だけど、それでもやりたいと思う事。道を誤り続けた想い。悲劇を生んだ剣に、道を示す。それは、剣と言う概念に干渉する事ができる僕にしか出来なくて。そうしたいと思っってしまった。

「魔剣ゲハバーンも、必ず救う」

「無理だ」

「できるよ。僕は過去を読み、今を理解し再現する事が出来る。そして、その先の極地があるとすれば……」

悲劇の連鎖すら止める。そう、決めた。女神達やこの世界を救いたいと言う思いはある。だけど、目の前の悲劇に囚われた純粋な想いもまた、見捨てる事なんてできる訳が無かった。過去でも現在でもどうする事もできない。ならば、未来を変えるしかない。

「だから、変えるんだよ。未来を。それが、僕の行き着く最後の極地」それは、剣と言う概念に干渉する事が出来る僕にだけが出来、辿り着く最後の段階だった。過去を読み、現在に再現し、未来を作り替える。こと剣と言う概念に於いて、絶対的な能力。剣と言う物が辿る道を文字通り全て読み取り再現する能力だった。過去にあった事実だけでは無い。未来で起るであろう結末すらも読み取り、それを変える為に最適化し、理想を再構築する。

「できる訳が無い。そのような事、未来を操るなどできはしない。それほどの力に、人は耐えられない」

「できるよ。人に耐えられないとしても、今の僕ならできるんだ。もう、決めた。僕は魔剣ゲハバーンも、絶対に見捨てない」

無理だと嗤う老人に、できると笑って見せた。きつと、それも僕がこの世界に來た意味だから。女神の脅威の排除。それは、魔剣も当てはまる事だった。ならば、僕に出来ない道理は無い。この力を得た事、それはきつと、シエアと言う願いの力を通して、歴代の女神が魔剣を救ってくれと言っているのだと、そう僕は思いたかったから。

「……」

老人が僕を一瞥する。それ以上何かを語ると言う事も無く、その場

に溶け入るように消えていった。僕の未来は確定している。だけど、まだ魔剣の未来は定まったわけではない。なら、きつと変える事はできる。

「救うよ。救世の為に生まれる悲壮。そんなのを、黙って肯定できる訳が無い」

ゲハバーンを手に、呟いた。それには、より一層この剣を理解する必要があった。この剣の歴史をゆっくりと辿っていく。魔剣の嘆きを見た気がした。

## 42話 別れのきずあと

「ええ!?」なら、犯罪組織のブレイク・ザ・ハードって言うのは、私たちを解放してくれた恩人って事になるの!？」

「はい、そうなります。お姉ちゃんが言うには、マジックが私たち全員とユウの身柄を交換したいって言う取引を持ち掛けてきて、だけどお姉ちゃんはそんな条件は飲めないって拒否して、マジックに勝負を挑んだらしいんですが……」

プラネテューヌの教会に訪れたユニはプラネテューヌの女神ネプテューヌに、四条優一に初めて出会った時の話から、犯罪組織のブレイクとして再会する事になった時までの話をネプテューヌに語っていた。

共に闘った事。友達になった事。素直になれない自分を変えたいと思い相談した事、すれ違いから喧嘩別れをしてしまった事。それでも手を差し伸べてくれたこと。支えてくれると約束した事。最愛の姉を助け出すために、一人命を賭けてくれたこと。そんな四条優一に知らず知らずに依存していた事。支えられるだけじゃなく、支えてあげられる自分になりたいと願った事。その為に彼と一旦別れ、ネプギアたちと共に強くなる決意をした事。その背を励ますように押してくれた事。これまでユニと四条優一の間にあった思い出を、一つ一つ丁寧に語っていた。

最初は肩を並べていた。次に、前に出て道を示してくれた。そして気付けば背中を追いかける事になっていた、ユニにとって姉や教祖たちとは違った形で大事と言える人との思い出だった。それは思い返してみれば、恥ずかしくもあり、誇らしくもあり、悲しくもあり、そして何より嬉しい思い出。大事な友達との記憶。今のユニを成すのに大きな意味のある出来事と言えた。

「成程ねー。其処から先はノワールがやられちゃって、どうなったかは解らないけど、私たち全員が解放されたって訳だね」

「そう、なります」

「つと言う事は、きつとその四条優一君。ユニちゃんとノワールは確

かユウって呼んでたよね」

「え、あ、はい」

珍しく真面目に話をしていたネプテューヌが、不意に考え込む。その様子には、ユニはどうしたのだろうと小首を傾げる。

「なら私は二人とは違う呼び方にしようかな！　うーん。優は使ってるし、一の方を使って……、よし、いっくんにしよつと。で、そのいっ君とマジックの間で何かあったって事だね」

「はい……多分そうだと思います」

「うーん、何があつたのかなあ。むむむ、解んない！」

しばらく考え込むネプテューヌだったが、直ぐに頭から煙を上げ、両手をあげ考えの諦める。

「アタシにも解りませんけど……、それでも、それでもユウは理由も無くあんな事をしないとと思うんです！」

「そ、そうなの？」

「はい……。約束、したんです。支えてくれるって。アタシは何時も助けて貰ってました。だから、ユウは絶対敵なんかじゃないんです。きつと何か理由があつて……」

ユニにはどうしても、あの優一が自分の敵になったなんて思えなかった。三度助けられていた。友達を失うのが怖くて自暴自棄になつていた時。姉を救うためにギョウカイ墓場に行った時。そして、ブレイブ・ザ・ハードに敗れた時。時には命すら掛けて、ユニに手を差し伸べてくれた。言葉だけじゃなく、行動で示された優しさに、ユニは憧憬にも似た絶対の信頼をおいていたから。

「ていー！」

「あう!？」

そんな何処か余裕なく言葉を続けるユニの頭に、ネプテューヌは軽く一撃を振り下ろす。完全な不意打ちに、ユニは可愛らしい悲鳴を零していた。

「な、なにするんですかー！」

唐突に振るわれた暴拳に、ユニは若干涙目になりながら抗議を起す。思いの外良いところに入ってしまっていた。

「あはは、ごめんね。だけど、そう言うユニちゃんの方が何か焦っているみたいだったからさ。ちよつとリラックスした方が良いと思って」  
「あ……」

苦笑しながらそう言うネプテューヌの言葉にユニはハツとなり、顔を赤く染める。

「いつ君の人柄は、ユニちゃんの話聞いて良く解ったよ。凄く信頼しているんだね」

「……はい。何度も助けて貰いました。だから、今度はアタシが助けてあげられたくなりたいたいと思つてたんです」

ネプギアに言われた時は、恥ずかしさが勝り否定しかけた言葉を、今回は素直に言う事が出来ていた。ユニが四条優一をそれだけ信頼していると言う事だった。例え目の前で敵だと言われても、そう思えない程に。

「そっか……。うん、ユニちゃんには大丈夫そうだけど、ノワールはどうなの？」

「お姉ちゃんはまた塞ぎ込んでます。今もどこか上の空で……」

「むー、妹より姉の方が重傷な訳かー。ノワールって普段は強気なくせに、何か想定外な事が起ると意外に脆いなあ。まー、そこがノワちゃんの可愛いところでもあるけどさー！」

ユニの話聞き、ネプテューヌはそっかーと相槌を打つ。

「お姉ちゃんはきつと大丈夫です。今は、ちよつと混乱してるだけなんです」

「うん。まーノワールだしね！ その点は心配してないかな。放つて置いても自分で結論をだすしね」

「それより、ネプギアの方は大丈夫なんですか？ ユウと戦って、怪我したって」

姉の事に関しては、ユニは絶対の信頼を置いていた。例え今直ぐは立てなかったとしても、必ず自分で結論を見つける。そんな憧れの人だった。だからユニにとっては、友達に倒された友達の方が気になつて仕方が無かった。

「それについてはもう大丈夫よ。そうよね？」



そんなユニの質問に答えたのはネプテューヌでは無く、アイエフだった。直ぐ傍らにネプギアを連れ、ユニとネプテューヌが話す部屋に来たところだった。

「はい、アイエフさん。あの後コンパさんに見て貰ったんだけど、怪我らしい怪我も無かったよ」

「ネプギア!? そっか、良かった……」

自分は平気だと笑う友達の様子を確認すると、ユニは心の底から安堵する。ライバルではあるが、それ以前に一人の友達でもあった。そんなネプギアが負った傷が深いものでは無かった事が、嬉しかった。

「あのね……ユニちゃん」

「なに、ネプギア」

安心して小さく溜息を吐いたユニに、ネプギアは難しい表情を浮かべ、思い出すようにして語りかける。

「上手く言えないんだけど、私には四条さんは自分の意思で犯罪組織に居る様に思えるの」

「な!?! そ、そんな事ないわよ! ユウがアタシたちの敵になるって事、そんなの、絶対にないんだから!!」

予想だにしていなかったネプギアの言葉に、ユニは捲し立てるように詰め寄る。直接戦ったネプギアの言葉と言えども、到底ユニが信じられるものでは無かった。

「ちよ、ちよっと待って! そうじゃないの」

「……どう言う事よ」

あわあわと慌てながら両手を振り否定するネプギアに、ユニは自分を落ち着けると向き直った。

「どういう事なの、ネプギア?」

ユニの代わりにネプテューヌが妹を促す。

「私だって、理由も無く四条さんが敵になるなんて思わないよ。だけど、理由があるなら……」

「じゃあ、その理由って言うのは何なのよ?」

「それは、私にも解らないけど……、一つだけわかる事があるの」「何?」

「四条さんは何かを教えようとしてくれている気がするんだ。戦っている時も、本気じゃなかったと思う。本気なんだけど、倒す気じゃな  
いって感じだった。それに、聞かれたんだ。この世界を護りたいって  
想いが本当かを。」

「それで、どう答えたの？」

「護りたいって。どんな事があっても、ゲームギョウ界を護りたい  
て思ったから。だからそんな気持ちを込めて答えたら、それじゃ駄  
目って言われたよ。ただ敵になっただけなら、きつとそんな事は聞か  
ないと思うの」

ネプギアは思い出しながら語っていく。確かに、優一はネプギアを  
切り伏せられる状況でありながら、それを成す事をしなかった。ネプ  
ギアが致命的な隙を晒した時、斬ろうと思えば容易に切伏せられたの  
だ。それにも拘らず、思い返してみればまるで稽古をするかのように  
立ち回っていた。もし、ネプギアの言う事が思い過ごしでないとし  
ば……。

「皆さん、大変です！ リーンボックスに、犯罪組織の幹部ブレイブ・  
ザ・ハードが現れました」

憶測でしかない。だけど、一筋の光明が見え始めたところで、イス  
トワールの声が響いた。

「ブレイブ!?!」

「ユニちゃん、お姉ちゃん!」

「うーん。良いところだったのに、邪魔が入っちゃった。もー空気読  
んでよ! ……流石にベール一人じゃ厳しいだろうし、サツサと倒し  
に行こっか」

「……はい!」

唐突に届いたリーンボックスからの救援要請に、三人の女神は頷き  
合うのだった。

リーンボックスに陽動を掛ける。そう言ったのは、ブレイブから

だった。あの日女神たちと干戈を交えてから少しの時が経ち、再びを展開できるまで回復していた。そんなタイミングを見計らったかのようなブレイブの言葉だった。そもそも、何のための陽動なのだろうか。

「先の戦いで女神たちと、決別をした。だが、お前は気になってしまっただろう？ 少なくともラストレイションの女神姉妹とは少なくとも縁があったはずだ」

「……そうだね、それは否定しない」

諭すように言うブレイブの言葉に素直に頷く。この世界に来て最初に会った女神がユニ君であり、その姉であるノワールとも出会いこそ最悪ではあったけど、今では友達と言えるほど親しくなっていた。異界の魂であると言う事実を語り、泣かれる事もあった。初めての友達だと言い、嬉しそうに笑ってくれていた。少しばかり、ずれた厚意の示し方ではあったけど、その気持ちは素直に嬉しかった。

「姉の方が塞ぎ込んでいるようだ。政務も手が付かず、一日中執務室に顔を出さず、部屋に籠っているか、街を彷徨っている様だ」

「……え？」

ブレイブの言葉に、思わず素っ頓狂な声を出してしまった。あのノワールが？ 思うのはただただそんな事である。

「妹の方は、プラネテューヌやルウィーに足を運び、犯罪組織のブレイク・ザ・ハードと戦った者達に話を聞き、情報を集めている」

「そっか。ユニ君の方は大丈夫そうだけど……」

妹の、僕のもう一人の友達であるユニ君の方は、ブレイブの話を聞く限り大丈夫そうだった。少なくとも僕が明確に敵対する意思を示した事に、挫けたりする事は無く、前を見据えていた。多分それは、何で僕が敵になったかを探してくれているんだと思う。その気持ちは、嬉しくない訳が無い。

「ノワールが塞ぎ込んでいるって、今までずっと？」

「そうなる」

「そっか。……、けど、どうしてそれを僕に教えてくれる？」

ブレイブの言葉が本当だったら、気にかからないと言えば嘘にな

る。だけど、ブレイブがそれを僕に教えてくれる理由が解らなかつた。

「確かに犯罪組織の幹部として見れば、教えずとも良い情報を教えているのだろうか」

「ああ、そう思うよ」

「だがな、四条優一。俺は犯罪組織の幹部であると同時に、お前の友でもあるのだ。必要ないと思う心と、必要だと思う心。その二つがせめぎ合い、気付けば語っていた。俺がお前の友と名乗るには、教えるべきだと思つたのだ。それに」

「それに？」

「本来はお前の正体を女神たちに知られるのはまだ先の話だつたのだろう。それが知られたのは、偏に俺の失態と言える。ギャザリング城での負傷が響き、女神を止め切れなかった。その、せめてもの罪滅ぼしだ」

魔剣ゲハバーンを手に入れるさい、ブレイブは追いつがる敵に一人立ちはだかり、その歩みを止めてくれていた。凄まじい数の敵を、たった一人で留めてくれた。それ程の事を見てくれたブレイブに、罪滅ぼしなど求める気は無いのだが、それではブレイブが自分を許せないと言う事だつた。

「俺がリーンボックスに現れれば、女神は必ずこちらに来るだろう。だが、黒の女神は動きはしないだろう」

「……恩に着るよ。少し出てくる」

「気にするな。寧ろ俺の方こそ礼を言わせてほしい。これで俺は、まあお前の友だと胸を張って言える」

そう手にする剣を掲げるブレイブに、小さく笑つた。犯罪組織の幹部であるにも拘らず、どこか他の者達とは違っている。そんな律儀ともいえるブレイブは、確かに僕の友達の一人と言える気がした。軽く手を上げ、別れる。目的は、ラストイションだつた。

「さて、どうしたものか……」

ラストイションの街に辿り着いたところで、どうしたものかと途方に暮れていた。この地に来たのはいいけど、今の僕は気軽に女神に会える立場では無かった。犯罪組織の幹部である。彼女たちにとって、明確な敵なのだ。

街中を歩く。別に目的があつたわけでは無い。ただ、黒の姉妹たちと過ごした町並みが酷く懐かしかった。犯罪組織に身を投じると決めた時、これ程ゆつたりとラストイションの町並みを感じる事はできないだろうと思っていた。だけど、意外とそう言う余裕はあるようで、今、小さな感傷と共に歩いていた。

しばらく歩いて行くと、見知った道に出ていた。僕がギルドに所属していた時、良く使っていた道。始めて来た時にユニ君に案内され、防衛隊を通して教会の依頼を受けるようになった時も使っていた、ギルドへの道だった。防衛隊やギルドの人達と過ごした日々は、酷く懐かしかった。ゆつくりとその道を進んで行く。やがて、ギルドの前に辿り着いた。

「流石に入る訳には行かないね」

何故か来てしまった事に苦笑する。犯罪組織に所属する以上、僕はギルドと言う組織からも敵とみなされる。かつての知り合いにそう言う目で見られるのは良い事では無い。身をもって実感していた。あの子たちに敵意を示された時、どうしようもなく嫌な気分になられたのだ。

「まったく、僕は何をしているのか」

ブレイブがくれた時間を有効に使えていない。その事実には、小さく溜息が零れた。とはいえ、そもそも有効に使うとはどう言う事なのか。会う気など無い。一方的に姿を見たところで、変わるモノなど無い。ならば、自分はそもそも何をしに来たのか……。そんな事を考えていた。

「え……？」

だから気付くのが少し遅れた。ギルドの扉が、ゆつくりと開いている。そして信じられないものを見た。そんな驚きと困惑と、喜色に満

ちた声が届いた。

「……ユウ」

それは、僕の友達であり、明確に決別した黒の女神だった。

「やあ、久しぶりだね」

それは、どれほどの偶然が重なったのか。出会う筈の無い場所で、会いたいと思いつながら会いたくない相手に、再開するのだった。

## 43話 戦う理由

「流石に、この数は厳しいか……」

リンボックス首都郊外にある犯罪組織の活動拠点の一つ、その地でブレイブ・ザ・ハードは女神たちに戦いを挑んでいた。対峙するは、黒の女神を除いた7人の女神。ただ一人精神的に打ちのめされていたノワールを除く、全ての女神が集結していた。

個の力だけ見れば、ブレイブは女神にも劣らない。それどころか女神すら凌ぐポテンシャルを秘めている。それでも尚、膝をついたのはブレイブの方であった。たった一人で戦うブレイブに対し、相手は女神が七名。それは仕方のない結果と言える。

「ブレイブ……、もうやめて。これ以上は意味が無いわ」

「そうだよー。流石にこの人数相手じゃ無理だって」

「確かにね。いくらテメーが強いからって、一人じゃできる事は知れてる」

「投降しなさい。そうすれば悪いようには致しませんわ」

それでも尚剣を構え気炎を上げるブレイブに、ユニは諭すように言葉を掛ける。以前ユニはブレイブとぶつかり合った時、ブレイブの戦う理由を聞いていた。貧しく娯楽に飢えた子どもたちの為に剣を取り、犯罪組織の一員として戦うと語っていたのである。方法は兎も角として、その志は犯罪組織の一員とは思えない程純粋で、気高い想いだった。だから、ユニはブレイブを殺す事はしたくなかった。そんなユニの言葉を後押しする様に、他の女神たちも言葉を投げかける。

「ふ、確かに俺一人では勝てぬようだ……。だが、それがどうした」

「……え？」

だが、そんな女神の情けを、ブレイブは一刀のもとに切伏せる。

「な、なんでよー！」

「それはお前たちでは、俺の成したい事が実現できないからだ。今の女神の統治では、本当に貧しき子供たちを救う事などできん！ 確かに貴様たちに降れば、命だけは助かるだろう。だが、それは心が死ぬのと同じだ。男が、生涯をかけてでも成すと決めた事を投げ出すな

ど、あつてはならんのだ！ 今を生きる事すら困難な貧しき子供たちの為、俺自身の為、何よりも我が友の為にも……貴様たちにだけは屈する訳には行かんのだ!!」

困惑気味に問い返すユニに、ブレイブは想いをぶつける。ゲームギョウ界にも、貧富の格差はあつた。どれだけ女神が民を導こうとも、明日を生きる事すら難しい者達は必ずいた。ブレイブは、その子たちの為に剣を取っていた。ただ、笑顔にしたかつた。食べるモノすら満足に食べられず、生きていく希望も見えない。そんな暗い顔をした人間たちに、この世界は様々な娯楽に満ちている事を教えたかつた。笑顔を見たかつた。それが、ブレイブの戦う理由だつた。

そして、最近になってその理由にもう一つ戦う意味が増えていた。犯罪組織に引きずり込んだ異界の魂だつた。女神のこの世界を護りたいと言う願いを叶えるために呼び出され、同時に切り捨てられた犠牲者。何の関係も無い世界を救う為だけに呼ばれ、代償として命を奪われ、最期は世界に殺される運命に在る人間だつた。

言つてしまえば、異界の魂である四条優一は、女神によって殺されたと言う訳である。女神に救えない人間を救うために剣を取つたブレイブにとつて、女神によつて犠牲にされた四条優一は、何があつても助けるべき存在であると言えた。それが、ブレイブが犯罪組織に居る意味でもあるのだから。

「貧しき子供たちの為つて言うのは知つていたけど、アンタの友つて言うのは……?」

ブレイブの言葉にはある種の力があつた。絶対に引けないと言う、強い想い。傷だらけのブレイブが剣を構え言い放つ言葉には、言い知れぬ迫力があり、女神たちを圧倒する。そしてその想いの根底にあるものが何なのか。それを知りたくてユニは尋ねていた。

「しれた事を。俺と同じくマジエコノムの幹部にして、貴様たちと袂を分かつた人間。ブレイク・ザ・ハード。いや、四条優一と言う、弱き人間だ。その者の為にも、貴様たちに負ける訳には行かんのだ!!」

ブレイブはまっすぐにユニを見据え、応える。

「な、なんでアタシ達と争うのがユウの為になるのよ!? アタシはた



だ、アイツと肩を並べるようになりたいたけなの……」

「貴様たち女神が弱いからだ。弱いから他者に縋った。それが、お前たちよりも遥かに脆い人間だった。そしてあの男がお前たちを救うために、どれだけの代償を支払わされたのか解るか？」

「解るわよ！ アイツはアタシを、アタシ達を時には命まで掛けて護ってくれた!! それは凄いい負担だったと思う。なのに、そんなアイツにアタシは何にもしてあげられなくて……。だけど、」

ブレイブの言葉に屈しかけたユニが、その瞳に強い意思を灯しながら叫ぶ。確かにブレイブの言う通り、ユニは何度も四条優一に助けられていた。時には命を失うっても可笑しくない程の危機に陥った事もある。その度に、助けて貰っていた。だけど、それだけの物を貰いながら、自分は何もしてあげられなくて。

「アタシは強くなるって決めたの。今は無理でも、何時かはユウを助けてあげられるアタシになるって！ 胸を張って、アイツのパートナーって言えるようになるんだって!!」

「ユニちゃん……。だから私と来てくれたんだ」

ユニの言葉に、ネプギアは漸く合点が言った。ユニがネプギアと一緒に旅をする事に決めたのは、大事な人に認めて貰いたいから。そんな一心であった事が、痛いほど良く解った。

「んー、良く解らないけど、ユニにも大事な人が居たって事ね！ その人の為に強くなりたいってわけね」

「ユニちゃん……。好きなの（どきどき）？」

「す、すき!? た、確かにアイツは好きだけど、別に特別な意味なんかじゃなくて!! そりゃ友達として信頼できるし、ちよつと掴みどころが無いけど基本的にすつごく優しいし、だけど本当に大事なところでは厳しい事もあって……。けど、それも全部相手の為を思って言うてくれている事で……。だからアイツには凄く感謝しているだけであつて……。あ、うう、別に好きじゃないわよー!!」

ロムとラムの何気ない言葉に、ユニは捲し立てる。ユニにとっては余りに予想外な言葉だった為、完全にテンパってしまった。

「わー、わっかかり易い反応ね!」

「ユニちゃん、照れてる（にっこり）」

「違うわよ!!」

「あはは……」

顔を羞恥に染めるユニに、ルウイーの女神候補生の二人が指をさし、ネプギアは苦笑を浮かべる。

「あらあら、お熱いですわね」

「つーか、なんでラブコメになってんだよ」

「まったくね。けど、それだけ誰かを想えるのは、少し羨ましいわね」

「それは、確かにそうだけだよ……」

「そうですわね……、どこかに良い殿方は居られないでしょうか？」

そんな妹達の様子を見詰める女神は、しみじみと呟く。

「ちよ、違います！ あーもう！ 兎に角、アタシはアイツに支えらるるだけでなく、支えてあげられるアタシになりたいの。その為には、ユウにも傍に居て貰わなきゃいけない。だから、一緒に居なきゃいけないの」

茶化された事に顔を真っ赤にしながらも、ユニは言葉を締めくくる。助けて貰ったから、助けてたい。それが、ユニの純粋な気持ちだった。だから、その言葉は確かにブレイブに届いていた。

「その想いは本物なのだろう。だが、貴様には無理だ。女神には、四条優一を救う事などできはしない」

だからこそ、ただ静かに否定する。女神では、異界の魂を助ける事はできないと。

「そんな事ないわよ！ 確かに今は無理かもしれないけど、アタシは絶対に強くなる。何時か、ユウを助けられるぐらいになるんだから」  
「では、何時かとは何時だ？ 未来の話では無い。今、アイツを救わなければ、俺は貴様たちを認める事はできん」

「それは……」

「できぬだろう。ならば、貴様には無理だ」

言い淀んだユニに、ブレイブは冷徹に告げる。今直ぐに四条優一を救えないのならば、意味は無かった。それが、ブレイブには解っていた。

「そんな事は無いわよ。アタシは諦めない。諦めなければ、いつかは絶対に届くのよ！今は無理かもしれないけど、切り開けない未来なんて無いの！」

「確かに、未来があるのなら可能性は限りないな……」

「なら——」

ユニの言葉にブレイブは頷く。ユニの言う通り、未来は定まっていない。切り開くものだ。それは、ブレイブも認めた。

「……だが、だからこそ終わったものは救えんのだ」

「……え？」

だが、だからこそ、ブレイブが女神の言葉を受け入れる事は無い。未来があるのなら切り開ける。だけど、四条優一の運命は、既に確定した後だった。故に誰にも救えず、だからこそ、ブレイブが止まる事も無い。

「それはどういう意味……」

「語り過ぎたようだな。最早言葉は必要無いだろう。此処で、決着をつける！」

ブレイブは愛刀を構え、静かに言い放つ。その言葉には、底知れぬ意思が秘められている。再び戦いが再開されようとしていた。

「ならば、加勢しようか」

「……何？」

ブレイブが特攻を掛けようとした刹那、聞き覚えの無い声が響く。女神たちも辺りを見回す。その声の主は、遙か上空から舞い降りる。ブレイブの様に、機械の体を持ち、其処に存在するだけで圧迫するような強烈な存在感。それは、嘗てルウィーに封印されていた機械兵士の姿に似ていた。

「遅くなりましたブレイブ様!!」

「マジック様の命令により、助けにきたつちゅ!!」

「お前たち……」

機械兵士の手に乗り、リンダとワレチューが手を振り合図を送る。ハードブレイカー。キラーマシンのデータと、四条優一の持つ異界の魂としての驚異的な戦闘能力を参考に作られた、機械兵士だった。

「此処はアタイたちに任せて引いてください！」  
「しかし」

威勢良く言い放つリンダの言葉に、ブレイブは洩る。確かにハードブレイカーは強大な力を秘めているが、それでもこの数の女神を相手にするには荷が重かった。

「ブレイブ様、行ってくださいいっちゅー！ アニキには、まだブレイブ様が必要なんだっちゅー！」

「……。すまない、恩に着る」

それでも、理不尽を課せられた友の名を出されれば、ブレイブとしても動かざる得ない。

「女神達よ、次が最期の戦いだ。その時は子供たちの為、俺の為、そして友の為に、必ず討たせてもらおう」

「待ちなさい、ブレイブ！ アタシはまだ……」

そして、最後に女神たちに言葉を残しその場から離脱したのだった。

ラストイシヨンにある公園。その一角にあるベンチに腰を下ろす。

ギルドでノワールに鉢合わせてしまっていた。その場で刃を交える事も覚悟はしたのだけれど、彼女はただ一筋の涙を零しただけで何の行動も起こす事は無く、僕をただ見つめるだけであった。何時までもその場にいる訳には行かない為、とりあえずはノワールを促し、場所を変えたと言ったところであった。

「……」

ノワールは此処まで黙ってついて来ると、そのまま僕の隣に腰を下ろす。それでも、何か言葉を掛けて来る訳でも無く、ただじつと僕を見据えている。これが本当にあのノワールなのか。ただ黙って僕の服の袖を握っているだけのノワールの姿に、そんな事を思う。

様々な事情が重なり、女神と戦う事を良しとしていた。彼女は大事な友達であるけれど、それでも戦う事を覚悟して、今の僕は立ってい

る。刃を向けられる覚悟はしていた。責められる覚悟もしていた。嫌われる覚悟だっと思っていた。だけど、

「また、会えた……。もう、何処にも行かないですよ……」

縫られるとは思っていなかった。確かに悲しまれるとは思っていた。だけど、それでも立ち上がる事が出来ると信じていた。女神に刃を向ける者に、世界を壊そうとする者が相手なら、この子はその壁を乗り越え、対峙するだろうと信じていた。だけど、今のノワールからはそんな気概は感じられなかった。

「もう助けてなんて言わないから。傍に居てくれるだけでいいから、戻って来て。貴方が居ないのは、もう嫌なの」

今のままではとてもじゃないけど、立てるとは思えない。それ程までに今のノワールは弱弱しかった。

この子にとって友達とは、それ程までに大きな意味を持つモノだったのか。涙を浮かべ縋るように見るノワールの視線にただ瞑目する。どうすれば、この子は立てる。どうすれば、世界を救える。

「待つてよお兄ちゃん！」

「あはは、遅いぞ！ 早く来いよ！」

「待つてっばー！」

不意に、子供たちの声が聞こえた。目を開き、視線を動かす。直ぐ近くで、兄妹が仲睦まじく遊んでいた。前を歩き手を振る兄に、妹はトテトテと付いて行く。微笑ましい光景だった。

「君は何をしているんだ？」

「え……？」

そんな今を生きる子供たちの姿を見ると、自然に言葉が出てきていた。子供たちを見詰め、視線は動かさなのまま言葉が続ける。

「今、リーンボックスではブレイブが現れ、女神と交戦しているだろう。恐らく教祖からの連絡を受け、他の女神はブレイブと戦闘中だ。それなのに君は、こんなところで一人何をしているんだ？」

「それは……」

「犯罪組織は女神を打倒し、犯罪神を蘇らせる為に活動をしている。犯罪神と言うのは、ただの神では無いよ。破壊神だ。それが蘇ると言

うのがどう言う事か、君には解るかい？」

「破壊神、ですって……？」

「そうだよ、破壊神だ。そしてこの世界に蘇った暁には、世界を滅ぼすためにその力を十全に使うだろう。あの子たちだって、無事にはすまない。それなのに、君は何をしている？」

きつと僕の事を思い、塞ぎ込んでいたのだろう。その気持ちは嬉しい。だけど、それでは駄目なんだ。ノワールは女神である。この世界を導く者の一人だった。ならば彼女はその責任を果たさなければいけない。ボクと世界を天秤にかけて、世界を取れないようでは絶対にダメなんだ。

「ユニ君は今頃ブレイブと戦っているだろう。嘗て、成す術も無く負けた相手。そんな相手に恐怖を感じない訳が無い。それでも妹は戦っているのに、姉である君が、何故何もしないでこんなところに居るんだ？」

「それは貴方を探して……」

「君には、他にしなければいけない事があるだろう。……僕はこの世界を壊すよ。僕をこの世界に呼び出し、不条理を課してきた。そんな理不尽、許せるはずがない」

発破を掛けて尚、迷いに揺れるノワールが一步進める様に、本音を語る。それは、僕がこの世界に呼び出され与えられた理不尽に対する、率直な感想だった。この世界に来て与えられた物が在り、失ったものがある。その、負の部分の感情だった。それは、既に未来を奪われた四条優一の本音。嘘偽りの無い、本心から出た言葉だった。

「……っ!? ごめんなさい……、ごめんなさい……」

「別に謝って欲しい訳じゃない。僕の本音は教えた。それに対して、君は女神として如何する心算なのか。答えてよ」

「それは……」

「だけど、それだけじゃない。そんな世界だけど、好きな人たちが出来た。だからこそ、彼女たちには世界を守ってほしいと思う。だから、」

「これはね、ノワール。魔剣ゲハバーン。女神の命を奉げ、強くなる

剣。僕は、それを手に入れた」

「な、なんでそんな物を？」

「必要だったから。僕が僕の成したい事を成すのには、ね」

立ち上がりノワールから距離を取り、魔剣ゲハバーンを出現させ、選択を迫る。数多の女神をその刃に散らした魔剣が、冷たく語りかけて来る。その言葉を無視し、ノワールだけを見る。

「わ、私が、私たちが悪いの……。貴方呼び出したのは私達だから……。だから、私が憎いのなら、貴方に全部あげるから。命だって奉げても良いから……」

だけど、視線の先に居る彼女は許しを請うだけで、死さえも受け入れると涙する。そうじゃない、僕が聞きたい言葉はそうじゃないんだ。君には、女神たちには、

「君の想いはその程度だったのか？　女神が世界を護りたいと願い、僕は呼び出された。だから、女神はたとえどんな手を使っても、この世界を救いたいと思うほど愛していると思っていた。けどなんだ、今の君の為体は。君は、この世界を愛していないのか？」

「違うわ、そんな事ない」

ノワールが弱弱しく言い返す。

「違わないよ。君の想いと言うのは、僕一人が敵になったぐらいで萎えてしまう程度の物だったんだ」

「そんな訳無いわよ!?　私はこの世界が好きよ。ユニが居てケイが居て、ラストেশションがあつて、ネプテューヌやベール、ブランと言ったライバルが居る。皆が居てくれる。そんなゲームギョウ界が、大好きなの。失いたくなかった！」

「何を犠牲にしても無くしたいものがある。なら、道を見失ったら駄目だ。今の君には、成すべき事がある。それをしないでどうする」

「解ってる、解ってるけど！」

この世界を護りたい。そんな彼女の想いは純粹で、だからこそ疑う余地は無くて。

「なら、迷う事なんてないよ。君は女神だろう？」

「だけど、それは貴方と……」

「そうだよ。だけど君は女神だ。女神さまは、世界を護らなければいけない。その気持ちが無いのなら、最初から異界の魂召喚なんてしなければ良かったんだ。この程度で揺らぐ想いだったのなら、最初から何もしなければ良かった」

「っ!？」

世界を導く為に成すべき事。それを問う。

「もう一度聞くよ。君は世界を救うかい？」

「……っ、うあ……っ、救う、わよ……。例え貴方と戦う事になったとしても……」

「そうだ、それでこそ女神だよ。僕に助けを求めてまで世界を救おうとした、純粋な想い……」

涙を浮かべながらも、ノワールは断言してくれた。自分の足で再び立ち、僕を見据えたまま宣言した。その声は涙で震え、とても弱弱しいけど、確かにノワールらしい響きがあった。

「ノワール。次が最期だよ。次に会う時、君を……倒す」

「……っ、……くう、私は……、女神なの。私を信じてくれている人たちの為にも、絶対に負けられないの。例え、相手が貴方だったとしても……」

ようやくノワールと話したと言う気がした。不器用で意地っ張りで自信家でどこか抜けたところもあるけど、素直で可愛い女の子。涙を浮かべながらも凛々しく宣言する姿は、そんな僕の友達の本来の姿であるような気がした。

「そっか」

眩き、少し安心する。相変わらず危なっかしいけど、危うさみtainなものも消えていた。ならば、彼女はまた戦えるだろう。

——プロセツサユニツト展開

ノワールを見据えたまま、黒と紅の神器を纏う。身体に、シエアの力が充満するのを感じた。共に戦い、護りたいと思った人達に似た力だった。

「さようなら」

「……っ、さようなら」



小さく別れを告げ、空に舞い上がる。別れ際、ノワールの涙を見た気がした。

## 44話 動き出す最後の時

「派手にやられたようだな」

「ああ。奴らはこの短期間に、予想を超える成長をしているようだ。強い、確かにそう感じた」

犯罪組織の拠点の一つに帰還したブレイブは、マジックに声を掛けられていた。雄大な機械の体のいたる所を破損させられ、方々から煙が噴き上げているが、その声から戦意が薄れる事は無い。

「だが、だからこそ負けるわけにはいかん。犠牲を強いられた者の嘆きを知りもしない者達に、負けるわけにはいかんだ」

それどころか、熱く秘められた思いが更に熱を増していた。今の女神があるのは、偏に四条優一と言う犠牲者のおかげであると、ブレイブは知っていたからだ。自分が女神の所為で死に追いやられたという事実を知りながら女神を救出する事を選んだ人間に対し、たとえ本人の意思で知らせなかつたと言えども、笑顔の裏の嘆きに気付きもしない女神達に対し、激しい敵意に突き動かされていたのだ。

女神が憎いのではない。犠牲に気付かず、助けられている事実に気付きもしない事が憎かった。そして、哀れでもある。

「そうだな。異界の魂。既に殺された人間。それが、自分を殺した女神を肯定するどころか、救おうとすらしていた。何故、あの男はそうまでして女神を助けようとするのか。何故、楽になろうとしないのか……」

ブレイブの言葉に小さく頷き、マジックは疑問を零す。彼女には、異界の魂の成そうとしている事が理屈で理解はできても、納得できなかった。

「それは、友誼故にだな。この世界に来て最初に出会った友好的な存在が女神だと言っていた。身一つで放り出された四条優一は、心の底から感謝したと言う事なのだろう。その時は、まだ事実も知らなかった。その情を消せないのだろう」

「……そう言うモノなのか？ ならば、最初に出会ったのが私だったとしたならばあの男は……」

ブレイブの言葉に興味深く頷くと、マジックは顎に手を当て考え込む。変わる事の無い無機質な瞳にはどのような感情も宿っているようには見えない。

「いや、このような仮定、考えるだけ無駄か……」

数秒の沈黙。思考の海から戻ったマジックは、つまらなさそうに零す。

「マジックよ、お前も変わったな」

「何……？」

そんなマジックを見て、ブレイブは不思議なものを見つけたように言った。マジックの表情が僅かに歪む。それは、困惑の色を宿していた。

「お前は冷酷だ。それは今も昔も変わらん。だが、最近ではそれ以外のモノが見えるようになった」

「何だと言うのだ、それは」

ブレイブの言葉を促す。

「優しさと怒りだな。異界の魂に出会ってから、お前は僅かに感情の起伏が激しくなった」

どこことなく向きになっているようなマジックを見詰め、ブレイブはどこか嬉しそうに零していた。ブレイブの眼から見て、マジックは異界の魂と出会ってから、確かに変わっているように思えた。それは、ブレイブにとっては好ましい変化だったと言える。

「そうか……、私は変わったのか」

「嫌か？」

「いや、悪くは無い。犯罪神様以外の何かに執着すると言うのも、女神に対し怒りを覚えるのも、これまで無かった事だ。なにより、私はあの男を生かしてやりたいと思いは始めている」

その変化を自覚したマジックは、少しだけ驚いたように目を見開くも、直ぐに何時もの無表情に戻り確認する様に言葉を出した。

「やはり変わったのだな、あのマジックが」

「ふ、そうだな。確かに変わったようだ。私ならば、私たちならばあの男を生かしてやれる。そう思うと、負けは許されない」

「そうか、お前は……」

無感動だった瞳に、僅かな感情の色を乗せたマジックの言葉にブレイブは思い当たる。四条優一を仲間にするために言い放った言葉。それは、マジックの本心でもあったのかもしれない、と。

「どうかしたのか、ブレイブ?」

「いや、何でもない。次の作戦が予定通り最終で良いのだな?」

「……ああ。予定通り、プラネテューヌに強襲を掛ける。次で、終わらせる」

しかし、その事をブレイブが尋ねる事はない。真偽はどうであれ、自分は友の為、子供たちの為、そして自身がブレイブ・ザ・ハード足る為、剣を取るだけなのだから。

「解った。四条優一にも会うのか?」

「そのつもりだ」

「そうか。ならばこちらも準備に移ろう」

そう言い、ブレイブはマジックと別れたのだった。

「次の戦いが決まった」

「そっか」

唐突に表れたマジックの言葉に頷く。別れは済ませていた。立てそうに無かった女神を叱咤し、立ち上がらせていた。ユニ君とは別れを交わす事が出来なかったけど、精神面では寧ろ妹であるあの子の方がノワールよりも成長しているように思える。きっとあの子は大丈夫だ、と、思い定めていた。だから、後は最後の作戦を待っているだけであつたと言う訳だ。

「意外と冷静なのだな」

「覚悟はできていたからね。ずっと以前から」

淡々と尋ねてくるマジックの言葉に頷く。覚悟なんて、ずっと以前から固まっていた。その所為か、自分でも意外に思うほど、落ち着き払っている。

「そうか、それ程以前より女神たちを気に掛けていたか……」

「そうだけど、マジック？」

不意に、違和感を感じた。何がとは言えないけど、漠然とした違和感。

「私ならば、お前を救ってやれる。女神には出来なくとも、私ならば」

「……」

静かに言うマジックに、言い返す事が出来なかった。

「犯罪組織の思惑とは別に、私はお前を助きたい」

「君が僕を助ける、だって？」

「そうだ。その事を一度だけ言っておきたかった」

その言葉を聞き、困惑してしまふ。マジックの意図が解らなかった。

「かねてより決めていたプラネテューヌ強襲。お前の案を取った」

そんなマジックの言葉に意識を戻す。それは、最後の戦いの時の為に考えていた事。僕の思惑と、女神を倒したい犯罪組織の思惑。その両方を満たす事が出来る案だった。それが、プラネテューヌ強襲だと言えた。

「そうか。それじゃ、これが最後なわけだね」

「違うな。此処から始まるのだ。お前は此処から再び生を得る。私が与えてやる」

僕の言葉をマジックは否定する。そしてしっかりと言った。未来を変えてやる、と。

「期待はしないでおくよ」

今になって何故こんな事を言うのか、その意図が解らなかった。マジックにとって、僕は女神たちを揺さぶる為の手札でしかないはずである。だから、そう応える事しかできなかった。

ブレイブのリーンボックス襲撃。その事件が起こった後、惜しくも彼を逃がした女神たちは、一度各々の国に戻ると、やるべき事を成し、

プラネテューヌに集結していた。ネプギア達が女神救出の仲間探しと同時進行していたゲームキャラの捜索、それを終わらせていた為、発案者のイストワールに報告に来たと言う訳であった。

「皆さんありがとうございます。これで、全てのゲームキャラの力が揃いました。そして、女神たちも全員が揃い、漸く犯罪組織に反撃を行う準備が出来たと言えます」

ゲームキャラを携え、その力を増した女神たちを一人一人見据え、イストワールは口を開く。彼女の言葉通り、女神たちは自国のゲームキャラの協力を得た事により、その力を更に増していた。中でも女神の妹達は、その力と相性が良かったのか、今まで続く闘いの中で成長したのか、プロセツサユニツトに変化が表れている。少しばかり肌の露出は増えてしまったが、その分シェアが凝縮され、女神候補生の力をより姉たち女神に近付けていた。

「漸く、ここまで来たんだよね」

「はいです。ネプネプたちを助け出すって決めてから、随分と時間が経ちましたけど、やっとここまでこれたんです」

「全くね。正直言うと、最初の頃はネプギアを助け出せただけでも奇跡だと思ったぐらいだわ。それを此処まで巻き返せたのは、きつとアイツのおかげね……」

女神が捕えられてから彼女たちを助け出すと決意し、漸く反撃に移る事が出来るところまで来ていた。アイエフとコンパが二人でギョウカイ墓場に訪れた時と比べ、助け出した女神を含め、今は遥かに大所帯になっていた。その仲間たち一人一人を見詰めながらネプギア、アイエフ、コンパの三人は頷く。そして、アイエフはこの場に居ない一人の事を思い出すように言った。

「ユウが、皆を助けてくれた……」

ノワールが皆に言い聞かせるように言う。全ての女神が捕えられ、解放された。そしてその時に姿を消した大事な友達。今は犯罪組織についてしまった、異界の魂だった。

「お姉ちゃん……」

塞ぎ込んでいた姉が再び立ち上がってくれたことにユニは安堵し

たのだが、同時にどこか嫌な予感がしていた。何があつたのかと問うても、「もう大丈夫だから」と悲しげに笑う姉に、ユニは聞きたくてもそれ以上聞く事が出来なかつた。自分がいない間に、何かあつたのだと確信した。ブレイブの言葉を思い出す。あれは一体どう言う意味があつたのか、と。

「皆、聞いて欲しい事があるの。特に、女神には」

「どうかいたしまして？」

「なになに、ノワールに何か言いたい事があるの？」

「最初からそう言つてる……」

ユニが思考の海に沈みかけている時、ノワールが思い切つたようにそんな言葉を掛ける。彼女を除く三人の女神が、各々の反応を示しながら促す。

「異界の魂。私は、彼に出会つたわ……」

すーはーつと、深呼吸を繰り返すと、ノワールはゆっくりと告げた。それは、彼女が四条優一人から聞いた、彼の秘密の一部についてだつた。

『……!?!』

三人の女神が、息を呑む。異界の魂。その言葉には、確かに聞き覚えがあつた。かつてマジック・ザ・ハードに完敗を喫した時、最後に試みた逆転の切り札だつた。だけど、その時に儀式は失敗していた。召喚の儀式を行うも、何の反応も示さなかつたからだ。ただ力だけを失い、徒勞と終つたはずだつた。

「異界の魂ですか？」

「聞いた事ないわね」

「なにそれ、ロムちゃん知つてる？」

「知らない（ふるふる）」

しかし、女神の妹達はその言葉を聞いた事が無かつた。女神が継つた最後の希望。本来存在しない筈の術式をクロワールがこの世界に持ち込んだことよつて、それは呼び出されたからだ。

「あいちゃん知つてますか？」

「いや、私も聞いた事ないわね」

「アタシも知らないーい」

「がすとも知らないですよ」

「ぼくも聞いた事ないです」

そして女神以外の協力者たちも聞き覚えが無いと零す。ラストイシオンで仲間になった日本一。ルウイーのキラーマシン戦の際に仲間になっていた錬金術師ガスト、そして、リーンボックスの歌姫5pb. だった。一人一人経緯は違えど、女神たちを助けたいと言う思いの下に集った仲間だった。

「そうですか……、ノワールさんは知っていたのですか」

「はい。ユウから聞きました。自分はこの世界の人間じゃないって。此処じゃない世界から呼び出された人間だって」

「え……？」

困ったように零すイストワールの言葉に、ノワールは頷く。二人は共通の認識を持っていたようであるけど、一人だけ呆けた声を出した者がいた。ユニである。

「どういう事なの、お姉ちゃん？ ユウが、この世界の人間じゃないって」

「それをこれから話すところよ。聞いて貰えるわね」

「う、うん」

予想だにしていなかった事態に、ユニは困惑しながらも頷く。そして、ノワールの言葉に耳を傾ける。

「私たちがマジックに負ける直前に行った異界の魂召喚の儀式。それによって呼び出されたのが、四条優一。私とユニの大事な友達だったの」

それは、追い詰められた女神が行った一つの儀式。この世界を何としてでも救いたいと言う一心が生んだ、救世の為の一つの悲劇。この世界を救うために呼び出された人間の話だった。強大な力を与えられ、身一つで何も知らない世界に放り込まれていた。そして、関係の無い世界で命を賭けさせられた人間の話だった。

「そんな……。なら、そんな状態だったのにユウはアタシを気に掛けてくれたの……？」



「ええ。あの人は、自分の事を蔑にしてまで、私たちを女神を助けてくれたの」

ノワールの話を聞き、ユニは悲しそうに呟く。確かに、頷けることがあった。出会ったばかりの四条優一は、女神の事すら良く解っていないなかった。だけど、それも異世界人だと言うのなら、辻褄は合う。他にも持ちちる魔法や剣技、武器だって見た事が無いものしかなかった。全部は知らなくとも、その絶大な効果は何度も目の当たりにしていた。一つぐらい知っているモノがあっても不思議では無いのに、誰も知らなかった。それも良く考えてみたら、不可解な事ではあった。「なんで……アタシには何も教えてくれなかったのよ……」

「ユニ……」  
だけど、ユニの悲しみの大部分はそれとは関係の無いところから来ていた。悲しみの理由。それは、姉には教えた秘密を、自分には語ってくれなかった事。四条優一とは、誰よりも近いと思っていた。けど、それは違ったのだと思いきらされた気分になったのだ。少なくとも、姉は教えて貰っている。そして自分は知らされていなかった。その事実には打ちのめされていた。

「私が教えて貰えたのも、不可抗力なの」  
「……どういう事？」

「最初に聞いたのは、マジックからだだった。ユウと一緒にマジックと戦った時に、マジックに言われたの。だから、ユウも隠し通す事が出来なくなったから教えてくれたんだと思う」

「そう、なんだ」  
ノワールの言葉を聞いて、ユニは少しだけ落ち着く事が出来ていた。自分より姉を信頼して話したわけでは無い。話さざる得ない状況にされたのだと言う事が、幾分か落ち着く理由になっていた。そしてその事実には、ユニは少しだけ自己嫌悪に陥る。自分は、自分が思っているより嫌な子なのかもしれない。それは、姉が自分より信頼されている訳では無いかも知れないと思えた途端、冷静になれたからだった。

「ノワールさんが四条さんに教えて貰えたのは、それが全てですか？」

「え？ ええ、そうよ」

「そう、ですか……」

ノワールの言葉を聞いたイストワールは一瞬だけ考える素振りを見せる。その顔はどこか愁いを帯びている。

「異界の魂。それは世界を制する可能性を持つ力です」

イストワールが皆に説明する様に言葉を続ける。異界の魂召喚の儀式を教えたのは彼女である。その事実を知っている事に、女神たちが異を挟む事は無い。

「そしてその力を持つユウは言ったの。この世界を壊すつて……」

「そんな……」

そしてノワールが辛そうにしながら、最後に優一と出会った時の事を語る。世界を壊すと語ったことを。理不尽を許せるはずがないと言った事を。ユニが信じられないと言った様子で零す。

「女神の命を奉げる魔剣、ゲハバーン。それを手にしていたの。自分の目的を果たす為には必要だった。それに、次に会う時が最期だとも……」

「きつと、きつと何か訳があるんだよお姉ちゃん」

「そうだよノワールさん。きつと四条さんにも考えがあるはずですよ」

四条さんがユニちゃんを傷付けるなんて、考えられません！」

四条優一は本気で敵になってしまったと辛そうに語るノワールに、彼を知るユニとネプギアは擁護の言葉を重ねる。それだけ二人にとって、有り得ないと思える事だったから。

「私だつてそう思うわよ！ だけど、聞いたのよ。聞いちやつたのよ……。本人から、この世界を壊したいつて……。理不尽を許せるはずがないつて！」

「そんな……。それでもユウは——」

「っ!? これは宣戦布告……!?!」

アタシを支えてくれるつて言ったもん！ ユニがそう続けようとしたところで、不意にイストワールが焦ったように声を上げた。直後に爆音。凄まじい衝撃が、プラネテューヌの教会を襲った。

「な、なにになに、クライマックスまで一直線つて感じだったのに、何が

あつたの!？」

「ちよ、お姉ちゃん! こんな時までふぎけないでー」

「いやいやいやいや、今のは冗談じゃないんだけど!」

地震が起きたような揺れに、その場で倒れて頭を打ったネプテューヌの悲鳴に、ネプギアが抗議の声を上げる。それでも平常運転なネプテューヌだった。

「くう……、み、皆さん聞いてください!」

「は、はい!」

イストワールの切羽詰まった声に、ネプギアが応える。

「犯罪組織からの宣戦布告が届くと同時に、プラネテューヌが襲撃され始めました。教会から見て北部と南部に同時に犯罪組織の方たちが現れ、侵攻しているようです」

「ええー!! ちよ、ちよつとそれ、かなりピンチなんじゃないの!？」

イストワールの言葉を聞き、プラネテューヌの女神、ネプテューヌは悲鳴を上げる。凶っていたかのようなタイミングが、驚きに拍車を掛ける。

「北部にブレイブ・ザ・ハードが現れ、南部にはマジック・ザ・ハードの姿が確認できると、情報が入りました。……え? ブレイブは女神候補生を指名し、マジックは女神を指名しているとの事です」

次々に送られてくる情報を開き、イストワールは困惑気味に皆に告げた。二手に分かれた敵が、敵を指名してきている。それは、明らかに罠であると言えた。

「馬鹿正直に敵の思惑に乗ってあげる理由は無いけど……」

「そうですね。現実的に戦力を分け無い訳には参りませんわ」

「そうね、二手に分かれている以上、此方も二手に分かれるしかない、か」

「つて、ことは、乗っちゃおうの? だが行っちゃおう感じ?」

それでも戦力を分けざる得ない。そして、連携と言う面で言えば、女神同士と候補生同士で解れるのが理想と言える。戦力的にも、女神たちにとってマジックは一度足りとも勝てたためしが無く、厄介な相手な為妥当だと言える。

「癪だけど、敵の思惑に乗りましょう」

「大丈夫なの、ノワール？」

「辛いのなら抜けても良い、とは言えない相手ですわね」

「問題ないわよ。ちゃんとやれるわ。心配してくれてありがとう」

「おー流石ノワちゃん！ 期待してるよー」

「アンタは少しぐらい心配しなさい！」

未だ本調子ではなさそうなノワールを心配そうに二人の女神は見、残りの一人は何時ものように接する。

「ユニちゃんは大丈夫？」

「アタシだって大丈夫よ。それに敵はあのブレイブなの、アイツとは決着を付けなきゃいけない」

「ユニちゃん……。解ったよ、私がユニちゃんを支えてあげる！」

「……っ!?! ネプギア、アンタ……」

「えへへ、四条さんじゃないけど、私だってユニちゃんの友達なんだから！」

同じく辛そうなユニは、ネプギアに励まされていた。友達の暖かい気遣いに、ユニは涙が出そうになるのを慌てて拭う。

「あー！ 二人だけで盛り上がってる！ 私たちだって忘れないでよね！」

「皆で一緒に頑張る（ぐっ）」

「ラムちゃんとロムちゃんが居れば心強いよ！ ね、ユニちゃん」

「そうね、皆友達……。だからね」

ラムとロムも加わり、ユニを支えていた。

黒の姉妹は各々の友達に支えられていた。仲間とは暖かく、良いものだと二人は思う。

「私たちも忘れないでって言いたいところだけど……」

「もう、私たちじゃお役には立てないです……」

アイエフとコンパが悔しそうにつぶやく。構成員なら相手にする事はできるが、女神ですら勝てない幹部が相手である。人間の彼女たちに手に負える相手では無かった。女神たちと共に闘う事だけが、やるべき事では無かった。各々の出来る事を成すのが、最善だった。

「構成員の相手は任せてよ！」

「ガストは便利なアイテムを錬金して配るのです」

「ボクは、皆の避難誘導をします！」

それぞれがそれぞれのやる事を見つけ、散って行く。

「コンパさん、街の人たちの救護をお願いします。アイエフさんは、私の補佐をお願いします」

「解りました」

「あいちゃん、頑張ってくださいです！」

「こんぱもね」

そしてその場にはイストワールとアイエフだけが残っていた。イストワールの指示を、アイエフが現場の人間に割り振っていく。唐突に表れた犯罪組織の襲撃にも、皆の活躍が在り何とか態勢を立て直す事が出来ていた。

「アイエフさん、此処はもう大丈夫ですのであなたも……」

「残念だけど、それはダメだよ」

一区切りが付き、アイエフにも現場に出て貰おうとイストワールが声を掛けた時、聞き覚えのある声に遮られていた。二人が驚き視線を移す。そこには、

「久しぶりだね。それと、ごめんね。此処は押さえさせてもらうよ」

黒と紅の神器を纏った犯罪組織に残る最後の幹部ブレイク・ザ・ハード。女神に呼び出された異界の魂、四条優一だった。二人が何か言う前に、黒と紅の軌跡が煌めく。

そして、女神達が犯罪組織の幹部とぶつかる直前、プラネテューヌの教会は陥落したのだった。

## 45話 勇士の墜ちる時

「ブレイブ……」

「来たか、女神候補生たちよ」

ユニは対峙する敵に万感の思いを込め、その名を呼ぶ。貧しい子供たちの為に剣を取ったと言っていた。女神の統治では救いきれない子供たちを救う為、希望を見せる為に自身は戦うのだと答えた相手と、ユニをはじめとする四人の女神候補生は対峙する。

ブレイブと女神。どちらも弱き人間たちの為と言う、根底にある理想は同じだったのにも拘らず、その志が交わる事が無く、運命の悪戯か、刃を交わす結末に至っていた。どれだけユニが言葉を重ねようとも、ブレイブが止まる事は無い。子供たちの為、自分が自分であるが為、そして友の為に刃を抜き放つブレイブには、どれだけの言葉を交わそうともその思いが覆る事は無い。これまで交えた言葉から、ユニはその覚悟を嫌と言うほど痛感していた。

「お前たちは強い。それは素直に認めよう。だが、最早引けぬところまで来てしまった。俺が俺で在る為に、お前たちを倒す」

「もう、何を言ってもアンタは止まらないんだよね……」

「ユニちゃん……。大丈夫？」

悲壮とも言える覚悟を固め、決戦に挑んできたブレイブをユニは悲しげに見つめる。対峙する子供たちの為に戦う事を決めた勇士が、自分の言葉では止められない事を悟ってしまった。それでもユニにだって譲れない思いがある。犯罪組織はこの世界を壊す破壊神である犯罪神を蘇らせるために戦っている。その事実を知ってしまったからには、例えブレイブを倒しても止めなければいけないからだ。ブレイブの想いは尊いし、正しい部分もあると認める一方、だからと言ってこの世界に生きる者達全てを天秤にかけられるはずが無いと言う訳であった。そんな葛藤に苦しげに表情を歪めるユニを、ネプギアが心配げに覗き込む。

「大丈夫よ、ネプギア。例え相手がブレイブでも、アタシは戦える」

そんなネプギアの目をしっかりと見据え、ユニは小さな笑みを浮か

べ答える。仲間が支えてくれる。一人じゃない。だからユニは戦える。以前、四条優一が支えてくれたように、自分にも大事な仲間がいる。それを実感していた。

「別にみてるだけでもいいわよ。サイキョーなラムちゃんとロムちゃん、あんな奴倒してあげるから！」

「辛いなら、私たちが代わるよ。でも、それで良いの？（ジー）」

そんなユニを見詰め、ラムが焚き付ける様に言い放ち、ロムは静かに見つめる。正反対の双子の女神候補生も、自分なりの言い方でユニに手を差し伸べていた。

「ふふ、ありがとう。でも残念。アタシは、最後まで戦うわ。それが、この世界を護る事に繋がるから。子供たちの未来の為に、ブレイブ！ アンタには絶対負けられないの!!」

だから、ユニは笑顔で差し出された手を掴んでいた。そしていつもの様な自身の満ちた笑みを浮かべ、大事な仲間たちを見据え、宣言していた。負けられない想いがある。護りたい世界がある。大切な未来がある。だからユニは、立ち塞がる敵を見据え、戦う意思を漲らせる。

「その意気や良し。ならば、これまでの因縁、此処で終わらせようか、女神達!!」

そんなユニの意思を感じ取ったブレイブは、手にする愛刀を強く握りしめ、気炎を放った。女神候補生などでは無く、対峙する強大な敵を姉たちと同じ女神と認めていた。そして全力を以て切り伏せる。それが、ブレイブの示した意思だった。

「私はこの世界が好きなんです。だから、この世界に生きる人たちを守る為、貴方を倒します！ 刮目してください！」

「ネプギアちゃんとユニちゃんの護りたい世界。私もラムちゃんと一緒に護りたい……。だから、私も戦う。本気で、行くよ」

「アンタの言う事は難しいから全部はわかんないけど、アンタ達のようにしている事は、きつとダメだよ。だから、ネプギアやユニ、そしてロムちゃんと一緒に戦うのよ。私だって女神なんだから！」

「ブレイブ、アンタの言う事にも一理あるわ。だけど、それじゃ駄目な

の。ルールを無視したアンタたちのやり方じゃ、心の底から楽しむ事なんてできやしない。本当の意味で、子供に笑顔を与えるなんてできはしないの！ だから、アンタを倒して私は子供たちを、世界を救う！ アクセス!!」

そして子供たちの為に戦う勇士の意思を受け止めた四人の女神は、各々の想いを前面に押し出し、人々の祈りの力を身に纏う。優しき光が辺りを包み込み、暖かな力がその場を満たした。そして、

「女神ネプギア、此処に参上です!!」

「プロセツサユニット装着完了。行こうラムちゃん」

「プロセツサユニット装着完了つと！ 一緒だからね、ロムちゃん！」

「ラストイシヨンの女神の妹として、全身全霊を以て倒させてもらおうわ！ 行くわよ、ブレイブ!!」

「負けられぬ理由が在る。それは、俺とて同じだ!! 行くぞ!!」

成長した四人の女神がその姿を現す。互いに引けない想いがあった。譲れない、大切なモノ。それを守り貫く為、戦いが始まった。

「貴様たちと戦うのは、三年振りか……」

四人の女神と対峙するマジックは何の感慨も無い様子で告げた。三年前の戦いでは、女神たちは成す術も無く敗北していた。その時と同じ状況で戦おうとしていた。

「そうだねー、だけど、今回も同じだと思わない方が良いよ!! あの時よりも、ずっと成長したんだからね!!」

「ええ。私たちを助け出すために、様々な人たちが力を尽くしてくれましたわ。その方たちに支えられて今の私たちがあるのです」

「だから、私たちは以前とは違う。沢山の人が支えてくれている。その想いに応える為にも、負ける訳には行かないの……」

「そして、大事な人に助けて貰って背中も押して貰った。その人が、世界を壊そうとしている。それを止めなきゃいけないの。貴女何かに



時間を掛けている訳には行かないの!!」

女神たちを見据えるマジックに、四人の女神はそれぞれの想いをぶつける。かつては勝てなかった。だけど、あの時とは違う。沢山の仲間がいた。だから負けられないんだと、暖かな絆で結ばれた女神たちは自信をもって告げる。

「……ふざけるなよ。沢山の人達に支えられて立っているだど？ 女神として強き力を手にしながら、他者にも助力されていると言うのか」

「そうよ。例え女神だとしても、独りじゃできる事は知れている。だから私たちは、皆の力を借りて、貴方たちを倒す!!」

女神たちの言葉を聞いたマジックの瞳には、確かに感情の色が宿る。それは、敵意。怒りすら超えた先にある冷たい怒り、殺意すらも超えた憎悪の炎が宿っていた。そんなマジックを見返し、ノワールは宣言する。支えてくれる人がいる。だから、強くなれるのだと。一人だけじゃなく、皆が手を差し伸べてくれたから、自分たちは戦えるのだと……!!

「ふふふ、くく、あはははは!! そうか、お前たちは皆に支えられているのだな!! だから立ち上がる。だから諦めない!! ……自分は一んじゃない。手を貸してくれる相手がいる。女神らしくご立派な口上だ。だが、貴様たちは考えた事があるのか？ 手を貸す相手の事を」

女神の言葉を聞き、マジックは狂ったように嗤う。その様子に呆氣にとられた女神たちを尻目に、一通り笑い終えんと、先程よりもさらに深い憎悪を瞳に宿し、マジックは言う。支えて貰って、力を貸して貰って、貴様たちは良い。借りるだけならば、何の代償も払わずに済むのだから、と。

「……っ!? 有るわよ!! 私、私たちが弱かったから……、私の大事な友達の運命を狂わせた。それは、私たちの罪なの……。だから、狂わせてしまったユウの為に、私はこの世界を救わないといけないの!! この世界を救うためにあの人を呼び出した。だから、何が何でも世界を救わなきゃいけないのよ!!」

ノワールもまた、四条優一の受けた理不尽の一部を知っていた。だから、この世界に呼び出してしまった彼の為にも、呼び出すに至った原因を何とかしなければいけない。そう思っていた。

「それが貴様の贖罪と言う訳か」

「そうよ。全てが終わったたら、私はどうなっても構わない。それだけの事をしてしまったから……。だからあなたを倒して世界を救ったら、贖罪する。ユウに全てを委ねる。それで死ぬと言われたら、喜んで死ぬわ」

暗い感情を覗かせながら問うマジックを見詰め返し、ノワールは自身の覚悟を示す。理不尽に呼び出し、運命を狂わせてしまった。知らないで良い筈の痛みを与え、何度も縋った。心を支えて貰い、友達と言って貰った。そして少しずつ惹かれた相手。その人にどれだけ自分が酷い事をし続けたのか知った時、そう決断できてしまった。それが、ノワールの覚悟だった。

「ちよ、ノワール!？」

「貴方、そこまで思いつめて……」

「その覚悟は驚嘆しますが、女神が簡単に死ぬなんて言うモノではありませんわよ。貴女が死ぬば、ラストেশションはどうなるのですか」  
ノワールの覚悟を聞いた三人の女神は慌てて止めに入る。

「大丈夫。そう言う気持ちがあるってだけよ」

詰め寄る三人に、苦笑しながらそう告げていた。

「……、話にならないな。やはりお前たちは、事の本質を理解していない。それではあの男と共に居る資格は無い。貴様たちの因縁、此処で絶たせてもらう。自身の無力さを嘆き、死んで行け」

言葉を聞いたマジックは深い失望の溜息を吐くと、一息に言い放った。身に纏うプロセッサユニットを戦闘態勢に移行させる。

「そう言われても、負ける訳には行かないよーだ！ 私の本気、見せちゃうよ！ 刮目せよ!!」

「貴方たち犯罪組織の悪行、これ以上見過ごせません。本気を出させてもらいますわ」

「あの子たちを悲しませないためにも、これ以上負ける訳には行かな

いの。女神の本気、見せてあげる」

「貴女には何度も負けてきた。だけど、もう負ける訳には行かないの。私の為にも、あの子たちの為にも!! 見せてあげる……私の本当の力!! アクセス!!」

同時に四人の女神も信仰の力を収束し、その暖かな光も身に纏う。マジックが大鎌を構えた。同時に、女神が降臨する。

「プラネテューヌの女神の力、見せてあげるわ!!」

「以前の借り、返させてもらいますわ!!」

「装着……完了。テメーはぜってー此処で倒す!!」

「貴方を倒し世界を救う。そして、もう一度ユウと話すためにも、此処で勝たせてもらおうわ!!」

かつて敗れた女神たちは、自分たちを信じてくれる者達の想いに応える為、その姿を見せる。世界を壊そうとする犯罪組織を阻むため、一度は敗れた強大な敵に立ちふさがっていた。

「光に満ちた輝き。何故これ程までに虫唾が走る……。お前たちに差し伸べられた手の数に比べ、何故異界の魂には誰一人として手を差し伸べない……っ!」

「だったら私が、私たちが助けるのよ!! その為にも、勝たせてもらおう!!」

紅の女神と黒の女神の刃が交錯する。十を超える激突音が響き、早すぎる剣閃に火花だけが幻想的に辺りを赤く染める。紅の女神と四人の女神。真実を知るものと知らぬもの。壊す者と護る者。感情同士のぶつかり合いを合図に、戦いが始まった。

「アイエフさんは何処ですか?」

「別の部屋で眠っているよ。外傷は無い。無事だよ」

「そうですか……」

目を覚ましたイストワールさんの質問に答えていた。プラネテューヌの教会を占領していた。部下として回されたワレチューと

リンダに頼み、イストワールさんと二人だけで話せるようにしてもらっていた。あいちゃんが無事と解った事で、目の前の小さな少女は安堵の溜息を零した。

「確かに私たちは斬られたはずですが、傷一つありませんね。治療を施してくれたのですか？」

「違うよ。斬るモノを選んだんだよ。身体では無く、意識を少しだけ斬ったんだよ」

「え……」

それは自身の能力を追及する過程で辿り着いた境地。こと剣に関して絶大な力を持つ能力だった。それは剣と言う概念に干渉する能力であり、剣技にも影響を及ぼす力だった。そして極地に至る過程で、辿り着いた一つの斬撃だった。目に見えないもの、実体の無いものすら切る事の出来る斬撃。僕の目的を達成するに於いて、必要な技術だった。

「まあ、それは良いんじゃないかな。今はあんまり重要では無いよ」

「それはそうですが」

「とりあえず現状は、女神と女神候補生を分断しているよ。それぞれ、マジックとブレイブが戦っている」

「……っ!? ネプテューヌさんや、ネプギアさん、他の女神はどうなっているんですか!?!」

あの子たちの話をする、イストワールさんは露骨に反応を示した。相変わらず、優しい人だと思う。僕も何度か助けられていた。その事が遠い思い出のようで、少しだけ寂しく思う。

「それぞれ応戦中だね。だけど、決着が着くのも時間の問題かな」

「そんな……」

目の前の小さな妖精は、表情を悲しみに染める。女神たちが犯罪組織に敗れると言う、最悪の事態を想定しているのだろう。

「おそろくだけど、犯罪組織が女神たちに負けてこの戦いは幕を下ろす」

「え……!?!」

「まあ、驚くのも無理が無いよね。だけど、きっとそうなる」

それは、確信だった。マジックやブレイブは強い。だけど、女神もまた強かった。個の力は負けているが、集の力では女神に分があるとみていた。女神たちに勝ってほしいと思う反面、ブレイブたちにも負けて欲しくは無い。だけど、解ってしまうのだ。魔剣が、僕に教えてくれていた。

「この戦いはね、勝っても負けても変わらないんだよ。どちらにしろ、犯罪神は蘇る。魔剣、ゲハバーンが教えてくれた」

「それが、魔剣……」

魔剣を呼び出していた。小さな妖精は息を呑む。イストワールさんはこの世界の歴史を書き記す史書だと言っていた。魔剣の存在を知っていても不思議では無い。とはいえ、実物を見たのは初めてのようだ。

そんな様子を見詰めている間にも、手にする魔剣は今も僕に語り続けている。犯罪神の復活は最早止める事はできないと。倒すためには、女神の持つ膨大なシエアを奉げろ、と。

「これはね、女神の命を、女神の持つ膨大なシエアを奉げる事で強くなる魔剣なんだ。その力を以て、犯罪神を斬り続けてきた、女神による救世と悲壮の元凶」

「……何故それを貴方が？」

「必要だからだよ。シエアを奉げる事で強くなる魔剣。それが、必要になる」

それが僕には必要だった。手にしたのは必然だったのかもしれない。僕は女神の脅威を取り除くためにこの世界に呼ばれた。そして、この魔剣に出会ってしまった。過去の女神の悲壮な決意による救世の記憶を垣間見た。女神の脅威の排除。それが僕に課せられた役割である。そう考えると辻褃はあっていた。こと剣に関して絶大な力を持ち、未来を切り開くための力を得ていた。天啓としか思えない。「四条さんは、その魔剣でネプテューヌさんやネプギアさんを斬る心算なんですか？」

「さて、ね……。だけど、やろうと思えばできると思うよ」

イストワールさんの問いに、苦笑が浮かぶ。そう聞いてしまう程度

にしか、今の僕は信用されていないのだろう。そう考えると、少しだけ寂しく思う。だけど、それで良かった。

「ねえ、イストワールさん。シエアって言うのは、女神だけが持つているものじゃないんだよ。シエアは人の信仰が力となったものだね。なら……」

「……っ、まさか、一般人の方から!?!」

「それもできるかもしれないね。一人の人間からどれだけのシエアが取れるのか。考えた事も無かったなあ」

僕の考えとは違う結論に至ったイストワールさんに感心する。確かにシエアは人間の信仰である。その大本である人間を切ったとしたら、少しは手に入れる事が出来るかもしれない。女神の決意と犯罪神の戦いの記憶ばかり見てきた所為か、そう言う考えには思い至らなかった為、そう言う考えもあるのかと感心する。

「なら……」

「言ったよね、シエアは女神だけの持つものじゃないよ。例えば女神の武器。或いは魔法。シエアを用い攻撃に転じたソレは、それ自体がシエアの塊だと言える」

「つまり、女神が成す事は、それ自体がシエアを用いている事なんだと言う事だよ」

「確かにそうですが」

女神の力を模倣し、得た力を使い実感した事でもあった。それにイストワールさんも同意する。

「そう言えば、どこかの誰かが、女神さま四人分のシエアを用い召喚されてたね」

「……っ!?!」

「女神自身が、シエアの塊でもある。つまりその人に宿るそれは、女神四人の命と同等と言う事だね」

「貴方は……、何を考えているんですか……?」

呆然としたイストワールさんの問いに、小さく笑みを浮かべるだけで答える事はしない。

「貴女は、人質です。あの子たちと闘うための、ね」

「答えてはくれないのですね……。なら、なぜそれを私に教えてくれるのですか？」

「それは、内緒です」

質問に答える気は無い。

「さて、僕は行くよ。友達が命を賭けて戦っているんだ。それを見届けなきゃいけない。僕には……その責任がある」

「待って、待ってください!!」

そのまま部屋を後にする。扉を閉める直前まで、イストワールさんの声が聞こえたけど、無視した。これは僕の小さな仕返し。

「さて、行こうか」

眩き、友達の下へ向かう。覚悟はできていた。右手にゲハバーンを持ち、左手に黒と紅の大剣を携える。そのまま一度空を見上げる。無情なまでに青々と綺麗な青空をしていた。

「エレメンタルバレット!!」

「ミラージュダンス!!」

『アイス・コフィン!!』

双子の女神の放つ巨大な氷柱が降り注ぎ、その合間を縫うように黒の女神が駆け抜け抜け魔弾で襲い掛かる。その全てを切り伏せるブレイブの間合いの内側に踏み込み、ネプギアの持つMPBLの銃剣の刃が強襲する。

「ぐおおおお!! まだだ、まだ倒れる訳には行かんだ!!」

四人の女神の猛攻をただ一人受け止めるブレイブは咆哮する。子供たちの為に戦っていた。自信が守りたいものと思えるもののためには戦っていた。だが、その想いは対峙する女神の言葉を聞き、刃を交え続けるうちに、少しずつ少しずつ変わり始めていた。確かに女神の統治では救えない者が存在していた。だが、刃を重ね、その定められた思いに触れるうちに、女神が本当に子どもたちの事を思い、ブレイブに立ち向かって来ている事は武人として嫌と言うほど理解する事が出来てしまった。想いの定められた攻撃は、何百の言葉よりも雄弁

に語っていたのだ。女神の志も、ブレイブの志も方向は違えど同じものであると。

「強い！ だけど、それでも負けられないの!!」

ユニはブレイブの咆哮に一瞬気圧されるも、自身を叱咤する様に声を上げ、XMBを構える。

「ユニちゃん、任せるからね!!」

「解ってるわ、絶対に決めなさい!!」

そんなユニを見たネプギアが一直線にブレイブに向かう。ユニを信頼している。その背中からは、そんな強い思いが感じられる。

「あー、二人だけで盛り上がってずるい!」

「私たちも手伝う」

双子の姉妹がユニとネプギアに魔力を重ね、二人の力を底上げする。ネプギアが、ブレイブの間合いに入っていた。

「速いが、迂闊だ! ブレイブソード」

神速からの斬撃。それに移行しようとした僅かな隙を逃すブレイブでは無い。渾身の魔力を大剣に乗せ、振り下ろす。ブレイブの名を冠した必殺剣。ネプギアに襲い掛かっていた。

「大丈夫」

「行きなさい、ネプギア!!」

「なにつ!」

にも拘らず一切速度を落とさず、それどころか刃に何の関心もむけずに踏み込んでいた。僅かな驚きがブレイブの声に宿る。その声とほぼ同タイミングで、ユニの叫び声が上がっていた。同時に、銃撃の音が鳴り響き、何かを砕く鈍い音が響き渡った。

「馬鹿な……」

それはブレイブの剣が半ばから砕け散る音で。

「道は開けたわよ」

「ありがとう、ユニちゃん!!」

その時には既に紫の女神がブレイブに肉薄していた。そのまま刃を滑らせ

『シユタルクヴィータ!!』



「ぬ、おおおおおお!!」

ユニとネプギアの連携攻撃が炸裂していた。刃を砕いた銃弾がブレイブの体に突き刺さり、肉薄していたネプギアの刃が、音速を越えた速さで振るわれる。刃が装甲を削る音が鳴り響き、ブレイブの絶叫が響き渡る。

「あうう!!」

「ネプギアちゃん!!」

「ネプギア!!」

それでもブレイブが膝をつく事は無い。剣が折れたと悟るや、即座にその柄を投げ捨て、ネプギアを殴り飛ばした。もろに直撃したネプギアは吹き飛ばされるも、小さな笑みを浮かべた。だって拳を振り抜いたブレイブのすぐそばに、友達が到達していたから。

「ユニちゃん、私たちの勝ちだね」

「ええ、アンタのおかげよ、ネプギア!!」

「しま——」

ブレイブの眼前にユニがXMBを構えていた。

「ネプギアがくれたチャンス、これで決めるわ! N・G・P!」

ユニの持つXMBがその力を解き放った。シェアを収束した、必殺の一撃。光の奔流とも言えるそれは、ブレイブに直撃した。

「ぐ、ああああああ!!」

再びブレイブの絶叫が上がる。それでも放たれた力は止まる事が無い。そして、

「ま、けたか……」

ブレイブの半身を吹き飛ばしたのだった。

「私の、勝ちね」

「そのような……」

どこか悲しげに言うユニに、ブレイブは何処か清々しげに答えていた。全力を賭して挑み、敗れていた。負けはしたが、その結果に悔いは無いと言う心境だった。

「お前は、子供たちを救う事が出来るか? 貧しき子供たちにも、笑顔を見せてやれるか……?」

「約束するわ。アタシの全身全霊を掛けて、子供たちを笑顔にする」

心残りがあるとすれば、子供たちを笑顔にできなかった事である。それはブレイブの剣を取った理由であり、存在意義と言っても良かった。それを成す事も出来ない自分が不甲斐ないと思う一方、自分の想いを託すにたる相手が見つかった事に、何処か安堵していた。自分と真っ向からぶつかり合い、下した相手が同じ志を持っていた。それはブレイブにとって僥倖たふさと言えた。

「そうか……、ならば俺は安心して逝けるな」

「……後は任せて。絶対にアンタの目指した世界を実現するから」

ユニの言葉を聞いたブレイブは、満足したように頷く。

「そう言えば、お前の名をまだ聞いていなかったな」

「ユニよ」

「そうか、ではユニ。後の事は任せたぞ」

そうして後を託すブレイブに、ユニは一筋の涙を零し、頷く。敵であったが倒したかったわけでは無い。同じ志を持つ者だった。だけど、倒さなければいけないかった相手。ユニにとって、ブレイブはそういう相手であった。

ブレイブの体がゆっくりと崩れ落ちはじめる。既に半身を失っていた。機械の体を持つとは言え、既に動けなくなってもおかしくは無い損傷だった。未だにブレイブの意識があるのは、ブレイブの強靱な意志の所為なのか。

そんなブレイブの下に、黒と紅が舞い降りる。異界の魂であった。

「ユウ!？」

ユニが叫び声を上げるが、一瞥するだけでブレイブの下に向かっていた。

「すまない、ブレイブ。途中から全て見ていたけど、僕は参戦しなかった」

「知っていたさ。お前の目的も理解している。恨みごとを言う気は無い。この結果は、なるべくしてなったと言う事だ」

悲しげにつぶやく異界の魂に、ブレイブは氣にするなど笑う。

「それでも僕は、君を、友を見殺しにしたんだ……」

「そうか……、俺を友と呼んでくれるか。ならば、その気持ちだけで充分だ」

俯く異界の魂に、ブレイブは優しく告げる。その声音は最期の時を迎えようとしているにも拘らず、酷く嬉しそうであった。

「できるならば俺の手でお前を救ってやりたかった、だが、それもできそうにない。すまなかつたな」

「そんな事は……」

少しずつ崩れ落ちるブレイブを見詰める異界の魂を見るユニは、不意にどうしようもない悲しみに襲われてしまった。優の友達を、自分が倒してしまった。そう自覚すると、抗いがたい衝動に駆られる。

「残り少ない命、我が友のために使おう……」

そう言い、ブレイブはユニを一度だけ見据えた。

「え……？」

自分の代わりに、助けてやってくれ。何故か、ユニはそう言われた気がした。

「ハードフォーム」

静かにブレイブは呟いていた。瞬間、ブレイブの体が光に包まれる。そして、光が収まった時、

「これは」

紅の剣が、四条優一の目の前に刺さっていた。掴む。まるで異界の魂の為に作られたかのように、自然にその手に収まっていた。

「そっか、ブレイブは本気で僕を助けようとしてくれたのか……」

悲しげな呟きが辺りに響いていた。剣を読み取る力を用い、ブレイブの残した想いを正確に読み取っていた。不条理を課せられた友を救いたいと言う一念だけが、はつきりと示されていた。

「ありがとうブレイブ。僕は君に出会えてよかった」

ほんの小さな溜息と共に、四条優一は女神たちに向き直る。黒と紅の大剣を消滅させ、右手に魔剣、左手に紅の剣を構えた。

「行くよ、女神達。君たちの想い、僕に示してくれ」

そして女神に向かい肉薄する。友を失った異界の魂との戦いが、始まった。

## 46話 女神の守りたかったもの

先に動いたのは異界の魂からだった。救世と悲壮の魔剣と、友が最期の力を振り絞り残してくれた紅き剣を握り締め、黒と紅の神器を稼働させ低空を疾走する。その速さは文字通り神速であり、その場にいる四人の女神の中で唯一接近戦の行える銃剣を持つネプギアに襲い掛かる。異界の魂の告げた言葉を、彼女たちが正しく認識する間すら与えず、既に間合いに捕えていた。左手に持つ紅の剣。音を置き去りにし、振り抜かれる。

「っ……!?!」

刃と刃がぶつかり合う音だけが響く。ネプギアの持つ白き銃剣。紅の刃とぶつかり合い火花を散らしていた。至近距離でネプギアと異界の魂の視線が交錯する。ネプギアの瞳には、驚きともおそれとも取れる色が映し出されていた。

ネプギアが刃を受け止められたのは、僥倖が重なっただけだと言っ  
てよかった。あの四条優一が、ユニたちに何の躊躇も無く刃を振るう  
とはどうしても思えなかったからであり、その振るわれた刃が速すぎ  
た為まるで見えなかったからだだった。受け止められたのは強烈な圧  
力を感じたからであり、それを感じ取った自分の感覚を信じて遮二無  
二体を動かした結果でしかない。ネプギアの眼は、異界の魂の放つ斬  
撃の軌跡すら視認する事が出来なかった。シエアを纏い強化された  
女神ですら認識する事すら困難な斬撃を、目の前に存在する人間が  
放ったことにネプギアは僅かに恐怖する。これが、女神の呼び出して  
しまった力なの……? 右手に持つ紫の刃を振るわれた時、同じよう  
に受け止められるのか。ネプギアにはまるで自信が無かった。こと  
剣に置いて、対峙する異界の魂にはどう足掻いても勝てると思えな  
かった。その事を、ただ一合ぶつかり合っただけで直感してしまうほ  
ど、異界の魂の放つ一撃は規格外だと言えた。

「四条さん！ やめて、やめてください！」

何より、ネプギアとしては異界の魂と戦う事などしたくは無い。友  
達であるユニの、大事な人だった。そんな人に刃を向ける事など、心

優しいネプギアには耐えられなかった。

「断る。君たちが本当に世界を救うに足る力を持っているのか、それを僕は見極めなければいけない」

「なんで、どうしてこんなことをするんですか!？」

「この、ネプギアから離れなさい！ ロムちゃん！」

「うん、解ってる。アイスコフィン！」

止まるように懇願するネプギアに、異界の魂は冷たく言い放ち。その手に持つ紅の剣を用い、速すぎる斬撃を加えていく。最早どこから刃が振るわれているのかネプギアには見る事が叶わない。全身を包む強烈な圧力の機微を感じる事に極限まで集中し、何かを感じ取る事でその軌跡を何とか阻む。だがそれも、長く続く事は無い。削り取るように襲い来る斬撃の壁にみるみるネプギアは余裕を失っていく。そんなネプギアを慌てて援護したのが双子の女神だった。異界の魂を挟み込むように、左右から氷の柱が襲い来る。

「その程度……っ」

異界の魂に直撃する。その刹那、一度たりとも振るわれなかった魔剣が紫の軌跡を作り出す。一閃。ただ一振りの斬撃で、双子の女神が放った氷柱は斬り裂かれ、剣に取り込まれるように消滅する。

「う、あ……」

その光景を見ていたユニは、呆然と声にならない声を漏らす。本気だった。そうとしか思えない程厳しい攻撃を、異界の魂はネプギアに躊躇なく放っていた。大事な友達が、もう一人の大事な友達を殺そうと襲い掛かる。信じたくない光景が目の前で展開され、ユニは動く事が出来ずにいた。

「この!?! エクスバスター!」

「当てる……エクステンション!」

だけど双子の女神はそんなユニに構っている時間は無い。絶対的な強さを示す異界の魂に、ネプギアが離脱する隙を作り出すため、魔力による爆発と閃光を同時に放つ。

「遅いよ。その程度じゃ、世界を救う事なんてできはしない……っ!」

右手に持つ魔剣を振るい、収束した魔力が効果を示すより早くその

元を斬り裂いていた。魔剣が紫の刀身を怪しく煌めかせ、その光を増す。

「どうして、どうしてこんなことをするんですか!？」

「どうして、か。なら、どうして君たちは犯罪組織の邪魔をする?」

「何を……」

ネプギアの悲痛な叫びに、異界の魂は応えず逆に問い返す。何故君たちは抗うのか、と。

「そんなの決まってるでしょ!」

「決まってるよ……」

「この世界が好きだからです。犯罪神が蘇れば、今ある世界はめちゃくちゃになっちゃおう……。そんなのは絶対嫌です。だから、私達は抗うんです! 守る為に、貴方たちに思い直してほしいんです!」

「それはできない相談だよ。僕の願いを果たすには、君たちの想いを取る訳には行かないんだ」

紅の刃が再び振るわれる。相容る事などできはしない。行動で示していた。

「君たちは世界を護りたい。だけど、僕はそうする事が出来ない。なら、道は一つだよ」

「そんな事ありません、話し合えばきつと……!」

「もう、決めたんだ! 僕は君たちと戦う、と!!」

今でも仲間だと思っている。ネプギアはそんな想いを込め手を差し伸べるが、その手は冷たくふり払われる。返す刃で振るわれるのは、紅の剣。ネプギアに襲い掛かる。

「君達はこの世界を守ると言った。それなら、その想いを貫け」

「あ……」

避けられない。強烈な悪感を感じたネプギアは、そう悟ってしまった。対峙する相手は以前協力してくれた人で、ユニにとって姉や教祖の次ぐらいに大事な人だった。それが解っているからネプギアは手を出す事が出来なかった。そして斬られ、墜ちる。そうなる未来に抗う事などできないと、そう思ってしまった。

「駄目えええ!!」

来る痛みにも覚悟し眼を閉じた時、ユニの叫び声が響く。銃声が響き、斬撃の代わりに空を切る音が響く。

「アンタは、アンタは何をしてるのよ!!」

ユニが怒りの形相で叫んでいた。仲間を、自分の友達が斬られそうになった。その覆す事の無い事実を目の当たりにし、ユニは漸く対峙する敵と、四条優一と向かい合う事が出来たと言う訳であった。

「ようやく動いたか。相変わらず、うじうじと悩むんだね」

「質問に答えなさい!! アンタは今、何をしようとしたの!?!」

「自分が成すべき事の為、刃を振るった。それだけだよ」

激昂するユニに、異界の魂は静かに答える。異界の魂の感情には何の乱れも無く、その事が余計にユニを苛立たせる。こんなのはアタシのユウじゃない! そんな想いが、湧き上がった。アイツは厳しいところもあるけど優しくして、何より友達を大事にするやつで……。そんな思いがユニの中を目まぐるしく駆け抜ける。

「アンタは、変わっちゃったの?」

「僕は変わっていないよ。変わったと言うのなら、ユニ君の方じゃないかな?」

「え……?」

怒りとも悲しみとも取れる感情に逆らう事はせず、言葉を吐き出す。そんなユニを見て、異界の魂は小さく笑った。それは、ユニの良く知る四条優一の暖かい微笑みと重なる。

「君は強くなったね。頑なだった君が、今は仲間と一緒に居る。頑張ったんだね」

それは、四条優一の抱いた本音だった。頑なだった少女が、今、友達のために怒りを示している。いい方向に変わったかかつての仲間に、そんな言葉を贈る。

「……っ!? だったら、だったらアンタも支えてよ!! 一緒に居てよ!!」

「それはできないよ。その言葉と僕の願いは、相容れない。だから僕は、壊さなきゃいけないんだ」

ユニの慟哭にも似た叫びを異界の魂は冷たく突き放す。

「何だよ……、どうしてよ!?!」

「それは君が知る事じゃない。僕は僕の意味でここに居る。それが答えだよ」

「それじゃあ……、アンタはこの世界が滅べば良いって言うの!?!」

「愚問だね。態々口にしなくとも、現状が示しているよ」

感情のまま叫ぶユニに、何処までも冷めた調子で異界の魂は答える。

「……優しくかったアンタは変わっちゃったの？ 女神にこの世界に呼び出されたから、嫌になっちゃたの?」

「人は簡単に変わるんだよ。女神と違って、ずっと弱いんだ……。だから譲れないものがあるんだよ」

「……っ!?! そんなにアタシやお姉ちゃん、ネプギアやケイがいる世界が壊したいの……? そんなに、この世界の事が嫌いななの?」

「行動で示していると言ったよ。それとも、僕の言葉でそれを聞きたいのかい?」

懇願する様に尋ねるユニに、四条優一は冷徹なまでに穏やかな口調で答えた。それでユニは答えに行き着いてしまった。何を言っても、異界の魂の決意を変える事はできないと。四条優一はかつての様に手を差し伸べてくれない、と。

「……解った。アンタがその気なら……」

「ユニちゃん!?!」

覚悟を決めたユニに、ネプギアが慌てて詰め寄る。ユニにとって、対峙する異界の魂がどれだけ大事な存在であったのか、ネプギアは知ってしまったていた。そのユニが、闘う覚悟を決めた。ネプギアには信じられなかった。

「ユウはきつと、意見を変えない。アタシにはそれが解るの……」

「でも、四条さんは」

「闘いたくなんかない。だけど、それでもやらなきゃ駄目なの。例えどれだけ辛い目に遭っても、間違っている事は間違っているって教えてあげなきゃいけないの! どれだけ辛くても、皆この世界で生きているから。それをたった一人の都合で台無しにしちゃいけない。そ



う、アタシはアイツに教えてあげなきゃ駄目なの。それが、本当の友達だから……」

「ユニちゃん……」

涙を浮かべながらもネプギアに語るユニを見て、何も言えなくなる。その瞳から零れる雫。それだけで、どれだけユニが異界の魂を思っているか、ユニの親友であるネプギアには理解できてしまったから。

「……私も協力するよ」

「……っ、ネプギア、アンタ……」

だからネプギアは、ユニの隣に立つ。友達が大切な人を止める為に戦うのなら、親友である自分が支えてあげないでどうするんだ。ネプギアは心の底からそう思った。

「ちよつと、二人だけで盛り上がりたくないですよ。私とロムちゃんもいるんだからね!!」

「ユニちゃんとネプギアちゃんを助ける。皆、大事な友達だよ」

「ロムちゃん、ラムちゃん」

「……アタシは、良い友達を持ったのね」

双子の女神も、協力を申し出る。敵の力は強大だけど、それでも友達が本気で止めようとしていた。なら、それを助けるのが友達なんだ。四人の絆が、異界の魂を止める為に立ちふさがる。

「漸く、決心がついた様だね」

そんな四人を見詰め、異界の魂は薄く笑う。その笑みは慈しむようであり、酷く酷薄のようでもある。

「ユウ、アンタがこの世界を壊すって言うのなら、アタシは止めなきゃいけない。女神として、アンタのしようとしている事を許容する訳には行かないの」

「そうだろうね。だけど言葉じゃ僕は止まらないよ。なら、如何する？」

「アタシが、アタシ達がアンタを倒す！ 大事な友達が道を踏み外そうとしている。それを黙って見てる事なんて、アタシには出来ない!!」

ユニはしっかりと異界の魂の瞳を見据え言い放った。大事な人を

間違った道に進ませたくない。そんな想いが読み取れる、決意の籠った瞳だった。

「私も協力するよ」

「うん、みんな一緒」

「しよーがないから、手を貸してあげる。感謝しなさいよ」

その言葉に呼応する様に三人の女神が答えた。ゆっくりと異界の魂を取り囲むように位置を取る。

「それで、どうするつもりなのかな？」

「こうするのよ!! 多少痛くても、後で確り治療してあげるから我慢しなさい!!」

「そうか、君たちの意思見せて貰うよ」

囲まれて尚余裕を崩さない異界の魂に、ユニは確固たる意志を示し宣言する。瞬間、四人の女神の持つシエアが極限まで膨らみ、弾けた。暖かな光が辺りを包み込む。人々の願いの力。それが辺りに充満していた。

「先に仕掛けるわ、行くよネプギア」

「解ってる、ユニちゃん」

そして、ネプギアとユニは異界の魂に肉薄する。それを、ただ微笑を浮かべ見詰めていた。馳せ違う。辺りに満ちたシエアの力により強化されたネプギアの斬撃と、ユニ放つ銃撃その全てを見据え、異界の魂は魔剣を用い余す事無く切り落とす。

「やりなさい、ネプギアー」

「解ってる、ロムちゃん、ラムちゃん!!」

「……良い、一撃だ」

ぶつかり合う白き銃剣と紫の魔剣。ネプギアはシエアの力を以て、異界の魂を無理やり吹き飛ばした。異界の魂はその力に逆らう事をせず、勢いに身を任せながら、嬉しそうにつぶやく。間髪入れずにX MBによる追撃が放たれる。無造作に振るう魔剣で全て切り落としていた。紫の刀身が、その輝きを強くする。

「ラムちゃん……!」

「うん、次は私たちの番ね、行くわよロムちゃん!」

双子の女神が息を合わせる。先程とは比べ物にならない密度の水塊の群れが襲い掛かる。異界の魂はその全てに魔剣を振るう。砕ききれず、その身に纏う黒と紅の神器が少しずつ砕けていく。それでも、依然として笑みを浮かべていた。それは、心の底から嬉しそうであり、それでいてどこか諦念を感じさせる矛盾した嗤いだった。

「これで、決めるわ!!」

「合わせるよ、ユニちゃん!!」

弧を描き、異界の魂を挟み込むように陣取っていた二人の女神は其々の武器を構え、宣言する。二人の持つ武器は、双子の女神の力により、極限まで強化されていた。淡い光を帯びる。人々の祈りの力が、女神の世界を護りたいと言う確固たる意志の下、その武器に集っていた。

『スペリオル・アンジェラス!!』

二つの銃撃が交錯するように放たれる。迫り来るシエアの奔流。膨大過ぎる出力を見据え、それでも尚、異界の魂は紫の魔剣で迎え撃つ事を選択した。紫紺の軌跡が弧を描き、炸裂する。辺りがシエアによる輝きに包まれる。強いが、暖かな光。目を開いていられない程の輝きも、少しずつ収まり始める。

「これなら……」

四人の女神の意思を、ユニが代弁していた。この場に居る女神に出来る、最大の攻撃。それを放っていた。それにより、四人は殆どの力を使い切っていたから。もしこれで倒せていなかったとすれば、

「……君たちの想い、見せて貰ったよ」

そう言つて姿を現したのは、展開したプロセスユニットを半壊させながらも、その場に悠然とたたずむ異界の魂であった。

「そんな……」

ユニは呆然と零した。全身全霊で異界の魂を止める気で力を使っていた。それでも尚、異界の魂を止める事が出来なかったから。他の三人も同じような様子で異界の魂を見詰めていた。

「……、次は僕の意味を見せる番だよ」

異界の魂は静かに言い放つ。紫色の光を宿す、異様な迫力を持つ魔

劍、一際強い輝きを放つ。

「さようなら」

それが、四人の女神たちが意識を失う直前に聞いた最後の言葉だった。

手加減をしている訳では無かった。かつて相手になりもしなかった取るに足らない有象無象。それが三年前に抱いた女神への印象だった。何をしようともマジックの体に傷を付ける事すらできず、その気になれば一方的に蹂躪できる相手だった。

「……」

「これなら、どう!?!」

だが、今のこの状況は何なのだ。マジックは静かに思考する。身に纏う紅と黒のプロセツサユニットは所々に損傷を受け、マジック自身もその身に数多の傷を負っていた。自身の体から零れ落ちる血液を静かに見据え、それから敵を見据える。異界の魂とブレイブの言った通り、対峙する女神は予想をはるかに超える速度で成長していた。女神は多くの人に支えられている。その言葉通り、驚異的な速さで強さを得ていた。

「成程、言うだけはある。貴様たちは先ほどの言葉通り、本当に他者から力を得ているのだな」

自身に確かな一撃を加えた黒の女神に視線を定め、マジックはそう零した。

「そうよ。あなたを倒し、この世界を護る為に私たちは力を借りて此処にいるのよ!! 私は一人じゃない。支えてくれる人たちが居るから、その想いに応えたいの」

「……下らない。所詮は一人で何も出来ぬ者達が群れただけではないか」

「確かにそうなのかもしれないわ。だけど、一人でできない事でも、仲間がいれば成し遂げられるわ!」

苛立ちを孕んだマジックの言葉に、黒の女神と紫の女神が即座に言い返す。彼女たちには確かな絆がある。支え合う、仲間たちが居た。だからこそ、マジックを追い詰める事が出来る程に強くなる事が出来たのだ。

「確かにお前は驚くほどにつえーよ。だがな、それは一人だけでの強さだ。そんな物には、直ぐに限界が来るんだよ！」

「世界を護りたいと言う願いを持つ者達全ての願いを背負う私たちが、たった一人に負ける道理が在りませんわよ」

白の女神と緑の女神が、孤独な強さを否定する。

「それを、お前達が言うのか……？ あれほどの理不尽を課しながら、誰にも理解されようとする者の事すら、否定するのか……」

それに対するマジックの感情は、ただ一つの色をしていた。それは怒りだった。ただ一人の想いで闘う者の強さでは勝てないと言う女神に対する、明確な怒りだった。マジックに向けられた言葉であるにも拘らず、その言葉を別の者に向けられているのと同じだと、紅の女神は思う。

「何を言っているの……？」

紅の女神の呟きに、黒の女神は困惑を示す。彼女には、対峙する女神たちにはマジックの言葉の意味が理解できるはずが無かった。知らなければいけない真実を知らないから。この局面に来て尚、異界の魂に守られていると言う事に気付いてすらいないから。だから、解る筈が無かった。

「貴様たちには解らんだろうな。だからこそ、許す訳には行かない!!」  
「……!？」

瞬間的に加速し、全身全霊を以てマジックは斬りかかる。かつて黒の女神が反応する事すらできなかった踏み込み。それを、かろうじてだが、死を運ぶ大鎌を凌いでいた。至近距離で紅と黒が睨み合う。シエアとシエアがぶつかり合い、唸りをあげる。

「貴様たちがどれだけの犠牲を強いたうえで、護られているのか。それすらも知りはしない。知らない事など免罪符にはなりはしない！」  
「くう……」

「貴様たちはただ差し伸べられる手に縋り、力を借りているに過ぎない。それが私の想いと同等だと言うのか……っ？ ふぎけるな!!」

それは、マジックの慟哭だった。あの冷酷なマジックが感情のままに言葉を吐き出す。怒りの激流に押しつぶされまいと、黒の女神は放たれる刃を必死に受け止める。一合一合ぶつかり合うたびに、黒の女神は、ノワールは言い知れぬ敗北感を感じていた。マジックの言葉の意味は解らなかつた。だが、心の何処かが悲鳴を上げる。解らない。解る筈が無い。その筈なのに、マジックの言葉がどうしようもなく心に突き刺さる。

「何故だ！ なぜ今更お前たちはこれだけの力を示す!! この局面に来て、なぜ我らを脅かす事が出来る!! それだけの意思の力を束ねる事が出来たのならば、なぜ最初からその力を示さなかつた!!」

「う、つあ、ぐうう……、え……？」

暴力が顕現したと思える程に激しい紅の刃をギリギリのところを受け止め続けるノワールは、不意に気付いてしまった。激しい憎悪を宿し、暴風の様な圧力を放ち続けるマジックの瞳から光るものが零れ落ちていた。

「何故、お前たちにしか力を貸さない。思いの力が強さに代わると言うのなら、何故誰一人としてあの男には手を差し伸べないのだ。この世界を救うために呼び出され、ただ不条理を押し付けられ、それでも救おうとする人間を理解する事すらせず、挙句の果てにその存在意義すら最早なく不要になったとでも言うのか!？」

その涙を拭う事無くマジックは刃を振るい続ける。拭わないのではない。自身が涙している事に、気付いてすらいないのだ。異様なまでの存在感を放ち、感情に身を任せたまま刃を振るう。

「そんな事、認める訳にはいかない。私の想いが、四条優一を救いたいと言う私にとつての初めての願いが、貴様らの想いと同等だと言うのか？ ふぎけるなよ……、そんな事……、認められるかあああ!!」

「あ——」

紅の一撃が、黒の女神の刃を打ち砕く。ノワールの持つ武器が砕け散り、紅が迫る。ノワールはただ茫然とその光景を見詰めていた。言

葉の意味は解らない。マジックの怒りの意味も解らない。だけど、自分では目の前の女神の吐露する想いに、どう足掻いても勝つ事はできないと悟ってしまった。だって、ノワールにはマジックほど自分の気持ちに正直になれないから。

黒の女神にこの一撃は防ぐ事も躲す事も出来はしない。悪意でも殺意でも無く、それは極めて純粋な想いだったから。犯罪神の為では無く、四条優一を救いたいと言う、マジック自身の願いだっただからノワールには、この感情のままに放たれた一撃から目を反らす事が出来なかつた。この一撃から逃げると言う事は、マジックに友達を奪われる事になると思つたから。

「ノワールはやらせない!!」

「訳解んねーこと言ってるじゃねーよ!!」

「私たちの事を忘れないでいただきたいですね!!」

黒の女神が引き裂かれる、その刹那、三人の女神が立ち塞がっていた。三方向からの斬撃。黒の女神しか見えていなかった紅の女神を襲う。

「がは……っ」

かつては触れる事すらできなかったその肢体を、友達を守る為に放たれた攻撃は、呆気ないほど容易に引き裂いていた。

「貫つた! 一気に決めるぜ!!」

「隙ありですわ。これで、三年前の因縁を終わらせて貰います!!」

虚を突かれ、三人の攻撃をまともにその身に受けたマジックは苦痛に呻き声を漏らす。それは、冷酷なマジックらしからぬ失態だった。その隙を見逃すほど、女神たちは愚かでは無い。かつて勝てなかつた相手を超える為、白の女神と緑の女神がその身に纏うシエアを一気に増幅させ踏み込む。

「私が繋ぐわ。ノワールが止めを」

「え……、解つたわ」

これで終わると直感したネプテューヌが呆けていたノワールに一声かける。その声に我に返り、黒の女神は紅の女神を見据えた。白と緑が紅に追いつがる。黒と紫もまた、動き出す。

「これで終わらせる!! ハードブレイク!!」

「がは……っ」

渾身の踏み込みから女神すら砕く一撃が放たれる。マジックの胴体をこれ以上無い程のタイミングで捕え、その身を砕く。

「逃がしは致しません、スパイラルブレイク!!」

「ぐうああっ!!」

吹き飛ばされるマジックをそれ以上の速度で追い抜き、緑の閃光がマジックに向かい何重にも駆け抜ける。緑の女神の神速の槍術。白の女神の一撃を受け、体勢すら整える事の出来ない紅の女神を凄まじい勢いで何度となく穿つ。マジックの口から、苦悶の声が零れていた。

「ノワール、決めなさい!! 貴女までは、私が繋ぐ」

「ええ、解ったわ」

並走するノワールにネプテューヌは告げると、手にする紫の刀身を天に掲げ、二人の女神と同じく膨大なシエアを纏った。

「ネプテューヌブレイク!!」

緑の女神によって墜とされる紅の女神に向け、紫の女神がその刃を煌めかせる。その速さは緑の女神と同じかそれ以上に神速で、地に向かう紅を紫の軌跡だけが容赦なくその身を刻む。

「ぎ、ぐ、まだだ、まだ負けられん」

「……っ!?!」

「決めなさい、ノワール!!」

全身から血を流し、既に全てのプロセスユニットを砕かれているにも拘らず、マジックはその瞳に敵意を浮かべ、女神たちを見据えた。何が在ろうとも、貴様たちにだけは負ける訳には行かない。そんな意志が感じられる。その眼光にノワールは一瞬気圧される。萎えかけた心に、親友の言葉が届いていた。怖れを吹き飛ばすように、ノワールはシエアを解放した。

「これで、終わらせる。インフィニットストラッシュュー!」

「……っ」

自分に向かい墜ちてくる紅の女神を、黒の女神は一瞬で斬り裂いて



いた。三人の女神の全身全霊で放たれた絶技によってその身を砕かれたマジックは、最早まともに言葉を出す事も出来ず、成す術も無くその身に黒の斬撃を受ける。

「さようなら、マジック」

最後の一撃。力なく墜ちるマジックに向け、ノワールは小さく言い放った。何度となく敗れた相手。その相手に漸く勝てる。それなのに、ノワールにあるのは達成感などでは無く、焦燥だった。言葉にならない不安な感覚が、マジックの慟哭を聞いた時から続いていた。それを振り払うように、最後の一撃を放つ――

——ジェネシック G・ドライブ

「つなあ!？」

事が出来なかった。最後の一撃を放つため、黒が紅に馳せ違うその刹那、黒でも紅でもない、その両方の色を持つ者が、阻んでいたから。ノワールは至近距離で立ち塞がった相手、決別して尚、ずっと会いたかった相手、異界の魂である四条優一と数瞬見つめあっていた。

「うあー!」

刃を重ね、至近距離で対峙していた。ノワールを異界の魂は無造作に蹴り飛ばし距離を取る。唐突に阻んだ闖入者に思考が停止していたノワールは、まともに蹴り飛ばされ、大きく距離を離される。

——月光聖の祈り

「これ以上は、必要ない……」

その間に全身から血を流すマジックを異界の魂は受け止める。これがあのマジックなのか。異界の魂がそう思ってしまうほど、弱弱しい紅の女神がそこにはいた。即座に癒しの魔法を施す。最早意味など無いが、気付けば使っていた。

「何故、お前が、此処にいる……」

それでもわずかに回復したマジックが、幾許かの驚きを見せながらも尋ねていた。マジックにとって、この場に四条優一が現れる事など想定していなかった。

「ブレイブが逝ったよ」

「そうか……」

マジックを抱きしめる異界の魂は、悲しげにそう呟く。それで、マジックはなぜこの男がこの場に来たのかを理解した。結局自分は異界の魂を救う事などできないと言う事も、突き付けられていた。

「そうか、我らは負けたのか」

「そうだよ。犯罪組織は負けた。この戦いは、女神の勝ちで終わりだ」  
「お前の言う通り、女神は強かった」

呟きに応える異界の魂の言葉を聞き、素直にマジックはそう思った。戦いの決着はついていて。マジックにとって勝敗はどちらでも関係なかった。此処で勝とうが負けようが、犯罪神は蘇る事に変わりはないからだ。魔剣ゲハバーンがこの世に存在している。それは既に犯罪神が蘇る段階に入っていると言う事なのだ。だから、この戦いはマジックやブレイブが、自分の為に挑んだ戦いだったのだ。主である犯罪神が蘇れば、女神など如何とでもなる。だが、主の手を借りるのではなく、自身の手で女神たちを倒し、女神によって犠牲にされた人間を助けたかったのである。

「すまなかつたな……」

「……君も謝るのか？」

不意に謝罪の言葉を零すマジックに、異界の魂は悲しげに呟いた。ブレイブが逝った時も、謝罪をされていた。今のマジックの姿は、ブレイブの死の際に酷似している。そして、マジックを救う術は無かった。異界の魂の魔力を以てしてでも、マジックに迫る死を除く事が出来ない程の傷を負っていた。

「できる事ならお前をこの手で助けたかったのだがな……」

「君たちは、どうしてそう同じ事を言うんだ……」

自身を抱き上げる異界の魂の瞳から涙が零れ落ちた時、不意にマジックは自分の感情がかつて無い程高ぶるのを感じた。何故自分はこの男を助けようとしたのか。犯罪神が蘇れば抗う事も出来ずに消される女神たちを、自らの手で終わらせようと執着したのか、その意味が漸く分かった。

「仕方が無いではないか。愛した男が女神によって殺され、もう一度死ぬ運命にある。そのような事、納得できる訳が無い。だから私はお

前を助けたかった……。助けると決めていたのに、未来を見せてやると言ったのにも拘らずこの様だ。そう言いたくもなる」

「……っ、マジック！」

静かに、だが確実にこの場にいる者達全てに聞こえるよう、マジックはそう言い放った。四条優一の瞳が見開かれる。その目がどんな言葉より雄弁に語っていた。なぜ今になってそれをばらすのだ、と。

「……えっ？」

女神達が、黒の女神が呆然と立ち竦む。マジックの言葉の意味を理解できなかったのだろう。言葉にならない言葉をあげ、異界の魂と紅の女神を見詰めている。

「……ふふ、すまないな。お前の想いは解っている。だが、それでも私は許せなかったのだ。女神が四条優一を殺したと言う事実を知らずにいる事が。全てを奪った人間に護られ、自分たちがどれ程の不条理をお前に課したのか知らないままにいる事が、例えお前の心を踏み躪る事になろうとも、私は耐えられなかった……」

「……マジック」

「……すまなかったな。お前の想いを無に帰した」

「……構わないよ。此処まで来たら、もう同じだから……」

「そうか」

四条優一の腕の中で、マジックは穏やかな笑みを浮かべた。それは、マジックらしくからぬ、優しげで嬉しそうな笑みであった。

「お前をこの手で助けてやれなかった事に悔いはあるが……、悪くは無いのものだな」

「どうして、かな？」

穏やかな表情を浮かべたまま、ゆっくりとマジックは続ける。

「お前の腕の中で逝けるのなら、私にとってこれ以上ない死に場所だ……」

「そっか」

マジックは四条優一の頬に手を伸ばし、最後の力を振り絞る。

「やはり、良いものだな」

そっと触れるだけの口付けを交わした。抵抗する事も無く受け入

れた異界の魂に、紅の女神は女神と言うに相応しい笑みを浮かべると、

「できる事なら、私はお前と共に生きてかった……」

——紅の光となり、ゲームギョウ界から消滅したのだった。

## 47話 世界を救う為に

「君たちは何度も聞いて来たね……」

「え……？」

紅の女神がその姿を紅の粒子に変え、露と消えた。その時の姿勢のまま異界の魂はしばらくの間、微動だにする事が無かったのだが、不意に口を開く。その身に纏う黒と紅のプロセツサユニット。僅かに紅の輝きが強さを増していた。異界の魂を死なせたくなかつたと言うマジックの想いが乗り移ったかのように、紅はその存在を強く煌めかせる。

「教えてあげるよ、僕が戦う理由」

「……っ」

女神たちが息を呑む。黒の女神姉妹が知りたくて止まなかつた事実。どうして異界の魂が女神から離れ、犯罪組織に加担するに至ったのか。その理由をゆつくりと語り始めた。

「僕はね、この世界の人間じゃない。元の世界に居た僕は、生きながらにして死んでいた半端者だった……」

それは、かつて異界の魂が、四条優一が遭った不幸。家族が死に、自分だけが生き残った。その自分も、自由を無くし、生きて行く糧すら見つからなかった頃の話。チキュウに居た頃の、四条優一の境遇を語る。

「日々の暮らしに何の感慨も湧かなく、だからと言って自分で死ぬほどの気概も無い。身体が死んでいないだけで心が死んでいた。そんな時だった。この世界に呼ばれたのは」

死ぬ勇気が無く、だからと言って日々の楽しみも見つからず、ただ漫然と生きていた。そんな時に用いられたのが、女神たちの使った異界の魂召喚の儀式だった。異界の魂召喚の儀。それは、チキュウと言う世界から、人間を呼び出す儀式であった。その儀式で呼び出される人間には、一つの特徴があった。すべての者がそうではないが、呼び出される人間は不満や逃避願望がある者。そう言う人間が呼び出される事が多かった。四条優一も、逃避願望を持っていた。その為、選

ばれたと言う事であった。

「この世界に来て、見えない目が見えた。動かない足が動いた。様々な人たちに出会い、元の世界では失ったけど、この世界に来た事でもう一度友達と胸を張って呼べる人達もできた。それが、嬉しかった。何よりも、嬉しかったんだ……」

「ユウ……」

異界の魂が最初に思い出すのは、目の前で表情を歪め、涙を溢れさせ掛けている黒の女神と、その妹。ノワールとユニは、一度は多くの物を失った四条優一にとって、新たにできた拠り所とも言える存在だった。女神の姉妹は助けられただけだと思っていたが、四条優一は彼女たちが思う以上に、二人の事を大事に思っていた。

「目に見える光が嬉しかった。自由に動く体が嬉しかった。僕の事を友達だと、そう言ってくれる人たちが出来て、嬉しかったんだ。好きになったんだよ、この世界が……。僕はね、この世界に呼び出され、君たちに出会った事で、もう一度生きたいと思えたんだよ」

「なら——!?!」

大切な思い出を噛みしめる様に異界の魂は言葉を紡ぐ。その表情は穏やかで、異界の魂にとって、ソレは心の底から大事な思い出であると言うのが窺えた。この場に居る女神の中で、最も異界の魂との付き合いがあるノワールが手を伸ばす。今の四条優一なら、その手を掴んでくれるかも知れないと、小さな希望を見たから。

「だけどね、それは無理だった。僕が呼び出されたのは、この世界の危機を救うためだから。この世界を救った時、僕の存在意義は無くなるんだよ」

「どういう事?..」

「世界が救われれば、その時点で僕はお払い箱って事だよ。つまりは、世界が僕の敵になる。速い話が、この世界から消され、元の世界に戻される」

しかし、差し出された手を取る事は無い。異界の魂は、自身に課せられた不条理の全てを女神に語る。その表情は変わらさず穏やかなのだが、どこか違っていた。希望から、諦念が滲みだす。それは、変え

る事などできない未来への、嘆きだった。

「でも、それは元の世界に戻されるだけなんですよ？　なら、もう一度儀式を用いれば良いんじゃないかしら？」

「異界の魂はね、本来行く世界に、元居た世界を超える過程で世界を制する能力を得る」

「それが、どうしたんだよ？」

「……お待ちください、皆さん。本来行く世界と言いましたよ。それはどう言う事なんですか？」

紫の女神の疑問に、異界の魂は淡々と語る。一見名案に思える紫の女神の提案には、決定的な欠陥があった。

「異界の魂召喚の儀式。それは、本来ゲームギョウ界に呼び出されるものじゃない。だから僕は一度世界を越え本来行くべき世界に辿り着き、もう一度世界を越えて此処にいる。その負担は、人間が耐えられるものじゃない。付け加え、僕が呼び出されたのは、ギョウカイ墓場。生きた人間が本来行く事が出来ない場所」

「つまり……どう言う事なんだよ？」

四条優一が言おうとしている事にうすうす予想が付きながらも、白の女神は促す。異界の魂は困ったように小さな笑みを一度だけ浮かべると、続きを語りだす。それは、ノワールがよく知る四条優一の笑みであった。変わったと思っていた人間が、何も変わっていないかった事に、ほんの少しだけ安堵する。

「身体にかかる負荷は人間に耐えられるものじゃなく、そもそも生きた人間が入れる場所でもなかった。それでも、女神の願いによりこの世界に呼び出された。生きた人間が入れない場所ならば、生きていなければ良い。だから、僕は魂だけが肉体から離れ、この世界に居るんだよ」

「なん……ですって？」

「身体は別の世界に在り、魂はこの世界に在る。そして、この世界を救った時、僕は自身のいるべき世界に戻される。そして、僕のいるべき世界に体は無い。もしあったとしても、二つの世界を超える負荷に耐えきれず、魂の無い身体だけが別の世界に放置された。息をできな

い身体が生きれる訳が無い。仮に元の世界では無く、自身の体に戻れたとしても、その体は既に死んでいるんだよ。だから、僕がこの世界から消える時、世界を救えば……死ぬんだ」

それが、異界の魂に課せられた不条理だった。世界を救うために呼び出され、その代償に身体を殺され、世界を救ってしまえば、最早用が無いと言わんばかり元の世界に戻し魂も殺す。それが、異界の魂にある、運命だと言えた。

「そんな……。この世界を救えば……。貴方は死ぬの？」

「そうだよ」

先ほどの安堵など、何の意味も無い。女神が女神としてこの世界を救えば、その代償に支払われるのは文字通り、何の関係も無い人間の命だった。女神や犯罪神どころの話では無い。そもそも自身が住む世界の問題ですらない事に巻き込まれ、それが終わったら抵抗すらできずに殺される。そんな事を許容できる人間など、居る筈が無い。何時もの笑みに、深すぎる諦念を浮かべ、四条優一はノワールの問いに答えた。それはどうしようもなく残酷で、救いの無い運命だった。

例え女神と言えども、異界の魂に諦めるななどと言う事は出来なかった。既に死んだ者を生き残らせる事など、誰にもできないのだから。

「だから僕は、最後の希望に縋った……」

「最後の、希望……？」

異界の魂は右手に持つ魔剣を、女神たちに見えるように掲げる。ノワールが以前見たより、遙かに強い輝きを放っていた。世界の終わりを示唆する様な、不吉な紫紺の輝きだった。女神たちは、全身が強烈な忌避感に襲われる。黒の女神以外は見るのが初めてだが、それでも何か悟った。女神としての本能が、魔剣に恐怖したのだ。

「この世界でしか生きられないなら、この世界で生きるしかない。女神の脅威を排除するのが目的なら、排除させなければ良い」

「……っ、それは」

「魔剣ゲハバーン。女神の力を、命を奉げる事で強くなる魔剣。だから僕は、この剣を手に入れたんだ」



右手に持つ紫の魔剣を女神たちに突付け、異界の魂は先ほどと変わる事の無い穏やかな口調で、対峙する四人の女神に告げた。魔剣が、その輝きを強く示す。

「死んでも良いと思っていた。だけど、君たちに出会って、もう一度生きたいと思えた。そう思ってしまったら、もう死んでも良いなんて思えなかったんだよ……」

「……っ」

女神たちは何も言い返す事が出来なかった。異界の魂はただ生きたい。その想いが在るだけなのだから。そうする事でしか生を掴む事が出来ない。本人には何の落ち度もなく、ただ殺される。それに抗うなど、異界の魂を呼び出し、その不条理を押し付ける原因になった女神たちに言える訳が無かった。

「だから僕は戦うんだよ。この世界で生きたいから、死にたく無いから、抗うんだ」

「……そんな、でも、だって!?!」

決意の籠った瞳で見据える異界の魂に、ノワールは何かを言おうと口を開くも、言葉が出る事は無かった。

「だけどね——」

異界の魂が何か言葉を紡ごうとしたとき、何の脈絡も無く世界が震撼した。そう錯覚するほど、強烈な威圧感が世界を包み込んだ。姿形は何処にも見えない筈なのに、確かにいる。それが解るほどの何かが見えようとしていた。

「な、なに!?!」

「まさか今のは」

「そうか、もうそこまで時間が無いのか……。思っていたより、ずっと早い」

女神たちは動揺するも、異界の魂は落ち着き払っていた。この場に居る中で、唯一犯罪組織に所属していた。犯罪神が復活する事を、最初から分かっていたからだだった。

「話は終わりだよ。女神達、君たちは世界を救うのだろうか?」

「それは……」

異界の魂の問いに、誰一人として答えられなかった。救えば目の前にいる犠牲者は、文字通り犠牲となる。その事を知ってしまった女神たちは、安易に答える事などできなかつた。

「今更、悩む事など無い。君たちは世界を救うために、異界の魂を呼び出した。どんな手段だったとしても護りたかつたから、縋つた。ならば、最後までその想いを貫いて見せろ。君たちの想いを示してくれ」  
「だけど……」

異界の魂が魔剣を突付け選択を迫る。

「犯罪神を倒さなければ、この世界に住むすべての人々が死に絶える。君たちはそれで良いのか？ それを、女神だと言えるのか？」

「そんな訳無い！ この世界に生きている皆を護りたい。だけど、それと同じくらい、貴方も護りたいのよ!!」

黒の女神が、瞳に涙を浮かべながら叫ぶ。それは相容れない願いだった。世界を救えば異界の魂は死に、異界の魂を救おうとすれば、世界が滅びる運命にある。

「それが出来ないことぐらい、解っているだろう？」

「それでも私は……!」

「君たちはこの世界を救いたいから僕に縋つたのだろう。ならば、その責任は果たせ」

「だけど……それじゃあ貴方が」

「逃げるな、ノワール。僕はもう死んでいる。その事実は動かす事が出来ない。そして僕を殺したのは君たちだ。だったら、何が何でも世界を救うんだ。死人ではなく、今を生きる人たちにその想いを向けろ」

「うああ……、ああああああ!!」

だから異界の魂は、ただ一人選択できないであろう黒の女神に現実を突きつけた。慟哭が上がる。大事な人を護れない事に、ノワールは嘆きの叫びをあげる。

「もう一度聞くよ。君は何者だ？」

「……女神、よ」

「女神なら、この滅びに迫つた世界をどうする？」

「……絶対に救うわ……。それが、私の責任だから……」

もう一度異界の魂が尋ねた時、黒の女神は泣きながらそう応えた。その姿を見た異界の魂は、小さく笑う。何度も手を差し伸べさせられた、困った女神であった。それが少しだけ愛おしい。願うならばもう少し彼女たちと共にいたかったと思う。

「ならば示してくれ。この世界を護りたいと言う女神の想いを。今を生きる君たちの、願いを」

そう言い、異界の魂は魔剣を構えた。右手の魔剣が輝きを増し、左手に持つ紅の剣がそれに反発する様に光を放つ。

「例え貴方が相手だったとしても、貴方を倒して世界を救う。それが貴方を殺した、私たちのすべき事なの」

「そうか……。だけど、ただではやられてあげない。それが僕を殺した君への罰だ」

「……っ!？」

「それにね、僕は君に負けるのなら、諦める事が出来る。世界を壊す事でしか自分は生きられない。死にたくないから世界を壊す。だけど、それを君に止められるのなら、諦める事が出来るから」

「解った、わ……」

黒の女神は涙を零す。今この場に来て、漸くマジックの言葉の意味を理解出来たから。数えきれないほど助けて貰い、手を差し伸べて貰っていた。それに対してノワールが成せたことは、四条優一を異界の魂と呼び出し、殺したと言う事実だけであった。それを解つていながら、異界の魂はそれでも女神たちを助け続けていたのである。そしてその事に気付きもしない女神たちに向け、マジックは本気で激昂していた。その怒りも当然のものだと、ノワールは思ってしまった。私はどれだけ馬鹿だったんだと、心の中で涙を流す。

「ユウ、貴方を倒して犯罪神も倒し、世界を救うわ」

「やれるの、ノワール？」

「やらなきゃ……いけないの」

「一人で無理すんじゃないよ。私たちもいる、全力で行くぞ」

「全くですわ。ノワールは自分一人で抱え込み過ぎです。これはいわ

ばわたくしたち全員の罪。ならば、皆で贖いましょう」  
「皆……、ありがとう」

三人の女神が黒の女神が立てるように手を差し伸べる。その手をしっかりと取ったノワールは、異界の魂を、四条優一を確りと見据えた。

「君たちの全力で来ると良い。その思いが足りなかった時は、僕は君たちを倒すよ」

「ええ、大丈夫よ」

その瞳を確りと見返し、優一はノワールにそう告げる。黒の女神が頷いた瞬間、黒と紅のプロセツサユニットを起動させ、女神たちに襲い掛かった。

「どうして、他者に縋った?」

「……っ! どうしてもこの世界を護りたかった!!」

白の女神に肉薄し、異界の魂は問いかける。

「どうして、自分たちだけで挑まなかった?」

「……っ! 私たちが弱かったからですわ!!」

緑の女神に肉薄し、異界の魂は問いかける。

「どうして、僕を殺した?」

「……っ! 私たちが無知で、愚かだったからよ!!」

紫の女神に肉薄し、異界の魂は問いかける。

「どうして僕に、光を見せた?」

「……っ! 私たちが……、ううん、私が貴方に惹かれたからよ!!」

黒の女神に肉薄し、異界の魂は問いかける。

異界の魂と言う力に縋った女神たちに対する問いかけ。それは罪に対する罰であり、同時に純粋な疑問でもあった。その全てを聞いた時、四条優一は刃を止めた。意思を見せる。そう言う意味であった。

「皆、やるわよ」

「……何時でも大丈夫」

「いきますわよ」

「ええ。これで終わりにしましょう」

四人の女神は異界の魂を取り囲み、その身に纏うシエアを極限ま

で、互いのシエアを共鳴させる。辺りに信仰の、人々の祈りの力が充満する。それは、確かにこの世界を護りたいと言う、女神の願いだった。四条優一は笑みを浮かべた。そして、その高まりが限界を越える。そして異界の魂を取り囲むようにその力を解き放った。

『ガーディアンフオース!!』

「だめえええええええ!!」

四人の女神の放つ最高の大技。それが炸裂する刹那、叫び声が響いた。黒の女神の妹の、ユニの叫びが響き渡る。それでも、放たれた技が止まる事は無い。そして、異界の魂は舞い上がった爆炎と砂塵に飲み込まれるのだった。

## 48話 救世の悲壮

「そんな……」

女神たちの攻撃が異界の魂に降り注ぎ、辺り一帯を光の奔流が襲っていた。それを止める事が出来なかつたユニは、その場に膝をつき呆然とその光景を見詰めている。ポロポロとその瞳から涙が零れ落ちた。自分たちが何をしてしまったのか、それを知ってしまったから。

「ユニ!？」

「お姉ちゃん……」

そんな妹の様子に不穏なモノを感じつたノワールは、間髪入れずに舞い降りる。

「あなた、無事だったの？」

「うん。ユウに斬られたけど、怪我一つないよ……。斬られたのは覚えているのに、何ともないの。それより、如何してユウを攻撃しちゃったの……?」

「……」

駆け寄るノワールに、ユニは問いかける。ノワールの表情がびくりと震えた。

「この世界を護る為よ……。私達がユウを呼び出し、殺した。私たちは、何の関係も無い人を犠牲にしてしまっているの……。だから、絶対に護らなきゃいけないの。その覚悟を見せなきゃいけなかつた。そうしないと、ユウが世界を壊す事を望んでしまうと言うから……。だから私は……」

それでも妹を見詰め、気丈に意思を示す。黒の女神は悲しみに暮れながらも自分の成すべき事を成していた。

「違うよ、お姉ちゃん。それは違うの……。アイツは、最初からそんな事を考えてなんかいなかったの……」

そんな姉の言葉を、妹は涙を零しながら否定する。知ってしまった。黒の女神の妹は、異界の魂が本当に成そうとしている事を知ってしまった。

「ユニ、あなた何を言って……」

ノワールは、ユニが何を言っているのか理解できず、ただ問い返す事しかできない。

「下っ端たちが教えてくれたの……」

女神の妹達が異界の魂に斬り伏され、意識を失っている間にリンダとワレチューに拘束されていた。それは女神に対する人質。四条優一を、女神が全力を以て倒せるようにするための人質の筈だった。マジックが全てを暴露する事によって、その計画が崩れた為、彼女たちには価値が無くなったが、本来はそう言う風に用いる為に捕えられていたのだ。そしてマジックが死んだ時、下っ端とワレチューもまた、異界の魂が本当に成そうとしている事を理解した。だから、人質として捕えた者達を解放し、異界の魂を止める事を選んだ。

「ユウの目的は、世界を壊す事なんかじゃないの……」

「知ってるわよ……。あの人の目的は一つ。ただ、生きたいと言う、生きていくモノならば何だっと思うありふれた願い。だけど、だからこそ誰もが渴望する願いでもあるの……」

「違うんだよ、お姉ちゃん。ユウは、最初から自分が生きるなんて事、考えていなかったの……。自分を諦めたうえで、別の事をしようとしていたの……」

「どう言う、事よ……」

私たちは思い違いをしていたの。ユニはそう呟く。考えてみれば、解る事だった。あの四条優一が、馬鹿正直に本心を語る訳が無い。優しすぎるから。そして、自分を殺す事が出来るから。その事を知っていた筈なのに、女神の姉妹はその事実気付く事が出来なかったのだ。

「ユウはね、シエアを集めていたの。私たち女神が持つ、人々の祈りの力。それを、集めていたの」

「なんで、そんなものを？」

「護る為だよ。アタシやお姉ちゃん、皆がいるこの世界を……」

「そんな……だって、あの人はこの世界を許す事なんてできないって……」

「それでも！ ユウはこの世界を壊す気なんてなかった。だって、本

気でそんな事をしようとしているなら、とつくにユウはこの世界から消されている筈だから」

それは異界の魂に、四条優一に課せられた誓約。女神の脅威を排除する為に呼ばれていた。つまりは、世界の脅威を排除するのが四条優一の役割である。それがこの世界での存在意義だった。そんな異界の魂が、世界を壊す事を本気で望んだとしよう。それを成す力もある。そんな存在を、世界が許すはずがない。ましてや、今の女神は世界を救える可能性の片鱗を見せていた。ならば、異界の魂に固執する理由は無いのだ。世界から異界の魂を消す事など、難しい問題では無い。本来いないものが、元の場所に戻るだけなのだから。

「じゃあ、ずっと私たちは、あの人に騙されていたの？」

「そう……だよ。アイツは、本当に大事な事は誰にも相談なんてしてくれないの。全部、自分一人で決めちゃうの」

「それじゃあ、私たちが倒そうとしていたのは」

「世界を救うための犠牲になろうとしていた、大事な友達」

「嘘、嘘よ……」

ノワールはユニの言葉を聞きたくないと言わんばかりに、頭を振るう。信じたくなかったのだ。世界を護るために、そうしないと世界を壊すと言う異界の魂を倒す覚悟を決めた。その相手が、最初から世界を壊す気が無いと言う事は、あつてはいけない事だった。

「間に、合わなかったの？」

「そのようですね……。結局最後の最期まで四条さんを犠牲にし続けてしまいました。許してくれなんて言う資格はありませんね……。ですが、悲しいんでいる訳には行きません。最後の敵が、まだ残っています。犯罪神と言う、全ての元凶が……」

崩れ落ちる黒の女神に寄り添う妹を見て、アイエフに支えられたネプギアは悲しげに零した。共に捕えられていたイストワールとアイエフもまた解放されていた。異界の魂と言う本来は部外者以外の幹部をすべて倒された犯罪組織に、彼女たちを捕える意味が無かったから。

「犯罪神……」



「それを倒すために、ユウはシエアを集めていたの。そうじゃないと、犯罪神には勝てないから。アタシたちを斬ればそれでシエアは集まるのに、アタシたちに全力で攻撃させてそれを魔剣に喰らわせることで少しづつシエアを集めるっていう周りくどい方法を選んだの……。それはきつと、アタシ達を守る為……」

異界の魂の目的は、犯罪神を倒すためにシエアを集める事だった。女神が世界を護る為に願った力、それが魔剣を強くするには必要だった。それを喰らわせることで、魔剣の力を増す。異界の魂はそれを成そうとしていた。例え自身がどう思われようと、大切な者達を救いたい。既に死んでいる異界の魂には、もうそれ位しか、成したい事が無かったのだ。

「それじゃあ……」

やがて、巻き上がっていた砂塵が収まり、視界が開ける。光の奔流を受けたその場は、あるモノを除いて、全ての物が消滅していた。その場にあるのは、たった一つ。シエアを喰らう魔剣。ゲハバーンだけが存在していた。世界を護るために放たれた一撃。シエアを喰らう魔剣を除き、全ての物を消し去っていた。今生の魔剣の持ち主であり、先程まで対峙していた異界の魂すらも。

「あ、ああ……」

異界の魂は世界を護る意思を示せと告げていた。そして、たとえばんな相手だろうと倒し進むと言う覚悟を女神は示していた。そして、世界を守る為に背中を押してくれた弱き人間を、自らの手で消し飛ばしてしまった。最後の最期までただ護ろうと真意を隠し続けた友達を、殺してしまった。

「此処が……、絶望の始まりか……」

黒の女神が耐えきれず心を折ってしまった時、それは不意に現れた。それは、禍々しき邪神。どす黒い負の感情を撒き散らし、魔物とも悪魔とも言えるおぞましい巨軀に、獣の胴体を持つ異形の神の姿だった。破壊神であり、邪神であると思えない風貌に加え、次元を引き裂き現れたとしか思えないほど、唐突に表れる姿は、絶望を刻む破壊神と呼ぶにふさわしい。四天王が全て死に、魂が犯罪神の下に

帰ったことで蘇った犯罪神が、砕くべき女神の絶望に引き寄せられ、女神たちと速すぎる邂逅を果たしてしまっていた。異界の魂が女神を、この世界を救うために行つて来た事の代償が、犯罪神の早すぎる来訪に繋がってしまった。犯罪神は絶望を喰らいその力を増す。女神の絶望は、何物にもかえ難き、糧と言う事だったのだ。

「これが、犯罪神……」

「怖いよお姉ちゃん」

唐突過ぎる犯罪神の出現に、紫の女神が啞然とした様子で破壊神を見詰めた。何なのだこの敵は。皆の力があつたからとはいえ、犯罪組織の幹部を倒し、異界の魂に覚悟を示した女神である彼女を以てしてもそう思ってしまうほど圧倒的なまでの負の存在だった。妹のネプギアが姉の傍に駆け寄り、怯えたように震えるが、姉であるネプテューヌには、彼女を勇気づけるだけの余裕が無かった。ネプギアだけでは無く、ネプテューヌすらも本質的な恐怖を感じていたから。

「なんなの……アレ……」

「怖いよ……」

「ロム、ラム!! 絶対に私から離れるなよ!」

ネプギア共にこの場に到着していた白の女神の双子の妹もまた、目の前に存在する破壊神に恐怖する。姉である白の女神の背中に隠れるも、その背中もまた震えていた。自分を叱咤する様に白の女神が言い聞かせるが、震えが消える事は無い。

「何ともまあ……、規格外な相手が現れたものですわね……」

緑の女神もまた、槍を構えるがその肩は小さく震えていた。相手は何度となくゲームギョウ界を滅亡に追いやりうとした破壊神である。女神としての本能が、目の前の敵を恐れていた。

「お姉ちゃん、立って!」

「あれが、犯罪神」

そして黒の女神が妹に立たされ犯罪神を見据えた。ユニとノワールもまた、他の女神同様、終わる事が無い女神と犯罪神の争いの連鎖で刻まれた本能に抗う事が出来ず震える。辺りを包む不気味な気配。死を連想させる。女神は対峙するだけで解ってしまった。こんな化

け物に勝てるはずがない、と。

「それでも、やらなきゃいけないの。あの人が、背中を押してくれたから!!」

「お姉ちゃん!」

「やるわよ、ユニ。勝てないとしても、私たちは戦わなきゃいけないの」

「解ってる。ユウはこの世界を護ろうとしてくれた。その想いを、アタシ達が繋ぐ!」

それでも黒の女神は震える体に強く力を入れ、黒き大剣を構えた。勝てるなんて思えない。だけど、異界の魂はたった一人で、女神や犯罪組織に板挟みにされ、それでも世界を救うと言う想いを見せてくれた。辛くなかった訳が無い。悲しくなかつた訳が無い。恨まなかつた訳が無い! それでも、異界の魂は、四条優一はこの世界が好きだと言い、命を賭けてくれたのだ。その想いを知ってしまったノワールは、たとえ勝てないとしても、最後の最期まで足掻かなければいけないのだ。それが異界の魂との約束だから。

「あら、一人で行くなんて水臭いわね」

「そうですよ。正直言う怖いけど……、私たちも戦うよ。私だって、この世界を護りたいって、そう思っているんだから」

黒の女神姉妹が悲壮な決意を固め前に出ようとしたとき、紫の女神姉妹が名乗りを上げる。

「此処で逃げたとしても、いつかどこかで戦わなきゃいけない。なら、復活したての今なら逆にチャンスかもしれないねえ」

「お姉ちゃん、アレと戦うの……? なら、私も戦うよ……」

「逃げて、駄目なんだよね。なら私もお姉ちゃんと立ち向かうわ。怖いけど、ロムちゃんとお姉ちゃんが一緒なら、絶対サイキョーなんだから!」

「ならば、まさか私だけ仲間はずれにはいたしませんわよね」

白の女神姉妹も覚悟を決め、緑の女神も戦う意思を示した。

「今生の女神達か。貴様たちは、どれだけの時が経とうと、我の邪魔をするのだな。我が存在意義は全ての絶望であり滅亡。力無き女神達

よ、世界を滅ぼす前に……、貴様たちを終わらせてやろう」

犯罪神の力が全身から吹き上がる。絶望の根源。全てを潰えさせる、終焉の力。全てのを壊し尽くす神と、世界を守る為に悲しみを乗り越えてきた女神の戦いが始まった

「プラネティックデীব」

「N・G・P」

「ノーザンクロス」

「アブソリュートゼロ」

女神の妹達が、その身に宿るシエアを最大限に引き出し、世界を守る為の力を解き放つ。黒き巨砲が、白き銃剣が、交差する光が、全てを凍らせる絶対零度が、犯罪神を倒し、世界を救うために放たれる。

「インフィニットスラッシュ」

「ネプテューンブレイク」

「ハードブレイク」

「スパイラルブレイク」

妹達の攻撃に負ける訳にはいかない。今生の女神である四人は、妹達の攻撃を受け、凄まじいシエアに包まれる犯罪神に向け、肉薄する。黒の女神が、紫の女神が、白の女神が、緑の女神が犯罪神を倒すため、世界を救う為、異界の魂の想いに応えるために、全身全霊でその刃を重ねる。

「この程度か……?」

それでも犯罪神には届かない。8人の女神によって放たれた渾身の一撃でさえ、犯罪神の肉体の一部を壊す事さえ敵わない。女神が弱いのではない。犯罪神が強すぎるのである。何人もの女神が、その命を奉げて倒してきた破壊神だった。一人一人の全力では、犯罪神を傷つける事さえ叶う事は無かった。自身を傷つける事すらできない女神を見詰め、犯罪神は期待外れだと言わんばかりに零す。文字通り、

痛くも痒くもなかった。

「まだよ！ やるわよ、皆！」

「絶対に、負けられないの！」

それでも女神たちは諦める事が出来なかった。できる訳が無かった。目の前に居るのは世界を滅ぼす敵であり、自分たちは世界を護る女神なのだから。4人の妹と4人の姉は、その力を合わせ、犯罪神に向かいその力を解き放つ。

『スペリオルアンジェラス!!』

『ガーディアンフォース!!』

それは女神たちが異界の魂に向け、この世界を護りたいと言う意思を込めて放った大技だった。この世界が大好きで、この世界を護りたい。護らなければいけないんだ!! そんな女神たちの心の底から出る切なる願い。その全てが込められた一撃が炸裂する。祈りの力が犯罪神を包む込み、この世界に仇名すものを排除する為、集いし力は奔流となり、犯罪神を倒すためにその威を振るう。

「貴様たちの力は、本当にこの程度なのか……？ 弱い、弱すぎる……。これではまだ、過去の女神たちの方が、幾らかマシではあった……」

その一撃ですら、犯罪神を倒す事は愚か、まともに傷つける事すらできなかった。

「そんな……」

ゆっくりと視線を動かし、女神たちを見据える犯罪神に、女神たちは絶望の声を上げる。全身全霊の攻撃でさえ、何一つと言って良い程、効果を出す事が出来なかった。他者に継り、犠牲にして此処まで辿り着いたにも拘らず、この世界を救う事が出来ると思えない。女神は、対峙する犯罪神の強さに、かつて感じた事が無い程の怖れを感じた。

「もう良い、貴様たちの命……破壊に導いてやろう」

恐怖に震える女神たちを詰まらなそうに見据えると、犯罪神はその身に宿った負の力を全身からまき散らし、それを女神たちに向け解き放った。犯罪神を取り囲んでいた女神たちの視界が紅に染まる。女

神たちの用いる祈りのシェアとは正反対の能力の終息を感じた。瞬間、

「そんな……」

「うあ……」

「くそ、があ……」

「化け、物……」

「お姉ちゃん、ネプギア……」

「まだ、何もしていないのに……」

「痛いよ……」

「こんなのって、無いよ……」

8人の女神が戦闘不能に追い込まれていた。ただ一撃。煩わしいと感じた犯罪神が、自身の持つ力を解き放つただけで、女神たちはその余波により、成す術も無く倒されたのだった。

「こんなの……勝てる訳が無いっ」

吹き飛ばされたノワールは、弱弱しく零していた。彼我の戦力が違い過ぎているのだ。マジックを倒す事が出来た、それで強くなつた気でいた。だが、自分たちが敵対する相手は、尋常では無い力を秘めた相手だったと言う事だった。

全ての女神が地に伏し、強すぎる犯罪神の力に戦意を失いかけていた。その時、ノワールは一つの剣を見つけた。

「これが、魔剣ゲハバーン。この剣なら……」

それは、異界の魂が最期の戦いに携えていた剣。救世と悲壮の剣。古の女神達が、犯罪神が蘇るたびに命を奉げ、その力を増す事で犯罪神を撃退し続けてきた魔剣だった。この剣は女神のシェアを喰らう事で、際限なく強くなる。そんな剣だった。異界の魂は、この剣にシェアを少しずつ喰らわせる事で、魔剣の力を増し、犯罪神に打ち勝つ力を得ようとした。その過程で四条優一が耐え切れずにこの世界から消滅してしまったが、それでも、剣に込められたシェアは膨大な

ものとなっていた。この剣を使えば……。そう考え、ノワールは魔剣を手に取っていた。柄を握り締めた瞬間、言い知れぬ不快な感覚が全身を駆け巡る。思わず取りこぼしそうになる。直感的に感じてしまった。これは絶対に呼び覚ましてはいけない力だったと……。

「あ……、そっか、お姉ちゃん。まだ、魔剣が在ったよね……。ユウが残してくれた、想いの剣が……」

剣から手を放そうとしたときに、ノワールはユニと目が合ってしまった。ユニの目が驚きに染まり、数瞬考えるような素振りを見せ、やがて決意が固まったようにノワールを見据えた。背筋に嫌な感覚が奔る。妹の瞳に映る覚悟の色は、どこかで見た事があるモノだった。

「ユニ……」

「剣を使うのは、お姉ちゃんが良いよ。アタシの大好きな、憧れだったお姉ちゃん……」

「な、何を言っているの？」

ぼんやりと魔剣を見詰め、ユニがゆつくりとノワールに向かい近付いてくる。瞳には、悲壮な覚悟の色が宿っている。それは、四条優一が浮かべていた諦念に、どこか似ていた。命を無くす事への肯定。諦めの、嘆きの色だと言えた。怖かった。妹が考えている事が、自分の思っている事と同じだったとしたら……。そう考えた時、ノワールがユニから一步後退した。

「ごめんね……。お姉ちゃん。ごめんね……。アタシはこの世界を護りたい……。だけど、こうするしか、方法が見つからなかった……。ごめんね、ユウと一緒に、先に待っているから……」

「や、やめなさい!!」

姉が一步下がったのを見て、妹は覚悟を決める。そして、涙を零しながら魔剣に向かい一直線に駆け、その身を刀身に晒した。

「あ、ああ……っ」

「あ、ぐう……」

ノワールの手に、肉を斬り裂く嫌な感触が広がる。目の前に広がる光景を、呆然と見つめていた。泣き笑いを浮かべた妹が、口から血を

零し、魔剣に突き刺さっていた。

「ぐ……ぐ……あ……。ぐ、めんね、おね、え、ちゃん……」

「ああ、ああああ……。ああああああああ!!」

かはつと口から血を零し、ユニは最愛の姉に悲しげな笑みを浮かべごめんねと、謝罪を告げる。魔剣に命を奉げる。その方法しか、世界を救う方法が思いつかなかった。そして、恐らくそれ以外の方法は無い。既に犯罪神は蘇り、目の前に存在していた。自分たち女神が破れば、犯罪神に対抗できるものは無く。だからといって、この場を斬り抜ける方法も存在しなかった。その為、この場で犯罪神を倒すしかない。そしてそれが出来るのは、目の前にある魔剣だけだったと言う事だった。妹が殆ど一瞬と言って良い間に導き出した答えにノワールも至り、自分が魔剣を手にしてしまった事その原因である事に気づき、再び絶望が襲った。黒の女神の慟哭が、辺りに響き渡る。そしてその叫びが潰える前に、ユニの体は光となり、魔剣にのみ込まれた。「ユニちゃん……」

「泣いてはダメよ、ネプギア。あれしかもう、方法は無いの」

「っ……。解ってるよ、お姉ちゃん」

嘆きの声を上げるノワールを静かに見据え、紫の女神は静かに妹を諭した。親友の決意を見たネプギアは、その瞳に大粒の涙を浮かべるが、自らの手で拭うを、姉であるネプテューヌと手を繋ぎ、ノワールの前に立った。

「ネプ、テューヌ?」

「ごめんなさい、ノワール」

そしてノワールの手を掴み、自分と妹の首元に魔剣を振るわせた。鮮血が黒の女神に降り注ぐ。そのまま、小さく何かを呟くが、それが声となる事は無く、血に向かい崩れ落ちる。やがて地に広がる血が大地に染み込み始めたところで、紫の姉妹もその姿を光に変え、消滅する。

「ネプテューヌ、ギアちゃん……。貴方たちの思い、確かに見届けました。立ちなさい、ノワール!!」

「ベール……」



紫の女神姉妹が消えると所を見詰めていた緑の女神が、鋭く黒の女神の名を呼ぶ。ノワールは、今おき続けている事が事態が上手く呑み込めなかった。なぜ、妹達は消えているのか。どうして魔剣を握っているのは自分なのか。それが理解できない。したくなかった。

「私を殺しなさい。あなたの意思で！ 今、此処で!!」

「そんな……、い、いやよ!!」

「魔剣を選んだのは、あなたです！ ならばその覚悟を、今此処で決めなさい!! あなたが世界を救う。そう、思い定めなさい!! それが魔剣を手にした、あなたの責任です」

この時、この状況でノワールが魔剣を手に来たのは、偶然で片付ける事が出来なかった。理由は無い。だけど、今この状況で、ノワールの手に魔剣が在る。それはもう、この極限状態に置いては、魔剣の力を使う以外に考えられないと言う事だった。

「……、う、わああああ!!」

「それで、良いですわ。あとは、お任せします」

どうしてこんな事になったの？ ノワールの頭にあるのはそんな想いだった。自分はただ守りたかっただけなのに、最愛の妹を、大事な友達を手を掛けている。その事実には、ノワールは涙する。だけど、もう止める事は出来なかった。既に半分の女神が、その命を奉げている。それは、誤魔化す事の出来ない事実だった。

「ネプギアちゃん、ユニちゃん……、ふええ……」

「お姉ちゃん……私たちも、死ななきゃいけないの?」

「ロム、ラム。ごめんな……。私はお前たちを護ってやれそうにない……。だからせめて、お前たちが逝くまで、抱きしめてやるから……」

既に白の女神姉妹も覚悟を決めていた。泣きじゃくる妹達を、姉は強く抱きしめ黒の女神を見据える。その目には悲壮な決意が宿っている。救世の為の悲壮。それを受け入れた瞳だった。

「妹達に殺しはさせたくない。だけど私も妹を殺したくない。だから、頼む……」

「……うあ、う、ん」

最早、ノワールは何も考える事が出来なかった。早く、一刻も早くこの馬鹿げた悲劇を終わらして、楽になりたかった。瞳から冷たいものが流れ落ちる。それが何なのか、解らない。

「うあ……死にたく、ないよ……」

「ぎ、が……、お姉ちゃ……ラムちゃ……」

「っ!? ああああああ!! あぎぐ……、ご、めんな……、辛いやく、おし……」

三人の女神を切っていた。黒の女神のその瞳から、理性の色が消えた。考えるのは、たった一つの事だった。もう、こんな事は沢山だ。全部、終わりにしたい。暗い瞳が、犯罪神を睨みつける。

「魔剣か。いつの時代も、我の邪魔をする……。だが、最早我が居なくとも未来は決まったようだ……」

「御託は良いわ……」

黒の女神を見詰めているだけだった犯罪神は、この世界の行く末を確信した。

「一緒に、逝きましょう……」

「良いだろう。こい、女神」

だから、犯罪神は魔剣を持つ黒の女神がしようと思っっている事が解ってしまったから、ただその身で刃を受け入れていた。深々と紫色の刃が、犯罪神を倒すため、その力を使っていた。

「これで、満足したか……女神よ?」

犯罪神の仮初の体が、ゆっくりと崩れ落ちる。犯罪神の本体は思念体であるため、肉体は殺せても、本当の意味で殺す事は出来なかった。それでも、犯罪神の肉体を殺す事はできていた。ならば、今のノワールにとって、それは大した問題では無かった。一刻も早く終わらせたい、考えるのはそれだけであった。

「ごめんね……、皆……」

そして魔剣を自身の胸に突き立てる。身体を貫く鋭い痛みが走り、ノワールの視界を真っ赤に染め上げる。それでも、漸く終わる事が出来る。そう考えると、自分が殺した人たちにもう一度会えるかもしれないと言う希望が浮かぶ。身体の奥底から、冷たいものがこみ上げて

来る。きつとみんなが自分を呼んでいるんだ。そう思ったノワールは、自身の血に体を濡らしながらも、微笑みを浮かべて逝くのだった。

それが、この魔剣がこのまま行けば辿る運命だった。女神の全身全霊の一撃を受け、示された想いを受け止めながら、魔剣の辿る未来の軌跡を手繰り寄せる。それは救世の為に捧げる悲壮だった。僕は、そんな悲劇を二度と繰り返さないために力を求めた。未来を掴む可能性。それは魔剣ゲハバーンを手に入れた時、完全に潰えてしまっていた。剣の力では自分を救う事などできない事が、解ってしまったから。だから、この世界を救い、あの子たちを救い、未来を変える事だけを求めた。

これから魔剣の辿る未来を見た時、言い知れぬ痛みを感じた。全てが終わってしまったような喪失感。ユニ君が死に、他の女神が命を奉げ、ノワールが自殺をした時に感じた。特に黒の女神姉妹の命が潰えた時、例えそれがまだ起っていないとしても、耐えきれなかった。これから起きるであろう映像を見ただけで、そうだった。実際に起きてしまえば、僕はどうなってしまうのだろうか。そこまで考えて、やめた。それを起こさせないために、僕は力を求めたのだから。剣の極地に、辿り着いたのだから。

「これが、魔剣ゲハバーン。この剣なら……」

僕の傍に突き刺さった魔剣を手にしたノワールが、先ほど見た未来と同じ言葉を口にする。この後が、悲劇の起きる時だった。だから、最期の力を振り絞る。それが、僕がこの世界に呼ばれた理由だから。ううん、それが僕の成すべき事だから！

「駄目だよ、ノワール。それじゃ、駄目だよ。その剣では、何も救えない」

救世の為に生まれる悲壮。その悲しみの連鎖は、終わらせなければいけない。そして僕にはそれを成す力がある。だから此処で終わら

せよう。それが僕の、求めた未来なのだから。

## 最終話 異界の魂

「ユウ、貴方、なんで……」

「ノワール、良く聞いて。今の魔剣では、何も救えない。道を誤ったこの剣では、世界を救うなんてこと、できはしない」

死力を振り絞り、ノワールの隣に立ち上がり、声を掛ける。一時的に存在が希薄になっていた。剣の極地。女神の示した意思を受け止めながら、魔剣の全てを読み取っていた。それは最早、世界を制するほどの力を持つ異界の魂と言えども、耐えきれぬものでは無かった。本来解るはずの無い未来を読み取る力。神の領域と言える到達点に辿り着いた力だった。僕の与えられた力を十全に使いつつ、世界を救うと言う意思を示す女神たちの攻撃に、魔剣の力を増すために晒し続けていた。今を生きる女神たちと、過去を生きその命を奉げ続けた女神たちの想いを、今も尚連綿と続いている悲愴であり悲壮な決意を読み取り続けていた。内からの衝動と、外からの破壊。その二つを受け止めきれず、自身を構成する事すら困難であったため、直ぐ傍に在りながら女神たちには認識できていなかったと言う訳であった。彼女から見れば突如現れた様に見えるのだろう。驚きと困惑と、それ以上の喜びに満ちた声に応える事はせず、ただ右手を伸ばした。

「でも、これは……」  
「今の魔剣では、無理なんだよ。世界を救うどころか、君たちすら救えない」

洩るノワールを諭すために言葉を紡ぐ。それは、僕がいたった極地によって垣間見た未来。限りなく近い未来、今生の女神たちが命を失う結末だった。声が震える。女神たちが次々と自分の命を奉げ剣を強くしていた。その過程で、目の前にいる黒の女神の心は壊れ、犯罪神を壊した後には自死を選んだ。そんな瞬間を、二度もみたいなどは思わない。思う筈が無い。

「お姉ちゃん、魔剣を、ユウに渡してあげて」

「ユ二君」

潰えていく命を思い返すだけで、狂おしい程の衝動が駆け抜ける。

それを、自身の内の中に抑え込んだ。その結末は、彼女たちが知る必要の無いものだから。それは、僕一人だけが知っていけば良い可能性。それを知っているからこそ、覚悟を決められたから。未来を変えると誓い、ノワールを見詰めた。ノワールが少し気圧される。不意に、ユニ君の声が聞こえた。

「でも、ユニ。これは魔剣なの……。女神のシエアを喰らい強くなる剣。なら女神が直接使えば」

「それで勝てるなら、歴代の女神が勝って居る筈だよ。今までの使い方じゃきつと、犯罪神には勝てないよ。だから、信じよう。アタシ達の友達を、アタシ達が信じてあげなきゃいけないの」

「……そうよね。ユウは、何時だって優しかった。私たちが知らなかったとはいえ、許せるはずの無い程の酷い事をしてしまったのに、ずっと守ってくれてた……。ずっと、傍に居てくれてた……。そんな人を、信じてあげられないで……。どうするのよ」

ユニ君の言葉を聞いたノワールがその瞳から涙を零しながら僕を見詰めた。結局、また泣かせてしまっている。その事に、ちくりと胸に痛みが走る。それを、無視した。

「ありがとう、二人とも」

黒の女神姉妹から託されたゲハバーンを両手で握り、犯罪神を見据えた。化け物としか言い様の無い巨軀と、獣の姿をした胴体。破壊神。目の前に存在する異形の神。僕のいるこの世界を破壊し、滅亡へと追い込もうとする存在。かつて、数多の命を奪い、命が紡ぐ筈だった歴史を壊し続けてきた絶対的破壊者。今この時まで連綿と連なる、救世と言う名の悲劇の連鎖が作られる原因となった存在だった。

「お前が我と戦うと言うのか？　女神では無い唯の人間。神ですらないものが、我に勝てるだけでも言うのか？」

「僕では勝てないだろうね。だから、僕は紡ぐんだよ」

「紡ぐ……だと？」

「ああ、あなたがこれまで壊してきた数多の命。育むはずだった希望。それを潰えさせざる得なかった女神たちと、魔剣の製作者たちを代表とした、過ぎ去った時を生きた人たちの想い。その全てを紡ぐ」

犯罪神を見据える。手にするは、かつてこの世界を生きた数多の存在たちの想いの宿った剣。生きる事を渴望しながら、死を肯定せざる得なかった女神たちが居た。その女神を救うために命を賭けた男がいた。生と死を繰り返し、幾度となく蘇る犯罪神の脅威から世界を守る為、犠牲になつた数多の命があつた。その全ての遺志を、世界を護りたいと言う想いを読み取り、自身の手にする魔剣の中で再現し、死した者達の想いを掬い上げる。

「死は全てのモノに等しく訪れる。例えそれが女神と言う存在だったとしてもな。我に滅ぼされるのは、早いか遅いかの違いに過ぎない。何故それが解らない？」

「その言葉、そのまま返させて貰うよ。なぜあなたは滅ぼす。ただ生きたいと言うこの世界に生きる者達の想いを踏み躪る。あなたは早いか遅いかの違いしかないと言つた。ならば、なぜその命が自然に潰えるまで、待とうとしない！」

涙が零れた。両の瞳から、絶え間なく雫が滴り落ちる。それを拭う事もせず、ただ犯罪神に問いかける。過去を生きた者達の想いを読み取っていた。それは、魔剣の中で再現されると同時に、自身の中で再現される。その想いが、狂おしい程切実に僕に語り掛けて来るから。

国を守る為に奉げられた命。護るべき者達を守る為に散つた命。世界の存続を渴望した命。自身の生を望みながらも他者を切り捨てる事が出来なかつた優しい命。絶望しながらも未来を紡ぐために賭けられた命。好きな人を護るために涙を堪え笑顔で潰えた命。その全ての想いが、記憶を通じて語り掛けているんだ。これ以上の悲劇の連鎖を止めて欲しいと。涙を零すのは自分たちで終わりにして欲しいと。かつて確かに存在した女神たちの悲愴であり、悲壮な願いが！

だから僕は、犯罪神の言葉を否定する。すべてのものはいずれ死を迎えるだろう。その事実を否定する事はできない。だからこそ、この世界で生きたいと思うんだ。命は理不尽に潰えさせられて良いものなんかじゃないんだ。過去の女神達や、今僕が感じているようなどうしようもない憂いは、嘆きは、これ以上増やしてはいけないから、犯罪神に向け散つて逝つた遺志を示す。

「それが私の存在意義だからだ。言ったはずだ、今滅ぶのも、何れ滅ぶのにも違いなど、無い」

「違いなら、あるさ。あなたが居たから、犯罪神と言う理不尽な滅びがあったから、僕はこの世界に呼び出された。あなたが居なければ、僕はこうして今此処に存在する事も無かつただろう。だから、違いはある。今死ぬのと、いずれ死ぬのが同じだと言う訳は無い。だから……、あなたの言う事を僕は否定するんだ」

悲愴なる別れがあった。悲壮なる決意があった。だからこそ、今この世界は繋がっている。その意志全てを魔剣に束ね、想いを込める。この剣は、世界を、女神を救いたいと言う純粋な想いによって作られた剣である。だから、その全ての想いを受け止めて尚、その存在が変わる事は無い。この世界を守る為の剣と言う事実だけは、揺らぐ事が無いんだ。だから僕は……魔剣ゲハバーンがゲハバーンである事を肯定する。世界を救いたいと願った人間の意思を、想いを受け継ぐ。「それはお前たちの意思でしかない。そのようなもの……滅びの前では何の意味も持たない。どれだけお前たちが滅びを拒絶しようと、終わりは必ず訪れる」

「そうだ。すべてのモノには終わりがある。だからこそ、想いが在り、願いがある。終わりがあるからこそ、その時代を生きた者達の想いが、今を生きる者達まで連なるんだ。終わりがあるからこそ、道は繋がるんだ」

魂が、想いが、狂おしい衝動となって駆け抜ける。熱く、そして悲しい想いだった。両の眼からは涙があふれ続け、死した存在であるはずの僕の魂すらも震わせる。死者にすら生を実感させる、紡がれ続けた想いだった。それを全て、魔剣に捧げた。想いの剣に、全ての想いを注ぎ込む。

「死は土に帰るだけだ。潰えると言う事なのだ。残るモノなど、何も無い」

「残るさ。例え死しても、変わらない想いは存在する。だから僕は、呼び出された。その想いを束ねる力を与えられた」

魔剣。熱を持って震える。救世の魔剣が、全ての女神達の想いを受



け止め、その存在を強く輝かせる。それは、過去に散っていった者達の想いの、願いの輝きだった。世界を救いたいと言う、尊い願い。その想いが、魔剣を通し、再びこの世界を照らしていた。暖かい光。シエアの力。かつて紡がれた願いの全てが、それを受け止め受け入れた魔剣から溢れだす。何よりも尊いその光は、救世の輝きだった。

「なんだ……その光は」

「これは、かつて生きてきた者達の想いの力。この世界の歴史を刻んだ人たちの想いの輝き」

犯罪神の問いに答える。魔剣が喰らった想いの力だった。かつて奉げられた想い。それは、魔剣から消えたわけでは無かったのだ。ただ、色褪せていただけなのだ。長すぎる時間が、輝きを弱めてしまっただけだった。だから、その想いをもう一度想い出させただけなんだ。魔剣と言われた想いの剣に。

「あれが、この世界を救いたいと願い続けた女神たちの想い……」

「感じる。凄く暖かくて、綺麗な想い……」

黒の姉妹が呆然と零した。気付けばノワールとユニ君が、僕を支えてくれていた。魔剣に宿った想いの再生と、犯罪神との対峙を同時に行っていた。自分だけの力では、立っている事すらできなかったかもしれない。倒れないように背を支えてくれる二人に、心の中だけで感謝する。

「ふ、ならばその想いでどうすると言うのだ。我を滅ぼすとも言うのか？ 確かにそれが成せるだろう。だが、それは貴様たちにとって、束の間の平穏に過ぎない。どちらにせよ、我は再び蘇りしかるべき時に世界を壊すだろう。結局は、何も変わりはない」

「そうだね。この魔剣では勝てない」

犯罪神が嗤う。確かに、犯罪神の言う通りであった。魔剣の力は、あくまで倒す力でしかない。この世界に存在する肉体を壊し、破壊する能力。ソレを以てすれば、犯罪神の仮初の器は壊す事が出来るだろう。それによって、長き時間を稼ぐ事だけならばできる。だけど、犯罪神による脅威を無くす事はできなかった。精神体である犯罪神を滅ぼす事は、魔剣の力では不可能なんだ。

「そうであろうな。結局貴様らの言う想いなど……」

「だったら、勝てる様にすれば良いんだ。魔剣が魔剣でなくなれば、良い」

「なに……?」

今の魔剣では成せないと言うのなら、それを成せるようにすればいい。犯罪神の脅威に打ち克てないと言うのなら、打ち克てるような剣にすればいい。その為に僕は呼び出された。その為に、剣と言う概念に絶対的な能力を持つ能力を与えられた。その為に剣の極地に至ったんだ。できない訳が無かった。

今この時まで紡がれてきた救世の想いを、今生の女神の想いに掛け合わせる。それは、僕との戦闘を通して示された想いだった。かつてこの世界を生きた女神たちが願った想いと同じ想いを示していた。その想いに想いを重ね、過去と現在を繋ぎ止める。魔剣の輝きが強くなる。それは、僕の知る女神たちの持つ輝きと同種のものであると言えた。この世界を救いたいと言う女神たちの願いに、今も昔も変わりは無かった。

「貴方を倒すためだけに作られた剣。だけど、それでは駄目なんだ。だから僕は、過去の想いを紡ぎ今の想いと重ね、束ねる」

「なんだ……その力は。貴様は、何をしようとしている?」

手にする魔剣を、能力を解き放つ仮初の体を、想いの奔流が駆け抜ける。背筋がぞくりとする程圧倒的な感覚だった。温かく、何よりも澄み切った祈り。それが、手の中で存在を主張する。過去から今までの、世界を救いたいと言う願いだった。

「変えるんだよ。この力を以てしてもあなたを倒す事などできはしない。だから、それを成せる未来を手繰り寄せる」

「未来だと?」

それは、剣の極地に至り得た力。未来すらも読み取るほどの力だった。そしてその読み取った未来を、犯罪神の存在しない世界を作り得る力を見つけ、それを成せるように魔剣を再構築していく。想いの力が強すぎる光を放つ。救世の輝きが世界を照らし、散って言った人々の想いが駆け抜ける。綺麗だ。その輝きを見詰め、ぼんやりと想う。

「……っ」

「ユウ!？」

「大丈夫なの!？」

両の手で強く握った魔剣から、凄まじい勢いで自身を構築するシエアを吸い取られていた。魔剣の再構築。それを救世のシエアを用いて成す事などできはしない。この想いは、始まりの時から今に至るまで紡がれ続けてきた想いは、世界を救うため以外に使われる事があってはいけないんだ!

だけど救世の想い意外のシエアで魔剣を構築する事もできはしない。普通的手段では、魔剣を再構築する事は出来なかった。救世の魔剣を、救世を成すための女神の持つシエア以外から、その形を変える事無く再構築する。それが出来るシエアが、都合の良い事に一つだけ存在していた。

それは、救世の為に呼び出された僕を構築するシエア。女神四人分の想い。その力は女神の手から離れ、僕に与えられた力ではあつたけど、この世界を救いたいと言う一心から使われたモノだった。それは、確かに救世のシエアと言えた。

だからこそ、それを奉げる。仮初の肉体をこの世に留められる事だけに使われていた祈りの力、それが魔剣に流れ込み、希望を紡いでいく。背筋を言い様の無い不安な感覚が走り出す。それは、ある意味で慣れ親しんだ感覚だった。死の感覚。それが、徐々に徐々に近付いて来ていた。黒の女神姉妹が心配げに言った。支えてくれる手の熱が、心地よい。傍に二人の女神さまが寄り添い支えてくれる。怖い事なんて、何もなかった。

「――」

想いを読み取り、願いを繋ぎ、それを成せる未来を手繰り寄せる。僕の求めた世界。一度は全てを失った僕に出来た、大好きな人たち。その人たちがただ生きていける、そんな世界。それを作る為に全身全霊を以て、能力を振るう。禍々しい紫の刀身から、穢れの無い救世の想いをあふれ出した魔剣が、少しずつ、少しずつその姿を変えていく。再現、再構築、最適化、そして全てを、未来すら見通す力。その全て

を以て、自身の求めた世界を作る為、この世界を護るため、大好きは人たちを護るため、存在を賭して、想いの剣を作り出す。

「貴様は、自分が何をしているのか解っているのか……？ それは人の使える力ではない」

「……。解っているよ。だからこそ、あなたを越えられる可能性を持つ!!」

過去の想いを受け継ぎ、現在に繋ぎ、未来を切り開く。

その能力は、僕の成そうとしている事は、弱い人間でしかない僕なんかでは到底成せない事だろう。それでも、譲れないものがあるんだ。僕は既に死した人間だけど、それでも護りたい物はある。失いたくない想いは、あるんだ!!

『……、ユウ』

二人の女神が体を強張らせたのが解った。だけど、何の言葉も掛ける事はできない。今この場で声を掛ければ、きっと怖くなるから。存在を賭けて犯罪神を阻む事が、きつと怖くなるから。だから二人には背を向けたまま、護るべき者を背に守ったまま、倒すべき敵を見据える。

「……っ、っ」

それでも、想いは届かない。僕一人では、未来を切り開く力をこの世界に作り出す事は叶わない。声にならない声を上げる。解ってしまった。魔剣の再構築。それを成すには、力が足りなかった。シエアが、足りなかった。僕を構築する女神四人分のシエア、それをもってしても、想いの剣を再構築するには僅かに足りなかった。全身全霊で挑んでいた。それでも足りない。それ程受け継いだ想いもまた、強かったのだ。叫び声を上げる。それでも、どうしようもなかった。僕を構成する全てのシエアを奉げても、それでも僅かに想いが足りなかった。女神たちを、世界を救うためにここまで来た。それが、できないのか。僕では、届かないのか……。突付けられた事実、心が折れそうになる。

『前を見る、四条優一!!』

「……っ!?!」

そんな時、あり得ない声が聞こえた。それは、聞き覚えのある声だった。僕が犯罪組織に入って出来た友。熱き魂を宿した紅き勇者。子供たちの為に世界を変えろと言ひ、戦い抜いた男。ブレイブ・ザ・ハードだった。

どうして……。そう思った時、目の前に紅き剣が浮かんでいた。ブレイブが最期の力を振り絞り、僕に託した力だった。その剣が今語り掛ける。

「この声は……。ブレイブ？」

ユニ君の驚きに満ちた声が聞こえた。二人の間にもまた、奇妙な因縁があった。それで、想うところがあつたのだろう。様々な思いが入り混じった声音を聞き、理解した。

『お前が護ろうとしたものは、この程度の事で諦められるようなものだったのか？ お前が女神と相対してでも成そうとした事は、此処で終わってしまう程度の事だったのか。俺が友と認めた者の想いは、この程度の物だったのか!？』

「そんな事は……。ない！」

『ならば、成し遂げろ!! お前の想いは、護りたいと言う想いは、この程度では無いだろう!!』

友に背中を押されていた。萎えかけた心が熱く燃え上がる。世界を護りたい。その想いが足りなかった。あと、ほんの僅かに足りなかった。だから、想いの剣を完成させることができそうになかった。ならば、作り出せばいい。想いが足りないと言うのなら、僕が願うんだ。救世を。

「すまなかつたね」

『気にするな。友が全てを賭けて挑んでいた。例え主が相手であつたとしても、手を差し伸べぬ道理は無い。お前はお前の想いを……。貫け!!』

ブレイブの、僕の友達の言葉に笑みが浮かんだ。死してなお手を差し伸べてくれる友が居た。ならば、その想いに報いる為にも、世界を護らなければいけないんだ。強く、強く願った。世界を守る、最後の力を。

「……」

そして、一際強き光が辺りを包み込む。辺りには、祈りの力が満ち溢れている。女神たちが、そして犯罪神が僕を見据えていた。

「それが、貴方の作った剣？」

「ユウが作った、世界を救うための剣なの？」

黒の姉妹が聞いてくる。

「そうだよ。これが、世界を救う剣。繋がれた救世の想いを束ねた剣だよ」

それに頷く。全ての力を使い果たしていた。自身の纏っていた黒と紅のプロセスユニット、既に消滅して長釣丸だけが傍らに落ちていた。直ぐ傍に、紅の剣も力を失ったかのように光を失っていた。

「きつと、僕はこれを作る為だけに、この世界に来たんだ」

「これを作る為に……貴方はこの世界に呼び出された？」

「そう、過去の女神たちの想いを、魔剣の製作者の想いを受け継いだ救世の為の剣。魂を賭して完成させた、想いの剣」

ノワールの言葉に、頷いた。

「想剣・魂ソート・オブ・ソウルの剣」

それは、穢れ一つない純白の大剣だった。世界を救うと言う、無垢な想いの結晶。自身の魂を、文字通り賭して完成させていた。想いと魂で構築された大剣。救世の剣。未来を切り開く為だけの力だった。

「ノワール、これを……」

「なんで……」

「ごめんね、僕にはもう、犯罪神を倒す事が出来そうにないから……」

「……っ、解った。絶対、貴方の想いは無駄にしない」

「頼むよ、それは、君が使うように最適化したものだからね。一撃、ただ一撃当てれば、それで終わる」

「……っ、貴方、最初から!？」

「うん、ごめんね」

その剣を黒の女神に託す。真っ白な剣。それはきつと黒の女神に、ノワールに良く似合う筈だから。救世の為の剣を持つ女神の姿はきつと、何よりも気高い。その姿を見る事が出来た。

「ユウ……」

「ごめんね、ユニ君。結局僕は、君を泣かせてばかりだ……」

「そんな事ない!! いっぱい、一杯助けて貰った!!」

「そっか、そう言っただけで貰えと……嬉しいなあ」

「だから、だから一緒に居てよ!!」

思えばこの子を泣かせてばかりだった。友達といいながら、やっている事はいつも心配を掛ける事ばかりだったと思う。今もまた涙を流すこの子の姿に、胸が痛むと同時に暖かくもなった。それだけ大事に思っていてくれたと言う事だから。そんな彼女に何も遺してあげられていない事に気付いた。ノワールには救世の剣を遺す事が出来た。だけど、この子には何もあげないのか。そんな訳には行かない。

「ごめんね。それはできそうにない……」

「……っ、いや、だよ……」

「ごめんね、変わりにこれを遺すから。きつと、君を守ってくれるから」

だから、傍らにある長釣丸と紅の剣を取った。紅き剣に、ブレイブに、ユニ君を頼むと魂で伝えていた。返事は無い。だけど、光を失った紅の剣が一度だけ小さく輝いた。それが、返事だった。僅かに残っている力を込め、最期の力を振り絞る。願いの輝きが二つの剣を包み込み、一つの形を成していた。それは紅き銃剣。姿形は変われど、確かにブレイブの持っていた**ブレイブソード**の勇気の剣だった。

「勇気の剣。ブレイブの物と、僕の物、その二つをユニ君用に最適化した剣。貰ってくれるかな?」

「貰う……貰うよ。今は剣ではお姉ちゃんに勝てないけど、いつかの剣で越えて見せるから……だから……」

それまで一緒に居てよ!! そう涙を浮かべながら懇願する妹の言葉に心を打たれていた。だけど、それはできない。もう、僕にそれだけの余力は無いから……。

「ごめんね……」

「……ユウ!!」

「……嘘つき! 約束したのに……、支えてくれるって約束したのに

!!

黒の女神姉妹が泣いていた。止めどなく涙が溢れていた。そうさせたのが自分である事が情けなくて、でも嬉しくて。直ぐ傍に二人はいた。大切な、大切な友達。その未来を護るために僕は此処まで辿り着いた。そして、泣かせた。その涙を見て、自分の気持ちに漸く気付いた。ああ、そうか、だから僕はこの世界を……

「僕は君たちに出会えて、本当に良かった……」

異界の魂は、最期に何かに気付いたようにそう呟き、黒の女神の姉妹に手を伸ばす。そしてその手が二人の頬に触れる直前、

「あ、ああ……ユウ!？」

「嫌だよ、消えないでよ!？」

全ての力を使い果たした異界の魂は、女神に触れる事無く、露と消えた。

「あ、ああ……」

「そんな……」

異界の魂が消滅し、その肉体が消え去った時、二人の女神から涙がこぼれた。

「所詮は無に帰すだけ……か。どれだけの想いを持つと、意味など無い。座輿は終わりだ……、この世界ごと、消し去ってやろう」

その様子を見詰めていた犯罪神がその力を解き放つ。強すぎる力が辺りを包み込んだ。その力をまともに受けた女神は、動く事が出来なかった。二人を除いて。



「させない。そんな事絶対にさせない」

「ならばどうすると言うのだ、我を討つというのか？ 何もできなかった貴様たちが」

「ユウが繋いでくれた想い。この世界を護りたいと言う今まで続いてきた想い。アタシ達には、それが在る」

犯罪神の言葉に、黒の女神姉妹は託された武器を手に犯罪神を見据えた。覚悟は決まっている。怖くないなんて言わない。だけど、二人は大切な友達が遺してくれた想いを手にしていた。このまま逃げるなんてできる訳が無い。

「行くわよ、ユニ」

「解ってるよ、お姉ちゃん」

黒の姉妹は、犯罪神に向かい肉薄する。

「無駄なあがきを」

「お姉ちゃん行って!! ブレイブソード!!」

それを迎撃する為、無造作に放たれた負の力の奔流。それを、ユニは託された武器を用い斬り裂いていた。犯罪神の放った力が二つに割かれる。その間を、黒の女神が駆けていた。

「あなたを倒す!!」

「やって見せろ、女神。そして思い知ると良い。貴様たちには何もできはしないと。あの人間の犠牲は何の意味も無かったのだとな」

「そんな事……無いっ!!」

ノワールの全身全霊の一撃。それを犯罪神はあえてその身に受けた。それが、黒の女神の心を折るのに最も適していたから。異界の魂がその存在を賭して完成させた剣に、何の意味も無かったと知らしめることが、最も効果があると解っていたからの行動だった。

「言っただけであらう……。想いなどに、何の意味も無いと……」

「そんな……」

そして、その言葉通り、魂の剣が犯罪神を倒す事は無かった。傷一つ付ける事が出来ず、ノワールの振るった刃は、何の手応えも生まなかった。そう、刃が当たったにも拘らず。

「……何？」

ノワールが認める事が出来ない事実には膝をついた時、不意に犯罪神に異変が起こった。初めて零す、困惑に彩られた言葉だった。何度も辺りを見る様に、その巨体を動かす。

「何が……」

唐突に起こった犯罪神の不可解な行動に、訳も分からないままノワールは距離を取った。

「……、そうか、そう言う事か……」

犯罪神は何かに思い当たったように、そんな言葉を残す。そして、その姿がぼろぼろと崩れ落ちる。化け物と言うしかない巨躯が。獣のような胴が。空間に食われるように、その体を消滅させていく。「やっつけてくれたな人間」

そして、最期にその言葉を残し、犯罪神もまた消滅したのだった。

そして時は流れる。

一時は犯罪組織にシエアを奪われ滅亡に瀕したゲームギョウ界であったが、女神候補生や異界の魂による女神の救出、そして犯罪組や犯罪神との対決。その間に刻まれた爪痕も深い。女神たちの最初に成すべき事は、失ったシエアの回復であり、自分たちを信じてくれた国民たちへの還元だと言えた。犯罪神を倒した喜びも分かち合う事が出来ないまま、女神たちは各々の国へと帰って行った。

それもようやく一段落が付き、黒の女神姉妹は一息吐く為にとある場所に訪れていた。それはラストイションの教会にある、大木の前。かつてノワールとユニがともに修練をした思い出の場所であり、異界の魂が、ユニを友達と言い、成長させた場所でもあった。

其処に一振りの剣が墓標のように突き立てられていた。穢れ泣き純白の大剣。犯罪神の脅威を取り除くために作られた、想いと魂の剣

だった。その剣の前で、二人の女神は小さく手を合わせ、少しの間祈りを奉げる。

「ねえ……、ユウ。貴方のおかげで、世界は救われたわ……」

「きつと、アンタが居てくれたからアタシたちは死なずに済んだ」

やがて祈りを終えた二人は、剣に語り掛ける様に言葉を紡いだ。それは、命を賭け世界を救った異界の魂への、感謝の言葉だった。言いたいことは山ほどある。だけど、それを全てのみ込んで、今この場に居ない人間に二人は感謝をささげた。

「私たちは絶対にあなたを忘れない……」

「アンタが守ってくれたこの世界を、この命が尽きるその時まで護っていくから、だから見ていて。アンタが居なくても、しつかりできるってところを……」

世界を救ってくれた人に、自分たちを命がけで護ってくれた人間に。

「だからユウ、ありがとう……」

「それと、さようなら……」

気が付けば、黒の女神姉妹は涙が溢れていた。異界の魂が四条優一が、どれだけの事をしてくれたのか。言葉を紡ぐうちに、そんな想いが胸を溢れていたからだ。二人は空を見上げる。そらは、青い、蒼い色をしていた。どれだけの悲しみが去来しようと、時は移ろいゆく。異界の魂が消えたその時から、二人はその事が痛いほど良く解っていたから。

「綺麗ね……」

「そうだね、お姉ちゃん」

「この景色を、護らなきゃいけない」

「うん。そうしないと、ユウに怒られちゃうからね」

確かに生きていた。異世界に呼び出され、理不尽な運命を課せられた異界の魂。二人の友達は、それでもこの世界を守る為に、全身全霊を以て生き抜いた。たとえ死んでいたとしても、その姿は、確かに生に溢れていた。その友達が護ってくれた世界。綺麗な世界を護りたい。護らなきゃいけない。二人の女神は自分にそう言い聞かせる。

そして前を見据えた。大事な人を失った。それでもこの世に生ある限り進んで行かなくてはいけない。生きたいと願いながらも生きられない人もいるのだから。二人はその事を知っていた。だから、黒の姉妹はもう、涙を流してはいなかった。

## 幕間 重なり合う魂 紅き魂の守護者

最初に目についたのは雲一つない青空だった。その青に手を伸ばすかのように聳え立つ重厚な街並み。人々の営みから紡がれる様々な音が、今にも聞こえてきそうである。だけど、それが聞こえる事は無い。この世界に居る人間は、たった一人しかないから。

「来る……か」

懐かしい街並みをゆつくりと見まわす。魂に刻まれた記憶から再現された街並みだった。黒の女神姉妹が治める国、ラストイシヨンの街並み。それを、この世界に再構築していた。僕がこの世界に来て、一番見知った場所と言えるから。四条優一がゲイムギョウ界に呼ばれ、最も長い時間を過ごした街並みだったから。だからこの世界を作り出した時、ラストイシヨンの街並みを模倣していた。それはきつと、消す事の出来ない未練。今僕が見ている街並みは、できる事なら彼女たちのいる世界で生きたかっつたと言う、偽りなき本心を作り出した幻想だった。

その願いが叶う事が無い事は良く解っている。だから、僕はこの世界を作り出していた。ここは想剣の中にある世界。女神たちの想いを紡ぎ、魂を賭して作り上げた犯罪神の脅威から世界を救うために作り出した、もう一つの世界。剣の極地に至って出した答えが、この世界だった。

その世界が震えた。それは、この剣が本来の用途で用いられたと言う事に他ならなかった。

「あの子たちは世界を救った。なら、ここからは僕の戦いだ。世界を救うために呼び出された異界の魂として、成すべき事を成さないと」

現実の世界での自分は、シエアをすべて失い姿形を失っていた。だけど、魂は想剣の中にあった。想剣・魂ソード・オブ・ソウルの剣。それは、ある目的のために作った、剣の形をした一つの世界だった。犯罪神を倒す事はできない。仮初の体を討ったところで、本体を討たない事には何れ蘇る

からだ。それでは意味が無かった。だけど、実体を持たない本体を倒す術は無かった。倒しようが無い。ならば、倒す以外の方法を考えるだけだった。

だから、この世界を作り上げた。不幸中の幸いと言うべきか、異界の魂として呼ばれた僕もまた、犯罪神と同じく実体を持たない存在であった。魂だけが世界に繋ぎ止められた、死者。それが、僕と言う存在であった。犯罪神と言う殺せない存在と、四条優一と言う既に死んでいる存在。似て非なる在り方を持つ者同士だが、一つだけ明確な違いがあった。それは、犯罪神は力が満ちれば再び蘇る事が出来ると言う事だった。それは逆を言えば、力が満ちない限り蘇る事が出来ないと言う事でもある。つまり、犯罪神の力が満ちる前に削り続けられれば、復活が出来ないと言う事だった。

「やってくれたな……、人間」

「それがこの世界に呼ばれた僕の存在意義だからね」

想剣が用いられた事で、魂を剣の中に引きずり込まれた犯罪神が僕を見据え、忌々しげに言った。化け物の体から生えていた獣の胴体。それだけの姿になった犯罪神が、女神たちのプロセツサユニットに酷使した武器を纏い、此方を見詰めている。犯罪神の力は女神の対極にある力だった。言うならばそれは、負のシエアで構築されたプロセツサユニットと言えるだろうか。想剣に引きずり込まれた犯罪神は、女神たちと対峙した時よりも遥かに華奢な姿をしていた。だけど、感じる力はあの時以上に思える。

想剣。それは、ただ一つの事に特化させた剣だった。犯罪神の魂を剣の中に構築したこの世界に引きずり込む。ノワールに渡したのは、それだけに特化された剣だった。

女神たちの脈々と繋がる救世の想いで、剣は構築されていた。気の遠くなる程の長い歳月をかけ蓄積された想い。それは、世界を壊すための存在である犯罪神を封じ込めるのに、最も適した強固な封印である言えた。そしてその想いで剣は構築されている。その中に犯罪神を引き摺りこんだ。幾ら犯罪神とは言え、並大抵の事では破れはしないのだ。そして、その中で犯罪神を削り続ける。それが、僕の手繰り

寄せたただ一つの救世の方法だった。

犯罪神を消し去る事などではしない。だけど、この世界に封じ込め、その力を奪い続けければ、それはゲームギョウ界にとっては居ないのと同じと言う事だった。そして、ソレは僕だからこそできる手段でもある。犯罪神と同じく実体を持たず、更には異界の魂として世界を制する能力を与えられた僕だから、それを成す事が出来るのである。魂と魂の存在であり、互いに死ぬ事が無いからこそ、取れる手段と言う訳であった。

「この世界は、貴様そのものか」

「そうだね。魂を賭して作った。想剣は、僕自身とも言えるね。同時に、救世を願った女神たちの想いの集合体でもある」

「成程。つまり貴様を壊せばこの世界も潰える訳か」

犯罪神の言葉に頷いた。死と言う概念が存在しない僕を殺す事が出来ると言うのなら、きつと犯罪神の言う通り、想いの剣は壊されるだろう。殺せれば、だが。

「それが出来るでも……？」

「可能だ。不死者と言えども、魂を砕かれ続ければ何れ摩耗する。」

「そう。だけど、そう簡単に行くと思わない方が良い」

「何……？」

破壊神でもある犯罪神が言うのなら、それはできるのかもしれない。だけど、僕だって何も考えが無かったわけでは無い。

「異界の魂の力は世界を制する可能性を持つ。その力は、神すらも凌ぐ」

「……ほう」

仮初の体。人と言う枷からは逸脱していたけど、それでも枷はあった。だけど、魂だけの存在となってその枷すらも取り除かれていた。そして、この世界は現実世界の模倣である。どれだけ壊れようと、何の問題も無かった。それはつまり、一切の遠慮がいらぬと言う訳で……。

「見せてあげるよ。この能力の全力を。世界を護りたいと言う意思によって呼び出された、魂の力を……!!」

犯罪神を見据え、宣言した。これが、本当に最後の戦いだ。友達が生きている世界を護り抜く。そう、誓っていた。ならば、僕はまだ戦える。

「見せて見ろ、異界の魂。神をも凌ぐと言うのなら、我を越えて見せるが良い」

犯罪神がその手に持つ大鎌を構え、音も無く迫る。終わりなき最後の戦いが、始まった。

「行ったか……。まったくあの姉妹ども、剣を何処に置るか決めるだけに時間をかけすぎなんだよ」

黒の女神姉妹が消えた後、白き大剣の前に気付けば一つの影があった。黒の妖精、クロワールである。黒の女神たちが去って行った方向をむき、悪態をつく。クロワールは、大剣が女神の手から離れる瞬間をずっと待っていたからだ。つた。

「犯罪神が蘇った時は、これで終わったか、今回は犯罪神の勝ちかと思ってたけど、思いもしないでん返しだったよ。不覚にも意表を衝かれたぜ」

そして、白き大剣とただ一人向き直ったクロワールは楽しげに言葉を発する。

「思えばブレイブやマジックがお前に執着したこと事態、イレギュラーな事だよ。そう言う意味では、お前は本当に良くやってくれたよ。最後の最期まで、お前は何をしでかすか解らなかった。お前を見ていて、詰まんねー事なんかなかったよ」

それは仲の良い友達と話す時のように楽しそう。自分の見ていたテレビが面白かったと言う子供と同じで。

「だけどな、一つだけどうしても言わなきゃいけないことがあんだよ。お前はあの時言ったよ。最後まで諦めないって。みっとも無かったって、最後まで諦めねーって。だけど、蓋を開けてみればなんだよ。最初から諦めてんじゃねーか!!」



だけど、納得できないシーンがあつた事が許せなくて、クロワールは癩癩を上げる。異界の魂が、最初から自分の命を諦めていた事に、クロワールは怒りを覚えていた。それは傍観者でしかないクロワールが、登場人物に肩入れしてしまったから。異界の魂と共にいて、黒の妖精もまた、少しだけ変わってしまったってしまっていたから。

「これがお前の望んだ結末なのかよ……。お前は本当にこれで良いのかよ。こんな結末、つまんねえよ……」

だからクロワールは、異界の魂の墓標のように突き立てられた剣に向かい、想いを吐き出す。歴史を面白おかしく動かし、それを見るのがクロワールにとって重要な事だった。だが、今回に限り、彼女は深入りしすぎ情が移っていたのである。この場、この時を以て、傍観者でしかなかった黒の妖精は、完全に異界の魂による救世と悲壮の連鎖を断ち切る物語の登場人物となっていた。

「っ……!?!? これは……」

抗いがたい衝動にかられ、黒の妖精は白き大剣に触れた。そして見る事となった。剣の中で行われている最期の戦いを。

「余興だ」

犯罪神が自身の持つプロセスユニットから黒き瘴気をまき散らす。やがてその瘴気が四つの纏まりに別れる。そして、見覚えのある形にその在りようを変化させていく。それは、確かに僕が見た事がある存在だった。

「くくく、ふははははは!! 会いたかったぜえ、異界の魂!!」

「アクククク……。ありがとうございます犯罪神様。これで、吾輩は再びこの手で幼女を掴む事が出来ます!!」

「うおおおお!! この剣、犯罪神様の為に!!」

「……」

それは、犯罪組織の幹部であった。黒き巨人、ジャッジ・ザ・ハード。黄色き狂獣、トリック・ザ・ハー

ド。赤黒き勇士、ブレイブ・ザ・ハード。そして紅の女神、マジック・ザ・ハードだった。女神たちに倒された四天王を、犯罪神が再びよみがえらせたと言う事だった。

「……ブレイブ、マジック」

ブレイブとマジックの姿を見て、思わず涙が零れそうになる。だけど、解っていた。目の前に居るのは、違うのだ。

「気安く我が名を呼ぶな。異界の魂、貴様などとなれ合った覚えはない！」

「……犯罪神様の為、討たせてもらおうぞ」

目の前にいる二人は、僕の知る二人では無いのだ。姿かたちは似ている。だけど、ブレイブの魂はユニ君に託した剣に宿っている。そして、マジックとは最期の瞬間、魂が少しだけ繋がった。だから解る。目の前に居るのは、あの二人では無かった。

「その二人とは、縁があつたようだな。それでも貴様は討つのか？」

「そうだよ。目の前に居るのは、二人であつて二人ではない。ならば、遠慮する必要も無いさ」

試すように言う犯罪神に言い返す。確かにほんの少しだけ心を揺さぶられた。だけど、それだけなんだ。

「ただ一人で我に、我等に挑むと言うのか？」

「そうだよ。だけどあなたは一つだけ勘違いしている。相手にするのは僕一人じゃない」

僕を取り囲むように広がった四天王を無視し、犯罪神だけを見据え告げる。両の手を突き出した。自身の手は何も手にしていない。ゲイムギョウ界に来て、ずっと使い続けていた武器すらも無かった。だけど、この世界は、想いの剣の中に作られた世界は、僕自身であると言える。だから、不可能を可能にすることができるんだ。剣では無く、剣と化した自身の記憶から使い手を読み取り、再構築する。一振りの剣、手にしていた。

「僕の辿り着いた剣の極地。その形は一つじゃない」

「何……?」

「あなたたちが相手にするのは古今東西、世界や次元すら超えた数多くの使い手たちとその剣だ」

宣言する。瞬間、幾千幾万、数える事を放棄してしまうほどに無数の剣が舞い降りる。名も無き剣が、名のある名剣が、世界を救った聖剣が、命を狩り続けた魔剣が、世界を覆い尽くすかのように降り注ぐ。

「これが僕の辿り着いた極地であり、終着点。その全てを今、解き放つ」

呼び出されしは、全ての剣だった。過去にあったもの、今在るもの、そして今は存在しないが後に作られるもの。その全てが世界を覆い尽くす。凄まじい、斬撃の雨だった。剣が降り注ぐ。それだけで、世界が震撼する。魂に刻まれた街中に、無限の剣が突き立った。それは、剣と言う概念全てで作られた墓標。無限剣の墓標だった。

「くはっはは!! 良いぞ、もつと、もつとだ!! もつと俺を楽しませろ。生きている事を、俺に実感させろ!!」

降り注いだ剣を全身に受けながら狂喜を示す敵、ジャツジ。全身が百を超える剣に穿たれながら、狂気に染まった声を上げ、狂喜を浮かべながら迫り来る。右手、虚空に突き出した。一振りの剣。瞬時に現れる。それは、特別な力を持つモノでは無かった。強く握り、自身の魔力を浸透させる。全ての記憶を読み取っていた。それは虚無の光。人を極めし闘神と互角の戦いを繰り広げた、死者の記憶。仇成す者達を無に帰す、虚構の光だった。

「お前たちも……堕ちて来い」

口に出たのは、自身の言葉では無かった。読み取った記憶が、想いが、言葉を発していた。

「しねええええ!! 異界の魂!!」

迫るジャツジを見据えていた。黒き戦斧が振り上げられる。右手に持つ剣に込められた魔力。解き放った。

——裏天魔・虚空

虚構の光が辺りを包み込む。黒を、遮った。

「ジャツジ!？」

「ぬう!? この力は」

——天魔・爆雷

虚無の光にのみ込まれ消滅したジャツジに驚きの声を上げたブレイブとトリツクに向け、一足飛びで踏み込んだ。同時に左手に魔力を収束し、雷の力に変換する。それは、爆雷の呪法。紫電の轟雷を越えた、爆裂の如き迅雷。光の速度で、二人を包んだ。

「ぐ、あああああ!!」

「馬鹿な……、馬鹿な……、まだ幼女にもであっていないと言うのに……」

紫紺の輝きが、辺りを染めていた。二人の幹部を刹那にも見たいな時間で紫電の爆雷は蒸発させる。見向きもせず、駆け抜けた。右手に持つ魔剣、更に作り変える。

「異界の魂!!」

「紅の女神」

刃と刃がぶつかり合った。紅の大鎌と、魔剣がぶつかり合う。紅の大鎌を迎え撃つは、世界を構築する四種の力を総べる剣だった。紅の女神の持つプロセスユニットの一撃を悠然と受け止める剣の持つ能力は、消滅。魔剣の中でも最高峰の力を持つ剣であった。

「貴様は、危険すぎる。消え去れ」

マジックが、忌々しげに睨み付け言った。

「それは、できない」

言い返す。姿かたちは紅の女神だが、違うんだ。僕を生かそうとしてくれたマジックとは、魂の在り方が違っていた。だから僕は迷う事は無い。全ての力を以て、彼女を倒す事が出来る。

「アポカリプス・ノヴァ」

紅の女神の放つ最大の魔法。何度となく女神たちを敗北に追いやった、紅の衝撃であった。解き放たれる紅。魔剣を地に突き刺し、迎え撃つ。それは全ての現象を消し去る終焉の光。

——天魔・最終

世界の全てを知った者が放つ、最期の輝きだった。

「……そう言う事か。クソ！ あの野郎、この俺に心配かけさせやがって……、絶対許さねえからな!! お前はさぞ満足だろうな、全てが思い通りにいって。だけど、気に入らない。誰かが一人で全てを背負う物語なんて面白くもなんともねえ！ こんなエンディング、ぶち壊してやる!!」

想剣に触れ、剣の中に隔絶された世界で行われる魂の戦いを知った黒の妖精は憮然としながら言った。傍観者であつたクロワールですら終わったと思つていた物語。それが、誰も知らないところでその物語を紡いでいた。それはクロワールにとって許せない事であり、「待つてろよ。俺が、変えてやるよ。こんなくそつたれな結末」

それ以上の僥倖だった。黒き妖精がもう一度想剣に触れる。そして何かを探るように瞳を閉じた。数瞬の沈黙。

「見つけた……い。それに、コイツは……。うしし、面白くなってきたぜ。やっぱり最終話は、どんでん返しがねーとな!!」

不意に心底愉快と言つた声音で洩らした。それは、予想外の玩具を見つけた子供の如く嬉しそうな声音だった。

「くく、待つてろよ、ユーイチ。お前の描いたシナリオ、そんなものは認めねーよ。俺が、お前以上に面白いエンディングに変えてやる」

そして、黒の妖精はにやりと深い笑みを浮かべると、想剣の中に溶け入る様に消えていった。

「……」

紅の女神は、ぼんやりと作り物の空を眺めていた。全てを消滅させる光をその身に受けた、マジック・ザ・ハード。地に墜ちた紅の女神

は、その体を動かす事も出来ず、犯罪神と異界の魂がぶつかり合う斬撃の音色だけを聞き、虚空を見詰めていた。何故、自分は倒れているのか。それが、マジックには理解できなかった。自身は消滅したはずだったから。ならば、今いる自分は何なのか。考えても答えが出なかった。

「おうおう、無様な姿じゃねーか。あのおつかねー女とは思えねーな」  
「お前は……」

身体を動かす事も出来ないマジックが、回答の出ない思考の海に沈んでいると、不意に聞き覚えのある声が耳に届いた。瞳だけ動かし、声の主に視線を定める。黒き妖精、クロワールだった。何故クロワールが居るのか。余計に理解が出来なくなる。

「何故お前がいる。何故私は消えていない」

「んな事はどーだって良いんだが、教えてやるよ。犯罪神が蘇り、お前を復活させた」

「なに？」

「とは言え、その時のお前は不純物が多く付いていた。それをユーイチが吹き飛ばしたって感じか？」

紅の女神の問いに黒き妖精は、そんな事どーでもいーじゃんとかケラケラと笑いながら答える。

「成程……。あの男に私は救われた訳か」

「んー、それが解んねーんだよな。なんでお前は消えてねーんだよ。アイツは消し飛ばすつもりで、攻撃してたぞ」

「愛の力では無いか？」

「いや、ねーよ」

「そうか……」

しっかし解んねーと首をかしげるクロワールに、マジックは至極真面目に答える。それに、クロワールは面白いものを見る目で笑いながら否定する。マジックとて本気で言ったわけではないが、少しだけ残念そうである。

「ならば、私の与えた力が、私を覚えていたと言うところだろう」

「あー成程。だからか。ユーイチの最適化したプロセッサユニット、

あれはお前のだったのか。ずっと黒の女神のだと思ってた」

「似て非なるものだが、な。確かに黒の女神の力も模倣しているだろうが、アレは私が口付けの際に分け与えた力の方が大きい」

「……、やっぱり、少しぐらいなら、愛の力って言えるかもしれねー」

紅の女神はどこか誇らしげに言った。四条優一の使うプロセッサユニットは、形だけ見れば黒の女神のものだったが、その本質は寧ろ紅の女神であるマジックに近かった。その為、マジックの魂の性質を体が無意識に覚えていた。最期の瞬間、異界の魂と紅の女神は確かに心が通じていた。その為、全力で戦っていたが、それでもどこかで救おうとしていたと言う事であった。そして、マジックに不要なものを消滅させた為、不純物の無くなり本来のマジックが表に現れたと言う事であった。

「それで、貴様は何をしている？」

自身が生きているのか。それをある程度理解したマジックはクロワールに尋ねる。

「おおっと、そうだった。ユーイチ一人が犠牲になろうとしてるこの詰まんねー物語をぶち壊そうと思う。乗らねーか？」

にやり、つとクロワールは意地の悪い笑みを浮かべる。それは、他者が必死で作り上げた成果を壊す意地の悪い笑みであり、同時に誰かを助けたいと言う想いに満ちた暖かなものでもある様に見える。

「愚問だな。我が目的は犯罪神様の復活」

それに対して、紅の女神は冷酷な笑みを浮かべた。

「犯罪神なら、今はユーイチとなぐり合ってるな」

「つまり、我らが悲願は既に達成されていると言う事だ。私の存在意義はそれで終わったと言える。ならば、私が私の為に生きるのも悪くは無い」

「はは、なら、協力成立だな」

黒の妖精と紅の女神。二人は手を取り合う。目的は、一人の人間を救う事であった。

「救うぞ、あのバカを」

「ならば、このようなところで倒れている訳には行かないな」

黒の妖精の言葉に、紅の女神がゆつくりと立ち上がる。先程まで何故自分が生きているのかも解らなかった。だけど、その理由がはつきりとしていた。そして伝えられた事実が、紅の女神に力を与えていた。それは、想いの力だった。紅の女神には果たせなかった想いがある。それを、今度こそ成就させられるかもしれない機会を得た。倒れている暇など、無い。だからマジックは、立ち上がる。

「待っている、四条優一。お前は私が救ってやる」

救えなかったものを、今度こそ救う。マジックの瞳には、そんな意志が宿っていた。

大鎌と剣がぶつかり合う。犯罪神の持つ命を刈り取る凶刃を、異界の魂は数多の剣で迎え撃つ。剣の墓標。辺りには幾千、幾万の剣が突き立っていた。一所に留まらず、絶えず動き回りながら、犯罪神の放つ刃を受け止める。

風を切る音が響き渡る。斬撃の音色がその後を追う。駆けていた。並走する様に低空を滑走する犯罪神に意識を割きながら、剣を振るう。衝撃が両の手を襲った。無理やり刃を凧ぐ。至近距離。低く身をかがめる事で斬撃を往なした犯罪神と目が合う。

「貰った」

「まだだよ」

剣、弾かれていた。返す刃で迫る斬撃。犯罪神以上の反応速度を以て後退し、やり過ぎす。同時に突き立つ剣を左右の手で一振りずつ掴み取る。後退からの強襲。刃。煌めいた。

「意味の無い事を……」

「そう思うなら、やめてほしいところだね」

犯罪神を斬り裂いていた。同時に、自身の体も引き裂かれている。痛みは無かった。ただ、言い知れぬ不快な感覚が僅かに湧き上がる。それも一瞬で、直ぐ様なにも無かったかのように収まる。身体があっ



たのならば、今の一撃で一度犯罪神を倒していただろう。同時に、自分に体があれば一度殺されもしたが。

再び刃が迫る。話す事は無い。そんな意志が込められた凶刃。二振りの刃を交差させ受け止める。両手に凄まじいまでの負荷が掛かった。馬鹿正直に受け止められるものでは無かった。ぶつかり合う刃を僅かに流し、その力を受け流す。

「滅びへ導いてやろう」

犯罪神が小さく呟いていた。ぞわりとした不快な感覚が周囲を覆った。負のシエアが、充滿していたのだ。思わず舌打ちを漏らす。自身の魔力、収束した。僅かに、犯罪神の技の発動が早かった。破滅へ導く光が、全身を包み込んだ。

「え……？」

全身が爆ぜるその刹那、横合いから凄まじい速度で吹き飛ばされていた。痛みは無い。衝撃で揺らいだだけの視界を動かし、何があったのかを見た。予想外の物が見えた。それは紅と黒。見慣れた、プロセッサユニットであった。

「久しいな、四条優一」

「マジック……？」

「ふ、どうした？ 死人でも見たような面をして」

紅の女神。マジック・ザ・ハード。先程確かに僕が消し飛ばした女神が、僕を抱える様にし、疾走していた。犯罪神から追撃の光弾が放たれる。それをマジックは避けながら、小さな笑みを浮かべていた。

「君は確かにさつき……」

「ああ、確かにお前に救われた。私であって私で無かったのだが、自分を取り戻せた」

遮るようにマジックが言う。救おうとしたわけでは無い。だけど、マジックはそんな事は関係ないとばかりに、力強く見つめてくる。不意に涙がこぼれた。

「何故僕を助けた。今相對しているのは」

「犯罪神様だろう？」

「なら、どうして……」

「言ったはずだろう。女神ではお前を救えないと。私ならば、お前を救える」

それは、女神を救おうと決めた僕に、マジックが言った言葉だった。「だからと言って、犯罪神に刃向う理由が無い」

「お前は存外野暮な事を言うのだな。言ったはずだ、私はお前が欲しかったと。犯罪神様が蘇り私の存在意義がなくなった今、私にあるのはその想いだけだ」

「……っ、マジック」

手が差し伸べられていた。

「私はお前を愛してしまったのだろう」

「でも、それは……」

「私はお前と共に在りたい。そう思っている。……あまり同じ事を言わせるな。私とて女だ。少しばかり気恥ずかしい……」

その手を取って良いのか解らなかった。迷っていた。そんな時、マジックは僕から視線を外し、呟くように言い捨てた。

「全く物好きだね……」

ただ、嬉しかった。こんな僕に、手を差し伸べてくれる相手がいる事に。

「何の心算だ、マジック」

一連の流れを見ていた犯罪神が口を開いた。

「申し訳ありません、犯罪神様。私は、この男と生きたいと想ってしまったのです。貴方をよみがえらせることが全てだった私が、そう思ってしまった……」

「成程。我が力の一端に、自我を持たせたのが間違いだったか。いや、我が力を抱き込んだ人間が破格だった。そう言う事なのだろう……」

「申し訳ありません。ですが、私はこの男を生かしたいのです」

紅の女神は、主に頭を下げる。それは、マジックが主と決別したと言う事だった。

「謝る必要は無い。どちらにせよ同じだ。嫌だと言うのなら、抗ってみよ。お前の思うままにしてみると良い」

「ありがとうございます」

犯罪神の言葉を聞いたマジックは、心の底から嬉しそうに答えていた。紅の女神は、微笑を浮かべたまま僕の傍らに立つ。

「お前は生きたいか？」

マジックが問う。その答えは、考えるまでも無かった。

「僕は……生きたい」

「良い返事だ。それでこそ私の愛した男。私の力、お前と共に在る」

しっかりと言い返すと、マジックは満足そうに頷く。引き寄せられた。唇に柔らかな感触が僅かに触れた。何度目かの口付けを施されていた。それはほんの僅かな間。やがてマジックはゆつくりと解放してくれる。

「ハードフォーム」

慈しむような目で僕を見据えていたマジックが、僕だけに聞こえる様に囁く。淡き光が、マジックを包んでいた。それは、自身の姿を変化させる輝き。紅と黒の輝きだった。

「マジック……」

「何と言う顔をしている。私は消える訳では無い。お前の中で眠るだけだ。これで終わりと言う訳では、無い。これが別れと言う訳では無いのだ」

少しずつマジックの姿が薄れていく。マジックらしからぬ微笑を浮かべていた。伸ばされた手が、僕の頬に触れる。ただ、温かかった。

「……ありがとう」

「ああ、そうだ。その言葉が聞きたかった」

やがてマジックはその姿を紅の粒子へと変えた。魂の輝き。紅き女神は、紅の光へと変わっていた。それが僕の全身を包み込む。触れた手と同じく、暖かい光だった。紅の女神の、マジックの魂が流れ込む。そして、自身の中に溶け込むようにして……消えた。

「……成程。互いに魂同士であるからこそ、混じり合ったと言う訳か」  
僕たちを見据えていた犯罪神が口を開いていた。

「そーだよ。この世界に居るのは、俺をのぞいたら全員が魂だけの存在。限りなく不安定であり、純粋な存在。だから、交わりやすいんだよ。二つの存在を掛け合わせて、新たな存在を作り出せるんだ」

「クロワール？」

「おう、俺だ馬鹿やろー。てめーが約束破るから、文句言いに来たぜ。感謝しろよ」

再開した黒の妖精は、僕の事を指さしケラケラと笑った。それが何時もの彼女らしくて、少しだけ嬉しくなる。

「マジックは、何をしたのかな？」

「んー。お前と一つになったんだよ。四条優一がチキユウから呼ばれた存在であり、世界を救えば魂が送還されるからお前には未来が無かった。それを変えるには如何すればいいのか。考えてみれば単純な事だった。新たな存在になればいい。見てみるよ、自分の姿を」

クロワールが顎で促す。自身の姿を見た。気付けば、プロセスサユニットを展開した時の様な外套を纏っていた。だけど、以前の物とは決定的に違う差があった。色がちがう。黒では無く、真紅なのだ。以前展開したノワールの物を模倣したものと違い、マジックと同じ紅のプロセスサユニットが僕を守るように展開されている。赤き外套と、真紅の翼を得ていた。

「これは……」

「あの女が与えたんだよ。もうお前はチキユウから呼ばれた異界の魂じゃねーよ。異界の魂に女神の魂が溶け込んだ、完全に別の存在だ。あえて言うなら、紅き魂。この世界で、お前が新たに与えられた魂だよ」

「紅き魂」

噛みしめる様に呟く。異界の魂から、別の存在に代わっていた。僕の中に、もう一人の魂が居るのがなんとなくわかった。紅の女神が、僕と言う存在を支えてくれていた。

「お前はこうするんだよ。紅の女神によって、制約を破壊された。なら、何時までもこんな世界に閉じこもっている必要があんのかよ？」  
「ないね。だけど、僕が此処で犯罪神を削り続けないと……、何れ世界が壊される」

「あーあー、そう言うと思ってたよ。枷が無くても、お前は護ろうとするんだな。大した奴だよ。お前は。女神の守護者だ」

クロワールが頭の後ろで手を組みながら、文句を零す。

「なら、ゲームをしようぜ、ユーイチ。もし、お前が犯罪神を追い詰められたら、俺がお前を助けてやる。犯罪神を何とかしてやるよ。この世界から、犯罪神の脅威を消し去ってやる」

「……何を企んでいるのかな?」

聞いていた。出来る出来ないと言うのは気にならなかった。きっと、クロワールにはそれを成す事が出来る。本来無い筈の異界の魂召喚の術式をこの世界に持ち込んだのがクロワールだった。ならば、常人ではできない事が出来ても不思議では無い。何より、この世界に僕が気付かないうちに存在していた。それだけでも、この世界の理の外に居ることは何となくわかった。

「お、相変わらず、俺のことを解つてんじゃねーか」

「どれだけ君と一緒に居たと思ってるんだい」

「ちがいない。なら、しってるだろ? 俺が見たいのはおもしろい物語だ。ユーイチ。お前は次の物語でも、登場人物になれ」

相変わらずの愉快犯だった。その条件がクロワールらしくて。だからこそ、安心できる。

「我に勝つと言うのか?」

「実際のところどーなんだよ。やつこさん、かなりつえーんだろ?」

「勝つよ。僕は一人じゃない。女神も力を貸してくれている。なら、勝てない訳が無い」

虚空に両手を掲げた。自身の記憶から、その姿を呼び覚ます。

——想剣・魂ソート・オラ・ソウルの剣

それは、純白の大剣。世界を救うために作り挙げた、想いの剣だった。ノワールが用いる為に最適化したものを、今度は自分が使うため適応させる。それは犯罪神を閉じ込める為の力では無く、穿つ力。白き大剣を再び手にしていた。

「救世の想いがあった。今を生きる友達の想いがあった。世界を救うために賭した魂があった。そして、手を差し伸べてくれた人の想いがある。だから僕は、あなたに勝つ」

「面白い、やって見せろ……、人間」

紅に身を包み、白き想いの剣を手にしていた。それは此処まで来た僕に与えられた、武器と鎧。そしてそれを最大限に用いる為、自身の能力を解き放った。

「これで、終わりだよ」

「っ!?!」

迫る大鎌を、白き大剣で打払っていた。晒された隙。自身の持つ能力を、全身全霊を以て解き放った。それは誰の記憶でも無く、自身の記憶。使い手たちの記憶を再現し続けた中で作り上げた、四条優一だけの斬撃。終わりであり、始まりの為に紡がれる一撃だった。

——魂の残影

それは、僕の全てを賭けた終わりの一撃。異界の魂だった僕の終わりであり、紅き魂として生まれ変わった魂の始まりの一撃だった。

「……馬鹿な」

犯罪神の呟きだけが聞こえた。

「お前の勝ちだぜ、紅き魂の守護者」

そして僕が聞いたのは、そんな黒の妖精の嬉しそうな言葉だった

## 紅き魂

### 1話 召喚

「勝っちゃったね……」

「あつはつは、そーだな。これでもかと言うほど解り易く、ぶった切つたなあ。流星は剣に於いて絶対的な力を持つただけはあるよ。あの犯罪神が、真つ二つになるとは俺も予想してなかった」

倒せてしまった。犯罪神の大本ともいえる力の塊を、お手玉のようにして遊ぶクロワールを見ながら言った。想剣によつて斬り裂かれた犯罪神は、これまでの闘いである程度消耗していた事もあり、遂に実体を維持できなくなったのか、その姿を黒き光と変えその場に漂っていた。その場に漂っていた力の塊を、クロワールは無造作に掴み取ると、こね回すように両手を動かし、球状に肩固めてしまった。そしてお手玉のようにして遊んでいると言う訳だ。その光景を、何とも言えない気持ちで見つめる。あれ程の猛威を誇った犯罪神、文字通り玩具にしていた。この子は何をしたのだろう。

「と言うか、君なら単体でも犯罪神に勝てたりした？」

「あー？ どーしたんだよ行き成り」

「いや、だって、ねえ？」

そう聞きたくもなると思う。だって、お手玉だし。何と言うかもう、理解できる範疇を越えている。ある程度は予想していたけど、そういう扱いをするとは予想していなかった。

「勝てるわけねーじゃん。あんな化け物とまともにやりあえんのは、異界の魂だったお前ぐらいだよ。仮に俺がなぐり合っても、5秒も持たないんじゃないの？ 瞬殺されるよ、瞬殺」

にんまりと笑いながら黒の妖精はそう続ける。両手で黒い力の塊を殴るように拳を振るう。黒の塊が、此方に飛んでくる。それを手に取った。異質でありどこか懐かしい感じもするし、何より強い力を感じるけど、それだけだった。犯罪神が即座に蘇ると言う事にはなりそうにない。そのままクロワールに塊を投げ返した。

「じゃあそれは？」

「ああ、これはお前が事実上犯罪神を無力化したからだな。一時的でも、そこまで弱くなればどうでも細工できんだよ。あれだ、元気な奴を取り押さえるのは疲れるけど、ばててるやつならラクって事だ」  
「成程」

「なんだよー、反応うつすいなー。もっと喜べよ。お前は自分の能力であんなバケモンを撃ち破ったんだぜ。もっと胸を張れよ、胸を！」

「お前はすげー事を成し遂げたんだよ。つと言いながら、僕の頭の上に座り込んだクロワールに苦笑が零れる。きつとこの子が言うように凄い事を成し遂げたんだとは思うけど、何と言うか、クロワールの行動が何時も通り過ぎて実感が持てないから。救世を成したと言う事実より、腐れ縁の友達が何時ものように接してくれるのが少しだけ嬉しい。」

「まー、良いよ。ユーイチ。お前は確かに俺とのゲームに勝ったな。見届けたよ。今度は俺が約束を果たす番だな」

「犯罪神の脅威をこの世界から消し去る。そう言ったよね」

「ああ。だから消し去ってやるよ。けどな、ユーイチ。一つだけ問題が在んだよ」

「何かな？」

「クロワールは意地の悪い笑みを浮かべた。ああ、どうせロクでもない事なんだろう。これまでの経験から、それが解った。そして、同時に僕には必要な事でもあるのだろう。なんだかんだ言って、この子は僕に不利益だけを与える事は無いから。苦勞はするけど、僕の為でもある。今回もきつとそう言う事だろう。」

「コイツを消し去っても、お前はアイツらのいる世界では生きられない」  
「い」

「……と言うと、どう言う事？」

「簡単な話だよ、魂は生まれ変わったけど、身体がねーだろ」

「ああ、確かに」

「クロワールの言葉に思わず納得してしまっていた。僕の体はシエアで構成されていた。そしてそのシエアは現在は想剣の維持に使わ



れている訳で、僕の手から離れている。つまり、魂は確かに生まれ変わっていたけど、想剣から出たところで、その世界の身体となるべきものが無い。要するに、そのまま死ぬって事だと思う。

「つーわけで、お前の体を作ってやりてー所だが」

「何か交換条件かい？」

「いんや、違うよ。そうしたいところだけど、単純に俺にはそんな事ができねーんだわ。つーわけで、もう一度お前には異界の魂召喚の儀式で呼び出されてもらう必要があんだよ。まあ、お前を確実に呼び出すように細工するから、紅き魂召喚の儀式、か？」

「召喚ね」

「ああ。この次元のゲームギョウ界でお前は新しく生まれた。だから、その存在は肯定されている。けど、身体が無い。そして想剣の世界から出たら死ぬ。なら別の世界に行く過程で身体を作るしかねーわけだ。それもシエアがある世界だ。シエアがあれば魂だけの存在でも身体が構築されるのは実証済みだからな。だからゲームギョウ界に似た世界に行く必要があんだよ。そこで一度身体さえ作ってしまえば、なんとでもなるって寸法だ。目的を達成して送還されようが、仮初でも身体が在ればお前は生きていけるって事だよ」

クロワールの言葉を聞き、話を整理する。要するに、僕の身体を作る為には、一度別の世界に行かなければいけないと言う事だった。それはこの世界と似て非なる世界で、シエアがある世界になる。そして、シエアがあるとと言う事はきつと女神たちも存在するのだろう。

「仮初の体って事は」

「まあ、前と同じだよ。人間ではねーな。まあ、今更大した問題でもねーだろ？」

つまり、死なないと言う事だろうか。正確には体が維持できなくなれば死ぬのだから、限りなく不死に近いと言うべきかな。

「ある意味、都合が良いのかもしれないね。少なくとも、誰かを置いていく心配は無くなったからね」

「限りなく不死に近い上に、凄まじくつえーからなあ。余程の事が無ければ死なねーだろ。ただ、絶対は無いぜ」

忠告するクロワールの言葉に耳を傾ける。

「女神の変身が邪魔されることもあっただろ。シエアの供給を断たれるって事だよ。そう言うのには気を付けねーとあつという間に死ぬぞ」

「肝に銘じておくよ」

「まあ、身体を作ってしまったえばお前自身がシエアの塊だから、そこまで心配しなくても良いけどな」

クロワールは楽しげに笑う。

「さて、それじゃーそろそろ仕込みに行くわ。暫く待ってろよ。」

「ああ、解ったよ」

そして、クロワールと別れる。その手には、黒き塊が握られていた。

「さーてと、サツサと終わせますか」

神次元と呼ばれるゲームギョウ異界に舞い降りた黒の妖精こと、クロワールは如何しようかと考える。紅き魂を蘇らせるには、この世界でその術式を用いる事が出来る存在が必要だった。この世界の理は、異界の魂として呼び出された次元、超次元ゲームギョウ界とはいくらか異なっている。女神でなくとも召喚の儀式を施す事は可能だった。単純に魔力が大きければできるのである。その分、それだけの使い手と言うのはそうそういるものでは無いが。

「……そうか、この世界にはアイツもいるのか……。くくく、面白い事考えた！」

黒の妖精は意地の悪い笑みを浮かべる。紅き魂との約束は確実に守る。だけど、それと同時に自分の欲求を満たせそうな方法を思いついたから。

「前作の英雄とラスボスがチームを組む。面白そーじゃね？　まあ、アイツには悪いけど、今回は命に関わる誓約もねーし、上手くやるだろ」

その方が俺としても面白そーだしな。そう呟きながら、クロワール

は空を駆ける。そして、目的の人物を見つけた。

「さっさと行くぞ、ネズミ」

「何でオイラがおぼはんの手伝いをしなきゃいけないちゅよ?」

「っ、だーれがおぼはんなんだ! 私の名はマジエコンヌだ!! いい加減に覚えんか、このドブネズミが!」

「うっさい、おぼはんみたいなければいのは、誰がどう見てもおぼはんって言うのが解り易いっちゅ!!」

言い争っている黒の魔女マジエコンヌと、超次元の世界では犯罪組織に属していたワレチューだった。

「さーって、どうすつか。折角これがあるんだし、少し使うか」

クロワールはにやりと笑みを浮かべる。犯罪神の力の塊を少しばかり引き裂き、もう一つの力を作り上げる。その中に、紅き魂召喚の儀式の情報を組み込む。

「さーて、どんな未来になるのか。まあ、ネズミもいるし、アイツならうまい事やんだろ」

手にしたもう一つの黒き塊を見詰めた。超次元の犯罪神の力の血晶だった。それを神次元のマジエコンヌに与えようとしていた。

「さてさて、これが終わったらもう一つ仕込みをしてから、戻るか」

同時に紅き魂召喚の儀式。それが神次元の世界に持ち込まれようとしていた。

「よー、おまたせ!」

「長いのか短いのか、イマイチ判断が出来ないね」

想剣の中でボーっとしていると、いつの間にかクロワールが戻ってくる。相変わらず楽し気な笑みを浮かべている。上機嫌であった。その笑顔に、きつとこの後苦勞する事になるんだなっつと、何とも言えない覚悟を決める。

「全部終わったぜ。じきにお前は呼び出されるよ。お前が居た世界と

は似て非なる世界。神次元のゲームギョウ界だ」

「神次元、ね」

似て非なる世界。あの子たちが居た世界とは似ているけど、違う世界なんだ。

「まあ、そんな顔すんなよ。面白いものが見せてくれたら、俺がまたなんとかしてやつからよ」

「……すこし、希望が見えた気がするよ」

苦笑が浮かぶ。だってそれは、どう考えても苦勞する道だから。だけど、それでもやる価値はある。別の次元と言われて途方に暮れている所だったけど、確かにクロワールなら何とかできるかもしれないから。

「……これかな？」

それから、クロワールにいくつか質問をしていた時に、不意に存在が揺らいだ。それは、何時だったかジャツジを倒した時に感じた不安定な感覚に似ている。だけど、不快な感覚では無かった。懐かしいような温かいような、そんな不思議な感覚だった。

「ああ、漸く来たようだな。くく、面白そうな展開になってきた」

「あー、なんか嫌な言葉を聞いた」

溜息が零れるのも仕方ないだろう。クロワールの面白いというのは、大抵当事者にしたら厄介な事だから。

「まあまあ、そー言うなって。お前にも悪い事じゃねーから」

「どういう事かな？」

「それは言うてからののお楽しみ。ただ、ひとつ教えておくよ。お前がいる世界とお前のいた世界には何のかわりも無い。似ているだけで違う世界だ。だから、その世界で生きている者達は、誰もお前の事は知らないぜ」

「……つまり、知り合いがいるかもしれないって事かな？」

「そー言う事だよ。だから、知ってる顔が居ても、知らない風に接した方が面倒事は起きないぜー」

「ん、解ったよ。っと、もう時間が無いか」

クロワールの忠告を頭に刻み付ける。似て非なる世界。それは

きつと、その世界を生きている人たちもそうなんだろう。あの子たちもいるのかもしれない。

「ああ、行って来いよ。今度は、思うままに生きてみると良いぜ！」  
「そうだね、そうさせてもらおうよ」

クロワールの言葉に頷く。この先待っているのはきつと苦労なんだろう。だけど、何処か気持ち急いでいる。失くしたはずの未来をもう一度提示されていた。それをもう一度手にする事が出来るかもしれないと考えると、柄にもなく期待してしまっただ。友達によって差しのべられた手が、嬉しかった。

「またね、クロワール」

「ああ、またな、ユーイチ。そのうち様子を見に行つてやるから、期待しとけよ！」

クロワールと別れる。身体が消えていく。どこか懐かしさを覚えながら、その感覚に身を委ねた。

「頑張れよ、ユーイチ。その世界で生きている者達は、誰もお前の事は知らないぜ。その世界で生きている者達は、な」

それは黒の妖精の呟き。消えた紅き魂に敢えて明かさなかつた言葉だった。

「ぢゅーー!! やめて、もう、やめてくださいいっぢゅーー!!」  
「う、ぐう、あぐううう……」

黒の魔女とネズミが悲鳴を上げていた。理由は単純にして明白だった。

「あははははは!! 良い声でなくわねえ!! けど、まだまだ足りない

いわあ……。もつと聞かせてよお。貴方たちが弱すぎるからあ……詰まんないのよ!!」

彼らよりも強い力を持つ者が居たから。

それは、空のように蒼き長髪を持ち、伶俐な輝きを宿す紫紺の瞳を持つ女神。アイリスハート。虹の名をする、神次元のゲームギョウ界にあるプラネテューヌの女神だった。

黒と紫紺のプロセツサユニットを身に纏い、その瞳と同じ刀身を持つ蛇腹剣を振るわれる。その刃は二人の急所だけを絶妙なままでにはずし、苦しいが致命傷足り得ない痛みを以て、二人を襲う。刃が振られる度に、二人の被害者の口から悲鳴が上がる。

「ちよ、ちよつとぶるるん。やり過ぎじゃないかしら?」

「確かにそうだけど、私たちで止められると思う?」

二人を甦る虹の女神を少しは慣れたところから見ている二人の女神が少しだけ表情を顰める。確かに二人は敵であったが、少しばかり虹の女神の行動はやり過ぎの様に思えるのだ。紫の女神であるネプテューヌと、この次元の黒の女神であるノワールだった。

「無理ね。彼女たちには悪いけど、犠牲になってもらいましょう」

「でしょ。アレがこっちに向く事に比べたら、ね」

あつさりと二人の女神は、哀れなる二人を見捨てる。女神とは言え、自分の身は可愛いのだ。態々敵であった者達を助けるために、獅子に挑む理由は無い。獅子と言うよりは、女王様だが。

「ぢゅーぢゅー。だれか、誰か助けてっちゅ……」

「あははははは! 良いわあ、もつと地べたに這いつくばって情けない声を聞かせてえ」

「ぐ、ぐぐ……」

悲鳴を上げるネズミと歯を食いしばり耐える黒き魔女に、虹の女神は気分が最高潮に達したのか、恍惚とした表情で刃を振るう。その姿はもはや女王としか表現する事しか出来ない。

「ぐぐぐ、また、負けるのか? 私は……また負けるのか?」

「あらあ? なあに、貴女はアタシ以外にも負けた事あるんだあ。ふふ、なら今回も負けて負けっぱなしな訳ねえ……。ああ、可哀想な人。

歯を食いしばる姿を見ると、応援したくなるわねえ。健気に頑張ってるから」

「くそが……」

虹の女神の言葉も耳に入らない黒き魔女は、自身の無力さを呪う。彼女にとつて女神は倒すべき敵だった。倒さなければいけない相手だった。だけど、その想いとは裏腹に倒れているのは自分で。それが情けなくて、悔しくて。心の底から声を上げる。

「私はもう、負ける訳には行かんだ」

それは、黒の魔女マジエコンヌの想いであり、マジエコンヌがこの世界で生を受け、これまで生きてきた人生の外から来る想いでもあった。マジエコンヌは自分でも理解できない狂おしい程の想いに身を委ね、残る魔力の全てを解き放つ。

「あらあ？ 最後の抵抗かしらあ？ けど、ざあんねん。それじゃ、アタシは倒せないわよお」

辺りを黒の魔女の魔力が包み込む。その場の空間が揺れる。それ程の、力だった。その魔力の奔流の中心近くに居た虹の女神は、それでも余裕を崩す事は無い。マジエコンヌでは自分を倒せないと確信していたから。だから、楽し気な笑みを浮かべ、最後の抵抗を嬉々として見詰めていた。

「ちよつと、ぷるるん!! 大丈夫なの!!」

「そうよプルルート! 油断してると痛い目を見るわよ?」

そんな虹の女神を見る二人の女神は慌てて声を上げる。

「……あらあ? もう終わりかしら?」

そして、魔力の奔流が消えた時、虹の女神には傷一つつく事は無かった。

「これで終わり……、じゃないようねえ」

そもそもそれは、虹の女神を攻撃する為に使われた力では無いから。その力は、女神に勝つために使われたモノだった。そして、その力をもたらしたものは。

「……さて、どういう状況なのか」

魔力の奔流により舞い上がった砂煙が薄れていく。虹の女神に相

対する形で、一つの影が浮かび上がっていた。それは、真紅。紅の外  
套を身に纏い、真紅の翼を持つ存在。紅の髪に一筋だけ黒が走り、そ  
の存在を主張している。かつて女神によって呼び出され、世界によつ  
て不条理を課せられながらも救世を成した者。紅き魂となった、守護  
者だった。

「ぢゅ……、助けてっちゅ……」

「……ネズミ君？」

召喚の術式に呼び出された直後に目にしたのは、ネズミ君だった。  
全身に浅い傷を負い、苦しそうにうめいている。この世界に居る者達  
は、僕の知る者達とは違っている。そう頭では理解していても、実際  
にその光景を見ると心が痛んだ。

——月光聖の祈り

躊躇なく、自身の魔力を解き放つ。魔力が、新たな体を通して迸る。  
もう一度、生きる事が出来るのか。そう漠然と思う。だけど、あまり  
その気持ちを堪能する暇は無い様だ。

「ああ、今度は貴方が相手をしてくれるのかしらあ……？」

「ああ、そのようだね」

何と言うべきか、蛇腹剣を鞭のようにして持つ女王様としか言い様  
の無い女性に伝える。女神の持つプロセスユニットを展開してい  
た。それだけで、この次元の女神なのだと言う事は解った。

「に、げろ……」

「大丈夫だよ。貴方たちが逃げる時間ぐらいなら、充分に稼げるさ」

ネズミ君の傍で何とか立ち上がろうとしている女性の言葉を遮る。  
不意に、魂が震えた。僕の中にある、もう一つの存在。マジックが何  
かを語り掛けてきた気がした。その所為もあって、今この場でやるべ  
き事は、既に決まった。

「それに……」

「それに……？」



「それほど難しい相手でもないよ。何なら、倒してしまおうか?」

見知った顔もいるしね、つと言いかけたところで言いなおす。

「新しい敵!? プルルート、私たちも手伝うわ」

「……似てるけど、初めて見る存在ね。皆、油断してはダメよ」

だって、少しは慣れた場所に居た二人の女神に見覚えがあったから。紫の女神と黒の女神。僕が救世の想いを確かめた相手であり、護ろうとした人たちだったから。だけどそれは僕だけの知る事であり、この世界の彼女たちには何の関係も無い。気持ちを切り替える。虹の女神、紫の女神であるネプテューヌ。そして僕の良く知る女の子と同じ存在である黒の女神ノワールが相手だった。もう見る事も無いと思つた相手と、早すぎる再会を果たしていた。とは言え、相手は僕の事など知りもしないのだが。

「……あらあら、あの子たちも楽しみたい訳ね。人気者ねえ。妬けちゃうわあ。けど、良いわあ。それなら皆で楽しみましょうか」

「構わないよ、女神たち。僕が相手をしてあげよう」

「馬鹿な……」

女神たちの言葉に頷く。黒の魔女が驚いたように此方を見た。笑みだけで応じる。

「すまない……」

「ぢゅ……、せ、せめて名前だけでも教えてくださいつちゅ」

「……僕の名かい? それは——」

そう言えば以前もこんな事を聞かれたなつと、ネズミ君の言葉を聞き思い至つた。あの時の僕はまだ異界の魂であり、僕だけの存在だった。だけど、今は紅の女神と一つになり、友に生かされてこの場に立っていた。今の僕は、紅き魂の守護者の姿をしている。ならば——

「ブレイク・ザ・ハード。それが僕の名だよ」

ブレイブとマジック。僕にとつて大事な二人の名を掛け合わせた名でもある、もう一つの名を名乗る。女神が変身した時にもう一つの名を名乗るように、僕もまた、ブレイクの名を再び名乗っていた。それは、女神に運命を壊された者の名であり、女神の運命を壊した者の名でもあつた。様々な想いが宿つた名前だった。

「見せて貰うよ、女神の力を」

そして、三人の女神に向き直った。別に僕にはこの三人と戦う理由はない。だけど、マジックに懇願されていた。魂が、そう僕に訴えかけていた。だから、倒すのではなく阻む。自分にそう言い聞かせた。右手、虚空に突き出す。淡き光が生まれ、紅の大鎌が存在していた。それは、マジックの持つ武器。僕の持つ力で生み出したものでは無く、紅のプロセッサユニットが持つ力だった。自身の能力を使う気は無かった。だってそれは、女神を救うための能力だから。

大鎌を構える。マジックが力を貸してくれるのが解った。使った事の無い大鎌であるにも拘らず、どう動けばいいのか手に取るようにわかっていた。

「良いわあ、強そうな男の子を屈服させる。それもまた、すつごくそそられる……」

「ちよつとプルルート。こいつはアタシが貰うんだから、あんまりいじめないでよね！」

「二人とも何言っているのよ。良いから行くわよ！」

三人の女神が各々の武器を構える。黒の女神と紫の女神の太刀筋は良く知っていた。その雰囲気懐かしくて。こんな状況だけど、また出会えたことがどうしようもなく嬉しくて。僕の知っている彼女たちとは違うと言う事は知っていたけど、それでも嬉しさと笑みが零れていた。

「へえ、女神三人が相手でもその余裕……。まずはそれを崩させてもらおうかしらあ」

虹の女神が踏み込んでくる。紫紺の刃を持つ蛇腹剣が宙を駆ける。戦いが、始まった。

## 2話 呼び出された力

迫り来る蛇腹剣を見据えた。同時に紅き翼を広げる。全身を守るように展開されているプロセツサユニットに、瞬間的に力が満ちるのが解った。両の手で持つ大鎌、強く握りしめる。使い方は手に取るようにわかった。僕に宿る紅き女神の魂が、その記憶を以て示してくれている。だから、どう戦えばいいのかと迷う事は無い。

「まずは、これでどうかしらあ?」

帯電する刀身が弧を描き飛来する。それを、両の足に軽く力を入れ女神に向けて踏み込む事でやり過こしながら距離を詰める。虹の女神の試すような声を聴きつつ、前を見据えた。僕の行く手を阻むように、二つの影が迫り来る。

「行くわよ、ネプテューヌ!」

「ええ、合わせるわ、ノワール!」

黒と紫の女神。その手にするシエアで構築された剣。ソレを以て、僕を挟撃する形で踏み込んできていた。黒と紫の軌跡が迫る。黒が風を切り、紫が音を切る。交錯する黒と紫。視界に収めたまま、大鎌を握る。

「速いけど……、遅いね」

二つの弧を描く斬撃。それがどのような軌跡を描くのか、手に取るようにわかる。黒の女神の斬撃も、紫の女神の斬撃も、何度もこの身に受けていたものだった。僕の持つ能力は、剣において絶対的な力を持つ。例え用いなくとも、既に経験として女神の斬撃は頭が覚えていた。そして何より、この次元の女神は僕のいた次元の女神よりもいくらか力が劣っているのか、僕の知る彼女たちの踏み込みよりも、幾分か余裕があった。

「なっ、!?!」

呼吸を読み取り、二つの斬撃の合間を掻い潜る。僕の知る犯罪神との戦いの時より、女神の力は劣っている。だから、彼女たちの攻撃を往なす事はそれほど難しい事では無かった。だって、二人の動きは良く知っていたから。世界が変わったとしても、二人が黒の女神と紫の

女神である事には違いが無い。その所為か、剣における癖は次元が違っても一緒だった。違うのは、速さと強さだけである。

「っ……この動きは……!?!」

紫の女神が目を見開いた。半身を大きく振りかぶり、大鎌を振り抜く。紅き刃を持つ大鎌が、攻撃の機を逸した二人の女神に襲い掛かる。一振りりで、紫と黒を弾き飛ばしていた。

「つう……、コイツ……強い!」

黒き大剣を盾に斬撃を受け止めたノワールが、驚きに目を丸めながら呟く。その姿が僕の知る彼女を彷彿させ、どこか懐かしく思う。そう思うと、小さく笑っていた。世界が変わっても、ノワールはノワールなんだと思うと悲しいような嬉しいような、そんな言い様の無い気持ちが生まれる。

「その余裕、馬鹿にしてるの!?!」

「いやいや、そんな事は無いよ。ただ、嬉しいだけだよ」

「どういう意味よ」

「女神さまに会えたことが嬉しいんだよ。会いたかった人に、会えたような感じかな」

「……意味わかんないわよ。やっぱり馬鹿にしているんでしょ!」

少しばかり怒ったように表情を歪めるノワールに困ってしまう。確かにこの世界の彼女たちからすれば、僕は初対面の相手だから仕方ない。彼女たちが僕の知る女神でないのも解っている。だけど、それでも、また女神に出会えたことは嬉しかった。

「二人だけで盛り上がってないで、アタシも仲間に入れて欲しいわねえ」

怒るノワールを、どこか懐かしいと思いつつ見つめていると、そんな声が割り込んでくる。紫電を纏った蛇腹剣が迫る。それを、上体を反らし躲す。そのまま、蛇腹剣がノワールに向かう。

「ちよ、プルルルト!?! の、のわあああ!?!」

「あら、ごめんねえ、ノワールちゃん。ちよつと手元が狂っちゃったわあ」

「手元が狂ったじゃないわよ!?!」

まさか自分の方に飛んでくるとは思わなかったのだろう。ノワールは避ける事も出来ず、虹の女神の蛇腹剣をその身に受ける。そのまま、ぐるぐると巻きついた帯電していた蛇腹剣の電撃を受けると、虹の女神に抗議を起こす。それに虹の女神はとても良い笑顔で答えていた。もしかして、ワザとやったのだろうか。二人のやり取りを見詰めていると、そんな事を思う。

「仲が良いんだね」

「まったくね!」

そんな二人を見て足を止めた所為か、先ほど吹き飛ばした紫の女神が迫る。その姿が、僕の知る紫の女神と重なる。だけど、少しばかり身に纏うプロセツサユニツトが違っていた。彼女もまた、僕の知る女神では無い筈だけど……、何か違和感を感じる。

「……早い!」

「違うよ。君が遅いんだ」

少なくとも、僕の知る紫の女神はもっと早かったはずだ。だから、彼女が僕を倒すために全力で踏み込んだ一撃も、充分に目で追う事が出来る。経験から軌跡を読み取り、至近距離で躲す。振り下ろし。その線を掻い潜った。そのまま、全身を使い大鎌を振るう。マジックが教えてくれた動きだった。

「まだよ!」

「……止めた?」

もう一度距離を取る為に放った一撃。今度は紫の女神に受け止められていた。少しばかり違和感が増す。正直言えば、今の一撃は受け止めきれないと踏んでいたのだけど、そんな予想とは、裏腹に止められていた。何と言うか、能力と経験が一致していないちぐはぐとした感じがする。

「あらあ? やるじゃない、ネプちゃん。今が好機よノワールちゃん。一気に行くわよお。ノワールちゃんミサイル!!」

「え……? ちょ、まって、まだ体が痺れて…… ちょ、ちょっと、本気でやる気なの? 冗談よね? 待って、心の準備がまだ……、え、いや、あの、の、のわああああ!」

「あははは！ 先に行つててねノワールちゃん。アタシもすぐに追いつくからあー！」

「いやああああ!!」

ノワールに巻き付いた蛇腹剣を振りかぶり、女王様が投げた。いやホント、何の躊躇も無く、投げ飛ばした。打たれた野球ボールよろしく、凄いい勢いで此方に向かつて飛んでくる。

「ちよ!? ぶるるん!？」

飛んでくる黒の弾丸に驚き紫の女神が離脱する。これには流石の僕も意表を突かれ、即座に離脱しようと思ったのだけど、僅かに反応が遅れた。だって、味方を投げ飛ばすとか思わないし。変な感心をしてしまう。

「仕方ないか」

「ちよ、どいてえええええ!!」

大鎌を消し、飛来する黒の女神を見据える。女神によって飛ばされたそれは、凄まじい速さになっていた。避けた場合、何かにぶつかればノワールの方も無事では済まない速さに思える。それは流石に可愛そうだ。

「ぐ、つと」

「のわああああ、ああ……?」

だから、受け止めていた。紅いプロセスユニットの上から、軽くない衝撃を感じつつも、ノワールを両手で受け止める。まさか受け止められるとは思ってなかったのだろう。抱き留めたノワールは、呆けたように僕を見詰めていた。手にかかる重みが懐かしくて、あの子では無いと解っているのだけれど、あの子を思い出し少し嬉しくなる。

「あああ……、止められちゃった。ざあんねん」

「友達を使って攻撃するのは感心しないよ」

そんなある意味彼女らしい姿を見詰めている訳にもいかない。直ぐ傍まで虹の女神が踏み込んできていたから。黒い弾丸を受け止めた勢いを殺さず後方に飛ぶ。追つて、僕が立っていた場所に、返す刃で放たれた蛇腹剣が飛来する。地に幾つもの刃が食い込む。それを即座に引き抜き、虹の女神が迫る。

「それ位の事じゃ、アタシとノワールちゃんの友情は崩れないのよ」

三度放たれる蛇腹剣。それを、往なす。とは言えノワールを抱えている事もあり、少しばかり態勢が崩される。

「でもぶるるん。ノワール、結構本気で悲鳴あげてたわよ」

「大丈夫よ、ノワールちゃんだし」

「まあ、ノワールならね」

さらに追いつがる虹の女神の斬撃を崩れた態勢から無理矢理往なすと、今度は紫の女神が畳みかけるように迫っていた。立て続けに無理やりかわしていた。態勢が完全に崩れる。これ以上離脱する事はできそうになかった。

「これならー」

「まだだよ」

「あうっ」

完全に体捌きでは往なす事が出来ないタイミングで放たれる斬撃。女神の手元。振り抜かれる両手を蹴り上げる事で、紫の軌跡を無理やり止める。

「君は、もう少し友達にする相手を選んだ方が良いんじゃないかな？」

「う……、お、大きなお世話よ!!」

それで漸く体勢を立て直せたので、抱えていた黒の女神を離すと、顔を赤くしながらノワールは声を荒げる。この次元のノワールには友達がいるようだけど、なんだろう。こう、何か違う気がする。次元は違っても、この子は友達関連で苦労しているのだろうかなどと、場違いな事を考える余裕があった。

「んー、ある程度時間が稼げたかな」

一連の攻防を終え、そう零す。正直、途中から何かおかしな感じになってはいたけど、そこは気にしない事にする。若干半泣きになりながら僕を睨み付けてくる黒の女神さまを見ると、気にしないで上げるのが良い様に思えるし。

「あらあ? なら、そろそろお開きにしようとしても言うのかしらあ?」

「ああ、そんなところだよ。思った通り、大した事が無かったからね」  
「ふふ、言ってくれるじゃない。ますます、気に入っちゃたあ。もっ

とサービスしてあげようかしら」

虹の女神が心底嬉しそうに答える。少し相対しただけなのだけど、これまでの言動や、ノワールをちくちく苛めながらも鋭く攻めてくる様に、文字通り女王様気質なんだろうなと予想を立てる。

意外とこういう子は煽りが効くのかもかもしれないと思って思いながら、実際に煽ってしまうのはきつと僕と融合した紅の女神の魂の所為だろう。先程からずっと、虹の女神に敵意を向けている気がする。体の内側の方から、マジックが訴えかけてきている気がする。その所為かどうも僕自身、好戦的になっっているように思える。

「いや、次は僕から行くよ」

—— エクス・コマンド

満面の笑みで蛇腹剣を鞭のように撓らせた虹の女神にそう言い放つ。同時に自身の魔力を解き放つ。身体能力を向上させる魔法。僕が異界の魂だった時から愛用しているものだった。

「っ、やっぱり。ぶるるん、ノワール！ 気を引き締め——」

「まずは一つ」

最初に踏み込んだのは、紫の女神。三人の中で、冷静に戦況を見詰める事が出来る一番厄介な相手だったから。それを差し引いても、少しばかり気になる事があった。先程も感じたけど、能力と経験がちぐはぐなんだ。経験のわりに能力が足りていないと言うか、能力以上の経験があるのか。どちらなのかは解らないのだけど、本来ある程度比例すべき二つが噛み合っていない。経験だけが妙にある相手だった。だからこそ、三人の中で一番厄介だった。力があるより、経験がある方が何倍もやり辛いから。

「くう、あああああ」

紫の女神の額に手で触れ、瞬時に魔力を収束、雷に変換する。魔法と言うほどのものでも無い。ちよつとばかり身体を痺れさせるために放った雷撃だった。全身に電撃が行き渡ったのだろう。力なく紫の剣を落とし、その場にへたり込む。

「ネプテューヌ!?!」

「あらあらあ。油断しちゃだめよ、ネプちゃん」



「余所見をしている余裕があるのかな？」

二人の女神のうち、驚いているノワールに狙いを定める。単純にそっちの方が仕掛けやすかったから。それにしても、虹の女神は仲間がやられたと言うのどこか楽しそうに笑っている。それが、妙に気になった。

「く、このー」

迫る紅に即座に対応し、黒き大剣を振るう。だけど、動揺していたところで放った一撃だ。太刀筋は単純であり、明確だった。袈裟切りに振り下ろされる大剣の腹に手を当て、斬撃の軌跡をずらす。正面。ノワールと一瞬見つめ合う。

「なあ!?」

「まだまだ、だね」

驚きに染まるノワールに、そう告げる。そのまま紫の女神にしたように額に手を伸ばす。自分も同じことをされるのだろうかと思っただか、ノワールが強く目を瞑った。そのまま雷撃を流そうとして、

「あう!？」

やめた。トンツと、左手で額を小突くと、真紅の翼を大きく展開し舞い上がる。ノワールが訳が分からないと言った様子で目を白黒させているが、それを眺めている余裕は無かった。

「やっぱりねえ……、ふふ、すごいわあ、貴方。ブレイク・ザ・ハードって言ったかしら?」

「なにが、かな?」

「女神三人を相手に、遊んでる事がよ。アタシを含めた三人の女神を歯牙にもかけてないわよね。それが凄くてえ、面白くて、だけど、とおつても不満なの。私たちは貴方を見ているのに……、貴方は私たちを見ていない気がするわあ」

虹の女神がにつこりと笑みを浮かべながら言う。同時に、女神の魔力によって作られた雷が降り注ぐ。それを紅の刃に紫電を纏わせ迎撃しながら考える。

「へえ、鋭いね。確かに僕は君たちの事を見ていない。別の者を見ているかもね」

「やっぱりねえ……。それがすっごく不満なお。相手にされていないって言うか、馬鹿にされているのかしら」

確かに虹の女神の言う通り、僕は黒の女神と紫の女神に自分の世界に居たあの子たちを重ねていると思う。それは、確かにこの世界を生きる彼女たちからすれば馬鹿にされていると感じる事なのかもしれない。

「あまり否定はできないけど、一つだけ明確に言える事があるよ。少なくとも虹の女神、君の事は誰とも重ねていない。黒の女神と紫の女神は別だけどね」

それでも、目の前にいる虹の女神は初めて見る顔だった。だから、彼女に関していえば誰かを重ねていると言う事は無い。他の二人はどうしても重ねてしまうが、この世界に来て、本当の意味で初めてであったのは、目の前にいる虹の女神だと言える。だから、彼女に関していえば、何の偏見も無くありのままを見ていると言える。

「あらあら、嬉しい事言ってくれるわねえ。けど、駄目よお？ そんな事言ったところで、加減はしてあげられないんだから」

「必要ないよ。手加減しようがしまいが、あまり関係ないしね」

「そう。なら、見せてよ。貴方の実力を」

虹の女神は深い笑みを浮かべる。そして、その手に持つ蛇腹剣にシエアを集め、先程よりも遥かに強く帯電させると

「本気で行くわよお」

無造作に振り抜いた。先の斬撃よりも遥かに早い斬撃。僕を捕える様に弧を描く。だから、

「なら、見せてあげるよ」

その前に蛇腹剣を掴みとる。自身の展開するプロセツサユニットに魔力を重ね、帯電する蛇腹剣を掴み、それに逆流させるように紫電を流し、虹の女神の放つ雷を侵略していく。そして、

「——っ!？」

「プルルート!？」

紫電の雷が虹の女神を飲み込んだ。数度びくりと震える。そして、ゆつくりと蛇腹剣を取り落とし、倒れ伏した。その様子を見たノワー

ルが、虹の女神に駆け寄る。それを黙って見送る。少し苦笑が浮かんだ。どうやら僕は、悪役が板についてきたようだ。

「さて、残りは君一人だね。まだやるかい？」

「っ、まだ、私は負けてないわ！」

「そうだね、だけど、その二人を放って置くのかい？」

倒れ伏す二人の女神に視線を向ける。

「それは……」

「僕の役目はもう終わったからね。無理に戦う必要は無いよ。だから、見逃してあげる」

悔しそうに歯を食いしばるノワールに背を向け、紅の翼を展開する。僕を召喚した二人が逃げるには十分な時間を稼げていた。だから、今回はこれで良いと言える。けど、これ完全に悪役のやっている事じゃないだろうか。自分はそう言う星の下に生まれたのか。割と真剣に考えてしまう。まあ、そう言う事を考える余裕があるのが嬉しくて、ちよつとだけ笑ってしまう。

「ブレイク・ザ・ハード。覚えておきなさい！」

「君たちを忘れられる訳は無いよ。また、会おうね」

そう言い与えられた紅き翼で空に舞い上がる。

「今度会ったら、絶対にぎやふんって言わせてやるんだからー!!」

「くす、楽しみにしておくよ」

怒ったように叫ぶノワールの声を聴き、その場を後にする。正直言えば、出会いとしては最悪と言っても良いかもしれないけど、前の次元のノワールとも出会いは最悪だった。けどなんだかんだ言っただけで仲良くなれた。だからか、今回もどうにかなるだろうと楽観的に考えてしまっていた。

こうしてこの次元での女神との邂逅は終わったのだった。

### 3話 運命の相手

超次元ゲームギョウ界。女神たちと犯罪神による長きに渡って続いて来た戦いに大きな区切りがついてから、数年の月日が流れていた。世界を救うために呼び出された人間により成された奇跡。闘いの歴史に終止符が打たれ、各々の国を守護する女神たちが戻った事で各国は着々と復興が成されている。

闘いが終わった時、特に黒の女神姉妹は深い傷を負っていた。それでも国がかつての姿を取り戻すように、受けた傷はやがて癒える。深い傷跡を残す事になるかもしれないが、癒えない傷では無かった。最期の瞬間、穏やかな笑みを浮かべ消えていった異界の魂を想い出すと、時折切ないような寂しい様な気持ちちが湧き上がる事もあるが、それでも彼によってなされた救世は過去の出来事となりつつあった。

「久しぶりね……、あそこに行くのは」

異界の魂がその存在を賭して犯罪神の脅威を振り払ってから流れた数年の月日。国を守る女神が何時までも嘆いている訳には行かなかった。救世が成された直後は何かあるたびに想剣の前を訪れていたノワールだったが、やがて剣の元を訪れる頻度は下がり、今では数か月に一度自身の目で剣を確認し、手で触れその存在を確かめる程度になっていた。過ぎ去った時間が、心に負った傷を癒していた。だから、黒の女神が過去の思い出に浸る必要が無くなって来ていると言う事であった。

失った直後は、胸が張り裂けるほど苦しかった。それでも、その痛みは消えないものでは無かったのだ。

「見ててくれる、かな？　いつ見られても恥ずかしくない様に、これまで頑張ってきたんだから……」

黒の女神は遠くに見える街並みを愛おしげに見つめながら、誰ともなしに口走る。その言葉は今この世界に居無いものへ向けた言葉。異界の魂へ向けた言葉であった。懐かしさとほんの少しの寂しさを声音に乗せながら、黒の女神は想いの剣の元に向かう。

思えば随分の長い間訪って居なかつたなと、ノワールは思いを馳

せる。大事な友達が作ってくれた救世の為の剣。それも、遠い過去の出来事のように思える。想い出そうとすれば、護れなかった悲しみが心の奥底から押し寄せるが、それは耐えられないものでは無くなっていた。一人で涙を流す事も気付けばなくなっている。大事な人の死を乗り越えた。そう言う事であった。

「誰か居る……？」

そしてノワールが想剣の元に辿り着いた時、先客を見つけた。ラスティションの教会の制服を着た青年だった。想剣の管理は教会が受け持っている。担当が来ているのだろうかと思いつつ、ノワールは剣の元に向かう。別に、部下に隠すような事でもなかったから。

「苦勞様」

「……これはノワール様」

想剣の前で祈るように頭を垂れていた青年に、ノワールは声を掛ける。すると、その声に驚いたのか振り向いた青年の表情に驚愕の色が宿った。その素直な反応が可笑しくて、ノワールは少しだけ吹き出してしまった。

「あんまり笑わないで下さいよ」

「あはは、ごめんなさいね。なんだかあなたを見てると可笑しくてね」  
「何かすごく失礼な事を言われた気がするんですが……」

そんなノワールの様子に、青年は不満そうに零す。

「それで、救世の剣に何か御用ですか？」

「ええ。久しぶりに様子を見に、ね。大事な人が遺してくれたものなのに、随分長い間ほったらかしにしていた気がするわ」

気を取り直したように聞く青年に、ノワールは素直に答えていた。隠すような事でもないと言うのもあるが、何となく目の前の青年には話しても良いかと思わせる何かがあった。だから黒の女神は、少しだけ昔を思い出すように目を細める。

「大事な人、ですか？」

「ええ。私とユニの大事な、大事な友達に遺してくれたものなのよ。これがあったから、犯罪組織に打ち克つ事が出来たの」

「そうですか……」

大事な思い出を語る女神に、青年は神妙に頷く。女神の心情を慮つてか、彼も悲しげな表情をしていた。

「……だから、ユニ様は毎週来られるんですね」  
「毎週？ そんなにあの子が……？」

「はい、そうですよ。僕だけが管理をしている訳ではありませんので、毎回見ている訳ではありませんけど、毎週決まった日にここに訪れると言う事はみんな知ってますよ。その日になると剣の前で一時間ほど居られるそうです。もう、ずっと続いているようですよ」

青年に教えられ、ノワールは幾分か驚きを示す。自分は随分と長い間来ていなかったと言うのに、妹は欠かさず来ていた事に少なくとも驚きを得ていた。

「時折何か話している事もありましたが、何か報告をされていたのかもしれないですね。雨の日も風の日も、ご自身の体調がよくない時にも来ていたそうです」

「そう、そんなに……」

青年の言葉に頷く。ユニが四条優一に懐いていた事は知っている。だが、どれだけ想っているか知っていた訳では無かった。なんとなくは解っていたが、だからこそ聞けなかった。聞かなかったのではなく、聞けなかった。

「はい。そのお友達と言うのは、ノワール様にとってどういう方だったんですか？」

「大事な友達だった……。何時も護ってくれて辛いときは支えてくれた。決断できない時には背中も押してくれて、ずっと優しくしてくれた大切な友達。そんな彼に私は到底許せないような酷い事をしちやっただのに、それでもずっと助けてくれた、大事な人だった」

ノワールは青年の問に、正直に自分の想いを零していた。長く一緒に居た訳では無い。だけど、ずっと優しくしてくれた相手だった。

「ノワール様は、その人が好きだったんですか？」

「……解らないわ。ただ、大事な人だったのは解るわ。あはは……失ってから気付くなんて、馬鹿よね。偶にね、ほんとに偶にだけど、逢いたくなるのよ。逢えないって解ってるのに……」

「ノワール様……」

ぽつぽつとノワールは青年に零す。もう逢えない事は解っている。だって、ノワール達女神が異界の魂を殺したのだから。直接殺したわけでは無い。だけど、そう言う運命を課してしまっていた。

「ただ、一緒に居てくれるだけで良かった……。どうして、貴方はいないの……?」

ノワールの言葉は風に溶け入るように消える。青年はただ黙って聞いていた。

「きつと好きだったんですよ……」

女神の吐露した言葉を聞き、青年はぽつりと零した。その眩きに、ノワールは寂しげに微笑むだけで、何も答える事は無かった。

「ごめんね。こんな話をして」

「いえ、そんな。聞いたのは僕ですよ。僕の方こそごめんなさい。辛い事を思い出させてしまいました」

謝罪するノワールに、青年は慌てて手を振りながら答える。その様子が可笑しくて、そしてちよつとだけ可愛くてノワールは最初にあった時の様に笑みを浮かべた。

「あ……」

「なに、かしら……?」

少し驚いたように零す青年に、ノワールは如何したのか聞く。

「その……、ノワール様は笑っている方が良いです。悲しそうにしてるより、ずっと良いです」

「な、なな、何言ってるのよ!」

それに対して、青年は少し困ったようにするも、意を決したようにいった。黒の女神は笑っている方が魅力的だと。

「僕も、ノワール様の友達のように頑張らなきゃいけませんね。僕なんかじゃノワール様を支えられないかもしれないですけど、何か今の話を聞いてると、支えて上げたくなりました!」

純粋な好意を伝えられることに慣れていない所為か、変に慌てるノワールにそう青年は告げる。青年に、今のノワールは大事な人を失った女の子にしか見えなかった。そう思うと、放って置けなかったからだ。

「貴方が……ね。本当にできるのかしら……?」

「やる気だけはあります」

「もう、やる気だけあっても仕方ないわよ!」

元氣よく答える青年に、ノワールは呆れたように返す。

「うう、手厳しい」

「当たり前よ。私を、女神を支えるって言うのは簡単な事じゃないんだから。私の隣に立って、一緒に戦えるくらいでないと。少なくとも、あの人はそうしてくれたわ。だから、私はそれ位求めるわよ。やる気だけあっても駄目なんだから」

「凄かったんですね、その友達」

女神を支えると言う事はそれほど簡単な事では無い。だから、やる気だけあっても駄目だった。

「当たり前よ。けど、それでも貴方は支えてくれるのかしら?」

「ぜ、善処します」

黒の女神の言葉に、青年は引き攣りながら答える。正直できるとは思わないけど、だからと言ってノワールを放って置けなかったから。支えてあげたい。そう思ってしまう。

「……、良いわ。なら使ってあげる」

「……へ?」

だから、そんな黒の女神の言葉を聞いた時、一瞬意味が解らなかった。

「もう、呆けてるんじゃないわよ!。そこまで言うなら、貴方を私の秘書官として使ってあげるって言ってるの」

「え、ええー!?!」

その場に驚きの声上がる。言われた本人が一番驚いていた。支えたいと言った。だけど、本当に支える事が出来る立場にされるとは思ってもいなかったから。



「こら、何を驚いてるのよ。それとも、さっきの言葉は嘘だったのかしら？」

「そ、そんな事はありませんけど……、ふつう驚きますよ！」

「女神の補佐は普通じゃすまないのよ。教祖のケイとか見てると、解るでしょ？」

「ああ、確かに……」

教祖の名を出された瞬間、青年もアツサリと納得する。

「じゃあ、明日から頼むわよ。秘書官さん」

「あ、はい！」

こうして黒の女神とその秘書となる男が出会う事となった。それは、運命の出会いだった。

「お前は何だ？」

「また、会うなり行き成りだね」

女神たちを退けた後、僕を呼び出した黒の魔女とネズミ君の二人と合流していた。二人の居場所、と言うよりは黒の魔女の居場所は何となく解った。彼女が僕を召喚したようで、その所為なのか、魔力的なモノかはたまたままったく別のモノなのかは解らないけど、何かが繋がっていた。だから、感覚的に互いの居場所が解ってしまった。とは言え、どちらの方角に居るのか、何となく解る程度だけど。それでも、合流するには充分だった。

「意味解んないっちゅよ、オバハン」

「オバハン言うな！ 私とてイマイチ良く解らんのだ。この男を見ていると懐かしい様な、今すぐ叩き潰したいような、だけどそうしたくも無いと言う訳の分からん気持ちになる。一体何なんだ！」

黒の魔女とネズミ君が言い争う。それでも二人一緒に行動しているし、特別剣呑な雰囲気と言う訳でも無く、何時もの事なのだろうか。言い争いを眺めながら、自身の展開しているプロセッサユニットの解除を試みる。

「ああ、普通に外せるのか」

最悪解除できない事も予想したけど、普通に解除できていた。紅の外套と翼が姿をけし、元の自分の姿に戻る。ただ、その手には長釣丸は無い。異界の魂として使っていた剣だけが無くなっていた。

「その力もだ。それに、ブレイク・ザ・ハードと名乗っていたな。その名もまた何か引つかかる」

「だめっちゅこのオバハン。それじゃ何でもかんでも因縁つけてるだけっちゅよ。酔っ払いとおなじっちゅ！」

「ええい、違うわ！ 私は素面だ！ って、そんな事はどうでも良い！」

二人のやり取りに、苦笑が浮かぶ。何と言うか入るタイミングがつかめない。

「とりあえず名前を聞かせて貰いたいな。僕の名は、四条優一。この世界に呼び出された、紅き魂だよ。ブレイクはもう一つの名前かな」  
「オイラはワレチューっというっちゅ！ よろしくだっちゅ、四条のアニキ！」

「ああ、よろしくね」

ネズミ君の言葉に小さく笑いながら答える。前の世界でもネズミ君にはアニキと呼ばれていた。その所為もあり、どうしてそう言うのか見当がついてしまったから。それが懐かしくて、どこか嬉しくて、笑みが浮かぶ。

「コラマテ、何を馴染んでいるのだネズミ」

「だって、おいらたちがいるのは女神の相手をしてくれたアニキのおかげっちゅ！ だから敬うのは当然ちゅ！ と言うか、あのおっかない女神と戦えるだけでやばいっちゅから」

「あはは……」

ネズミ君の言葉にどう答えればいいのか解らなくなってしまう。褒められているのか貶されているのか解り辛い。

「まあいい、我が名はマジエコヌ。紅き魂、貴様を呼び出した者だ」

「ああ、だからか……」

その名を聞き、漸く合点が言った。どうしてマジックに懇願された

のか、それがその名を聞いた時に思い至った。多分この人は、この世界での犯罪神マジエコノヌなのだろう。黒の女神であるノワールや紫の女神であるネプテューヌさんが居た様に、犯罪神もまた存在すると言う事なのだろう。

だけど、僕が戦った犯罪神とは全く違う。強い力を感じるけど、犯罪神の様に絶対的なモノは感じなかった。何より、破壊神では無い。あの時感じた、世界を滅ぼす者の様な鬼気迫るものを感じない。この世界でのマジエコノヌと言うのは、前の世界程規格外な存在では無いのだろう。

「どうかしたのか？」

「いや、こっちの話。気にしないで」

「ふん、まあいい。お前の召喚主は私だ。つまり、私はお前の主だ。解るか？」

「……一応そうなるね」

マジエコノヌの言葉に頷く。一応はそう言う事である。

「早い話が貴様は我が同胞と言う事になる」

「……ふむ」

「つまり、その力を私に貸せ」

マジエコノヌは僕を見据え言い放つ。

「貴女は何を目的に僕を呼び出したのかな？」

だから、僕はマジエコノヌに問い返していた。彼女が呼び出した理由こそ、この世界での僕の存在意義となるから。

「不本意ながら、女神たちは私より強い。そして敗れかけた」

「と言うか、完全に負けてたつちゆね。アニキが来たからこそ、こうして逃げ切れたわけだつちゆ」

「うっさいわー！ ……ごほん、そしてそれが許せなかった。女神たちに負けたくなかった。だから貴様を呼び出した。女神に負けたくない。それが私の願いだ」

「成程。女神に負けない為に僕が呼び出されたと言う事か」

女神に負けない為に呼び出されたのが今回の僕だった。つまり、それが僕に課せられた誓約。正直、解釈が難しい願いだった。文字通り

何度も戦い、その度に負けなければいいのか。それとも女神を倒せば終わりなのか。少しばかりわからない事もある。けど、

「つまり僕の存在意義は、貴方が女神に負けないようにする訳だね。その範囲内なら、貴女の言葉に従うよ」

要するにマジエコノヌを護る限り僕はこの世界に居られると言う事だった。前の世界では存在を賭して挑んだ相手だった。それを今度は全力で守る。運命と言うのは中々に皮肉なものだと笑いたくなる。……考えてみれば、これは運命でも何でも無い。全部愉快犯に仕組まれた事だった。だって、僕をこの世界のマジエコノヌが召喚できるようにしたのは、クロワールなんだから。

「どういう事だ？」

「要するに、貴女が女神に負けそうな時には力を貸すと言う事だよ。追い返すのには力を貸すけど、攻める事はしないっ感じかな。僕は僕の都合で、できる事なら女神とはたかいたくないからね」

「つち、微妙に使えんでは無いか。女神に負けない事はできても、勝つための手段が増えた訳では無い、か」

「勝てないオイラ達が負けない手札を得ただけでも、充分だと思っちゅよ」

無然としながら吐き捨てるマジエコノヌを、気にするなと言うようにネズミ君がこちらを見る。

「とりあえず、これを持つとけ」

「つと、携帯かな？」

マジエコノヌが投げ渡した者を受け取る。それは、前の次元で渡されたモノより少しばかり古い古い携帯端末だった。それにしても魔女が携帯を持っているのは面白い光景である。

「私達は七賢人と言う組織に所属している。不本意だが、その意に沿って動かなければいけない時もある。そう言う時には連絡をするから、もっておけ」

「七賢人？」

「詳しくはネズミにでも聞け」

「ん、解ったよ」

「あ、オイラの番号を登録するつちゅ」

マジエコンヌに渡された携帯端末を弄り、ネズミ君の番号を登録する。初めて使うもののため少しばかり手間取ったけど、直ぐに登録する事が出来た。

「暫くは好きに動いている。虹の女神以外に紫の女神と黒の女神が現れた所為で、色々やる事が出来た。この後白の女神と虹の女神以外にも国を持つかも知れん。私は私でやらせてもらう」

「なら、アニキにはオイラがつくつちゅよ」

「ああ、ありがとう」

「ふん、では用があれば連絡する」

そう言い、黒の魔女は去って行った。その場には僕とネズミ君だけが残った。さて、どうするべきか。

「とりあえず、七賢人って何なのか聞いても良いかな?」

今のところ優先すべき事は何もない。疑問に思う事を、ネズミ君に聞いてみる事にする。

こうして僕を呼び出した者達との出会いが終わったのだった。

## 4話 彼の消えた世界で

「むう……」

ユニは釈然としない気持ちを持って余していた。一体何がどうしたと言うのか。自分に宛がわれた書類を淡々と処理する傍ら、そんな事を考える。

最近彼女の姉でありラステイションの女神であるノワールが、以前のように良く笑うようになっていた。ユニの姉であるノワールはまじめを絵に描いたような人柄であるため、いつも元気に笑っているようなタイプでは無いのだが、ラステイションに暮らす人々を見詰め優しい笑みを浮かべる事が多かったのを、妹のユニは良く知っていた。

だけどここ最近まで、姉が心の底から楽しそうに笑う事は大きく減っていたとユニは思う。その理由は、考えるまでも無かった。数年前に、この世界を、女神と犯罪神による悲しみの連鎖を断ち切る為だけに呼び出された異界の魂。彼による救世と別れがあったからだ。

女神を救うために呼び出された人間が、文字通り命を賭して自分たちを救ってくれた。結局自分たちは何もしてあげられなかったのに、それでも君たちに出会えて良かったと言い、穏やかな笑みを浮かべ消滅した友達の事を思うと、今もユニは胸を締め付けられる。

何の関係も無い世界に呼び出され、悲劇の連鎖に終止符を打った。歴代の女神が誰一人として成し得なかった偉業を成し遂げた人間は、お世辞にも強い人間では無かった。寧ろ、四条優一と言う人間だけを見れば、その弱さの方が目につくかもしれない。元の世界での四条優一は、自分一人ではまともに生きる事の出来ないような境遇であり、ある種の逃避願望すら持っていた。そんな人間に失った世界をもう一度見せ、失った自由をもう一度与え、離れていった人の温もりをもう一度教え仮初の希望を与えてから、再び絶望の淵に叩き落としていく。女神たちは、例え自分たちの意思では無かったとしてもそうしてしまっていた。生きる希望を失いかけていた者にもう一度希望を持たせてから、希望と言う名の光が差し込まない奈落へと叩き落としていたのだ。その時の異界の魂の気持ちを慮ろうとするとユニは、辛く

て、悲しくて、何よりもそんな友達の嘆きに気付かなかった自分が情けなくて、声を出す事すらできなくなる。そしてその嘆きに気付いていたのが、敵である犯罪組織の面々だけであると言うのが、四条優一が自分を押し殺していた事を嫌と言うほど明確に突付ける。

実際に異界の魂の立場になった訳でもない自分がこれ程辛いのに、如何して四条優一は世界を救えたのかと考えると、またユニは辛くなる。だって、それはただ耐えただけとしか思えないから。辛いのも、悲しいのも、怖いのも、自分が既に死んでいると言う残酷すぎる事実も、女神たちの戦いの歴史とその中で生まれた悲愴であり悲壮な想いも、ただただ歯を食いしばり受け止めただけとしか思えないから。様々な不条理を押し付けられ、悲しすぎる想いを受け止め、自分を殺す覚悟を決め、それでも最期の時には穏やかな微笑みを浮かべて逝った友達を想うと、涙が零れそうになる。

「なんで、なの……?」

だからユニには、今姉が優し気な笑みを浮かべている事が理解できなかった。お姉ちゃんもユウに一杯助けて貰ったはずなのに、アタシと似た想いを持っている筈なのに、どうしてそんな風に笑えるの？

新たに加わった秘書官を出来の悪い子供を慈しむように見るノワールを見詰め、ユニは何とも言えない気持ちに襲われる。

「ノワール様。確認お願いします」

「どれどれ……。ここここ。間違ってるわね」

「ええ……!?!? す、すぐ確認します!」

「ええ、書類は正確に願いまするわね」

「申し訳ありません」

秘書官である青年からノワールは書類を受け取りさつと間違いの確認をし、直ぐ様修正の必要のある部分を指摘する。今度こそ修正する必要が無いと思いい度も見直した書類をあつさり駄目だしされ、秘書官はがっくりと肩を落とす。

「まだ間違いはあるけど、かなり正確になって来てるわ。女神の仕事を初めて数日でここまで補佐できるのなら大したものよ」

「……っ、あ、ありがとうございませす!」

「これでも貴方には期待してるんだからね」

「が、頑張ります！」

項垂れる秘書官に、ノワールは励ますように告げる。すると、途端に秘書官の青年は飼い犬が褒められたように嬉しそうに笑顔を見せる。

確かにミスはある。だけど、それを差し引いたとしても秘書官である青年は中々の速度で仕事を覚えていくようにユニも思う。ケイやユニと比べては劣るが、それでも並の職員よりもずっと物覚えは良い。だから、ノワールの言葉自体はユニも妥当だとは思っただけ、釈然としない。秘書官である青年は人当たりも良く、仕事に対する姿勢も真面目で好感を持てる相手な筈なのだが、何か気に入らない。ノワールが秘書官に笑いかけるのが、ユニは気に入らなかった。考える。そして、不意にノワールの笑みを見て思い至った。

「ユウは、もういらないの？」

そんな筈は無い。そう思いつつも、ユニは姉の笑みを見て考えると、えすにはいらなかった。ノワールの笑みからは憂いや嘆きの色が消え、ただ穏やかな色をしている。優しい色、と言っても良いだろう。それがはつきりと感じられる。その笑みの中に、悲しみは何も感じられないのだ。それが、ユニには悲しかった。今のノワールからは、悲しみが感じられないから。それはまるで、四条優一と言う人間が姉の中では過去の人物となっているように思えたから。そんな筈は無い。そんな事がある筈が無い。そう思いたいのには、ユニは今のノワールを見ていると解らなくなってくる。

確かに秘書官は誠実で仕事に対する姿勢も真面目の一言であり、何よりもラステイションに対する信仰心に溢れている。だから、彼を抜擢した事に関しては意を挟むつもりはユニには無い。いや、いきなり秘書にするのは流石にやり過ぎだとは思うが。物覚えが良いとはいえ、ケイ程規格外の人材と言う訳では無いから。それでも、仕事だけの関係ならばユニは此処まで考える事は無かっただろう。だけど、ユニにはノワールが秘書官に何か仕事以外の期待をしているのではないかと考えてしまう。それが何かまでは解らないが。



「ユニ、少し良いかい？」

「え……、あ、ケイ。なにかしら？」

「休憩がてらに、少しお茶でもどうかな？」

ぐるぐると嫌な思考に陥っていたユニに、声を掛けてきた人物がいた。ラスティシヨンの教祖、神宮寺ケイである。事務処理をしつつ、あれこれと思考が脱線していたユニは、ケイが直ぐ近くまで来ている事にまるで気が付いていなかった為、驚きに目を丸くする。そんなユニの様子を見据え、ケイは何時もの薄い笑みを浮かべユニに休憩の提案をする。

「あ、うん。それじゃ、貰おうかな」

「では、少し席を外そうか。ノワール、ボクとユニは少し先に休憩させてもらおうよ」

「ええ、解ったわ」

唐突に振られた休憩の誘いを訳の分からぬままユニが受けてしまうと、そのまま有無を言わせぬ内にケイはノワールに少し席を立つと告げる。そんなケイに特に何か言う必要も無いため、ノワールはあっさりと許可を出した。そのままケイはユニの手を取り、部屋を後にする。ユニにはケイの行動の真意が計り切れず、手を引かれる儘についてく。

「さて……と。君はケーキには何が良いかな？」

「ケーキ？ ケイが？ アタシと？」

「そうだよ。偶には良いかと思ってね。実は買って来ておいたんだよ」

あまりの予想外な展開に、ユニは素っ頓狂な声を上げる。あの神宮寺ケイが、ユニと二人でケーキを食べると言いだしたのだ。女神候補生のユニから見ても、ケイは一癖どころか三つも四つも癖がある。そんな相手がケーキを食べようと誘ってくるとは予想だにしていなかった事態であった。失礼極まりない反応であるのだが、ケイは気分を害した様子も無く、笑みを浮かべたまま準備をしていく。

「アンタがケーキを買うなんて……、明日は雪でも降るのかしら？」

「これはまた、古典的な表現だね。似合わない事は否定しないが。飲

み物は何が良い?」

「あー、何でもいいわよ」

「ノワールが言うには四条君が甘いものには珈琲が合うって言うから、珈琲にするかい?」

「……そうする」

四条優一の名を出され、何となくユニはと言う用件で連れ出されたのか見当がついた。特に意を挟む事無く、珈琲を頼む。直ぐに器に注がれ、チョコレートケーキであるザツハトルテと共に渡される。

「さて、どうぞ」

「ん、ありがとう。……苦い」

「ふむ、ユニにブラックはまだ早かったかな」

差し出された珈琲を一口含むと、口の中に広がる苦味に顔を顰める。珈琲の苦味にやられたのが露骨に顔に出た為、ケイは苦笑を浮かべながらミルクと砂糖を渡す。それをユニは無言で受け取り、珈琲に注いだ。

「アタシにはこれぐらいで良いかな」

「そっか。美味しいかい?」

「……うん。甘いものを食べたら、少し落ち着いたかも」

「それは良かった」

ケーキをつつき、珈琲に口をつけ、幾分か落ち着いた様子のユニの言葉を聞き、ケイも自分のケーキを一口食べる。数瞬、沈黙が辺りを支配する。

「お姉ちゃんは、ユウの事を忘れようとしているのかな?」

ぽつりとつぶやいたのはユニだった。何気なく、だけど万感の思いが宿った呟き。それを聞いたケイは一度目を閉じると、考えを即座にまとめ口を開く。

「ユニはさ、悲しみを乗り越える事についてどう思う?」

「え?」

それに対する返答は、質問と言う形で返される。どう言う心算なのかユニには解らない。だけど、考えなきやいけない気がした。

「悲しみに暮れて前に進めないでいる。それは良い事かな? 悪い事

かな?」

「それは……」

「悲しんだことが遠い昔の事になり前に進む。それは良い事なのかな? 悪い事なのかな?」

「……」

良い事なのか、悪い事なのか。そんな事決められるはずがないとユニは思う。そもそも善悪の問題では無い。悲しむ事は悪い事なのか。進めない事は悪い事なのか。或いは乗り越える事が必ずしも良い事なのか、進む事が良い事だと言えるのか。物語では良く、『悲しみは乗り越えなければいけない』と聞くけど、それが本当に良い事なのか悪い事なのかと問われると、答える事が出来ない。

「答えられないかい?」

「だって、そんなの良いか悪いかで決める事じゃ……」

「そうだね。そう言う価値観で決める事じゃない。誰かが決める事じゃないんだよ」

悩むユニに、ケイは何時もの笑みを浮かべたまま肯定する。

「ユニは、ノワールが秘書官君を抜擢した事が気に入らないようだね。正確に言うならば、ノワールが秘書官君を傍に置いているのが気に入らない。彼を差し置いて、秘書官君と笑っているノワールが気に入らないのかな?」

「っ、気付いてたの?」

「ふふ、何年君たちと一緒に居ると思っっているんだい?」

「むー、一方的に見透かされてるのは良い気がしないわね」

につこりと笑みを深めるケイに、ユニはむくれる。数年の時が経っているが、二人がずっと近くに居た事は変わりが無い。昔と変わらぬ信頼があり、関係があった。

「ユニはノワールの考えが解らない。どうして四條君が居ないのに笑っているのか」

「うん」

ケイの言葉にユニは素直に頷く。

「逆に聞けけどユニ。どうしてユニは、今のノワールが気に入らない

？」

「どうしてって、それはお姉ちゃんがユウの事を忘れようとしているみたいだから……」

「忘れるのは、悪い事なのかな？」

「っ、駄目に決まってるでしょ!？」

あまりの言葉に、ユニは声を荒げた。幾らケイの言葉とは言え、見過ごす事は出来なかったから。

「ああ、すまなかつたね。言葉が悪かったよ。悲しみを乗り越えるのはダメな事なのかな？」

「それは……」

「答えられないよね。だって、そう言うものだから」

「でも……」

それは先ほどの質問の答え。良いか悪いか。そう言う価値観で決める事はできない話だった。

「ずるい言い方をしたね。要するにボクが言いたいのは、どちらでもないけど、どちらでもあるって事なんだよ」

「どういう事？」

ケイが言おうとしている事が解らず、促す。

「乗り越えるべき悲しみは確かにある。けど、悲しみは全て乗り越えなきゃいけないかと言えば、そうでもない。悲しい事を思い出して涙を流すのもまた、正しい事なんだと思う」

「良くも悪くもある」

「ノワールが秘書官君に支えて貰って悲しみを乗り越えようとしているのも、ユニが想い出を大切にして彼を忘れないようにしているのも、どちらも間違っではないんだよ」

「そうかもしれないけど……」

それでも納得できないのか、ユニは釈然としないと言った感じの表情を崩さない。

「それにね、ユニ。君は近過ぎるから解っていないだけだよ。ノワールは彼を忘れた訳では無いよ。どちらかと言えば寧ろ……、忘れられないから秘書官君に縋っているだけなんだと思う」

「忘れられないから……?」

「ノワールと彼が一緒に居た時の事もボクは良く知っているからね。どれだけノワールが四条君を大事にしていたのかも知っている心算だよ。だからこそ言える。失った悲しみを自分だけで埋められないんじゃないかな。誰かに支えて貰って、乗り越えようとしているんだよ」

「それでも、アタシは嫌だよ。大事な友達が死んだのに、アタシ達を助けるために命を賭けてくれたのに、そんな人の死を乗り越えるなんて嫌だよ……」

諭すように言うケイに、ユニは涙をこらえながら否定する。大好きな人が、好きだった人の死を乗り越えようとしている。それがユニには耐えられなかった。悲しみに暮れている事が良い事だとは思わない。だからと言って、乗り越える事が正しいとも思えなかった。それは、回答の出る事の無い問いであると言える。

「ユニ。無理に越える必要なんかないんだよ。悲しいなら悲しんだままで良いんだ。何が正しいかなんて決められる事じゃない。だから、ユニはユニの想いを大事にしていれば良いんだよ」

「解んないよ……」

「そうかもしれないね。直ぐに答えの出る類の問題では無いよ。だから、納得できるまでゆっくり考えると良いよ。ただ、ノワールと秘書官君を嫌ってあげないでほしい」

「うん……」

ケイの言葉にユニは小さく頷くと、残っていた珈琲を飲み干し、その場を後にした。

「……少し諭し方を間違えたかもしれないな。ユニにはああ言ったけど、ボクだって納得できているわけでは無いのに、どの口が言うのか……」

ユニが去って行った方向を見詰め、ケイは困ったように零す。

「ノワール、本当にそれで良いのかい? 彼を乗り越えて、前を向いて進んで行くのか……? それで君は、本当に後悔しないのか?」

それは教祖であるケイではなく、ラストেশヨンの女神をずっと見

て来た女の子であるケイの疑問であった。誰もいない場所で零される問。答えが出る事なく消えていった。

## 5話 新たな出会い

「つまり、七賢人って言うのは、女神によって統治されている現状を良しとせず、女神以外の者たちで平等な世界を作ろうと言う集団なわけだね」

「平たく言えばそんな感じっちゆね」

「成程ね……」

七賢人の事についてネズミ君に様々な事を聞き、大雑把にまとめる。要するに、七賢人って言うのは女神が国を動かしている現状を良く思っていない者たちの集まりらしい。言ってしまうえば女神による統治と言うのは、変わる事の無い王政。見方を変えれば独裁と言えなくも無い。元の次元の女神たちを知っているけど、確かにそう言う面がある事は否定できないと思う。前の世界での話だけど、女神が国民の事を慈しんでいた事は良く知っていた。今の世界はその世界と極めて似た世界であるから、この世界の女神たちも国民の事を大事に思っていると思うけど、それを全ての人間が理解し良く思っている訳では無いのだろう。

そう頭では理解できるけど、色々と複雑な心境だった。僕は元々女神を、世界を救う為に呼び出された存在である。そして女神たちに出会い、救世を成していた。文字通り魂を賭して護ったものを否定されたような気がしたから。

「アニキは、七賢人には賛同できないツちゆか？」

「そうだね。僕は女神たちが好きだから。大切な友達を護りたかった。だから僕は此処まで辿り着いた。今の僕があるのは、女神のおかげだからね」

心配そうに尋ねてくるネズミ君に、苦笑を浮かべながら答える。それは、前の世界で成した事。犯罪神との戦いの顛末。女神たちが好きだったから護り抜いた。その想いを否定されているようで、少しだけ寂しかった。

「別に、アニキはそれで良いと思うっちゆよ。呼び出したオバハンが七賢人だったって言うだけだっちゆ。アニキはアニキの想いを大事

にするといいつちゅ」

「と言うか、僕の話を通じてくれるんだ」

「何と言わなければならないか、自分でも不思議なんつちゅけど、アニキが嘘を言っているとは全く思えないんつちゅよ」

七賢人の話を聞きながら、ネズミ君にも僕の事を語っていた。世界を救うために呼び出された事。女神と一緒に戦った事。敵対した事。歴代の女神たちの嘆きと想いを知った事。そして救世を成した事。そんなこれまでの出来事を思い出しながら話していた。我が事ながら、あまりにも突拍子の無い事なのだけど、ネズミ君は疑う事無く信じてくれていた。それが不思議だったけど、どうもネズミ君にも良く解っていないようだ。世界を超えたつながりだろうか？ 流石に有り得ないか。

「けど、話している時に寂しそうに笑うとことか、大事な事を思い出す顔を見ると、とても嘘とは思えないつちゅ。それに、あのおっかない女神を加えた三人の女神を相手にあっさり勝ったつちゅ。それだけでも只者じゃないつちゅから」

「あはは、そっか」

鞭は、鞭はもう沢山つちゅとぶるぶると震えるネズミ君に苦笑が浮かぶ。完全にトラウマになっているようだ。まあ、ノワールを楽しそうに投げ飛ばす姿から、なんとなく言う事が起きたのかは想像できる。アレが相手ならこうなるのも仕方ない気はするし。

「まあ、そういう訳であんまり女神とは事を構えたくないんだよ」

ネズミ君にそう言いながら剣を構築してみる。手の中に瞬時に一振りの剣が生まれた。剣の極地。想剣の中でなくとも、問題なく使える。異界の魂から別の存在に変わっていたけど、それでも充分に力は発揮できるようだ。

「それが、アニキの本当の能力つちゅか？」

「そうだよ。剣に特化した能力だね」

しげしげと眺めるネズミ君に剣を手渡す。そしてもう一振り生み出し、地に突き刺す。

「で、これが剣の極地」



「ちゅ、ちゅちゅ!?!」

そのまま二本、四本、八本とどんどん数を増やしていく。ネズミ君が驚きの声を上げた。百二十八本まで増やしたところで収拾がつかなくなつて来たので、全て消滅させる。

「まあ、こんな感じだよ。あとは魔法も使える」

「アニキって、何気に多芸っちゅね……。初めて会った時は変身もしてたし、これなら本気で世界を救えるっちゅ」

呆れたようにネズミ君が呟く。

「とりあえずこれからどうするっちゅか?」

「そうだね。さつきも言ったけど、できる限り女神と戦ったりはしたくないかな」

「なら、オイラは思いっきり顔が割れてるっちゅから、一旦プラネテューヌからでるっちゅ。七賢人の一人がルウイーにいるっちゅから、そっちに向かうって言うのはどうっちゅか?」

「ルウイーね。ちなみに何をしているのかな?」

ルウイーと言えば、白の女神が治めていた国である。白の女神と語り合った事は無いけど、その想いは本物だったと思う。この世界にも白の女神がいて国を治めていると僕を呼び出した主であるマジエコンヌも言っていた。だから、その名を聞いた時少しばかり懐かしい様な思いが過つた。

「詳しくはおいらもまだ知らないっちゅけど、ルウイーの重鎮になつているようだしきつと何か企んでるっちゅよ。でもまだ派手に動くような段階じゃないツちゅから、とりあえず暫く匿つて貰うのがいいっちゅ」

「ん、了解。それじゃ、ルウイーに行こうか」

「その前に少し連絡してくるっちゅ!」

そう言い、ネズミ君は携帯を取り出し連絡を取り始める。暫く黙つて携帯を手にしていたネズミ君が、相手と繋がったのか喋りはじめる。それを、やる事も無いのでぼんやりと聞いていた。

「さて、どうしようかな。と言っても僕にできるのはこれ位しかないけど」

ネズミ君がルウィーに居る七賢人の一人と連絡を取り、ルウィーに向かう事になったのだが、相手側の都合により何日かの時間が出来てしまっていた。その為、少しばかりプラネテューヌの街を散策して時間を潰していると言う訳であった。ネズミ君は七賢人として女神たちに顔が割れてしまっているから街中はあまり歩きたくないとようで、合流場所を決め今は一人で行動していた。僕も女神に見られているのだけど、幸いな事に見られたのはマジックに与えられた紅き守護者の姿であった為、街中でも自由に行動が出来ると言う訳だ。とは言え、何かをする宛てが多くある訳でも無い。だから、ある場所に向かっていた。ギルドである。

ネズミ君に聞いた話では、この世界にも以前僕のいた世界にあったギルドと同じシステムがあるらしく、誰でも依頼を受けれると言う事だった。だから、今回は仕事を受けるために向かっていた。

この世界にマジエコンヌに呼び出され、既に女神と戦っていたけど、それだけでは自分がどれだけの事をできるのか正確に把握したわけでは無かった。今の僕はマジックの魂と融合し、新たな世界に行く過程で新たな体を得ていた。感覚的には前とさほど変化は無いのだけど、気付いていないだけで何か変わっているかもしれない為、それを調べるついでに先立つ物を得ようと言う考えだった。ルウィーに行くまでの間、ネズミ君の脛を齧り続けるのはできれば遠慮したいし。そんな俗っぽい理由もあいまり、仕事を探していたと言う訳である。

「ここか。さてと、どんな仕事があるのか……」

やがてプラネテューヌのギルドの辿り着く。そのまま入口を抜け、受付に向かう。

「すみません、此処の利用方法を窺いたいんですが……」

「すみませ〜ん。仕事を受けに来ました〜」

そして受付の担当者に話しかけたところで、声が重なる。僕の少し後ろから聞こえたのは、独特に間延びするほんわかした感じの暖かな声音だった。

「あれれえ〜？ おにーさんもお仕事探しに来たのお？」

「え？ ああ、そうだよ。この都市のギルドは初めてだからね、最初に話を聞いておこうと思ってね」

偶然声が重なったせいか、女の子に声を掛けられていた。振り返る。ふんわりとしたくせ毛の女の子が此方を見ていた。数瞬、赤い瞳と視線が混じり合う。当たり前だけど、知らない女の子だった。だけど、何故かどこかで見た気がした。

「そっかあ。あたしとおんなじだね〜。……あれえ？ うーんと、うーんとお。おにーさん、どこかであつた事あるかなあ？」

「いや、多分初対面だと思うよ」

そんな筈は無いだろうと思つたところで言われた言葉に内心で驚きを示す。僕だけでなく、目の前の女の子もそう感じていたから。僕だけならば他人の空似か何かで、既視感を感じているだけだろうけど、女の子の方も同じように感じたのなら、単なる偶然とも思えない。

「そっかなあ〜？ どこかで見た気がするんだけどお」

「そう？ まあ、他人の空似じゃないかな？」

「う〜ん。そおかなあ？」

悩まし気に首をかしげる女の子の様子に苦笑が浮かぶ。初対面だけど、中々表情豊かな子のようだ。

「まあ、良いかあ。おにーさんも、お仕事に来たんだよね〜」

「うん。簡単な討伐関係にしようかと思つているんだ」

「そおなんだ〜」

気を取り直したのか、女の子が尋ねてくる。にこにこ柔らかな表情で聞かれると、特別隠す気も無いためあっさりと話してしまつていた。

「あ、申し訳ありません。討伐の依頼でしたら、本日は危険種討伐位しか残っていません」

「危険種ですか。ちなみにどの程度の相手ですか？」

危険種。並の冒険者では相手にならないほど強いと言われる魔物。前の世界で倒したシーハンターや、エレメントドラゴンなどが該当した筈だった。どちらも容易い相手では無かったけど、今の僕はあの時よりも遥かに強くなっている。余程の相手でもない限り、勝てると思う。聞いてみる。

「フェンリルヴォルフになります。とても少人数で相手に出来る魔物ではありませんよ」

「ほええ。危険種って、とおつても強いんだよね？」

受付の職員さんが一人で行くつもりならやめた方が良くと暗に言ってくれた。女の子も出された名前に聞き覚えがあるのか、可愛らしく口を開け目を丸くする。

「問題ないですよ。受けさせてもらいます」

「本気ですか？」

「ええ、大丈夫です」

僕の返事が予想外だったのか、職員さんは念を押すように聞いてくる。それに、小さく頷く。

「おにーさん、本当に大丈夫う？」

「ああ、大丈夫だよ」

「そっかあ。おにーさんは強いんだあ」

「世界を救えるぐらいには、ね」

心配そうに聞く女の子に、軽い調子で答える。僕からすれば本当の事なのだけど、女の子は冗談と取ってくれるだろうと思ってそう言ったんだけど、

「ふええ。おにーさんすごおーい。世界を救っちゃえるんだあ！」

「え、あはは。まあ、そうだよ。きつとできるんじゃないかな」

まさか、言葉通りに受け止めるとは思わなかった為、困ってしまう。女の子が尊敬するような瞳で見ている。予想外の展開に、苦笑が零れる。気付けば、説明をしていていた職員さんも小さく笑っていた。「じゃあさ、じゃあさあ。あたしもお、一緒に連れてって貰っても良いかな？」

「……え？ もう一回言ってくれるかな？」

思わず聞き返す。だって、今さつき出会ったばかりの名前も知らない子にそんな事を言われるとは思わなかったから。

「だからあ、あたしもお、一緒に連れてって欲しいなあって」

「……ああ、やっぱり聞き間違えじゃないんだ」

「ねえ、だめ？ あたしも、結構強いよお？」

女の子の言葉にどうしようか悩んでしまう。正直言えば、とても戦えるような子には見えないのだけど、確かにその言葉通り強い力を感じた。ほんわかした感じの可愛い女の子なのだが、その外見に似合わない魔力を感じ取れる。

「えっと、僕の方は大丈夫だけど君は良いのかな？」

「良いよお」

聞いてみると、二つ返事で答える。

「良いよってまた、あっさり答えるんだね」

「だっておにーさんは何か信じて良いような気がするんだあ」

「……一体どう言う根拠があってそう思うのかな？」

「んーつとね、そんな気がするだけかなあ」

につこりと朗らかな笑みを浮かべながらそう答える女の子に思わずため息が零れた。幾らなんでも、無防備すぎると言うか、他人を簡単に信じ過ぎだろう。はつきり言って危なっかしい。

「君はもう少し相手を疑った方が良いんじゃないかな？」

「ええ？ そおかなあ？」

「そうだよ。例えば僕が君と一緒に行って、途中で酷い事をするかも知れないよ」

「あう、おにーさん、あたしに酷い事するのお？」

「いや、しないよ」

だから、そんな例え話をする。勿論そんな事をする気は無いけど、相手によってはそう言う可能性もあると言う事だ。だけど、

「良かったあ。でもでもお」

「ん？」

「そう言う事を言ってくれるおにーさんみたいな人はあ、信じて良い

と思うんだ〜」

それでも、何故か目の前の女の子はにつこりと笑いながら信頼してくれていた。それが解らない。どう言う心算なのか。だけど、その所為か放って置けなかった。性格も雰囲気もまるで違うのに、何故かあの二人を思い出すから。女の子の示す信頼に、二人の女神と似た何かを見てしまう。どう言う事なんだろうか。良く解らなかった。

「……まあ、良いか」

「ほえ？」

「僕の負けだよ。一緒に行こうか」

だけど、何処かあの二人と重なるところがある。このまま放って置けなかった。だから、結局一緒に行くことにしてしまった。

「ほんととお？」

「ああ。本当だよ」

「やったあ〜」

どう言う心算なのか。自分にそう言いたくなるけど、無邪気に喜ぶ女の子を見ていると何だかどうでも良くなってくる。ほんわか笑う女の子を見ていてふと気付いた。そう言えば、この子の名前もまだ聞いていない。

「そう言えば君の名前は何て言うのかな。僕の名前は四条優一だよ」

だから、自分の名を名乗り尋ねる。

「じゃあね〜、じゃあね〜。ゆうくんって呼んで良い〜？」

「ああ、まあ好きに呼ぶと良いよ」

僕の名を聞いた女の子が、しばらく考え込むと名案を思い付いたと言わんばかりの笑顔を浮かべる。まだ名前を聞いていないのだけど、別にせかすような事でもないのだから女の子の言葉を聞きながら教えてくれるのを待つ。少し見た感じだけど、口調と同じで独特の間を持つ女の子だった。焦らず待てばきちんと教えてくれるだろうから、話してくれるのを気長に待つ。

「んとね〜、んとね〜。あたしは、プルルートって言うんだよお」

「え……、プルルート？」

そしてにこにここと笑っている女の子がゆっくりと名前を覚えてく

れた時、思わず数瞬固まってしまった。だってその名前はごく最近聞いた事があったから。

「そうだよお。よろしくね〜」

女の子の名は、虹の女神と同じ名だった。

## 6話 戦いの始まり

「ゆー君、どおかしたの〜?」

プルルートと言う名前を聞いて、咄嗟に思い浮かんだのが虹の女神だった為、同じ名前をした目の前のほんわかした女の子とのギャップに、一瞬思考の間隙を突かれていた所に心配したような感じの声が届き我に返る。

「いや、プラネテューヌの女神さまもそんな感じの名前だった気がするね」

プルルートと聞いて咄嗟に思いつくのは、鞭をしならせ笑みを浮かべながらネズミ君とマジエコンヌを痛めつけていた姿だ。眼前に居る女の子はその女神と同じ名前ではあるが、あの時見た強烈な存在とは雰囲気まるで違う。違うはずなのだけど、何だろうか、こう、出会った時に妙な既視感デジャヴみたいなものを感じた事もある。その所為か気になった。じーっと僕を直ぐ見据える女の子に答える。今いる場所はプラネテューヌのギルドだ。だから、少し前に戦った女神と同じ名前だから驚いたと言う訳にもいかないので、当たり障りのない調子で言った。

「おお。あたしつてえ、もしかして有名人のかなあ? そおだつたとしたらあ、照れちゃうよ〜」

「……あれ、もしかして君が女神さま?」

「そおだよお。あたしが、プラネテューヌの女神なんだあ。女神の時はあ、アイリスハートつて言うんだよお!」

女神さまと同じ名前なんだつて言う答えが返ってくるのを期待していたのだけど、見事に期待を裏切られていた。先程とまでは違った意味で、思考が固まる。漫画とかで目が点になる表現があるけど、今の僕がそう言う状況なのではないだろうか。そんな馬鹿な事を考えってしまう辺り、突飛な事態になれてしまったのか、ただ現実逃避をしているだけなのか判断に困る。今回に限って言うと、後者な気がしてならない。そんな僕の内心など知る筈も無く、女の子は照れたように頬を染めながらも、嬉しそうにはにかむ。こんな子が、女王様クイーンになる



のか。この子が言う事が事実なのだとしたら、いろんな意味で複雑である。

「えーっと、この子はプラネテューヌの女神さまなんですか？」

女の子なりの冗談なのでは無いかと言う淡い期待を抱きつつ、ギルドの職員さんに聞いていた。プラネテューヌのギルドの人間なら、女神の姿も知って居る筈だろう。まさか、プラネテューヌのギルドの人間が、女神を騙る理由も無いし、答えてくれるだろう。

「はい。この方がプラネテューヌの女神様であられる、プルルート様です」

「……嘘じゃありませんよね？」

「プラネテューヌに誓って嘘ではありませんよ。女神様でもなければ、プルルート様ぐらいの女の子一人にギルドの仕事なんか回せませんよ」

あっさりとは肯定する職員さん。それが信じられなくて、もう一度確認を取る。そんな僕に苦笑しながら職員さんは答えてくれる。小さな声であるアイリスハート様とは思えませんよねっと耳打ちする辺り、この人も僕と同じような印象を持っているのかもしれない。

「ぷるーん。ゆう君が信じてくれなかった。ぷるーん」

「え、あ、なんかごめんね」

さつきまで浮かべていた柔らかな笑みが消え、ずーんとした感じの暗い表情に変わり、その場に座り込みプルルートさんは床にのの字を書き始める。何と言うか、いろんな意味で落差が激しい子だ。

「まあ、プルルート様は女神さまの中でも特に変化が顕著ですからね」

「ええ〜。あたしは変身してもそんなに変わらないよお？」

「鏡を見て言ってください」

「ぷるーん」

不満げに零すプルルートさんに職員さんは取り付く島が無い感じで答える。その様子はちよつと天然な感じの女の子にしか見えず、とてもあの虹の女神と同一人物とは思えない。だけど、同じ人物のようだ。

「そんな事ないよ〜。何なら変身してあげるからあ、確かめてみて

よお」

「止めてくださいそれだけは勘弁してくださいまだ死にたくないんです明日もまたここで仕事をしたいんですお願いですからそれだけはああああ!!」

「あうう。そんなに必死にならなくても良いのに」

職員さんのあまりに必死な様子に、変身しようとしたプルルートさんはしよんぼりしながら引き下がる。そんなに変身したかったのだろうか。と言うか、職員さんが必死すぎる所為か、この子が本当に虹の女神なんだなって納得してしまった。少し見ただけだけど、僕だつてアレが手に負えない相手だったら相手はしたくないし、その気持ちも解らないでは無い。

「ううう、なんでみんなアタシに変身して欲しくないんだろ」

一人ぼやくプルルートさん。と言うか、他の人にも禁じられているのか。不意に、以前の戦いで思いつきり被害を被っていたノワールの姿を思い出す。確か二人は友達のようにだった。……きつと、この次元のノワールに止められているのだろう。以前半泣きになりながら悲鳴を上げていた姿を思い出すと、その姿が容易に想像できる。

「まあ、女神様って言うのは簡単に変身するものじゃないんじゃないかな。つと、それより仕事の話を聞かないとね」

「あー、そおだね。よおし、あたしも頑張っちゃうよお」

そんな訳で、変身したいなあと零すプルルートさんを窘めながら、依頼の詳細を聞く事にする。隣でプルルートさんが握り拳を作り、ほんわかした調子で言った。本人は気合を入れているつもりなのかもしれないけど、色んな意味で心配になってくるのは気のせいだろうか。そんな少し失礼な事を考えつつ、職員さんに詳しい説明をお願いした。

「ねーゆーくん」

仕事の詳細を聞き、フェンリルヴォルフが現れたと言うZ E C A 一号遺跡へと続く山道を歩いている途中。プルルートさんが声を掛けてくる。例の如く間延びした特徴的な口調なんだけど、ギルドに居た

時より元気が無いのは気のせいでは無い。そんな声を耳にしつつも歩を進める。だって、既に何回も同じやり取りをしているから。

「ねーゆーくん。ねーってばあー!」

ちなみに、僕が呼び出された場所と言うのがそのZ E C A 一号遺跡だったりする。ネズミ君とマジエコンヌを助けた後、ネズミ君と二人で歩いてきた道を今は女神と二人で歩いている。何とも言えない微妙な気分になってくる。

「ぶるーん。ゆー君が苛めるよお」

「別に苛めてるわけでは無いよ」

人聞きの悪い事を言う相方に溜息交じりで振り返る。山道に入り、道が険しくなり始めてから暫くして、プルルートさんが音を上げ始めたから。最初の頃は休憩を挟んでいたのだけど、あまりに頻繁に休憩を催促するので試しに聞き流してみたところ、案外問題なく歩ける事が解ったので、今は聞き流していたと言う事である。

「ええ。そんな事ないよお。ゆー君はアタシを無視するし、待ってくれないし、おんぶだっしてくれないもん。いじめっ子だよお。おにー!! あくまー!!」

もう歩けないとその場に座り込み、子供みたいに愚痴を零し始める。

「なら、付いて来なければいいのに」

「だってえ、気になるんだもん」

そんな彼女の様子に苦笑しながら言うと、ぶーぶーっと文句を言いながら両手を伸ばしてくる。……、あれだろうか、さっきの言葉通りこの子を背負えと言う催促なのか。

「えっと、何かな。その手は?」

「もー歩けない。ゆーくん、おんぶして。おんぶ、ねえ、おんぶ」

そのままパタパタと両手を動かし催促。どうしたものかと考える。できるかできないかで言えば、問題なく背負える。身体能力としては異界の魂だった以前と変わらないように思えるし、小柄な彼女を担ぐぐらいなら訳は無いだろう。

「はい頑張ろうか」

「ええー!! こんなに頼んでるのにい、おんぶしてくれないのお?」

「しないよ」

「ひとでなしー! いじめっこー! おたんこなすー!!」

だからと言って、甘やかさうとも思わない。それにしても、変身前と後では随分と印象が変わる子である。と言うか酷い言われようだった。

「それだけ言えるなら、まだまだ頑張れそうだね。それじゃ、行こうか」

「ええ!? 待ってよお」

苦笑を浮かべつつ先に進んでいく。プルルートさんが不満そうな声を上げるが、気にしない事にする。なんだか言って女神である。山道を歩くことぐらい問題ないだろう。比較的ゆつたりしたペースで進んで行く。

流石に置いていく気は無いのでそれ程急ぎはしないが、それでも歩き出すと慌ててついて来る。思った通りまだまだ動けるようでも苦笑が零れる。やっぱり歩けるじゃないか。

「はいはい、頑張ろうね」

「ぶー。ゆー君のいけずー!!」

少しばかり後方を歩く女神様を、肩越しにちらりと覗き見る。意外としつかりとした足取りで歩いてきていた。ぶーたれてはいるけど、できるかできないかで言えば問題ないようである。

「うーん、ごめんね。……おや?」

「ほえ? 何かあったの?」

不満そうな顔で此方を見ながら唸るプルルートさんをあしらいながら歩いていると、その場所に辿り着いた。

「ん。お仕事の時間だよ」

山道を進み、少しばかり開けた小高い丘の上から見下ろしながら言った。

「あー!! フェンリルヴォルフだあ」

視線の先には、人をゆうに超える体躯を持つ狂獣。蒼き毛皮に鋭く

光らせる紅の瞳が印象的な獣だった。フェンリルヴォルフ。この辺り一帯を縄張りとする、危険種と認定された人間の脅威だった。

僕の視線の先にあるものに気付いたのか、傍に居た女神さまがびつくりしたように声を上げた。思わず額に手を当てる。だって、これから起きる展開が予想できたから。

「声、大きいよ……」

「わあー!! すごくおーい。って、こっちに来るよおお!!」

女神さまの驚いた声に気付いたのだろう。蒼き狂獣がこちらにゆつくりと振り向く。紅の瞳が鋭く細められた。思った通り気付かれたようだ。女神さまが慌てたように僕の服の袖を引っ張る。そんな様子を横目に、空いている右手を軽く前に突き出した。

「ゆー君、ゆー君てば! どおしたのお?」

「聞こえてるよ。仕方ないし、はじめようか」

「はじめるって?」

こちらに向かい臨戦態勢に入ったフェンリルヴォルフを、若干不安そうに見つめるプルルートさんを宥めながら集中する。一度は剣と化した自身の記憶から、強い力を読み取り手繰り寄せる。

それは闇に落ちた者達の怨念を宿した魔剣。マジックの魂と融合し、闇の力にも明確な耐性を得ているのが感覚的に理解できてた為、確認も兼ねてその力を解放した。できると言う感覚に身を委ね、その形を再構築していく。そして、

——デユナミスエンド

闇の力を宿した剣。その姿を再びこの世界に顕現させていた。

「お仕事だよ」

「それがゆー君の武器? ううー。何かその剣、ヤダあ」

「これだけじゃないけど、ヤダって……」

「だってえ、なんか怖いんだもん!」

フェンリルヴォルフが向かって来ていると言うのに、難しい顔をしながらそんな事を零す女神様より一歩前に出る。魔剣の力を肌で感じ取ったのかもしれない。女神である事を差し置いても凄まじい感性を持っているようで、思わず呆れてしまう。

「なら、次があつたら他の武器にするよ」

「絶対だよお！ そおーいう武器はあ、使わない方が良いんだから」

何だかそのまま勢いで怒られてしまった。何とも締まらない始まり方だけど、フェンリルヴォルフ討伐戦が始まった。

「でさあ、私の世界に居たその異界の魂って言う存在の男の子が、ブレイク・ザ・ハードって名乗ってたんだよね」

「成程。興味深いお話ですね。異世界から呼び出された人ですかφ（。）メモメモ」

「異界の魂、ねえ。選ばれし者って奴かしら。御大層な存在ね。…：けど、強さは本物だった。こつちの世界でも、そう言う類なのかしら？」

プルルートが四条優一と共にギルドで仕事を受けて居た頃、ネプテューヌと神次元のイストワール、そしてノワールは三人で話し合いをしていた。ネプテューヌが女神に戻れたことや七賢人との戦いの話まではプルルートも一緒に居たのだが、それからネプテューヌが次元を超えてこの世界に居ると言う話に発展してきたところで、プルルートが眠りだした為、眠らせておくよりはとギルドに行かせたと言うのが二人が出会った顛末だった。とはいえ、それはこの場に居る三人には知る由も無い。

「そーかもしないね！ あつちの世界のいつ君ってすつごく強かったけど、こつちの世界のいつ君もおんなじ位強かったし、見た事ある魔法も使ってたからね。色とかは紅くなってたし、気配みたいなのもなんとなく違うように感じたけど、あれはいつ君だと思っようよー」

「ふーん。ネプテューヌが居た世界のアイツもそんなに強かったんだ」

「アレは強かったなあ。女神が四人掛かりでやっとな勝てたんだから」

ネプテューヌは昔を思い出すように目を閉じながら懐かしそうに語る。異界の魂による救世。それは彼女に、彼女たち女神にとっては

何年も昔の事だったから。

「なにそれ。貴方たちの世界の女神って、少しだらしがないんじゃないの?」

その話を聞いた神次元のノワールは弛んでるんじゃないのと発破をかける。

「あはは、そーかも知れないね。あ、でも」

「ん、どうしたのよ?」

「いやいやあ。そんな事言っちゃって良いのかなあ? って思ってたね。あつちの世界では、ノワールが一番揺れ動いたんだから。いろんな意味で」

私たちと戦った時は本気じゃなかったんじゃないかな。と言う言葉を読み込み、にやにやとした笑みを浮かべながらネプテューヌは言った。負けず嫌いなノワールの事だ。そんな事を言えば、余計にリベンジに燃えるだろう。別にそれ自体は構わないのだが、そうならネプテューヌも何らかの特訓などに駆り出されるのは目に見えていた為、少しでも被害を減らすために敢えて言わない事にする。

何より、何故異界の魂が女神たちと戦ったのか。それは簡単に言ってしまうって良いような事では無いと思ったから。

「な、何よ色んな意味って」

「べつにー。でもノワール、最後まで泣いてたよ」

「べ、別に私が泣いてたわけじゃないわよ!!」

だからネプテューヌは茶化すようにして、話を終わらせる。

「うーん。それにしても不思議ですね (\*。ω。\*)」

「いーすん、どうかしたの?」

「いえ、その異界の魂の男の人にあつたんですよねー・ω・?」

「そーだよ。アレはきつといっ君だと思っうな」

うーんと 頭を捻るイストワールにネプテューヌは頷く。ネプテューヌのいた世界である超次元に居た様に、この世界にも異界の魂が存在する。その事にイストワールは違和感を覚えていた。

「それがどうしたのよイストワール」

「いえ、ネプテューヌさんのいた世界の異界の魂は、召喚されたんです

よね。つまり本来向うの世界に居なかった人なわけです。そしてネプテューヌさんのいた世界はこの世界に酷似した世界。つまり……」  
「つまり……？」

「本来呼び出されない限り異界の魂はいない筈なんです（・ω・）」  
確かに二つの世界は酷似している。だけど、召喚魔法で呼び出された存在まで酷似するモノなのだろうか。女神による召喚と、魔女による召喚。その二つの差はあるが、呼び出す者まで同じと言う事は有り得るのか。召喚で呼び出される存在と言うのは、言ってしまうえばイレギュラーである。異なる酷似した世界が、偶然にも同じイレギュラーを呼び出す。そんな事があり得るのか。

「じゃー、今いるいつ君は何なんだろう？」

「それは解りませんが……（――ω――）」

「えー、そこまで行って結局わかんないの!?! もー、ちっちゃいーすんは使えないなあ!」

「ちよ、誰が使えないですか（メ、皿、ノ）」

明確な回答の出ないイストワールの疑問にネプテューヌが煽ると、イストワールは小さな体全体を使い怒り出す。

「わー、いーすんが怒った!」

「そう言えばネプテューヌ」

「何ノワール」

イストワールから逃げるネプテューヌにノワールは声を掛ける。

「その異界の魂って何て言うのかしら?」

「いつ君だよ」

「いや、そうじゃなくて名前よ名前。まさかいつ君って訳じゃないでしょ?」

「ここまであまり重要では無かったから追及しなかったが、異界の魂の名は何と言うのか。唯一名を知るネプテューヌはいつ君としか言わない為、名前が気になったのだ。

「あーそれはね、それは……」

「如何したのよ。もしかして忘れたの?」

名前を聞いたところで考え込み若干焦り出すネプテューヌを見る



と、もしかして忘れたのかと思いのワールはもう一度聞いてみる。

「……いや、そんな馬鹿な。幾ら私でも恩人の名前を忘れる訳……」

「……なら言いなさいよ」

嫌な汗をだらだらと流すネプテューヌを白い目で見ながら問う。  
数瞬の沈黙。

「いつ君ってフルネームなんて言うんだっけ!？」

「私が知らないわよ!! まったくあなたは……」

非常に申し訳なく零すネプテューヌに、ノワールは呆れたように呟くのだった。

## 7話 大事な事だから

蒼き狼の咆哮が響き渡る。同時に、その体軀を存分に生かし地を蹴る鋭い衝撃が駆け抜ける。蒼き狂獣がその牙を剥き出しにし迫り来る。少しばかり離れた場所にいた巨軀が直ぐ傍に迫る。フェンリルヴォルフの咆哮に引き寄せられたのか、林道の獣道から一つ二つと顔を出し始めた。スラ犬やベーター等、以前に居た世界でもおなじみの魔物が姿を見せ集まってきていた。

「わ、わ、いっぱい来たよお」

こちらに向かい敵意を剥き出しにして駆けてくる大狼を見詰め、プルルートさんが慌てたように袖を引く。その手をゆっくりと解き、右手に持つ魔剣を握り直し感触を確かめる。以前、他の魔剣を用いた時に感じた嫌な感覚は一切感じない。マジックの魂と僕の魂が混じり合った事で、以前には無かった属性を得ていた。闇の力。この世界で言うのならば、犯罪神と似た属性の力。それを扱う事が出来るようになったのが解った。

「さて、と……。僕が前に出るよ。後ろは頼むね」

「ええ!? ゆーくん、危ないよお」

「ああ、問題ないよ。だって、」

心配したように言うプルルートさんを横目に一步前が出る。空いている左手、既に魔力を収束していた。ゆったりと魔剣を動かし、肩に担ぐようにして構えた。来る。蒼を見据えていた。

——マキシマム・チャージ。

そのまま視線を定めたまま、集めた魔力を解き放つ。それは、限界を超える魔法。異界の魂として与えられた身体能力。それを更に超える魔法。この身に施していた。凄まじい速さで迫っていた蒼、その動きがコマ送りで映されているかのようににはつきりと解った。何を見てどのように仕掛けようとしているのか手に取るように解った。

「僕はそこそこ強いからね」

「ほえ?」

だから、対峙する人間をかみ砕こうと一直線に飛び込んできたフェ

ンリルヴォルフに向け、闇の力を宿した魔剣を叩きつける。瞬間、両の手に斬撃が肉を斬り裂く感触が伝わる。僅かに顔を顰めた。剣を取って戦う事にはいい加減慣れたけど、やはり肉を絶つ感覚は好きになれなかったから。

「ぐがああああ!!」

——ガンブレイズ

振り下ろしからの二の太刀。炎の魔力を瞬時に刀身に纏い爆発させる。フェンリルヴォルフの絶叫が響く。構わず振り抜く。嘗て、黒の女神と、ノワールと共に竜を討伐した時に見せて貰った技。それを用いていた。剣の極地。その力は女神を、世界を救うために与えられた物だ。だから女神と戦った時には用いる事は無かった。だけど、今は女神と共に闘い、肩を並べている。なら、出し惜しみする理由は無かった。用いたのは僕だけど、炎を纏った刃は、何故かあの子を思い起こし懐かしい気分に含まれる。

「さて、今の僕に何処まで出来るのか。力を借りるよ」

頭部を大きく斬り裂かれた事で怯んだフェンリルヴォルフが、一足飛びで後退する。決して軽くは無損傷を与えていた。だけど、蒼き狼の瞳からは敵意がさらに増しただけで、闘志が萎えた様子は見られない。寧ろ、半端に痛めつけた所為か、怒り狂っているのかもしれない。後退して尚、僕を鋭く見据えている。狙いを定めた、と言う事だろうか。

とはいえ、それは此方にとつても都合が良い事だった。手にした魔剣を地に突き刺し、左手に二種の力を収束した。闇の力と雷の力、二種の魔力を合成していた。右手に持つ魔剣で闇の力を制御しつつ、左手で雷の力を制する。そしてその二つを掛け合わせ、一つの力を完成させる。

突き出した左手から、幾重にも魔方陣が展開された。それは黒き竜の力。雷を操る闇の竜の力だった。

聞こえるはずの無い言葉を紅の女神に一言だけ呟き、力を解き放つ。闇の力を使えるのは間違いなく彼女のおかげだったから。だから言っていた。

——魔神招・黒雷

紫電では無く漆黒の雷。黒き閃光が、後退したフェンリルヴォルフや集まってきていた魔物たちを薙ぎ払う。着弾の衝撃が響き渡り、砂塵が辺りを覆い尽くした。

「ふああー！ ゆー君すごーおーい!!」

傍で呆けたように見ていた女神さまが、興奮したように声を荒げた。

「何せ、世界を救えるからね」

そんな女神さまの様子がおかしくて、少し吹き出しながら、地に突き刺した魔剣を引き抜く。そのまま正面に構え、そこからゆつくりと刃を下段に寝かせる。まだ終わりじゃないというのは、感覚で分かったから。穏やかな風が頬を撫でた。

「ぐるああ!!」

「つと」

空気が震えた。刃で空間を撫でるように跳躍する。砂煙により姿は見えなくとも、強化された五感がフェンリルヴォルフは未だに戦意を無くしていないことを感じ取っていたから。同時に、蒼き影が飛び出してくる。交錯。魔剣の刃がフェンリルヴォルフの片目を寸分の狂いなく切り裂いた。

「——!!」

着地。絶叫。蒼き巨軀の上に着地すると同時に、狂獣の悲鳴が上がる。一言つぶやき、暴れるフェンリルヴォルフから振り落とされぬうちに魔剣を背に突き刺す。

「ごめんね。これで終わりだよ」

一際大きな咆哮、断末魔が上がる。びっくり、つと巨体が震え、ゆつくりと地に伏せる。それで、フェンリルヴォルフは終わりだった。

「やったのお?」

「ああ、終わったよ。とはいえ、まだ帰れそうにはないけどね」

剣を引き抜き、フェンリルヴォルフから飛び降り答えた。二、三度魔剣を振り、感覚を確かめる。体は思い通りに動き、魔力も十全に用いる事ができていた。時間にすれば決して長い時間ではなかったけ

ど、実際に戦ってみて以前と同じように戦えることを実感できた。前の世界に召喚された際与えられた力は、異界の魂から紅き魂に変わっても活用できるようだ。右手に持つ魔剣、手首の動きだけでくるりと回す。そのまま構えなおした。プルルートさんに言ったように、まだ終わったわけではないから。フェンリルヴォルフの咆哮に誘われて集まってきた魔物たちがまだ残っている。

「あうう。あたしい、何にもしてないけど倒しちゃった。ゆう君は強いんだね」

「まあ、女神さまと一緒にいても恥ずかしくない程度には、ね」

「全然恥ずかしくないよ。ふあーって驚いてるうちに終わっちゃった」

「あはは」

身振り手振りで驚きを示してくれる女神様。ここまで持ち上げられた事は無かったため、苦笑いが浮かぶ。ぼつが悪くて、少し視線を逸らした。

「ゆう君は、もつと胸を張っても……わわ、あぶないよお！」

いきなり声を荒げたプルルートさんの言葉が届くより早く振り向く。地を引き摺る音が聞こえていたから。反射的に右手を上げ刃を寝かせる。左手、瞬時に形を手繰り寄せる。倒したはずの蒼、死んだ振りをしていたのか、満身創痍でありながら敵意の籠った眼で睨みつけ、最後の力を振り絞り立ち上がっていた。牙が迫る。

「……少しばかり油断した、かな」

がんとした音が辺りに鳴り響いた。

「それでネプギア、お姉ちゃんがその秘書官を使うようになって確かに仕事の効率は上がったんだけど……」

「あれ、どうかしたのユニちゃん？」

「へえー、ユニちゃんとか、新しい人が増えたんだ！」

「ふわあ、どんな人？（わくわく）」

超次元ゲームギョウ界にあるプラネテューヌの教会。ネプテューヌが別次元に飛ばされてしまったから少ししたころ、女神候補生はネプギアの部屋に集まっていた。何か特別なことが起こったというわけではない、単純に友達同士集まって和気あいあいとしていた。そして各々の近況を語り合い、興味があることについて詳しく語っていたというわけである。特にラステイションには期待の新人である秘書官が現れていた。その話にはかの女神候補生たちが食いついたと言うところであった。

「うーん。なんて言えばいいのかな。アタシにもうまく言えないんだけど……、なんかあの人とお姉ちゃんが一緒にいると、もやもやするのよ。良い人だし、仕事を覚えるのも早い方なんだけど……」

「もやもやするんだ？」

「うん。なんでか、ね」

確認するように尋ねて来るのネプギアに、ユニは小さく頷く。何故自身がそのような感情を抱くのかある程度見当はついているのだけど、本当にそれが正しいのか自分でも断言できない為、その表情はどこか頼りない。困ったように笑うユニを見詰め、ネプギアはロムとラムにそつと目配せをする。

実のところネプギアはずっと以前よりユニの様子がおかしい事には気付いていた。可笑しいと言うよりは、余裕が無い、と言う方が正しいが。理由の見当もついている。かつて行われた救世と別れ。それが深く関係しているのだろうと、ネプギアは考える。ネプギアの友達であり親友と言っても差支えの無いユニの事である。良く解っていたのだ。

かつての戦いの時、異界の魂である四条優一に出会い、友達になり、心の支えの一つとしていた。仲の良い兄妹の様な関係だと思っていた。実際、ユニの姉であるノワールが助け出されるまでの短い間であったが、ネプギアよりも四条優一とユニの方が近い位置に居た。それは間違いないだろう。それがネプギアには微笑ましく思えて、同時に少しだけ寂しくもある。ユニの中での優先順位がなんとなく想像

できるから。嫉妬とまではいかないまでも、そう考えると少しだけネプギアには羨ましく思えた。私だつてユニちゃんの友達なのにな、っと思う反面、今のユニは危なっかしくて見ていられないとも。友達として、何とかしてあげたいと思つてしまう。

当時は気にならなかつたが、今ネプギアが思い起こしてみれば、それだけ大切な存在だつたのだと容易に思い当たつた。異界の魂は、ユニにとつて友達であると同時に憧れでもあつたから。そして憧れであり、きつと……。そうで無ければ、いくら友達だつたとはいえ、ユニの中にある異界の魂への想いが大きすぎるから。犯罪神を退けたあの日から、ずつと無理をしている様には見えないユニを見ていると、本人から直接聞いたわけでは無いのだが、そうなのだろうと見当がついてしまつていた。

「ねえ、ユニちゃん。もしお付き合いするならどんな男の人が良い?」  
「そうね、アタシならやっぱり……って、はあ!? ア、アンタいきなり何言つてんのよ!」

だけど、ネプギアにはユニがその想いを自覚しているようには見えなかつた。自分の中にある大事なものが見えていないから、どこか空回りしている。ずっとユニの親友として彼女を見て来たネプギアが至つたのは、そう言う結論だつた。そして今回ユニが零したノワールの秘書官に感じる違和感は、少し強引だが話を展開する切り口として最適だつた。

そんな思惑から、何の脈絡も無く出された問いにユニはすんなり答えようとして、質問の意図に気付き一気に頬が染まつた。強気で意地っ張りだけど、とつても恥ずかしがりやな親友らしい反応に、ネプギアは少し頬が緩む。

「あー!! ネプギアとユニちゃんが恋バナしてる!」

「私とラムちゃんも混ぜて(どきどき)」

「ちよ、なんでアンタ達もそんな目を輝かせてんのよ! てか、恋バナなんてしてないわよー!!」

ネプギアの目配せに気付いたルウィーの女神候補生姉妹も露骨に話に食いつく。実を言うところの二人はネプギアに相談され、ユニの事

については筒抜けだったりする。その為、こう言う話にネプギアが持つて行ったとき、ユニが逃げられない様にする役目を予め買って出ていると言う訳だ。巧妙に隠しているつもりが、友達全員に察せられている辺り不器用である。

「えー、うっそだあ！　ユニちゃん顔まっかつかだし、セツトクリヨクないー」

「ユニちゃんてれてる？（にこにこ）」  
「て、照れてないわよ！」

真つ赤になりながらロムとラムに言い返すあたり、全然隠せてないなっと思いつつネプギアも参戦する。

「私たちだって今まで頑張ってきただし、そう言う事を考えても良いんじゃないかな？　って言うか、考えていかないとお姉ちゃんたちみたいに後で苦労する事になるかも……」

そこまで言い、ネプギアは姉たちを思い起こす。なんだかんだいって和気藹々としていて仲は良いのだが、四人の女神にはまるでと言って良い程男つ氣と言うのが見られない。最近になつてノワールに秘書官が出来たことぐらいだろうか。はつきり言ってしまうと、行き遅れるのではないかとネプギアは若干心配していてもない。信仰と言う観点から見れば、独り身の方が色々都合が良いのだとは思いますが、そこは彼女たちとて女の子である。その手の女の子らしい願望が無い訳では無い。むしろ、女神であるからこそ、そう言う事に憧れている節がある。とはいえ、女神であるからこそ、そう言う相手を見つけるのが難しいと言うのもあるが。

「うう……。じゃ、じゃあ、アンタはどういう人ならいいのよ？」  
「えー、そうだね……」

意外と真剣な返しに怯んだユニは、苦し紛れに矛先をネプギアに向ける。それは、ネプギアにとつて最も言つて欲しい返しであった。恥ずかしいからそんな事言えるわけがない。そんな初心な女の子らしいユニの内心を見透かしていたネプギアは、内心でにっこりと笑う。かかった、と。

「私だったらユニちゃんも知っている人で……、四条さんとかだった



ら良いかなあ」

「な、なな、何でアイツなのよ」

ネプギアが落ち着いた感じで答えると、ユニが耳まで真っ赤にさせながら声にならない声を上げた。その様子に、ああやっぱりつと確信してしまった。だけど、まだ駄目だよ。もつとユニちゃんは追い詰めなきやだめ。そう自分に言い聞かせ、ネプギアはさらに続ける。

「だって、私もあの人が世界を護ってくれたのを知ってるよ。私たちより、ううん、女神よりもずっと弱いのに、辛かったはずなのに、それでも全力で守ってくれたよ。一緒に居れた時間こそ短かったけど、女神を、世界を大切に思ってくれてたもん。それだけでも、充分良い人だと思うな。ユニちゃんはどうなの？」

「あ、アタシは……」

ネプギアは自分の正直な気持ちをユニに伝えていた。敵対した事もあったけど、それは自分たちを護るためにしてくれた事だった。全てを捨ててまで自分たちを護ってくれた異界の魂の事を好きか嫌いかで言えば、ネプギアは好きと答えるだろう。尤もその好きと言うのがそのまま恋愛感情なのかと問われれば、勿論違うが。物は言いようであった。

「えー！・ネプギア趣味わるーい」

「私も……、あの人ちよつと怖い（びくびく）」

其処に意を挟むのがラムとロム。二人は異界の魂と闘いの場以外出会った事は無い。だから、意を挟むのはうってつけであった。その為、ユニを煽るようにネプギアに反論する。実際のところラムは本気で良い感情を抱いていないようだが、ロムはそこまで異界の魂を嫌っている訳でも無かったりする。

「っ、趣味悪いってなんでよ？」

「だって、あの人お姉ちゃんやロムちゃんを傷付けたもん！」

「紫の魔剣、すっごく怖かった。皆、死んじやうかもって思った（じわ）」

ラムは仕方が無かったとはいえ、自分たちを傷付けた異界の魂を完全に許せるほど大人になれなかった。だけど、事情を知った今、本気

で嫌えた訳でも無い。

ロムは、異界の魂、と言うよりは魔剣に本能的な恐怖を感じていた。だけど、戦っている最中に、一度も殺意の様なものを向けられていない事に全てが終わってしばらくしてから気付いた。だからか、それ程嫌ってはいなかった。ただ、不思議な人と言う印象が強い。

「確かにそうだけど……っ、アイツはアタシたちを護ってくれたの。皆を、この世界を、全部捨ててまで護ってくれた！ だから……、悪く言わないで……。お願いだから……」

「あ、う……悪かったわよ」

「ごめんなさい（しゅん）」

そんな二人の言葉に、悲し気にユニは言い返す。自分の友達に、自分の大事な人を非難された。もしかして初めてかも知れないその事が、予想以上にユニには堪えた。辛くて、苦しくて、何より自分の大事な人が悪く言われたのが悲しくて、瞳に薄らと光るものが浮かんだ。そんなユニの様子を見せつけられた二人の候補生は慌てて謝る。まさか泣くとは思わなかったから。だけど、それだけ大事なんだと思うと、やっぱりなんとかしてあげたいと思ってしまう。

「ユニちゃん、ユニちゃんは四条さんの事嫌い？」

「嫌いな訳……無いでしょ」

二度目のネプギアの問題に、ユニは涙を拭いながら答える。その答えを聞き、ネプギアは嬉しそうに頷く。そして、続けてもう一度問う。

「じゃあ、好き？」

「っ、それは……」

三度目の問い。意味を理解したユニは、しばらく考え込み、耳まで紅く火照らせる。言葉にならない言葉を何度も出しては飲み込む。あの、その、つと何度も小さく呻く。だけど、ネプギアはただにここにこと見つめているだけで、無言で答えを促すだけだった。

「ア、アタシは……、その……」

「うん」

そして観念したかのようにユニは両手で自分の肩を抱き恥ずかしそうにして、絞り出すようにして答えた

「好き、かも。っあうう……」

ユニの返答を聞いたネプギアは、今日一番の笑みを浮かべた。

## 8話 動き出した心

「ゆーくん!？」

プルルートさんの心配げな声が響き渡る。満身創痍のフェンリルヴォルフ。息絶えたと思っていたそれが最後の力を振り絞り、その鋭い牙をもってせめてもの反抗とでも言わんばかりに襲い掛かってきていた。ほんの一瞬とはいえ、完全に虚を突かれていた。救世をなし、女神や犯罪神と刃を重ねたこともあった。慢心している心算はなかったけど、どこかで油断していたのかもしれない。

「……っ、大丈夫」

だから、咄嗟に使ってしまった。闇の魔剣であるデユナミスエンドの刃を寝かせ、僕の体を噛み千切ろうとむき出しにされた牙を受け止める。刃と刀身がぶつかり合う音が鳴り響いていた。体を食い千切られる事はなかったが、牙を受け止めるために右手を翳したため、剣を持つ手の甲に牙が深く突き刺さっている。じんわりとした痛みが右手を中心に広がり思わず顔を顰める。

「で、でも、血が出てるよお」

「少し痛いだけだよ。ほとんどは受け止めたから大丈夫」

そして左手。其処には咄嗟に手繰り寄せた一振りの剣の姿があった。その刃は、フェンリルヴォルフの顎を泥を切るかのように切り飛ばしていた。手にするのは純白の大剣。多くの願いと祈りを束ね作られた想いの剣。自身と最も関わりが深い剣といえるそれを、蒼き狼の反抗を受け止めるために反射的に呼び出していた。多分、それは僕の記憶の中に最も印象深く刻まれているから。魂を賭した己の一部だとすらいえるからこそ、反射的に呼び出していたのだと思う。その切っ先を地に沈めていた。

「その剣もゆー君の？」

「僕の、で良いのかな。大切な剣だよ。想いの宿った何より大事な剣」  
フェンリルヴォルフの下顎を半ば消し飛ばすように斬り裂いた、純白の大剣をゆっくり引き抜きながらプルルートさんの言葉に応える。かつて世界を救うために、奉げられてきた嘆きと願いをすくい上げ、

想いを束ねた剣だった。世界を救いたいと言う女神たちの、あの世界を生き残った者達の願いと祈りで構築した想いの剣。それは僕にとつても、忘れられない大切な一振りだった。

「そう、なんだあ……。何だろう。何かあの剣を見てみると、胸が苦しくなるかもお」

「……、どう言う事？」

「あう、解んないけど。でも、その剣を見てると、胸がきゅーつてなるの。何て言うかあ、えつと、えつとお、あたしはその剣はすつごく大事にしないとイケないと思うな」

目の前にいるこの世界の女神さまが、思いもよらない事を口走る。僕の携える剣を見て、悲しい様な困ったような複雑な表情を浮かべていた。要領を得ない言葉ではあるけど、この剣がどう言う道を歩んだのかを知っている僕からしたら、充分に衝撃だった。何と無くだけど、何故彼女がそのような想いを抱いたのか、その理由が想像できるから。それは多分、救世に捧げられたシエアの所為。世界を守る為に命を奉げる事を肯定した女神の想いを束ねてこの剣は作られていた。想いの剣自体、悲愴であり悲壮な想いの結晶だと言えるから。

だから世界は違えどもシエアとは切っても切り離せない女神であるプルルートさんは、想剣を目にしてそんな想いを抱いたのだと思う。

「大丈夫だよ。この剣をぞんざいに扱うなんて事、絶対にならないから。きっと僕にはそんな事できないしね」

「うん、それがいいよ」

はぐらかすような曖昧な回答もしようと思えば出来ただけだけど、結局女神様には自分の本心を伝えていた。詳しく話す必要が無かったと言うのもあるけど、単純に僕がこの剣に関してだけは真摯でありたいと思っただけから。

そんな僕の内心など知る由も無いだろうけど、目の前でふんわりと柔らかく微笑む女神を見ると、何となく懐かしい様な気持ちに包まれる。少しだけ考え込むと、直ぐにああつと思いが当たる。あの子たちと一緒に居た時の様に、何処か暖かな気分になれたからかもしれない。

「さて、と」

左手に持つ想剣を少しだけ見詰めると、ゆっくりとその場に溶け入るように消滅させる。今回は思わず呼び出してしまったけど、そう簡単に用いて良いとは思わなかったから。ありがとうと心の中で感謝の言葉を告げると、右手で担ぐようにしていた魔剣を両手で構える。再び、ずきりとした痛みが走った。傷のわりに随分と鈍い痛みだけでも、それは確かに失ったはずの痛みだった。救世を成す際に、人としての感覚も捨ててしまったはずなのだけれども、そんな僕が確かに痛みを感じていた。

やっぱりこの世界に呼び出された事が関係しているのだろうか。大雑把にだけ見当はついていたので、一旦はそう結論付ける。悩んだところで直ぐに答えは出ないだろうし、そもそもクロワールが近いうちに会いに来ると言っていた。その時にでも聞いてみればいだろう。どちらにせよ、失ったものをまた与えられただけなのだから、そこまで問題視する気にはならなかった。尤も、あの時ほど自分を気にせず戦えなくなった為、良い事だけとは言えないけど。それでも、人間を捨てた自分が人間に戻れたような気がして、少しだけ……いや、素直に嬉しかった。

「今度こそ倒したけど周りにはまだ何体か残ってるね。もう一頑張りしようかな」

そんな気持ち隠すようにプルルートさんに告げる。とりあえずは受けた依頼は完了したけど、フェンリルヴォルフが呼び出した魔物たちはまだ点在していた。逃げるものまで追う気は無いけど、戦意のある相手を放置しておくこともできないから。だから、最後まで仕事をこなすため、少しばかり痛む右手で剣を構える。血が右手を伝っているけど、この程度ならそれ程問題は無かった。

「ダメだよ。ゆうくんは、ちゃんと治療しなきゃ!」

「いや、これぐらいならいけるよ。終わってからでも大丈夫」

「でも、痛いでしょお?」

「まあ、少しぐらいはね」

頷く。痛みは確かにあるから。嘘を言う事も出来ただけけど、何故

かそう言う気にはならなかった。……それは、以前あの子たちに嘘を吐いて沢山傷付けたからかもしれない。

「ならダメだよお。ゆう君が頑張ってくれたんだし、今度はアタシが頑張る番」

「流石にそれは気が引けるから、僕も……」

「ダメだったらダメ。ぜったいダーメーナーのお！」

「……あはは」

そう思ったけど、今回限りの相方である女神さまにダメ出しをされる。確かに少しぐらいは痛みがあるけど、僕としては問題が無かった。だけど、そんな僕の言い分など関係ないようで、頬をぷくつと膨らましながら怒られる。苦笑が零れた。確かに痛みはあるし、プルルートさんだって女神だ。この程度の相手ならば、全然問題ないのだろう。なら、少しぐらいお願いしても良いかもしれない。

「じゃあ、ここはお願いしようかな？」

「うん、まかせてよく。あたしく、頑張っちゃうよお！」

そう言い張り切つて前に出る女神様を見詰め、魔力をゆつくりと収束する。右手にぬいぐるみを持ちながら気合充分と言った感じの前に出るプルルートさんを眺めながら、自分の手に治療を施す。

「ぶるんすぱくく」

そして、お言葉に甘え、どこか抜けた調子でシエアを用いる女神様を、戦いが終わるまで見守る事にした。

「……ユニちゃんはさ、もしだよ。もし、もう一度四条さんに会えるとしたらどうしたい？」

「もしユウに会えるなら……？」

「うん」

「それは……」

ユニの根底にある想いを引き出したネプギアは、仮定の話をはじめていた。もし、万が一、異界の魂に会えるとしたら。そんな有り得る

はずの無い可能性について質問する。

「そんなの、解んないよ」

「難しく考えなくてもいいよ。ユニちゃんの正直な想いを教えて欲しいの」

「アタシの正直な想い？」

「うん」

解らないと困ったように首を振るユニに、ネプギアは諭すように尋ねる。

「やつぱり、わかんないよ。けど、もし会えるのなら、アタシは素直になりたい」

「素直に？」

「うん。アタシは意地ばっかり張っててさ、沢山手を差し伸べてくれたアイツに、結局何にもしてあげられなかった。自分がアイツより弱いつて事に拘って、隣に居られないなんて勝手に決めつけて、苦しんでいるのに気づいてあげられないだけでなく、一緒に居てあげる事だつてできなくて……」

「ユニちゃん……」

「傍に居てあげられてさえいたら、気づいてあげられたかもしれないのに……。それにね、ネプギア。アンタに自分の気持ちを気付かされて、解つたの。全部捨ててまでアタシたちを助けてくれたアイツに、好きって事すら伝えられてなかったんだつて。自分の気持ちすら見つめられてなかったんだつて。今更気づいたつて遅いのに、そう気付いちちゃつたら……。つ、う、あ……」

今更気づいたところで、失つた人は帰つてこない。ユニはその事実を噛みしめる。そしてどうしようもない悲しみが押し寄せる。瞳に止めどなく涙が溢れてくる。駄目だ。そう思うも、ユニにはどうしようもなかった。

「まだだよ、ユニちゃん。まだ遅くなんかないよ」

「……え？」

みつともなく泣きだしてしまう。そんな姿を友達に見られたくなくてユニは俯く。そして涙が零れ落ちる。その刹那、ネプギアの口か



ら鋭く発せられた言葉に、ユニは思わず顔を上げた。大粒の涙が頬を伝い、一粒流れ落ちたが、そんな事に構っていられなかった。

「お姉ちゃんと連絡が付いたんだ。もしかしたらただけど……、四条さんに、ユニちゃんの大事な人に会えるかもしれないんだ」

それは、ユニにとって思いもよらない言葉だった。

「そんな事ある訳無いわよ……。アイツはアタシの、アタシ達の目の前で」

突然提示された可能性。それを否定する様に、ユニは悲しげに首を振る。だって、ユニは異界の魂の最期を看取っていた。目の前で運命を変える為の剣を作り出し消滅したのを確認している。誰よりも近くで、その最期を見ていた。

「ブレイク・ザ・ハード」

「え？」

「姿形は少し違っただけど、四条さんを見たってお姉ちゃんが言ったの。戦いの途中でまるで異界の魂の儀式みたいな感じで呼び出されたって。直接連絡を受けたいすーんさんが言うには、此処とは違う次元らしいけど」

「此処とは違う次元!? なんでネプテユーンさんはそんなところに？」

「あはは。それは私にも良く解らないけど、お姉ちゃんだし」

ネプギアに提示された可能性の色んな意味での突拍子の無さに、ユニは何とも言えない声を上げる。ネプギアから姉が行方不明になったとは聞いていたが、まさか別の次元に居るなんて言われるとは普通思わない。

「けど、別の次元って事はこの世界じゃないんでしょう?」

「うん。でもね、ブレイク・ザ・ハード。四条さんを見たって言うのが、いーすんさんが言うには重要らしいの」

「どう言う事なのネプギア?」

「知りたい(どきどき)」

ユニの諦念交じりの質問に、ネプギアは元気付ける様に答える。それまで黙っていたルウィーの女神候補生であるロムとラムが、ユニの

代わりにネプギアに続きを促す。

「異界の魂召喚の儀式」

「ユウが召喚されたって言う儀式よね」

「お姉ちゃんたちがやったってヤツね」

「みんな負けそうになったから使ったって言ってたよ」

それは四条優一を呼び出す際に使われた禁呪。イストワールにより女神に伝えられた世界を超える禁忌。

「一連の事件の後いーすんさんが気になって調べたらしいんだけど、それってこの世界には存在しない筈の術なんだって」

「……どう言う事よ？」

「本来無い筈の術が、ある日唐突に出現した。歴史を記しているいーすんさんが言うには、そうとしか思えないみたいなの」

史書であるイストワールはその存在理由として、超次元のゲームギョウ界の歴史を記す役目を担っていた。そんなイストワールが過去の歴史を遡って、突然バグの様に脈絡なく出現していたのが、異界の魂召喚の儀式だった。それは普通なら気付かないほどの小さな違和感。まるで第三者によって意図的に組み入れられたように、それは存在していた。尤も、それはこの場に居ない黒の妖精の仕業であるが、この場にいる者達には知る由も無い。

「そうだとしたら……どうなるのよ」

「お姉ちゃんが居るのは、ここと良く似た世界なんだって。全部が解ったわけでは無いけど、向うにもいーすんさんとかノワールさんもあるみたいだし、世界の在り方はそんなに差が無いと思うんだって。つまり、異界の魂召喚の儀式もきつとないの」

「っ!？」

「なら、なんでネプギアのお姉ちゃんからアイツの名前が出て来たのよ？」

「気になる。もしかして……」

思わずユニは息を呑む。彼女の思い描いた可能性。それはもし予想通りだとするのなら、これまでの悲しみを吹き飛ばして尚有り余る可能性だから。

「うん。ブレイク・ザ・ハード。異世界から呼び出された四条さんがいるなんてこと、普通は無いよ。けど、四条さんは現れた。そして、見覚えのあるプロセッサユニットを展開していたんだって」

「見覚えのあるプロセッサユニット……？ ユウが展開してた黒と紅のやつ？」

「ううん。違うよ。犯罪組織幹部である、マジックの物」

神次元に現れたネプテューヌ。それを追うように現れた異界の魂。偶然と片付けるには、あまりに出来過ぎている。何より、ネプギアはユニの為にも偶然だとは思いたくない。

「な、何でマジックなの？」

「解らないけど、多分意味があるんじゃないかな。私たちの知らない何かがあったのかもしれない。例えば……四条さんは消えたけど、死んだわけじゃなかったとか」

「……っ」

憶測の域を得ない、根拠のない可能性だけの話。だけど思い当たる節もあって。それが正しいと言う確証など何もなく、待っているのは落胆だけかもしれない。それでも、止まっていたユニの心を動かすには充分すぎる事が起っていた。

「ユニちゃん。今、いーすんさんがお姉ちゃんをどうすればこっちの次元に呼び戻せるか調べてくれてるの。呼び戻せるなら、向うに行けるかもしれないよ。ユニちゃんは、如何したい？」

「……」

「ユニちゃんは、素直になりたいたいんだよね」

「……うん。アタシはアイツが居るのなら、少しでも可能性があるならユウに会いたい」

ネプギアの問いにユニは自分の本心から答えていた。例え別の次元に居ると言われても、逢える可能性がある。それで、ユニが決めるには充分だった。

「じゃあ、方法が見つかったら……」

「うん。アタシは向うに行ってみる」

どこか無理をしていたユニの瞳から、陰りが消えていた。間違いか

もしれない。ぬか喜びの可能性もある。だけど、明確な目標を見据える事が出来た。それが、ユニに本来の力を取り戻させていた。瞳に確かな力を宿した親友の姿をネプギアは嬉しそうに見つめる。

「そうと決まれば、イストワールさんを手伝いに行きましよう！」

「うん！」

「仕方ないわねー。ユニちゃんの為だし、アタシとロムちゃんも手伝ってあげる！」

「みんなで頑張る！」

明確な目標を見据えたユニの行動は早い。逸る気持ちを抑え、最初の一步を踏み出すのだった。

「ほんとにいくほんとにおに大丈夫？ 痛いのならあ、ウチで治療するよお？」

「ああ、大丈夫だよ。ちゃんと直したからね」

心配性な女神さまの様子に困ってしまう。フェンリルヴォルフの討伐も無事に終わり、ギルドで報酬を貰ってからも気になってしまっのか、何度目になるか数えるのが面倒になるほど聞かれていた。自身の魔力を用いて施した治癒魔法により、既に傷は無くなっていたけど、それでも気になるのだろう。

「ほら、ね」

「……うん。よかったあ」

右手をプルルートさんに見せる。すると、両手で少しだけ確かめるように触れると、小さく笑った。心底安心した。そんな感じの笑み。

「それじゃ、僕は行くね」

その笑みがあの子たちの物と重なってしまったから、名残はあるけど別れを告げる。あの子たちをこの子に重ねるのは、どちらに対しても失礼だと思ったから。どこか、逃げるように言っていた。

「あ、少しだけ待って〜」

「ん？」

そのまま踵を返そうとしたところで、呼び止められる。結局、その場にとどまってしまった。

「これ、ゆー君にあげる」

そう言つて手渡されたのは、淡い紫色の花を模つた小さな装飾品だった。予想外に可愛らしいそれに、思わず目を丸める。

「えっと、これは？」

「えへへ、さっきの依頼で貰つた装飾品だよ。可愛いから凄く良くなつて思つたんだけど、ゆー君にあげるね。頑張つてくれたから、お礼だよ」

満面の笑みで手渡される。対して僕は何とも言えない顔をしていたのではないだろうか。だって、流石に男が付けるのには可愛いすぎるし。

「いや、うん、まあ、良いか。ありがとう」

とは言え、厚意で差し出された物を突き返す訳にはいかない。有りがたくいただく事にする。紫色の装飾品。可愛すぎる気もするけど、何処となく気に入った。なら、拒否する理由も無い。お守り代わりに持つても良いと思う。

「ちなみにこの花つて、何なのかな？」

「んー、それはあ」

貰うのは良いけど、何なのか解らないと言うのもあれなので聞いてみる。

「プリムローズつて言うんだよ」

するとプルルートさんは、楽し気に笑みを深めると、そう教えてくれたのだった。

## 9話 その身は

窓から見える景色。夕焼けのように綺麗な紅だった。紅葉。虹の女神と紫の女神が治めるプラネテューヌと、白の女神が治める国ルウィー。その境界線といえる街にもうすぐ入るといった具合だろうか。プラネテューヌの首都から随分と離れたところまで来ている。ネズミ君が以前言っていた、ルウィーの重鎮になって居ると言う仲間を訪ねるため、国境のある町まで移動中だった。緑が比較的少ない首都とは違いこの辺りは随分と緑が多いようで、どこかのびのびとした印象を受ける。現状が電車で揺られているという事もあいまり、ぼんやりと景色を眺め楽しんでいた。

「紅葉か。綺麗だなあ」

「そうっちゆね。だけど、ルウィーに入ればもつともつと綺麗っちゆよ」

「へえ……、そうなんだ。それは楽しみだなあ」

ちらほらと増え始めている紅葉に思わず呟く。そんな僕の言葉にネズミ君が頷いた。ここに来るまでの間にルウィーについていろいろと聞いていた。どうやら僕のいた次元のルウィーとは違い緑が豊かで、季節で言うならば秋といった感じの地域らしい。自分の知るルウィーは雪国というイメージがあるので少しばかり驚いたけど、増え始めている紅をみるとこれはこれで合っているように思えてくる。

「紅、か……」

紅葉の紅色を見てると不意に思い出す事があった。それは、もう会う事はないだろう二人。最後の時まで共に戦場に立った仲間たち。犯罪組織の二人だった。ブレイブ。そしてマジック。僕にとって、敵であり、恩人ともいえる二人を、紅色を見てしまうとどうしても思い出してしまう。思い出すと悲しくもあり、少し苦しくもあるけど、何より懐かしく思ってしまった。あの二人がいたから今の僕はある。月並みだけど、そんなことを考えてしまう。

「どうかしたっちゆか、アニキ」

「いや、少し昔を思い出したただだよ。紅には色んな思い出があるか

らね」

「そうっちゆか」

心配そうに聞いてくるネズミ君に、小さく笑みを浮かべながら問題ないと答える。寂しくないとは言わない。だけど、あまり深く沈みすぎる事もない。何より、ブレイブにはユニ君を頼み、マジックは僕の傍にいてくれている。姿形は見えないけど、二人の居場所は知っていた。だから、それほど沈み込むことはなかった。

「そういえば、アニキはプラネテューヌで女神に会ったって言ったっちゆね」

「ああ、そうだよ。虹の女神アイリスハート。その変身前の女の子に会ったよ。名前はプルルートって言ったかな」

「ちゅちゅ。よりにもよって、あの女神なんっちゆね」

「ああ、そうだよ」

僕のことを気にしてか、ネズミくんが露骨に話を変える。それは、数日前にあったギルドでの出来事。なんの因果か女神と共闘することになった時の話。以前にも話してはいたが、あまり詳しくは話していなかったので、ネズミくんが詳しく聞いてくる。変身さえしなければ、プルルートさん自体はほんわかした可愛らしい女の子のんだけど、如何せん変身時の女王様のイメージが強烈過ぎるのか、若干怯えているのが分かった。

「まあ、フェンリルヴォルフを討伐しただけだよ。そんなに難しい依頼でも無かったかなあ」

「……幾ら女神が一緒とは言え、普通危険種の討伐を二人で行ったりしないっちゆ」

「そんなものかな?」

「そんなもんっちゆ」

呆れたように零すネズミ君に、苦笑する。そう言えば以前倒したシーハンターも、防衛隊なら10人程度は欲しいと言っていた。そう考えると、確かに普通では無いかもしれない。

「虹の女神。プルルートさんも、変身しちゃうとアレだけど、変身していなければ普通の女の子だったよ。ほんわかした感じの優しい女の

子。ちよつと怠け癖と言うか甘え癖と言うか、堪え性は無い方かもしれないけど、極端に変わった子では無かったかな」

「アニキが言うならそうなのかもしれないっちゅけど、やっぱりあの姿を知っているとイマイチ想像できないっちゅ」

「まあ、それは確かにね。それに僕が見たのも表面だけだから、深くは解らないかなあ」

僕の感想を聞いて、微妙そうにしているネズミ君に苦笑が浮かぶ。今言ったのは実際に僕が見た感想だけど、ネズミ君の気持ちも理解はできるから。だって、初見が女王様<sup>クイーン</sup>だったし。凄い良い表情でこの次元のノワールを投げ飛ばしてきたのを思い出す。思わず受け止めてしまったけど、あの時は色んな意味で良い表情をしていた。活き活きしていると言うか輝いていると言うか、凄く良い感じだった。行動自体はとても褒められたものでは無いのだが。

「まあ、何にせよあの子も女神なんだよね。僕にとって当面の敵……とは少し違うけど、まあ、競争相手、かな」

初対面でありながら、何故か僕の事を信用してくれていた女神様だった。それを嬉しく思う反面、少しばかり後ろめたくも思ってしまう。完全に意図していなかったとはいえ、ある意味では騙すような事をしてしまったから。

「やっぱり、アニキは女神を敵視できないっちゅか？」

「……そうだね。特別嫌う理由も無いからね。それに、どうしても前の世界での女神達の想いが重なるしね」

「そうっちゅか。まあ、無理に変わる必要もないっちゅ」

「そう言って貰えると助かるよ。思いはどうあれ、僕にはマジエコンヌが負けない様に立ち回る義務がある。だから、マジエコンヌが七賢人である内は僕も七賢人側だけど、やっぱり切っても切れないモノってのはあるからね」

「生きると言うのは難しいっちゅからね」

僕は僕のままでもいいんじゃないか？　と言ってくれたネズミ君に小さく笑みを浮かべる。ネズミ君もまた、僕にとっては仲間の一人だった。世界は変わり、僕の知るネズミ君とは違うのだけど、変わら



ず良くしてくれる小さな仲間がいてくれることに感謝する。

「全くだよ」

ネズミ君がしみじみと言った言葉に頷く。生きていると何があるか解らないし、色々考える事もある。だからこそ難しいし、楽しくもある。そんな結論を付けていると、終点のアナウンスが聞こえてきた。

「では、降りようか」

「ここから暫く歩いたら、ルウイーに入れるつちゆ」

ネズミ君に先導を任せ、街に降り立つ。穏やかな風が頬を撫でるのを感じた。

「ふーん。つーことは、これから暫くはルウイーを拠点に動くって訳なんだな?」

「ああ、そうだよ」

プラネテニューヌとルウイーの国境。ルウイーへの入国を管理している施設に赴き、細かい処理をネズミ君に任せて待つていたところで、僕をこの世界に導いた張本人が現れた。相変わらず、他人の目が離れたところで姿を現す。実のところ、そろそろ来るんじゃないかと予想していた。ちなみに入国審査の方は、ルウイーの重鎮となった七賢人の一人が色々手を回してくれたようで、知らないうちに身分証などが作られルウイー生まれの人間にされていた。ネズミ君曰く、経歴は完全にでっち上げているけど、身分証としては本物らしい。それだけでは七賢人の一人がどの程度の役職についているのかは見当もつかないけど、そう言う事は平然とできるようだ。若干貰っても良いものかと思わないでもないけど、貰わなければ色々と困るのも確かだった。

「で、どーするきだよ?」

「と言ひつゝ」

「ルウイーに行って何をやる気なんだって聞いてんだよ」

興味津々と言った様子でクロワールは尋ねてくる。ちなみに、彼女が普段胡坐をかいて座っている本は、例の如く僕が持たされている。当の本人は僕の首辺りに跨り、肩車をする感じになっていた。相変わらず人の頭を引っ張りながら話しかけてくる。以前は痛覚などが無くなっていたから気にしていなかったが、地味に痛い。

「まだ自主的な動きは決めてないかな。しばらくはルウイーで大人しくしているよ。幸い犯罪組織と違って、七賢人はまだ活発には動いていないようだからね」

「んだよー。つまんねー」

「まあ、順当にギルドで何かするか、ルウイーで厄介になる人に何か頼まれるかじゃないかな?」

久々に会ったクロワールの普段通りの反応に苦笑が零れる。つまらないと言われてもどうしようもない。僕にある明確な目的は、マジエコンヌが女神に負けないようにすることであり、此方から仕掛ける事では無い。なら、無理に女神相手に何かをやろうとは思わなかった。クロワールからすれば、停滞期と言ったところだろうか。

「ルウイーで、ねえ。そーいえばユーイチ」

「ん?」

クロワールが不意に名前を呼んだ。僕の首からトンツと飛び降り、此方に向かい合う形で目が合う。何かを思いついたような、愉快そうな笑みを浮かべていた。その様子に、嗚呼っと思いついた。多分、あんまり良い事では無い。

「前の次元の犯罪神ってのはさ、ルウイーで生まれたそーだぜ」

「……それで?」

それは嘗て戦った相手。世界を滅ぼす破壊神の出生。唐突にどうしたのだと思わないでもないけど、黙って促す。

「この次元での犯罪神はお前を呼び出したマジエコンヌだが、前の世界程の強さは無い。前の世界のが特別強かったとかいくつか理由あるんだけど、それでもこの世界のマジエコンヌはよえー方だよ」

「それにも理由が?」

「ご明察。この世界のマジエコノムの力は、本体とは別に四つに分か  
れてる。意味は解んな？」

つまり、以前の様に力を分けていたと言う事だろう。

「この世界にも四天王かそれに準ずる何かが居るってことかな？」

「そういうことだよ。つっても、自我を持つほど発達してねーのもし  
るようだが。まー、そのうち出てくんじゃねーの？」

クロワールも完全には解っていないと言う事だろうか。……この  
子の事だから、あえて言わないと言う可能性もあり得る。どちらにせ  
よ、ジャツジみたいな感じだったら、戦わざる得ないだろう。とりあ  
えずは、そう言う事があるかもしれないとだけ頭の片隅に覚えてお  
く。

「……とりあえず、心構えはしとくよ。ところでクロワール、聞きたい  
事があるんだけど」

会話が途切れたところで、此方から切り出す。小さな友達は、どー  
したんだよと目で促していた。

「フェンリルヴォルフと戦った時、痛みを感じたんだ。人間であつた  
時ほどでは無いけど、確かに痛みだった。前の世界では人間を超える  
覚悟をしてからは痛みを感じなくなってたはずだけど、どう言う事か  
な？」

「あー成程。てことは、生き返ったって事か」  
「生き返る？」

僕の問いにおもしろーつと感嘆を吐いたクロワールに詳しく尋ね  
る。

「言ってしまったえば、ユーイチが以前の世界で人間の枠を超えたのは、自  
身が死者であると言う事を肯定した結果だよ。つまり死を自覚した  
事によって、シエアで構築されていたお前は生物と言う規格から外れ  
たんだ。言うならば、仮初の体を殺したんだよ。けど誓約で死ねな  
い。だから死んだまま動いてたって感じか？ はは、今考えれば完全  
にゾンビだな！」

「事実だけど、その例えは複雑だね」

「つと。話がズレたな。んで、前の世界では死んだけどシエアによつ

て動く事が出来る状態だった。そつから色々あつて、救世の為に自身のシエアを奉げ、犯罪神とタイマン張つて倒したつて訳だな。ここで、異界の魂としてのシジョーユーイチは完結となる。それから、マジエコンヌに呼び出され今いる世界、神次元に呼び出されたのがお前つて訳だ。その身はマジエコンヌの魔力とこの世界のシエアで構築されている。新たに作り直したわけだから、身体が生き返つたつてとこじゃねーの?」

そう言つて、まあ、こまけーことは良いじゃねーかつとクロワールは笑つた。あんまり細かくは無いんだけどなつと、苦笑を零す。だけど、彼女が言うように今僕は此処にいる。それが一番重要な事なのかもしれない。

「……アレ?　と言う事は、今の僕は以前ほどシエアの力は無い訳かな?」

「そーだな。流石に女神四人分のシエアはねーよ。マジエコンヌの魔力とこの次元に来た際に得たシエアの複合だから厳密に言えばシエアとは比べられねーけど、その力の総量を見れば女神一人分より幾らか上ぐらいかな。まあ、細かく調べんのメンドイし女神1・5人分ぐらいの認識で良いんじゃないやね?　つつても、それとは別に異界の魂として与えられた力は継承しているからそれ程問題はねーよ。お前の場合、シエアの総量でそれ程出力に変化は無いみてーだし、言つてしまえば変身持続時間が減つただけだな」

「……戦うだけなら十分すぎるね」

「今ですら、充分ラスボス張れるスペックだから心配すんな。つーか、弱体化しても女神＋異界の魂か。やっぱりバケモンじゃね?」

「否定はできないけど、その言い方はやめて欲しいなあ」

死を自覚した時に得た強さ。それはきつと、文字通り化け物だつたと思う。けど、やっぱりその響きは好きに離れなかつた。

「つーか、よくよく考えてみるとお前つて……」

「何かな?」

不意に何かに思い当たつたのか、クロワールは一度目を閉じた。僕の問いに、まあちつと待てよと呟き、僅かな時間だが思考の海に沈ん

でいく。今の話題は自身の体についての異変とシエアについてだった。話しかけてもクロワールも情報を整理しているのか、気のない感じである。僕は僕で彼女の言葉を整理してみる。要点は三つだった。

「体の再構築により、再生された感覚」

一つ目は痛みについて。自身の体は、死を自覚したことによって人間の枠を一度外れた。それが、今いる世界に召喚される過程でもう一度体を作り直していた。それによって、蘇ったから感覚を取り戻したということだった。尤も、怪我に対して痛みが鈍すぎるので、完全に回復したと言う訳でもなさそうだ。それでも僕としては喜ぶべきことだろう。

「シエアによって構成されている肉体」

二つ目は保持しているシエアについて。以前召喚された際は、女神四人の祈りによって呼び出されたため、女神四人分の祈りの力を持っていた。正確に言えば違うけど、大体その程度のシエアを持っていたことになる。そしてその力は全て、願いと祈りの剣である魂ソッド・オブ・ソウルの剣に捧げ、剣の力を以て救世を成す事に成功していた。僕を呼び出すために捧げられたシエアは、今は魂の剣を構築する為にあると言う訳だ。その為、僕を構築するシエアは存在せず、新たに体を構築するシエアを得るために、シエアの存在する世界に呼び出されているのが現状だった。マジエコヌの召喚により呼び出された僕は、彼女の魔力とこの世界のシエアが混同した力によって構築されており、その総量は女神一人分より幾らか多いぐらいに相当する。つまりこの身は以前と同じくシエアで構築されていた。

「女神ほどの劇的な変化はないけど……、ある程度シエアによって左右される能力」

そして、最後がシエアによる影響。シエアの総量によって変身時の強さにそれ程の変化は無く、持続時間が変わると言う事だった。伸びしろは少ないが、安定した力だと言える。そう言えば、この次元に呼び出される直前クロワールが言っていた言葉を思い出す。この身はシエアと魔力で構築される。そして、ソレが無くなれば消滅してしまうと言う事だった。所々違いはある。だけど、今の僕は確かにシエア

によって様々な事が左右される存在だった。それは人間と言うよりは……。

「あー、やっぱりそうだ。お前は確かに化け物であり、人外だよ。何でコレに気付かなかったんだ」

「……うん、確かに人外だね。まあ、人外もそれほど悪いものではないかもしれないね」

「そーだな。人外なんて一杯居たしなあ。あつはつは。ただでさえ異界の魂だったのに、次から次へといろんな肩書がくつついて来るなー」

「欲しかった訳ではないんだけどね」

「どうやら僕が至った結論は、クロワールの思い当たった事と同じものだったようだ。先程は気になったクロワールの軽口も、今はあまり気にならなくなっていた。だって、今の僕が何なのかと問われれば、それは。」

「まー、最早人間と言うよりは、人外。シエアによって生死を左右される事と言い、シエアの供給方法は解んねーけど、女神達みたいに神族つつても良いんじゃないの?」

「近いだけ、だけどね」

女神たちに近い存在かもしれないのだった。

## 10話 ルウイーの七賢人

「ところで、君の方はどうするつもりなのかな？」

時間がまだ暫くありそうなので、クロワールに問う。ルウイー入国の際、手続きの方はネズミ君に一任していた。ネズミ君と同じ七賢人の一人がルウイーの重鎮になって居た。その人が色々手を回してくれたおかげで、僕はルウイー生まれと言う事になっている。だから身分証の提示の際に一緒に居ただけで、他の細々とした事は任せていた。最初は本当に大丈夫なのだろうかと半信半疑だったが、何の問題も無い様だ。だから細かい事は任せたと言う訳だった。とは言え、特にやるべき事も無い。その為、時間を持て余していたところにクロワールが現れたので話していると言うのが現状だった。自分が聞きたかった事は一通り聞けたので、今度は目の前に居る小さな友達に話を振る。

「あー？ そーだな、今んところ優先してやるべき事はねーんだわ。お前と同じで、暇って言えば暇だな」

「……人には詰まらないとか言って置いて、自分も似たようなモノなんだ」

僕に話に来る位だから、今のところは急ぎの用も無いのかとは思っていたけど、どうやら当たりのようだ。しかし、人の事を予定が無いから詰まらないと言っておきながら、自分も似たようなモノなのは、この子らしいと言うかなんというべきか。

「そりゃ、歴史つてのはすっげー長いからな。色々弄っちゃいるけどそう簡単に動くもんでもねーよ。まー、色々仕込みをして大局を動かすって言うのか？ 何かしたからって、全部が全部直ぐに効果が出る訳ではねーよ。だから暇つぶしながらゆっくり見物するんだよ」

「……。言いたい事は解るんだけど君が何かしている時って、大体口くちな事にならないよね」

「……はは、言うじゃねーか。まー確かに、俺は場が面白くなるように仕込みをしてるわけだかな。当事者であるお前たちには面倒事かもしれないよ」

「まあ、慣れたものだけだね。君との付き合いも、それなりになるからね」

「そーだな。俺も誰かと長くつるむのはあんまりしねーけど、結構一緒に居るな。お前のやる事は、傍で見ると面白いんだよ」

俺が面白ければいいんだよ、っとクロワールは悪い笑みを浮かべる。まあ、確かにこの子のする事は、自分の中の基準の面白いかどうかっ多いと思う。だけど。

「んー、大体はロクな事じゃないし、苦労ばかりする羽目になりそうだけど……、まあ、感謝もしてるよ。僕は君に救われたからね」

「っ、んだよ行き成り」

「まあ、助けてくれた友達にはちゃんとお礼を言っておきたくてね。ありがとう」

そんなこの子は、確かに僕を助けてくれた。歴史を観察し記述するだけならば、僕が犯罪神を閉じ込めたところまで記述してその後の歴史を見れば良いだけにも拘らず、態々マジックと協力して僕を自由にしてくれていた。それは多分、この子も僕を友達と認めてくれたからだと思う。何と無くその事が解るのが、嬉しかった。

「友達、……か。ふん。別にお前の為にしたわけじゃないから気にすんなよ。俺は自分が面白いと思う歴史になるように細工しただけだから、別にお前を助けようと思っただけじゃねーし。異界の魂だったお前が居た方がこれから先も面白くなりそうだと思っただけから、続投してもらったって訳だ。選ばれし人間とかレアもんだろ？ そう簡単に消えたら勿体ないじゃねーか。だから結果的にそうなっただけだから、一々礼を言われる筋合いはねーよ」

そんな僕の言葉を聞いたクロワールがそっぽを向き、そんな事を早口で捲し立てる。十中八九照れているのだろう。どこかで見たような反応だなっと思うと、少しばかり悪戯心が芽生えてしまった。

「くく。そこまで露骨だと、僕としても察してあげないといけない気がしてきたよ」

「ああ？ おい、お前、何か勘違いしてねーか!？」

「んー。クロワールが照れ隠ししているのが可愛らしいなって思っ



るだけだよ」

「つゝゝ!?!? ベつつに照れてなんかねーよ! なんぞ俺がお前に礼を言われた位で照れなきゃいけないんだよ!!」

何時も好き放題されてくる意趣返しのもりだったけど、思った以上に効果があったようだ。出会った時からそれなりの時間が流れているので、この子の事も幾らか解つてきていた。天邪鬼。ユニ君やノワールもそう言う性質があったけど、この子が一番へそ曲がりだった。そう言う相手には、ストレートにものを言うとか効く事が多い。僕としても素面で言うのは少しばかり気恥ずかしい事も無いけど、この反応を見ると少しばかり悪乗りしてしまうのは許してほしい。

「と言いながら頬を真っ赤に染めていると、まったく説得力が無いよね」

「誰が真っ赤だ!!」

「クロワールだよ」

「嘘つけ!! 俺のどこが真っ赤なんだよ」

「いやいや、ホントだつて。はい」

そう言い、小さな剣を創り出す。刀身を研ぎ澄まし、鏡の様に成した物だった。磨き上げられた剣が、クロワールを確りと映し出す。そこには、確かに真っ赤になった可愛らしい妖精が居た。

「つゝゝ!?!?」

「くく。ね、可愛いでしょ?」

これでもかと言うほど現実を直視したクロワールは、声にならない声を上げる。追い打つように、にっこりと笑みを浮かべて言い放つと、クロワールは此方をキツと睨み付けた。うん。正直やり過ぎたかもしれない。瞳の端に浮かんだ雫を見ると、悪ノリが過ぎたと自覚する。とは言え、時すでに遅し、だが。

「もう帰るー!」

「あーうん、解つた。ごめんね」

こちらを睨み付け、鼻息荒く言ったクロワールに思わず謝っていた。と言うか、少し浮かれていたとはいえ、剣の極地まで使つて僕は何をしているのか。

「いいや、許さねーし！ 次ぎ合う時はぜってー泣かしてやる!!  
ぜってー覚えとけよ!!」

「……あはは、来てはくれるんだ」

「あつたりまえだろ!! 忘れたら承知しねーからな。首を洗って待つとけよ!!」

そう言い、ビシツと僕を指さしクロワールは怒ったように告げた。こう言うては何だけど、少し安心してしまった。怒らせこそしたけど、嫌われたわけでは無い様だから。

「うん、楽しみにしておくよ」

そのまま普段は腰かけている本を開くと、力の収束を感じた。僅かな発光。それが終わった時にはクロワールの姿は消えていた。悪ノりはほどほどにしよう。帰ったクロワールの様子を見て、そんな事を思った。

「何やら騒がしい感じだったっちゆけど、何かあつたっちゆか?」

クロワールが姿を消してからやる事が無くなったので、施設内にある無料開放されている情報端末を弄っている、ネズミ君が戻ってきた。手続きをしていた為、僕が誰と話していたかまでは解ってはいないようで、不思議そうにしながら聞いてくる。

「ん、偶然にも知人が居てね。少し話してただけだよ」

「知人、ちゆか?」

「ああ。騒がしい子だよ」

ネズミ君の問いに小さな笑みを以て答える。クロワールの事を語るのとはなかなか難しいため、印象だけなのは仕方が無い。

「こんなところで会うなんて、凄い偶然っちゆね」

「あはは。確かにね。それで、ルウィーには入れそうかな?」

「大丈夫っちゆ。その辺の工作とかは抜かりなく手配してくれてたっちゆから、本気でルウィーに住む事もできるっちゆよ。と言うか、ル

ウイーに家まで用意されてるっちゅよ」

「家って、それはまた凄い……」

特段クローラについて話す必要も無いため、目的であるルウィーに入れるかについて話題を変える。入国できるのかと言う問題は全く問題が無かったようで、ルウィーに住むと言う選択もできるようだ。思わず息を呑む。詳しく聞いてみると、七賢人がルウィーで活動する際に用いる拠点の内の一つと言う事だ。それなりに立派な大型共同住宅のようで、早い話が高級マンションの一室と言う事だ。ちなみに隣の部屋がネズミ君の部屋らしい。ネズミ君は兎も角、僕は七賢人ですら無い。そんな僕にそこまでして良いのだろうかと疑問に思ったところ。

「アニキは、オバハンでも負けた女神三人を相手取れる程の腕前っちゅからね。形の上ではオバハンの下って事になってるっちゅけど、同格に扱われてるってことっちゅよ。まあ、正直、女神を相手にして負けない時点で、負けてるオイラ達より格上な気がするっちゅけどね」

「二度戦っただけで、随分と評価されてるんだね」

「そりゃ、あのおっかない女神もいたっちゅからね！」

「あはは。かなり苦手意識を植え付けられたみたいだ」

「ちゅちゅ。できる事なら金輪際会いたくないッちゅよ」

どうやらネズミ君とマジエコンヌから他の七賢人に僕の話が伝わっているようで、その評価が拠点やルウィー入国の際の便宜に繋がっているようだ。ルウィーでの活動拠点は勿論存在しない為、部屋を貰えるのは有りがたいが、少しばかり気になってしまふ。例えば対価として女神と戦えと言われたりするかもしれない。

「うーん。理由は解ったけど、家となると流石に気が引けるなあ。代わりに女神に仕掛けろって言われたらいやだし」

「その辺りは大丈夫っちゅよ。アニキについては上手く説明しておいたし、ルウィーの七賢人もまだ暫く大きく動くつもりは無いようっちゅから、表の顔での仕事とちよつとした雑用を手伝ってくれば良いつて話だっちゅ」

「そっか。それならいいけど」

僕の考えは杞憂だったようだ。勿論ずっと先の事は解らないけど、暫くは女神と事を構えるような事はなさそうだ。尤も、ネズミ君の言葉が正しいとしたら、だけど。ネズミ君は兎も角、相手の七賢人とは会った事も無い。少しぐらいは警戒しておくことも忘れない。まあ、僕一人を陥れる必要性も無いだろうから、大丈夫だとは思うけど。「ところで、ルウイーの七賢人って言うのは、結局どう言う人なのかな？」

「ちゆ。そう言えば説明してなかったちゆね。大臣をやってるらしいちゆ」

「まあ、そう言う感じだとは思っていたけど、大臣とはまた……」

これまでの経緯や重鎮と言う言葉からある程度予想はしていたけど、まさか大臣だとは思わなかった。どういう仕事をしているのかは詳しく解らないけど、大臣と言う事は国の大事を決定したりもするのだろう。大きな影響力を持っているのだと思う。つまりルウイーと言う国は、自国の中枢に敵がいると言う事になる。気持ちは兎も角として、現状は七賢人側の僕が言うのもアレだけど、ルウイーの女神は大丈夫だろうかと心配してしまう。護るべき国民の中に敵が潜んでいる。女神にとって、これ程辛い事はそうそう無いだろうから。

「今のところ、ルウイーで開発されている魔力と機械の複合動力で動く大型電車を実用化直前まで漕ぎ着けたようちゆから、その路線を確保する為、開通予定地に居座っているモンスターの討伐とかを願っていたって事らしいちゆよ」

「複合電車、ね。凄いいのかな、それ」

「かなり大規模なプロジェクトって言ってたちゆ。オイラも詳しい事は知らないけど、数年を掛けて取り組んでいるらしいちゆ」

「成程。そんなに昔から、七賢人は国の中に居た訳だ」

「そうちゆね。とは言え、それ自体は大臣が出した政策の一つらしく、上手くいけば国民はさらに便利になるちゆ」

「大臣の政策、か。成程、女神の政策ではなく人による政策なんだ。つまり、女神にシェアは余り集まらないわけだ」

「ちゅちゅ。アニキは良いところを突いてるっちゅね。まったくいかない訳では無いけど、大臣の名がルウイーで強くなるっちゅ。勿論女神が一番なのには変わりがないけど、七賢人にとって布石の一つになるっちゅね」

ネズミ君の話を聞き、改めて七賢人の力を認識する。マジエコンの様に正面から女神と戦う者がいれば、今回の大臣の様に搦め手から攻める様な者も居た。実際にルウイーに入り込み、国の中枢で少しづつ力を蓄えている。大胆にも周到にもなれる。あまり表だつて動いていないと言う事だけど、女神にとつては随分と厄介な敵に思えた。「とは言え、表立って止める事も出来ない、か」

「そうっちゅね。やっている事は完全に国民に対して利益になることとっちゅからね」

「ルウイーの女神が内部に七賢人が居る事を把握していれば良いんだけど」

「それは無いと思うっちゅよ。ある程度は信頼されていなければ、大臣なんてなれるはずがないっちゅからね。アニキとしては女神に味方してあげたいんだと思うっちゅけど、難しいと思うっちゅよ」

「それはそうだね。僕が何か言ったところで、意味なんてないだろうし」

大臣はルウイーでの影響力を大きくしようとしている。解っている事はそれだけで、何をしようとしているのかは現状では見当もつかない。そもそもやっていること自体はルウイーにプラスになる事だ。それを阻止する手段なんてない。そもそも阻止するのが正しいかもわからなかった。と言うか、それ自体は手助けする方が良い様に思える。僕はルウイーの七賢人が何をしようとしているのかすら把握できてない。なら、今アレコレと考えたところで、答えなんか出る筈がなかった。ルウイーで七賢人が活動をしている。そう聞いたせいとか、いろいろ余計なことまで考えてしまったようだ。

「まあ、今は深く考える時ではないかな」

「そうっちゅね。物事には流れつてのがあるっちゅよ。言い事をするにしろ悪い事をするにしろ、時期つてのは大事っちゅ。アニキにも七

賢人にも、まだ動く時はきてないっちゅ。だから、今は時を見定めるのが重要っちゅよ」

「……ネズミ君って、結構良いこと言うね」

「ちゅちゅ!? 褒められたっちゅ!! ……あれ? ……なんか、そこはかとなくバカにされたような気が……」

「いや、そんな事はないよ」

本心から感心したのだけど、何故か釈然としない様子のネズミ君だった。

「表の仕事ってのは解ったけど、雑用って言うのは?」

「あー、それっちゅか。七賢人の定期的な仕事っちゅよ。まあ、文字通り雑用みたいなもんだからすぐ終わるっちゅよ」

「ふむ……何をするのかな?」

もう一つの仕事である、雑用の方に話を移す。どうやら、ルウィーの大臣としての仕事では無く、七賢人としての仕事のようだ。

「この世界で女神になる為に必要なレアアイテムに、女神メモリーってのがあるっちゅよ。ルウィーでもそれが出来るところが幾つかあって、その確認っちゅね」

「へえ……。そんな物があるんだ。と言うか、女神ってアイテムを使ってるものなんだ」

「いわゆるクラスチェンジっちゅよ」

ネズミ君の言葉を聞き、少し驚く。以前の次元に召喚された際、超次元の女神についての知識は得ていた。異界の魂の特性の一つに、世界の知識を得ると言うのがあったからだ。その時に得た知識と、この世界の女神とでは少しばかりあり方が違っていたからだ。この世界では女神とは人から成るものようだ。以前の世界では、人々の願いの集合体が女神だった。一言に女神と言っても、世界が変われば色々の違いはあるようだ。

「そう言えば女神って人以外でもなれるのかな? 例えば犬とか」

不意に思った疑問を口に出す。まあ、仮に犬が女神メモリーを使ったら、犬神だろうけど。

「それは流石に解らないっちゅけど、女神メモリーを使えば必ず女神

になれるって訳でも無いっちゅよ」

「と言うと？」

「女神になれるのはほんの一握りだけで、殆どは適性が無いのか醜い化け物に変わってしまうっちゅよ」

「醜い化け物、か」

思わず考え込む。女神になろうと試みた者が、その資格が無い為醜い化け物に成り果てる。それは酷く、辛い事なのだろう。僕は想像する事しかできないけど、願いが届かないのは悲しく思える。……あれ？

「ネズミ君って、女神になれなかった人たちがどうなるのか、見た事ある？」

「……そう言う話が残ってるっちゅよ」

「そっか」

断定するような口ぶりや七賢人の仕事から、もしかしたら女神になれなかった人を見た事があるのかと思っただけど、僕の思い過ごしなのかもしれない。

「……ちゅ。やっぱり、アニキに嘘は言いたくないっちゅ」

「ん？」

「オイラは、女神になれなかった者達の成れの果てを知ってるっちゅよ」

「そっか……」

推測ですらない憶測ではあったけど、やはりネズミ君は知っているようだった。聞きたい事もあるけど、まずは話を聞く事にする。

「あんまり驚かないっちゅね？」

「まあ、想像がつかない程でもないからね。女神メモリーを集めてるとなれば、やる事は一つだろうし」

「今は新たな女神を増やさない為に集めているっちゅけど、嘗ては自分たちの手で女神を作り上げる。女神の統治を良しとしない七賢人は、そんな事を考えた事もあったっちゅよ」

それは、七賢人にとって都合の良い女神を作ると言う計画。今いる女神が駄目なら、新たな女神を作ってしまう方がいいと言う話だった。

「何度か女神メモリーを見つけ、それを手に入れる度に身寄りのない子供とか、消えても本気で捜索されないような人間に使っていたちゆよ。結局一度たりとも成功せず、そもそも人を化け物に変えてしまうつて行為を繰り返していく内に、自分たちの愚かさに気付いて、計画は白紙に戻ったちゆ」

「と言う事は、今は七賢人も無理やり女神メモリーを使ってないんだね？」

「そうちゆ。元々オイラはそっちの計画には関与してなかったけど、実行してた奴は今も後悔してるちゆよ。モンスターの姿に変わった子供たちも責任もって育てているちゆ。それをしているのが、ルウイーの大臣ちゆよ」

「成程」

ネズミ君の話聞き、かつて七賢人のした事は酷い事だったと思う。

「それだけちゆか？」

「まあ、話を聞くと酷い事をしたって思うよ。けど、昔の事じゃないかな？」

「そうちゆね。何年も前のはなしちゆ」

「僕が怒るよりもずっと早く過ちに気付いていた。それで後悔した。なら、それで充分なんじゃないかな。少なくとも僕は当事者じゃないから、怒ると言うのも何か違う気がするしね」

「だけど、それは僕が糾弾する事ではない。自分で言ったように当事者では無いし、その場にいた訳でも無い。全部が終わった後に話を聞いているだけだ。仮に怒る者がいるとすれば、それは化け物に変えられてしまった人達だろう。そして、多分責められたのだろう。どこか元気の無いネズミ君を見ていると、なんとなく想像できる。」

「アニキは優しいちゆね」

「僕は優しいと言うより、実感が無いだけだよ。実感が無いから理性で判断できる。その場で姿形が変わるのを見ていたら、多分もっと感情的な事を言ったと思うよ」

そんな事は無いよ、っと否定する。当事者では無いから、一歩引い



て発言が出来ると言うだけだった。

「一番悩んでるのはルウィーの大臣つちゆよ。身寄りのない子供たちを化け物にしてしまった張本人つちゆから。その罪の意識からか、姿が変わった後でも一人一人を娘として接してみたいつちゆ。本人は隠しているけど、必ず元の姿に戻そうと色々研究しているらしいつちゆ。オイラはモンスターつちゆからね。モンスターに変わり人の言葉を話せなくなった子供たちとも、意思疎通ができるんつちゆよ。だから、偶に子供たちから直接話を聞いて知ったつちゆよ。大臣は七賢人の行動とは別に、子供たちを自分の手で元に戻す方法を探してたりするつちゆ」

「……そっか。七賢人にもいろいろあるんだね」

「二応、大臣の事は他言無用でお願いするつちゆ。一生かけてでも自分の手で解決する。子供達が言うには、そんな覚悟を持っているみたいつちゆから」

「解ったよ」

ネズミ君の話聞き、目を閉じる。確かに許せない事をしたのだろう。だけど、それを酷く後悔してもいる。女神の敵対者としての七賢人の話を聞いたけど、思っていた以上にややこしい事になっているようだ。僕はどうすべきだろうか。今はまだ解らなかつた。一度、ルウィーの大臣に会ってみよう。そうしてから、何をするか決めよう。そう思った。

## 11話 大きな変化

窓から差し込む光が赤く変わりかけていた。夕暮れ時。仕事に精を出していた人たちが、一人また一人と手を止め、帰りの支度を始める頃合いだった。超次元のゲームギョウ界。その次元の国の一つであるラステイションの女神が居を構える教会。その一室で、二人の人物が対面していた。一人はラステイションの女神候補生である、ユニ。もう一人はラステイションの教会で教祖を務める、神宮寺ケイである。その日の仕事が一息ついたため、ユニが話を持ち掛けたところだった。

「ケイ。異界の門って覚えている？」

「ああ、覚えているよ。嘗て、女神であるノワールが犯罪組織に監禁された時に、その救出をするために作り出した道具だね。あれ以来、用いる様な場面が無かったから日の目を浴びてはいないが、技術の研究は未だ行っているよ」

ケイは少し懐かしそうに頷く。異界の門。それは、ユニと四条優一が捕えられていたノワールを助け出すために用いた道具だった。その力はシエアクリスタルに蓄えられたエネルギーを用い世界に干渉し、本来行けない場所に辿り着く為、一時的に道を切り開く事が出来るほどだ。とは言え、それほどのも道具である。簡単に用いれるものでもなかった。転送には膨大なシエアの力を用いる必要があるため、女神候補生であるユニですら、シエアクリスタルの力と自身のシエアを大量に消費する事で何とか転移することができるといふ代物であった。

「そっか、今も研究は続いてたんだ。そりやそうよね。アンタがあんな便利な力、非常時だけ使つて必要が無くなったからと言って放つておくわけないよね」

「ああ。あの頃は色んな事を経験したからね。教祖として、何が起こっても良いようにでき得る限りの事はしているのさ」

「そうだよね。あの頃はアタシもお姉ちゃんが負けるなんて、考えた事もなかったかな」

「そうだね。女神が四人がかりでも負ける。考えてみれば絶対にあり得ない話ではない筈なのに、当時の僕はその対処に関して有効な手を打てず、後手に回ってしまった。もうあんな失敗はしたくないよ」

以前おこなわれた戦いがあった。その時の教訓から、必要になりそうな技術は率先して研究をしているのだと、ケイは答える。犯罪組織との戦い。色々な出会いがあり、別れがあった。目の前にいるユニや、この場にはいないがラストイションの女神であるノワールも、あの頃に比べて大きく成長したようにケイは思う。

「ユウがいてくれたから、お姉ちゃんを助け出せたもんね。あのころのアタシは弱くて、一人じゃきつと失敗してたよ。犯罪組織の幹部に負けて、捕えられていたかもしれないわ」

「あり得無い……とは言えないね。あの頃は敵の力も未知数だった。彼がいてくれたのは、本当に幸運だったと思うよ」

「幸運か。そうね。アタシ達からしたら、幸運だったよね。何の関係もないゲームギョウ界の問題に巻き込んで。巻き込まれたアイツからしたらたまったもんじゃない筈なのに、助けてくれた。」

ケイの言葉に、ユニは少しだけ辛そうに同意する。確かに幸運だった。立ちほだかる強大な敵に立ち向かうため、大きな力になってくれた。命すら賭けてくれた。助けてもらったユニたち女神やゲームギョウ界の人たちにとって、それは幸運だっただろう。だけど、つとユニは慮る。助ける側になった四条優一は一体どういう気持ちだったのだろうか、と考えてしまう。見知らぬ世界で自分一人にされ、誰に相談する事もできず、重すぎる決断を強いられるしかなかった。それはきつと、とても辛い事だったに決まっている。

「……ユニ。大丈夫かい？」

「うん。ゴメン。悪い癖だね。ユウのことを考えると、どうしても後ろ向きなことを考えちゃう」

「辛いなら辛いで、我慢することはないよ。その気持ちも間違いじゃない」

今にも泣きだしそうなユニの雰囲気を感じ取り、ケイは一旦話を切る。救世が成された時から、ユニは異界の魂のことを考える

と、不安定になる事があつた。親しい者しか解らないほどの、ほんの些細な変化。それをはつきりとケイは感じる事ができた。さり気なく自身の事を気にかけてくれるケイに、ユニは小さく深呼吸をして気持ちを落ち着ける。それで幾分か落ち着いたのか、困つたように笑いながら、駄目だなあつと呟く。

「大丈夫だよ。辛くないとは言わないけど……、立ち止まっていられない理由ができたの」

「何かあつたのかい？」

「うん。けど、全部は言えない。小さな可能性でしかないから」

こんなんじや駄目だと言つてから、ユニは切り出した。それは、ユニが得た一つの可能性。親友のネプギアからもたらされた、頼りない一筋の希望。今からやろうとしている事はただの徒労に終わるかもしれない。いや、その可能性の方がずっと高いだろう。それでも、ユニはやってみたいと思う。もう一度会いたい。そう想つてしまったから。

「二つ我儘言つても良い？」

「君が我儘とは珍しいね。話を聞く前に返答はできないから、言つてみると良い」

先程よりも遥かに落ち着いた、だけど何処か懇願するような声音に、ケイはさらりと答える。普段のユニらしくない様子。そこから何か無理を言ってくることは予想できた。そして、無理を言いながらどうあつてもユニは譲る気が無い事も。恐らく随分と悩んだ果てに、切り出したと言う事なのだろう。二人は長い付き合ひだった。だからケイには、今ユニが本気で我儘を言おうとしている事が解つてしまつた。そんな困つた女神に、ケイは内心で苦笑しながら促す。此処は自分が折れるしかない。そう結論付けたから、ユニが言いやすいように何時もの調子で答えたと言う事だった。

そしてユニは、この時の為に持つて来ていた物を取り出しケイを見据えた。

「これまでアタシが作つて貰つたシエアクリスタル。これを使いたいのでできれば全部」

「……君は、何を考えているんだ？」

「異界の門。その力を限界まで使って、次元を越えられるか試してみたい」

犯罪組織との戦いが終わった後、シエアクリスタルの重要性を再認識した各国は、定期的にシエアクリスタルを生成することにした。ラステイションの女神のノワールと女神候補生のユニがシエアを集め、有事の際の備えとして生成していた。そのうち、ユニが自身で集めたシエアで生成したシエアクリスタルの全てを指さし、言った。

「これは、なんとまあ。思っていた以上に無理を言ってくれるね」

「ゴメン。けど、どうしてもやりたいの」

「……とりあえず、一つは解ったよ。もう一つの我儘って言うのは？」  
予想していた以上のお願いに、ケイは思わず考え込む。女神と候補生ではシエアの差が在る為、ユニよりもノワールの生成したシエアクリスタルの方が多いのだが、それでもユニの作ったシエアクリスタルの数も大きい。それを用いたいと言っていた。もう一つのお願いと言うのを聞いてみないと、簡単に返事は出せそうにない。

「……お姉ちゃんには内緒にして欲しいの」

「それだけかい？ いや、確かにノワールに黙っているって言うのは別の意味で難しいけど、前者に比べれば随分と簡単だ」

「まだ、解らない事だから。今お姉ちゃんに教えてもぬか喜びさせるだけかもしれないから。だから、お姉ちゃんには全部終わるまで内緒にしておきたいの。……ううん。違う。アタシはお姉ちゃんに教えたくないんだ。ユウを忘れて秘書官さんと仲良くしてるお姉ちゃんには……」

「ノワールには教えたくない？ ユニ、もしかして」

ユニの言葉や、今までの会話の流れ。そして、無理を押し通したいユニの態度から、一つの可能性に辿り着いた。

「アタシは、アイツに会いたい。本当にアイツなのかもわからないけど……、その可能性があるなら……会いたい。会いたい……」

「そうか……。彼が」

絞り出すように告げたユニの言葉に、ケイはただ頷く事しかできなかった。

「失礼します」

ルウイーの教会にある大臣用の執務室。その大きな扉をここまで先導してくれた職員さんが一言告げ、返答があつたのを確認してからゆつくりと開ける。ルウイーの国に入り、大臣になつて居る七賢人の一人と連絡を取る事に成功していた。入国してから数日経つたが、漸く面会する機会が出来たと言う事だつた。此方にも同じ七賢人であるネズミ君がいるけど、表の顔は国の大臣だ。色々やる事がある所為で、直ぐに会う事が出来なかつたと言う訳だ。

「お客様をお連れいたしました」

「解つた。お主は下がつて良いぞ」

七賢人の一人と思われる男性が職員を一瞥し、ネズミ君と僕を交互に見た後短く言つた。

「では、私はこれで」

「はい、ありがとうございます」

「ご苦労さまつちゆ」

勝手知つたるものなのだろう。職員さんは大臣と僕たちに一礼した後、姿を消す。

「さて、と。ようこそルウイーへ。とでも言うべきかのう?」

そして改めて此方を見据えると大袈裟に手を広げ、言つた。七賢人の一人、ルウイーの大臣だつた。これが七賢人の一人か。単純に興味もあつたので見詰める。大臣と言うだけあつて、良いものを食べているのだろうか。恰幅の良い体型の初老の男性だつた。髪は殆ど白く染まつており、年齢相応の苦労をしてきたのだと思う。良くも悪くも大臣である。色々やってきたのだろう。七賢人と言う事実を知っている所為か、眼鏡越しに見える穏やかな瞳の奥に、油断できないようなものを感じた。

「オイラ達にそんな堅苦しい挨拶はいらないっちゅ。百歩譲ってするにしても、可愛い女の子がするならまだしも、白髪のおっさんがやっても嬉しくないっちゅよ」

「むう、つれないのお」

「そりやそうっちゅ。おっさんの長話とか、聞く気にならないっちゅ」  
今この場に居るのは、大臣が七賢人であると言う事を知っている者だけであった。ネズミ君も大臣も、形式的な挨拶もせず軽口を言い合う。それを横から眺めていた。

「態々長話をするために呼んだ訳でも無いからのう。それはさておき、隣の若いのが噂の奴か？」

「そうっちゅ。女神と似た力を持つ、四条のアニキっちゅ」

「どうも。四条優一です。一応、紅き魂と言う存在で、別名ブレイク・ザ・ハードとも名乗っています」

ネズミ君との会話もそこそこに大臣がこちらを見据えた。ネズミ君が補足してくれた後、名乗る。紅き魂。嘗て異界の魂だった僕が、マジックとクロワールによって新たに与えられた物だった。こうして名乗ってみると、確かにこの前クロワールが言っていたように、沢山の肩書を持っている。別に欲しかったわけでは無いけど、何か感慨深い。

「成程の。普段は本名を名乗り、有事には力を用いもう一つの名を名乗る訳か」

「そうですね。七賢人の部下。ブレイク・ザ・ハードと言ったところでしようか」

大臣の言葉に頷く。思えば前の次元でも似たような使い方をしていた。犯罪組織のブレイク・ザ・ハード。女神の敵としての名だった。「つと、忘れておった。儂の名は……まあどうせ偽名だからいいか。とりあえず儂の事は大臣とでも呼んでくれ」

大臣が名乗ろうとしたところで、言葉を切った。表向きはルウイ一の国民であるから、名前はある筈なのだが偽名のようなうだ。名前を知らないと若干不便であるけど、まだ大臣と呼べる分絶対に知らないといけないと言う訳でも無い。どうせ偽名なのだから、呼ばれなくても問

題ないと言う事だろうか。大臣の言葉に小さく頷く。

「紅き魂、か。その力、儂は実際に見た事が無い。どの程度の物なのか」

「凄まじく強いっちゅよ」

「女神を三人相手取れると言う時点で、それは知っておる。お主が呼び出される少し前に、ネズミとマジエコンヌがやられていたところを鑑みるに、少なくとも七賢人の肉体派よりも上か」

「ぢゅ。あんまり思い出したくないっちゅ」

マジエコンヌによって呼び出された時に、女神と戦っていた。その時の事を言っているのだろう。ネズミ君は虹の女神の事を思い出したのか、少し顔を顰める。完全にトラウマになって居る。

「とは言え、実際に用いるにはどの程度できるのかは知っておきたいかのう」

「それはそうでしょうね」

「うむ。実際この目で見たいところじゃが、流石にそれは無理か」

「いや、良いですよ」

大臣の言葉に小さく笑みを浮かべる。自身を構築するシエア。身に纏うように展開した。

「暴れる訳にはいきませんが、こんな感じですよ」

「ほう……。変身、か」

「そんなところでですよ」

紅を纏い、大鎌を取り出す。その状態で一瞬大臣と見つめ合い、即座に変身を解いた。ほんの僅かな時間。辺りに展開されていたシエアは霧散していた。

「お主は変身しても、それほど変わらなんのか?」

「変わる、と言うと?」

「性格じゃよ、性格。ルウィーの女神は、一度変身すると切れやすくて敵わんわい」

「ああ。成程。プラネテューヌの女神みたいなものか……。そう言う意味なら、ほとんど変化は無いと思いますよ」

女神の中には変身すると性格ガラッと変わる者も居る。以前



戦ったアイリスハートがそうだった。ノワールやユニ君も少しばかり好戦的になって居た。僕の場合はそう言う事はあまりないけど、女神によつてはあるのだろうか。

「アニキはあつた時から落ち着いていたつちゆね」

「まあ、元々そんな性質だからね」

元々それ程好戦的でもない。だからと言う訳でも無いけど、僕にはそれほど変化は無かった。

「成程のう。女神と同じように変身する事が出来、自制も効く。それに加えうちの戦闘担当は、ドイツもコイツも使い辛い。それに比べれば遥かに扱いやすいと来た。成程、掘り出し物じゃわい」

「それはどうも。随分と評価してもらつて、有りがたいですよ」

七賢人の戦闘担当と言えば、真つ先に思いつくのがマジエコンヌである。確かにあの人は、扱い辛いかもしれない。お世辞にも協調性つて言うのはなさそうだし。

「実際の力はおいおい見極めるとして、暫くは表の仕事を手伝つて貰いたい」

「列車の路線建設地の確保でしたっけ？」

「うむ。プロジェクト自体はかなり進んでおるのだが、一部魔物が居座っている所為で、進められていない土地がある。其処に赴き討伐をお願いしたい」

「解りました」

ルウィーに来る際、ネズミ君に聞いていた話だった。新型の鉄道を走らせるとか。裏の裏まで読んだらアレだけど、その計画自体は手伝うべきモノであると思う。素直に頷く。

「うむ。詳しい事は後日連絡するから、よろしく頼むぞ。ところでお主等、この後時間はあるか？」

「ありますよ」

「問題ないつちゆよ」

承諾したところで、大臣は一度話を終わらせた後、そう切り出した。僕もネズミ君も、特段急いでなすべき事は無い。隠さず答える。

「ルウィーの女神メモリーの確認を頼みたい。今日は儂の担当なのだ

が、ちつと手が離せなくての」

「ああ、雑用の方か」

「そう言う事じゃ、住処やら何やら手配してやったんじゃ、これぐらいは頼みたい」

「まあ、アニキも見に行つておくのも良いつちゆからね。受けるとい  
いつちゆ」

ネズミ君の言葉に頷く。どうせこれから暫くルウィーで厄介になる。なら、早くから場所を知つておいても良いだろう。元々そう言う約束でもある。断る理由の方が無かった。

「そうだ大臣。あの子たちの散歩も兼ねて言つてくるつちゆ」

「む、確かに最近は仕事が忙しくて遊びに行かせてもやれなかったし  
のう……。なら、ついでに頼むわい」

「あの子たち?」

「大臣が養っている、子供たちつちゆよ」

「成程」

大臣の養っている子供たち。女神メモリーを使われ、女神になれな  
かった子供たちの事だった。流石に今は突っ込んだことを大臣に直  
接聞ける状態では無い。何も言わず、ネズミ君の言葉に頷く。

「では悪いが頼んだぞ。場所は何時ものところだからな」

「了解つちゆ!」

「では、失礼します」

大臣の言葉に、ネズミ君は大きく頷く。これから行く場所について  
ネズミ君は詳しく知つているようだ。そんな言葉を聞き、一礼して部  
屋を後にする。こうしてルウィーの七賢人との対面は終わりを告げ  
た。

大臣との面会を終え、ネズミ君と共に彼らの言ういつもの場所に向  
かっていた。都市部を抜け去り、郊外に位置する自然が増え始めてい  
る通りを抜け、紅葉が鮮やかに広がる地域に差し掛かっていた。辺り

に民家はあまり無く、偶に点在しているぐらいである。自然の美しさを楽しみながら歩いていくと、一際大きな建物を見つけた。目的の場所だろうか。

「ちゅちゅ。ちよつと待ってて欲しいつちゅ！」

そう言い、ネズミ君が建物に入っていく。その後ろ姿を見送り、戻って来るのを待っていた。やがて、ネズミ君の声が聞こえてきた。何やら、ぞろぞろと気配みたいなものを感じる。戻ってきたネズミ君たちを見て、少しだけ驚いた。だって、思ってた以上に数が居たから。

「きゅいきゅい」

「きゅいきゅい」

「きゅいきゅい」

「きゅいきゅい」

ネズミ君が引き連れてきたのは、あまり見た事が無い魔物たちだった。しいて言うなら甲殻類だろうか。異界の魂として得た知識の中に、ひよこ虫と言うのが居るが、少し違って見える。直感した。この子たちが、ネズミ君の言っていた子供たちでは無いだろうか。

「お待たせつちゅ！」

「ああ、お帰り。この子たちはひよつとして……」

「まあ、解るつちゅよね。女神になれなかった子供たちつちゅ」

ネズミ君の言葉を聞きながら、その姿をゆっくりと見つめる。何処か、人に受け入れがたい風貌をしている魔物だった。女神の存在は、シエアによって維持される。つまり、願いに生かされると言う事だ。そして、目の前にいる子供たちは、女神になれなかった子供たち。女神が願いに認められた存在だと言うのなら、彼女たちは願いに拒絶された存在とも言うのだろうか。何故か、その姿が酷く悲しく感じられた。一人一人見詰めた。

「きゅい」

不意に、一人の子供と目が合った。強く、此方を見詰めている。何を言っているのかは解らなかった。傍に歩み寄る。

「アニキ？」

ネズミ君が不思議そうに声を掛けてくる。構わず、手を伸ばした。

「きゅん」

一声、子供が鳴いた。ばかり、つと強い力を感じた。直後に喪失感。えっと思った。魂が騒めいた。そんな奇妙な感覚が全身を包んでいた。発光。気付けば、子供が淡い光に包まれている。見た事がある光だった。気付けば、自身も光を纏っている。変身。自分の意思とは関係なく、紅を纏っていた。

「戻れた……の?」

目の前で、呆然と少女が零した。雪のように白き髪を、二つに結った女の子。マジエコンヌの様に紅く染まった瞳を、大きく見開いている。似ている。何故か、そう思った。

「ちゅちゅ!? あ、アニキ何かしたっちゅか!」

「いや、解らない……。この子に触れたら……。元に戻った」

自身の両手を見詰め呆然としている少女を、此方もそれと同等の驚きで見つめていた。何かしようとしたわけでは無い。ただ、妙に気になる子供がいた。魔物の姿をしているが、子供だった。何かに引き寄せられるかのように触れてみた。それだけだった。

「とりあえず落ち着こう」

一度深呼吸を吐いた。気付けばほかの子供たちもこちらを見詰めている。困惑と期待、だろうか。何が起こったのか解らないと言う不安と、自分たちも元に戻れるかもしれないと言う期待だった。僕にも何が起こったのかは解らない。だけど、他の子たちに同じ事が出来るとも思えなかった。兎も角、一度周りの事は置いておき、正面に居る女の子に声を掛けた。

「君の名前は何て言うのかな……?」

「……」

僕の質問に対し、少女は此方を見詰めて来るだけで返答は無かった。雪のように白い髪。触れれば折れてしまいそうな華奢な体。そして、血の様に紅い瞳を持った小さな女の子だった。多分、ユニ君よりも年下だろうか。年齢は解らないけど、そんな印象を持つ。

「ちゅ。聞かれてるんだから、答えるっちゅ」

「いや、ゆっくりで良いよ。ゆっくり落ち着いてから答えて欲しいな」

痺れを切らしのか、ネズミ君が声を上げた。それを手で制し、女の子と目線を合わせ、できる限りゆっくり告げた。ネズミ君もこの子も、そして僕も混乱していた。落ち着くと、自分も含めて言い聞かせる。

「私の名前」

「うん。名前は？」

やがて、ゆっくりと絞り出すような小さな声が耳に届いた。

「マジックって言うの……」

それは、予想だにしない名前だった。

「そっか。君は両親を失って、一人だったところをあの姿に変えられちゃったわけなんだ」

「うん」

マジックの話のひとつしきり聞き、そう纏めた。親を失った。ありふれた不幸だった。特別と言う訳では無いけど、実際に合ったら辛いと言えない出来事。両親が死に、天涯孤独となったところで攫われたと言う事だった。不幸に不幸が重なった結果が、目の前に居る女の子だった。マジック。その名を聞くたびに魂が騒めく。多分この子は……。

「お兄ちゃんは、めがみ様なの？」

「いや、違うよ」

一つの可能性に至ったところで、マジックが小首を傾げて聞いて来た。それに違うと答える。確かに先程僕は女神の用いるプロセッサユニットを展開していたけど、似て非なるものだった。少なくとも女神では無い。いろいろ理由はあるけど、とりあえず僕は男だし。

「紅き魂って言うんだけど」

「何それ？」

「まあ、女神様みたいに強い男の子だと思ってくれたらいいよ」

「うん」

マジックは、小さな子供だった。詳しい事を説明しようとして、や

める。まだ難しいだろうし、この子にとってそれほど重要な事でもないからだ。

「落ち着いたつちゅ?」

「ああ。お陰様で一息つけたかな。マジックも少しずつ話してくれるようになってきた」

ねぎらいを掛けてきたネズミ君に、軽く手を上げ応える。マジックを元の姿に戻せたため、他の子供たちにも触れてみたが、効果はなかった。その為、ネズミ君には他の子供たちを任せていた。元に戻ったマジックは兎も角、他の子の声は聞こえないから。

「ちゅちゅ。一応大臣には連絡したつちゅけど、つながらなかったつちゅ」

「まあ、多忙だしね」

「とりあえず、このまま当初の予定どおりで良いつちゅか?」

「そうだね。女神メモリーの確認に行こうか」

連絡が付かないならば仕方が無い。とりあえず、当初の予定をそのまま実行する事にする。幸い、マジックが元の姿に戻れただけだった。動く事には支障が無い。

「ゆっくりさせてあげたいけど、少しだけ一緒に来てもらっても良いかな?」

「うん。何処か行くの?」

「最初に言っていた通り、散歩に行くつちゅよ」

そうなの?と目で聞いて来たマジックに頷く。元々そう言う予定だと知っていた。特に反対する気はなさそうだ。

「お兄ちゃんも来る?」

「行くよ」

「なら、行く」

こちらを窺うような視線に、僕も一緒だと答えた。それで安心したのか、マジックは小さくはにかむ。多分この子は神次元のマジックだと思う。僕の中にある紅の女神の魂が、それを告げているから。だけど、何と言うか、イメージが違った。

「手、繋いでも良い?」

「ああ、構わないよ」

おずおずと伸ばされた手、そつと握る。それだけなのだが、マジックは酷く嬉しそうだ。

「行こっか」

「うん」

手を握ったマジックを促す。目的地に向けて歩き始めた。それを見たネズミ君や他の子供たちも移動し始める。直ぐにネズミ君が先頭を行、先導をはじめてくれた。それを、マジックの歩幅に合わせてゆつくりと付いて行く。風が頬を凧いだ。目を僅かに細める。ルウイーの紅葉が美しく舞った。

「きれい」

「そうだね」

マジックの呟きに同意する。手には暖かな温もりを感じた。歩を進める。不意に、大きな風を感じた。直後に、声。聞き間違える筈が無い懐かしい声。思わず空を見据える。視界の先にあったのは、黒と白だった。

「なんで落ちてるのよおおおおおお!!」

「は?」

思わず間の抜けた声が出た。いや、だって、予想だにしていなかったから。一日のうち、予想できない事が二回も起こっていた。幾ら面倒事に慣れていたとはいえ、許容量を超えていた。

「そうだ……あ、アクセス!! って、変身もできないいいいい!! なんですよ!! あ……やばっ、だ、誰か助けてええええええ!!」

「ごめんね、マジック」

「あ……」

反射的にマジックの手を離し、紅を展開した。考えるよりも先に、身体が動いたから。マジックの驚いたような声が耳に届いた時、空を駆っていた。

—— エクス・コマンド

—— ファイン・コマンド

自身に二つの魔法を施し加速する。地に向かい墜ちる少女。一瞬

で追いついていた。

「あうう!?!」

「つと」

手を伸ばし抱き留める。両の手に、懐かしい重さを感じた。あの子では無い。そんな事は解っていた。だけど、動いていた。そのままでき得る限り重力に逆らわない様に飛行し、勢いを逃がす為弧を描く。やがて、勢いを緩め着地しようかと思つた時、抱き留めた少女と目が合った。それは見た事のある瞳。だけど、僕の知る女の子のものでは無い。

「大丈夫?」

「あ、ああ……」

そのはずなのに、僕が聞いた時返答は無くただ涙が零れ落ちていた。そして、

「ユウ……」

「え……?」

有り得ない言葉を聞いた気がした。



## 12話 願い

「突然すみません」

そうやってユニが頭を下げたのは、プラネテューヌの教祖であるイストワールだった。

「いえ、構いませんよユニさん。詳しいお話はネプギアさんから聞いています。ネプテューヌさんが別次元で出会ったと言うブレイク・ザ・ハードと名乗った男性。この世界で異界の魂だった四条優一さんかも知れない人に会う。そう言う事でしたね」

「はい。可能性があるなら試したい。どうしてもアタシは、アイツに会いたいんです」

ユニが神宮寺ケイにシエアクリスタルと異界の門の使用の許可を得た後に向かったのは、プラネテューヌの教会だった。新型の異界の門を起動する為のシエアクリスタルを手にし、身に付けた状態でプラネテューヌの教祖であるイストワールを訪ったと言う事だった。イストワールの言葉にユニは小さく、だけどしっかりとした声音で頷く。会いたい。その一言に万感の思いが込められているのを、イストワールは感じ取った。事前に聞いていたネプギアの話やユニの言葉と態度を見るに、その思いが本気だと言う事が簡単に窺い知れる。

「四条さんには、本当にお世話になりましたね」

「はい。アタシもお姉ちゃんも何度も助けて貰いました……。恩返しをしても返しきれない程、助けて貰いました……」

イストワールも四条優一とは何度か面識があり、言葉を交わしていた。その事を懐かしく思いながら言ったイストワールの言葉に、ユニは悲し気に頷く。既に救世が成され数年の月日が流れていた。だけど、ユニは当時を昨日の事のように思い出す事が出来る。それが、過去を思い出にする事を拒んでしまうのだ。文字通り命を賭けて自分たちを救ってくれた友達を想うと、過去の出来事だと割り切る事が出来る訳が無かった。

「さて、本題に入りましょうか」

「あ、はい。ネプテューヌさんの居る次元。神次元でしたっけ？」

「はい。どうやらネプテューヌさんの居る次元にはその次元の私が居るようで、私同士が交信する事で連絡を取る事が出来たんですよ」

「イストワールさん同士が連絡を取るって……。よくよく考えると不思議ですね」

「ふふ、そうですね」

イストワールはユニの想いが本物なのを確認すると、話を本題に移す。イストワール同士が何故交信できるのかなどの説明をはじめたら時間がいくらあっても足りない為、そこには深く触れる事無く話を進めて行く。

「異界の門。それに神次元の次元座標を入力してください。次元座標の数値は――」

ユニが四条優一に出会うために用いるのが、シエアにより空間を越える道具である異界の門だった。犯罪神との戦いの折に開発され、更に改良された物が今ユニの手にしている物であった。他次元空間に存在する次元ごとに割り振られた変動する事の無い位置情報。それをイストワール同士が交信する事によって割り出す事が成功していた。超次元のイストワールが神次元のイストワールに交信し、意思疎通を行おうとすれば三日かかってしまうのだが、互いの位置情報を得るだけならばそれ程時間が掛かる訳では無かった。3分で交信を終え、神次元の位置情報をイストワールはユニに伝えていく。

「ふう、入力完了つと。これで間違いはありませんか?」

「今確認しますね。……はい、大丈夫です。問題ありません」

ユニが異界の門に入力した次元座標を、イストワールが確認する。問題が無いのを二人で確認すると、準備が整ったと言うところだった。

「これで、準備が完了しましたね」

「はい、ありがとうございます」

全ての準備が完了したところで、ユニはイストワールに礼を告げる。そんなユニの姿にイストワールは朗らかに笑うと、いえいえ、何時もネプギアさんがお世話になって居ますからお互い様です。つと言い、ユニに頭を上げるように促す。

「ネプギアさんが帰ってくるまでもう少し時間がありますね。どうしますか？」

会話が途切れたところで、イストワールはユニに尋ねた。ユニがプラネテューヌの教会に訪れた時、ネプギアはギルドでクエストをこなす為外出していたからだ。ネプギアはネプギアでシエアを集める必要がある為、ユニとは入れ違う形になって居た。ネプテューヌが超次元に戻る為には、プラネテューヌのシエアを稼ぐ必要があったからだ。イストワール同士の交信機能を利用すれば、シエアを用い一時的に二つの次元に道を作る事が出来るのである。その術を実行する為に、シエアを稼いでいると言う訳であった。ちなみにユニもその方法を用いれば、神次元に行く事が出来るのではあるが、今すぐ移動できると言う訳でもない為、本来の予定通り異界の門を用いる事にした。でき得る限り早く試したい。そんな焦りにも似た気持ちがあった。

「ネプギアにも会って話したいですけど……」

「そうですね。もう何年も我慢してきたんですものね。好きな人に会えるなら、早い方が良いですよね」

「ちよ、イストワールさん!? が、我慢なんてしてませんよ」

ネプギアには悪いけど、もう待っている余裕が無い。声には出さないが、早く早くつと言う気持ち顔に出ていた。そんな可愛らしい様子のユニを見ると、普段は真面目なイストワールも、少しだけ悪戯心が浮かんでいた。にっこりと言うイストワールの言葉に、ユニは頬が熱くなるのを感じた。思わず声を上げるが、強くは出れない。最後はごによごによと言葉にならない言葉を上げていた。

「ふふ、ごめんなさい。けど、リラックスできましたか?」

「うう……。はあ、もう良いですよ。ありがとうございます」

結局、言い返す言葉も出ない為、小さく溜息を吐き話を終わらせる。

「ユニさん」

「何ですか?」

「シエアと言うのは、祈りや願いの力です。何かをしたいと言う気持ち。願いを叶えたいと言う気持ちだが、シエアと言えます」

一息ついたところで、イストワールがユニに教えるように言った。

「願い……ですか？」

「はい。本来は人々の願いを叶えるための力です。ですが貴女たち女神の願いも、願いもまたシエアと言えます」

「アタシたちの願いも、シエア」

ユニはイストワールの言葉を反芻する。女神の願いもまた、シエアなのである。シエアとは、願いを叶える為の力だった。

「女神様も偶には我儘を言っても良い筈です。貴女は貴女の願いをシエアに込めて見てください。きつと、上手くいきます」

「アタシの願いを……、願いを込める……。はい!!」

願いを叶える為の力がシエアである。なら、女神の願いもきつと叶う筈だ。異界の魂が、世界を救いたいと言う女神の願いを叶えた様に、祈りはきつと届くはず。その事を伝えていた。

「ありがとうございます、イストワールさん」

「はい。では、成功を祈っています」

「はい。ふう……」

そして会話が途切れる。ユニは深く息を吐き、祈りと願いを込め異界の門を起動させる。そして、ゆっくりと呟いた。

「——アクセス」

祈りの輝きが辺りを包み込み、ユニの周りの空間が歪んだ。

「アタシは、ユウに……会いたい!」

イストワールがユニの願いを聞いた時、光が一際多く輝いた。イストワールは思わず目を瞑る。そして、再び瞳を開けた時、ユニの姿はその場から消え去っていた。

願いを込めて異界の門を起動させ、空間を飛び越す奇妙な感覚が過ぎ去った後、ユニは妙に爽快な感覚に包まれていた。風を切る感覚とでも言えば良いのだろうか。女神化を行い空を駆る時よりも更に加

速し、風を切る。高揚感にも似た感覚が全身を包んでいる。強烈なシエアの輝きに思わず閉じてしまった瞳をゆっくりと開ける。遠くに、地面が見える。一瞬思考が停止していた。

「なんで落ちてるのよおおおおおお!!」

再起動。訳が分からないままユニは全力で叫んでいた。アタシはユウに会いたいわって願って異界の門を起動させたはずだ。なのに何で落ちているのよ。あまりに訳の分からない状況に、そんな叫びをあげる。そう言えばネプギアが姉であるネプテューヌから聞いたと言う話を思い出す。確か。

「ってこんなの慣れる訳無い！ 楽しい訳ないでしょ!？」

落ちるのには慣れているとかなんかと。落ちてみると意外に楽しい。いらしいが……、ユニは其処まで人生を楽しめるほど樂觀的でもない。

「そうだ……あ、アクセス!! って、変身もできないいいいい!! なんですよ!! あ……やばっ、だ、誰か助けてえええええ!!」

訳の分からない状況でかなり動揺してしまったが、女神化すれば良い事に思い当たる。そのまま意識を集中させ、プロセスサユニットを展開させようとして、失敗した。何時もなら体を動かすのと同じように無意識でも行える行為が、何故かできない。完全に混乱していた。何で、どうして。そんな事を考える暇も無く、地面が近付いてくる。やばい。ユニがそう思った時には、既に叫んでいた。助けてっつと。落下の恐怖に強く目を瞑る。その直前、紅の輝きを見た気がした。何故か、胸が苦しくなった。もう一度、助けてっつと呟いた。

「あうう!？」

「っつと」

そして、身体に軽い衝撃が加わり浮遊感が消えた。何かに抱き留められたのが解った。同時に酷く懐かしい声が聞こえた。ユニが間違えるはずの無い声音。胸が苦しくなるほど、早鐘を打った。ゆっくりと声のした方向へ瞳を開ける。

「大丈夫?」

「あ、ああ……」

そこで目にしたのはずっと会いたかった友達の姿。

「ユウ……」

「え……？」

救世の成された日、ユニの前から姿を消した異界の魂だった。

「ユニ……君……？」

僕が見間違えるはずのない女の子。この次元でのラステイションの女神候補生である、のユニ君の眩きを聞き、そんな事があり得る筈がないと解っていないながら零してしまった。確かに彼女は「ユウ」と僕の目を見て眩いたから。その緋色の瞳から一筋滴が零れ落ちた。じわりと、彼女の瞳が潤いを始めていた。泣き出すのを必死に我慢し、今にも崩れそうな表情で継るように僕を見つめている。ずきり、つと胸が痛んだ。それは、かつて見たユニ君の表情に酷似していたから。剣の極地に至り垣間見た未来。命を捨てることを肯定し、姉であるノワールの持つ魔剣に貫かれ泣き笑いを浮かべたあの子の姿が重なる。何か言わなければいけない。だけど、それ以上言葉が出てこない。この子を抱きしめることで感じる懐かしい暖かさだけが、目の前にユニ君がいることを実感させる。

「……っ!? ユウだ。やっぱり……ユウだ」

呆然と呟いた一言に、ユニ君は目を大きく見開くと、今度こそ大粒の涙をとめどなく零し始める。その姿にただただ困惑するしかない。この世界は神次元のゲームギョウ界で、ぼくの知るあの子は超次元の女神候補生な筈で。今この場にいる筈がない。どこかぼんやりとした思考のまま、腕の中にいる女の子を抱きしめる。現実に思考が追いついてこなかった。だけど、

「ユウ、なんだよね……？」

そんな事はどうだって良かった。腕の中にある温かさが、僕を見る濡れそぼった瞳が、何よりも喜びに満ち溢れた声音と彼女から感じることができるシエアが教えてくれた。かつて異界の魂である僕を呼び出した者たちと同質のシエアを持つ者。目の前にいるユニ君が、僕

の友達であるユニ君と同一人物であると教えてくれていた。だから、不安と期待の入り混じった言葉に小さく笑みを浮かべ、口を開く。「そうだよ。僕の名は四条優一。かつて女神に呼び出され異界の魂。女神に呼び出されながら女神に敵対し犯罪組織のブレイク・ザ・ハードと名乗り、願いと祈りの剣を作り出した者、かな。久しぶりだね、ユニ君」

我ながら奇妙な名乗りだとは思うけど、それで良かった。彼女が本当に僕の知っているユニ君なら、この言い方をすれば解るだろうから。勿論、目の前にいるのが僕の知るユニくんではない可能性もある。だけど、その可能性は考えないことにする。

「……」

「……あれ？　もしかして、違った？」

そんな僕の言葉を聞き、ユニ君は時間が止まったように黙り込んだ。もしかして、僕の予想が外れたのだろうか。それだったら、どうしてこのユニ君は僕の名を知っていたのか。そんなことを考え始めたところで。

「会えた。また……逢えた！　生きてた。生きてて……くれ……た……。う、ひっぐ……」

「え、……ユニ君？」

ユニ君が小さく嗚咽を零しながら少しずつ言葉を紡いでいく。そんな妹分の姿に、少し慌ててしまう。だけど、彼女の言葉が止まることはなくて。

「また……、アタシの、こと……なまえで呼んでくれ……。うけとめてくれて……あう……、うう、だめ……だめなのに、うれ、嬉しいはず……なのにつ、とまんないよ……。なみだで、ユウの顔が、ちゃんともえないよ……。あうう、ひう、うっ、う、わああああああん！！」

「っ!？」

「会えた、やっと逢えた!!　あ、あい、逢いたかった。逢いたかったの！　ずっと。ずっと、ずっと、ずっと、ずっと、ずっと、ずっと!!」

華奢な体を此方に預け、絶対に離さないと言わんばかりに両の手に力を入れたまま、ユニ君は泣きながら想いを吐露する。掛ける言葉が見つからない。ただ逢いたかったのつと言い震える妹分が安心できるよう、ただ黙って腕に力を込める。

「消えたと思ってた……」

「うん」

ユニ君の零す言葉は、僕がこの子に与えてしまった痛みだった。

「もう逢えないと思ってた……」

「うん」

泣きながら僕の胸に顔を押し付け零す言葉に唯耳を傾ける。

「支えてくれるって約束したのに……」

「うん」

泣いているユニ君に掛ける言葉が出てこないから。

「仲間だって……言ってくれたのに……」

「うん」

泣かせたのが自分の成した事の結果だから。

「友達だって……言ってくれたのに……」

「うん」

この子に与えた痛みが自分の想像以上だった事に胸が痛んだ。だけど……

「それなのに！ アタシに何にも相談してくれなかった！ 友達だと思ってたのに……。アタシにとってアンタは大事な友達だったのに……!!」

それ以上に、こんな僕の事を泣いてしまうほど大事に思ってくれていた事が嬉しくて、ただ腕に力を込める事しかできない。そして

「すっごく悲しかったんだよ……」

「……ごめんね」

最後にそう締めくくったユニ君に何とかそう返すのがやっとだった。頬に、冷たい物が流れる。ソレを拭わず、腕の中に居る妹の頭をゆっくりと撫でた。

「バカ。ぜつたい、絶対許してなんかあげないんだから……。一生傍



に居て償わせてやるんだから。覚悟……しててよね」

そして顔を上げたユニ君は、涙で目を真っ赤にしながらも僕を真っ直ぐに見つめ、この子らしい悪戯な笑みを浮かべそう言ったのだった。

### 13話 本心

「……」

嬉し涙を零すユニ君にどう返事を返したものと困っていた所で、見られている事に気付いた。当たり前前である。直ぐ傍にはこの次元の小さなマジックが居て、ネズミ君もいた。何よりここまで共に来た女神に成れなかつた子供たちもいる。ユニ君の登場の仕方と言い、見るなど言うほうが無理な相談だった。

ユニ君がその視線に気づいた様子は無い。大切な妹をそつと抱きしめたまま、どうしたものかと考える。とは言え、どうしようもないか。

「とりあえずユニ君」

「なあに？」

一言声を掛ける。どうしたの、と言わんばかりに小首を傾げてこちらを見詰めてきた。その仕草に改めて思った。かなり距離が近い。正直言って照れくさかつた。女の子らしい柔らかさと、仄かに香る甘い匂いにほんの少しだけ動揺してしまうのは仕方が無いのではないだろうか。

「離れてくれないかな？」

名残惜しいけど仕方が無い。また会えた。一度はもう会う事も無いだろうと心に決めた妹分に、もう一度会えた。触れれば届く距離に、この子がいる。思わず涙が零れる程嬉しかった。それだけでも充分すぎる程である。一旦気持ちを落ち着ける意味も込めてそう提案していた。

「ヤダ」

「え？」

なのだが、につこりと満面の笑みを浮かべて彼女が告げたのは明確な拒絶だった。いや、うん。ヤダって。また、随分と可愛らしく断られたものである。断られたと言う事実より、あまりにも自然な笑顔に言葉を失う。

「えーっと、なんでかな？」

僕の背に回された腕が、先ほどまでより少しだけ強く感じられた。困惑しながらユニ君と目を合わせる。それ以上の返答は直ぐには来ず、そのままの状態で見詰め合うしかなかった。暫しの沈黙。その一瞬と言って良い程の時間が、何故か長く感じられる。変わらず鼻孔をくすぐる女の子らしい匂いに、改めてユニ君を女の子なんだと意識してしまう。

「だつてさ」

「だつて？」

やがて、俯くように視線が外されると同時に、ユニ君がぽつりと零した。相変わらず、背中に腕を回されたままだ。気恥ずかしくはあるけど、振り解く事はできそうにない。

「今離れたら、また居なくなっちゃうかもしれないよ。せつかく、折角会えたのに……。アンタとまた離れるなんて、嫌だよ」

「ユニ君」

「あはは……。ごめん、ごめんね。こんなの変だよ。直ぐ……。離れるから。あと少し、あと少しだけ待って」

再び浮かんだ泣き笑い。その表情を見ると、胸が締め付けられる。僕は何をしているんだ。そんな事を自分に言い聞かせる。この子を泣かせていた。守ると言い、支えると約束した女の子。結局ほとんど何かをしてあげることができなかつたけど、それでも信じてくれていた。僕が消えてからも探してくれた妹を不安にさせてどうするんだと、自分自身を叱責する。

「大丈夫だよ。僕はもう、消えたりしないよ」

「……うん。解ってるよ。解ってるけど……。怖いよ。今が夢だったらって思うと、怖い」

「夢じゃない。今僕は此処に居るよ。君の傍に居るから」

「約束、してくれる？」

不安げな妹の言葉に頷く。僕にとってこの子は、家族みたいなものだった。元の世界では家族を失い、呼び出された世界で出会った妹分。四条優一が犯罪神に立ち向かえた理由の一つ。命を懸けても守りたいと思った女の子。それがユニ君だった。そんな子を安心させ

るの為なら、約束の一つや二つお安い御用だった。

「良いよ。言ってみて」

「アタシに黙って消えたりしないで。ずっと、ずっとアタシと一緒にいて欲しい」

「ああ、解ったよ。君が嫌にならない限り、一緒に居るよ」

だから、そんな約束をしていた。幸いこの子は女神であり、僕もまた似て非なる存在だった。クロワールが言うには神族に近い様だけど、どちらかと言えば亡霊とかの類な気はする。とは言え、それはあまり重要では無い。自身が宿しているシェアを失わない限り、僕が消える事も無い。つまり、それはこの子と同じ時間を歩めると言う事だった。友達であり、大切な妹分だった。この子が望んでくれる限り、友達として傍に居てあげる事には何の問題も無かった。

「本当?」

「ああ、本当だよ」

それでもまだ不安なのか、僕の様子を窺うように上目遣いで聞いてくる。我ながらこの子には酷い嘘を吐いていた。簡単に信じて貰えないのも仕方が無い。それでも、信じて貰えるように、背中をあやす様にゆっくり撫でながら告げる。

「……解った。信じて……あげる」

「そっか。ありがとう」

漸く信じてくれる気になったようで、ユニ君は少し恥ずかしそうに笑いながら離してくれた。密着していた事で感じていた温かさが離れた。代わりに、そっと右手だけが握られている。

「もう、嘘はつかないよね」

「うん。善処はします」

「そこは言い切りなさいよ!」

漸く落ち着いて生きたのだろうか。ユニ君らしさが出て来はじめていた。その姿を見ると、しおらしい感じも魅力的ではあるけど、やはりこの子は強気なぐらいが一番可愛らしいと思う。

「あはは。ごめんね」

「アンタのごめんって、結構軽いよね」

「……耳が痛いです」

宥める心算が、思わぬ反撃を受けてしまった。顧みても、確かに言い返せないところがある。謝りながら、色々な事をしてきた。文字通り命を賭け、泣かせたりもした。耳が痛い。

「まあ良いけど。それとさ、ユウ」

「ん？」

とは言え、本気で怒っている訳では無いのだろう。漸く楽しそうな笑顔を浮かべてくれた。そして、その表情のまま

「アタシがアンタの事を嫌いになるのって、多分一生ないよ……」

「え……？」

思いの寄らない事を言われた。多分聞き間違えでは無い。だけど

「それは」

「っ!? はいはい! この話は此処で終しまい!」

「は? いや、でも流石に気になる」

「それを言ったら、アタシはアンタが何で生きているのとかの方がずっと気になるわよ! そうよ、考えてみたらなんで紅くなったり別の次元に来てるのか全然聞いてないし。そっちの方が気になるわよ。聞かせなさいよ!」

無理やり話を変えられる。これ以上この話は無理だろう。きつと、話す気が無いだろうから。意味深な事を言われ、正直困惑していた。だけど、これ以上聞ける剣幕では無かった。そのままユニ君の疑問に答え始めた。

「結局、その子はアニキにとってどう言う子なんっちゃゆか? ……コレツチュ?」

流石に犯罪神との戦いの顛末をすべて語る時間はないので、想剣を作った後の出来事をかなり大雑把に説明したところで、ネズミ君が口を開いた。にやにやとした笑みを浮かべ、小指を立てる。その表情が何というか、非常におっさん臭い。ネズミだけど。苦笑が浮かぶ。確

かにユニ君は可愛らしい女の子だけど、そんなに色っぽい関係ではなかった。

「こ、恋人!？」

ネズミ君の質問に、ユニ君が大きく動揺した。この手の話題に慣れていないのは姉妹共通なのだろう。恥ずかしそうに頬を染める姿は、何と言うか非常に女の子らしく魅力的だ。残念ながらそういう事実はないが、少し意識されるぐらいは役得みたいなものだと思うことにする。

「まあ、残念ながらそんな色っぽい関係ではないよ。大切な友達で、妹みたいな女の子、かな」

とはいえ、変に誤解を与えるつもりもない。これまでの会話から妙な勘違いをしていそうなネズミ君に、事実を教える。

「妹、ちゆか?」

「そうだよ」

かなり意外そうなネズミ君の言葉に、頷く。まあ、死別からの再会みたいなものだし、ユニ君のほうも気が昂りすぎただけだと簡単に説明する。

「むー。妹。妹かあ……」

「ちゆちゆ。寧ろこっちが不満そうっちゆよ」

「あれ?」

そんな僕の言葉に釈然としないのか、ユニ君が不満そうな言葉を零した。思わぬところからの攻撃に、虚を突かれた。

「アンタにとつて、アタシは妹なの?」

「……そうだね。こう言っっちゃアレだけど、大切な家族みたいなものだと思うているよ。僕は女神に呼び出されたからね」

ユニ君の言葉にただ頷く。それは事実だった。超次元のゲームギョウ界に呼び出され、初めてであった女神がこの子だった。決して長い間一緒に居た訳では無いけど、その姿や想いは深く印象に刻まれていた。

超次元で尤も深く関わった女神は黒の女神姉妹である。ユニ君とノワールでどちらが大事かと聞かれれば自分でも答えられないが、尤

も家族に近いと思えるのはこの子だった。

「女神に呼び出されたから。ユウを呼び出したのは、女神なんだよね。候補生じゃなくて、女神」

「そうだね」

ユニ君の言葉に頷く。クロワールやマジックが言うには、僕は女神によって用いられた術によって呼び出されている。術の発動直後は呼び出されなかったけど、その数年後に現れた異界の魂。それが僕である。何故数年の時の隔たりがあったのかは解らないけど、確かに僕は女神によって呼び出されたらしい。あまり気にはしていなかったけど、これもまた不思議な事だった。

「ユウはさ、お、お姉ちゃんの事はどう思っているの？」

「ノワールの事、かい？」

「う、うん。アタシが妹なら……、お姉ちゃんはどんなのかなって」

ユニ君の言葉に考え込む。ユニ君の姉ノワール。ラストイションを司る女神で女神で、黒の女神ブラックハート。姉妹揃って努力家で、他人に頼るのが苦手な女の子。初めて出会った時は勘違いによって酷い目に合った。正直言うと、少し苦手だった。だけど、僕を呼び出した女神の一人で、その不器用な姿がどうしても見ているだけではないらしくて。

「……ユニ君以上に放って置けない女の子、ううん、好きな子、かな」

結局気付いたら好きになって居たのだと思う。少なくとも想剣を創り出したあの時。自身の気持ちに気付いた。護りたい相手が二人出来ていた。一人は大切な家族。元の世界で家族を失った僕が、その家族以外に、新しい家族だと心から思う事が出来た大切な妹分。黒の女神候補生である、ユニ君。そしてもう一人が好きな女の子。一見完璧に見えるけど、ユニ君以上に不器用で脆いところのある放って置けない女神様。黒の女神である、ノワールだった。

「っ!? す、すき!」

「そうだね……。好きだった、女の子かなあ」

目の前に居るユニ君も可愛らしく魅力的な女の子であるけど、自分がどちらを好きかと聞かれればノワールだった。勿論ユニ君の事も

好きではあるが、好きの意味が違う。女の子として好きなのと、家族として好きなのとで別れていた。前者がノワールで、後者がユニ君だ。

「じゃ、じゃあさ」

「ん？」

「お姉ちゃんに会いたい？」

ふむつと考え込む。確かにノワールに会いたいと言えば会いたいけど。

「今は良いかなあ」

「え？ どうして？」

ユニ君の疑問も尤もだと思う。僕自身も不思議ではあるのだけど、それ程ノワールに会いたいとは思わなかった。確かに会えるなら会いたいと思うけど、どうしても会いたいかと聞かれれば、そう言う訳でも無い。

「んー、同じくらい妹にも会いたかったからかな」

「妹って……、アタシ？」

「そうだよ。君に会えたからか、今すぐに会いたいとまでは思わないかな」

多分、この子もノワールと同じだから。方向は違うけど、僕にとって最も大事な人の一人だから。そのユニ君に会えたことで、とりあえずは満足してしまったのだと思う。勿論行く行くはノワールにも会いたいけど、今はユニ君と再会できただけで充分だった。それに、また妹を泣かせる真似もしたい訳でも無いから。

「……それって、アタシとお姉ちゃん、どっちが大事なのよ」

「正直言っただけじゃないよ。どちらが好きと言われればノワールだけ……、どちらが大切かと問われれば答えられない」

それは事実だった。どちらが大切なのかと問われると、答える事が出来そうにない。どちらも同じくらい大切だから。ただ、今最初に思っ出すのはユニ君の泣き顔だった。

「ユニ君とノワール。方向性は違うけど、僕にとっては二人とも大切な女の子、かな」



結局、どちらが大切かという答えは決められなかった。ただ二人に対する好きの方向性が違うということだけは明確に分かった。

「ちよつと、決められないの?」

「うん。決まらない。と言うか、決められたとしても流石に本人には言えないよ」

仮に決められたとしても、面と向かっていえることではないだろう。

「ふーん。ユウも意外とヘタレなんだ……。ふふ……」

「……反論できないけど、なんで嬉しそうなのかと」

「べつにー。なんでもないよーだ。ふふ、ばーか」

ものすごく煮え切らない感じで話は終わってしまったのだけど、なぜかユニ君は上機嫌のようだ。正直言うと、途中までの会話の流れから、少しぐらいは己惚れても良いかなって思ってたけど、そういう見込みもなさそうだ。もともとユニ君相手にそう言う気持ちを持っていた訳ではないけど、いざ興味がないと解るとそれはそれで寂しいような何とも言えない気持ちになるのだった。

「そっか……。やっぱり、ユウが好きなのはおねえちゃんか……」

四条優一の本心を聞き、ユニは小さく零した。自分の好きな人に好きな人がいる。その事実を知ってなお、ユニには悲観した様子はなかった。それどころか、誰かが聞いていれば嬉しい誤算に声色の節々が弾んでいるように感じられる。

「ユウにはアタシ以外の好きな人がいる。そんな事、最初から予想がついてたけど、やっぱりお姉ちゃんだった。やっぱりお姉ちゃんは凄いなあ……」

自身の好きな人の好きな相手が姉だというのに、ユニは嬉しそうに呟く。

「けど、まだだよ。今はお姉ちゃんを好きみたいだけど……、お姉ちゃんはスタートラインに立つてすらいらないもん。それに、思っていたより差もないみたいだし……まだ希望はある」

ユニが上機嫌だった理由。それは、予想以上に姉との差が離れていなかったから。ユニと四条優一が、ユニとノワールを天秤にかけたとき迷わずノワールをとると思っていた。好きな人だ。それぐらい差があると思っていたけど、実際のところ優一にとって二人の扱いにそれほど差があるとは思えなかった。同じくらい大事だと、本人も困ったように言っていた。それは、ユニにとって、嬉しい誤算だった。絶対的劣勢の状況下からでも戦いを始めるつもりだったのだが、その差はほとんどなく五分程度だった。好きな人と、家族みたいな人である。距離感の問題でしかない。ユニは思う。端的に言えば、四条優一はユニを女の子として意識していないのだ。

「それはそれで腹が立つけど……、背に腹は代えられないしね」  
意識してくれていないのならば、意識させてしまえば良い。ノワールとユニは、優一にとつてどちらも大切な女の子だった。ならば妹分から、女の子に意識を変えてしまえば良い。実際の妹ではなく、自分は妹みたいな女の子でしかないのだ。それさえできれば、姉の優位などどうとでも引つ繰り返せる。そもそもノワールは優一が生きていることすら知らない。存在する次元も違う。それに比べ自分は好きにアプローチをかけられる分、むしろ圧倒的優位に立っているとすら言える。

「ごめんね、お姉ちゃん。けど、お姉ちゃんが悪いんだよ。ユウの事を蔑ろにしたから……」

そう言い、秘書官と楽しげに話す姉の姿を思い出し、ユニは悲しいような虚しいような何とも言えない気分に襲われる。なぜ此処にいるのが自分だけなのか。異界の魂に助けられたのは黒の女神姉妹な筈なのに、なぜユニしかいないのか。ノワールもユニと同じ思いを持っていてそう思っていた。それは違ったと言う事なのだろうか。考えてみても、ユニには答えが見つからなかった。

「アタシはもう後悔はしたくないの。だからこのまま全力で行くよ」

姉は知らずに自分だけがここにいる。そんな罪悪感を振り払うように頭を振り、ユニは呟いた。それでも好きな人が手の届くところにいる。ユニにとってそれは一番重要なことだったから。

「と、とりあえず、お風呂とかベッドに乱入したら意識するわよね。いつそ、一緒に住むとか。いくらユウでも、そこまですたらドキドキするはず。……てか、それってアタシのほうが恥ずかしくて死にそうなの。でもでも、それぐらいしないと意識させるなんて……。いや、でも、裸はちよつと。あうう……。どうしよう……。」

全力で行く。その言葉通り、いろんな意味でギリギリになりそうな作戦を立案し、ユニ自身が実行に移すのはもう少し先の話である。

## 14話 護りたいもの

「お話、終わった？」

ユニ君との話が一段落ついたところで、ネズミ君たちと共に此方の様子を窺っていたマジックが、小首を傾げながら尋ねてくる。口にはしないけど、もう良い？ つと聞かれていた。その様子を見て内心でだけ苦笑を零す。目の前に居る幼い少女も、一日だけで目まぐるしい変化を体験していた。この次元のマジックとは言え、今はただの幼い子供だった。超次元のマジックの様に、女神に変身できるのかも解らない。少なくとも今は、ユニ君やノワールの様に人と同じ形をしている。話してみても解るように、精神年齢も幼かった。どれぐらい前に女神メモリーを使われたのかは解らないけど、見た目通り子供なのだろう。きつと不安なのだと思う。

幾らユニ君と再会でできた所為とは言え、そんな子を蔑ろにしてしまった事に反省する。浮かれすぎていたのかもしれない。軽く深呼吸をしてマジックと視線を合わせた。

「ごめんね。今、終わったよ」

「ん。気にしてないよ」

「そっか。ありがとう」

あまり表情を動かさず答えるマジックの頭をポンポンと撫でながらお礼を言う。マジックは子供だった。それも、親を早くに亡くした子供だ。人の暖かさをあまり知らず、女神にも成れずに異形に変えられた女の子だった。僕自身、かつて居た世界で家族を亡くしていた。だけど、それこそ失うまでの十数年間は家族の暖かさを知っていた。彼女にはそれすらも無い。そう考えると……あまりに可哀想に思えた。だからと言う訳では無いけど、どうにもマジックには必要以上に触れ合おうとしてしまっている。

「ユウ、そう言えばこの子は誰なの？」

「ん、ああ。そう言えば紹介がまだだったよね」

すぐ近くに戻ってきたユニ君が、マジックをじっと見つめた後口を開いた。僕もそうだけど、ユニ君の方も周りを気にする余裕が漸く出

て来たのか、若干ばつが悪そうにしている。

「マジックだよ。この次元での紅の女神、かな」

「へえ……マジックって言うんだ。どっかで聞いた名前ね。……つて、はいい!？」

マジックに触れた時自身の中にある力が、マジックに移っていた。総量から見たら微々たるものだが、紅の女神に譲られた力が、この次元のマジックにも宿ったとも言えば良いのか。半身であるマジックが教えてくれていた。どういう意図があるのかは解らない。だけど、超次元のマジックが、神次元のマジックに力を貸したと言う事実だけは漠然と理解できた。だから、この次元のマジックが紅の女神と同一人物だと言うのを断言できた。他にもこの次元のノワールを見ていたからと言うのも理由にあつたりする。ちなみに、ユニ君から、この次元で僕が出会ったネプテューヌさんは、超次元のネプテューヌさんであると言う事を教えて貰った。妙な違和感があると思ったけど、ある程度納得する事が出来た。まさかサボっていたから能力が低くなったとか、思いもよらなかつた。

「ちよ、ちよつと待ちなさい。紅の女神って、あのマジック?」

「そうだね。とは言え、犯罪組織とは何の関係も無いよ。この次元のマジック。ちなみに犯罪神にも会ったよ」

「犯罪神もいるの!？」

「いるよ。とは言え、印象は全然違うけどね」

ユニ君が驚きに声を上げた。それに驚いたのか、マジックがびくりと震える。気付けば、マジックに左手を握られていた。行き成り上がった声に驚いたのだろう。その手の暖かさを感じながら、脱線していた思考を修正する。警戒するマジックに、大丈夫つと声を掛ける。それで、少しだけ緊張が解けた。

「けど……」

「……お姉ちゃんは、お兄ちゃんのお友達?」

嘗て戦った紅の女神の強さを身に染みて知っているユニ君が、尚も言い募ろうとしたところで、マジックがおずおずと口を開く。その目に宿るのは不安と好奇心。初めて見たユニ君への興味と恐れだった。

「お、お姉ちゃん……?」

「お姉ちゃんって呼んだら、ダメ?」

「え、あ、いや……。べ、別にかまわないわよ」  
「やった」

マジックの一言に、ユニ君は驚きに目を見開く。ユニ君自身、妹である。姉と呼ばれるのは新鮮だったのだろう。ぎこちない反応だけど、毒気は抜かれているようだった。理屈では無く感覚で、目の前のマジックは子供だと言う事を感じ取ったのかもしれない。敵意と言うか怖れと言うか、そんな微妙な雰囲気は直ぐに霧散してしまった。

「ああ、僕の友達だよ。大事な友達で妹みたいなものかな」

先ほどのマジックの問いに、ユニ君の代わりに答える。

「妹みたいなもの? じゃあ、妹じゃないの?」

「そうなるね」

「じゃあ、私がお兄ちゃんの妹になっても良い?」

「え? ああ、まあ、別に——」

流石にそんな事を言われるとは思っていなかった。まあ、マジックが妹になったところで別に不都合は無い。子供が慕ってくれているだけだった。実際に妹にするのは難しいけど、言うだけなら大した問題でも無かった。

「だ、駄目!!」

「ユニ、君?」

だから別にかまわないよと言おうとしたところで、ユニ君が声を荒げた。思わず視線を向ける。

「あ、いや、ごめんなさい」

「どうかした?」

「その、あの……」

自分でも声を荒げてしまった事に驚いている感じのユニ君に言葉を促す。

「お姉ちゃん、怒ってる?」

「いや……。そんな事は無いよ。ただ、ゴメン。ユウの妹だけは、駄目なの」

「ダメ……なの？」

「うん。ごめんね。だけど、コイツの妹はアタシだから」

やがてユニ君はマジックに視線を合わせると、少しだけ困ったような笑みを浮かべると、マジックに言い聞かせる。

「……解った。お兄ちゃんって呼ぶのは良い？」

「それぐらいはオツケーよ」

そっか、っとマジックは頷く。一瞬だけ寂しそうに見つめてきたが、ユニ君の言葉に素直に従った。

「お兄ちゃんもごめんね。声を荒げちゃって」

「ちよっと待った」

「ん？ どうかした？」

そのままこちらに向き直ると、マジックとの会話の流れのまま僕にも謝罪を告げてきた。告げてきたのは良いのだが、その前の言葉が予想を超えたと言うか、どうしてそうなった。完全に思考の間隙を突かれた気分だった。スルーしてしまいそうになるのを必死に堪え聞き返す。ユニ君が、にやりと深い笑みを浮かべた。……なんとなくケイさんの笑みを彷彿させる、意地の悪い笑みなのは気のせいでは無いだろうか。

「なんでユニ君もお兄ちゃん呼び？」

「んー？ だって、アタシはお兄ちゃんの妹みたいな女の子なんでしょ？ なら、本当に妹になってみようかなって思ってる」

「いや、なんか色々飛躍してる気がするんだけど……」

確かに妹みたいな女の事は言った。だけど、あくまで妹みたいなだけで妹では無い。

「それに……、別次元に来ちゃって、今はお姉ちゃんの事をお姉ちゃんって呼べないから。この次元のお姉ちゃんはお姉ちゃんじゃない筈だから。その……、寂しいのよ」

「……む」

「アタシが妹じゃ……、ダメかな？」

「嫌では無いけど……。君は良いのかな？」

良いか悪いかで言えば、嫌では無い。ただこれまでユウと呼び捨て

られていたのに、いきなりお兄ちゃんは色々と気恥ずかしい。と言うか、何故だろう。今のままやり合っても、ユニ君に勝てる気がまるでしない。

「良いよ。だって、お兄ちゃんに逢いたくて次元だって超えちゃったんだよ。別次元に来ちゃったから、お姉ちゃん以外にアタシが無条件で信頼できる人って言うのと、アンタだけなんだよ?」

「……探してくれてありがとう」

それを言われたら、此方としては言い返す言葉が無い。その気持ち自体は素直に嬉しいから。僕の目的の半分を、ユニ君が叶えてくれたと言っても過言では無い。感謝してもし足りない。

「どういたしました。なら、お礼にお兄ちゃんって呼ばせてもらうから。良いよね?」

「ぐ……、ああ言えばこう言う」

「それはお互い様だよ、お兄ちゃん♪」

にっこりと、ソレこそ天使のような笑みを浮かべてユニ君は言い切る。……何だろう。マジックに言われるのは問題ないのに、ユニ君に言われるとくすぐつたいと言うか、むず痒いと言うか、頬が熱くなってくる。……単純に照れているんだとは思う。完全に手玉に取られていた。と言うか、ユニ君ってこんなに女の子だったのだろうか。

「……はあ、まあいいよお兄ちゃん。ユニ君がそれで良いならね」

違和感を感じるけど、今この子と言いつても勝てる気がまるでしない。完全に主導権を握られていた。嫌と言う訳では無いのだけど、恥ずかしい。うん。こんな感覚は余り味わった事は無いけど、嫌では無かった。とは言え、慣れそうにはないけど。照れ隠しに溜息を吐きながら認める。今日は負けで良いかと思ひ、それで終わりのつもりだった。が、そうはいかないのが今日のユニ君な様で。

「ユニ、だよ。お兄ちゃん」

「えっと、ユニ君だよね?」

思わず聞き返す。流石にこの子の名前を間違える訳は無い。

「ユニお姉ちゃん。名前で呼んでって言ってる」

「名前であって……、ああ、呼び捨て?」



「うん」

困惑する僕をマジックがじーっと静かに見据え教えてくれた。

「そうなの、かな？」

「前から思ってたんだけど、なんでネプギアやアイエフさんはちゃん付けで、お姉ちゃんと呼び捨てなのに、アタシだけ君付けなのよ。……アタシだって女の子何だよ。君付けてあんまりじゃない……」

まさかと思ひ聞いてみると、ユニ君は悲しげに呟く。いや、確かにそう言われればそうなのだが、何も泣くほどの事でもないと思う。

「でも、これまでユニ君って呼んできたわけで……」

「アタシって、女の子に見えないかな……？」

「いや、そんな訳は無いけど……」

「じゃあ、女の子に思えない程がさつだったりする？」

「それもない、かなあ。どっちかと言うと繊細。あいちゃんとかの方が男前ではあると思います」

「なら、良いよね？」

が、本当に今日のユニ君には勝てる気がしないのも事実で。結局、折れてしまった。

「……はあ。ならこれからは呼び捨てで呼ぶよ」

「じゃあ、呼んでみて？」

「今すぐ？」

「今すぐ」

せめて心の準備をしようと思ったのだが、妹さんは待つ気が無いらしい。はつきり言おう。ずっと君付けで呼んできたから気恥ずかしい。どうしてこうなつたと、内心で呟く。

「……ユニ」

何だろう。自分でも吃驚するぐらい恥ずかしかつた。視線を合わせて名前を呼ぶだけなのに、急激に頬が熱くなるのを自覚する。

「は、はい！ え、えと……」

「いや、呼んだだけ、だよ……」

「あ、うん。その、恥ずかしいね」

恥ずかしいのは僕だけかと思っていたのだけど、どうやらユニ君も

だったようで名前を呼んだ瞬間、一瞬で頬が桃色に染まる。と言うか、文字通り爆発したのではないだろうか。ユニっと二文字を呼んだだけで、耳まで真っ赤になって居る。なんだろう。確実に悪い気分では無いはずなのだけど、同時に居心地が悪すぎる。視線を僅かに反らし、もう一度ユニに視線を移すと目が合った。妹である女の子がぼつりと恥ずかしそうに呟く。その濡れた瞳と、赤く染まった心から嬉しそうな笑みに一瞬目が奪われた。

「なんか、さつきからずっと見てたけどお見合いみたいっちゆね?」

「お、お見合い!?!」

成り行きを窺っていたネズミ君が、会話が途切れたところでぽつりとつぶやく。その言葉に露骨に反応したのがユニであった。いや、内心僕も反応はしてしまっただけで、相手がネズミ君な所為か幾分先程よりも冷静に対処できた。あと、ユニが先に驚いたと言うのもある。

「お見合いって何?」

「ちゅちゅ。お見合いっちゆか? 人間にある風習で、つがいになる男女を引き合わせる場っちゆよ」

「つがい?」

「つがいって言うのは……。ちゅちゅ。まあ、簡単に言うと……」

「てか、子供に何教えようとしてんのよ!」

ネズミ君がマジックの疑問に答えようとしたところで、ユニが爆発した。それはもう凄い剣幕のままネズミ君の方へ向かう。

「ちゅ!? ちゅちゅちゅ!? ひ、ひいっちゅ!! 襲われるっちゅ!! やばいっちゅ、捕まったら本気でお嫁に行けない体にされるっちゅ!!」

色んな意味で危機を感じたのだろう。ネズミ君は面白い叫び声を上げながら走り出す。そしてそれをユニが追いかけるはじめた。

「ちよ、人聞きの悪い事言ってんじやないわよ!!」

「ちゅちゅー!!」

逃げるネズミ君と、追いかける妹。その姿が、妙に痛快だった。

「あはは……」

思わず笑みが零れる。それをマジックが不思議そうに見つめていた。

「お兄ちゃん、楽しいの？」

「ああそうだよ。楽しくて、仕方が無いかなあ」

マジックの言葉にしみじみと頷く。今いる世界は前の次元とは違うけど、それでも自分を見つけにくれた人が居た。新たに出会った人もいる。超次元のマジックとクロワールが与えてくれた新しい生。大切にしていける理由が新たにできたのが解った。

「そう。お兄ちゃんが嬉しいなら、私も嬉しい」

「そっか」

そう言い、初めてマジックが嬉しそうに笑った。そのまま手を握ってくる。

「ずっと一緒。お兄ちゃんもユニお姉ちゃんも。ネズミも皆も」

みんな一緒だと告げたマジックに、頷く。ずっと一緒に居られたらいい。心からそう思った。

## 15話 穏やかな時間

「ここが、ルウイーの女神メモリーが取れる場所つちゆ」

そう言つてネズミ君が大きな紅葉の木を指さし言つた。四季で言うならば、秋と言うのが最も似合っている神次元のルウイーを象徴するような大きな木に、満開の紅葉が鮮やかな紅色を咲かせている。思わず見とれる。風がふわりと頬を撫で、幾つかの紅葉が視線の先を流れていく。

「綺麗」

「凄い、わね」

僕と同じく見とれていたのか、マジックとユニが圧倒されるように呟いた。百聞は一見に如かず。万の言葉をつぎ込むよりも雄弁に、目の前に存在する自然の美しさがその言葉には込められている。

「紅、か」

ルウイーに入国した時にも紅葉は見たのだが、今眼前にある紅は別格ではないだろうか。しみじみと呟く。自身の与えられた力は紅で、この地に来て、以前の次元で紅の女神だったマジックにであった。無論この次元のマジックであるため、紅の女神と言う訳では無いのだけど、女神メモリーを使われていた。

此処までくる内に試してみたのだが、マジックは女神化する事が出来なかった。だけどマジックからシェアを感じる事が出来た。言ってみれば今は、どうやって使うのかが解らないと言つた状態だろうか。多分、近いうちに女神化などでもできるようになるかもしれない。となれば思い浮かぶのは嘗ての姿。紅の女神。マジック・ザ・ハードである。

ルウイーに来てからまだ少しだけど、紅には色々縁があるように思えた。

「きゅいきゅこ?」

「きゅいん」

「きゅきゅい」

辺りに危険が無い事を確認すると、付いて来ていた子供たちにもう

良いよと告げ、自由に動き回っても構わない事を伝える。勿論遠くに行けば危険はあるかもしれないけど、その辺りは承知してくれているので、それ程遠くに行くことはせず、目の届く範囲でいくつかのグループに別れ遊び始めた。

「行ってくる」

「ああ、行っておいで」

何人かの子供たちがマジックに向かって声を掛ける。流石に僕には何と言っているか解らないのだけど、元々彼女たちと同じだったマジックには解るのか、子供たちと一緒にになり、辺りを散策し始める。この次元のマジックとは言え、まだまだ遊び盛りの子供の様で、好奇心の赴くままに仲間たちと遊んでいた。

「何と言うか、こう、色々と複雑だね」

「まあ、その気持ちは良く解るよ」

「だよね。あのマジックが遊んでるって……。いや、まあ子供だから不思議では無いんだけど……。イメージが違い過ぎるのよ」

「今思い出しても強かったからね。我ながら、良く死ななかつたと感心するなあ」

あまり感情を表に出さないマジックが楽しそうにしている姿を眺めながら木陰に腰を下ろす。直ぐ傍に寄り添うように座った妹の言葉に頷きながら、紅の女神と対峙した時の事を想い出していた。ユニと共に異界の門を用い、ギョウカイ墓場にノワールを助けに向かっていた。あの頃は敵の強さの情報があまりなかった所為と言うのもあるけど、今考えればよくジャツジとマジックを同時に相手にして良く生きていたものだと感じてしまう。異界の魂として与えられた力があったとしても、運が良かったのだろう。尤も、本当の意味で僕が死ぬと言う事は無いのだけれども。

「そう言えば、あの頃からお兄ちゃんは変わってないね」

「ん？」

ユニがこちらをちらりと流し眼に見ると、思わせぶりに言った。さて、っと思いついてみる。深く考えなくとも、思い当たった。この話は藪蛇だったんじゃないだろうか。

「アタシに何にも相談してくれなくて、無理して、結局消えちゃう」  
「ごめんなさい。いや、ホント、反省してます」

じーっと此方を見据えると、ユニは半眼で零す。ノワールを救出する時、黒の女神姉妹を逃がす為、ただ一人ギョウカイ墓場に残っていた。その時の事を言っているのだろう。ユニからしたら前科が多いのだろう。はつきり言って反論する余地が無い。無論、悪気があつてやっている訳では無いのだけど、ユニを裏切つてばかりいた。そんな事を言われるのも自業自得だった。平謝りしかできない。自分の所為で何度も泣かせていた。謝るぐらいで許して貰えないだろうけど、そう言うしかできない。謝るぐらいで許して貰えないだろうけど、

「……ふふ、ごめんね。もう良いよ」

ごめんなさいと頭を下げると、暫く半眼で睨んできていたユニが唐突に吹き出した。先程までの疑うような視線から一変、口元を綻ばせ悪戯が成功したように笑った。

「お兄ちゃんがさ、アタシ達を救うために頑張ってくれたのも知ってるよ。自分を犠牲にしてまでアタシたちを護ってくれた。文字通り命すらも捨てて、護ってくれた」

「……うん」

妹の言葉にただ頷く。それは事実だった。

「お兄ちゃんが消えた時は、胸が張り裂けそうになるほど悲しかったよ。何で気付いてあげられなかったんだろうって、泣いたりもした。だけ」

妹の独白。ただ悲しかったと零す。そうさせたのが自分で。それが情けなくて。だけどそこまで想ってくれたのは嬉しくもあつて。どう反応すればいいのか解らなかった。

「今アタシの目の前に居てくれてる。それで、充分だよ」

そう言い、僕に体を預ける様に目を閉じしな垂れかかる。女の子特有の柔らかさと、甘い匂いが鼻孔をくすぐる。信頼してくれているのだろう。無防備に寄りかかる妹を拒絶する事などできる筈も無く、ただ時が流れるのを感じる。世界を護る事でこの子たちに与えてあげることが出来た穏やかな時間。共有できるとは思っていなかったそれを、

今確かに共有していた。妹に倣って目を閉じる。幸せ、なのだろう。ノワールやケイさんなど、まだ会えていない人も沢山いるけど、今妹が隣に居てくれることが素直に嬉しかった。

「諦めなくて良かった」

自分の下した選択は、色々なものを傷付けただろう。最善だったかは解らない。だけど、それでも、今のような穏やかな時間が過ごせるようになっていた。それだけでも、自分の成した事に意味はあったのだと思う事が出来る。僕が呼び出された事に意味はあったのだと、思う事が出来た。それで、充分だった。

「お兄ちゃんには沢山助けて貰ったよね。無理ばかりさせた。アタシたち女神に呼び出された事で辛い思いもさせたと思うの」

「もう終わった事だよ。僕に出来る事をしただけだから気にしないで」

自分を責める妹に気にするかと告げる。そう思ってくれているだけで充分だった。以前の戦いでなしたことは、かつて犯罪神と戦った女神や人々の想いを読み取り、僕自身がやりたいと思ったことだから。それに対して、この子が思い悩んでほしくはなかった。とは言え、も自分がユニと同じ立場だったら気になってしまうだろう。難しい事を言っていると自覚はする。けど、もう終わったことであり、僕はここに居てユニも傍にいる。それで良かった。

「やだ」

「……なんか、前より頑固になってない？」

「だれが頑固よ！」

「ユニ」

「……あう。べ、別に頑固じゃないわよ。まったく、誰の所為でこうなったと思ってるのよ」

僕の所為なのだろうか。きつと、僕の所為なんだろう。頬を赤く染めながら怒る妹を見ると、苦笑が零れるのは仕方がない。前科が多いし。そつぽを向く妹に視線を移しながらそんなことを考える。

「兎に角！ これからはさ、アタシがお兄ちゃんに色々返すから。お兄ちゃんから貰ったもの全部ひっくるめてもお釣りがくるくらい、沢

山お礼をするから。覚えておいてよね!!」

「そっか。……そうだね。ならお言葉に甘えようかな。楽しみにしてよ」

ずいっと顔を近づけてきて、にっこりと楽しげな笑みを浮かべた妹の言葉に頷く。多少圧倒されたというのものもあるけど、その想いは嬉しいから。また出会えたことに感謝する。

「ええ、楽しみにしてなさいよ。……ユウはアタシが、女神が責任をもって幸せにしてあげる。それくらいの事をアタシたちはしてもらったからね」

「うん。ありがとう」

相変わらず頬を染めたまま宣言する妹。取り方を間違えたら完全に告白では無いだろうかと思いつつ、頷く。

「幸せ、か。また逢えて、良かった……。本当に」

今のままでも十分に幸せだった。だけど妹の気持ちも嬉しくて。穏やかな時間が流れていく。こんな時間が続いて行くだけで充分だと、心から思った。

「お兄ちゃん、か……」

その呟きには、様々な想いが籠っていた。妹が兄に親愛を込めて呼ぶ際に用いる言葉だった。ユニが四条優一を兄と呼ぶたびに、ユニは何とも言えない気持ち広がっていくのを自覚する。また逢えたことによる喜びと、前以上に距離が近くなったと言う自覚。

「焦っちゃだめよユニ。今は少しずつ足場を固めていかなきゃ。まずはアタシが女の子だった言う事を、妹って言う距離で嫌って言うほど教えてやらなきゃ」

そして、自身が求めているのは妹と言う距離感では無いと言う、強い想い。距離が近くなっていった。だけど、それは家族としての距離ではない。有り体に言えば、女の子として意識してもらえない距離感だった。それではダメだった。女の子として意識してもらえなければ



ば意味が無いのだと、ユニは思う。無論、全く意識されていない訳ではないが、それでも他の女の子と比べれば不利だと言う感じは否めない。少なくとも、姉であるノワールと比べれば大きく不利である事は否めない。四条優一の言う好きと、ユニの思う好きは違う意味だから。

今のままでも十分に幸せだと言える。だけど、自分の本心を知ってしまったらそれだけで満足できなかった。死んだと思っていた好きな人にまた逢えた。積もり続けたどこにぶつければいいのか解らなかった想いを、明確に向ける相手が出来ていた。想いを向けるなど言う方が、無理な話だった。

「それに妹で我慢できる自信が無いし……。はあ、お兄ちゃんって呼ぶのはいろいろ複雑だなあ……」

そう言いユニは深く溜息を吐く。好きな人を兄と呼ぶのは色々な意味で複雑なのだ。自身は妹でしかないと言う現実を嫌と言うほど突き付けて来るから。だけど、それだけではない。

「けど、ユニ、か」

ユニは自身の頬に朱が差すのを自覚しつつ、嬉しそうに呟く。ユニが兄と呼ぶ代わりに、ユニの事は名前を呼び捨てで呼ぶように変わっていた。色んな意味で精神をすり減らしながらも好きな人を兄と呼ぶことにしたのは、全てこの為の布石だった。まずは名前前で呼ばせ、明確に女の子である事を印象付ける。そう言う作戦だった。

「真っ赤になっちゃって……。アタシもすっごく恥ずかしかっただけど、少しぐらいは意識してた、よね？」

作戦の成果を想い出し、ユニはある程度の手応えを得ていた。まだ大きくは無い。だけど、確かに女の子だと言う意識を刷り込む事には成功していた。始めたばかりである。最初から大きな戦果など期待していない。自身は不利ではあるかもしれないが、競い合う相手自体今のところ存在しない。焦るような段階ではなかった。ゆつくりと女の子であると言う事を教えていけば良い。自分にそう言い聞かせる。

「ふふ、呼び捨てにされるのって思ってた以上に良いわね。こう、胸の

奥から暖かくなってくる」

優一に名前で呼ばれた時の事を思い出し、ユニは笑みを深めた。姉であるノワールが呼び捨てにされていた時、確かに羨ましく思っていた。ただ名前を呼ばれただけ。それだけなのに、女の子として見られていると思うと、ユニは自分でも驚くほど嬉しくなってくる。

「覚悟してなさいよ。今は妹って言う距離だけど、アタシは妹じゃ我慢できないんだからね」

最初の一步を踏み出していた。だから、もう遠慮する事は無かった。今更我慢できる気もしない。好きな人に自分を意識してもらおう。女の子としての、ユニの望みだった。

「さて、いったんお別れかな」

「そうっちゅね。マジックの件は大臣に報告したけど、どうしても外せない用件があるみたいっちゅから、詳しくは後日と言う事になったっちゅ」

ルウイーの女神メモリーの確認も終わり、子供たちを住処に送ったところでネズミ君に言った。女神に成れなかった子供たちの一人であったマジックが元の姿に戻れたことに関しては、既に報告していた。本来ならば真っ先に見に來たい様なのだが、大臣と言う立場がそうはさせないと言う事なのだろう。後日直接会おうと言う事で、とりあえずマジックは此方で預かると言う事になって居た。

「まだお兄ちゃんと一緒にいられる?」

「ああ、そうだよ」

「やった」

手を繋いでいたマジックが尋ねてきたのに答える。他の子たちと一緒にでも良いのだけど、彼女たちが居る施設は人間用ではないように、人間の身ではあまり住み心地が良くないようだ。マジック本人の希望もあって、もうしばらく預かる事になって居た。まだ一緒に居ると告げると、マジックは嬉しそうに目を細める。何と言うかここまで

懐かれると、自分の子供みたいなものでは無いかと思えてくる。ぽんぽんつと雪のように白い髪を軽く撫でた。

「くすぐつたい」

「ああ、ごめんね」

「……いやじゃないよ」

嫌なのかと思いい手を止めると、もつとと催促される。ならば、つともう少しだけ続けた。

「とつ、ついたつちゆね」

「アンタ達、結構良いところに住んでるのね。ユウは兎も角、ネズミでもこんなところに住めるんだ」

「そこはかとなく、ネズミ差別を感じるつちゆね！」

七賢人の拠点として用意された住処である今の拠点に付いたところで、ユニが僕たちと建物を交互に見て言った。流星に教会の施設と比べれば見劣りはするけど、一般で住む分については高級だと言える。ネズミ君とは部屋が隣同士であり、直ぐに連絡が取れる。

「さて、オイラも色々と疲れたつちゆからね。ここらでお別れにさせて貰うつちゆよ！」

「ああ、お疲れ様。色々と助かったよ」

「気にしなくて良いつちゆよ。オイラもアニキと一緒にずいぶん助かってるつちゆ」

「そっか。なら良かった」

「ちゅちゅ。それに積もる話もあるだろうつちゆからね。オイラはこの辺りで退散するツちゅよ。馬に蹴られたくないツちゅからね」

そんな事を言いつつ、ネズミ君は少し品の無い笑みを浮かべた。苦笑する。たしかに積もる話はあるけど、からかわれているのが解るから。

「ちよ、ネズミ！ どういう意味よ!!」

「ちゅちゅー！ 怖い妹が来たから逃げるつちゅ!! また今度つちゅ!!」

ネズミ君の言葉に、ユニが反応する。捕まったら敵わないと言わんばかりに、ネズミ君は部屋に消えていく。

「くく、またね」

「ばいばい」

なんだかんだで仲が良いんじゃないだろうかと思いながら見送る。マジックも少し面白そうにしながら手を振っていた。

「く、あのネズミ、今度会ったらしいろ言ってやらなきや」

「まあ、ほどほどに頼むよ。気を使ってくれてるだけだからね」

今度会ったただじゃおかないんだからとご立腹の妹さんを宥める。

「……解ってるわよ。アタシも本気で言ってるよ」

「まあそうだよ。さて、とりあえず入るかい？　と言っても、何にもないけどね」

「あ、う、うん。お邪魔します」

「お邪魔します」

流石に立ち話もなんである。部屋に入るように勧める。尤も僕も与えられたばかりの部屋である。必要最低限のモノしか揃っていない為、あまりおもてなしはできない。

「広い」

「やっぱり結構いい部屋ね。景色もルウイーを一望できる」

マジックとユニが、客間から見える景色を見ながら零す。自分で買った部屋では無いけど、悪い気分では無かった。そうだねと相槌を打ちながら、飲み物を用意する。

「マジックはジュースで。ユニは……珈琲で良いかい？」

「あ、うん。それで良いよ。ありがとう」

「うん」

一言聞くと簡単に用意していく。お茶請けも開けるけど、そもそも女神さまに出すような高級なものはストックしていない。まさかユニが次元を超えて来るなどは予想していなかった為、こんな事態になるとは思わなかったし。

「さて、っと。どうぞ。ミルクと砂糖は好みで」

「あ、ありがとう」

「はい、マジックも」

「ん。ありがとう」

二人に飲み物を渡し、席に着く。ユニには珈琲で、マジックにはオレンジジュースだ。あとはお茶請けにクッキーが何個か。我ながら女神を持てなすレベルでは無いと思うが仕方ない。

「美味しい」

「そっか。それは良かった」

最初にマジックが口を付ける。素直な感想に、口元が緩むのを感じつつ、頷く。

「なんかごめんね。急にきて持てなしてもらって」

「気にしないで良いよ。大事な妹分だからね」

困ったように言うユニに、気にしないでと伝える。そもそもユニは今日この次元に来たばかりだ。右も左も解らないのだろう。そんな子を放置しておく訳にはいかない。

「ありがとう。それと、その、ね？」

「ん？」

そんな僕とは対照的に、ユニはどうにも歯切れが悪い感じだった。さてどうしたものかと思いつながら促す。

「マジックはしばらくお兄ちゃんが預かるんだよね」

「そうなるね。ネズミ君と僕だったら、僕の方が良いみたいだし」

「うん。お兄ちゃんと一緒に良い」

ユニの質問に頷く。隣に座ったマジックも頷いた。

「そりやそうよね」

「それがどうかしたかな？」

「それで、その、アタシもこの世界に来たばかりで、行く宛ても他に無くて、その……」

ああ、そう言う事かと思いつた。この世界は別次元だった。ユニの居た世界とは似て非なる異世界だ。異界の魂だった僕も、かつて似たような状況に陥っていた。ユニの気持ちは良く解った。単に不安なのだろう。

「アタシも一緒に住んでいい？」

だからか、そんな妹の言葉を聞いてもそれほど驚く事は無かった。



## 16話 彼女の気持ち

神宮寺ケイがそれに気付いたのは、秘書官がノワールの秘書として配属されてから暫くしてからだった。粗削りながら、確かに才能ある人物。それがケイの秘書官に対した印象だった。物腰柔らかであり、努力家でもあった。慣れない仕事の為ケイから見れば危なっかしい事は何度もあったが、ひたむきにラスティシヨンの女神の秘書として職務をこなそうとしていた。その姿勢も好ましいと言える。

「ノワールが変わったのは、彼が来てからかな……」

視線の先でノワールに間違いを指摘され、項垂れる秘書官を尻目に、ケイはノワールの変化について思いを馳せる。ユニが気にしていたように、ケイもまたラスティシヨンの女神が良く笑うようになっていたと思う。それ自体は、間違いなく秘書官の影響だった。どこか寂しそうにしながらも、前を見据えラスティシヨンを導いてきた女神。犯罪組織との戦いに於いて失ったもの。それが確実に後を引き摺っていたのが今考えても容易に想像できた。あのノワールである。女神以外で初めて来た友達に辛すぎる運命を与えていた。最後の最期まで護ろうとしてくれた人を、結局何もできずに失う事となった。その心境は想像するしかできないが、気分が良いものでない事だけはつきりと解る。その所為か、ノワールが感情を表に出す事は少なくなっていると言わざる得なかった。

「あ、す、すみません！」

それを変えたのが、ノワールが見出した秘書官だった。物腰柔らかで穏やかな気質等、何処か異界の魂を彷彿させるところがある人物であった。勿論違う点も多い。書類を受け取る際ノワールと手が触れあってしまい、慌てているところなど、如何にも男の子らしい反応だった。

「もう、何を慌てているのかしら？ 別に気にしないで良いわよ。それより、頼んだからね」

「あ、はい。直ぐに取り掛かります」

それに対して、ノワールは少しだけ面白そうに口元を緩めると、新

たに指示を出し自分の仕事に戻っていく。書類の修正の後には、教会主導で行われている計画の視察だった。流石に女神と言うだけあってノワールに集められる仕事は多い。その幾つかを秘書官にも振っていたと言う訳である。ノワール自身が既に何度か様子を見に言った事もあり、優先度としては他のモノよりも少し低くなってきたので、回したと言う事であった。

「おや？」

その様子を見ていたケイは、思考の片手間でこなしていた自身の仕事を一旦止める。今、確かに違和感を感じた。何故だろうか。少しばかり考えてみる。違和感自体は前々から感じていた。ユニも感じていたが、その考えとは幾分か異なっている。確かにノワールは変化しているが、その印象はユニとケイでは幾分か異なっていた。ユニはケイよりも異界の魂と親しくしていた。その所為か、ケイから見ればユニは少しばかり後ろ向きに考えを巡らせていたように思える。そしてケイから見れば、ノワールの変化はある意味でユニと似ているところがあるとも思っていた。

「あら？　どうかしたのかしら、ケイ」

「ふむ。不躰だけどノワール。君は秘書官君の事が好きかな？」

自身を見据え考え込むケイに気付いたノワールが声を掛ける。確かめてみるには良いかもしれないと簡単に思考を纏めたケイは言葉通り本当に不躰に口を開いていた。

「ちよ、いきなり何を聞いていますか教祖！」

それに対して最初にアクションを起こしたのは秘書官だった。当たり前である。自分の目の前でそんな事を聞かれれば誰だって狼狽するだろう。ちなみに秘書官はケイの事を業務中は教祖、オフではケイさんと呼んでいる。

何よりも秘書官にとってノワールは崇拜する女神であり、憧れの女性でもあった。どのような意図があるかは解らないだろうが、慌ててしまうのは仕方が無い。

「ああ、すまないね。少し気になってしまっただけ」

「気になってしまっただけ、じゃないですよ！　そう言う事はせめて僕の



居ないところで聞いてください！」

そのまま頬を染めながらケイに詰め寄る。とは言え、ケイとは立場の差があるのでそれほど強く言う事も無い。その様子を、どこかで見た事がある光景だなっと思いつつ、ケイはノワールに意識を割いたまま相手をする。

「そうね……。好きよ」

「ほら……。好きって言われたじゃないですか。僕なんてどうとも思われてるわけ……。はいい!？」

少し考え込み、穏やかな笑みを湛えたまま答えた。そう告げたノワールがあまりにも自然であり、優しげであった為言われた秘書官自身、奇妙な反応を返してしまった。思わずノワールを二度見する。そんな秘書官を優しげに見つめると、少し面白そうにしながら女神は続ける。

「貴女は私が見出した秘書でしょ？ 嫌いな訳が無いわ。最近では失敗も随分と減ってきて、漸く頼りに出来るかもって思える位になってきているわね。前も言ったけどこれでも、貴方には期待しているのよ。そんな人を嫌いな訳が無いでしょ？」

「え、あ、はい。ありがとうございます?」

「ええ、どういたしまして」

好きか嫌いかで言えば、勿論好きだとノワールは秘書官に告げる。優しい気な眼差しで秘書官を見るノワールは、女と言うよりも子供を見守る母親の様な印象だった。どう反応して良いのか解らず目を白黒させる秘書官に「じゃあお願いね」と最後に告げるとノワールはケイに向き直った。

「……そう言う事か」

「さて、貴女にはどういう意図があったのかしら?」

「いやいや、少し気になる事があったから聞いてみたのだけどね……」  
「そう。それで満足のいく結果は得られた?」

一連のやり取りの中から、ケイは自分の感じた違和感の正体をはっきりと掴む事が出来ていた。ユニと同じくケイも抱いていた疑問。頭の回り過ぎる教祖はその回答に至っていた。

「大凡は、ね。まったく、そう言う事だったのか」

「そう。何か解らないけど、それなら良かったわ」

「ふふ、そうだね。僕も自分の疑問の答えに漸く辿り着けた。随分と清々しい気分だよ」

ああ、何だそう言う事だったかと思いついたケイは、自身の疑問が随分と馬鹿馬鹿しかった事に気付き笑いがこみ上げて来る。やはり、似ていたのである。それはケイにとって最初から分かっていた事だった。ただ確信が持てなかった。上手く隠されていたと言う事だろう。と言うか、気付いてしまえばある意味バレバレではあったのだけど。それに思い当たらなかった自分が馬鹿馬鹿しい。

「ノワール。前々から聞きたかった事を聞いても良いかい？」

「ええ、構わないわよ。ケイが私に何度も質問するなんて、珍しいわね」

「ふふ、そうだね。そう言う日もあるよ」

最後に自分の考えが正しいか確かめるために質問をする事にした。どこか機嫌の良さそうなノワールに向け、これまでケイがあえて聞かなかった事を聞く事にした。

「ノワールは四条君の事が好きなのかい？」

「の、のわっ!?! な、なんで、い、いまあの人の話がで、でるのよ!?!」  
犯罪組織との戦いが終わって数年。一度足りとも聞かれる事が無かった問いに、ノワールは思わず自身のデスクから転げ落ちかける。完全に油断していたところに不意打ちだった。以前秘書官に聞かれた事もあったが、秘書官とケイでは付き合いの長さが違い過ぎるうえ、当時のノワールの事も良く知っていた。ノワールにとって言葉の重みが違い過ぎる。露骨すぎるほど露骨な狼狽を晒してしまっていた。

「そりゃ、僕は君の恋路について聞いてるからね。今一番近くに居る秘書官君の事を聞いた後は、以前一番近くに居た四条君の事を聞くのは不思議な事でもないだろう?」

元々予想はついていた上に、一連の反応から大体どう言う感情を持っているのかは手に取るように解るのだけれども、敢えてケイは惚

ける。だって、その方が面白いから。秘書官で弄ってみた際には全く反応を示さなかった。しかし、今は露骨すぎる反応を見せていた。女の子であるノワールらしい反応だった。

「だ、だからってあの人は何にもなくて！　べ、別にユウとは何にもなかった訳で。た、確かに初めての相手だたたし、凄く優しくしてもらったけど、ただのお友達でしかなかっただけで……」

「初めてで……、優しく!?　ノワール様を!」

「え?　あ、ちがつ、違うわよ!?　今のは言葉つ足らずだっただけで、厭らしいことをしてもらったわけじゃなくて!」

「ええ!?　して欲しかったんですか!」

「な、なんでそうなるのよ!!　そりゃ、少しぐらいは興味あるけど……って、ナシナシ!　今のは無しだからね!」

完全に墓穴を掘っている。先程までであった乗り越え色褪せたような反応では無く、女の子としてのノワールが前に引き摺り出されていた。完全に勘違いされているのだけれど、確かにノワールの自爆であった。

ケイはノワールが悲しみを乗り越えたのだと思っていた。事実として乗り越えてはいたが、すこしケイは思い違いをしていた。ユニはそれ以上進めずにいて、ノワールは置いていったと言う事だったのだろう。結局似た者同士の姉妹だったと言う事だ。女の子としての気持ちは邪魔をしていたから前に進めないでいたユニ。それでも女神として前に進まなければいけないから、女の子の気持ちを過去に置いていくことにしたノワール。根っこはやはり同じだったのである。今では無く、過去に女の子を封印したと言うのが、今のノワールであった。ある意味、ユニ以上である。別に嫁だったと言う訳では無いのだが、未亡人みたいなものでは無いだろうか、とケイは思う。

秘書官に関する質問と、異界の魂に対する質問。その二つに答えたノワールの感情には明確な違いがあった。多分、恋をしないつもりだったのだろう。まるで母の様に秘書官を見る目と、異界の魂の名を出した時の動揺具合からケイはそんな事を思う。

「くく、あはは。なんだか馬鹿らしくなってきた……」

そして顔を真っ赤にしながら秘書官と言い合っているノワールを見ると、ケイは心の底から愉快だと言わんばかりに吹き出した。もう、おかしくて止まらないと言った具合だった。結局、ケイは完全にいらぬ心配をしていたと言う事だったから。

犯罪組織との戦いが終わり、ラストেশヨンの復興も波に乗った際、ケイは教祖を辞めようと考えた事もあった。女神不在の国を守るという仕事は並の者では務まらない為ケイがその立場に居たが、ノワールが復帰してしまえば態々ラストেশヨンの教祖をしている意味が無かった。黒の女神はそれだけ優秀だったから。それでもケイが教祖を続けた訳。それは、ノワールとユニが心配だったから。身体の傷以上に、心に大きな傷を負っていた。二人をずっと見て来たケイにはその事が良く解った。だから、ラストেশヨンの教祖を辞める事が出来なかった。だけど、それもいらぬ心配だったのかもしれないとケイは思う。色褪せたと思っていたノワールは、そう見えるだけで何も変わっていないから。寧ろ、そう見せる事が出来るぐらいには成長していた。そう考えると、もう自分が居なくても良い様な気がしてくる。とは言え、今すぐ消えると言う訳にもいかないが。

「僕も意外と心配性だったのかな。けど、それも杞憂だった。なら、ユニが帰ってくるまでは頑張ろうかな」

もう思い残す事も無いだろう。感情を表に出したノワールを見ると、そんな事を自然と思えてきた。まだまだ自分の手がいるかもしれないと考えていた分少し寂しくもあるが、良い機会でもある。もしユニが異界の魂と出会う事が出来て無事に帰って来れば、何も心配する事は無いから。ラストেশヨンの女神姉妹は優秀だった。その二人が本調子に戻れば、本当にケイが教祖である必要は無くなってしまふ。無論ケイが教祖でも何一つ問題は無い。それどころかより一層ラストেশヨンの為にはなるだろうが、ケイにとって遣り甲斐の無い仕事になってしまうのは火を見るよりも明らかだった。だからケイは、一つの決断をする。

「さて、秘書官君、ノワール！」

「え？ あ、はいー」

「のわっ!？」

いまだ面白おかしい問答を続けていた二人に声を掛ける。近いうち、教祖を辞する。そんな決心をしていた。ならば、やらなければいけない事は色々ある。丁度、信仰心厚い秘書もいる事である。引き継ぎをするにはもってこいでは無いだろうか。

「何時までも遊んでいないで仕事に戻ろうか？」

「べ、別に遊んでいないわよ!　だ、大体、貴女が変な事を聞くから……」

「そ、そうですよ教祖。別に遊んではいません!」

「変な事?」

「そ、その……。ユウの事が好きかとか……」

何とかノワールが言い返そうとするも、結局最後まで上手い言葉にならず消えていく。そんな様子に、ラステイシヨンの女神さまは随分と可愛いものだと思いが浮かぶ。だけど、確かにその姿はノワールらしくあった。随分と見なくなっていた気がする、ラステイシヨンの女神だった。

「別にそうでもないさ」

「いや、絶対変な話よ!」

その姿を見ると安心できた。もう、大丈夫だろう。そう思うと、悪戯心がむくむくと湧き上がってくる。一見完璧なくせにノワールには弄られ癖みたいなのがあるから。

「変でもないよ。彼も好きって言っていたからね」

「へっ!？」

だから、と言う訳ではないが、最後に砕いておくことにする。ケイが見るにユニは色々吹っ切れたような表情をしていた。だけど、ノワールにはもう一息必要な気がしたから。教祖としてラステイシヨンに仕えて来たケイと言うよりは、女の子としてノワールの傍に居た神宮寺ケイとしての最後の一押し。正直言うと、今のノワールではユニと勝負になりそうにも思えなかったから。

「誰が……誰が好きって?」

「君を、四条君が」

にっこりと告げる。確かに好きと言っていた。尤も、友達としての好きではあるが。態々言う必要も無いので、そこは内緒にしておく。秘書官を平然と好きと言ったノワールは一瞬固まり、そわそわと辺りを見渡す。当たり前だが、何も変わった事は無い。だけどその仕草は、同性であるケイから見ても可愛らしく感じた。

「ユウが私を……、好き？」

「うん」

絞り出すように言ったノワールに、深々と頷く。ボクが聞いたのは友達として、だけどね。つと心の中で付け足す。流石のケイも、今そんな事は言えなかつたから。ただ、今のノワールを見てそんな事を言える人はいないんじゃないかなつとも、ケイは思う。だって。

「ユウが……、私の事を……。くっつ!?!」

瞳に涙を浮かべ耳まで真っ赤にしながら恥ずかしがる女神を見ると、そんな野暮な事を言おうと思えなかつたから。

「ボクがしてあげられるのは此処まで、かな。ごめんね、ユニ。それとがんばれ、二人とも」

近い将来ラストেশヨンの教会を神宮寺ケイは去る。ケイが教祖として二人にしてあげられる最後の事かも知れない。そんな想いが込められた呟きだった。

## 17話 一緒

「そう言えば、大規模なお祭りがあるようですね」  
「お祭り、ね……。どんなお祭りなのかしら？」

ラステイションの執務室。ノワールと秘書官。二人の仕事が一息ついたところで秘書官がそう切り出した。ルウイーで行われるお祭り。その手の話題には実は詳しいノワールは、一瞬どきりとしながらも、何も知らない体を装いながら尋ねる。実際のところルウイーで行われる祭りと言えば、各国のクリエイターたちが集うコミックマーケット等を代表に様々なものがあり、ノワールも一部の回廊に匿名のコスプレイヤーとして参加していたりもするのだが、勿論そんな事は秘書官が知る由も無い。

自分で材料から集め寸法を測り、無駄に再現度の高い衣装を身に纏う姿は普段の姿からは想像が付きにくいのが、コスプレがノワールの隠れた趣味であった。余談であるがユニには隠し通しており理想の姉を演じ続けているのだが、とある事情でケイには見られてしまっていたりする。さしものケイも、あのノワールがノリノリでポーズをとっている姿を目の当たりにした時、口に含んでいた珈琲を盛大に吹き出していた。その出来事はラステイションの教祖だった彼女にとつて最大の汚点だったと後に語っている。何故ノワールのコスプレがケイにばれたのか、ラステイションの女神の友達である異界の魂も一枚噛んでいるのだが、完全にノワールの自爆であった。

「所謂夏祭りみたいな感じですね。雪があるから趣は違いますが出店が並んで、奉納とか一種の儀式的なモノがあつて、花火が上がったりする感じですね」

「ああ、お祭りってそう言う」

秘書官が内容を思い出しながら詳細を語っていく。と言つても特別詳しい訳でも無い。大雑把に知っている事をつらつらと並べていくだけではあるが、それでも充分だった。秘書官の言う祭りが自分の思っていたものと違った事に若干肩透かしを食らうが、なるほどとノワールは得心する。

「ん？ お祭りって他にあるんですか？」

「ま、まあ色々あるわね。ル、ルウィーって言えば雪国じゃない？」

「やっぱり寒いところ特有なお祭りでもあるのかと思って」

「成程。確かに調べてみればあるかもしれないね」

触れて欲しくないところに見事に触れてきた秘書官に、ノワールは若干頬を引き攣らせながら話題を反らす。若干苦しいかもと内心ひやひやしなながらも、特に深く追求しない秘書官の様子に胸を撫で下ろした。

「ノワール様は、誰かとお祭りって言った事ありますか？」

「……別に、お祭りとか行った事なくても仕事をするのに差し支えは無いわよ」

のもつかの間。今度は何気ない秘書官の質問がノワールの胸を抉り取る。自他共に認める友達が少ないノワールである。更にまじめで公私において公を優先してしまう黒の女神は、仕事では無く純粹に楽しむ為、誰かと共に祭に参加した事は無かった。匿名でレイヤーとして参加するような祭りもあるにはあるが、それとは趣が大きく違っている。そう言う意味では、誰かと一緒に出掛けた事は無かったりする。秘書官の無慈悲な一言に若干ノワールの声音が下がるのも仕方ないと言えるだろう。

「あ、えーつと。なら、今度ケイさんや今はプラネテューヌに行っているユニ様も誘って行ってみませんか？」

「……そうね。気が向いたら……ね」

そんなノワールの変化を敏感に感じ取り、秘書官は若干狼狽えながらも提案する。それにノワールは一瞬考え込むと、曖昧な笑みを浮かべてそう答えていた。

「……ノワール様」

ノワールの物憂げな横顔を見て秘書官は何とも言えない気分になる。何がどうと説明できるわけでは無い。だけど、自分では無理なのだろうと解ってしまうのだ。

「何時か。何時か、ね」

そんな秘書官の内心を知ってか知らずか、困った子に言い聞かせる



ような声音でノワールはそう言い聞かせるのだった。

「お風呂はいりたい」

「そうね。汗かいちゃったし、少し気持ち悪いかも」

食事を終え、ユニとマジックの三人で今で寛いでいたところでマジックが呟いた。長い一日だったが、マジック以外にユニも我が家に居候する事になったため必要な物を買いに走った所為か、二人とも少しばかり汗をかいていた。既に乾いているのだが、女の子だけあつて気持ち悪いのだろう。ユニは服を軽くパタパタと扇いでいるし、マジックに至っては今にも服を脱ぎだしそうだ。

「ああ、沸いているよ。入っただい」

丁度帰宅してすぐに入れる準備はしていた。マジックに向かってそう言う。幸いマジックを預かると言う事だったので、子供用の服は施設の方から預かっていた。一応子供たちは魔物の姿なのだが、何故か子供用の服も用意されていた為非常に助かっている。恐らくいつ子供たちが元に戻っても大丈夫なように準備をしていたのだろう。そんな親心みたいなものだと思う。きつと多分。

「お兄ちゃんも一緒にはいる?」

「ちよ!」

マジックの言葉にユニが露骨に反応を示す。とは言え、それも当たり前だろう。幾らマジックが子供だとは言え、一緒に入るほど幼い訳も無い。一緒に入ったら手を出すのかと聞かれれば無論出さないけど、そういう問題でもない。

「あはは。折角だけど僕はやる事があるから後で入るよ。先に綺麗にしておいで」

「むー。残念」

「ごめんね」

心底残念そうだけど、こればかりは仕方が無い。詳しい説明をするのは後にして、マジックを促す。

「じゃあ、お姉ちゃんは？」

「う……、じゃ、じゃあアタシも入ろうかな」

うるっとした瞳に正面から見詰められた所為か、ユニが一瞬怯んだ。そのまま自分の負けだと言わんばかりに溜息を吐くと、マジックと一緒に入る事に決めたようだ。と言うか、ちよつと待つてほしい。一つ問題がある。

「それは兎も角、服はどうする？」

寝間着である。夜も晩くであった為、ユニ用の寝間着を買おうにも、その手の店は既に締まって居た為買えていなかったりする。下着程度ならコンビニでも買えるため、何とか買ったのだけど、流石に女の子用の服までは買えなかった。一応袖を通していない僕用の服を開けると言う事で落ち着いたのだが、案の定サイズが大きすぎる。ぶかぶかすぎるのだ。上着は兎も角、下はベルトを締めてもずれるレベルだった。身長差があるためそれも仕方が無いのだけど、問題はそこでは無い。履けるズボンが無いのである。ユニはマジックと違って、年頃の女の子だ。流石に色々不味い。

「んー。適当に借りてくね。最悪、無理だったら同じ服着るから」

「あー、うん。そうなるよね。ごめんね」

女の子としてそれはどうかと思うけど、それしか手が無いのも確かだ。結局そのまま見送る事にする。

「さてと……それじゃ、僕の方も準備に取り掛かろうかな」

とは言え、やる事はあった。取り急ぎ、ユニの着換えや明日以降の準備の為、簡単な買い物は済ませていた。が、肝心の二人の部屋が全くと言うほど準備できていない。とりあえず、細かい作業は明日するとして、休めるように寝室として最低限の準備はしなければいかなかった。元々隠れ家の為か、幸いシーツや枕、布団など寝具一式は何人分か揃っていたので、その準備を二人が入浴している間に終わらせようと言う事だった。

廊下を通り、浴室から僅かに聞こえる衣擦れの音を尻目に二人の部屋に準備に向かう。一応一人一室で割り当てている為、二つ用意をしなければいけない。難しい事では無いが、流石に手間である。とは言

え、疲れている女の子にやらせるような事でもない。

「もう一頑張りしますか」

やる気を出す為にも会えて口に出し、一つ目の部屋を開けた。

「ユウの奴、見事にスルーしたわね。ってここら。服は丁寧に脱がなきゃダメよ。直ぐに皺になるんだから！」

一切迷いなく部屋の前を通り過ぎた足音に、ユニは若干口元を引き攣らせながら呟いた。覗かれたら恥ずかしくてたまらないけど、一切興味がないうでもそれはそれで腹が立つと言う事だ。そんなユニの葛藤など気付いていないのだろう。子供らしくマジックが脱ぎ捨てた服をユニは丁寧に伸ばし洗濯籠に入れていく。最初はマジックと言う名に警戒していたユニだが、此方の次元のマジックは見ての通り子供であるため、今では完全に警戒心が無くなっていった。寧ろ自分に子供が出来たように錯覚すらしてしまう。と言うか、完全に新婚状態では無いかと気持ち、ユニは自身の服を半分ほど脱ぎ掛けたところで悶えた。

「はーい」

「もう。返事だけは良いんだから。先に体洗わないとだめだからねー」

「解ったー」

そのまま浴槽に突撃しかねないマジックに声を掛けつつ、ユニは服を畳み籠に入れていく。ちなみに優一にはああ言ったが、最初からもう一度同じ服を着る気など無い。自分が着るにはサイズが大きいワイシャツをクローゼットから既に引っ張り出してあり、それだけ纏う心算だったりする。見えそうで見えない。そんなギリギリとまではいかないが、それ一つで現れれば、幾ら四条優一とはいえ意識するはずだと予想できる。それがユニにとっての狙いだった。問題があるとすれば……

「これ……アタシの方が死ぬんじゃないかしら？」

ユニの方が先に音を上げかねないところだろう。見えそうで見えないのはロマンだとか聞いた事があるが、ロマンとか以前に、想像しただけで恥ずかしくて顔から火が出そうだとユニは思う。しかし、そうも言ってもらえない。

「ユウはお姉ちゃんの事が好きなんだよね……。なら、この位でへこたれてたら絶対に勝てない……」

ユニは直接好きな人を聞いていた。つまり、それを教えて良い人にユニは分類されていると言う事だ。今は完全に姉には負けている。だけど、自分は圧倒的優位でもあった。なら、今のうちに距離を縮めなければいけない。立ち止まって時間を浪費する余裕なんてないから。そんな思いを胸に秘め、先の計画を色々考えながら髪を結び入浴の準備を整え、扉を開ける。

「お姉ちゃん、お兄ちゃんの事好きなの？」

「ぶっ!? な、ななな!」

そして完全に虚を突かれていた。風呂場に入ってきたユニに視線を合わせたマジックが、小首を傾げながら単刀直入に聞いて来ていた。予想だにしない質問に加え、浴室は既に濡れていた所為もあり完全に足を取られた。

「きや、きやああああ」

「お姉ちゃん!」

そのまま豪快に足を滑らせてしまい、その場で強かにお尻を打ち付ける。身体を隠すように手にしていたタオルがひらひらと宙を舞い、ユニの顔を隠すように覆いかぶさった。まさかそこまで驚くとは思っていなかったマジックは、慌ててユニに駆け寄り恐る恐る声を掛ける。

「アイタタタ。な、何とか大丈夫よ」

「ほっ。良かった……」

色々と酷い絵面のまま倒れていたユニは何とかタオルを取り、立ち上がる。そのまま打ち付けたお尻と頭を押さえつつ、答える。目尻に涙が浮かんでいるが、大丈夫そうである。

「とりあえず、体を洗いましうか」

「うん。……洗いっこする?」

「仕方ないわね。良いよ」

そうして、浴槽に入る前に二人は体を洗い始めた。

「暖かいね」

「ええ。すっごく気持ち良い。うーん。生き返る」

二人が一通り体を洗い終え、ユニによる女の子のケア講座が終わり二人一緒に浴槽に浸かっていた。色々細かいが、姉の様に、或いは母の様に教えてくれるユニにマジックは幾分か心を開いたのか、素直な笑顔を見せるようになっていた。そんなマジックを可愛らしいなっと思いつながら、ユニは至福の一時に頬が緩むのを感じた。

「お姉ちゃん。聞いてもいいーい?」

「良いよ。何でも聞いてー」

マジックも気持ちいいのだろう。ユニと同じくふにやっとし幸せそうに目を細めながら、口を開く。それに、さほど警戒する様子もなくユニは促し。

「お兄ちゃんの事、好きなの?」

「うみゅ!?!」

奇声を上げた。先程聞かれたばかりなのにもかかわらず、完全に話題を棚に置いていた。先程と同じく動揺を露わにし、ユニは頬を桃色に染める。

「あ、アタシは……」

「そっかあ。お兄ちゃんの事、好きなんだね」

そんなユニの様子を見ただけで得心が言ったと言うようにマジックはにっこりと笑みを浮かべた。完全に見透かされた。楽しそうなマジックの様子にそう理解したユニは、湯船に深く沈むと小さく頷いた。

「私も、お兄ちゃんの事好きだよ」

「うえ!?!」

まさかの宣戦布告に、ユニは驚きの声を上げる。冷静な部分では、

子供相手に何を動揺しているのかと思わなくてもないが、今のユニには余裕と言う物が全くない。笑い飛ばす事などできる訳もない。

「それって……」

「お姉ちゃんも、好きだよ。ネズミや皆、お義父さんも好き」

問い返したユニの問いには答える事無く、マジックは楽しそうに続ける。その様子に、ああこの子はアイツと一緒になんだと、ユニは思い至った。

「だからね。お兄ちゃんがお姉ちゃんを好きだと、私も嬉しい」

「ユウがアタシを好き……。あうう……」

マジックの言葉を聞いたユニは深く湯船につかっただまま想像をして、ぷくぷくと湯船に泡を浮かべながら更に赤くなる。

「お姉ちゃんはお兄ちゃんが好きで、お兄ちゃんがお姉ちゃんの事好きになってくれたら、私も嬉しいよ」

「そ、そうなの?」

「うん。大好き人が仲良いと、嬉しいもん。だから、私もお手伝いするよ。」

「え?」

それはユニにとって、思いもよらない申し出だった。にっこりと嬉しそうな笑みを浮かべ、マジックはそう提案したのだった。

「お兄ちゃん、おさきー」

「すつきりしたよ」

部屋の準備を終え、今度こそソファーに持たれ寛いでいたところでそんな声が聞こえたので意識を向ける。

「ああ、此方も終わった……は?」

そして、マジックとユニに視線を向けたところで固まった。当たり前だが二人は寝間着姿である。問題はその格好だった。先ずはマジック。子供らしい桃色のパジャマに身を包み、気持ちよかったと言う言葉通り上機嫌で小さく笑みを浮かべている。風呂上がりの為血

行が良くなったのか、少し頬が赤いが健康的である。小さく手を振って来るのに、軽く手を上げる事で応じる。特に問題は見当たらない。

問題があるのは、妹の方だった。マジックと同じく風呂上がりの所為か、少し赤くなっている。黒の女神と言うだけあって艶やかで手入れの行き届いた黒髪は結び上げられており普段と違った印象を受ける。服装は僕の来ているワイシャツを羽織っていた。それだけである。いや、うん、ホントに下着の上からワイシャツ羽織っているだけでは無いだろうか。見えると言う訳では無いけど、目のやり場に困るのは確かだった。

「えーっと、からかわれてる?」

「ふふ、何が?」

「えーっと、服装だよ」

「似合うでしょ?」

どう言う心算なのだろうかと頭を抱えそうになったところで、予想外の返答を返される。その場でくるりと一回転して、軽く裾を持ち上げるようにして笑った。小悪魔。そんな印象を与えられる。

「ああ、うん。似合うね。すつごく良く似合う。その笑顔とかユニらしい」

「お兄ちゃんもお風呂入ってきたら?」

「……そうだね。そうするよ」

からかうにしても度が過ぎている。一言いうべきかと思ったところで、マジックに促された。何と言うか、間をずらされてしまった。結局、まあいいかと思いつその場を後にする。顔を見合わせてユニとマジックが笑ったような気がした。

「眠い……」

入浴を終え、居間に戻ったところでマジックが目を擦りながら呟いた。マジックは子供であり、今日一日だけでも様々な事が起っていた。精神的にも体力的にも疲れが溜まったのだろう。風呂に入った

ことにより体がリラックスした事もあつてか、今にも寝てしまいそうに身体が揺れている。

「そうだね。もう寝ようか?」

「んゆ。寝る」

「つと」

そのまま僕の元まで来ると、ギョツと抱き着いてくる。流石に突き飛ばす訳にもいかないので、そのまま抱き留めると、ころころとマジックは楽しそうにしている。

「みんなで一緒に、寝よ」

「あーうん。流石に三人はダメかな。ユニか僕の二人にしよう」

「ヤ。三人で一緒に寝るの。お兄ちゃんとお姉ちゃんと三人がいい」

そしてまさかの三人一緒に希望である。確かに寝れない事は無い。部屋に備え付けられているベッドはかなり大きい物で子供を入れて三人なら十分に寝る事が出来るが、そう言う問題でもない。

「ごらごら。あんまり我儘言わないで、ね?」

「ヤ」

「むう。ユニからも一言お願いします」

ぎゅーつと抱き着いて離れようとしなないマジックに困ってしまい、ユニに助けを求める。どうにも僕は子供には強く言えないようだ。

「まあこればかりは仕方ないわよ」

「お兄ちゃんとお姉ちゃんは私の事嫌い……?」

そう言い、ユニがマジックに言い聞かせようとしたところで。

「……仕方ないわね、一緒に寝よっか」

あつさりとユニが陥落した。確かにそう言われたら返す言葉が無いのだけれども。ユニも僕と同じなのだろうか。マジック相手だと強く出れない。

「いや、流石にそれは不味いんじゃない」

「不味いつて言うത്?」

「ユニも女の子だから、流石に嫌だと思っし」

「別に嫌じゃないよ? アタシはお兄ちゃんの妹だし、一緒に寝るぐらい問題ないよね?」



にっこりとユニが笑みを深める。確かにそれは僕の言葉だった。確かに僕の言葉ではあるけど、何と云うか意図が違う。そう言う意味で言ったのではない。

「起きたら夢かもしれない。だから、一緒が良い。怖いけど、一緒なら安心できるの」

「……確かにその気持ちは解るわね。アタシも起きたら自分の部屋かも知れない。お兄ちゃんと再会できたのは夢かもしれないって思うと、怖いよ。不安になるの」

二人が夢だったら嫌だと不安げに此方を見る。拒める理由が思い浮かばなかった。

「……今日だけだからね？」

「やった」

「うん」

結局今日だけだと約束して、一緒に寝る事になってしまった。駄目だと思うけど、妹を不安にさせないためだと言いつけさせる。寧ろ僕が眠れるだろうか。二人の笑顔を見ると、そんな事を真剣に考えてしまうのだった。

## 18話 本当の望み

「んー、もうこんな時間か……」

既に沈んでしまった日の名残りをちらりと一瞥すると、ノワールは大きく伸びをしながら呟いた。既に執務室からは教祖や秘書官の姿は無く、その日の業務は終了している。とは言え、黒の女神は別であった。他の者が業務を終えても、やる事はいくらでもある。

「はあ……、やっぱりユニに休みを与えたのは間違っていたかしら？」  
自身のデスクに積まれた書類の山を一瞥し、誰も見ていないと言う油断もあってぼつりと愚痴を零した。普段から完璧である事を意識しているノワールの、僅かな気の緩みであった。ユニがプラネテューヌの方に行つてから、ノワールのこなすべき仕事は飛躍的に増えたと言つて良い。秘書官やケイが幾らか担つてくれてはいるが、それでも増えたと言わざるを得なかった。何とかなるだろうと思ひ妹を送り出したかつての自分に、少しだけ文句を言いたくなる。

最近のユニは、ノワールの眼から見ても何やら思いつめている様に見える。あれから、ずっと走ってきた。そう考えると、妹も疲れているのかもしれない。随分と頑張ってくれたのをノワールは知っている。少しぐらい休ませてあげないと思ひ、ユニに何日かの休暇を与えていた。そうしてプラネテューヌに向かった結果が、現状だった。妹のためとはいえ、増えた仕事の量には溜息も零れると言う物だ。

「お祭り……か。私もいけるなら行きたいけど……」

昼間の話を思い出す。秘書官が言っていた祭りの話。あの時に友達と一緒に行った事があると言えればどれだけよかつた事か、つと思ひを馳せる。

「私が一番一緒に行きたい人は……」

そして、その人はもういない、とノワールは目を伏せ呟く。

「思えば、お友達だったのにあんまり楽しい思ひ出は無かつたわね……。お祭りに行つたりお茶したり……、買い物とか行つたり旅行したり。そんな事、何もできなかつた」

四条優一の事を考えると、悲しみが溢れてくる。これ以上考えては

ダメだ。そう自分に言い聞かせ、ノワールは思考を止める。そして、ゆっくりと深呼吸して自分を落ち着かせる。

「少し疲れちゃったわね。休憩、しようかしら」

ほつりと眩き、備え付けられたデスクチェアにもたれ掛かり軽く目を閉じる。

「少しだけ……少し、だけ……」

そのまま、心地の良い微睡に身を委ねた。

「……は……?」

ノワールが辺りを見渡すと、そこは見慣れぬ街並みが広がっていた。どこか夢見心地の気分のまま、小さく欠伸をかみ殺したところで、自分が随分とはしたくない事をしている事に気付き、慌てて両手で口元を抑える。

「え?」

そして、違和感に気付いた。

「え、え?… なんで私、浴衣姿なの……?」

普段身に纏っているドレスと違い、今のノワールは女神化した時の瞳と同じ、空色の浴衣を身に纏っていた。ノワールの着ている浴衣は、基調になる色こそ空色だが、桔梗や董色等青系統の色で合わせられた花が彩られており、見る者に落ち着いた印象を与える。帯は桃色の物で締められており、落ち着きがありながら女の子らしい感じで纏められていた。

どうして自分は浴衣を身に纏っているのか。そもそもここは何処なのだろうか。未だに自分の身に起きている事が上手く理解できず、ノワールは混乱しながらも辺りを忙しなく見回す。街並みのいたるところに行灯が置かれ、提灯などもぶら下げられている。直ぐ近くには誰もいないが、遠くからは楽し気な音楽や喧騒が耳に届く。これって祭りなのだろうか。昼間に聞いた言葉がぼんやりと頭の中に浮かんでくる。

「あ！ お姉ちゃん！ やつと見つけたよ！」

何がどうなっているのよ。そんな言葉を出しかけたところで、はっきりと聞き覚えのある声が聞こえた。どういう状況なのか理解が追いつかないノワールは、藁にも縋る思いで声のした方向へ向き直る。そこに居たのは思った通りの人物であり、

「ユニー！ それに……あなたは……」

「ん、漸く見つけた」

妹の傍で小さな笑みを浮かべる青年。黒の女神が忘れるはずの無い人間。四条優一。彼女が思ってもみない人物であった。ユニに何かを言うのも忘れ、ただ茫然とノワールは優一を見詰めている。思考が追いつかない。ノワールは、目頭から熱いものが溢れて来るのを止める事も出来ず、瞬きだけを繰り返す。何か言わなきゃいけない。だけど、声が出ない。そんなもどかしさの中、ゆっくりと時間が過ぎていくのだけを感じる。なんで、なんで、なんで？ 話しかけたいのに言葉にならず、そんな疑問だけが忙しなく動き続ける。

「お祭り」

「え？」

「行こっか？」

もしかして夢なのだろうか。まだ何もしゃべっていない。夢なら冷めないで。そう強く思ったところで、四条優一が手を差し伸べノワールに笑みを向ける。先程まで声が出なかったのが嘘のように、口から自然と音が零れた。訳も分からず聞き返す。それに嫌な顔一つせずに、もう一度誘ってくれた。

「一緒に行こう」

今度こそ、大粒の涙が零れ落ちる。だけど、そんな事はどうだって良かった。あの人が目の前に居てくれる。ノワールにとって、それは何事にも代えられない事だったから。

「うん。……うん！」

涙を零しながら頷く。最期の戦いの後、結局触れる事すらできなかった異界の魂の手をしっかりと握り、ノワールは涙を零しながらも心からの笑みを浮かべたのだった。

「ユウ。それにお姉ちゃん。何時まで手を握り合ってるの？ 早くいくよー！」

ノワールの葛藤など露とも知らない様子で、ユニが両手を腰に当て早くするように急かした。妹の何気ない一言に自分が異界の魂としっかり手を繋いでいる事に気付く。ボンッと音がしそうな程はつきりとノワールの顔に朱が差す。

「べ、別に握りあつてる訳じゃないわよ！」

「えー。でも、お姉ちゃん、さっきからユウの手を握ってるよ」

「こ、これはその……、あの、ゆ、ユウが手を差し伸べてくれたからであつて、深い意味なんてないわ！ 差し出されたから握ったのであつて、ほら、あれよ。無視したら嫌な子じゃない！」

そのまま妹の言葉を必死になって否定する。尤も慌てて否定する姿が既に普段のノワールと違っていて、その言葉に説得力は無い。

「あはは。まあ、子供じゃあるまいし、何時までも手を繋いでいる必要も無いよね」

姉妹のじゃれあいを優しげに見つめていた優一は、くすくすと小さく笑いながら、ノワールと繋いでいた手をそつと解いた。完全にユニの方に気を取られていたノワールは、呆気なく解かれた手の温もりに、思わずあつと名残惜しそうな声を零す。

「それはそうだけど……」

「なら、もう一度繋ぐ？」

「ええ!? あ、いや、あの、その……あう……」

そんなやり取りをするも、奥手なノワールは結局繋ぎたいなど言える筈も無く、そのままどうしようかと彷徨っていた左手が力無く落ちる。結局、繋ぎたいと言う一言がノワールの口から出る事は無かつた。

「なら、アタシは繋ごうかな」

そんな姉を見詰めていたユニが意味あり気な笑みを姉に一瞬だけ向けると、そのまま異界の魂の右手を大切なものを抱く様に腕を絡ま

せながら言った。勝負だよ、お姉ちゃん。言葉を聞いたわけではないが、はつきりとノワールはそう宣言されたような気がした。思わず妹を見詰める。いつも自分の背を追っていた妹が、何故だか、ずっと先に進んでいるように思えた。

「つと、まさかのユニ。と言うか、流石にこれはやり過ぎじゃない?」  
「まあまあ、良いじゃない。お祭りの時ぐらい。どうせアンタの事だから、一緒に楽しむ女の子なんてアタシたち位しかないんでしょ?」

「まあ、否定はしないけど」

「なら、偶にはこう言うのも良いわよ。お祭りに来て思い出の一つも無いと可哀想だし、アタシが一つ良い思い出を上げる」

「なんだろう。素直に喜べない」

困ったように苦笑を浮かべる優一に、ユニは満面の笑みで答えていた。その様をすぐ隣で見ているノワールは、強烈な淋しさに襲われた。行こつかとユニが促し、引つ張る様に前に進む。抵抗する訳にもいかなないので、ゆつくりと進み始めた異界の魂の背に、思わずノワールは右手を伸ばした。紺色の浴衣の裾におずおずと白い指が掛けられる。

「ノワール?」

「その、はぐれたら大変だから……。駄目かな?」

「いや、それなら手を繋ごうか」

そのままノワールの返事を待たず、優一はそつと手を取る。それだけで、寂しさがどこかに消えたてしまったのではないかと思える程、ノワールは自分が満たされて行くのを感じた。

「ふふ、ユウ。両手に花だね」

「ラステイションの人に殺される気がしてきた。やっぱり離れて歩かない?」

「だーめ。大丈夫だよ。浴衣を着て服装とか違うし何時もと雰囲気も違うから、きつとバレないよ」

いたずらな笑みを浮かべたままユニが小さく囁く。それにため息を吐きながら優一は零した。現状が嫌というわけではなく、もつと別

の可能性に思い至ったからだ。

「寧ろ、すぐにバレる気がするけど?」

「むー、心配性だなあ。お姉ちゃんに至っては髪型も変えてるんだから、アタシ達が女神だなんてきつとバレないよ」

ユニはそのまま優一の手を離すと、反対側にいたノワールの手を掴みほらつと言いながら自信有り気に宣言する。ノワールは空色を基調にした落ち着いた感じの浴衣を纏い、髪は普段二つに結っているのを、首のあたりで一つに纏めていた。ノワール本人もそれどころではなく気付いていなかったのだが、優一から見た彼女は確かに普段と違った雰囲気に見えるだろう。ユニの着ている浴衣は黒を基調とした生地、ノワールと同じように赤で花が描かれた物である。浴衣自体は随分と背伸びしたのか大人びたものであるが、帯の方はノワール同様女の子らしく桃色の物で締められている。色合いこそ違うものの、二人の纏う浴衣は姉妹だけあってどこか似たものであった。

「と言うか、聞いてないんだけど?」

「んー?」

「感想よ、感想。ラステイションの女神姉妹の浴衣姿を独占してるんだから、何かあるよね? てか、あんた。今の察したくせにワザとやったでしょ!」

「あはは。いや、ごめんごめん」

むすつとしながら言うユニに、優一はからから笑いながら宥める。

「ど、どうかしら?」

そういえばなんの感想ももらっていないかったことに気づいたノワールは、緊張した面持ちで尋ねる。普段匿名で参加するコスプレイベントでは感じることはないような緊張感に声の上擦ってしまうが、ノワールはそれどころではなかった。冷静に考えてみれば自分で選んだ浴衣というわけでもし、いつ着替えたのかも定かではないのだが、そこは女の子である。感想は気になってしまうものなのだ。

「うん、似合ってるよ」

「ほ、ほんとは?」

「うん」

優一は小さく笑ったまま、すんなりと答える。一言。だけど、その一言に心が弾むのを感じる。思わず聞き返してしまうほどだった。

「何か体良くいなされた気がする」

そんなノワールとは対照的に、ユニはじとつとした目で優一を見つめた。そのまま、暫く見つめたあと、いい事を思いついたといった感じで言った。

「あたしとお姉ちゃん。どっちが可愛い？」

「ちよ、ユニ!? な、何聞いているのよ!」

妹は何を聞いているのだと、ノワールは上擦った声で詰め寄る。当たり障りのない言葉ですら、あれだけ嬉しかったのだ。直接的に言われたらどうなるかわからない。

「む、なかなか意地の悪い質問だ。さて……」

このような質問をされてしまったては、流石に見比べないわけには行かない。姉妹を暫く見つめる。

「あ、あの。あんまり真剣にならないで良いわよ？」

「ユウの好みの問題だしね。気軽に答えてくれたらそれで良いよ」

恥ずかしそうに零す姉と、楽しげな妹。ふたりの言葉を聞き、異界の魂は考え込んでいるのか一瞬だけ目を閉じ逡巡すると、口を開いた。

「可愛いのはユニ、かな」

「本当!」

その言葉を聞き、妹は嬉しそうにほころぶ。対して姉は少しだけ悲しげだが、ほっとしたように小さく息を吐いた。

「うん。可愛いのはユニ。綺麗なのはノワールだね」

「ふえ!?! き、綺麗って。え? 私……?」

「うん。良く似合ってる。流石は女神様だね。凄く、綺麗だと思う」

「あ、う……。その、ありがとう……」

そのままノワールにも言葉を告げる。意地の悪い質問をしたユニに対する回答なのだが、それを理解した上でなお、ノワールは頬が染まるのを自覚する。一言。ただ綺麗と言われただけで、舞い上がってしまった。心臓がばくばくと高鳴り、相手の顔をうまく見ることがで



きなかつた。

「むー、やっぱり体良く誤魔化される?」

「流石にそんな簡単に優劣は決められないよ」

「それはそうだろうけどさ。釈然としない」

「世の中そんなものだよ。とりあえず、ラムネでも飲むかい?」

むーっと唸るユニを、優一は苦笑を浮かべながら宥めながら歩いていく。丁度出店で飲み物が買えそうな店を見つけたので、少しばかり強引にだが話を変える。

「そうね。確かにちよつと喉が渴いたわね。貰おうかしら」

「なら僕が買ってくるよ」

「良いのかしら? ならお願いしようかな」

「アタシも飲みたいし、三本いるね。折角だからアタシも並ぼうかな。他にも色々あるみたいだし」

そう言い、ユニは優一の傍についたまま歩き始めた。その様子を見て、ノワールは少し羨ましく思うも、まずは自分を落ち着かせる時間が欲しかったため大人しく見送った。

「飲み物以外にも色々あるね」

「たこ焼きとか焼きそばは定番かな」

「他にも綿あめとか、林檎飴もある。お祭りって言うのと定番だけど、なんか珍しいかも」

ラムネを三本受け取り、他の品書きを見ながら二人は会話を広げていく。他にもイカ飯やたい焼き、焼き鳥やカキ氷などがある。果てにはピザやクレープなど趣の異なる物まで扱っている店があるようだ。ノワールが待っているため二人ともあまり寄り道できないが、近くにある出店の品書きを眺めながら変わったものを探す。

「ここ、丼扱ってるみたいだよ。ちよつと変わったお店ね」

そこで一風変わったものを見つけた。出店の丼屋である。食を扱った祭りでならわかるが、いわゆる夏祭りには中々お目にかかれな  
い類の店であった。そこに大きく書かれている文字に目を惹かれた。

「女神井だつて」

「候補生井もあるわね。別にアタシたちに関係があるわけじゃないだろうけど、なんか複雑な気分ね。まあ、お祭りだし女神にあやかっても不思議じゃないか」

女神井と候補生井である。名前こそ変わっているが、特段珍しいものではなかった。二人が店主に聞いてみると、女神にあやかっただけの素材を使っている井と言うだけのようだった。

「買っていく?」

「んー。流石に井を勝手に買って行って嫌な顔されたら嫌だし、お姉ちゃんに聞いてみよ」

そう言い、一旦店から離れる。そのままラムネを手に持ちノワールと合流する。

「はいどうぞ」

「ええ、ありがとう」

「ちなみに飲み方って知ってる?」

「え? あ、ああ、これっての見方が独特なのよね。大丈夫よ、知っているわ。ありがとう」

古き良きラムネ瓶をノワールに手渡すと、優一は確認するように聞いた。直ぐにその意味に思い至ったのか、ノワールは笑顔で大丈夫だと答える。

「飲み方?」

「ん、知らない?」

「うん」

「そっか。とりあえず普通に飲んでみると良いよ。聞くよりやってみると解るから」

聞き覚えがないのだろう。ユニは小首を傾げながら口をつける。ノワールと優一もあとに続く。

「ん、美味しいわね」

「だね。こういう味は懐かしいかな」

ノワールと優一は、美味しいと頷き合い。

「……上手く飲めない」

案の定ユニは、ラムネに入っているビー玉がつつかえて上手く飲めずにいた。

「ふふ、ユニ。ビンのくぼみに引っ掛けるように飲めばいいのよ」

「そうなの？ ん……。ホントだ。飲む。ありがとうお姉ちゃん」

「ええ、どういたしまして」

そんなユニを見かねたのか、ノワールはユニに飲み方を教えていく。ちなみに祭りに行つたことのないノワールが何故そんな事を知っているのかというと、アニメやゲームによく出てくるネタのため、実践しようかと思ひラムネを買つて見たことがあつたからである。流石にアニメで気になつたからとは言えず、ユニには秘密で実行していたことが変なところで役に立つたということだった。

そんな仲の良い姉妹のやり取りを見て異界の魂は心底嬉しそうな笑みを浮かべた。何か言うことはしないが、ただ優しげに二人を見守っている。彼が守りたかつたもの。それを確かに見ることができたから。心から安心したように二人を見つめていた。

「喉は潤つたけど、お腹が減つたかも」

「そうね。折角お祭りだから、出店で何か買つていこうかしら？」

「あ、それなら面白そうなのがあつたよ」

「ん、さっきのアレかな？」

「ふふ、大正解」

やがて、ふたりが優一の元に戻つて来る。次は何か皆で食べようかということだった。お祭りである。ノワールが言うように食べるものには困らない。丁度先ほど二人は変わったものを見つけたところであつた。こういう場では手を出さない方が無理な話である。

「ユウはどつちが食べたい？」

「んー、難しいね」

「食べるって、何を食べるのかしら？ 二人は知ってるだろうけど、私は何かわからないのだけれど」

二人は何か知っているが、その場になかつたノワールが知らない

のも無理はない。優一が答えようとしたところで、ユニが手で制し、ニツコリと笑みを深める。直ぐに優一は何かやろうとしているのだからと察し、とりあえずは様子を見ることにした。

「女神候補生をだよお姉ちゃん」

「ええい!」

面白そうな悪戯を思いついたユニの答えに、ノワールは驚きの声を上げる。と言うか、誰だつて驚くだろう。意味を理解できている四条優一ですら、呆れた様な乾いた笑いを浮かべている。

「それでどっちが良い?」

「難しいところだね。どっちも捨て難いし、敢えて言うなら両方かなあ?」

井の話だけどねつと優一は言おうとしてユニに目で制される。仕方が無いと呆れながらも、彼女が望むような言い回しで答える。なんだかんだで、四条優一もノワールを弄るのは好きだから。

「ふ、二人いぺんに!!」

「なら、二種類を合わせて食べるから姉妹井だね」

「し、姉妹井!」

そして完全に勘違いしている女神が一人出来上がっていた。

「そ、そんな二人一緒にだなんて……。そりゃ、ユウの事は嫌いじゃないし寧ろ……。だけど、それとこれとは話が違うし。でも私とユニは姉妹だし、他の子に取られるのは嫌でもユニとなら我慢できるかも……。つて違う違う、何を考えてるのよ私は!」

あまりの事に赤面しながら、ノワールが壊れ始める。

「まったく、何と勘違いしているのか。まあユニの所為なんだけどさ」「えへへ。なんか楽しくなってきたよ、つい」

流石に可哀想だと思つた優一の一言で、ユニは小さく舌を出し楽しそうに謝罪する。そのまま先程の話は井屋の品書きの話だったと告げると、今度は違う意味でノワールの顔が赤く染まった。勘違いしていた羞恥で目に涙まで浮かぶ。

「あ、あなたたちは!! ぜ、絶対に許さないんだからー!!」

「あー、ノワールだ! ネプギアー、ユニちゃんもいるよ!」

そう言い、ノワールに詰め寄ろうとしたところで声が聞こえた。突然の闖入者に毒気を抜かれたのか、声のした方向へ視線を向ける。そこに居たのは

「わー。ノワールとユニちゃん凄いオシヤレ。気合入ってるねー。さてはフラグ立てに来たんだなー!」

「あ、ユニちゃん。ユニちゃん達もお祭りに来てたんだね。言ってくれたら一緒に来れたのに。……って、ああ、そう言う事か」

紫の女神姉妹。ネプテューヌとネプギアだった。二人もノワールやユニと同じように浴衣を身に纏い、祭りに遊びに来たと言う感じであつた。

「あ、これは別にそう言うのじゃなくて……」

「そ、そうよネプギア、なんか変な勘違いしてない!? 別にアタシたちはたまたま三人で来ただけであつて……」

「く、くく。あははは……」

各々の友達に意味深な事を言われ、あたふたと慌てはじめる黒の姉妹。そんな様子が面白くて、優一は思わず吹き出してしまった。

「僕の事は良いから、少しお話ししてきたらいいよ。その辺りで時間を潰して来るからさ」

そして一しきり笑った後に、二人にそう告げる。その言葉に甘える事にし、ノワールとユニはネプテューヌとネプギアに弁明する為、詰め寄る事にした。その直前、一度だけノワールは背後を振り返る。何故か、無性に気になったから。そして、息を呑んだ。

「……え?」

其処に四条優一は存在しなかったから。一瞬目を離しただけ。それで異界の魂など最初から存在しなかったかのように、その姿が掻き消えていた。

「な、なんで? なんでなんでなんで!」

状況が理解できず、ノワールは焦ったように声を荒げる。だけど、同時に解っていたのだ。最初から、解っていたはずだった。四条優一はノワールの目の前で消えていったから。それを知っていた。それでも、夢でも良かった。幻でも良かった。だから甘えてしまった。最

初から異常な事態だったと言うのが解っていた筈なのに、何も考えずに過ごしてしまっていた。そして、今また四条優一はノワールの目の前から音も無く消えた。

「嫌だ、消えないで……。もう居なくなっちゃ、嫌なの……」

涙が零れた。だけど、ノワールの声に答えるものは何も居ない。気付けば近くに居たユニも、ネプテューヌもネプギアも、祭りの喧騒すらも聞こえなくなっていた。

「何処なの？ 皆、何処に居るの？ あなたは……。何処に居るの？」

泣きながら呟かれる問。その問いに答えてくれる声が辺りに響く事は無い。

「あ……」

ピピピ……つと言った機械的な音に驚きノワールの意識が覚醒した。デスクに備え付けられていた時計。つつい仕事をし過ぎてしまふ癖があるノワールは、体調やスケジュール管理の為にも日付が変わる時間帯に時報が鳴る様にタイマーを掛けていた。その音によって目覚めたと言う事であった。

「夢……。か。そう、よね……。あの人はもう、居ない……」

夢の中で、異界の魂と妹、三人で祭りに出かけていた。そして幸せな時間を過ごし……。最後には一人になってしまうと言う内容だった。中々に酷い内容である。疲れているのかと思いきや軽く頭を振ろうとしたところで、不意にケイの質問を思い出した。

『ノワールは四条君の事が好きなのかい？』

あの時は答える事が出来なかった。だけど、今ならばどうだろうか。考える。夢の中で出会えた時、泣いてしまった。夢の中で手を繋いだ時、胸が高鳴った。夢の中で褒められたとき、嬉しくて仕方が無かった。そして、夢の中でもう一度失くした時。耐えきれなかった。それが意味する事は何なのか。考える。否、考えるまでも無い事だった。

「ああ、そっか……。私は、あの人の事が……」

滴が零れ落ちた。涙が止まらない。今、自覚してしまった。全部失った後。その後で、完全に自覚してしまったのだ。あはは、馬鹿よねっと、一人笑う。マジックにも言われたけど、私って本当に馬鹿だったんだ。つと力なく零した

「好きだったんだ」

漸く気付いた本心。その想いは向ける人を見つけられぬまま、闇に消えていった。

「だろーと思ってたよ」

ノワールが部屋を出た後、誰もいない筈の執務室にそんな声が響き渡る。主なき部屋に小さな影が浮かび上がる。黒の妖精クロワール。黒き書に胡坐をかき、ノワールが出て行った扉に視線を向けたまま言葉が続ける。

「黒の女神姉妹は単純で予想が付き易かったし、実際予想通りだった。それだけなら態々夢を結合しなくても良いんだが、やっぱりネツクなのはアイツだよなあ」

そのまま自身の月色の髪を書きながら、しかし解んねーつと続ける。ノワールとユニ、そして四条優一の夢を結合してクロワールは観察していた。実際に再会したわけではないが、当人たちの願望を強く反映したのが先ほどの夢と言う訳であった。だから、ユニは優一の事を兄と呼ばないし、ノワールもまた本心を自覚する事になった。だけど、クロワールには解らない事があった。

「たく、人の事天邪鬼と言ってるけど、アイツだって相当じゃねーか。黒の姉妹を両方けしかけても、特に何かをしようともしない。ただ笑ってただけ。強いて言うなら手を繋いだぐらいだが、本心から好きならそれで済むわけねーし。アイツは妹の方には姉が好きだと言っていたが、四条優一の望みって言うのは本当にそれなのか？」

それは、四条優一の本心。ノワールに会いたいと言いながら、ユニ

に出会った時点である程度満足したとも言っていた。何と言えればいいのかクロワールにも解らないが、生きるうえでの衝動みたいなものが四条優一には欠けているように感じる。元々本能よりも理性の人ではあったが、そう言う意味では無い。もっと、根本的な話である。「お前は今、どれくらい生きているんだ？」

それは、紅き魂を生み出したクロワールにすら解らない。何処まで生きていて、何処までが死んでいるのか。それがクロワールには理解が出来なくて。気に入らない。

「つて、これじゃ俺がアイツの事を心配してるみてーじゃんか。別に好奇心が騒ぐだけだし」

思わず言い訳するも、誰も聞いている筈が無い。何を言っているんだ俺はつとクロワールは一人悪態をつく。

「けど、今のアイツは何を望んでいるんだろーな」

解らないからこそ出た呟き。クロワールの胸にちくりと僅かな痛みを与え、消えていった。



## 19話 奇妙な調査班

「やってほしい事がある」

ルウイー大臣の執務室。そこに呼び出された僕とネズミ君に向け、大臣は神妙な顔をして切り出した。

マジックと出会いユニと再会したあの日から幾らかの時間が経ち、ルウイーの教会から出る依頼を幾つかこなしながら生活していた。一応僕も七賢人側の人間な為、ネズミ君と二人で大臣から与えられる仕事をこなしつつ、ルウイーの中で様子窺っていると言う状況だった。大臣主導で行っている政策の一つである鉄道事業。それを進めるのに障害となる魔物たちの排除と言うのが主な仕事だろうか。小型の魔物の群れや、時には危険種の討伐などの依頼もあったが、今のところ特に問題も無く計画は進んでいるようである。

「と言うと、今回も討伐でしょうか？」

「まー、アニキと一緒に呼ばれるって事は、厄介ごとだろうっちゅ。けど、小間使いみたいにこき使わわないでほしいっちゅね」

「呼ばれないよりはマシだと思ふ事にしようかな」

バトルはシンドイっちゅと愚痴を零すネズミ君を宥めつつ、大臣を見る。マジックは元々大臣の養っていた子供たちの一人である。言ってしまうばマジックの親代わりなので、友好的な関係は維持しておきたい。それにマジックが元に戻った理由を調べるため、大臣には協力を依頼されてもいる。女神に成れなかった子供たち。その子たちを元に戻す為なら、拒否する理由も思い浮かばない。そう言う理由もあつて、なるべく良い関係でいたいとは思ふ。

「いや、ネズミの言う通りじゃよ。すまんなこき使つて」

「解つてるなら、休みを要求するっちゅー！」

軽く謝罪する大臣に、文句を言うネズミ君。まあ、何時もの事なので特別何かを言う必要も無いだろうか。所謂恒例行事みたいなものだ。

「それはそのうち考えておくとして、頼みと言うのは何時もの様に討伐じゃな。ただし少しばかり今回は毛色が違う」

「と、言うところ？」

それから大臣は神妙な表情を崩さず続ける。何処となく気が重そうではあるが、続きが気になるため促す。

「結論を先に言おうかのう。今回の依頼は、ルウイーの女神と合同で行う事になる」

「……成程。白の女神、ホワイトハート。女神が出てくるほど厄介な相手だと」

「そう言う事になるわいな」

溜息を吐きながら大臣の表情が曇った。どちらかと言えば、七賢人と言うのは悪の組織なのではあるが、完全に悪に傾倒している訳でも無い。彼らにも彼らなりの思いがあるのだろう。

「今回の該当エリアは、元々ルウイーの軍を使って建設予定地の確保を行っていたのじゃがなあ。厄介な事が起きてしまったのう。派遣した部隊。幾つかに分けた隊の一つが、全滅したのじゃよ」

「全滅って、本当ちゆか？」

「うむ。撤退する事も出来ず、部隊の者は皆殺しにされたようじゃな。本来は小型の魔物の討伐の任務じゃった。それがこのような事になるとは。……予想外の事とは言え、悪い事をしたものじゃよ」

女神の敵を自称する彼らだが、だからと言って人間が憎い訳では無い。死なせてしまった人たちの事を思ったのか、大臣は疲れたように溜息を零した。

確かに、女神が出てきても不思議では無い案件であった。既に人死に出た。何より僕は現場を見た訳では無いけれど、軍の人間が逃亡を図る事も出来ず全滅させられるような相手であった。明確な情報は無く正体不明の相手。並の人間では太刀打ちできないと判断したのでらう。白の女神が直接動くのには充分に思える。

「と言う事は、今回の仕事は女神の共闘。もしくは護衛と言った感じですか？」

「そんなところじゃな。今回の件、小娘も気に入らなかったようで、自分が行くと言って聞かぬのよ。問題ないとは思いますが、正体不明の敵じゃしのう。お目付け役が欲しい。頼めるだろうか？」

「構いませんよ」

頷く。理由はどうであれ、正体不明の敵と言うのは気になる。魔物による被害と言うのは避けられないだろうけど、減らせるのなら減らしておきたい。勿論自分の手に負えないならその限りでは無いけど、そこまでの相手はそうそういないと思うし。今の僕が勝てない相手と言えば、ユニ位だろうか。これまでの経緯から泣かせた事もあって、勝てる気がしない。そもそもあの子と戦うなんて選択肢が無い。……勝てない方向性が違うか。

「そうかそうか。ならば安心じゃのう」

「なーーが、安心か！ 態々呼び出されたので来て見れば、女神の小間使いをやれだど？ ふざけているのか爺！」

「ちゅつ、その声は……!? オバハン!!」

唐突に執務室の扉が開き、黒き魔女が大臣を睨みながら入ってくる。ネズミ君が驚いたように声を上げるが、そこまで驚く事でも無かった。僕を呼び出したのはマジエコヌであり、目に見えない繋がりがあった。近くに居るのは何となく解っていたからだ。

「だーれーがーオバハンだ！」

「その計ったような絶妙な話し方！ 実年齢を考慮しない妙な服装！ 今時流行りそうにないケバイメイク！ 間違いなくオバハンっ

ちゅー！」

「おい、ネズミ！ 人を基地外みたいに言うのはやめろ！」

「むりっちゅ。本音を言うのはやめられないっちゅ!!」

「きつさまあ！ 消し飛ばしてやろうか。表に出ろ！」

「ちゅちゅー！ 態々消されるために付いて行く馬鹿はいないツちゅよー！」

マジエコヌが現れた途端、ネズミ君が目を輝かせながら弄り始めた。と言うか久々に会った知人に対して酷い言い様である。それだけ仲が良いと言うべきなのか、腐れ縁とでも言うべきなのだろうか、とにかくマジエコヌも怒ってはいるが攻撃する気は無いと思う。多分。

しかし、見れば見る程僕の知っている犯罪神とは違う。ネズミ君に

小馬鹿にされているのが、この世界の犯罪神だと言って、誰が信じるだろうか。いや、正確に言うなら犯罪神では無いのだけれど、僕の中でマジエコンヌは犯罪神の構図が出来上がっている為そう思ってしまうんだろう。

とは言え、この次元のマジエコンヌは見ての通り力の強い魔女ではない。悪ではあるが、世界の敵と言う訳では無かった。なら、それで良いじゃないか。嫌いと言う訳ではないが、どこか釈然としない自分にそう言い聞かせる。

「相変わらず仲が良いようだね」

「貴様は現状を見て、本当に仲が良さそうに見えるのか!？」

「険悪には見えないよ。気の置けない仲って奴かな」

「貴様の目は節穴か!」

くく、つと口角が緩むのを自覚する。確かに少し面白い。ネズミ君が怒涛の勢いで弄るのも解らないでは無い。が、話が進まないのを話を軌道修正する。

「全く、騒がしい奴らよのう」

「まあ、にぎやかで良いんじゃないかな。さて、マジエコンヌを含めて七賢人が三人いる訳だ。そのうち二人が女神の護衛をすると。七賢人としては気の利いた皮肉だね」

「全くじゃな。とは言え、お前さんからしたらそう悪い話でもあるまい」

大臣の言葉に頷く。今の僕の存在意義は、女神を護る事では無い。だけど、倒すと言う訳でも無かった。距離感さえ間違えなければ、敵対する必要はない。とは言え、寧ろ女神から仕掛けて来る理由はあるか。召喚者が七賢人だし。

「女神ホワイトハートの護衛と言ったところか。中々あくの強いチームだろうが、頼むぞ」

「解りました」

「おい。貴様ら、何勝手に話を終わらせているのだ! 私は女神の護衛などやらんからな!」

駄々をこねる大人が一人。まあ、七賢人の存在理由を考えれば気持

ちは解らないでもないけど、往生際が悪いと言うかなんというか。

「別にオバハンの協力なんてなくともどうとでもなるつちゆ。年増は年増らしく、観光でもしてればいいつちゆ」

「はっ、雑用如きが良く吼える。貴様に何ができると言うのだ？」

「ちゆちゆ。オイラだって七賢人ツちゆ。楽勝つちゆよ。まあ、オバハンにも後で何があったかぐらい教えてやるつちゆから、好きにすれば良いつちゆ」

「はん、良いだろう。そこまで言うなら見せて貰おうでは無いか」

さてどうなるのかと眺めていると、上手い事ネズミ君がマジエコンヌをその気にさせたようだ。黙って大臣と二人で成り行きを見守っていたが、結局マジエコンヌも参加する様だ。

「では、女神様を頼むぞ」

その結果に満足したのか、大臣は僅かに皮肉を織り交ぜながら言う。女神様ねえ。っと、マジエコンヌが呟いた。まあ、良い思いはしないだろう。

「女神は？」

「今日は準備をしている頃だろう。直ぐに連絡がいくと思う。何時でも出れるようにしといてくれ」

「ふん」

それ以上何か言う事も無く、小さく息を吐き捨てると部屋から出て行った。

「さてと、僕たちもいこうか」

「ちゆちゆ。オバハンにはああ言ったつちゆけど、戦うのは専門外ツちゆ。アニキに期待してるつちゆ」

「ああ、やっぱりフリだったんだ。まあ、それなら僕が頑張るさ」

それで話は終わりだった。直ぐにでも連絡がいくと言う事である。何時でも出れるように準備する為に、一度解散する事になった。

「ふうん。それで、こっちのブランさんと一緒に仕事する事になったんだ？」

「そうだね。ホワイトハート一人でも大丈夫だとは思うけど、一応僕たちも呼ばれた訳だね」

「女神の護衛ね……。と言う事は、お兄ちゃんが一緒なわけだ。あの時のアタシみたいに」

翌日。早速呼び出しが来た為目的地向かう途中、ユニが思い出しながら言う。あの時と言うと、女神を救出に向かった時の事だろうか。たった二人で敵陣に乗り込んだ時の事を思い出す。まあ、乗り込んだと言うか、忍び込んだ、だけだ。

「……アタシも付いて行くからね」

「ああ、うん。それについては了解したよ。まあ、ユニなら心配する事は無いけど……。無理はしないでね。今は女神じゃないんだから」

ついて来ると言い、隣を歩く妹分に視線を向ける。手にしているのはかつて見たライフルではなく、紅き銃剣だった。勇気ブレイブソールドの剣。僕がブレイブの力と自身の剣を用いて、ユニの為に遺した剣だった。想剣は犯罪神に打ち克つ為ノワールに遺したものだ。だからと言う訳ではないが、ユニの為に遺したのが勇気の剣だったと言う訳だ。僕にとって、二人とも大事な女の子であった。想いの質の差はあれど、二人とも妹の様に思える。ノワールもユニも、放って置けなかったから。だから、二人に一振りずつ遺す事にしたのだ。その片割れをユニは大事そうに抱えている。遺したものを自分で見ると言うのは不思議な感じである。

「アタシね。あの時言ったように、この剣をずっと使ってるよ。まだまだお姉ちゃんには勝てないけど、少しずつものに出てきてると思う」

「……そっか」

「ずっと、お兄ちゃんに見せたかったんだよ。あの時言った、お姉ちゃんを超えるっていう目標はまだ達成できてないけど、お兄ちゃんのおかげでこんなに強くなれたんだよって」

僕の目を真っ直ぐ見据えてユニはそんな想いを教えてくれる。それにどう答えるべきか。直ぐに言葉が出ずに、困ってしまった。そんな僕の手を取り、ユニは自信ありげに笑う。

「剣って言うと、お兄ちゃんはお姉ちゃん以上に凄いやね。ネプテューヌさんとお姉ちゃんの二人を同時に相手に出来たんだから」

「……あの時は必要があったからね。ごめんね」

「あ、別に責めてる訳じゃないよ。ただ、女神二人の剣戟を片手で捌いてた。本当に凄かったなつて。今でも思い出せるよ」

言葉の通り、責めると言うよりは本当になつかしそうでユニは零す。この子たちの前に敵として立ち塞がったころの話。ユニを含めたら三人の女神を相手に立ち回った。客観的に見ると、凄い事なのだろう。僕が異界の魂として与えられた力があつたから成し得た事だった。

「剣ではお姉ちゃんにもお兄ちゃんにもまだまだ追いつけてないけど……、それでもアタシはアンタに見て欲しい。だから、一緒にいくよ」  
「ああ、一緒に行こうか」

ユニの言葉に頷くと、それだけで上機嫌になったようで嬉しそうに頬を緩ませる。

「相変わらず、仲が良いつちゆね……」

「まあ、いつもこんな感じだよ」

話しながら歩いていた為、目的地にたどり着いた。それと同時にネズミ君がしみじみと呟く。その言葉を否定できる要素が見つからないし、そもそも否定する意味も無い。が、少しばかり気恥ずかしくも感じる。苦笑を浮かべながら同意する。

「あ、ネズミもいたんだったわね」

「最初からいたつちゆよ。そもそも仕事にいくつちゆからね」

「解ってるわよ。お兄ちゃんには負けるけど、アタシも結構強いんだから」

言外に大丈夫なのかと聞いてくるネズミ君に、ユニは余裕を崩さず答えた。神次元に来た影響か、ユニは女神化する事が出来なくなっていた。その為、戦闘力と言う面では幾らか弱くなってしまったが、それでも戦うには十分な実力と経験を持ち合わせている。これまでネズミ君がユニが戦える事を知らなかったのは、偏に僕が過保護だったからだろう。今のユニは普通の女の子である。女神と違い無理はで

きない。女神だから無理をして良いと言う訳ではないが、女神だった時以上に油断はできないと言う事である。だから、でき得る限り戦わせたくなかったのだが、本人に押し切られてしまったと言う訳だった。

ちなみに僕がこんな感じで心配をしているのを他所に、何故かユニは女神で無くなったことに対し樂觀的と言うか、嬉しそうなどころがある。一度女神でなくなったことについて聞いてみたところ、普通の女の子として過ごした事など無かったから、嬉しいとのことだった。それに少しだけ成長もしたし、つと心から嬉しそうに呟いていたのを思い出す。特段身長が伸びたと言う印象も無い。と言う事はアレだろうか。流石に聞く訳にもいかないので、妙な疑問を残す事となった。

「随分と賑やかな連中が選ばれたようね」

ネズミ君とユニのやり取りに目を向けていたところで、聞きなれない声が聞こえた。敵意も感じない為、ゆつくりと振り返る。最初に見た印象は、紅葉だった。紅白で彩られた和服に身を包み、同じく赤と白の帽子を被った女の子がそこに居た。彼女の着ている服は所謂巫女服に趣が似ており、落ち着いた声音もあってか、どこか澄んだ印象を受ける女の子だ。

「僕は四条優一と言います。貴女が女神様でしょうか？」

「ええ、そうよ。女神ホワイトハートこと、ブランよ。公式の場でなければブランって呼んで」

半ば確信しながら尋ねた。思った通り、目の前の女の子はルウィーの女神のようだ。かつて超次元で見たルウィーの女神を思い出す。国際展示場で5pb.のライブを強襲した時だっただろうか。あの時見た女の子に確かに似ている。彼女とはほとんど面識が無かったため、はつきりと覚えている訳ではないが、確かに面影がある。何処かあの時見た白の女神より疲れているような印象を受けるが、確かに目の前に居るのは女神だった。

「……、は、初めましてブランさん。アタシはユニって言います。よろしく願います」



「ちゅちゅ。ワレチユーっちゅ。大臣とは古い仲っちゅ」

「ええ、よろしくお願いするわね」

ユニがぎこちない感じであいさつを交わす。超次元のブランさんとは知り合いなのだろう。だからか、普通に挨拶しかけて言い直したと言った感じだった。幸いブランさんも初対面の挨拶であるためぎこちないのだろうと判断したのか、特に不審に思う様子も無く淡々と答えている。と言うか、神次元と超次元で若干ややこしい。呼び捨てなり、女神名なりで呼び分けする方が良いかもしれない。

「さて、聞いている人数に一人足りていないようだけど……」

「連絡は届いている筈なので、そろそろ来ると思えます。と言うか、近くには来ていますね」

「解るのかしら?」

「まあ、そんなところですよ」

ブランさんの言葉に頷く。そんなやり取りをしていると、漸く最後に一人が現れた。

「待たせたな」

黒の魔女、マジエコヌである。

「これで全員かしら? 遅い」

「オバハンの癖に重役出勤とは良い度胸っちゅ」

「せめてブランさんよりは早く来るべきよね」

「擁護する言葉が見つからない」

「ふん」

各々の言葉を聞くも、マジエコヌは悪びれた様子も無い。そんな彼女の様子に諦めたのか興味がないのか、ブランさんは深く追求する事も無く向き直るといった。

「それじゃ、行きましようか」

こうして女神と七賢人、別次元の女神候補生と紅き魂と言う、奇妙なパーティーが結成されたのだった。

## 挿話1

「しっかし、良く解んないやつだな」

そう呟いたのはクロワールだった。彼女が異界の魂たち三人の夢を結合した後、それでも異界の魂の望み為何なのか解らなかつた。それが気になって仕方が無いと言う訳である。どう言う事なのか。アイツは何を望んでいるのか。それが読み切れずにイライラしていると言う事であつた。

「全くなんで俺がこんなことでイライラしなけりやいけねーんだよ。納得いかねー」

そう言いながら、黒の妖精はラストイションにある想劍の元に来ていた。特段用事があつたわけでは無い。ノワールの視点で夢を覗いていた為、ラストイションに居た彼女がなんとなく向かつたと言うだけであつた。四条優一と言えば想劍である。最も彼に縁のあるものであつた。

「全くアイツは何を考えてんのか」

軽くぼやきながら、クロワールは想劍に触れた。意図があつたわけでは無い。だけど、かつて異界の魂の最期の戦いを見た時と同じ感覚に包まれた。そして、明確な映像を見た。見てしまった。

「なん、だよ……、これ。何なんだよ、この結末は」

アイツの事を知りたい。そんな些細な望みから、クロワールは想像していた以上の事を知る事になる。否、既に知ってしまった。それは、異界の魂が至る別の可能性だつた。

「行つちや、嫌だよ……」

「お願い……行かないで……」

未練を断ち切りその場を去ろうとしていた時、はつきりと聞こえた声に目を見開いた。弱々しく握られた手の暖かさに衝撃を受ける。自分は何を考えていたのか。一瞬でも馬鹿な事を考えていた自分に

呆れる。

「ごめんマジック。交渉は決裂だ」

両の手に、自身の能力を収束させる。勝てる勝てないでは無い。やると決めていた。消え入りそうな声、傷付きぼろぼろの手で、もう一度縫られていた。二度もその手を振りほどく事など、できる訳が無かった。

「何……？」

剣の極地。短く呟いた。それは多分、僕の行き着く先。与えられた力が漠然と示してくれる。自身の意思を示すかのように、自分の手を中心に願いの輝きが集まるのを実感する。怪訝そうなマジックの声が耳に届く。構わず勢いのまま手にした重みを振り抜く。彼女等は僕よりも格上だ。なりふり等構っている余裕は無かった。

「ぐう……、貴様！」

届かないと言うのならば、手を伸ばせ。制御できないと言うのならば、支配しろ。この身は既に人を越え、生死すらも超越した場所に立っている。家族と呼べるものは絶え、故郷に帰る事も叶わない。それでも、護りたいものだけは、この手の届く場所にあった。失くしたくは無かった。これ以上、失う事など耐えられる訳が無かった。

「此処で……、倒させてもらうよ」

宣言する。手にしていた重みに色が生まれた。それは漆黒。黒の女神が使っていた神器ともまた違う、一つの到達点。異界の魂である自身を象徴するような、一振りの剣だった。

「ソウ剣・異界の魂」  
スペクトラル・ソウル

手にするは漆黒。全てを呑み込む様な底の見えない深淵。自身の魂を能力を用い力に変え、その形を理想を実現する術に構築していく。背筋が凍り付くと錯覚するほどの悪感。対峙する紅の女神が、鋼の勇士が、黄色き狂獣が、自身を取り囲むようにして睨め付ける。敵意と相対する者達の持つ能力に対する脅威がはつきりと解った。どうなるだろうか。それ以上は考えないようにする。やる以外に道は無かった。

——ハードフォーム

「貴様……、その姿は」

「あなたがヒントをくれ、使い方は女神達が教えてくれたよ」

忌々し気に零すマジックの言葉通り、自身の姿は変質していた。黒を基調とし、幾筋かの白い光で彩られた外套を身に纏い、黒き翼を得ていた。脅威に対抗する為に得た力。女神たちの武器を模倣する過程で最適化して得た、いわば異界の魂専用のプロセッサユニット。元々この身は女神と同じくシェアで構成されていた。それも四人分の女神のシェアである。ならば、それを用いる事さえできれば、変身できない道理は無い。その為の力も女神達から与えられていたのだ。この力を手にするのも必然と言えた。

「四条優一、本当に我らに挑むと言うのか？　女神達を護りながら勝てる心算か。全員が本当に生き残れると思っているのか？」

ブレイブが、念を押すように問う。確かに彼の言う通り、僕の決意を動かした妹達を含め、女神は再び意識を失っていた。どう言う理由かは解らない。だけど、ギリギリのところ意識を取り戻し、心の底からの願いを伝えてくれたのだろう。その想いに答えられない訳にはいかない。僕は、異界の魂は、女神を助けるために呼び出されたのである。その願いを裏切る事など、あってはならないんだ。

「確かにね。僕一人で彼女たちを護りながら貴方たちに勝つ事は難しい。不可能かもしれない」

「ならば、今ならまだ間に合う」

「それは無理だよ、ブレイブ。僕はもう決めたんだ。それに」

「ええい、ブレイブ。そ奴はもはや吾輩らと敵対する意思を示しているのだぞ。取引は無効だ」

問いかけるブレイブをトリックが捲し立てる。最早僕にとっても彼らにとっても結論は出ていた。ブレイブの気持ちは嬉しく思う。だけど、それは僕が止まる理由にはなり得ない。

「護る必要が無ければどうにかなるかもしれない」

右手には魂を手にしていた。それが、全身を駆け巡るほどの強烈な衝動を放ち続けている。できる等と生易しい感覚では無い。未来すら見通せそうな程鋭い予感だった。確信。この世界に来て何度も

あつたそれを遥かに凌駕する感覚だった。

「構えろブレイブ、トリック。敵は……、女神の呼び出した可能性だ」  
マジックが小さく呟く。その音が、どこか遠く聞こえる。視界。色が褪せていくのを感じる。軽く目を閉じ呼吸を整える。刮目。世界が灰色に染まっていた。落ちていく。魂が剣の其処へ、可能性を手練り寄せる術として移り変わっていく。

「最初から、全力だよ」

宣言した。右手にしていた漆黒の剣。一度大きく宙を凧いだ。重さなど、感じる事は無い。この剣は文字通り自分自身なのだから。そのまま弧を描き、ゆつくりと自身の下へと戻し左手を添えた。剣の極地。両の手で握った魂から、その能力をより深く理解していく。

「」

ブレイブだろうか、トリックなのだろうか。何か言葉を発したような気がする。それも、この耳に届く事は無い。彼らは強い。だから、僕は自身の能力を十全に用いていた。斬ったのである。彼らの声を。同時に自身もこの場で音を失っていた。ほんの僅かな時間だが、この世界から音が消える。ぞわりとした悪感。既に何度も全身を駆け抜けている。漆黒の剣が、その刀身がシエアにより何処か輝いているように思えた。この手には祈りであり、魂であるも剣。背後には護りた人たちが居た。迷う事など……、無かった。

——ソウルドライブ

それは魂の限界を超える魔法。否、既に魔法なのかも解らない。数多くの記憶から可能性を手練り寄せ、魂が作り上げた呼吸だった。纏っていたプロセッサユニットから黒き輝きが零れ落ちる。それを一瞥し、敵を見定めた。

「くぎこぎ」

それは踏み込みだった。異界の魂がトリックに視線を据えた。同

時に迎え撃とうと態勢を整える。その時には既に黒き輝きはトリツクの全身を包み込み、数十、或いは数百の斬撃がその身を切り刻む。異界の魂が辿り着く頂にある力。それに女神の、妹の願いによって押し上げられていた。

「トリック!?!」

「ちいつ」

一瞬の交錯。ただそれだけで斬撃の嵐に巻き込まれたトリックは血飛沫を上げる。その特徴的な巨大な舌は五つに割かれ、見る者を圧倒する巨軀は速いと言う事すら生ぬるい程の速さで引き裂かれていた。反応すらできず切り刻まれたトリックは思わず絶叫を上げる。それでも四天王の矜持故、意識を飛ばす事は無い。それどころか、視界はしっかりと異界の魂に据えられている。驚きに声を上げるブレイブ。マジックは見えてはいたが、動く事が一瞬遅れた事に舌打ちを打つ。プロセツサユニットを全力で稼働させ、異界の魂を討つ為肉薄する。

「がぎ、ぬううううああ!!」

「これは……」

その直前、トリックは怒号を上げた。死に際の雄叫び。魂の咆哮。恐るべき速さで舌を再生させたトリックが、その舌を以て異界の魂を絡め取る。流石の四条優一も予想外だったのか、一瞬虚を突かれ上半身を絡め取られた。そのままトリックの下へ引き寄せられ、巨軀を以て取り押さえられる。それでも驚きこそすれ、異界の魂から焦りの色は見受けられない。

「こ、こやつは危険すぎる。撃て! マジック、ブレイブ!!」

そんな異界の魂の様子を気にする余裕も無いトリックは全霊の叫びをあげる。自身が巻き添えになると言う事など考慮すらしていない。ただ一撃。それだけで異界の魂の脅威を認識したトリックは仲間を警告を発する。

「すまない。だけど、僕は負ける訳にはいかないんだ」

切実な叫びを聞いた四条優一は少しだけ辛そうな表情を浮かべるも直ぐに目を閉じる。シェアが収束する。ブレイブとマジックはビ

リビリとした圧力を感じた。世界が塗り替えられていくような異質な感覚。異界の魂が手にしている漆黒だけが、輝きを増しその存在を主張していた。

「しかし」

「アポカリプス・ノヴァ」

「マジック、貴様何を」

躊躇うブレイブを他所に、マジックは冷酷にもその力を解き放った。異界の魂とトリックの全身を強大過ぎる紅き女神の力が包み込む。ブレイブが声を上げる。それでも無情な一撃は解き放たれる。紅き衝撃。トリック毎吹き飛ばす為、紅が弾けた。剣が舞い降りる。砂塵と爆炎が視界を埋め尽くした。

「ぐうああああああ!!」

絶叫。爆炎の中から、トリックの悲鳴だけが木霊する。同時に凄まじい程の轟音が辺り一帯を響き渡った。肉を焦がす焼けた匂いと、それ以上の血生臭い香りが辺り一面に広がっていく。

「おい、マジック!」

それでも尚視線を微動だにせず大鎌を構えているマジックにブレイブは声を荒げる。マジック・ザ・ハードの全力。黒の女神に打ち込んだ一撃よりも遥かに強力な技を味方ごと放った事にブレイブは怒りの声を上げた。

「ブレイブ、構えろ。でなければ我らは……死ぬぞ?」

「なっ!?!」

紅の一撃により舞い上がった爆炎と砂塵が収まり、やがてトリックの姿を認識する。それは、剣だった。数十数百の数多の剣が、異界の魂毎トリックの全身に突き刺さっている。剣山。文字通りそう称すべき姿に成り果てた同胞を前にブレイブは息を呑む。焼き焦げた茶色く変色した肉片が、数多の剣の激突に耐えきれなかったのか、その身を切り分けるかのように散らばっている。

「認めよう。我らが戦う相手は……女神以上の化け物だ」

「っ、ああ。この能力、我らが目的の前に最早捨て置けん」

変わり果てた仲間の姿を目の当たりにしたブレイブも、覚悟を決め

る。マジックも異界の魂を見据えていた。変わり果てた姿のトリックに抱きしめられるように拘束されていた異界の魂。自身もその身が数多の剣で貫かれていたのである。動ける訳が無い。生きているはずが無い。そんな有様で死なない人間など居る筈が無い。そうわかっていながら二人が戦闘態勢を解く事は無い。何故なら

「化け物……か。そうだね。その通りだ。とは言え、そんな呼び方をされてうれしい事など無いけど……」

最早対峙する異界の魂は人間と言う規格から逸脱しているのを知っていたから。全身を自身が呼び出した剣に貫かれ、頭部や胸部を血に染め、片腕を失いながらも一切の動揺を見せず二人の幹部を真っ向から見返す。これが、もともと人間だった存在なのか。そんな恐怖にも似た感情がブレイブを襲う。対照的にマジックは深い笑みを浮かべた。

「面白いぞ、異界の魂。いや、四条優一。それでこそ私が認めた男」  
「マジック、あの時と同じと思わない方が良い。此処で貴女を仕留めさせて貰う」

狂喜を浮かべる紅の女神に、満身創痍でありながら異界の魂は余裕を崩す事は無い。狂っている。ブレイブは漠然とそんな事を思う。どちらかが、あるいは両方なのか。それすらも解らないが、確かにその場は狂気に満ちはじめていた。

「殺しあおうか、異界の魂」  
「いいや、殺し合いでは無いよ」

紅の女神がプロセツサユニットを稼働させ、ブレイブですら視認できないう程の速さで肉薄する。斬られる。そう思った刹那、砲撃が直撃したと錯覚するほどの衝撃が吹き抜ける。気付けば、異界の魂は右手にしていた漆黒を以て紅の女神を迎え撃っている。

「嗚呼、そうだ。貴様はすでに死んでいる。この戦いで死ぬ者がいるとすれば……、それは私だけだ!!」

「肉体が消滅し、魂だけの存在。それが僕だ。君に僕が殺せるのかな？」

紅き斬撃の壁。そうとしか思えないほどの質量を以て紅の女神は



襲い掛かる。その全てを片腕で打払いながら異界の魂は問いかける。線と線がぶつかり合い、互いの斬撃の軌道を追うように火花が散った。

「殺してやるさ。我がが目的を阻むと言うのなら、何十何百だろうと、私がこの手で引導を渡してやろう！」

「……ふ、はは。……それでは僕は殺せないよ。もう、痛みや恐怖を感じる事も無いからね」

「だろうな、それがどうした。死なないと言うのなら、抵抗する事が出来なくなるまで切り刻むだけだ」

「無理だよ、マジック。もう無理なんだよ」

狂気に染まった瞳と、諦念に塗りつぶされた瞳。その二つがぶつかり合い、言葉を交わす。漆黒と紅の軌跡。二種類の色が交わる点が、やがて紅に染まっていく。異界の魂は片腕を失っていた。手数や膂力の上で、紅の女神が優位に立っていたからだ。

「この程度なのか、化け物？」

「まさか。そんな訳は無いよ」

紅の女神の問いかけに、異界の魂は刃と共に返答する。

「良いだろう。ならばお前の力、私に見せてみる。アポカリプス」

閃光ともいえる斬撃を掻い潜ったマジックは、漆黒の刃を打払いがら空きになった胴体に向け、紅の魔力を収束した。解き放たれる紅の衝撃。その威力を身をもって知っている四条優一は、それでも薄い笑みを崩す事は無かった。

「ノヴァー！」

「見せて……上げるよ」

紅の衝撃が迸る直前、一瞬の刹那。異界の魂が眩くと同時に、切り落とされたはずの腕が瞬時に再生し紅の女神に襲い掛かる。

——S・O・C

蒼き大剣。天魔の王の能力を制御する為に作られた神器。シエアでできていると言う仮初の体を分解再結合させ、手にしてた。

「っ、ぐう!?!」

大技が直撃する瞬間。さしものマジックも僅かに反応が遅れその

身に斬撃を受ける。だが、異界の魂の損傷はその比では無かった。

「マジック!？」

「まだだ、ブレイブ。この程度では、殺せはしない」

マジックの一撃により吹き飛ばされた異界の魂を一瞥し、ブレイブはマジックの傍による。完全に圧倒されていた。それでも対等にぶつかり合ったマジックに畏怖にも似た感情をブレイブは向ける。知識としては知っていた。だが、理解の許容を越えていたのだ。確かに化け物であった。全身を刃で貫かれ片腕を切り落としても平然としていた。その姿は歴戦のブレイブを以てしてでも戦慄を禁じ得ない。

「しかしここまでやれば……」

「殺せは……しないのだ」

まだ終わっていないと言うマジックの言葉に、ブレイブは意を挟もうとして、口を噤んだ。言葉を失ったからだ。殺せないと言いながら、歓喜を浮かべる血まみれのマジックに。

「解っているぞ、異界の魂。その程度で貴様が死ぬなら、先ほどトリックを殺した時点で死んでいるだろう」

マジックは狂気を浮かべたまま、吹き飛ばされた上半身に向け声を掛ける。マジックの傍らには衝撃により遺された下半身だけが血を赤く染め、生々しい色を残しながら転がっている。マジックの一撃で異界の魂は二つに分かれていた。それでも尚、マジックは殺せはしないと確信していた。そのまま紅き力を解き放ち、下半身を消し飛ばした。

「……自分の体が消し飛ばされるのを見るのは良い気がしないね」

「ふん。死者が何を言うのか。貴様にとって体など、形にすぎぬのだろう」

「それでも僕は人だったからね。価値観はそう変わりはないさ。尤も今は化け物……か」

そのまま異界の魂を見据えた。上半身だけだった四条優一の体に下半身が再結合し、その場に立ち上がる。再びゆっくりと漆黒と蒼を構えた。マジックも異界の魂も、何事も無かったように言葉を交わす。そんな異様な状況にブレイブは思考が追い付かない。

「貰うぞ」

一足飛び。再び戦闘態勢に入った異界の魂に、紅の女神は先手を掛ける。紅の凶刃。風を裂き、首を駆る為に迫る。

「それは僕の台詞だよ」  
「っう」

その刃を完全に無視し、異界の魂はマジックに向け刃を振るう。紅き刃が異界の魂の頭部を切断し、鮮血が吹き散らばる。それでも刃が止まる事は無く、なお加速してマジックを斬り裂く為に弧を描く。ギリギリのところまで後退し、同時に大鎌を引き寄せ斬撃を柄で受け止める。かろうじてだが、マジックは強襲を凌いでいた。

「ここまで化け物だとは……な。予想外だ」

「そうだよ。君以上の化け物だ。とは言え、未だに底が見えない。マジック、君も大概だね」

刹那の攻防が終わった時には既に異界の魂の頭部は再結合していた。マジックの言葉の通り、化け物と言うに相応しい光景だった。血が吹きこぼれ、内臓が飛び出したとしても平然としているのだ。おまけに半身が吹き飛ばうとも、何事も無かったかのように蘇る。全身から己の血を滲ませ、それでも薄い笑みを浮かべている。これを化け物と言わず何と言えようか。

「ふん。有りがたい事だな。愛した男に褒められる。これ程嬉しい事も無い」

「君は相変わらず面白い事を言うね」

「貴様も大概では無いか。化け物らしくつがいにもなるか？」

「残念だけど、僕は君を倒さなければならぬ。斬らせてもらうよ」  
「それは……、残念だ！」

三度漆黒と紅が切り結ぶ。両者ともに先程よりもなお加速していく。軌跡が閃光となり、音すらも追い抜き加速していく。黒と紅の閃光がぶつかり合い、弾け、再び鎧を削る。地を蹴り、空を駆り、縦横無尽に駆け抜ける。

「これをどう捌く？」

何度目かのぶつかり合い、異界の魂を蹴り飛ばし距離を取ったマ

ジツクが紅の魔力を連続して射出する。機関銃も凌がんばかりの速度で連射される紅弾。数百を超えた紅弾が空を駆る異界の魂に迫る。優一は正面に見据えると、両の手に漆黒を握り締めそのまま速度を落とさず加速する。

「この程度」

そのまま自身に直撃するもののみを斬撃で軌道を変え、肉薄する。紅の魔力が霧散し、異界の魂を紅く染め上げる。それを見詰めたマジックは歓喜の笑みを浮かべ紅弾の弾幕を更に濃くする。

「まだまだ増えるぞ」

「そのようだね。ならばこちらも手の内を見せようか」

迫る紅弾の質量に押され始めた優一は、手にする漆黒を強く握りしめ能力を解き放つ。

—— 剣の極地

瞬間、異界の魂の傍らを追従する様に数十、数百の剣が現れる。それはさながら剣の陣だった。一瞬目を剥くも、深い深い笑みを浮かべる。

「来い！ 異界の魂!!」

「……………ごめん」

紅弾と剣陣。その二つが唸りをあげぶつかり合う。紅き力と剣の極地。似て非なる力がぶつかり合い、勝者を明確に分けた。マジック・ザ・ハード。紅弾の幕を潜り抜けた剣が深く深く突き刺さる。

「がつ……………ぐが、ぎ……………」

一振りが紅を貫いた。その流れを断ち切る事無く、刃が襲い掛かる。マジックの体に剣の山が出来る。

「ブレイブカノン!!」

そのギリギリのところまで吞まれていたブレイブが動いていた。山すらも吹き飛ばす事が出来そうな強大な砲撃が、質では無く量を求めた剣陣を吹き飛ばしていた。そのまま砲撃は異界の魂に飛来し、直撃した。

「……………少し熱くなりすぎた、ね」

上半身を消し飛ばされた異界の魂が、その身を再結合させると追撃

の手を止め眩いた。完全にマジックを仕留める為に能力を振るっていた。気付けば、女神を救うと言う目的が、マジックを倒すと言う事に入れ替わっていた。皮肉にもブレイブが優一を倒すために放った一撃は、本来の目的を思い出す為に一役買ったと言う訳だった。右手にした漆黒の剣、スペクトラル・ソウル異界の魂。強く握り、その能力を自身の元へ戻した。

「見逃してあげるよ」

「……何の心算だ、異界の魂」

唐突に零した異界の魂の言葉に、ブレイブはマジックを抱え問い返す。あと一押しのところまでマジックを倒せるところをブレイブに邪魔されていた。それでも、押し切れないほどでは無かっただろう。事実ブレイブには異界の魂の攻略法が思い浮かばなかった。愛剣を突付けたまま問う。

「言葉の通りだよブレイブ。僕は君にもマジックにも見逃された事がある。だから、今回だけは見逃すよ」

「それを信じろと？」

「ああ。女神全員を救出し、犯罪組織の幹部も二人倒した。十分の戦果だ。それ以上望む事は無いよ。それともまたやるかい？」

訝しげな様子のブレイブに優一は困ったように告げた。その姿は先程まで対峙していた化け物とは思えない。ブレイブは息を呑む。そんな様子に、異界の魂は無造作に一振り剣を創り出すと、おどけた様に言った。

「……礼は言わん」

「ああ、借りを返したただだからね。次は倒すよ」

「その言葉、そのまま返させてもらおう。次は、俺たちが勝つ」

とは言え、選択肢は無かった。このまま戦えばブレイブに勝機は無い。異界の魂が殺せない以上、その言葉通り退く以外に選択する余地が無かった。短く告げると、その場を消えていく。その背を優一は見送ると、深く溜息を吐いた。

「退いてくれて良かった」

眩き、女神の傍まで来ると、その場に崩れ落ちる様に座り込む。剣

を地に付き刺し、両手でもたれ掛かる事で何とか倒れ込む事を防いだが、不死者である優一もまた消耗していたのだ。

視線を動かす。傍に女神達が倒れている。何とか彼女らを見据え、言葉を紡ぐ。

——月光聖の祈り

倒れている女神達に癒しの魔法を施した。

「あ、れ……」

「ううん……此処は……?」

比較的マシな方であったのだろう。一瞬だが意識を取り戻した黒の姉妹が、最初に目を開けた。全身を襲う倦怠感や痛みに顔を顰めながらも、何とか立ち上がろうと膝をついた。

「ユニ……?」

「お、姉ちゃん……!」

そして二人して視線が合ったところで驚きの声を上げる。

「ユニ!? 良かった……。本当に、良かった……」

「あう、い、痛いよお姉ちゃん……」

ノワールがユニを抱きしめる。状況は良く解らない。だけど、最愛の妹が再び自分の元へ戻ってきてくれた。これ程嬉しい事は無いだろう。

「良かった。本当に……」

そんな呟き。聞き覚えのある声音に、二人は声のした方向を見る。そこに居たのは全身に血を浴び、息も絶え絶えの様子で辛そうに、だけど嬉しそうな笑みを浮かべた四条優一だった。

「ユウ、ちよつと大丈夫なの!」

ノワールが慌てて傍に駆け寄る。その姿をユニは呆然と見つめていた。

「また、助けられたんだアタシ……」

呟き。ユニは自身の胸に自然と手を当てていた。様々な感情が浮かんでは消える。それが何なのか解らない、だけど、どうしようもない衝動に駆られていた。

「ユウ!」

良く解らない想いのまま、ユニは友達に向かい駆け寄るのだった。

## 挿話2

全ての女神が解放された。そんな女神を信仰する者達にとって歓迎すべき噂が飛び交うのに、それ程の時が掛かる事は無かった。国際展示場での取引から一日。今は個人的な都合により、ラスティシヨンの教会でお世話になって居た。戦いが終わった直後、未だ全ての国に女神が戻ってすらいらないと言うのに、彼女たちの安否が各々の国に知れ渡っているようであった。あの後目を覚ましたアイエフに確認を取ってもらったところ、既に四国共にお祭りムードである様だ。喜ばしい事ではあるけど、その情報の周りの速さには素直に驚いてしまう。一度女神が帰還したルウィーだけならいざ知らず、プラネテューヌやリオンボックスでも大きく取り上げられているようだ。勿論ラスティシヨンも喜びに沸いているが、どちらかと言えば他の女神を救出した国と言う意味合いが強い。

「何とかなったから良かったもの……」

「どーする気だよ？」

「……ん。相変わらず神出鬼没だね」

女神たちの解放に湧く各国。僅かにだけ感じる事が出来るシェアの感覚に、自分の成した事を実感していたところで不機嫌そうな声が届いた。何となく来る気はしていた。クロワール。僕がこの世界に居る理由を全て知る、唯一の存在だった。

「俺の事はいーんだよ。ユーイチ。完全に犯罪組織と袂を分かっ事になっただぞ」

「解ってるよクロワール」

「いいや、解ってねーよ。お前は全然わかってない。お前が選んだ道に未来はねーんだぞ？」

僕に言い聞かせるようにクロワールが続ける。犯罪組織と戦い、犯罪神の脅威を排除する。それを成してしまえばこの身に誓約が無くなり、元々いるべき場所に戻される。それが僕の至る結末だった。だからこそ、クロワールの言葉をやんわりと遮る。

「未来ならあるさ」



「なんだと?」

「少なくとも、僕が望んだ未来は手に入れられる」

確かにクロワールの言う通り、犯罪組織につかずこのまま行けば四条優一には未来が無い。それは動かす事の出来ない事実である。だけど、望んだ未来ならば迎える事は難しくなかった。

「……なら、お前は自分が消えたって良いって言うのかよ? 利用されるだけ利用され、捨てられても構わないのかよ?」

「違うよ、クロワール。僕は僕の意味でこの道を進むんだ。誰かの都合に抗えず利用されるわけじゃない。選択肢が他に無かった。確かにそうだよ。だけど、同時に最も選びたい選択肢でもあったんだ」

「違うだろ!? その道を選んだら死ぬしかないんだぞ……。恨めよ。憎めよ。この世界はお前を殺そうとしているんだぞ! それで、良いのかよ。お前はそれで……。満足できんのかよ。許す事が出来るって言うのかよ」

黒の妖精の頬から光るものが零れ落ちる。嗚咽。小さな手で涙を拭いながら、彼女は叫ぶように問いかける。嗚呼、つと思に至る。何時だったか、このままで良いのか? つと彼女に聞かれた事があった。その時にも思った事だけど、この子は僕が思うよりも遥かに責任を感じていたのかもしれない。愉快犯で天邪鬼で、面白い物さえ見れば良いと言っていた。確かにそれはクロワールの本質なのだろう。だけど、それだけと言う訳でも無いのだと理解する。怒っているような声音で有りながら、縋る様に僕を見詰める瞳を見てしまったら、百の言葉を聞くよりも切実にこの子の想いが解ってしまうのだ。

「……俺が面白半分で異界の魂召喚の儀式なんて持ち込まなければ、お前は死ぬ必要なんてなかったんだぞ。恨めよ。憎めよ。お前の所為だつて、言ってくれよ……」

辛かったのだろう。クロワールは様々な次元を見て、その歴史を記してきたと言っていた。その為、様々な人を見たのだろう。この子が歴史に介入した事によって、良くなったことも悪くなったこともあるのかもしれない。だけど、今回の様な特殊なケースで、それも個人に介入した事は無かったのだろう。お前が死ぬのは俺の所為なんだ

よ、つと涙を零すクロワールを見ると思い至った。

「苦しいんだよ……。人が死ぬのは何度も見た事がある。女神が死ぬのだから数えきれないぐらい見て来た。だけど、次元すら関係ない場所から呼び出された奴が、誰にも本心を語る事も出来ず、利用されるだけ利用され最後には殺される。そんな結末が見たかったわけじゃねーんだよ」

「違うよ、クロワール」

「何が……。違うって言うんだよ……」

泣きながら睨んでくるクロワールにゆっくり語り始める。僕には本心を全て語る事が出来る相手が、たった一人だけ存在しているのだから。

「僕には本心を語る事が出来る友達がいるよ。誰にも本心を告げる事が出来ず、利用されるわけじゃない」

「そんな奴……。何処にいるって言うんだよ……。女神か、候補生か？」

癪癪を起しながら泣き続けるクロワールをあやししながら、小さく首を振る。確かにユニ君やノワールも大切な友達である。だけど、僕がすべてを語る事が出来る相手はたった一人しかいないんだ。

「君だよ、クロワール」

「……。俺？」

「そうだよ、クロワール。僕が何故この世界にいて、どんな事を思い、どうして戦うのか。その全てを偽る事無く語ることが出来る相手に、君がいてくれるよ。だから僕は誰にも想いを託せないわけじゃないんだ。君がいてくれる」

僕が呼び出される原因であるからこそ、クロワールはすべての事情を知っていた。本当に彼女が刹那的な愉快犯ならば、僕が呼び出された時点でそれ以上接触する必要はないはずだ。それなのに彼女は様々なことを知っていた。それは、それだけ僕のことを機にかけてくれたということだから。思うところは色々ある。だけど、単純にこの子を憎むと言う事はできそうになかった。

「お前は解ってねーよ。俺には、そんな資格はないんだ。俺は、お前が

死ぬ事になる原因なんだぞ。最も恨まなきやいけない存在じゃねーか。俺が居なければ、お前は苦しむ事なんてなかったんだよ」

初めて出会った時、クロワールは僕に、自分は全ての元凶だと語っていた。にも拘らず、何故か嫌いになり切れなかった。今だからこそ思うけど、それはもしかしたらこの子の様子から何かを感じ取れたからなのかもしれない。根拠など無い。だけど、そう思ってしまうのだ。

「そうだね。だけど、君がいなければ僕は死んだままだったよ。希望が持てず、ただ漫然と死んでいないだけの日々。元の世界ではどうしようもなかったその状況から、君は僕を救ってくれもした」

「っ、そんなの結果論じゃねーかよ」

「だけど、事実だよ。君がいたから光が見えた。新たな出会いがあり、友達と呼べる人達とも知り合う事が出来たんだ。ゆるやかに死んでいくだけだった心を、君が助けてくれたんだ。何より……」

「なんだよ」  
一度言葉を切る。気付けばクロワールの瞳から涙が止まり、ただじつとこちらを見詰めている。

「君も僕にとつて、大事な友達になってしまったからだよ。今更憎むなんて事、出来ないかなあ」

だから今の気持ちを素直に伝えていた。この子と知り合い、長いとは言えないけれどもそれなりの時間が経っていた。今更憎めなどと言われても、無理なものは無理なのだ。

「……つく、はは。何だよそれ。緊張感がねーな。お前、馬鹿なんじゃねーの？」

「酷い言われようだね。けど、不思議と君には怒る気が起きないね」

小さく、ほんの少しだけクロワールが笑みを浮かべた。何時もの生意気な感じでは無く、本当に嬉しそうな微笑だった。照れ隠しに悪態をついているが、それが解ってしまう為気にはならない。

「良いぜ。俺が全部覚えておいてやるよ。異界の魂が、ユイイチがどんな想いを抱いていたのか。例えば女神や候補生たちが知らなかったとしても、俺が全部覚えていてやる」

「そっか。嬉しいな。誰にも言う事が出来ないと思っていた事。それを受け止めてくれる人が居る。これで僕は、思い残す事無く全力で戦える」

好きな人と言えば、ノワールやユニ君だろう。だけど、尤も信用できると言えばクロワールなのかもしれない。ただ一人、僕が何も嘘を言う必要が無い相手だから。言うならば、相棒みたいなものだった。

「一つだけ、約束してくれ」

「約束、かな？」

「ああ約束だ。俺には嘘を吐くなよ。それだけは、守ってくれ」

「……解った。約束するよ」

思わず苦笑する。嘘を吐く必要が無いと思っていたところで、嘘を吐くなど念を押されたから。この子にだけは、偽る必要は無かった。僕が死んでいるという事実すら、知っているのだから。それはある意味、最も素直になれる相手と言う訳でもあった。ノワールにもユニ君にも言えない事はあるけど、クロワールにだけは遠慮する必要が無いのだから。

「俺は……、お前の友達か？」

「ああ、友達だよ。大切な、友達だ」

「そうかよ。ふふ、ダチ、かあ」

一度確かめる様に聞いて来たクロワールに頷く。この子は僕が最も素直でいられる友達と言えた。そう伝えたと、吹っ切れたような笑みを浮かべたのだった。

「こんなところでしょうか」

そう控えめに呟いたのは、柔らかな笑みを浮かべながらもどこか鋭い眼差しを持つ男性だった。以前ブレイブと対峙した時に知り合ったガナツシユさんだ。ラストイション教会直属の研究機関、アヴニールの主任を務める人物で、場合に寄っては教会の一員として様々な事を手掛けるのだとか。実際、本職以外の分野でも有能な様で、教祖の助手を務める事もあると聞く。一応知り合いとは言え何故僕がそんな

人と一緒に居るかと言えば、何と云うべきか、我ながら締まらない理由であった。

「……着なれていない所為か、服に着られている感じがしますね」

「礼服などそれ程着る機会ありませんよ。着ている当人は違和感を感じるかもしれませんが、充分似合っていますよ」

自分の服装を選べなかったからである。とは言え、仕方が無いと思う。女神が開く式典と云うかパーティだった。国主に当たる人物が開く晩餐会である。出席者にはそれなり以上の服装が求められるだろう。それを選んでもらっていると言っているところであった。

「不参加と言う訳にはいきませんよね？」

「あり得ませんね。女神を救い出した張本人がいない状態で解放を祝う等有り得ませんよ」

「……ですよ。胃が痛くなるなあ」

出来る事なら参加したくないのだけど、そう言う訳にはいかないのだろう。全ての女神の解放宣言と言う事だった。ラストイシヨンの女神を救い出した時にも英雄扱いされたようだけど、今度成した事はそれ以上だった。主役が居なければ始まらないと言うのが教会側の言い分だった。

「それに雲隠れしたら、お二人に恨まれますよ。恨まれると云うか、泣かれるかもしれませんね」

「……それはそれで嫌ですね」

何より、ノワールとユニ君たつての希望だった。出ない訳にはいかない。お願いされて嬉しくないと言う訳では無いけど、立ち位置が立ち位置である。複雑と言わざる得ない。救世主とか英雄とか言われなくても、戸惑ってしまう。全てを自分の力だけで成したというのなら胸を張ることもできるけど、僕の能力の大半は異界の魂として与えられた物だった。それを知っている人は殆どいないだろうが、それでもきまりが悪いのだ。自分の元々持っていた力と云うと、眠っていた魔力だけだろう。そう考えるとズルをしているようで、少しだけ後ろめたいと言える。

「解りました。善処はさせて貰います」

「ええ、そう言つて貰えると思つていました」

「……、出来る限り話さなくて良い様をお願いします。人前で話せと言われても、自信がありませんので」

結局、頷くしかなかった。とは言え、女神主催の席である。どう樂觀的に考えても、話せと言われて上手く話せる気がしない。戦う事は出来るようになっていたけど、そういう事に関しては特別強くなつている訳では無かつたからだ。

「流石に話せと言われても酷でしょうしね。出て貰えるだけで充分です。貴方には女神とは違う意味ですが、価値があるのですよ。居るだけで、ある種の拠り所になる」

「僕が人だと言う事でしようか？」

「ええ。人も女神の隣に立つ事が出来る。それは多くの人の希望になりますよ。尤も、良い事だけではありませんが」

ガナツシユさんが、何処か皮肉気に続けた。希望に成り得る。けど、同時に欠点もあると言う事だった。人でありながら、女神の隣に立てる。それはつまり、女神と対等になれると言う事だ。そして、それは突き詰めてしまうと女神の存在の否定につながるという事だろうか。

「人では女神の隣に立てませんよ」

「しかし貴方は人間だ」

「そう、見えるだけです」

「見える、と言う事が重要なのですよ。人々にとっては理屈よりも、目に見える解り易い結果が大きいのです」

実際のところ、僕は人間では無くなつていた。だけどその事実はまだ重要では無いようだ。少なくとも、犯罪組織が倒されるまでは、人々にある種の希望を与えたい。そう言う事なのだろう。

そして、脅威を退けた時、異界の魂の存在意義も消える。そこまではガナツシユさんも知らないだろうけど、そう考えると実に都合が良い様に思える。無論、都合が良いと言うのは僕にとっての話ではないけど。

「色々考えているんですね」

「ええ、そうですね。そしてそれをある程度貴方は理解しておられる」「買いかぶり過ぎですよ」

小さく笑っていた。多くの事を見通せる訳では無いけど、徐々に女神たちの方に流れが来ているように思えたからだ。

賑やかな喧騒だった。女神主催の晩餐会。大がかりな式典も終わり、今は来賓の方々が思い思いに食事や飲み物を手に談笑している。ラストイションで行われた、解放記念パーティーとでも言えば良いのだろうか。今はその最中であつた。

幸い、式典の方では自分が心配していたような宣誓のような事も無く、女神の前、と言うかノワールとユニ君の前で跪き、薫陶を授けられたと言つたところだろうか。名前を呼ばれたところで立ち上がり、言葉をかけられたと言つた感じであつた。正直なところ、そう言う場面は得意ではない為緊張していた所為か、言われた事があまり頭に入っていないのだが、式典も終わり満足そうな笑みを浮かべていた姉妹を見ると、失敗はしていないのだろうと思える。

「……柄じゃなかつたしね」

果実酒を片手に一人ごちる。やはり自分には人前で何かをしようと云うのは性に合わないようだ。大きな失敗こそしなかつたので良しとしておく。

晩餐会に移り、端の方に行く事が出来たので、一息つけたと言つたところだった。ノワールやユニ君は、未だに来賓の人々に囲まれ、柔らかな笑みを浮かべ談笑を続けている。僕の方も最初はある程度の人が声を掛けてくれたけど、今は随分と落ち着きのんびりとしているところだった。

「ノワールやユニ君は凄いなあ……」

「そうかしら？ 私にはあなたの方がずっと凄い事を成し遂げたと思うけど？」

「ええ、そうですね。瀕死の女神7人を救い出した。そんな殿方は前代未聞ですものね」

遠くから見詰めていて、どことなく寂しいなっと思っていた時に出た眩きに答える声があった。予想外なソレにほんの少し驚きながらも、音の届いた方に視線を向ける。そこに居たのは、純白のドレスに身を纏った女性と翠色のドレスを着た女性だった。

「お二人は……」

声では解らなかつたけど、一目見ただけで誰か解った。白の女神と緑の女神だった。名前はブランさんとベールさんだったか。助け出した当初はそれどころでは無かつた為あまり話す機会は無かつたけど、確かに救出した女神様だった。

「簡単な挨拶はしたけど、改めて挨拶させてもらおうかしら。ルウイーの女神ホワイトハートこと、ブランよ。遅くなってしまったけど、貴方にはとても感謝しているわ。ありがとう。私と妹を救い出してくれて……」

「同じく女神でリーンボックスを統べるグリーンハートこと、ベールですわ。わたくしからもお礼を申し上げます。リーンボックスには女神がわたくししかいませんので、四国の中でも一番切実な問題だったと思いますので幾ら感謝しても足りませんわ」

静かに見つめる瞳と、穏やかに眼差し。性格は大きく違うけど、どこか似た雰囲気を持つ二人の言葉に一度頷く。

「気にしないでください。貴女達を救い出す。まず最初にやるべき事でした。それが上手く言っただけですよ」

「あら、随分と謙虚なのね。もう少し胸を張ってもバチは当たらないと思うけど?」

「言葉にするのは簡単ですが、実際に成すのは天と地ほどの差がありますわ。そして貴方はそれをやってのけてしまわれた。それは誰にでもできる事ではありませんのよ」

「…それでもですよ。……それが、僕の存在意義ですからね」

「存在意義、でしようか?」

二人の純粹な感謝と賞賛にばつが悪くなり、眩いていた。女神であ



る。異界の魂について語る事が出来る相手だった。

「ええ、異界の魂。貴女たちなら、それが何か知っているでしょう？  
それが僕です」

これまでは迂闊に話す事が出来なかった。だけど、彼女たちは別  
だった。異界の魂と言う存在を知っている。話す事については、それ  
程抵抗は無い。

「……貴方が？」

「……成程。確かにそれなら犯罪組織と事を構える事が出来る人間離  
れした力にも領けますわ」

「異界の魂は世界を制する能力を得る。その能力は……、神をも凌ぐ」  
「それも、四人の女神のシェアによって呼び出されたときている」

「その力は、計り知れないと言う訳ですわね」

疑われるかと思っていたが、寧ろ納得したと言わんばかりに二人は  
頷いた。少しばかり拍子抜けだけど、此方としても肩の荷が下りたと  
言うところか。

「兎も角、僕は貴女方の味方です。祈りの力によって呼び出された者  
ですよ」

「そう……。異界の魂は別の世界から人を呼び出す秘法。……貴方に  
は辛い事を押し付けてしまったようね。ごめんなさい。それと改め  
てお礼を言わせてほしいわ。ありがとう」

「呼び出された貴方からしたらたまったものでは無いかも知れませんが、  
呼び出されたのが貴方でわたくしたちは幸運だったと思います。  
ありがとうございます」

二人の女神が頭を垂れる。その様子に少し驚く。

「気にしないでください。僕にとつても……」

「あー！ やつと見つけた！ ふっふっふ、なんかいい感じにシリア  
スをやろうとしている所で、わたし、見参!! 番外にて漸く私にス  
ポットライトが浴びる日が来たってことだね！」

話題を変えようと思ったところで、新たな声が届いた。よくよく内  
容を噛み砕いてみると、随分と型破りなことを言っているのだが、こ  
の際それは気にしないことにする。

「ちよつとお姉ちゃん!? あわわ、時と場所を考えてー」

どこか能天気でありながら、澆刺とした声音。その主に視線を向けたと同時に聞き覚えのある声が届く。何度か一緒になったただけけど、直ぐに思い至った。プラネテューヌの女神候補生。共闘したこともある、ギアちゃんだった。

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさい! ほら、お姉ちゃんも一緒に謝らなきゃ」

「ねぶう!? わ、わたし別に悪いことはしてないと思うんだけど」

「あはは。とりあえず、一度落ち着いて深呼吸しようか」

またやってしまった。そんな感じの雰囲気醸しながら、勢いよくギアちゃんが謝り始める。それにギアちゃんのお姉さん、ネプテューヌさんが釈然としない感じにぼやく。不意に以前ノワールが言ったことを思い出す。なんであんなにちゃらんぽらんなのかしら。確か、そんな事を言っていた。実際に合ってみて少しだけど、ノワールならそう言いそうな感じの人だ。だけど、不思議と嫌なイメージでは無い。

「は、はい! すーはーすーはー。……って、四条さん?」

「はい、四条さんです。久しぶりだね、ギアちゃん」

律儀に深呼吸をして気持ち落ち着けたところで、ギアちゃんが驚きで目を丸めた。姉の奇行に意識が向き過ぎてたのか、僕の方には気が付いていなかったようだ。慌て方的に知らない人に何かやったとしても思ったのだろう。……僕はそれほど影が薄いのだろうか。地味に気になる所だ。とは言え、確かに女神様と比べると薄いのかも無いなあ。

「相変わらずあなた達姉妹は騒々しいわね」

「まあまあ、良い事ではありませんか。わたくしには騒がしくする相手もないので、羨ましい限りですわ」

またかと言った感じに溜息を吐くブランさんに、両手を合わせ朗らかに笑うベールさん。対照的な反応だけど、何処からしさみみたいなものを感じる。

「あれ? お兄さん、ネプギアと知り合ってたの?」

「一応ね。以前お世話になった事があるんだよ。その節はありがとう  
ございます」

ずいっと此方に踏み込んできながら聞くネプテューヌさんに頷く。  
ユニ君と喧嘩をした時にギアちゃんにはお世話になっていた。僕が  
怪我をした時に見舞いに来てくれたこともある。思えばお世話され  
てばかりなきがする。改めて感謝の気持ちを伝えておく。

「そんな、私なんて何にもしていませんよ。ユニちゃんと仲直りする  
時にもお世話になりましたし、今回だって……。うう、寧ろお世話に  
なつてばかりなきがします」

慌てたように両手を振りながらギアちゃんが捲し立てる。そして  
これまでの事を思い出したのか、寧ろごめんなさいと言わんばかりに  
謝られてしまった。

「うーん。もしかしてお兄さん、主人公的存在な私を華麗にスルーし  
て、ネプギアルートに入ろうとしてたりする？ むー、もしそうなら  
ネプギアの姉として、どんな人かきちんと見極めないといけないよね  
！ 私が居る限り、ネプギアルートはそう簡単に攻略できないんだか  
らね！」

「ええ!? 私攻略されちゃうの!?!」

姉の言葉に驚きを示す妹。言われている此方としては苦笑するし  
かない。

「いや、驚くところは其処なんだ」

どうしてそうなったと思いつつ、一応突っ込みを入れる。本気では  
無いだろうけど、そうしないと収拾がつきそうにないし。

「確かに四条さんは良い人だけど、その前にユニさんとノワールさん  
が居るよね……。? それにユニちゃんもノワールさんも、私たちが目  
覚めた時にはもう寄り添うようにしてたし、私が入り込む余地なんて  
ないんじゃない?」

「ふう……。漸く一段落ついたわ。あら、ユウ以外にもみんな揃ってい  
るのね」

「アタシたちが居ない間に随分と騒がしくやっってるみたいじゃない。  
それにネプギア、アタシとお姉ちゃんがどうかしたの?」

「ユ、ユユユ、ユニちゃん!? ベ、別に何でもないよ。本当だよ」

タイミングを見計らっていたのではないだろうかと言う位に良いところで黒の女神姉妹が現れる。それで、少しばかり思考の海に入りかけていたギアちゃんが露骨なまでに挙動不審な返答をしていた。

「いや、ネプギア。それじゃ、何かあるって言っている様なものなんだけど」

僕の考えを代弁する様に、ユニ君が目を据わらせながらギアちゃんをみる。そんなユニ君の様子にギアちゃんがあわあわと弁解しようとしたところで、吹き出してしまった。

『ユウ?』

「あはは。いやいや、ごめん」

そんな僕がユニ君とノワールは怪訝に思えたのか、同じタイミングで同じ言葉を発した。それに仲が良いなあつとしみじみに思いながら答える。つい先日、全霊を振り絞り戦ったのが嘘だったと思えるくらい、穏やかな時間だった。

「急に吹き出してどうしたのよ」

「そりや、ネプギアは挙動不審だったけど、そんなに面白かった?」

「いや、ね。何か馬鹿らしくなったんだよ。一人で悩んでたのが、随分滑稽に思えてね。僕が勝手にやるべきでは無いかもと決めつけていた事が、実はたいしたことでは無かったと思えたんだよ」

クロワールに、この道を選んだからには結末は一つしかない。そう告げられていた。僕自身が選んだ道だけど、それでもどこかで間違っているのではないだろうかと思う事が無かった訳では無い。そんな一筋の不安も、目の前で女神さまたちが楽し気にしているところをみる事が出来た所為か、払拭する事が出来ていた。

「ええっと、つまりどう言う事なのかしら? ユニは解る?」

「うーん。アタシにも解んない」

我ながら要点の得ない言葉に、二人は目を白黒させる。まあ、解る方がおかしいのだけれど。僕としては、覚悟が決まったと言う事だった。自分の選択は間違っていないかった。そう確信できた。それで充分なんだ。

「要するに好きな人を、ノワールとユニ君は何があっても守るって事だよ」

だからと言う訳では無いけど、そんな事をさらりとと言う事が出来ていた。道は決まってる。思い残す事も無かった。

「な、ななな、何を言ってるのよ!」

「す、好きってユウが、アタシを!」

告げた方より、告げられた側の方が慌てている。その姿が可愛らしいなっと思いつながら、もう少しだけ見つめる。守りたかった理由。僕が犯罪組織に属する事を肯じる事が出来なかつたわけ。気付いてみると随分と単純な事であった。好きだったのだ。だから、手放す事が出来なかつたと言う訳である。

「そうだよ。僕は君たちの事が……好きだよ」

言葉にしてみると、随分とすんなりと認める事が出来ていた。一度頷く。

「ちよ、ちよちよちよつと待ちなさい! 少し落ち着くよ。深呼吸深呼吸」

「ユウがアタシを好きで、お姉ちゃんも好きで、お姉ちゃんが好きでアタシを好きなわけなの!」

残された時間は長くない。寧ろ殆どないと言って良かった。だから、その時を大事にしたいと思う。二人は、僕にとって新しくできた家族の様なものだ。手のかかる大切な妹達。二人は確かに四条優一にとって最も守りたい人だといえる。だから、このまま進む事が出来るのだ。

「護るよ。僕は、異界の魂だからね」

宣言していた。僕がこの世界から消える時まで。その時までには、幸せな夢を見るのも悪くは無いだろう。そう思えた。

……この後色々追及があるのだけど、それはまた別のお話。

### 挿話3

「残ってるのは二体だな」

自身が宛がわれた部屋に戻ると、何とも無い口調で出迎える相手があった。一応自分は女神を救い出した英雄と言う扱いである。ラストイシヨンの女神とは縁が深かったため、教会の直轄地に部屋を与えられていた。そんな僕の部屋に先回りして寛ぐ事が出来る者など限られている。女神であるノワールとユニ君。教祖であるケイさん。そしてラストイシヨンの幹部と言ったところだろうか。

そもそもラストイシヨンの関係者がそんな事をする必要も無いので、相手は自然と限られてくる。待っていたのは、僕の相棒だった。「ブレイブと、マジックだね」

頷く。残っている犯罪組織の幹部はその二人で最後だろう。何故クロワールが僕の部屋に居るのか。そんな疑問もあるにはあるけど、何となく居る方が自然なのではないかと思える。僕にとつてのクロワール。例えるなら女神と教祖みたいなものだろうか。ノワールとケイさんを思い浮かべる。何か違う気もしないではない。

「勝てるのかよ？」

「逆に聞くけど、僕が負けると思うのかな？」

「いんや。お前が単体で戦えば負ける事はねーんじゃねーかな。まあ、あくまで、お前が一人で戦うなら、だけどな」

「ふむ」

クロワールの言葉を頭の中で反芻する。僕が一人で戦えば。それを彼女は強調するように言っている。言いたい事は何となく想像する事が出来た。

「女神も弱くはねーけど、まだ奴らとやり合うにはシエアも経験も足りてないって感じだよ」

「二人掛かりでジャッジに何とか勝てただけだからね」

「そうだよ。あの時のお前はまだ事実を完全に受け入れていなかった。今よりも遥かに弱かったとはいえ、女神と二人で何とか幹部を倒せるぐらいの力だったんだよ。そして、二人の強さにそれ程の差は無

かった。幾分か女神の力が勝ってたつてどこかな。つまり女神もあの時のお前と似たようなモノだ」

「それなら、数の内では十分に戦えるよ」

「お前、解ってていつてんだろ？ ジャッツジは四天王の中で一番弱かった。マジックやブレイブ、トリックと直接やり合ったお前が一番理解している筈だぜ」

クロワールの言う通り、僕は他の三人にも挑んでいた。殆ど不意を打った形でマジックに手傷を負わせ、トリックを倒す事には成功していた。自らの体を顧みないと言う、今の自分には許された生物の枠から外れた戦い方によって反撃らしい反撃をさせる前に倒してしまつたが、マジックは勿論、ブレイブの一撃やトリックの膂力や耐久力などは、ジャッツジを軽く凌駕していたように思う。

「それでも、僕がいる限りは負けはしないよ」

「まあ、全部お前一人でいーんじゃね？ って状態だしな」

「其処まででは無いと思うけど？」

「そこまで行つちまったのが、今のお前だろうが」

苦笑する。クロワールは何の遠慮も無く化け物じゃねーかと続けるのだ。実際にその通りではあるのだけど、実感としては薄い。とは言え、完全に無いと言う訳でも無いのだけど。

例えば食。端的に言つて、食べなくても問題無いようになっていた。食べられない事は無いのだけど、空腹を感じないのである。味も何処か遠くなっている感じがする。料理を食べれば、漠然と美味しいと思う事はあるのだけど、如何美味しいのかと問われれば説明できなかつたりする。痛みに関して、既に何も感じない様になっていた。そうで無ければ全身に剣を貫かせるような戦いは、いくら僕でもできはしない。剣を持つ感覚ははつきりと在るけど、それ以外だとやはりどこか遠く感じる。

それは、人の枠を越えたと言う事だった。もつと言つてしまうと、生を越えてしまい、既に死の領域に居ると言う事だ。そう在りながら、潰えていない。それが僕と言う存在なのだろう。改めて考えてみると、随分歪な形では無いだろうか。我が事ながら、笑うしかない

言ったところか。

「何にせよ、僕は負けないよ」

「けど、このまま行くと、女神は死ぬかも知れねーぞ？ お前は強すぎると言っただけで良いけど、女神は経験不足だ。ある意味お前のせーだな」  
「と言うと？」

「女神が戦う時期がトントン拍子で進んできてるって事だよ。例えんなら、フリーシナリオのゲームを最短距離で進んだ弊害だな。敵の強さにレベリングが追い付いてねーんだよ」

どうするんだよとニヤニヤしながら聞いてくる。相変わらず天邪鬼である。嫌な笑みを浮かべて入るけど、何処か逸脱してしまった僕に、きちんと現状を教えてくれている。中々に難しい問題だと思っ。正解を答えるなら、僕一人で戦う。それだけで全て終わるだろう。

「……やっぱ、僕一人で戦うってのは無理かな？」

「無理だな。女神がそれを許す訳がねーじゃん。アイツら基本的にお人好しなんだぜ？ 犯罪神って言う化け物と一人で事を構える事を許す訳ねーよ。ただでさえ責任を感じているだけでもないのに、一人だけ死地に送るなんて事考える訳ないし、肯定するはずも無い」

「まあ、そうだよ。あの子達は、優しいから」

「優しいって言うか、殺したいほど嫌いなやつでも無かったら、普通は止めるからな？ 俺みたいに事情を知っている訳でも無けりや、自殺志願者とは思えねーし」

それはそうかと頷く。考えてみれば直ぐに解る事なのだけど、自身が死した事を自覚して以来、どうにも感覚がずれてきているような気がする。規格が変わるといふのは、それだけ大きなことなのだろう。そんな風に理由をつけて無理やり納得する。もうそれは考えても仕方がないことだから。

「とは言え、この状況で犯罪組織の立場から考えれば取る方策も限られてくるね」

「だろーな。各個撃破。いくら女神達とは戦力差があるとはいえ、女神と異界の魂を同時に相手取らねーんじゃねーかな」

瞑目し、考え込む。確かに犯罪組織の立場から考えれば、僕と女神



を同時に相手取るのが得策とは言えない。半ば奇襲みたいなものとはいえ、犯罪組織の幹部三人を同時に相手にして打倒していた。トリックを仕留め、マジックには深手を負わせている。そんな相手に、さらに女神を加えて乱戦に持ち込もうとするはずはないだろう。犯罪組織にあとはないだろうから。女神にシェアが戻り始めている。となれば各個撃破を狙うのが常套手段だろう。

「だからこそ、乱戦に持ち込むということはないかな？」

そこまで考えたところで、そんな考えが頭を過った。相手はあのマジックである。僕の思考を読み切り封殺してきた女神だった。僕は普通に考え得る手段で事に及ぶだろうか。残念ながら、素直に頷くことはできそうにない。強さと言う点では、マジックを凌ぐ事ができるようになつていた。それについては、マジックも身をもつて理解しているだろう。ならば、こちらの思いもしない策をとり目的を達成しようとしても不思議ではない。

考えすぎと言う事も勿論あるかもしれないが、友達の命が、そして世界の命運がかかっている。考えすぎだとしても、なにも想定しないより遥かに良いだろう。

「ふむ。ないな。つと書いてーとこだが、あり得るな。むしろ、それを狙ってても不思議じゃねーよ」

「やけに断言するね。何か根拠でもあるのかな？」

「ああ。犯罪組織の最終目的は、犯罪神の復活だからな。その時点で犯罪組織としての目的は達成される。世界を滅ぼすのは、犯罪神がその存在理由で起こす事だからな。俺が数多の次元の歴史に面白おかしく介入するのと同じことだよ。女神を倒そうとするのは、犯罪神が復活するのに必要だからであって、ここまでシェアが滅れば復活した犯罪神が楽に世界を滅ぼせるようにするためでしかねーよ」

「また、あつさり重要なことを教えてくれるんだね」

「まあな。今回はお前の方に付くって決めちまったし、だから情報はリークしてやるんだよ。感謝しろよー」

こちらの問いになんとも無さそうに答えたクロワールの言葉に、思わず閉じていた眼を開く。にやにやと意地悪く笑う友達に、軽く眩暈

がした。

正直なところ、僕は犯罪組織が世界を滅ぼすために行動していると思っていた。異界の魂としてある程度の知識は持っていたが、概要ぐらしいしか知らなかったからだ。しかし、犯罪組織の目的が犯罪神の復活の時点で終わりだというのなら、想定すべきことは大きく変わってくる。

「ああ、ありがとう。もっと早く教えてほしかった」

「仕方ねーじゃん。俺だってこんな感じになるとは思ってたんだし」

そうやって悪びれない笑みを浮かべ、僕の頭に座り、クロワールは髪の毛を掴んだ。すでに痛みは感じないけど、だからこそ変な感じがするので止めてほしいところだ。

「……、と言う事は、犯罪神つてもう復活するのかな」

「するな。お前が戦うべきラスボスだな。馬鹿みてーにつえーぜ。復活した時点で女神に勝ち目はなさそうだな。楽しみにしてろよ」

「……楽しみにする要素がないんだけど」

さきのクロワールの言葉に引っかけかりを覚えたので聞いてみる。すると、ある意味想定通りの答えが返ってきていた。それは、今後のことを決めるのに重要な情報で。

「……と言う事は、十中八九女神の命を取りに来るわけだ」

「だろーよ」

「……。そこまで解れば手の打ちようはあるか」

呟く。相手にとって女神は討てれば良いが、必ず討つべき相手ではないと言う事だった。犯罪組織としては、犯罪神が蘇ればそれで終わりなのだ。そして、クロワールの口ぶりからは、犯罪神の復活はもはや確定事項だった。ならば、次の行動は大きく絞り込める。犯罪神の復活はすでに決まっていた。ならば犯罪神の敵となる、女神や異界の魂の排除を優先するだろう。そして恐らく先の戦いの結果から、女神を倒すことを選ぶだろう。細部は違うかもしれないが、ある程度の予測は立っていた。

「クロワール、犯罪組織とのパイプはまだ繋がってるかな？」

「ああ？ まあ、まだバレてねーと思うぜ」

「なら、一つ頼みがあるんだ」

「お、なんだよ。お前が頼みなんて珍しーな」

ならば、こちらから仕掛けようと思う。賭けの部分もあるが、そう覚悟を決めた。

「犯罪組織から宣戦布告が行われてきた。と言ったところかな」

結論から切り出したのは、ラスティシヨンの教祖であるケイさんだった。クロワールと語り合ってから数日後、ノワールとユニ君に呼び出されるなり、物騒な始まりである。尤も、クロワールに頼んだことが成功したと言う事だと思う。

「私たちの国であるラスティシヨンははじめとする、女神が治める四つの国。その全てにキラーマシンを使い、同時進行を行うと宣言してきたのよ」

「キラーマシン、かな？」

「ええ、そうよ。アタシ達がルウイーで戦った機械兵。一体一体が並みの危険種よりも力を持った敵なの。弱点は魔法、特に電気に弱いことかな」

「機械兵士だしね。らしいと言えば、らしいか」

キラーマシンの軍勢。この場にいる面子の中では、ユニ君が唯一交戦経験があった。彼女の経験からでた話を頭の片隅に置いておく。頑強な装甲を纏う機械兵士には、女神の力であるプロセスサユニットを用いた一撃も有効打になり辛い様だ。そんなときに編み出したのが、魔法銃なのだとか。

「犯罪組織の幹部がどこの国に仕掛けてくるかわからない以上、各国の女神も迂闊に動くことができないう状況と言うわけだ」

「迎え撃ちはするけど、他国から女神のような強力な援軍は期待できないと言う事だね」

現状を簡単にまとめたケイさんの言葉に頷く。同時進行による攪乱。本命が何処か解らないからこそ、有効な手であると言えるだろ

う。迎え撃つ側からしたらどうしても後手に回らず得ないからだ。

「となれば、僕はラストイションで迎つと言ったところか。それとも遊軍として動けばいいのかな？」

右手に一振りの剣を生み出し、異界の魂としての能力を印象付けながら言った。女神の救出が終わり、まだそれほどの月日は流れていない。だからこそ、こういった演出が効果的だと思う。

「いいえ、あなたを呼んだのは情報を共有するためよ。最悪の事態になったときは協力を依頼するかもしれないけど、現状ではまだ安静にしておいてほしいの。女神救出から殆ど経ってないでしょ？」

「む？」

ノワールの言葉に首を傾げる。態度とは裏腹に、予想はしていた言葉だった。

「ユウはアタシ達を助けるために、ボロボロになったばかりじゃない。いくら異界の魂の魔法で傷が無くなったからって、無理ばかりしてるわ」

「そうする必要があったからね。女神救出はあの状況で確実になす必要があった。仕方がないよ」

「そうかもしれないけど！ どんな理由があろうと、あなたに頼ってしまっている。普通の人なら心身ともにすり減らしてしまうぐらいの負担をかけてしまっているわ。せめて、敵の狙いが判明するまでは休んでいて欲しいの」

「悔しいけど、犯罪組織とやり合うにはアタシ達だけの力じゃ不足してる。アンタの力を借りなきゃ難しいと思う。だからこそ、ギリギリまでユウには無理してほしくないの。アンタの力が必要だからこそ、まだ安静にしている欲しいの」

二人の女神が心配げに見つめてくる。彼女たちを救い出したとき、全身傷だらけで血も流していた。その時はすでに人を超えてしまっていたのだけれども、そんな事を二人が知る由もない。成功こそしたけど、あのような無茶を繰り返せば何時死んでも不思議ではないと思っただろう。協力はしてほしいけど、極力安静にしていってくれと懇願されていた。

中々に矛盾した願いだった。本当ならこれ以上無理はしてほしくない。だけど、現実にはそう言うわけにはいかない。二人は、そんな理想と現実の乖離に苦しんでいるのだろう。僕の身を案じてくれていることが解り、素直に嬉しく思う。

「解った。けど、僕に無理をするなって言っただ君たちも無理しちゃだめだからね」

だからと言う訳ではないけど、二人の言葉に素直に頷いていた。確かに状況は良くないだろう。だけど、まだ切羽詰まっていると言うほどではなかった。ここは女神たちが自分の手で何とかしようと言う事なのだろう。だからこそ、都合が良かった。

「ええ、解っているわ。必ず生きて帰ってくる」

「うん。大丈夫よ。アタシもお姉ちゃんも、アンタに何もお礼ができていないからね。心配しなくても、戻ってくるわ」

しっかりと僕の間を見てそう約束してくれた二人に、心の中で謝罪する。また騙してしまっている。もちろん悪意があるわけではないけど、この子たちに本当のことを言わない事について罪悪感があったからだ。

「気を付けてね。無事を祈っているよ」

そう言い、二人を見送る言葉を締めくくった。犯罪組織との決戦は近い。但し、それは彼女たちの思いもよらない形になるだろう。また怒られるかもしれない。そんな事を思いながら、笑みを浮かべた。

「やして……」

姉妹が犯罪組織の攻勢を迎え撃つために教会を出発した後、宛がわれた部屋でその時が来るのを待っていた。右手。既に漆黒を携えている。来る。それはもう、解っている事であったからだ。

「よー、ユーイチ」

「待っていたよクロワール。首尾はどうかな？」

そろそろ来るだろうと思っていた人物の来襲に、そんな言葉を返

す。犯罪組織の侵攻。それは、僕からマジックに持ち掛けた提案だったからだ。

「お前の口からそんな言葉が聞けるとはねー。くく、嬉しいもんだ」

「僕自身、予想していなかったけどね」

「まあ、こーいうのも良いよな。で、首尾の方だが上々だよ。マジックの奴も乗り気みてーだな」

「そっか。なら、あとはやるだけだね」

クロワールの言葉に一先ず頷く。拒否されたら全てが水泡に帰すのだけでも、その心配はしなくてもよかったようだ。確信はなかった。だけど、何となく紅の女神ならば受けてくれると思っていた。女神を交えずに決着をつけよう。そう言えば来るだろうという予感だけがあつたのだ。

「クロワール、頼んでも良いかな?」

「おう、任せとけよ。十分に暴れられる場所。犯罪組織の本拠地、ギョーカイ墓場に連れて行ってやるよ」

決着をつける。そんな覚悟を決め、クロワールに行き先を委ねた。

「まさか本当に一人で来るとはな」

クロワールの力による転移。異界の門を用いたときとも違う違和感の先で辿り着いたのは、かつて僕が呼び出された場所に酷似していた。言うならば墓場。廃棄された機械たちの眠る墓地であつた。どこか懐かしいような気分浸っていたところで、そんな言葉が聞こえてくる。声の聞こえたところへ視線を向ける。そこにいたのは、紅き勇士だつた。

「言った通りだろう。この男は、四条優一は来ると言えば来る。護るためならば捨てる事を厭わない。そう言う存在だ。女神が世界を救うために呼び出した英雄にふさわしいではないか」

驚きがわずかに含まれているブレイブの言葉を啜う様に紅の女神が姿を現す。以前僕が与えた傷。それも殆ど癒えたのだろうか、腹部

から肩にかけて切り上げた傷は、一筋の剣閃となり紅の女神の体に刻まれていた。視線がぶつかり合う。マジックが深く嗤った。

「一人で来たかった訳ではないのだけどね。あなた達と戦うには、時が足りなかった。だから僕が一人で来たんだよ」

向けられた視線をまっすぐ見返し、言い返す。犯罪組織の目的である犯罪神の復活。クロワールが言うには、それはもう確定事項と言ってよかった。彼らよりもはるかに強い敵の大將が出てこようとしている。そうなる前に少しでも戦力は減らしておく必要があるのだ。

「勝てるつもりなのか？」

「逆に聞き返すよ、ブレイブ。君たちは僕に勝つ手段があるのかな？」  
彼らにも解っているはずである。今の僕は生物の枠から逸脱している。肉体を殺そうと、死に絶えることはないのである。それで死ぬのなら、以前対峙したときにもう死んでいるはずだから。

「ああ、用意してきたさ。お前を殺すために、な」

「そうか。だけど、侮らない事だね。今の僕はもう……」

マジックが面白いと言わんばかりの笑みを浮かべ言う。戦えるのが嬉しくて仕方がない。そんな意思がありありと現れて見える。両の手に二振りの剣を生み出す。予感ではなく、確信。ここで終わらせる。それを自分にはできる力がある。そんな意思を込め、二人の敵を睨め付ける。

「語るのはここまでで良いだろう。殺し合おうか、異界の魂」

紅の女神がゆっくりと大鎌を構える。辺りに張り詰めた空気が広がっていく。

「お前は強すぎる。正攻法では勝てないと思わせるほど、な。できればこの手で救いたかった。だが、俺には子供たちに希望を見せるという成すべきこともある。倒させてもらうぞ、四条優一！」

紅き勇士もまた、その大剣を手に戦う意思を示した。

「先ずは、削らせてもらうぞ」

そんな言葉とともに、数十、或いは数百の小型の機械兵士が姿を現した。かつてノワールと共にマジックと相對したときに見たものと同じである。ならば、おそらく同じ武装をしているのだろう。それ

は、女神に呼び出されたシエアで構築された僕にとっても有効で。

「やらせはしないよ」

一閃。

「くくく、ふはははは!!」

「馬鹿な!?!」

異界の魂として与えられた力を十全に用いる。枷などとうに消えていた。気と魔力を纏った斬撃が、音を超え機械兵が武装を開放する間もなくその身を残骸へと変えていく。ブレイブが僅かな動揺を漏らし、マジックが狂気を浮かべた。同時に紅が加速する。マジック。既に大鎌を振りかぶる。

「凄まじいな、異界の魂!!」

「負ける訳にはいかないからね。ここで終わらせる。そのために僕はいるのだから」

一合。剣と鎌がぶつかり合う。何度も打ち合う気などない。僕に手を貸してくれる数多の使い手たちの経験を総動員し、紅の女神が返しの刃を振るうよりも早く切り抜ける。

「ブレイブカノン!!」

正面。紅き勇士が放った砲撃。迫る。かまわず加速する。二振りの剣。掬い上げた。

―ソウル・ドライブ

魂の限界すらも超え、砲撃を文字通り切り上げる。地を踏み抜く。陥没。視界が色を失っていく。両の手に携えた剣。ブレイブに向け投擲する。

「ぬう!?! しかしこの程度、我が力を阻む障害にもなりはしないぞ」  
紅き外装を貫き、胴と腕に楔を受けてなお、紅は吼える。構わず接近、跳躍する。

「だろうね。だけど、狙いはそこじゃないよ」

紅に埋め込んだ楔。それをさらに踏み越えブレイブの頭上を越えた。左手。既に魔力を収束している。紫電を超えた爆雷。解き放った。

「これなら、どうかな?」



振り向いたブレイブと視線が交錯する。そこには怖れも動揺もなかった。

「舐めるなよ、異界の魂。ブレイブソード!!」

必殺の斬撃。爆雷を迎え撃つべく大剣が迫る。笑みを浮かべた。

「ブレイブ。下がれ! 本命はそれではない」

「なに!？」

落ちながら再び刃を生み出す。両の手に。

「しまっ」

― 剣の極地

そして、自身の周りに数十数百。必殺の一撃を振りぬき、隙だらけになったブレイブに向け、今もまだ増え続ける剣の群れが包囲の輪を縮めていた。堕ちながら指揮するように右手を振るった。

「ぐ、おおおおおおお!!」

数千数万を超えた斬撃の嵐。剣の軍勢が勇士を飲み込む。

「さようなら、ブレイブ」

そして、軍勢が通り過ぎた時、蹂躪されつくした鉄の塊だけがその場に残った。

「さて、残りは貴女だけだよ」

マジックを見据え、告げる。紅の女神が突如後退した。追うために力を用いようとした瞬間、視界が塗りつぶされていた。

「自爆、か……」

変わり果てたブレイブが渾身の力で放った爆発を見たマジックは、抑揚のない声音で呟いていた。相手が人間や女神であったのなら、それは決定打になり得る手段だっただろう。だが。

「無理なんだよ、ブレイブ。それでは僕を倒せない」

相手はすでに生きてすらいらない亡霊だった。その身は仮初であり、世の摂理から逸脱したモノでしかない。物理的な破壊では、異界の魂の足止めはできても根絶やす事など出来はしないのである。それを

解っていないながら尚、ブレイブにはそれしか手が残されていないなかった。彼我の戦力差はそれほどなのである。どこか悲しげにつぶやく異界の魂を見据え、マジックは仕切りなおすように大鎌を構え直した。まだ戦いは終わったわけではないからだ。紅の女神のプロセツサユニット。全力で起動させるとともに、機械兵の第二陣を呼び寄せる。「ブレイブを倒したようだが、まだ私が残っているぞ」

「解っているよ。君が一番厄介だと言う事もね」

押し寄せる機械兵を一瞥し、異界の魂は、剣陣を操るように手にする剣を振り下ろす。機械の軍勢に剣の軍勢がぶつかり合い、斬鉄の音色を響かせる。

同時に自身の周りにも数本の剣を生み出し、紅を迎え撃つ。

「それほど女神が大事か、四条優一!!」

叫ぶようにマジックが問いかける。淡い希望を抱かせ、再び絶望を与え、何より、自身が死する運命に追い込んだ女神の為に戦うのかと。振るわれる大鎌。放たれる紅き光弾。延ばされる腕。その全てを異界の魂は、両手の剣と呼び出した剣を用いて撃ち落とす。

「願いを託されていた。僕にはその想いを踏みにじる事ができそうにない」

「だから、自身が全て背負うというのか。唯の人の身で過ぎたる願いを押し付けられ、それを肯定すると言うのか。貴様はそれで満足だと言えるのか!？」

剣閃。紅と魂がぶつかり合う。四条優一の剣を押し折り、紅の斬撃が異界の魂を引き裂いた。僅かに生じた隙に、マジックは異界の魂を吹き飛ばし紅き衝撃をもって追撃をかける。

「ああ、言えるよ」

後退する異界の魂を畳みかけるように放たれた斬撃。それを、無造作に振るわれた黒が阻んだ。ソウ剣であった。それは、剣の極地で手繰り寄せた一つの終わり。四条優一が辿り着くことができるかもしれない、あり得るかもしれない可能性。亡くす事を肯定したものが辿り着いた終着点にある力だった。

黒と紅がぶつかり合い、火花を散らす。一つの線が二つ四つと増

え、やがて無数の斬撃の壁となる。

「ふぎけるな！　ただ奪われ、利用され、捨てられる。それに納得できるといえるのか」

「納得できたんじゃないよ、マジック」

狂喜を浮かべていたのが嘘のように、マジックは感情をむき出しにし刃を振るう。その気持ちは何故なのか紅の女神には解らない。だが、異界の魂について調べれば調べるほど、ただ気に入らなかった。紡がれてきた人々の願いが、女神による救世の思いが、今を生きる女神たちの意思が、それを押し付けられ尚肯定しようとする四条優一が、全てが許容できずマジックは怒りを示す。

「ならば、どうしたと言うのだ」

「……」

「答えろ、四条優一!!」

静かに呟いた異界の魂に、紅は問う。それに、ただ女神を見据えた異界の魂は告げた。

「最初から何も無かったんだ。僕はね、この世界に呼び出された時点で死んでいた。だからもう、何も無いんだ。最初から貰うべきではなかったんだ。願いも、祈りも、光も、喜びも、あの子達から貰った温かな想いも」

振るわれる大鎌を漆黒で打ち砕き、亡霊はただ笑う。全て、捨ててしまっていたから。託された願いや想いの記憶だけを胸に抱き、すでに喪っていたから。だから、肯定できた。全て色の無い記憶でしかないから。個でありながら、個の想いを喪ってしまっていたから。

「全て、終わっていたんだよ」

「貴様は……、壊れている」

「そう、かもしれないね。だけどね、マジック。僕はここに呼び出された時点で終わっていたんだ」

色の無くなった瞳を見た紅の女神は、諦めたように呟いた。それに異界の魂は静かに同意する。

「先に待っているぞ。四条優一。私が愛してしまった人間」

「ああ、僕も後で追いつくよ。死と消滅が同じなのは解らないけど

ね」

そうして、漆黒が紅を貫く。紅の女神から鮮血が吹き乱れ、異界の魂へと降り注いだのだった。